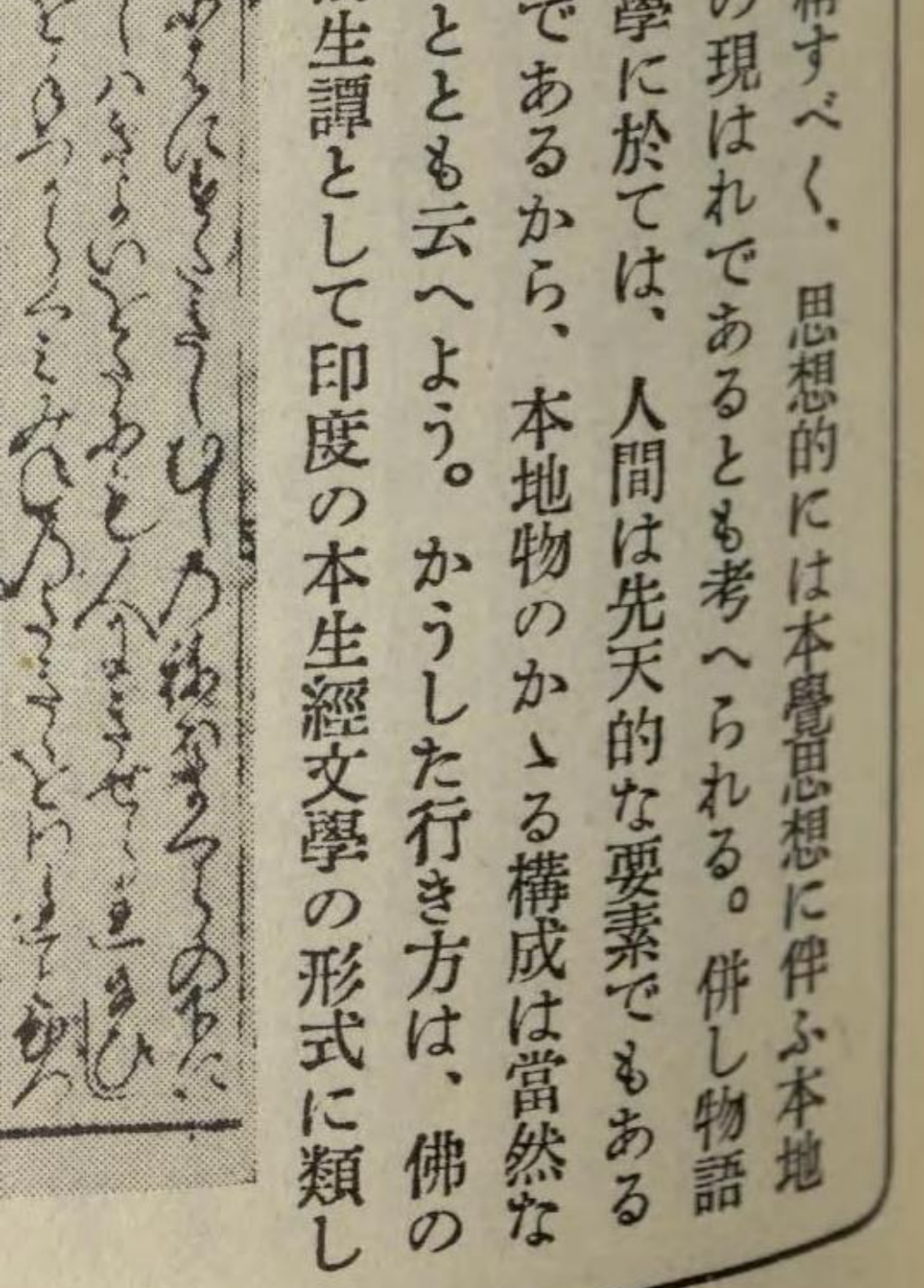
が大體に於て守られて來てゐるのであるが、併し多少の變遷がないではない。慶長十八年の「寒川入道筆記」に連歌の本式として述べてゐるものに、「面毎ニ花一宛、八本也」とある如きがそれで、當時は新式の連歌・俳諧の方に於ても、花と月とが景物のうち最も重んぜられて來てゐた關係で、本式の方に於てもかく定められたものと見える。貞門俳諧ではこの花八本となつた式を繼承してゐる。然るに談林

表の花はなくてもあるべきか」と云つてゐる點が異なつてゐる。然るに又、正德元年の沾德の「枝葉集」に記す本式では、やはり談林の式に據つたものでありながら、「賦物心にまかすべし」と云ひ、「花は櫻、四面に花、裏に櫻と花とする也」と云つてゐる點が異なつてゐる。以上でも知られるやうに、俳諧本式の式は、時により人によつて多少動いてゐるのである。本式連歌は、清水連歌（別項）として江

現じて衆生を化益する點より見て云つたもので、能現の本を本地、所現の末を垂迹と云ふ。この思想は元來が佛陀論として起つたのであつたが、日本に入つて天台眞言の本迹思想となり、これが神道に接して、天台に於ては一實神道に發展し、眞言に於ては兩部神道の佛教神道となるに至つた。本地垂迹の語は主としてこの神佛調和を說くに用ひられてゐる。



も稱すべく、思想的には本覺思想に伴ふ本地說の現はれであるとも考へられる。併し物語文學に於ては、人間は先天的な要素でもあるのであるから、本地物のかゝる構成は當然なこととも云へよう。かうした行き方は、佛の前生譚として印度の本生經文學の形式に類し

が大體に於て守られて來てゐるのであるが、併し多少の變遷がないではない。慶長十八年の「寒川入道筆記」に連歌の本式として述べてゐるものに、「面毎ニ花一宛、八本也」とある如きがそれで、當時は新式の連歌・俳諧の方に於ても、花と月とが景物のうち最も重んぜられて來てゐた關係で、本式の方に於てもかく定められたものと見える。貞門俳諧ではこの花八本となつた式を繼承してゐる。然るに談林に入つて、延寶九年に兼載の本式を見合せて多少の改定を行つた。それが西鶴の「精進膾」に「俳諧本式目」と標して揭げられてゐる。花八本とすることは變らないが、去嫌等を多少緩めてゐる。蕉風では芭蕉が高山麋塒に送つた手紙に「本式俳諧之次第」を記してゐて、これは大體談林の定めのものに據つてゐるが、又多少異なるところもあつて、「七句去のものは十句去なり」としてゐるのは、舊へ復したものであり、花を八本と定めず、「面に一つづつしても苦しからず」とし、「月は五句去にいくらもあるべし」としてゐるなどは、他の本式の式には見ないものである。併し土芳の「白册子」では、「月七句去、花裏表に一本宛」とあつて、談林に定める所と一致するものになつて居り、貞享二年に芭蕉が鈴木淸風に俳諧本式を傳授したといふ芭蕉捌きの本式百韻（芭蕉翁古式之百韻或は根本式といふ）では、花八本で月は名殘の裏以外の七面に一つ宛のものになつてゐるから、麋塒宛の手紙に記したものは芭蕉の一時的の考へであつたかと思はれる。又貞門でも、元祿十三年の芳山の「曉山集」に於ける誹諧本式の用捨では、大體談林の式に據つてゐるが、表十句の第三まで發句の賦物に合はす事とし、花八本とは定めてゐるが「初折の表の花はなくてもあるべきか」と云つてゐる。然るに又、正德元年の沾德の「枝葉集」に記す本式では、やはり談林の式に據つたものでありながら、「賦物心にまかすべし」と云ひ、「花は櫻、四面に花、裏に櫻と花とする也」と云つてゐる點が異なつてゐる。以上でも知られるやうに、俳諧本式の式は、時により人によつて多少動いてゐるのである。本式連歌は、淸水連歌（別項）として江戸時代に於ても恆例として興行されたが、普通に行はれるものではなかつた。連歌及び俳諧に於て本式の用ひられるのは、主として追善の場合であつた。

【參考】阿佛尼時代の古連歌　勝峰晋風（黃橙昭和六ノ一二）○現存最古の長連歌　潁原退藏（俳諧史の研究）○連歌史上の二つの新資料——定家卿獨吟百韻　宇野量介（國語と國文學昭和八ノ一二）

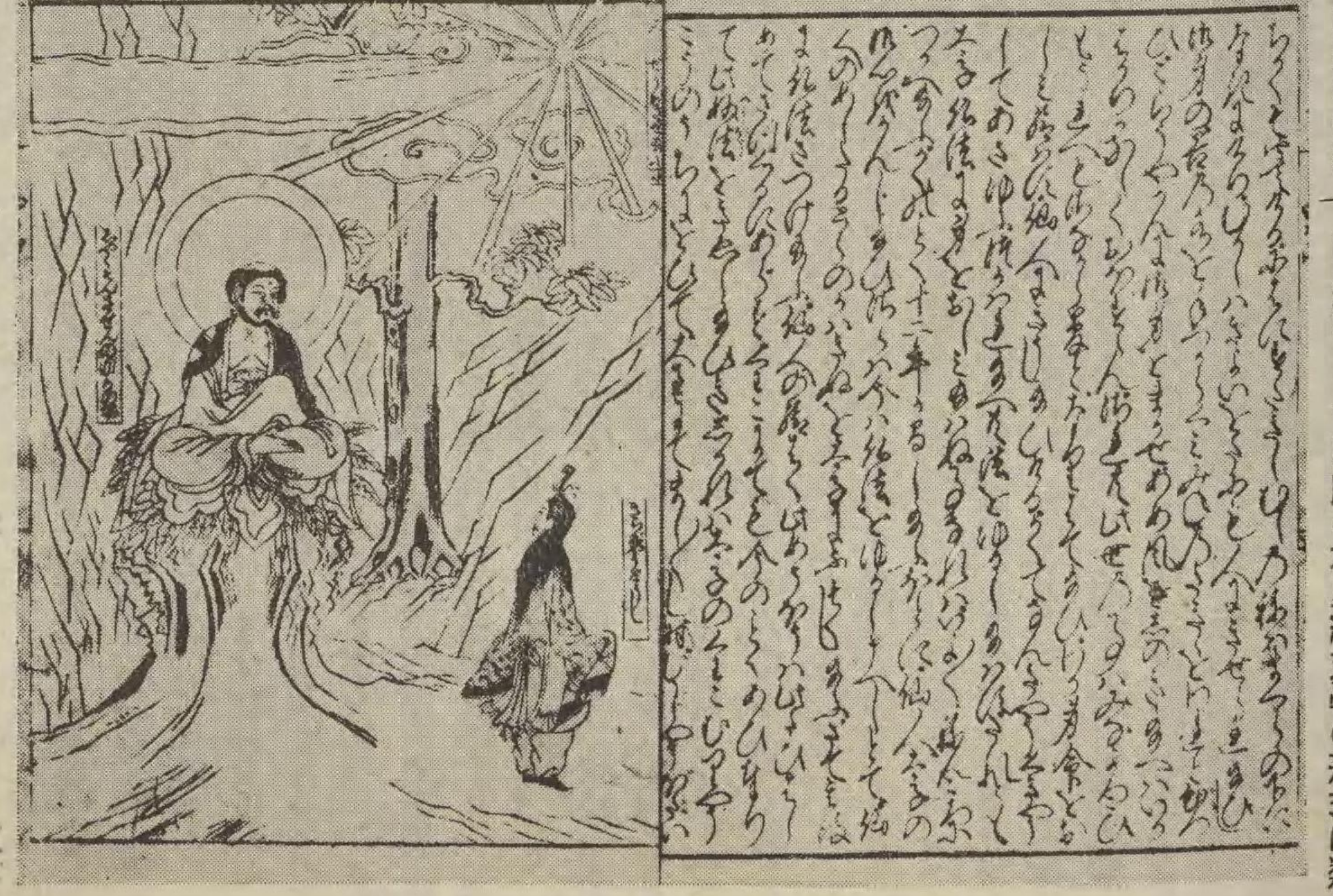
〔福井・志田〕

本地物（ほんぢもの）

小說・物語

【名義】本地垂迹思想の影響に依つて成つた小說・語物の類。普通室町期から江戸期にかけて作られた御伽草子系統の小說類を指して云ふのであるが、江戸期の語物・讀物を通じて神佛の本緣、寺社の緣由を物語の內容とするものがある。形式は何であれ、佛神寺社の本緣を明かす內容のものを本地物と稱すべきであらう。但し同じく緣由を述べるものでも、單なる緣起說明に過ぎぬものもあるし、本地垂迹の意を十分現はしてゐるものもある。この兩者を强ひて區別すれば、前者を緣起物、後者を本地物とすべきであらうが、兩者はしかく判然と分ち難い。

【解說】本地とは、法身の佛菩薩の自己實身を云ひ、垂迹とは、實身より應化の身を分ち現じて衆生を化益する點より見て云つたもので、能現の本を本地、所現の末を垂迹と云ふ。この思想は元來が佛陀論として起つたのであつたが、日本に入つて天台眞言の本迹思想となり、これが神道に接して、天台に於ては一實神道に發展し、眞言に於ては兩部神道の佛教神道となるに至つた。本地垂迹の語は主としてこの神佛調和を說くに用ひられてゐる。兩者のうち眞言の本地垂迹思想が最も民間に流布したものであつた。佛教と神道の調和思想は早く奈良朝にその萌芽を見るのであるが、確實に本迹說として現はれて來たのは藤原時代で、進んで鎌倉期にはこの說を教理的に整理しようとするに至つてゐて、南北朝・室町期・戰國時代がその大成期である。この本地垂迹思想は、元來、神の本地を佛に求める佛本神迹思想が主流をなしてゐるのであるが、中世本覺法門の發展に伴つて、神を本地、佛を垂迹とする思想、神本佛迹說にまで發展するに至つてゐる。本地物は如上の思想の具體化であつて、これに全く佛教的な內容をもつ本地物と、神佛習合の意を含める神明の本地說明を內容とするものとがあつて、後者が最も本地物の純粹なものであるやうに思へるが、一般に神佛は前生に於て人間であつたことが本地物の條件である。名づくれば垂迹本地とも稱すべく、思想的には本覺思想に伴ふ本地說の現はれであるとも考へられる。併し物語文學に於ては、人間は先天的な要素でもあるのであるから、本地物のかゝる構成は當然なこととも云へよう。かうした行き方は、佛の前生譚として印度の本生經文學の形式に類してゐる。


釋迦の本地（小田久太郎氏藏）

【性質】本地物は一方では寺社佛神の緣起、高僧の行狀傳記等、緣起文學・傳記文學の系統を享け、他方說話傳說文學・物語文學の系統を引いてゐる。緣起・傳記文學の系統に立つものは

一貫した筋を缺くものが多く、個々說話の集成の如き感あるもので、具體的な例としては、「弘法大師の本地」「住吉の本地」「賀茂の本地」「八幡の本地」「富士の本地」等の如きはそれである。物語系統の文學に立つものは、「毘沙門の本地」「貴船の本地」「熊野の本地」「嚴島の本地」「月日の本地」「辨財天の本地」等の如きに就いて見るを得べく、而してこの系統のものには本地物として共通の主要素が一二擧げ得られる。その一は異國の物語として、主要人物はやがて日本に飛來し神と現はれる點、その二は戀愛譚と遍歷譚、その三は主人公の苦難試煉である。併し作品によつて申子譚・繼子譚・供犠譚・孝行譚等が主要素になり、或はそれ等要素が混入交雜して成つてゐるものがある。而してこれ等本地物が信仰勸化の意を含んでゐるものであることは、本地物の結末の多くが勸化敎誡の語で結ばれてゐるのを以てしてもわかるが、この點からすると宗敎文學として見ることも出來る。

【種類】本地物は、もと繪卷緣起の形で現はれたものであらう。まゝ見受ける古本册子にさう推測させるものがある。江戸期に刊行された草紙の本地物はその類、「寛文書籍目錄」の「舞本並草紙」の部に十八種、「元祿書籍目錄」の「舞本並草紙類」の部に十九種を揭げてゐる。が、普通本地と呼ばぬものでも、本地物の內容をなしてゐるものが多數あり、例へば「物草太郞」（別項）は一名「多賀本地」又は「をたぎの本地」の名で呼ばれてゐる。「梵天國」（別項）は又明かに成相觀音、久世戸の文殊の本地であり、「さよひめ」（別項）は竹生島の本地とも稱すべく、その他「岩屋草紙」「美人くらべ」「ふせや」（各別項）等の一類は神佛の利生を說くのみであるが、これ等は或る種の本地物に溯源し得べき內容をもつたものであつて、この他今日推定し得べくもないものでも、もと本地物から出發してゐるものが相當あるかと思へる。例へば「鏡男繪」又は「鏡破老翁物語」（別項）と呼ばれるものが鏡宮の本緣であつたり、「青葉の笛物語」（別項）が諏訪社の本緣になつてゐること、さすれば草紙類の中にも甚だ多くの本地物を擧げることが出來ようと思へる。が、今草紙の本地物で明かに本地と呼ばれてゐるもののみを擧げるに止める（册數は刊本に依る）。

愛宕の本地三册（古淨瑠璃に同題のものがあるが內容は異なる）○あみだ本地三册（說經「法藏比丘」、古淨瑠璃「阿彌陀の本地」「四十八願記」等がある）○いつくしまの本地三册（明曆二年）○賀茂の本地三册（承應版カ）○貴船の本地三册（丹綠の版本がある）○祇園の本地三册○庚申本地二册○弘法大師の御本地三册（古淨瑠璃「弘法大師の御本地」その他、黑本・青本に同題のものがある）（承應三年）○熊野の本地三册（說經「五すゐでん」、古淨瑠璃「熊野之本地」、青本に「五衰殿熊野之本地」がある）（寛永整版・承德三年版・寶永三年版その他）○淸水本地二册（古淨瑠璃に同題のものがある）○釋迦の本地三册（說經「しやかの本地」がある）（寛永二十年版その他）○善光寺本地三册（古淨瑠璃「善光寺本地」「月界長者」「善光寺」がある）（享保三年）○多賀本地（物臭太郞）二册○七夕の本地二册（「あめわかひこ物語」「あめわかみこ」「たなばた」と題するものがあり、又「七夕の由來」と稱するものもある。兩者は別系統のもので「七夕の本地」は何れを指すか不明。古淨瑠璃「七夕之本地」と題するものがあり、出羽掾正本である）○中將姬の本地二册（古淨瑠璃に同題のものがある）（寛文五年・慶安四年）○月日の本地（つきみつのそうし）二册（寛永活字本・寛文七年）○天神の本地二册（慶安元年）○八幡の本地三册（古淨瑠璃に同題のものがある）（承應二年）○毘沙門本地三册（古淨瑠璃に同題のものが存してゐるといふ）（承應三年）○富士山の本地二册（延寶頃カ）○辨財天の本地（おもかげ物語）二册（萬治三年）○住吉本地三册（寫本）等。

本地物は又說經淨瑠璃（別項）の語物として、その大部分を占めてゐる。本地物が唱導的性質を帶びてゐることは、草子の信仰勸化の意を含んだ結末の語からしても判るのであるが、說經節の多くが本地物であることと共に、唱導・說經と本地物とは、密接な關係があつたやうに思へる。說經の語物のうち、「五翠殿」は熊野の本地であり、「法藏比丘」は阿彌陀の本地、「愛護若」（別項）は日吉山王の本地と見るべく、「小栗判官」（別項）は常陸の正八幡の本地、「かるかや」（別項）は信州善光寺親子地藏の本地、「さんせう太夫」（別項）は丹後の金燒地藏の本地（地方傳說としては岩木山の本地）、「梵天國」（別項）も亦本地物とすべく、「まつら長者」は竹生島辨天の本地、その他「念佛大道人崙山上人の由來」「曇鸞記」「善光寺開帳」「阿彌陀胸割」（別項）等も本地物と見做すべきものであらう。これ等以外、明かに本地と名乘つてゐるものでは、「弘法大師の御本地」「釋迦の本地」「都誓願寺之本地」等がある。說經の正本は、その冒頭の文によつて新古を分け得べく、古本には明かに本地物なる事をその文で示してゐる。例へば、「たゞいまときたてひろめ申候ほんちは國を申さはしなのゝくにせんくはうしによらいたうのゆんてのわきにおやこちそうほさつといわゝれておはします御ほんちをあら〳〵ときたてひろめ申にゆらいをくわしくたつね申に」（寛永八年版、せつきやうかるかや）「たゞいまかたり申御物かたりくにを申さばたんごの國かなやきぢぞうの御ほんぢをあら〳〵ときたてひろめ申にこれも一たびはにんげんにておはします」（說經與七郞正本。さんせう太夫、用捨箱下之卷）の如く明かに本地を語るものなることを示してゐる。新しき正本は、かゝる冒頭文を缺くのが常であるが、それでも中には、「扨てもそのゝち中比の事かとよひたちの國とつはた村といふ所に正八まんむすぶの神といわゝれおはします由來をくわしく尋るに」（享保三年、佐渡七太夫正本。をくりの判官）の如く由來を示すものなる事を斷つてゐるのもある。草子類・說經節の、本地物の影響に依つて成つた古淨瑠璃の本地類も多數あつて、中には說經から轉用したものがある。

愛宕の御本地（丹波少掾正信正本）○すはの本地兼家（若狹守吉次正本）（正保三年）○甲賀三郞（井上播磨掾正本）○甲賀三郞（竹本筑後掾正本）○京今宮本地（丹波少掾正信正本）○善光寺本地（伊藤出羽掾正本）○月界長者（山本土佐掾正本）○善光寺（山本角太夫正本）（延寶四年）○玉津島御本地（井上播磨掾正本）○だるまの御本地（長門掾正本）○淸水御本地（江戸七郞左衞門正本）（慶安四年）○あみだのほんぢ（若狹守吉次正本）（寛永二十一年・正保元年・正保四年）○阿彌陀本地（出羽少掾信勝正本）（寛文七年）○法藏比丘阿彌陀本地（山本土佐掾正本）○あみだの御本地（四十八願記）（山本土佐掾正本）○中將姬本地（出羽少掾信勝正本）（寛文九年）○太子御本地（寛文頃カ）○弘法大師の御本地○熱田大明神御本地（筑後代次虎之助正本）○八幡の本地（出羽少掾信勝正本）（寛文五年）○七夕の本地（出羽掾正本）（貞享五年）。

【黑本】黑本の中にも、本地物・緣起物が一部分ある。「富士淺間物語」五册（延享五年）、「玉津島由來」三册（寶曆二年）、「丹後國鐵燒地藏」二册（寶曆四年）、「吾妻權現由來」三册（文阿、寶曆十二年）、「甲賀三郞三本刀」二册（富川房信畫。明和六年）、或は草紙・語物以來の本地物の影響あるものであらう。なほ本地と明かに呼んでゐるものに、「弘法大師御本地」三册（鳥居淸滿畫。刊年未詳）がある。【青本】青本の中には「甲賀三郞」二册（寶曆九年）、「五衰殿熊野本地」三册（寶曆十一年）、「甲賀三郞三本刀」二册（富川房

傳說を交へ作つたものである。

【梗槪】鹽谷師高の臣木村源七は、主君戰死の際甥三重之介を伴うて遁れたが、途中見失つて美作に乳母の夫長助を賴り、その娘晚稻を妻としたが、錦織郡司の寵愛する鹿を擊ち、ために郡司は病死してその後を繼ぎ、豫て戀する妾落穗を我が物とした。偶々落穗・晚稻は、時を同じくして紅皿缺皿の二女を生み、妻妾の烈しい暗鬪から、落穗は源七の留守中晚稻

た。又高野山に詣でた卯三二の一行に追はれたので、これを暗討にして丹波に赴き、若尾山光明寺の大德寂靈和尙を訪れた。和尙は紅皿に懺悔を勸め數珠を以てこれを打つと、既にかの古井戸に死んでゐた五體は消え失せた。玆に源七を尋ね、兵衞の仇を探してゐた勇藏・缺皿は、夢に告げられて來り、和尙に導かれて鐵牛を討ち、寂靈の弟子となつてゐた源七に逢つた。そこで和尙は源七の所持する鹿の角

期に亙つて、盛んに神佛習合が行はれ、漸次本地垂迹に進行したのである。從つて本地垂迹說は、何人により何時代に唱へられたかは明確でないが、天台の最澄、眞言の空海等は既にこれを唱へたかとも思はるゝが、少くともこの二人の法子法孫ぐらゐの時代には行はれて居つたものと認められる。【本地】日本の神祇の如何なる神祇が、如何なる佛の垂迹であるかは、元來、作り事であるので、

う推測させるものがある。江戸期に刊行された草紙の本地物はその類、「寛文書籍目錄」の「舞並草紙」の部に十八種、「元祿書籍目錄」の「舞本並草紙類」の部に十九種を掲げてゐる。が、普通本地と呼ばぬものでも、本地物の內容をなしてゐるものが多數あり、例へば「物草太郎」（別項）は一名「多賀本地」又は「をたぎの本地」の名で呼ばれてゐる。「梵天國」（別項）は又明かに成相觀音、久世戸の文殊の本地であり、「さよひめ」（別項）は竹生島の本地とも稱すべく、その他「岩屋草紙」「美人くらべ」「ふせや」（各別項）等の一類は神佛の利生を說くのみで

清水本地二冊（古淨瑠璃に同題のものがある）〇釋迦の本地三冊（說經「しやかの本地」がある）（寛永二十年版その他）〇善光寺本地三冊（古淨瑠璃「善光寺本地」「月界長者」「善光寺」がある）（享保三年）〇多賀本地（物臭太郎）二冊 〇七夕の本地二冊（「あめわかひこ物語」「あめわかみこ」「たなばた」と題するものがあり、又「七夕の由來」と稱するものもある。兩者は別系統のもので「七夕の本地」は何れを指すか不明。古淨瑠璃「七夕之本地」と題するものがあり、出羽掾正本である）〇中將姬の本地二冊（古淨瑠璃に同題のものがある）（寛文五年・慶安四年）〇月日の本地（つきみつのそうし）二冊（寛永活

陀胸割」（別項）等も本地物と見做すべきものであらう。これ等以外、明かに本地と名乘つてゐるものでは、「弘法大師の御本地」「釋迦の本地」「都誓願寺之本地」等がある。說經の正本は、その冒頭の文によつて新古を分け得べく、古本には明かに本地物なる事をその文で示してゐる。例へば、「たゞいまときたてひろめ申候ほんちは國を申さはしなのゝくにせんくはうしによらいたうのゆんてのわきにおやこちそうほさつといはれておはします御ほんちをあら〱ときたてひろめ申にゆらいをくわしくたつね申に」（寛永八年版、せつきやうかるか

〇清水御本地（江戸七郎左衞門正本）（慶安四年）〇あみだのほんぢ（若狹守吉次正本）（寛永二十一年・正保元年・正保四年）〇阿彌陀本地（出羽少掾信勝正本）（寛文七年）〇法藏比丘阿彌陀本地（山本土佐掾正本）〇あみだの御本地（四十八願記）（山本土佐掾正本）〇中將姬本地（出羽少掾信勝正本）（寛文九年）〇太子御本地（寛文頃カ）〇弘法大師の御本地〇熱田大明神御本地（筑後代次虎之助正本）〇八幡の本地（出羽少掾信勝正本）（寛文五年）〇七夕の本地（出羽掾正本）（貞享五年）。〔黑本〕黑本の中にも、本地物・緣起物が一部分ある。「富士淺間物語」五冊（延享五年）、「玉津島由來」三冊（寶曆二年）、「丹後國鐵燒地藏」二冊（寶曆四年）、「吾妻權現由來」三冊（文阿、寶曆十二年）、「甲賀三郎三本刀」二冊（富川房信畫。明和六年）、或は草紙・語物以來の本地物の影響あるものであらう。なほ本地と明かに呼んでゐるものに、「弘法大師御本地」三冊（鳥居淸滿畫。刊年未詳）がある。〔青本〕青本の中には「甲賀三郎」二冊（寶曆九年）、「五衰殿熊野本地」三冊（寶曆十一年）、「甲賀三郎三本刀」二冊（富川房信畫。明和六年）等があり、なほ「達磨出生記」三冊（刊年未詳）の如きも、やはり本地物とすべきものかも知れぬ。〔黃表紙〕黃表紙には、次の如きものがある。「富士淺間物語」五冊（安永四年）、「（神力應護）蟻通之本地」三冊（鳥居淸經畫、安永八年）、「七夕祭由來」二冊（天明三年）、「弘法大師御本地」三冊（寛政七年、黑本の再版）等がある。〔讀本〕讀本には、「繪本甲賀三郎巖崛語」五冊（手塚兎月、文化五年）、「勢田橋龍女本地」三冊（柳亭種彥、文化十年）等があるが、前者は本地物と稱するよりもその影響によつてなつたもの、後者も本地物圈內より外れてゐるものと見るべきであらう。自づと本地物としての特徵は全く見えなくなつて來てゐる。

【參考】本地物の研究 熊田瑞善（國文學踏査第一輯）〇唱導と本地文學と 筑土鈴寛（國語と國文學七六・七七） 〔筑土〕

梵鐘（ぼんしよう）「鐘」を見よ。

盆石皿山記（ぼんせきべいさんき） 讀本 中本 四冊 【作者】曲亭馬琴 【畫工】一柳齋豐廣 【名稱】さゝやかなる草紙に千古の事蹟を述べる恰も一時の人目を喜ばす盆畫盆石に似たといふ意。【刊行】文化二年（前編）・同三年（後編）。【諸本】曲亭馬琴翁叢書（野村銀次郎編）所收。【題材】番町皿屋敷傳說・鉢被傳說・刈萱桑門傳說を交へ作つたものである。

【梗概】鹽谷師高の臣木村源七は、主君戰死の際甥三重之介を伴うて遁れたが、途中見失つて美作に乳母の夫長助を賴り、その娘晚稻を妻としたが、錦織郡司の寵愛する鹿を擊ち、ために郡司は病死してその後を繼ぎ、豫て戀する妾落穗を我が物とした。偶々落穗・晚稻は、時を同じくして紅皿缺皿の二女を生み、妻妾の烈しい暗鬪から、落穗は源七の留守中晚稻を殺して缺皿を虐待し、圖らずも國主赤松義則に宮仕をすることになつた缺皿の代りに、紅皿を城中に遣るが、事露はれて討手を向けられ、源七は鹿と化して遁れ、落穗は斬られてその傷口から鹿が生れた。なほ赤松家では家來廣岡兵衞が、嘗て狼に襲はれたのを救ひ來つた缺皿が、誤つて寶物の皿を割り、僕勇藏實は源七の甥三重之介が後難を除かんと、殘り九枚の皿を打碎いたので、二人を庭前の空井戸の側に縛し置きたるに姿が見えずなつた事や、義則珍藏の數珠が失はれて、前に兵衞が山中で射た尾のない鹿の首に懸つてゐた事や、この鹿の皮で作つた茵に包まれて、若君佐用丸が行方不明になつたといふ異變があつた。これより先、紅皿は追放されて大和に赴き、難に遭うて錦織郡司の甥卯三二に救はれ、その後妻となつたが、こゝに寄食してゐた久米鐵牛と密通し、鐵牛は卯三二と誤つて若君を尋ねてゐた兵衞を殺したので、卯三二は播州に到り、兵衞の妻小船を伴ひ、若君の探索と兵衞の仇討に旅立つた。然るに鐵牛は窮迫の末、高野道者の米を盜んで鍋を冠らされた紅皿を捨て去らうとし、後を追つて來たので、野中の古井戸に埋めたが、拔道から遁れ出で、鍋を取らんと高野山に詣でた紅皿と再會した。又高野山に詣でた卯三二の一行に追はれたので、これを暗討にして丹波に赴き、若尾山光明寺の大德寂靈和尙を訪れた。和尙は紅皿に懺悔を勸め數珠を以てこれを打つと、既にかの古井戸に死んでゐた五體は消え失せた。茲に源七を尋ね、兵衞の仇を探してゐた勇藏・缺皿は、夢に告げられて來り、和尙に導かれて鐵牛を討ち、寂靈の弟子となつてゐた源七に逢つた。そこで和尙は源七の所持する鹿の角を敎化し、鹿の靈は成佛してその奪ひ去つた佐用丸を託したので、勇藏・缺皿は若君を伴うて歸參した。やがて義則は二人を結婚させて重用し、寂靈には一寺を建てて寄進した。

【構想】因果應報を根柢として人生を取扱ひ、その武士道の精神、儒敎の思想を表現してゐる。全篇の事件が源七一家の鹿の祟りに因るといふ因果說を最も具體化したところ、實に作者の小說觀の敎訓と娛樂とを標榜した所以（いはれ）がある。

【參考】馬琴研究 藤村作（日本文學講座） 〔笹野〕

鬘田宗庵緣起（まんだそうべゑえんぎ）「神功皇后緣起繪卷」を見よ。

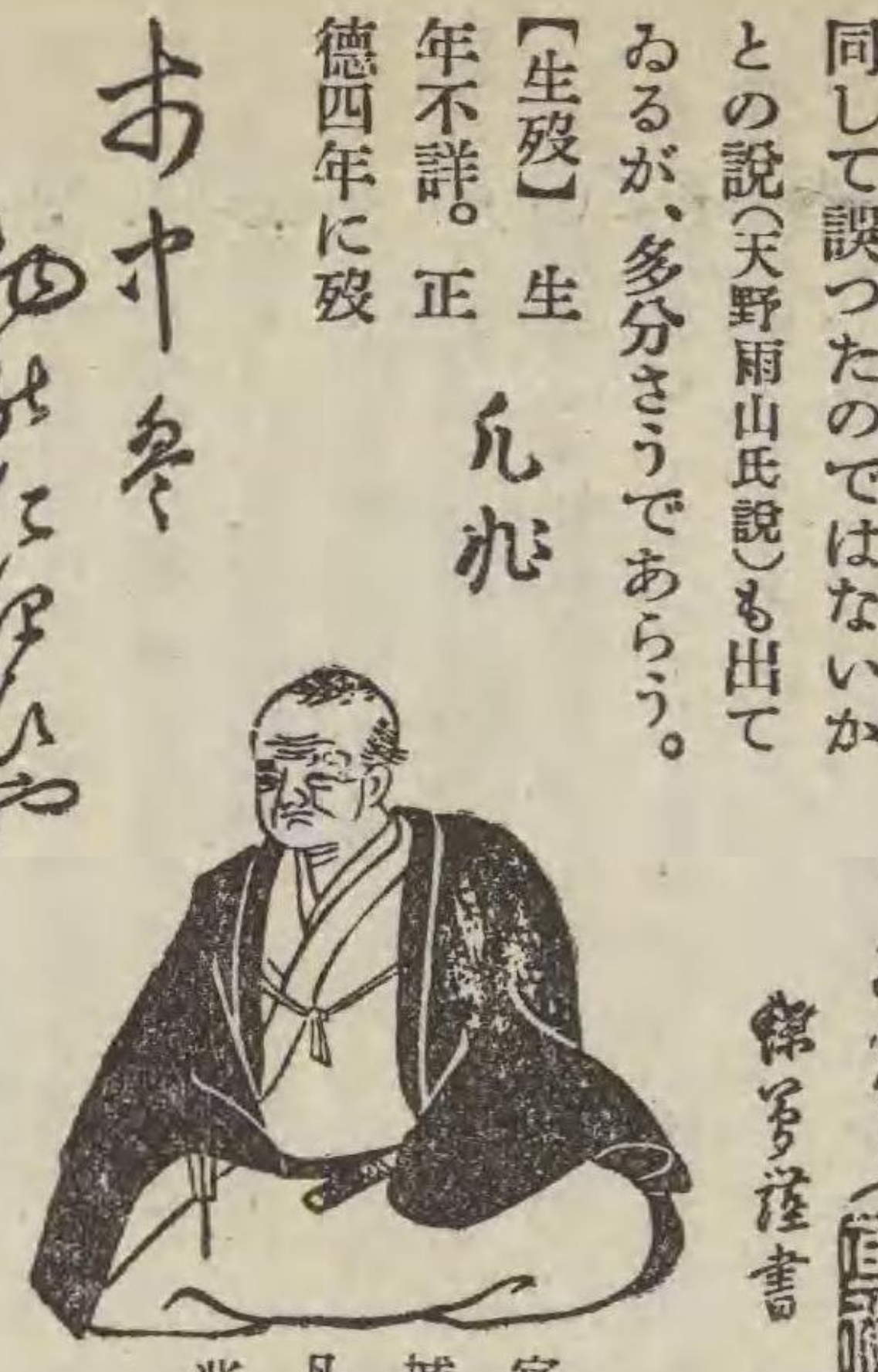
本地垂迹（ほんちすゐじやく） 宗敎 【名義】佛敎に於いて佛菩薩を本地とし、日本の神祇を垂迹とするのである。【由來】佛敎の傳來するや、朝廷にては厚くこれを信仰せられたのであるが、一般民衆は、我が古來の神祇を崇敬して、容易にこれを信仰しなかつた。そこで佛敎徒は神佛習合を企て、日本の神祇は佛菩薩と相反するものでないことを說いたのである。これを說いた最も著しいのは僧行基である。行基は聖武天皇の歸依を得て、天皇の國分寺建設、東大寺の大佛建立に與つて力あつたのである。かくて奈良朝時代から平安朝初期に亙つて、盛んに神佛習合が行はれ、漸次本地垂迹に進行したのである。從つて本地垂迹說は、何人により何時代に唱へられたかは明確でないが、天台の最澄、眞言の空海等は既にこれを唱へたかとも思はるゝが、少くともこの二人の法子法孫ぐらゐの時代には行はれて居つたものと認められる。【本地】日本の神祇の如何なる神祇が、如何なる佛の垂迹であるかは、元來、作り事であるので、定說のあるべき筈がない。今「扶桑明月集」「神祇寶典」「諸社根元」「洛陽寺社緣起」「日吉山王新記」等により、天台の日吉山王の上七社の本地と垂迹とを擧げて參考に供する。

（順序）	（社名）	（本地佛）	（垂迹神）
第一	大宮	釋迦如來	大己貴命
第二	二宮	藥師如來	國常立尊
第三	聖眞子	阿彌陀如來	八幡菩薩
第四	八王子	千手觀音	國狹槌尊
第五	客人	十一面觀音	伊弉諾尊
第六	十禪師	如意輪	瓊々杵尊
第七	三宮	普賢	惶根尊

【影響】中古時代には、この本地垂迹の說は全く成功し、天下の神社は殆ど盡く僧徒の管理に歸したのである。されど當時既に本地垂迹の反對に、神本佛迹の思想を見たのであるが、德川時代となり、神道家の學者頻りに出で、排佛論の聲漸く起り、平田篤胤に至つて極點に達した。かくて維新の際に神佛分離の實行を見て、本地垂迹の思想は全く消滅したのである。（本地物參照） 〔田中（義）〕

凡兆（ぼんてう） 俳人 【姓】宮城氏・野澤氏・越野氏・宮部氏等の說あれど何れも確かでない。【通稱】幼名、又通稱を長次郎とする說があるが、これも根據不明である。【號】初め加生と

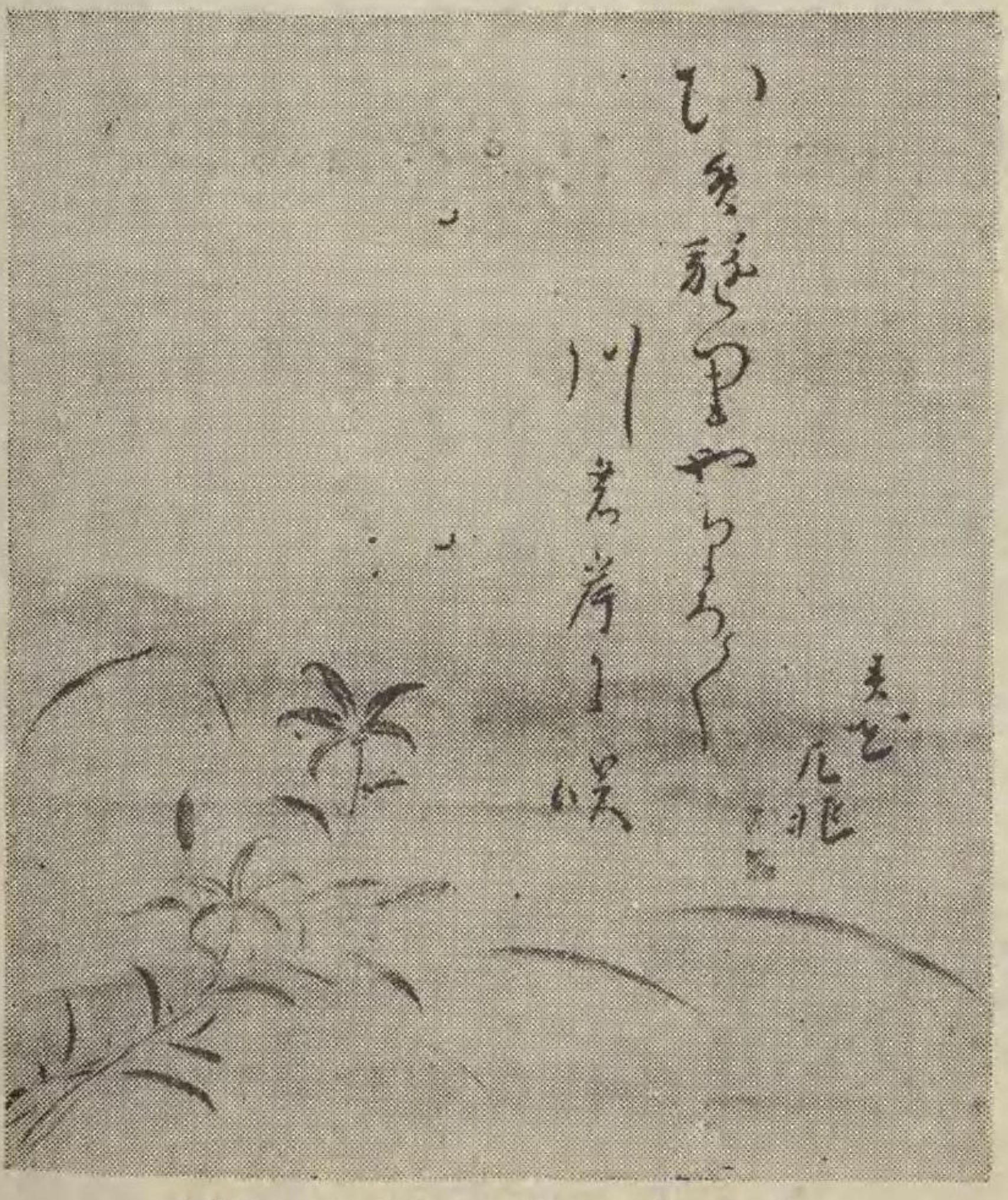
號した。晩年には阿圭とも號した（野坡吟艸）。別號を春華園（又春花園）とするものがあるが、これは曰人の言葉より古い處には見えぬやうであり、最近酒井凡兆（寛政文化頃の出羽庄内藩主酒井忠德）の別號に春花園といふのがあるやうで、これを元祿の凡兆と混同して誤つたのではないかとの説（天野雨山氏説）も出てゐるが、多分さうであらう。



宮城凡兆

【生歿】生年不詳。正德四年に歿した事は土芳の「蓑虫庵集」によつて知られ、それが三月であつたことは、野坡の「凡兆圭子を悼　行春や知らば斷べき琴の糸」の句や、許六の「凡兆追善　西東どのかげらふに法の糸」（風俗文選大註解）の句によつて知られる。享年不詳。但し芭蕉が凡兆の妻とめ（羽紅）へ送つた手紙で元祿三年と推定されてゐるものに「加生老」とあるから、相當の年齡であつたことが知られる。

【師傳】芭蕉門【閲歷】「風俗文選」作者列傳には「凡兆者加州之産也。業㆑醫居㆓于洛㆒」とのみあるが、凡兆の自畫讃に「加城凡兆」とあるものがあるさうだから、金澤の産とする傳へが、信ずべきものであらう。又風律の「小ばなし」にある野坡の談にも、「凡兆は京の醫者にて」とあるから、醫を業とした事も事實であらう。元祿四年の「京羽二重」に、凡兆の住所を「小川さはらぎ町上に」としてゐるから當時の住所を知り得る。いつから俳諧に入つたかは明かでないが、其角が元祿元年に上洛した冬に、去來・加生と嵯峨吟行を共にしたり、加生と大津の尙白を訪うたりした時の加生の作が「いつを昔」に載つてゐるのが最も早いものであらう。かくて翌二年の「曠野」に京加生として二句見え、又この冬であらう、越中から飛驒へ入つて、「鷲の巣の樟の枯枝に日は入りぬ」の吟があつたから、この時故郷金澤にも立ち寄つたのであらう。芭蕉との直接の交渉及び對顏の知られるのは翌三年で、芭蕉が幻住庵に入つた頃から互に往復して居り（嵯峨日記）、その頃から去來との「猿蓑」撰集が始まつたらしい。芭蕉はなほこの年幾度か加生やその妻とめへ手紙を送つたり、或は手紙中加生の事に云ひ觸れたりしてゐる。かくて翌四年には愈々「猿蓑」が出版され、凡兆は最多數の四十一句、外に四卷の連句全部に加はつてゐる。なほこれまでは號が加生とあり、「猿蓑」所收の「市中は」の卷の未定稿に於てもまだ加生で、四年出版の集には加生と凡兆とが相半ばしてゐるが、前年三年の上御靈社景桃丸の年忘れの會の歌仙には凡兆とあるから、この頃凡兆と改號した事が知られる。然るに凡兆は、「猿蓑」出版直後から名古屋の越人・野水と同じて芭蕉に離れる傾きを取つたらしい。それは壺中撰の「弓」や壺中・芦角撰の「木がらし」や、支考の「削かけの返事」や「誹諧問答」中の去來の言葉などの比較によつて知られる。そしてそれは「削かけの返事」に云ふ如き、越人・野水と共に路通を芭蕉に惡しざまに云つた事のみに起因するものではないらしいが、確たる事は解らない。然るに凡兆は、この後、事に坐して下獄したのであるが、それは元祿七年前後の頃らしい。「風俗文選」作者列傳には「一罪㆑事不㆑知㆓其終處㆒」といひ、「小ばなし」に「越度の事有、京追放のよし」とあるなどがそれであるが、「追放のよし」といふのは赦免追放を意味するらしい。「誹諧世說」や「蕉門諸生全傳」にはやゝ精しく述べてゐるが、どこまでが事實かは解らない。併し草士撰の「ねなし草」に凡兆の句として、「囚にありしとき　かゝる身を虱のせむる五月かな」とあるものは信ずべきものであらう。又元祿九年成の許六の「韻塞」に、「猿蓑」にある凡兆の「門前の小家も遊ぶ冬至かな」の句を「不知作者」として載せてゐるのは、勅撰歌集の例を襲うての凡兆に對する取扱かとも思はれ、元祿十四年に至る迄、彼の作が更に集に見えない所から考へると、この頃はなほ出獄しなかつたものかも知れない。同十四年から十六年迄は連續して見え、俳壇への復活を期したらしくもあるが、自ら悟る所があつたか、或は他の理由によるか、再び作が殆ど見られなくなつてゐる。元祿十四年の舍羅の「荒小田」には珍しくも四十句といふ多數が採られてゐて、千日寺に詣でた句や須磨で詠んだ句が見えるなど、この頃大阪邊にあつて舍羅に深い關係を持つてゐたらしく推せられ、翌十五年の白雪の「三河小町」には、羽紅が「なには羽紅」として見えるから、羽紅が夫凡兆と同棲したことも推せられる。然るに同年の知方の「初便」には、「江戸凡兆」として二句採られてゐるが、知方は筑前の人でもあるから、江戸とする事は恐らく信ずべきではあるまい。要するに、赦免された後、妻羽紅と共に大阪邊に最後まで世を忍んだものであらう。かくて正德三年に羽紅と土芳との間に文通のあつた事が「蓑虫庵集」によつて知られ、その翌年凡兆が歿してゐるのであるが、羽紅と土芳との文通は享保七年にも見られる。【著作】猿蓑（別項）去來共撰○凡兆句集附羽紅句集（柴田筍浦編）。なほ黑田源次氏編「芭蕉翁傳」所收「凡兆日記」は、既に説のある如く多分僞書であらう。



凡兆自畫贊（井上辰九郎氏藏）

【人物・作風】凡兆は俳歷が淺かつたらしいに拘はらず、「猿蓑」の撰者たらしめられてゐるので、芭蕉の知遇には深く感激せねばならぬのであるが、間もなく芭蕉に背いて行つてゐる所から見ると、共撰者の去來の篤實さとは正反對の性格の人であつたらしい。「弓」にある凡兆の「こりもせで今年も萌る芭蕉哉」の句は、芭蕉に當てつけた作らしくも思はれ、「荒小田」にある「千日寺にまうでゝ」の「念佛より欠（あくび）たふとき霜夜哉」の句には、拗ね氣味の性格が窺はれるやうである。たとへ假に他人の罪

に坐したのであるにしても、かうした珍事のあつたのには初めから道德觀念に缺陷があつたからではないかと考へられる。俳諧に於ては、殆ど又類例の稀な例を作つてゐる。「猿蓑」を中心として躍進的な進境と躍進的な退歩とを示してゐる。蕉風の絶巓をなす「猿蓑」の價値は、客觀的作風に於て儕輩を拔く凡兆が重要な部分を占めるとさへ思はれるのに、その

號か天野雨山（蕉風昭和九ノ二）　〔志田〕

本朝惡狐傳（ほんてうあくこでん）　讀本　十册【作者】岳亭丘山【畫工】英齋國景【名稱】九尾の狐の傳説を我が國の事に作り替へたるに據る。【刊行】文政十二年。

【梗槪】正中嘉曆の頃、鎌倉に近い座間の郷に星の井加藏といふ者があつた。非常に孝行者で人呼んで孝藏といつたが、貧しいのを憂へ

士稻村田之進の娘玉芝に乘り移つて、彼女に慕ひ寄る守宮高四郎・椙田正之助・春山東作・小畑桑五郎等に祟り、田之進はこれを殺さんとして殺生石の毒氣に當つて死んだが、玉芝もこれがため追はれて黑塚と共に武藏足立郷に移り住み、旅人を誘うて石を以てこれを殺し、財寶を掠めてゐた。足立郷の領主宗高公は彼等を討たんと圖つたが、却つて玉芝の術

等を記したもの。萬治三年庚子の自序、林靖（羅山の第四子、春德）の後序、林春信（春齋の長子、梅洞と號す）の跋がある。　〔佐久〕

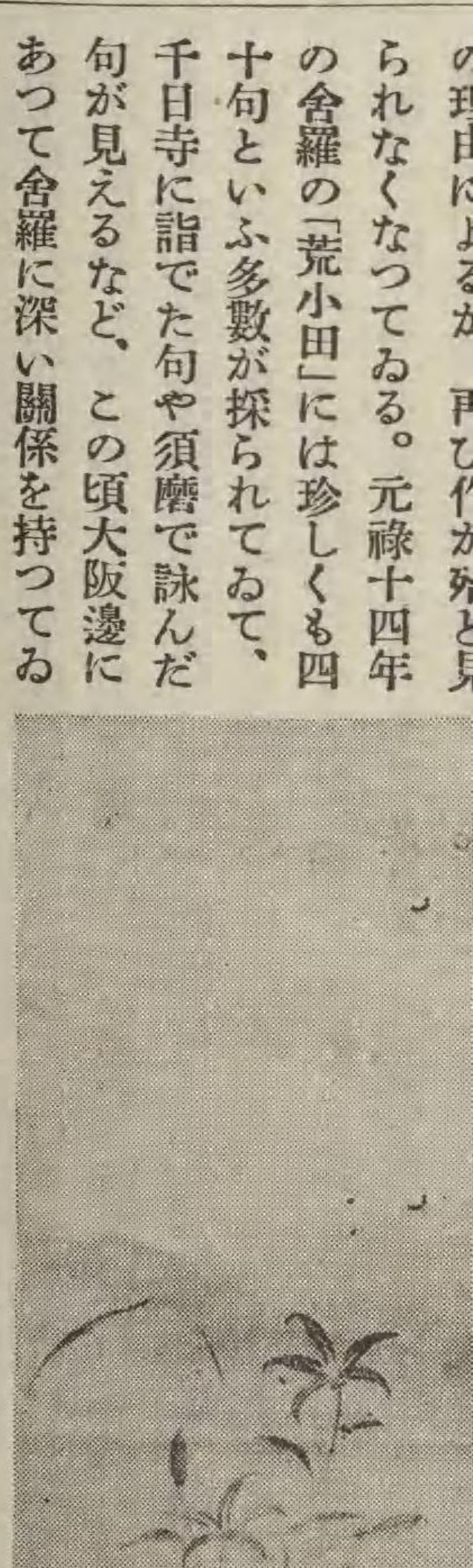
本朝櫻陰比事（ほんてうあういんひじ）　浮世草子　五卷【著者】無署名。但し井原西鶴か。【畫工】吉田半兵衞【名稱】本朝は漢土に對し日本の意、「櫻陰比事」は宋の桂萬榮の「棠陰比事」（棠陰比事物語參照）に擬したもの。【刊行】元祿二

の句によつて知られる。享年不詳、但し芭蕉が凡兆の妻とめ（羽紅）へ送つた手紙で元祿三年と推定されてゐるものに「加生老」とあるから、相當の年齡であつたことが知られる。

【師傳】芭蕉門【閱歷】「風俗文選」作者列傳には「凡兆者加州之產也。業レ醫居二于洛一」とのみあるが、凡兆の自畫讃に「加城凡兆」とあるものがあるさうだから、金澤の產とする傳へが、信ずべきものであらう。又風律の「小ばなし」にある野坡の談にも、「凡兆は京の醫者にて」とあるから、醫を業とした事も事實であらう。元祿四年の「京羽二重」に、凡兆の住所を「小川さはらぎ町上に」としてゐるから當時の

四年出版の集には加生と凡兆とが相半ばしてゐるが、前年三年の上御靈社景桃丸の年忘れの會の歌仙には凡兆とあるから、この頃凡兆と改號した事が知られる。然るに凡兆は、「猿蓑」出版直後から名古屋の越人・野水と同じて芭蕉に離れる傾きを取つたらしい。それは壺中撰の「弓」や壺中・芹角撰の「木がらし」や、支考の「削かけの返事」や「誹諧問答」中の去來の言葉などの比較によつて知られる。そしてそれは「削かけの返事」に云ふ如き、越人・野水と共に路通を芭蕉に惡しざまに云つた事のみに起因するものではないらしいが、確たる事は解らない。然るに凡兆は、この後、事に坐して

の理由によるが、再び作が殆ど見られなくなつてゐる。元祿十四年の舍羅の「荒小田」には珍しくも四十句といふ多數が採られてゐて、千日寺に詣でた句や須磨で詠んだ句が見えるなど、この頃大阪邊にあつて舍羅に深い關係を持つてゐたらしく推せられ、翌十五年の白雪の「三河小町」には、羽紅が「なには羽紅」として見えるから、羽紅が夫凡兆と同棲したことも推せられる。然るに同年の知方の「初便」には、「江戶凡兆」として二句採られてゐるが、知方は筑前の人でもあるから、江戶とする事は恐らく信ず


（井上辰九郎氏藏）

正反對の性格の人であつたらしい。「弓」にある凡兆の「こりもせで今年も萌る芭蕉哉」の句は、芭蕉に當てつけた作らしくも思はれ、「荒小田」にある「千日寺にまうでゝ」の「念佛より欠たふとき霜夜哉」の句には、拗ね氣味の性格が窺はれるやうである。たとへ假に他人の罪

に坐したのであるにしても、かうした珍事のあつたのには初めから道德觀念に缺陷があつたからではないかと考へられる。俳諧に於ては、殆ど又類例の稀な例を作つてゐる。「猿蓑」を中心として躍進的な進境と躍進的な退步とを示してゐる。蕉風の絕巓をなす「猿蓑」の價値は、客觀的作風に於て儕輩を拔く凡兆が重要な部分を占めるとさへ思はれるのに、その翌年の句空の「柞原」に見える十句は、既に甚しく理智に墮して、殆ど別人なるかの觀を呈してゐる。されば嚮後の凡兆の俳境の頹廢は入獄の精神的打擊によるものとのみは考へにくい。芭蕉は凡兆に對して、「發句はただ十七字の內になし來れば、一字もあだに置べからず」、又「誹諧といへども風雅の一筋なれば、姿かたち賤敷作りなすべからず」（旅寐論）と云つたと云ふが、成る程凡兆の作には品位の高くない所があり、又作り捨ての傾きもあつたものかと思はれるが、芭蕉に背きかけた頃からの頹廢ぶりは全く不思議な位である。「荒小田」の四十句は、「猿蓑」の四十一句に對して甚だしい見劣りざまである。その一時的な詩才煥發の奇蹟的事實から考へても、凡兆には精神的に異常のものがあつたかに考へられ、心理學的攻究に値する作者らしい。

【參考】京羽二重堀江林鴻○花實集向井去來○旅寐論同上○誹諧問答森川許六○風俗文選同上○削かけの返事各務支考○誹諧世說高桑闌更○芭蕉門古人眞蹟依兮○蕉門諸生全傳遠藤日人○續俳家奇人談竹內玄々一○俳林小傳中村光久○凡兆研究大河寥々（石楠九ノ一―八）○評釋凡兆俳句全集高木蒼梧○凡兆について大河寥々（月華五・六）○去來丈草凡兆潁原退藏（俳句講座地方俳史篇）○春花園は凡兆の別號か天野雨山（蕉風昭和九ノ二）　（志田）

本朝惡狐傳（ほんてうあくこでん）

讀本　十册【作者】岳亭丘山【畫工】英齋國景【名稱】九尾の狐の傳說を我が國の事に作り替へたるに據る。【刊行】文政十二年。

【梗概】正中嘉曆の頃、鎌倉に近い座間の鄕に星の井加藏といふ者があつた。非常に孝行者で人呼んで孝藏といつたが、貧しいのを憂へて土地の觀音に祈り、四つ星の斑のある犬を授かつて家に飼つたところ、やがて孝藏の父が山中で狼に殺された時、この犬は直に狼を殺して仇を報じた。時の執權北條高時はこの事を聞いてその犬を召し、鬪犬を試みたが鎌倉一だつたので、室壁太郎の名を與へて館に留め、孝藏には數多の金銀を賜はつた。まもなく高時は新田義貞に滅され、この亂に屢々靈威を現はした太郎は、又孝藏の許に歸つたが、孝藏は偶々土地の豪農深見作太夫の娘小瀧を娶らんとして、豫て小瀧に執心の鄕士鶴間矢九郎に妨げられたが、太郎の働きで矢九郎を陷れて無事に婚禮した。併しそのため三崎街道で矢九郎に捕はれ、古井戶に入れられたが、太郎はまたこれを護つて武藏駒傍町の商人油屋馬士（まご）兵衞父娘に孝藏を救はせ、自分は馬士兵衞方に伴はれてゆく途中、大蛇を殺して父娘を救つた。○下野の國那須野の殺生石は、天地創造の時の惡氣が一匹の狐となり、殷の紂王、天竺の班足王、我が國の鳥羽帝等に祟つて、退治られた後も、毒氣を以て人々を惱ましてゐたものであるが、こゝに近き梁田の里に奧州安達原から棲み替へて來た黑塚といふ鬼婆は、或る時傷ついた小狐を救うて養ふうち、この狐は近くの原右衞門といふ信心家を化したのを初めとして惡事を重ね、遂に土地の鄕士稻村田之進の娘玉芝に乘り移つて、彼女に慕ひ寄る守宮高四郎・桕田正之助・春山東作・小畑桒五郎等に祟り、田之進はこれを殺さんとして殺生石の毒氣に當つて死んだが、玉芝もこれがため追はれて黑塚と共に武藏足立鄕に移り住み、旅人を誘うて石を以てこれを殺し、財寶を掠めてゐた。足立鄕の領主宗高公は彼等を討たんと圖つたが、却つて玉芝の術に陷つて彼女を近づけ、その色に溺れて或は侍女を集めては殺し、或は姙婦の腹を裂くなど亂行至らざるなき有樣となつた。これを患へた忠臣越谷小太夫の弟駒之助や石濱五十之進・五十松父子等は、必死となつて玉芝母娘を討たんと圖るうち、五十松の子を懷姙した油屋馬士兵衞の娘小蘭が召されるに及んで、かの靈犬室壁太郎の力を藉り、遂に玉芝黑塚を殺して宗高の家を鎭めた。

【解說】「文選」「山海經」以後、諸書に見えた九尾の狐の傳說は、多くの讀本の材料となつたが、これもその一つとして、「神社考」「三國惡狐傳」等の作者に倣ひ、その後日談を描き婦幼の娛樂と勸懲に供へんとした怪異談である。前編には專ら觀音の利生による靈犬の活躍を描き、後編には惡狐を出して殺生石と安達原の巷說を交へ、それを潤色したものであるが、既に全篇の構想が取り合せにすぎず、描寫もまた卑俗であつて取るべき所なく、後編玉芝の惡行の邊は、徒らに慘虐の筆を用ひて不快を覺えしめる。　（笹野）

本朝一人一首（ほんてういちにんいつしゆ）

漢詩集　十卷五册【編者】林恕（春齋また鵞峰と號す）。【刊行】寬文五年【解說】天智天皇の御宇より、元龜・天正頃に至るまでの漢詩を一人につき一首づつ選んで編輯し、各詩の本事、批評等を記したもの。萬治三年庚子の自序、林靖（鵞山の第四子、春德）の後序、林春信（春齋の長子、梅洞と號す）の跋がある。　（佐久）

本朝櫻陰比事（ほんてうあういんひじ）

浮世草子　五卷【著者】無署名。但し井原西鶴か。【畫工】吉田半兵衞【名稱】本朝は漢土に對し日本の意、「櫻陰比事」は宋の桂萬榮の「棠陰比事」（棠陰比事物語參照）に擬したもの。【刊行】元祿二年正月、江戶日本橋靑物町萬屋淸兵衞。大阪高麗橋眞齋橋筋南入ル雁金屋庄左衞門板行。再版と思はれるものに後者を削つて大阪心齋橋筋順慶町柏屋淸左衞門と入木したものがある。【諸本】日本名著全集西鶴全集下・西鶴全集下（昭和版帝國文庫）・日本古典全集等所收。【內容】第一卷八章、第二卷以下各九章合計四十四章より成る。疑獄物語を何等の系統なく羅列したもので、「棠陰比事」が二つの事件を對比して辭を囑し、七十二韻百四十四件を取扱つたのに對して、これは一章に一事件を「むかし都に」との書き出しで敍述したものである。ただ第一卷の第一章の冒頭に、「夫大唐の花は甘棠の陰に召伯遊んで詩をうたへり。和朝の花は櫻の木かげゆたかに歌を吟じ。此時なるかな御代の山も動ず。四つの海原不斷の小細浪靜に。王城の水きよく流のすゑの久しきひとりの翁あつて。百餘歲になるまで家に杖突事もなく。善惡ふたつの耳かしこく聞傳へたる物語り。今の世の慰さみ草ともなりて心の風に亂れたる萩も薄も。まつすぐに分れる道の道筋の廣き事。筆の林にも中々書つきずして殘しぬ」と、序文めいたものが附せられてゐる。これは「大鏡」（別項）の流れをひく長壽者の見聞集とした趣向である。事件は必ずしも昔に限らず、また都とも限られてゐな

本朝櫻陰比事表紙（東大圖書館藏）

い。却つて當時の世相を語るものが多い。都とした所以は、有名な所司代板倉父子に假託せんがためで、裁判官の名は表はさず、ただ御前といふ言葉で語つてゐる。事件の內容も「棠陰比事」の探偵趣味が横溢し、筋も獵奇的なものの多いのに比ぶれば平凡に近い。それだけ又、一面に當時の世相を如實に語つたものとも思はれる。なほ板倉父子の判決例を記したものに「板倉政要」があるが、筆者は「棠陰比事物語」（別項）等に刺戟され、自家の見聞や言ひ傳へを題材として巧みに日本化し、當代化し、都化してゐる。「棠陰比事」からはその名を摸したるに止まり、材料は案外借用せず、ただ一卷第二章の「曇りは晴る影法師」だけにその證跡を摑むことが出來るに過ぎない。裁判の取扱方は飽くまで溫情主義で、美俗良風の維持を念とし、輕罰主義で罪人と雖もその理のあるところは十分參酌して、萬人その裁きを謳歌せざるを得ない底のものである。人情の機微を捕へ心理の微妙な動きにも注意し、博識で世情に通じた模範的な裁判官を描き出すに成功してゐる。

【批評】本書が西鶴作と確定しない所以は、西鶴の他の諸作に比し、文章が平板に流れて生彩に乏しいためである。併しこれは多くの說話を羅列するに急なため、勢ひ、平叙に終つたからとも思はれるし、元祿二年には同じ正月に「一目玉鉾」（別項）を出版したに過ぎず、元祿五年「世間胸算用」（別項）を出すまで三・四の兩年は筆を執つてゐない。これ等の點からしてこの頃西鶴の一身上何等か故障があつたものか、或は創作熱の減退を來したものではないかと思はれる。前年十一月刊の「新可笑記」（別項）も傑作ではなく、本書と同時出版の「一目玉鉾」（別項）も、杜撰なほど推敲を缺いてゐる。但し板下の文字は西鶴自筆と推定されてゐるので、大體西鶴作としても大過なかるべく、「新可笑記」ではまだ飜案を幾分自分自身氣にしたやうな口吻を漏らしてゐるに比し、本書はその痕跡をとゞめぬ程、よく消化してゐる。且つ機智の働き、心理の隱微な穿ち等は自から西鶴作と肯かしむるものがあり、後世の裁判物の一系統を形造り、而も摸倣者の追隨を許さぬ天才的な閃きも、諸所に散見する。本書の題簽の卷數を表はすに、「ちゑ小判一兩」「ふんべつ小判貳兩」「しあん小判三兩」「しひ小判四兩」「かんにん小判五兩」と變つた趣向に出てゐるのも面白い。

【影響】本書出でて世の喝采を博したものと見え、「本朝藤陰比事」（別項）、「鎌倉比事」（別項）等何々比事と稱する裁判物の一系統を形造ると共に、讀本に演劇に更に大川仁政錄（別項）となつて實錄物化され、終には大岡政談等の講談物にまで展開してゐる。〔城戶〕

本朝虞初新誌 ほんてうぐしよしんし

漢文　三卷【著者】菊池三溪【解說】漢文で書いた小說的遊戲文ではあるが、文章が面白いので一時盛行した。淸の張潮（字は山來）の「虞初新誌」に倣つたものである。〔佐久〕

本朝軍器考 ほんてうぐんきかう

故實　十二卷六册【著者】新井君美【成立】未詳。但し寶永六年朝倉景衡の序があり、「新安手簡」に、享保七年安積澹泊との往復文書を載せた中に、先年この書を撰述したとあり、澹泊と意見を交換して改削したこと、澹泊が跋を書くに至つたことが見えてゐるから、寶永六年頃に既に脫稿し、十四年を經て享保七年に訂正したもので、門人新川元成の序にも、君美の論著は率ね脫稿したもののない中に、本編のみは再び更定された趣を傳へてゐる。【刊行・由來】著者歿後數年、幕府から嗣子明卿にその著書を求められた時、この書を上つたところが嘉賞せられたので、これを板に刻するに至つた趣が、元文元年六月の新川元成の序に明記されてある。【諸本】新井白石全集第六・故實叢書第一所收。【內容】我が國武器の沿革を、上代より近世に至る文獻の徵すべきもののみを採つて記したもの。先づ引用書二百部の目錄を揭げ、卷一旗幟類十三條、卷二金鼓類四條、卷三節鉞類四條、卷四弓矢類四十九條、卷五弩砲類二條、卷六火器類三條、卷七矛槍類三條、卷八劍刀類十九條、卷九甲冑類二十七條、卷十鹵楯類一條、卷十一帷幕類五條、卷十二鞍轡類二十一條、凡て十二卷百五十一條を記し、寶永六年二月の朝倉景衡の序、元文元年六月朔の門人新川元成の序、享保七年の安積覺の跋がある。又この書の附圖に就いては、凡例に、別に圖を作つて書の終に附ける旨を記し、文中にも別に圖に記すと書いた所があり、白石の文集中にも正德五年集古圖序を載せてはあるが、これはその志のみあつて實行されなかつたものと見える。それでこの書の流布するにつれて、好事家の僞選の圖が行はれたので、享保十九年朝倉景衡が「集古圖說」二卷を作り、圖を岡田信之に畫かせたのを、景衡の子景命が更に畫工蜂谷廣成に畫かせて元文五年に刊行した。この「集古圖說」は一名「本朝軍器考圖式」とも稱せられ、神社・佛閣に珍藏されてゐる武器・甲冑七十五品を精細に圖し、製作・寸法を明記したものである。【價値】君美の著作が何れの方面に於ても劃期的のものである如くに、この書も亦從來の所謂兵法家の間に故實として不完全な說明をなし來つたのを排して、國史・記錄を根據として歷

史的記述をなした點に於て、その特徵を認むべきもので、軍器の考說に一段の進歩を與へたものである。彼の武家故實の大家たる伊勢貞丈の如きも、その著「本考標疑」の序に於て、「本朝軍器考出而本朝軍器之說備矣、故謂二軍器故實一之徒、皆莫レ不レ附二其驥尾一也」とさへ言つてゐる。又伊勢貞丈は、「本考增註」「安齋隨筆」（別項）「愚得隨筆附考」（別項）等に於て、本書が朝倉景衡の「愚得隨筆」を本にし、君美

牡鹿輔（刊）○本朝軍器考圖後篇玉箒四卷　松岡牡鹿輔（享和二年刊）〔石村〕

本朝皇胤紹運錄 ほんてうくわういんぜうんろく

有職　一卷【著者】內大臣藤原滿季【成立・由來】應永年中後小松天皇の勅命を奉じて編纂したもの。【諸本】內閣文庫の飛鳥井雅庸の自筆本その他の寫本の外、後土御門天皇長享二年十二月に足利將軍義尙の求に應じて中御門宣胤が增補淸書し、翌三年三月に將軍に進獻し

の小姓加藤正淸をして光秀を打擲せしめる。（中、城外廣小路）光秀は退出の途次、嫡子光成・郎等開田（かいでん）彥六・四王天又九郎・進士（しんじ）八郎等と春長並に嫡子春忠を討ち取る密議をする。（切、愛宕山）春忠が寵姬小野お通と花見の宴を催してゐるところを光成・又九郎・八郎等が襲ふ。折から正淸が馳せつけ、光秀の謀叛による春長の最期を告げ、左右の敵を斬り伏せるが、春忠は深傷を負つて遂に自害をする。

人小西如淸（じよせい）から乳守（ちもり）の傾城小磯といふ者が三韓の繪圖を所持すると聞き、その繪圖を手に入れる役を正淸に命ずる。（切、乳守の色里）高島屋の二階に呼ばれた小磯は情人小西彌十郎を久吉に推擧するといふ約束で繪圖を正淸に與へる。彌十郎は如淸の子であるが、無賴のため勘當されてゐる。小磯からこの話を聞くや、立身するのに正淸の手は賴まぬと二階に踏ん込み、大力を以て正淸と揉み合ふが、と

の維持を念とし、輕罰主義で罪人と雖もその理のあるところは十分參酌して、萬人その裁きを謳歌せざるを得ない底のものである。人情の機微を捕へ心理の微妙な動きにも注意し、博識で世情に通じた模範的な裁判官を描き出すに成功してゐる。【批評】本書が西鶴作と確定しない所以は、西鶴の他の諸作に比し、文章が平板に流れて生彩に乏しいためである。併しこれは多くの說話を羅列するに急なため、勢ひ、平敍に終つたのか、或は創作熱の減退を來したものではないかと思はれる。前年十一月刊の「新可笑記」（別項）も傑作ではなく、本書と同時出版の「一目玉鉾」（別項）も、杜撰なほど推敲を缺いてゐる。但し板下の文字は西鶴自筆と推定されて

（藏館

に倣つたものである。〔佐久〕

本朝軍器考（ほんてうぐんきかう）

故實 十二卷六册【著者】新井君美【成立】未詳。但し寶永六年朝倉景衡の序があり、「新安手簡」に、享保七年安積澹泊との往復文書を載せた中に、先年この書を撰述したとあり、澹泊と意見を交換して改削したこと、澹泊が跋を書くに至つたことが見えてゐるから、寶永六年頃に既に脫稿し、十四年を經て享保七年に訂正したもので、門人新川元成の序にも、君美の論著は率ね脫稿したもののない中に、本編のみは再び更定された趣を傳へてゐる。【刊行・由來】

流布するにつれて、好事家の僞選の圖が行はれたので、享保十九年朝倉景衡が「集古圖說」二卷を作り、圖を岡田信之に畫かせたのを、景衡の子景命が更に畫工蜂谷廣成に畫かせて元文五年に刊行した。この「集古圖說」は一名「本朝軍器考圖式」とも稱せられ、神社・佛閣に珍藏されてゐる武器・甲冑七十五品を精細に圖し、製作・寸法を明記したものである。【價値】君美の著作が何れの方面に於ても劃期的のものである如くに、この書も亦從來の所謂兵法家の間に故實として不完全な說明をなし來つたのを排して、國史・記錄を根據として歷

史的記述をなした點に於て、その特徵を認むべきもので、軍器の考說に一段の進步を與へたものである。彼の武家故實の大家たる伊勢貞丈の如きも、その著「本考標疑」の序に於て、「本朝軍器考出而本朝軍器之說備矣、故謂二軍器故實一之徒、皆莫レ不レ附二其驥尾一也」とさへ言つてゐる。又伊勢貞丈は、「本考增註」「安齋隨筆」（別項）「愚得隨筆附考」（別項）等に於て、本書が朝倉景衡の「愚得隨筆」を本にし、君美の意を加へて增損潤色して書いたもので、「愚得隨筆」に引書の名を書き違へたものは「軍器考」にも書き違へてあるといつて、例まで擧げてあるが、この事は反對のことが言へるかと思ふ。君美の死後に書いた景衡の「集古圖說」の凡例には、「景衡久侍二先生一、所二親聞見一頗爲レ不レ少」とさへある。又「新安手簡」に、安積澹泊が、この書の誤字・脫字を指摘したのを謝した書簡の中に、國史の善本が得られない事が見えてゐることから考へて、引書の間違つたことも強ち「愚得隨筆」の過誤を繼承したものとのみ考へるにも及ばないと思はれる。寧ろ「愚得隨筆」の方が本書の過誤を踏襲したものと考ふる方が自然であらう。又「集古圖說」に就いて、榊原長俊の「本邦刀劍考」には、義家朝臣鞘卷圖・小笠原法雲鋏面具・新田後閑家藏義家朝臣旗等を擧げて、眞の圖と異る圖が多いと言つて少しくその價値を疑つてゐる。【註釋書】本朝軍器考餘二卷 宇治田忠鄕（元文元年自序あり）○本朝軍器考補正四卷 土肥經平（明和六年二月自跋あり）○本朝軍器考標疑三卷伊勢貞丈（安永三年二月成）○本朝軍器考餘評一卷同上（安永三年四月成、安齋雜考下）○本朝軍器考增註一卷 同上（安齋雜考上）○本朝軍器考補正評二卷同上（安永九年成）○本朝軍器考玉篩三卷松岡牡鹿輔（刊）○本朝軍器考圖後篇玉篩四卷松岡牡鹿輔（享和二年刊） 〔石村〕

本朝皇胤紹運錄（ほんてうくわういんぜうんろく）

有職 一卷【著者】內大臣藤原滿季【成立・由來】應永年中後小松天皇の勅命を奉じて編纂したもの。【諸本】內閣文庫の飛鳥井雅庸の自筆本その他の寫本の外、後土御門天皇長享二年十二月に足利將軍義尙の求に應じて中御門宣胤が增補淸書し、翌三年三月に將軍に進獻したものを後に板行したものがある。それは後陽成天皇までの皇統及び寬永年中までの皇胤を載せたものである。その長享二年以降の記事は後人の次々に書き加へたものである。群書類從本は上・中・下三卷に分ち、下卷には更に後陽成院以降後桃園天皇までの御系圖を補つてあるが、經濟雜誌社刊行の群書類從には、更に後桃園天皇以降明治天皇に至るまでの御系圖を補つてある。【內容】天神國常立尊から始まつて皇室の御系統を記し、皇胤の方々の小傳を書き込んだものである。【參考】皇胤紹運錄本名由來考伴信友（比古婆衣卷十六） 〔石村〕

本朝三國志（ほんてうさんごくし）

淨瑠璃 五段 時代物【作者】近松門左衞門【興行】享保四年二月十四日より竹本座（寶曆板「外題年鑑」）。【諸本】七行八十二丁本、山本九兵衞板。十一行二十八丁本、同上。十二行二十六丁本、同上。續近松淨瑠璃集（續帝國文庫）、諸種の近松全集所收。【題材】太閤記種の淨瑠璃の先驅をなすもの。【梗概】〔初段〕（大序、近江の城）內大臣春長が、安藝・周防の沖なる蒙古勢誅伐の大將軍を眞柴久吉に命じたところ惟任光秀が久吉を猜んで不服を申立てた爲め、春長は怒つて久吉の小姓加藤正淸をして光秀を打擲せしめる。（中、城外廣小路）光秀は退出の途次、嫡子光成・郎等開田（かいでん）彥六・四王天又九郎・進士（しんじ）八郎等と春長並に嫡子春忠を討ち取る密議をする。（切、愛宕山）春忠が寵姬小野お通と花見の宴を催してゐるところを光成・又九郎・八郎等が襲ふ。折から正淸が馳せつけ、光秀の謀叛による春長の最期を告げ、左右の敵を斬り伏せるが、春忠は深傷を負つて遂に自害をする。〔二段〕（口、近江の城）春忠の胤を宿せるお通が、城門で御臺所に御目もじを請ふが、お通は光秀の養女なる故、敵方の首を討ち來らねば嫁姑の名乘りは出來ぬといはれ、悄然として去る。間もなく光秀の軍が押寄せる。御臺所は孔明の故智を學んで、城門の櫓の上で琴を彈じ、敵軍がこれに魂を奪はれてゐる間に、中國より久吉の軍が馳せ戾つて散々に破る。（切、小栗栖の里）辛うじて遁れ來つた光秀は、こゝで春長父子の亡靈に惱まされた後、百姓等の竹槍に斃れる。〔三段〕（口、伏見城）お通の實父松平嘉平次が訪れ來り、久吉を春長の天下を盜む大盜人と罵る。久吉はお通が遠州濱松なる嘉平次の浪宅に忍んでゐると聞き、その胎內にある主君を迎へんとして、草履取の昔の姿となつて嘉平次の供をする。（切、嘉平次浪宅）嘉平次は光秀の謀叛に連判した自分を擊ち、御臺所の勘氣を赦されよとお通に鐵砲を渡すが、お通は却つてそれで己が胸を貫く。物音に奧から久吉が立ち現はれ、父の罪に代つたお通を憫み、お通が生んだ若君を後見して、後々は日本の大將と仰がんと約す。〔四段〕（口、大將住吉詣）久吉はこの度の三韓征伐について神の擁護を祈らんため、住吉詣を志して道行。（中、住吉海岸）久吉は堺の住人小西如淸（じよせい）から乳守（ちもり）の傾城小磯といふ者が三韓の繪圖を所持すると聞き、その繪圖を手に入れる役を正淸に命ずる。（切、乳守の色里）高島屋の二階に呼ばれた小磯は情人小西彌十郎を久吉に推擧するといふ約束で繪圖を正淸に與へる。彌十郎は如淸の子であるが、無賴のため勘當されてゐる。小磯からこの話を聞くや、立身するのに正淸の手は賴まぬと二階に踏ん込み、大力を以て正淸と揉み合ふが、とど小磯が中を隔てて意見すると、翻然として互に力を協せ、加藤・小西と異國に名を揚げようと誓ふ。〔五段〕（口、洛東大佛御堂）三韓より凱旋の後久吉は春長父子の菩提のため盧遮那佛を建立し、その供養の日にこの度の三韓征伐を淨瑠璃に綴らせて演ぜしめる。（大切）劇中劇の操人形「男神功皇后」三段續。【解說】「壽福年代記大成」の享保四年の條に、「今年朝鮮人來朝九月四日大阪に着」とあるが本作はその噂を當て込んだものと思はれる。同年五月十五日より豐竹座で、紀海音作「神功皇后三韓責」を上演したのも、同樣の興行政策であらう。全體としては纏まつてゐないが、見せ場の多い賑やかな作である。明和四年十二月十四日より竹本座上場の「三日太平記」、安永五年四月三日より北堀江座興行の「三國無雙奴請狀」は共に本作の飜案。【參考】近松全集第十一卷解題藤井乙男○大近松全集第十五卷解說 木谷蓬吟 〔高野（正）〕

本調子（ほんでうし） 「三味線」「調子」を見よ。

本朝書籍目錄（ほんてうしよじやくもくろく）

書目 一卷【名稱】「日本書籍目錄」と題したものもある。又「仁和寺書籍目錄」「御室書籍目錄」とも呼ばれた。【著者・成立】左の諸說がある。（一）冷泉大納言爲富說（新井白石「同文通考」）。一

本の奧書に「右以二冷泉大納言爲富卿本一寫レ之以二淮后本一令二一校一者也　康安二年正月七日刑部侍郎光之」とあるのに據る。(二)清原業忠説（藤貞幹「好古小錄」）。「體源鈔」所引の一本の奧書に、「永享十一冬清大外記業忠依レ仰注二進之一」とあるのに據る。井上賴圀博士もこの説を支持した。(三)大外記中原氏説（中山信名「前後風土記概編辨」）。第二説を誤つたもの。(四)建治三年以後永仁二年以前成立説（山本信哉博士）。一本の奧書に、「此抄入道大納言實冬卿密々所レ借賜一之本也　永仁二年八月四日寫レ之　師名在判」（寛文十一年版本及び群書類從本は「永仁」を「永正」に誤る）とあり、且つ本書に書名の見える「和漢兼作集」には、「右衞門督實冬」と記され、實冬が右衞門督となつたのは建治三年であると云ふ點から推定したもの。前三説は何れも成立年代を足利時代としたのであるが、山本博士の説の如く、鎌倉時代に成立したものと見るべきである。

【諸本】永仁二年の奧書を備へたものと、康安二年の奧書を備へたものとの二系統に分つ事が出來るやうである。後者は後世の增補の痕が多く見られ、「日本書籍總目錄」と題せられるものは、この種類に屬するものに限るらしい。前者に屬する刊本としては、寛文十一年長尾平兵衞刊行の本及び群書類從本があり、後者に屬するものとしては、新成簣堂叢書本（昭和七年刊、新井白石書寫本の複製）がある。**【解説】**「日本國見在書目錄」（別項）が我が國に渡來した漢籍の目錄であるのに對して、本書は書名の示す通り、我が國で著作された圖書の目錄である。分類體にして書名を擧げ、著者名・卷册數等を記してゐるのであるが、その分類は次の通りである（本によつて多少の相違がある）。神事・帝紀・公事・政要・氏族・地理・類聚・字類・詩家・雜抄・和歌・和漢・管絃・醫書・陰陽・人々傳・官位・雜々・雜抄・假名である。但し和歌の部は、「勅撰以下別有目錄云々」として全く書名を擧げてゐない。本書は我が國で著作された圖書の目錄としては、その成立年代も古く、且つ廣範圍に亙つてよく集めて居つて尊重すべきものである。

【附記】諸本の中、卷末に「諸家名記」と題して七十餘部の記錄の書名を擧げたものがある。又「八雲御抄」一に「學書」として擧げられたものを、その儘附載してゐる本もあり、寛文十一年版本は、これに多少の增補を加へたものを「本朝書籍目錄外錄」として本文の後に附してゐる。藤貞幹の「國朝書目」（別項）は本書及びこの外錄を中心として編纂したものである。又「增補本朝書籍記」（觀阿居士、延寶三年成）と云ふものが寫本で傳へられてゐる。

【參考】本朝書籍目錄の著作年代に就て　山本信哉（史學雜誌二八ノ五）○日本書籍總目錄解説　蘇峰學人（新成簣堂叢書第五册）　〔岩淵〕

本朝神社考（ほんてうじんしやかう）　神道書　六卷

【著者】林羅山　**【解説】**本書は、羅山が「記」「紀」「舊事紀」「延喜式」「古語拾遺」その他種々の古書・舊記・諸社緣起等に基き、神社の研究を行つたもので、極めて有益の書である。羅山は朱子學の大家であるが、その思想は神儒一致説である。蓋し佛教は傳來當時烈しく排斥せられたが、神佛習合・本地垂迹（別項）の企てで、遂に隆盛を極むるに至つたのである。儒教は江戸時代前には、官吏又は僧侶の副業的に研究せられ、儒者として專門に儒教の發展に寄與せるものは、乏しかつたのである。然るに家康によつて羅山が登用せられ、以後儒者の勃興を見たが、その勢力は佛者に及ぶべくもない。そこで神佛習合と同樣に神儒一致を高調したのではないかと思はれる。本書もその趣意で出來てゐる。何れにしても神道研究の上に價値ある書である。　〔田中（義）〕

【參考】神道傳授　林羅山○羅山文集

本朝水滸傳（ほんてうすゐこでん）　讀本

【作者】建部綾足　**【名稱】**支那小説の「忠義水滸傳」の飜案の義で、「本朝水滸傳」といひ、また「忠義水滸傳」に於ける開手大尉洪信が、石碣を開いて百八の魔君を走らす條を吉野柘枝の傳説に撮合したので、一名を「芳野物語」ともいふ。**【成立・刊行】**明和十年正月、藤原加爾與の序がある。夙に二十五卷五十條を下稿したのであるが、その年始めて十卷二十條を出版し、安永二年發賣した。奧附に安永二年出の朱印がある。又後編近刻とある。改題本「芳野物語」の目錄に、後編卷之十一第二十一條より卷之二十五第五十條までの目次を揭げてゐるが、刊行されず稀に寫本で傳へられてゐる。又後編の末に三編の總目錄を附してゐるが、稿成らずして歿したといはれる。**【諸本】**明和十年刊行の繪入大本九册本と後刷の繪入大本三册本とがある。三册本は「芳野物語」と改題した。珍本全集（帝國文庫）所收。なほ曲亭馬琴が小津桂窓の藏本を以て寫させた後編十五卷が靜嘉堂文庫に藏されてゐる。**【題材】**「忠義水滸傳」を飜案するに、「懷風藻」「萬葉集」に見える柘枝傳説を結合し、味稻翁が柘枝仙女と契つて設けた百人の子が四方に散じて英雄となる。即ち宋江を象つて惠美押勝とし、高俅に擬するに道鏡を以てしてゐる。而して終に道祖王・清麿・豐成・泰澄等の豪傑が梁山伯に擬せる江州伊吹山に集まるといふ趣向である。

【梗槪】〔前編〕天武帝の御代に味稻の翁といふ者があつた。吉野川で拾つた桑の枝から生れた女と契り、女が翁にかの枝を百段に折れば、やがて百人の貴人・官人・庶人と生れ、終にはこの山に來る。それは我等が子だといふので、翁は枝を折つて川に流してやつた。その後高野天皇の御病が篤く百官思ひ患ふ時、太宰府の阿曾丸は、弓削道鏡の祈禱の驗あるを奏し、道鏡は迎へられてお側近くに奉仕し、太上天皇が崩御されるや、法皇の位を許され、政務を問はせられた。時に橘諸兄父子は北國に走り、藤原惠美押勝は近江三尾崎の城に籠り、太子道祖王・鹽燒王、それ〳〵押勝を賴みて近江に下られる。そこで、藤原倉麿・石村村主等は奏請して軍を近江に遣はしたが、道祖王は釣船に漁して押勝に心なきを見せ、追手の兵を引擧げさせ、三尾崎の城に入られる。押勝は盜み取つた太政官の印を以て東の軍兵を集め、道鏡を討つ計を運らす折柄、倉麿・村主の大軍に押し寄せられ、戰ひ敗れて道祖王と共に逃れたが、內舍人は豐丸・角丸二王の御身替りとして死んだ。然るに倉麿等は當の押勝を討たざるを慮り、城を燒き二王の御骸らしい燒死體を殘して落ち、また何人かの首を燒いて押勝とし、恩賞を受けた。併し押勝は豫て城の後の沼に用意して置いた浮橋から道祖王を奉じて伊吹山の白猪老翁を尋ねて行つた。それは幼時別れた兄の豐成で、その美しい娘が王の御側に仕へた。やがて豐成は押勝を大將として道鏡を討たうと考へ、押勝は先づ同志糾合のために、七人の兵に印を與へて諸國に廻らせ、自らは東國に下つた。然るにまた阿曾丸は宇佐八幡の御告げといつて御位を道鏡に讓られるやうにと奏したので、天皇

は和氣清麻呂を遣して神の敎を伺はれた。清麻呂は神勅を受け、歸途、巨勢金麻呂を訪れて妻子の上を賴み決心する所があつた。その齎した神の御告げを聞いた道鏡は激怒し、彼を流罪に處し、途で殺さうと計つたが、金麻呂の子金石に救はれ、なほも追手に圍まれたので、金麻呂が繪を以て死んだと欺き、紀伊の溫泉に隱れた。折しもその家の隣に軍書を講じて

道鏡を斥けんと白山に隱れてゐるのに會し、互に心を明かして白山に登つた。白山の窟は千人に餘る軍勢となつた。折しも法師が國の守大伴家持に兵糧の事を謀らうと出て行く。法師は音に聞えた泰澄であつた。彼は天下の氣を考へて白山の窟を開き籠つてゐたのであつた。時に家持は、狩に出でて手馴れた鷹を失ひ、泰澄にその在所を敎へられる。鷹は橘

蜘を尋ねて行つた。倭蜘は道祖王の馬飼の子で、今は遠江に勢力を振ひ、駿河附近の賊徒と與みして道祖王に仕へる事になつてゐた。然るに道鏡はかうした賊徒のことは一向氣にも留めず、ただ白山の賊が武器を用意し、清麻呂等を匿つてゐるらしいのを怖れ、大伴書持をして征伐させることになつた。併しその惡政に民草の上を憂慮され、仁慈をかけさせら

追放されて千島へ渡り、蝦夷の酋となり敎化に努め、一人生き殘つて外ケ濱一帶を征服してゐたのであつた。そこで玉衣が配される事になつたが、それは意外にもトビカラの妻であつた。彼は蝦夷を率ゐて押勝の味方となつた。又天智帝が葛城王と仰せられた頃、奧州に下られて元采女であつた女と契られ、男子を設けられたが、今、淺香王と稱して勢を振つ

は和氣淸麻呂を遣して神の敎を伺はれた。淸麻呂は神勅を受け、歸途、巨勢金麻呂を訪れて妻子の上を頼み決心する所があつた。その齎した神の御告げを聞いた道鏡は激怒し、彼を流罪に處し、途で殺さうと計つたが、金麻呂の子金石に救はれ、なほも追手に圍まれたので、金麻呂が繪を以て死んだと欺き、紀伊の溫泉に隱れた。折しもその家の隣に軍書を講じて渡世としてゐる者があつた。頻りに道鏡を討つ手だてを話し、淸麻呂の名をいふので、不審を抱き樣子を窺つてゐた。彼は鼻彥といふらしかつた。さて追手の守部等は、畫ける首を持ち歸つたので、重き刑に行はれようとしたが、金麻呂が術中に陷つたことが知れ、罪を許されて金麻呂を捕へ來れと命ぜられる。又淸麻呂の妻子は追放され、明日香の知邊を辿り迎ひに出てゐた金石等に導かれて紀伊に赴いた。金石等は熊野坂で山賊に君達を奪はれ、偶々金石は明日香大太刀に助けられて淸麻呂の隱家に到つた。大太刀は嘗て淸麻呂に罪を救はれた恩がある。即ち君達の行方を探ねて行き、又淸麻呂等は都の追手が迫つたとて、折から入り來る鼻彥實は押勝の家人道主口走の案内で伊吹山に行く。山賊は跡部武雄、同じく武荒とて嘗て淸麻呂が妻の家に仕へた者で、圖らずも押勝の家人忌部宿禰海道が君達に邂逅しての物語に驚いてその罪を詫びたのである。時に守部等が淸麻呂を捕へて都に上るといふ騷ぎ、跡部兄弟は輿を奪つてみると現はれたのは巨勢金石であつた。そこで互に仔細を語り、力を得て伊吹山に急いだ。こゝに越の國白山の麓に海邊鰹といふ劔道の達人があつた。實は押勝の家人和示部眞太刀で弟子を養ふこと五百人許り、恰も奈良麻呂卿が道鏡を斥けんと白山に隱れてゐるのに會し、互に心を明かして白山に登つた。白山の窟は千人に餘る軍勢となつた。折しも法師が國の守大伴家持に兵糧の事を謀らうと出て行く。法師は音に聞えた泰澄であつた。彼は天下の氣を考へて白山の窟を開き籠つてゐたのであつた。時に家持は、狩に出でて手馴れた鷹を失ひ、泰澄にその在所を敎へられる。鷹は橘諸兄の手にあつた。諸兄は泰澄の告げで白山の窟に糧食を送つたならば返さうといひ、家持は諾して鷹を受取つた。數日を經て眞太刀は守の館に禮に來て、世の騷がしい事を話してゐるうちに、眞太刀も志を同じうするを知り、密に語るところがあつた。さて紀伊の溫泉を發つた淸麻呂等は志摩の國手節の崎に着いた。一兩日の泊りに淸麻呂は神祥を夢みて妻子と邂逅し、遂に金麻呂・太太刀・武雄等と共に伊吹山に登り道祖王に謁した。こゝに武藏の神田部に富み榮えてゐた弓屋の俊雄といふものがあつた。韓臼の犬神といふ男に妾の世話を頼み、犬神は禮金を取り、人置の眞餉に分ち與へて都から來た花子を世話した。俊雄は花子を圍ひ、最初の夜金三百枚を與へ、次の夜千張の弓を贈ることを約した。その樣がどうも不審で、犬神もただの人ではないらしい。俊雄は眞餉と共に遂に訴へ出た。花子は不破内親王であつた。その夜鹽燒王も忍んでゐられた。併し役所に仕へてゐた押勝の家人高橋手力の知らせで、葛飾の方へ逃げ去つた。

〔後編〕手力は又味方の巨勢長谷が盜賊として引かれて來たのに會した。そこで表面を巧みに僞はり、高橋足柄と名乘らせて官を與へ、互に計畫して碓氷峠に落ちのび、足柄は諸國に味方を募るために旅立ち、手力は文石の倭蜘を訪れて行つた。倭蜘は道祖王の馬飼の子で、今は遠江に勢力を振ひ、駿河附近の賊徒と與みして道祖王に仕へる事になつてゐた。然るに道鏡はかうした賊徒のことは一向氣にも留めず、ただ白山の賊が武器を用意し、淸麻呂等を匿つてゐるらしいのを怖れ、大伴書持をして征伐させることになつた。併しその惡政に民草の上を憂慮され、仁慈をかけさせられてゐた太上天皇は、白山の籠人が天下のための軍なるを聞召され、密に書持を諭されたので、書持は覺悟を定め、敗戰すると共に自ら刄に伏した。これを知つた兄の家持はいたく無情を觀じて館を去り、立山の麓なる沓掛の翁の伜臘丸の許に隱棲したが、或る夜書持の靈に奧州外ケ濱の惠美押勝を援助すべきを告げられて下山した。こゝに奧州には金華山の邊りに鞍馬高神といひ、又人呼んで奇丸といふ奇術師がゐた。その術によつて押勝の味方をつくらうと努めてゐた。そこには、鹽燒王・不破内親王等が潛んでをられた。又外ケ濱に押勝は足丸といつて酒屋を營み、蝦夷に酒を送り手馴づけようとしてゐた。そこへ家持が來援したのである。丁度その頃蝦夷の司ボンデレトビカラは所領の千島が不獵で酒代に困り、なほ千島を救ふために外ケ濱に押寄せて掠奪を行つた。そこで足丸の軍兵は出でてこれと戰つたが、足丸は千島の半分を取り、トビカラを養子として都の女と結婚させる條件で和睦した。併しその結婚に窮し、不破内親王と侍女玉衣を迎へた。トビカラは内親王の威に打たれてしまひ、家持は事情を告げた。するとトビカラも眞意を打明けた。彼は高麗安多部の次子白主といふ者で、親は黃金を掘り出した功で上司になつたが、彼は僅かの咎で追放されて千島へ渡り、蝦夷の聟となり敎化に努め、一人生き殘つて外ケ濱一帶を征服してゐたのであつた。そこで玉衣が配される事になつたが、それは意外にもトビカラの妻であつた。彼は蝦夷を率ゐて押勝の味方となつた。又天智帝が葛城王と仰せられた頃、奧州に下られて元采女であつた女と契られ、男子を設けられたが、今、淺香王と稱して勢を振つてゐた。その娘山井姬が奇丸の奇術を喜び、何時か鹽燒王を慕はれたので、淺香王を味方にもと鹽燒王は姬と契られたが、誤られて不慮の死を遂げられ、姬も自殺した。これによつて淺香王は道祖王の味方となつた。さて豐前菊の高濱の海人男狹磯は宇佐八幡に詣で、一夜諸國の天狗が天下の形勢を論ずるのを聞いた。それは皆山祇の力によるといふのであるが、奧州に於ける官軍の動靜が知られた。その頃太宰府の阿曾丸は、葦城の驛の奸惡な縣主の娘を妻として色々の惡事をなし、家臣秦金明の諫めも聽かず、却つてその妻子を虐殺するといふ暴狀であつた。かゝる處へ遣唐使藤原淸河は安倍仲麿と別れ、偶々楊貴妃の叔父に助けられ、安祿山の亂を逃れた貴妃を伴つて九州に歸つたが、道鏡を憎んで名を能里曾と變へて松浦の里に住み、阿曾丸と近づきになつた。或る日こゝで迎へた妻の里へ案内されて行き、圖らずも小治田連珠名と邂逅した。珠名は熱田神宮の祝子であつたが、道鏡・阿曾丸に追はれて來たのである。そこで共に阿曾丸を討たうと謀り、また男狹磯實は押勝の家人忌部宿禰海道とも語らふことになつた。然るに阿曾丸は箱崎の濱に俳優屋を作り能里曾を座本として芝居をさせ、楊貴妃の舞を命じた。その夜、貴妃の舞に珠名・能里曾の

が出來るやうである。後者は後世の增補の痕が多く見られ、「日本書籍總目錄」と題せられるものは、この種類に屬するものに限るらしい。前者に屬する刊本としては、寬文十一年長尾平兵衞刊行の本及び群書類從本があり、後者に屬するものとしては、新成簣堂叢書本（昭和七年刊、新井白石書寫本の複製）がある。【解説】「日本國見在書目錄」（別項）が我が國に渡來した漢籍の目錄であるのに對して、本書は書名の示す通り、我が國で著作された圖書の目錄である。分類體にして書名を擧げ、著者名・卷册數等を記してゐるのであるが、その分類は次の通りである（本によつて多少の相違があ

本朝神社考（ほんてうじんじやかう） 神道書 六卷

【著者】林羅山【解説】本書は、羅山が「記」「紀」「舊事紀」「延喜式」「古語拾遺」その他種々の古書・舊記・諸社緣起等に基き、神社の研究を行つたもので、極めて有益の書である。羅山は朱子學の大家であるが、その思想は神儒一致説である。蓋し佛教は傳來當時烈しく排斥せられたが、神佛習合・本地垂迹（別項）の企てで、遂に隆盛を極むるに至つたのである。儒敎は江戶時代前には、官吏又は僧侶の副業的に研究せられ、儒者として專門に儒敎の發展に寄與せるものは、乏しかつたのである。然るに家康によつて羅山が登用せられ、以後

らずして歿したといはれる。【諸本】明和十年刊行の繪入大本九册本と後刷の繪入大本三册本とがある。三册本は「芳野物語」と改題した。珍本全集（帝國文庫）所收。なほ曲亭馬琴が小津桂窓の藏本を以て寫させた後編十五卷が靜嘉堂文庫に藏されてゐる。【題材】「忠義水滸傳」を飜案するに、「懷風藻」「萬葉集」に見える柘枝傳説を結合し、味稻翁が柘枝仙女と契つて設けた百人の子が四方に散じて英雄となる。即ち宋江を象つて惠美押勝とし、高俅に擬するに道鏡を以てしてゐる。而して終に道祖王・淸麿・豐成・泰澄等の豪傑が梁山伯に擬せる江州伊吹山に集まるといふ趣向である。

身替りとして死んだ。然るに倉膺等は當の
勝を討たざるを慮り、城を燒き二王の御骸ら
しい燒死體を殘して落ち、また何人かの首を
燒いて押勝とし、恩賞を受けた。併し押勝は
豫て城の後の沼に用意して置いた浮橋から道
祖王を奉じて伊吹山の白猪老翁を尋ねて行つ
た。それは幼時別れた兄の豐成で、その美し
い娘が王の御側に仕へた。やがて豐成は押勝
を大將として道鏡を討たうと考へ、押勝は先
づ同志糾合のために、七人の兵に印を與へて
諸國に廻らせ、自らは東國に下つた。然るに
また阿曾丸は宇佐八幡の御告げといつて御位
を道鏡に讓られるやうにと奏したので、天皇

妻は阿曾丸を狙つて共に殺され、能里曾も男狹磯も志を果さず、珠名は纔に貴妃を伴つて逃れ、到底今は阿曾丸の討たれぬことを知り、貴妃の望むまゝに熱田に伴つてその住家を定め、再び筑紫に來て清河等と力を合せ、志を遂げようと決心して熱田へ去つた。

【構想】支那の「水滸傳」を飜案して、我が國の有名な歷史的事件に擬し、惠美押勝・和氣清麻呂等が道鏡を討つて君側の奸を除き民を安んぜんとするといふのが大體の筋で、その同志が伊吹山に來り集るために、多くの葛藤を現はし、事件の複雜を見せてゐるが、複雜な趣向の變化の上には深い考慮が拂はれず、技巧的な小細工が多く見えて、雄大な結構を損するまでには至つてゐない。【史的地位】この書や「西山物語」(別項)が京都の書肆で出版されてゐるにも拘らず、曲亭馬琴が「江戸作者部類」に彼を讀本作者部の卷頭に錄したのは、畢竟「本朝水滸傳」が馬琴の「高尾船字文」(別項)、山東京傳の「忠臣水滸傳」(別項)等の先蹤をなし、殊に馬琴の大作「南總里見八犬傳」(別項)がこれに暗示を得てゐるからである。そして「水滸傳」を摸擬してその古轍を踏まず、別に一趣向を建てたのは當時の作者の及ばない所で、今の讀本の嚆矢だとも稱してゐる。實に讀本史上注意すべき作品である。これに啓發された馬琴は、天保四年「本朝水滸傳を讀む幷批評」の一卷を書いて、趣向の奇、構想の妙を稱してゐる。またそれに嚴しく論評してゐるやうに、雅文體を採り、古語を用ひたのはそも〳〵無理である。

【參考】本朝水滸傳を讀む幷批評曲亭馬琴(曲亭遺稿)○珍本全集解說 〔笹野〕

本朝醉菩提全傳（ほんてうすゐぼだいぜんでん） 讀本

八卷 上帙六册・下帙四册 【作者】山東京傳 【名稱】内題に（稻妻表紙後編）と冠してゐる。支那小說の「醉菩提傳」の飜案の義である。【刊行】文化六年【諸本】京傳傑作集(帝國文庫)・有朋堂文庫・讀本集(名著全集)・山東京傳集(近代日本文學大系)所收。【題材】假名草子「一休咄」(別項)「續一休咄」等の一休の俗傳を藉り、「醉菩提傳」に據つて作つたものである。上帙起筆の「如是我聞佛門廣大なり」から「是亦所謂戲作三昧なりとかや」までは、「醉菩提傳」の飜譯で、その「宣敎秀玉雙憐花」「濟顚裸治處女瘵」の二章を飜案してゐる。これが京傳の飜案とされ、自ら京傳譯とも署してゐる所以であるが、下帙は一休を中心に、「昔話稻妻表紙」(別項)の後を承け、假名草子の因果物等に據つて作つてゐる。

【梗概】寛政の頃、廻國の修行者飾磨の曾根松は山城愛宕郡六道の野に宿り、佐々木家の惡人蜘手の方、不破道犬一味の亡靈が此處に集つて、各々桂之助主從及び梅津嘉門等を滅さんと凝議するに會した。こゝに信濃の守護職望月顯廉の臣詫麻彦惣は侍女香晒と通じて主家を追はれ、香晒の實父山蛭洞九郎を賴つて大和二上嶽の麓に身を寄せたが、獵師洞九郎は惡心強く屢々春日山の鹿を擊つて奈良法師に捕へられたので、彦惣は所持の名器更科肩衝を賣つてその罪を購はんと、折柄病中に香晒を攝州に使せしめた。然るに香晒は歸途その金を賊胸毛の黑平に奪はれたので身を賣らうとし、黑平の妻岩芝に欺かれて墮胎しようとしたが、門說經に立つた一休和尙に金を惠まれて漸く父を救つた。間もなく香晒は男子を生んだが洞九郎は僞つてこれを攝州合邦が辻に捨て、偶々大金を拾つた。この金は京の郷士鴨川忠知の僕穗波垣右衞門が主命に依つて更科肩衝を求めに行く途中落したもので、これがため主家を追はれた。洞九郎は歸途二上嶽の山中で胸毛の黑平を殪して嘗て娘が奪はれた金を手に入れたが、熊に襲はれて岩穴に落ち遂に此處に餓死した。彦惣夫婦はその後堺に出で扇屋となつて一女小田井を擧げた。話變つて管領由利之助勝基の軍師となつた梅津嘉門は、その後妻此花を娶つて彦九・玉虫・乙星の一男二女を擧げた。當時一休和尙は山城岩倉山の麓に庵を結んで嘉門や忠知とは親交の間柄であつた。然るに勝基と濱名入道との確執が嵩じて應仁の亂となるや、嘉門は奇策縱橫大に濱名勢を惱ましたが、天運を觀じ遺孤を一休に託して遂に岩倉山に戰死した。此花は子供を連れて近江に遁れんとしたが、兄弟の賊有漏路・無漏路のために殺され、玉虫は奪はれ、乙星は谷に落ち、彦九は一休に救はれてその門に入つた。三年の後玉虫は安計呂山中の百魔山姥といふ人買の女の許に賣られてゐたが、病後虐待されて此處に死んだ。乙星はその後獵人に救はれて養はれたが、養父母の死後、また有漏路・無漏路に捉はれて此處に賣られ、死なんとする姉に會したが、後、旅人に買はれて行つた。山姥はかの岩芝で、遂に捕手に圍まれて逃れ、有漏路・無漏路も逐電した。一休の門に入つた彦九は長ずるに及び腕立を好んで破門されたが、浪花に出でて野晒悟助と名乘り、半月は出家の行をし、後半月は惡人を挫く俠客となつた。或る日堺の扇屋彦惣の妻と娘の難を救うて、惡漢鬼平次・蝶藏を懲した事から、その親分提婆仁三郎と爭ひ、遂に鬼平次・蝶藏を殺して自害しようとしたが、一休が現はれて彼等は悟助の仇有漏路・無漏路であることを告げられ、且つ悟助の志を感じて破門を許された。當時攝州住吉に住した一休は、又堺の傾城地獄の名聲を聞き、訪ね行つて數々の大德を現はし、遂にこれを大悟させたが、彼女は卽ち乙星の後身であつたので、後、彼女が病死する時悟助を伴うて兄妹を再會せしめた。さて穗波垣右衞門に養はれた彦惣の子は長じて詫助と稱し、堺に近い湊村に住んで貧しい中に父母に孝養を盡してゐたが、彦惣の娘小田井は彼に戀して結婚することになつた。これを知つた一休は彦惣方を訪ね、洞九郎に慘殺された犬の怨靈を小田井から祓つて、畜生道に墮ちんとした彼等を救ひ、且つ事情を明かにし、豫て取寄せた洞九郎の拐帶した金を垣右衞門と彦惣に分ち與へたので、垣右衞門はこれに依つて詫助と共に主家に歸つた。彦惣夫婦は出家し、小田井は別に聟を取つて榮えた。話變つて大和の佐々木家ではその後貞國・桂之助等相次いで病歿し、月若丸家を繼いで多聞之助と稱し、妻折琴姬を迎へて既に三十餘歲となり、執權名古屋山三郎その子小山三等に輔佐されてゐたが、伊勢の豪族雉子川國貫は豫てこれを攻めんと志し、偶々一子國景が折琴姬に戀慕し、姬を吉野に奪はんとして却つて守護の前司太郎に討たれたのを機會に兵を起し、上巳の宴の夜急に佐々木の館を攻めた。多聞之助・山三郎は、この難に死し、折琴姬は鹿藏の子同助に伴はれて落ち、前司太郎も僅に遁れた。小山三は父の遺命に依つて百蠻の圖を携へ、母八重垣を伴うて河內に遁れ、川止めに遭うて森屋村に滯在した。折柄界隈に出沒する狒々に襲はれて母子別々に山中に遁れ、八重垣は不破伴左

衞門の異母弟番作に殺され、小山三は母の臨終に來合せ、又狒々に襲はれたが、百蠻の圖の靈驗によつてこれを擊つた。その後彼は近くに住む酒賣亦六といふ乳母の子に遭うてその家に留まり、難症の頭痛を病んだ。亦六は專心看病に盡し、妙藥と聞いて一人の老婆から人の生首を買つてこれを祀つた。然るに亦六は三年前竹齋といふ醫師を誤つて殺し、その後故あつてその娘を妻としてゐたが、大晦日

傳の手法がよく窺はれる作品である。【影響】河竹默阿彌によつて歌舞伎「醉菩提悟道野晒」に脚色されてゐる。

【參考】近世物之本江戸作者部類○近代小說史 藤岡作太郎○讀本集解說 〔笹野〕

本朝世紀（ほんてうせいき） 歷史書【編者】藤原通憲【別名】寫本に「史官記」又は「外記日記」と題せられるものがある。【諸本】伴信友が四種の殘缺本を以て校合した本が最も善本で

飲食門(茶・茶の湯・有樂流以下四十一目)、卷二に生植門(西瓜・南瓜・蜀黍以下二十八目)、器用門(琴・三線・尺八以下五十七目)、卷三に能藝門(香道・蹴鞠・加茂沓以下五十一目)、卷四に歲時門(門松・萬歲・鳥追以下二十七目)、文房門(詩賦・聯句・和歌以下五十七目)、卷五に人事門(先生・藪醫・人參功能以下二十四目)雜事門(鹿島立・辻占・假山以下二十九目)を載す。享保十八年松永據德の序、その次に凡例、

と合册で一册となつて大正十二年に刊行せられた。底本は金澤文庫本で文永九年相州御本を以て、越後守北條實時が校了したものとある。相州御本とは何人のものか明かでないけれども、或は時宗か若しくはその近緣の人の藏本らしい。その後に大內記廣範の本にも校合したと實時は記してゐる。なほ寫本では、前記文永九年書寫の北條實時藏本十三軸が內閣文庫に藏されてをり、また同文庫には、外

れに暗示を得てゐるからである。そして「水滸傳」を換擬してその古轍を蹈まず、別に一趣向を建てたのは當時の作者の及ばない所で、今の讀本の嚆矢だとも稱してゐる。實に讀本史上注意すべき作品である。これに啓發された馬琴は、天保四年「本朝水滸傳を讀む幷批評」の一卷を書いて、趣向の奇、構想の妙を稱してゐる。またそれに嚴しく論評してゐるやうに、雅文體を採り、古語を用ひたのはそも〳〵無理である。

【參考】本朝水滸傳を讀む幷批評曲亭馬琴（曲亭遺稿）○珍本全集解說　〔笹野〕

本朝醉菩提全傳（ほんてうすゐぼだいぜんでん）　讀本

望月顯廉の臣詫麻彦惣は侍女香晒と通じて主家を追はれ、香晒の實父山蛭洞九郎を賴つて大和二上嶽の麓に身を寄せたが、獵師洞九郎は惡心強く屢々春日山の鹿を擊つて奈良法師に捕へられたので、彦惣は所持の名器更科肩衝を賣つてその罪を購はんと、折柄病中に香晒を攝州に使せしめた。然るに香晒は歸途その金を賊胸毛の黒平に奪はれたので身を賣らうとし、黒平の妻岩芝に欺かれて墮胎しようとしたが、門說經に立つた一休和尙に金を惠まれて漸く父を救つた。間もなく香晒は男子を生んだが洞九郎は僞つてこれを攝州合邦が辻に捨て、偶々大金を拾つた。この金は京の

てゐたが、病後虐待されて此處に死んだ。乙星はその後獵人に救はれて養はれたが、養父母の死後、また有漏路・無漏路に捉はれて此處に賣られ、死なんとする姉に會したが、後、旅人に買はれて行つた。山姥はかの岩芝で、遂に捕手に圍まれて逃れ、有漏路・無漏路も遂電した。一休の門に入つた彦九は長ずるに及び腕立を好んで破門されたが、浪花に出でて野晒悟助と名乘り、半月は出家の行をし、後半月は惡人を挫く俠客となつた。或る日堺の扇屋彦惣の妻と娘の難を救うて、惡漢鬼平次・蝶藏を懲した事から、その親分提婆仁三郎と爭ひ、遂に鬼平次・蝶藏を殺して自害しようとし

を迎へて既に三十餘歲となり、執權名古屋山三郎その子小山三等に輔佐されてゐたが、伊勢の豪族雉子川國貫は豫てこれを攻めんと志し、偶々一子國景が折琴姬に戀慕し、姬を吉野に奪はんとして却つて守護の前司太郎に討たれたのを機會に兵を起し、上巳の宴の夜急に佐々木の館を攻めた。多聞之助・山三郎は、この難に死し、折琴姬は鹿藏の子同助に伴はれて落ち、前司太郎も僅に遁れた。小山三は父の遺命に依つて百蟹の圖を携へ、母八重垣を伴うて河內に遁れ、川止めに遭うて森屋村に滯在した。折柄界隈に出沒する狒々に襲はれて母子別々に山中に遁れ、八重垣は不破伴左

衛門の異母弟番作に殺され、小山三は母の臨終に來合せ、又狒々に襲はれたが、百蟹の圖の靈驗によつてこれを擊つた。その後彼は近くに住む酒賣亦六といふ乳母の子に遭うてその家に留まり、難症の頭痛を病んだ。亦六は專心看病に盡し、妙藥と聞いて一人の老婆から人の生首を買つてこれを祀つた。然るに亦六は三年前竹齋といふ醫師を誤つて殺し、その後故あつてその娘を妻としてゐたが、大晦日の夜偶々その罪を感じて自殺しようとした。すると祀られてゐた生首は聲を出して止め、又首を賣つた老婆は入つて來て自殺した。生首は嘗て竹齋に養はれ、惡業の果て自殺した提婆仁三郎、老婆は實は岩芝で提婆の母であつた。當時生駒山の麓に留まつてゐた一休は偶々此處に來り、岩芝・提婆に引導を渡し、忽ち髑髏となつた提婆の首を杖に懸けて折柄の元日の朝を飄然と去つた。小山三の病はこれに依つて癒え、亦六等は幸福に暮した。

【構想】「稻妻表紙」の後編として書いたものであるが、筋の統一を缺いてゐる。それは餘りに趣向に凝つて、淨瑠璃・歌舞伎の技巧を用ひることが多いためであつた。從つて場面の變化、部分的の興味はあるが、全體としての筋・結構が甚だ散漫であつた。勸懲を旨とし、興味を狙ふ讀本に於て、最も京傳がその特色とした趣向に凝つて、その弊に陷つたものである。その凝り方は又文章を七五調に練り、挿畫や體裁等の考案にも現はれてゐるが、却つてそれが爲めに出づべき後編を繼がしめなかつた。「江戸作者部類」には、思ふほどの世評もなく、畫工や作者に對する費用が多くて板元が損失したと言つてゐる。構想の技倆に乏しく、ただ趣味で纏め上げたといふ點で、京傳の手法がよく窺はれる作品である。【影響】河竹默阿彌によつて歌舞伎「醉菩提悟道野晒」に脚色されてゐる。

【參考】近世物之本江戸作者部類○近代小說史（藤岡作太郎）○讀本集解說　〔笹野〕

本朝世紀（ほんてうせいき）　歷史書

【編者】藤原通憲【別名】寫本に「史官記」又は「外記日記」と題せられるものがある。【諸本】伴信友が四種の殘缺本を以て校合した本が最も善本であり、國史大系にこれを收めてゐる。【解說】本書は「玉葉和歌集」「桃花蘂葉」（各別項）等によれば、寬平一代の國史といはれてゐるが、「通憲入道藏書目錄」によれば、承平・天慶・天養・久安等の部分もあつた由が見える。蓋し編者通憲は、六國史（別項）に次ぐ國史を編せんとし、新國史を材料とし、その他の舊記を加へて先づ寬平一代を完成し、醍醐天皇以下はそれぞれの材料を集めたが、未だ修撰を終らぬ中に世を去つたものと解すべきであらう。現在は寬平の部分は一二の佚文を除くの外は亡佚し、未定稿の部分が朱雀天皇の承平五年五月より近衞天皇の仁平三年閏十二月に至る間斷續しながら殘つてゐる。材料は「外記日記」を主とし、傍ら朝臣の日記・系圖等を參取してゐる。平安朝後期の史料として、殊に朝政の委曲を示すものとして甚だ重要である。

【參考】本朝世紀考（伴信友）○本朝世紀考　星野恒（史學雜誌一ノ四）　〔坂本〕

本朝世事談綺（ほんてうせじだんき）　隨筆　五卷

【著者】菊岡沾涼【別名】近代世事談【刊行】享保十九年【解說】主として江戸時代民間常用の品物の起原を列擧したもので、門類を立てて一々品名を示し略說を施してある。卷一に衣服門（天鵞絨・金襴・木綿以下三十七目）、飮食門（茶・茶の湯・有樂流以下四十一目）、卷二に生植門（西瓜・南瓜・蜀黍以下二十八目）、器用門（琴・三線・尺八以下五十七目）、卷三に能藝門（香道・蹴鞠・加茂沓以下五十一目）、卷四に歲時門（門松・萬歲・鳥追以下二十七目）、文房門（詩賦・聯句・和歌以下五十七目）、卷五に人事門（先生・藪醫・人參功能以下二十四目）雜事門（鹿島立・辻占・假山以下二十九目）を載す。享保十八年松永據德の序、その次に凡例、卷尾に著者の跋がある。本文中に揷圖數面を加へてゐる。　〔和田〕

本朝續文粹（ほんてうぞくもんずゐ）　漢文集　十三卷

【撰者】未詳。（一）「本朝書籍目錄」には「本朝文粹」と並べて「續文粹十四卷藤原季綱撰」とある。普通にはこの說が用ひられてゐる。市河寬齋の「日本詩紀」もこの說を襲用。（二）林羅山の「日本書籍考」及び林春齋の「本朝一人一首」卷六の季綱の項には、續文粹編纂の事に全く言及してゐない。岡田正之博士の「日本漢文學史」にも亦季綱撰を疑つてある。やはり撰者未詳とすべきであらう。【名稱】「本朝文粹」の續編の意。一般には「續本朝文粹」と稱せられてゐる。【成立】少くとも崇德帝の保延六年以後である。明言は出來ないが近衞帝頃のものであらうか。而も未定稿であるかも知れない。作者の姓名の記しやうも一定されてゐない。例へば大江匡房を卷首には江大府卿、次には學生江匡房、從二位下權中納言兼都督大江朝臣、江都督など連續して出てゐるが如きはそれである。また誤字も少くない。【諸本】（一）菅家本十四卷（七册）。明治二十九年五月、菅原德長刊。木活字を以て五十部刊行したものである。菅家原本とし、聖華房梓となつてゐる。（二）國書刊行會本。「本朝文粹」と合册で一册となつて大正十二年に刊行せられた。底本は金澤文庫本で文永九年相州御本を以て、越後守北條實時が校了したものとある。相州御本とは何人のものか明かでないけれども、或は時宗か若しくはその近緣の人の藏本らしい。その後に大內記廣範の本にも校合したと實時は記してゐる。なほ寫本では、前記文永九年書寫の北條實時藏本十三軸が內閣文庫に藏されてをり、また同文庫には、外に寫本六部がある。その他神宮文庫・彰考館に各々二部、圖書寮に四部存してゐる。

【內容】內容に就いて全十四卷とする橋見林の說があるが信じ難い。その內容は、

卷一、賦・雜詩　卷二、勅答・位記・勘文
卷三、策　卷四、表上
卷五、表下・狀　卷六、奏狀上
卷七、書狀・施入狀　卷八、序上
卷九、詩序中　卷十、詩序下・和歌序
卷十一、詞・讚論・銘・記・牒・都狀・定文
卷十二、祭文・呪願・表白・願文上
卷十三、願文下・諷誦文

卷六に奏狀上とあつて奏狀下の見えないのは今本に誤脫の存するためであらう。以上文章二百二十九篇と詩四首より成り、時代は後一條帝の代から崇德帝に亙る約百二十年間の作品となる。又作者を見れば、卷首に三十八人の略傳を掲げてゐるが、その他合して四十餘人に及ぶ。その中、藤原敦光の四十八篇、大江匡房の四十篇、藤原明衡の三十篇、藤原敦基の十三篇、藤原實範の九篇、惟宗孝言の七篇等は多い部である。他は各々一二篇に止まつてゐる。これ等の文の種類を見れば、詩序の五十一篇、和歌序の十八篇を最とする。これに續いては辭表の類が二十八篇、辭狀の類は

十五篇、策問や對策は十二篇ある。その他追善・表白・願文の如きものは、二十七篇に及んで當時の信仰界の事情を反映してゐる。文章としては文飾に專念して内容の見るべきものは少い。卽ち質にも量にも「本朝文粹」に遙かに劣るものである。【價値】「本朝文粹」に比して、質量共に遙かに劣つてゐるけれども、當時の文がこの書によつて後世に保存せられた點は最も感謝すべき點であり、本書の價値も亦、主としてこゝに存在する。その他當時の思想界、就中宗敎界や信仰の傾向を知る點にも參考すべき點が少くない。これ等の研究は將來に期待すべきで、今日では何等見るべき研究はない。

【附記】撰者に擬せられてゐる季綱は、大學頭文章博士藤原實範の子で、傳は詳かでないが、三河・備前・越前等の守を經て、大學頭・右衞門權佐等に任ぜられた。

本朝智惠鑑（ほんてうちゑかゞみ） 浮世草子 五卷 【作者】北條團水とされてゐるが疑はしい。【刊行】正德三年、京都江戸出雲寺。【解説】卷一に五話、卷二に六話、卷三に六話、卷四に八話、卷五に七話を收めてゐるが、内容は所謂浮世草子風のものでなく、阿部仲麿・吉備大臣・小野篁・聖德太子・菅丞相・弘法大師・傳敎大師・賴朝・信長・秀吉等々の逸事、その他諸種の奇譚を集めたもので、漢土故事の引用も尠くなく、あまり興味深いものとは言へない。寶永六年の「洛陽滑稽堂のぬし團粹和南」の序文があり、その次に「團粹子存命の時此の書を綴つて篋底に藏し、未だ梓工を許さず。今之を得て刊行せしむる者也」（原漢文）とあるが、これを直ちに信ずるは如何かと思はれる。藤井紫影博士も「本朝智惠鑑・武道張合大鑑の二書、共に團水の序文あれども、文體正月揃に酷似し、儒佛の引事いたづらに多きに徵すれば、是も東山僧白眼居士の作にあらずやと疑はる」（江戸文學研究所收「元祿時代の京阪小説家」）と言はれてゐる。〔增田〕

本朝長恨歌（ほんてうちやうこんか） 「淺間嶽面影草紙」を見よ。

本朝通鑑（ほんてうつがん） 歷史書 正編四十卷・續編二百三十卷・前編三卷 【著者】正編は林道春（羅山）の撰、續編・前編は林春齋（鵞峯）の撰に係る。【名義】朱子の「通鑑綱目」（別項）に倣つたから、かく名づけたのである。【解説】神代から後陽成天皇の慶長十五年に至るまで漢文で書いた史籍。寬文十年庚戌林春齋の序に「正保年中・先大君大猷公、萬機の暇、儒臣侍讀民部卿林道春に命じて、日本紀以來の國史を參考して、繁を刪り要を取り闕を補ひ、且つ宇多一朝を加へ、纂集して四十卷となし、本朝編年錄と號し、久世大和守源廣之に就きてこれを獻呈す。而して將に醍醐以來を輯せんとす。然れども正史の據り證すべきなく、遺書私に求め難きを以ての故に、姑く筆を閣して鈞命の再び降るを待つ。不幸にして國喪に遭ふ。加旃（しかのみならず）、獻ずる所の四十卷、丁酉の災に罹る。既にして其の身も亦歿しぬ。然れども幸に草本の僕の家に在るあり。寬文甲辰の秋に逮び、今君幕下、僕に命じて續編を修めしむ。而して先人の編する所を併せ、名を本朝通鑑と賜ふ。僕抃躍に堪へず、卽ち草本を取り、校勘數遍魯魚を訂正し、新に訓點を加へ、續編と共に謹で之を獻上す云云」とある。文辭の巧拙、採錄の精粗は議すべきところが多い。併し「大日本史」の如く、事實を論定せず、疑はしきもの及び編者の考案に係るものは、註文としたり、一字低書したりして、妄に臆斷を加へず、且つ當時蒐集の書册・文書の後世散逸したものが、まゝこの書に依つて存することを得たのは偉とするに足る。世に幕府が、この書を刊行しようとした時、德川光圀がこれを見、「日本始祖吳泰伯之胤也」とあるを責めて改訂を促したので、幕府はその梓行を停めたと傳へられてゐるが、幕府進獻の本にはこの記事見えず、且つ光圀の話の根據も明かでない。恐らくは誤傳であらう。

【參考】本朝通鑑考（史學雜誌） 〔佐久〕

本朝藤蔭比事（ほんてうとういんひじ） 浮世草子 七册 【作者】未詳【刊行】未詳【諸本】近世文藝叢書第五所收。【解説】「日本桃蔭比事」と同本かといふ（日本桃蔭比事未見）。西鶴の「本朝櫻蔭比事」（別項）に倣つたものである。卷一第一話の首に、「倭國の櫻に事を比べしより、それに似たる卷々を閱すれば、猶勝れたる事の漏たるを本意なく思ひ、古き翁の物語、松が枝の常盤にかゝる藤なみの宮、こき陰の品々を聞度ごとに、忘れもやせんとあやしき筆に書とめぬ」とあるのは眞であらう。「櫻蔭比事」と同じく訴訟の上に現はれた人生の樣々を書いたものであるが、その訴訟の裁斷は、現代の法律裁判と違つて、道德上の常識批判といふべきものであるから、そこに文學の題材としては却つて興味を覺えるものがある。中には眞面目な裁判と思ひ難いものもある。例へば、井戸屋の寡婦の訴に、夫が某家の井戸に入つて仕事中、井戸に埋れて死んだのに、某家では給料も拂はないから、それに對して葬式料を出すやうに命ぜられたいといふのであるが、それを裁いて、仕事の完了しないのであるから給料は請求し難い。就いては某家は法華宗、汝は淨土宗といふから、これから每日某家の井戸に行つて念佛を申せといつた。寡婦はこの指圖に從ひ、緣類と共に每日某家に行つて念佛するので、某家では迷惑がつて八貫文出してやめさせたといふが如きこれである。又中には先行の書と材の重複したものもある。卷一「不審を肩に知る木割の木工平」は都の錦が「御前御伽婢子」（別項）卷二の第二話と、卷二の「身の上知らぬ五助が呼聲」は、同書卷二の第一話と、卷三の「隱家を知る道角が耳」は、西鶴が「本朝櫻蔭比事」卷四の「大事を聞出す琵琶の音」と同材であるなど、これである。各章、首めに訴狀を揭げ、次にその裁判を記してある。この形式皆一樣である。〔藤村〕

本朝遯史（ほんてうとんし） 傳説 二卷二册 【著者】林靖【成立】萬治三年（自序）【刊行】寬文四年【解説】我が國上古より當時に至る迄の隱遁者の小傳を集めたもので、民黑人・藤原麻呂・猿丸・惟良春道以下、小倉居士・平兼載・肖柏・善住まで、總て五十一人を收めてゐる。すべて漢文で記し、各々末に賛を附してゐる。「扶桑隱逸傳」（別項）、「續扶桑隱逸傳」等と同種類の書である。所收人名を擧げておく。

〔卷上〕民黑人・藤原麻呂・猿丸・惟良春道・大中臣淵魚・藤原關雄・藤原春津・惟喬親王・白箸翁・嵯峨隱君子・喜撰・大伴黑主・鬮笥翁・南山白頭翁・南山亡名處士・淸原深養父・蟬丸・源兼明・藤原高光・野人若愚・藤原爲時・橘正通。〔卷下〕源顯基・大瀨近宗・藤原周光・佐藤西行・增叟・池田樵夫・武野老翁・葛城山男子・齋藤時頼・平康頼・鴨長明・佐々木高綱・下河邊行秀・北條時村・丹後國士・藤原藤房・吉田兼好・朴翁・紀俊長・紀行文・美德隱君・洛市隱人・福可老人・覺雲・板坂宗德・小倉居士・平兼載・肖柏・善住。〔增田〕

本朝廿四孝（ほんてうにじふしかう） 淨瑠璃 五段 時代物 【作者】近松半二を主として、三好松洛・竹田因幡・竹田小出・竹田平七・竹本三郎兵衞の連名。【角書】（武田信玄長尾謙信）【興行】明和三年正月十四日初日、竹本座【諸本】七行本・十行本。淨瑠璃名作集（帝國文庫）・淨瑠璃名作集上卷（有朋堂文庫）・淨瑠璃名作集下卷（日本名著全集）・名作淨瑠璃集下卷（近代日本文學大系）等所收。【題材】武田上杉兩家の爭ひを諱と

太夫
竹本筑後掾
竹田因幡掾

の方を奪ひ去る。將軍暗殺の嫌疑を解くため、信玄・謙信は曲者詮議に三ケ年の暇を乞ひ、失敗に終れば各々その一子勝頼・景勝の首を討たうと誓ひ、謙信は鐵砲を預つて歸る。直江山城と腰元八橋とは勘當される。【二段】（下

お百度詣りに來る。無頼漢横藏は長尾の家來を殺すが、景勝は思ふ仔細あつてこれを宥す。横藏の持ち上げた力石の下から異形の老人が現はれて蓑を與へ、「七重八重花は咲けども」の道灌の歌を誦し、再會を約して別れる。（信玄館）三年を經ても、なほ將軍暗殺の犯人が不明なので、村上義淸は勝頼の首受取に乘込む。信玄の室常磐

手に入れる（塲目爭ひの段）。（勘助住家）山本勘助の二人の遺兒兄横藏は横道者であるが弟の慈悲藏は孝心が厚い。弟夫妻は一子を捨てて兄の子次郎吉を養育してゐるが、次郎吉實は賤の方の腹に宿つた將軍の遺兒松壽君で、室町御所から賤の方を奪つた曲者は横藏であり、夙に武田信玄に仕へる身であつた。慈悲藏も亦長尾家の臣直江山城で、主君景勝の身代りに横藏を立てようとするが、横藏は自ら

卷一に五話、卷二に六話、卷三に六話、卷四に八話、卷五に七話を收めてゐるが、內容は所謂浮世草子風のものでなく、阿部仲麿・吉備大臣・小野篁・聖德太子・菅丞相・弘法大師・傳敎大師・賴朝・信長・秀吉等々の逸事、その他諸種の奇譚を集めたもので、漢土故事の引用も尠くなく、あまり興味深いものとは言へない。寶永六年の「洛陽滑稽堂のぬし團粹和南」の序文があり、その次に「團粹子存命の時此の書を綴つて篋底に藏し、未だ梓工を許さず。今之を得て刊行せしむる者也」（原漢文）とあるが、これを直ちに信ずるは如何かと思はれる。藤井紫影博士も「本朝智惠鑑・武道張合大鑑の二

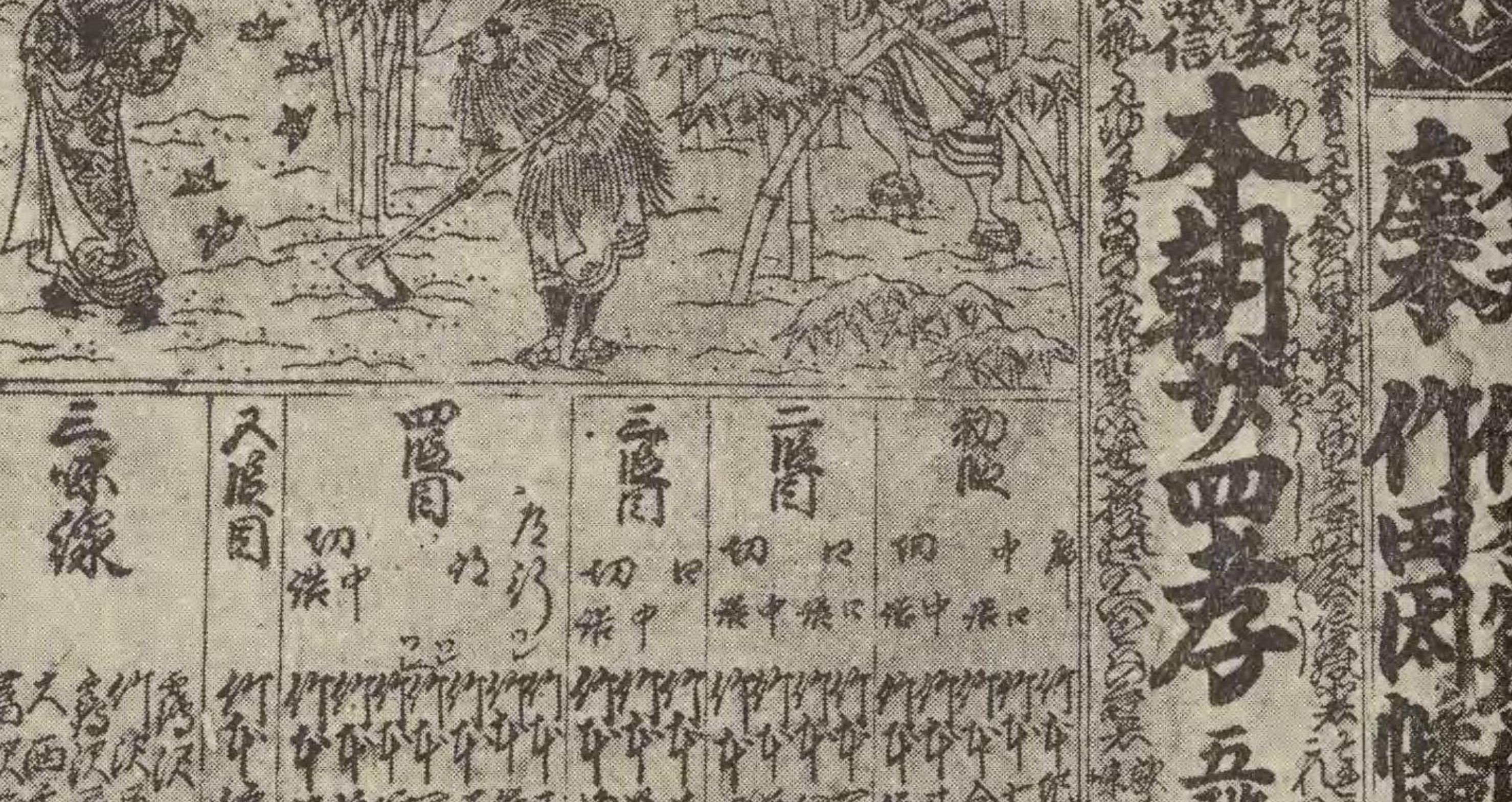
私に求め難きを以ての故に、姑く筆を閣して鈞命の再び降るを待つ。不幸にして國喪に遭ふ。加旃（しかのみならず）、獻ずる所の四十卷、丁酉の災に罹る。既にして其の身も亦歿しぬ。然れども幸に草本の僕の家に在るあり。寛文甲辰の秋に逮び、今君幕下、僕に命じて續編を修めしむ。而して先人の編する所を併せ、名を本朝通鑑と賜ふ。僕抃躍に堪へず、卽ち草本を取り、校勘數遍魯魚を訂正し、新に訓點を加へ、續編と共に謹で之を獻上す云云」とある。文辭の巧拙、採錄の精粗は議すべきところが多い。併し「大日本史」の如く、事實を論定せず、疑はしきもの及び編者の考案に係るものは、註

書とめぬ」とあるのは眞であらう。「櫻蔭比事」と同じく訴訟の上に現はれた人生の樣々を書いたものであるが、その訴訟の裁斷は、現代の法律裁判と違つて、道德上の常識批判といふべきものであるから、そこに文學の題材としては却つて興味を覺えるものがある。中には眞面目な裁判と思ひ難いものもある。例へば、井戸屋の寡婦の訴に、夫が某家の井戸に入つて仕事中、井戸に埋れて死んだのに、某家では給料も拂はないから、それに對して葬式料を出すやうに命ぜられたいといふのであるが、それを裁いて、仕事の完了しないのであるから給料は請求し難い。就いては某家は

「扶桑隱逸傳」（別項）、「續扶桑隱逸傳」等と同種類の書である。所收人名を擧げておく。

〔卷上〕民黑人・藤原麻呂・猿丸・惟良春道・大中臣淵魚・藤原關雄・藤原春津・惟喬親王・白箸翁・嵯峨隱君子・喜撰・大伴黑主・[illegible]翁・南山白頭翁・南山亡名處士・淸原深養父・蟬丸・源兼明・藤原高光・野人若愚・藤原篤時・橘正通。〔卷下〕源顯基・大瀨近宗・藤原周光・佐藤西行・增叟・池田樵夫・武野老翁・葛城山男子・齋藤時賴・平康賴・鴨長明・佐々木高綱・下河邊行秀・北條時村・丹後國士・藤原藤房・吉田兼好・朴翁・紀俊長・紀行文・美德隱君・洛市隱人・遁可老人・宵雲・板坂宗德・小倉居士・平[illegible]・自柏・[illegible]住。〔增田〕

本朝廿四孝（ほんてうにじふしかう） 淨瑠璃 五段 時代物 【作者】近松半二を主として、三好松洛・竹田因幡・竹田小出・竹田平七・竹本三郎兵衞の連名。【角書】（武田信玄長尾謙信）【興行】明和三年正月十四日初日、竹本座【諸本】七行本・十行本。淨瑠璃名作集（帝國文庫）・淨瑠璃名作集上卷（有朋堂文庫）・淨瑠璃名作集下卷（日本名著全集）・名作淨瑠璃集下卷（近代日本文學大系）等所收。【題材】武田上杉兩家の爭ひを緯とし、上杉の息女八重垣姫と武田の一子勝賴との情事、兩家の忠臣直江山城守・山本勘助の活躍等を經として、背後に終始覆面の曲者齋藤道三を躍らせたもの。近松の「信州川中島合戰」（別項）や櫻井賴母等の「三軍桔梗原」や淺田一鳥等の「甲斐源氏櫻軍配」等の作意をも奪つてゐる。題名の廿四孝は、本曲第三段の切に王祥・孟宗・郭巨の故事を換骨奪胎してゐる故である。



本朝廿四孝（初演繪番附）

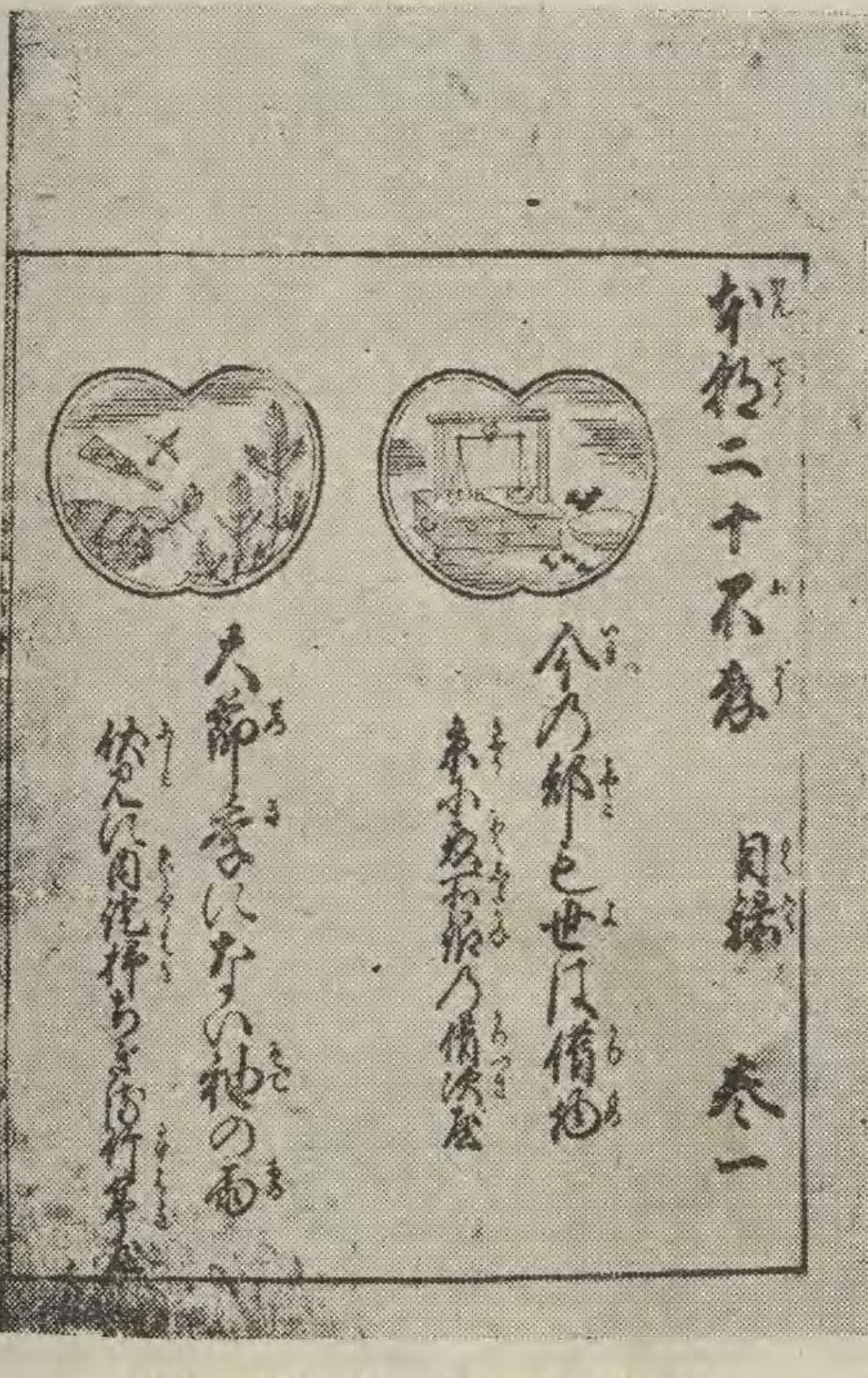
【梗概】〔一段〕（室町御所）武田家の寶諏訪法性の兜を上杉家が借りて返却せぬので、兩家は不和となつてゐるが、足利將軍義晴、北の方手弱女御前のとりなしで、兩家和解のため上杉の息女八重垣姫と武田勝賴との緣組が定められる。（誓願寺）將軍義晴の愛妾賤の方が安產を祈りのために參詣、直江山城と腰元八橋との不義が村上義淸に見顯されるが賤の方の情で事なきを得る。（室町御所奥殿）賤の方に戀着せる北條氏時は女を奪ひ且つ甲越兩國を離間せしめんと村上義淸と共に密に策を練つてゐる。賤の方は正室手弱女御前への義理立てから僞つて直江に言ひ寄り、不義者となつて斬られようと計るが手弱女に見破られる。浪人井上新左衞門と名乘る者鐵砲を獻上に來て將軍義晴を弑する。騒ぎに紛れて曲者が賤の方を奪ひ去る。將軍暗殺の嫌疑を解くため、信玄・謙信は曲者詮議に三ケ年の暇を乞ひ、失敗に終れば各々その一子勝賴・景勝の首を討たうと誓ひ、謙信は鐵砲を預つて歸る。直江山城と腰元八橋とは勘當される。〔二段〕（下諏訪明神社頭）車遣ひの蓑作が、言ひ傳へのある社前の力石に腰かけるので仲間のために仕置されようとするのを、武田の奥家老板垣兵部に助けられて連れ歸られる。腰元濡衣がお百度詣りに來る。無賴漢橫藏は長尾の家來を殺すが、景勝は思ふ仔細あつてこれを宥す。橫藏の持ち上げた力石の下から異形の老人が現はれて蓑を與へ、「七重八重花は咲けども」の道灌の歌を誦し、再會を約して別れる。（信玄館）三年を經ても、なほ將軍暗殺の犯人が不明なので、村上義淸は勝賴の首受取に乘込む。信玄の室常磐井御前は盲目の勝賴とその愛人濡衣とを逃がさうとして村上に見破られ勝賴は自刃する。家老兵部は勝賴に生寫しの蓑作を身代りに連れて歸るが事既に遲いのを知り、憤つて蓑作を斬らうとし、却つて信玄に刺される。兵部は逆心があり、己が子と勝賴とを取替へ、眞の勝賴を蓑作として信濃に遣はしてゐたのを信玄は知つてゐたのである。勝賴の蓑作は、その儘身分を僞り、濡衣と共に法性の兜の詮議に旅立つ。〔三段〕（桔梗ヶ原）武田・長尾の境目爭ひから、高坂彈正の妻唐織と越名彈正の妻入江が論爭する。筑摩の里の慈悲藏は老母への孝養のためにその子を捨てるが、通り合せに高坂と越名とは山本勘助と認めた捨兒の下げ札を見て共にこれを拾はうと爭ふ。結局兩人の妻が乳をふくませ吸うた方が拾はうと定めて高坂夫妻がこれを手に入れる（境目爭ひの段）。（勘助住家）山本勘助の二人の遺兒兄橫藏は橫道者であるが弟の慈悲藏は孝心が厚い。弟夫妻は一子を捨てて兄の子次郎吉を養育してゐるが、次郎吉實は賤の方の腹に宿つた將軍の遺兒松壽君で、室町御所から賤の方を奪つた曲者は橫藏であり、夙に武田信玄に仕へる身であつた。慈悲藏も亦長尾家の臣直江山城で、主君景勝の身代りに橫藏を立てようとするが、橫藏は自ら片眼を刺し、容貌を變じてこれを拒み、兄弟は互に敵味方に分れる（景勝下駄の段・勘助住家の段）。〔四段〕（道行似合の女夫丸）濡衣と蓑作とは、藥賣に窶して信濃へ道行。（和田山別墅）北條氏時の別墅で下部どもが百物語をしてゐる所へ、村上義淸が狐狩から歸つて來て、高坂・越名の兩彈正を殺し、橫戀慕してゐた八橋を手に入れるが、これは狐に化されて見た幻影であつた。（謙信館）謙信は、足利の後室手弱女御前と幼君とを館に招じ守護してゐるが、一子景勝の首を討たねばならぬ時となるので、花守の關兵衞に預りの鐵砲を渡して犯人を詮議せしめる（鐵砲渡し）。息女八重垣姫は十種香を焚き亡き許婚勝賴の繪像に回向し、花守關兵衞の娘で新に腰元に入つた濡衣も亦亡き夫蓑作の菩提を弔うてゐる。菊作りとなつて入り込み、侍に取立てられた蓑作實は眞の勝賴の姿を見て、八重垣姫は濡衣に取り持ちを賴むので、諏訪法性の兜を盜み出すのを條件に濡衣はこれを承諾し、蓑作實は勝賴なる事を明かす。總てを見拔いた謙信は、蓑作を鹽尻へ使者に立て跡から討手を向ける。姫は勝賴の危急を救はんと法性の兜に祈ると、狐火が燃え靈狐の力が姫に乘り移る（十種香の段・狐火の段）。關兵衞は手弱女御前を射殺する

が、濡衣が身代りに立ち、景勝、勝賴・勘助に見破られ太田道灌の後裔美濃の齋藤道三と本名を明かす。將軍を弑したのも勘助に蓑を與へたのも彼であつた。遂に謙信のために白羽の矢を射られ北條の小田原城を陷いれる術策を敎へて死ぬ。法性の兜は甲斐に戾り、勝賴と八重垣姬とは、結婚する事となる。〔五段〕（戰場）信玄と謙信の一騎討。兩家の確執は、北條・村上を亡ぼすための謀であると知つた勘助は兩將の鬪ひを止め、生捕つた氏時・義淸を引出し、景勝・勝賴・兩彈正等と共にこれを斬る。

【解說】脚色上、前述の如き先行諸作から多くを得てをり、就中近松の「信州川中島合戰」に據る所が多く、例へば武田・上杉兩家の嗣子息女の戀愛關係や、山本勘助と直江山城守との兄弟の關係など、構成上の骨格となるべき人的關係、或は勘助の母の性格・行爲などがそれである。と共に又この時期の淨瑠璃の特性たる裏に裏を設ける煩雜な脚色偏重の弊を示してをり、三ノ切・勘助住家の段はその甚だしいものである。【影響】本曲は直ちに歌舞伎にも移され、大阪では明和三年五月中座（三五郎の慈悲藏、雛助の八重垣姬、大五郎の橫藏、吉右衞門の勝賴、小六の勘助母）、江戶では安永五年六月中村座（團藏の慈悲藏、金作の女房、三五郎の勝賴、菊之丞の八重垣姬、仲藏の高坂と橫藏）が各々初演であつた。今日なほ「勘助住家」と「十種香」「狐火」の段とが屢々上演され、前者では延若の橫藏、後者では歌右衞門の八重垣姬がそれぞれ代表的なものである。なほ八重垣姬は「祇園祭禮信仰記」の雪姬、「鎌倉三代記」の時姬と共に三姬と呼ばれて重視されてゐる。

【參考】名著全集本解說黑木勘藏○歌舞伎細見飯塚友一郎○舞臺觀察手引草「橫藏印象記」杉贋阿彌○淨瑠璃通解第三編總解山本九馬亭○演劇往來「八重垣姬に就いて」三宅周太郎○竹の屋劇評集（明治二十七年二月歌舞伎座評）○つきぐさ觀劇偶評（明治二十五年八月吾妻座評）○歌舞伎（二一・三七・七二・一一六號。型の記錄）○魁玉夜話（演藝畫報・昭和八ノ一〇）○日本戲曲全集「義太夫狂言時代物集」（歌舞伎臺本）〔近藤〕

本朝二十不孝（ほんてうにじふふかう）　浮世草子五册【作者】井原西鶴【名義】支那の二十四孝に對した命名である。「新因果物語」の別名ある改版本もあるといふ。【刊行】貞享三年【解說】不孝者を題材とした二十章の說話より成る。支那の「二十四孝」、淺井了意の「大倭二十四孝」（別項）の孝行說話の裏を取つて、不孝說話を集め綴らうと期したものである。若し果して「新因果物語」の別名があるならば、それは鈴木正三の「因果物語」（別項）に對して命じたものであらう。說話の關する階級は、武士・町人の二つに亙つて、特に町人が多い。又その地域をいへば、京（山城）・伏見（山城）・加賀・大阪（攝津）・近江・熊野（紀伊）・伊勢・駿河・吉野（大和）・堺（和泉）・宇都宮（下野）・鎌倉（相模）・廣島（安藝）・土佐・越前・松前・筑前・長崎（肥前）・讚岐・奈良（大和）に亙つてゐる。而してその不孝の意義は、單に親を虐待、打擲する類に止まらず、廣く不德なる行爲をなすことをも含んでゐる。親を毒殺せんとした息子や、親を勸めて盜みをなさせた娘などの不孝はいふまでもなく、町人の業を棄てて咄の點取りなどに耽つたものも、山から淵に流れたまつた漆を人知れず取つて富を成し、また後人の取らぬやうに、龍の形を作らせて淵に沈めて置いた男も不孝者として擧げてある。すべて人の道に違ひ、親の名を汚し、家の衰廢を來すべき行爲一切を不孝としたのであるから、二十四孝の如く、說話が單調に流れないで、興味が饒かである。二十說話中、十九話をかゝる不孝の話にして、最後の一話のみを孝行の話としてあるのは、最後をめでたくして終らしめようとしたものである。〔藤村〕


本朝二十不孝　目錄　卷一
今の都も世は借物
大節季にない袖の雨

本朝二十不孝（目次）

本朝文鑑（ほんてうぶんかん）　俳文集　九卷五册【編者】各務支考【刊行】享保三年六月上浣【成立】同二年孟秋日【由來】支考が門人蓮二房及び渡部ノ狂の名に隱れて書いた序によると、森川許六の「風俗文選」（別項）が大凡そ蕉門の作者を集めたものなるに對し、古今の文章の體を選んで百世に傳へようと企て、寶永八年（正德元年）これを蓮二・白狂（渡部ノ狂）に勸めて文を撰ぶ規格まで授けたが、未だ成らずして同年八月十六日遂に歿した。因つて遺弟蓮二・白狂の兩者が遺志を繼ぎ、蓮二が撰し白狂が註し、享保二年に萬牛の功を遂げたとある。併し編者は事實この後も生存してをり、蓮二・白狂などいふ遺弟は假空の人物で、本書の編輯評註等總て支考自身が事を運んで刊行したものである。蓮二房及び渡部ノ狂の序、渡邊吾仲の後序を附してある。【諸本】頭書本朝文鑑（俳諧叢書）・俳諧文集（俳諧文庫）所收。【解說】古來の各種の詩文中、編者の目して俳家の範とすべきものを集めたものである。その中心をなすものは蕉門並に編者の門下の俳文小品であるが、必ずしも所謂俳文と限らず、廣く我が國の文章を輯めた所に、本書の他の俳文集に異なる所がある。作者約八十人、諾册二神・下照姬を初めとして、柿本人麿・山部赤人の如きから、曾呂利新左衞門・烏丸光廣の如きに至るまでの各時代に亙り、外に法然・親鸞・蓮如・一休・盤珪の如き緇衣の人もある。併しその中心をなす者は、守武・立圃・季吟・宗因・貞室・素堂等の諸俳家以下蕉門及び編者の門下で、蕉門作者は芭蕉以下其角・嵐雪・去來・丈艸、その他の人及び編者等であり、又編者の門下は、各務一門の六之・野航・右範・東羽・馬岐、その他闇如・吾仲・巴靜・童平等である。殊に編者自身は東華坊・西華坊・桃花仙・蓮二房・渡部ノ狂・獅乙子・華表人・橘佐渡入道・是佛坊・坊主仁平・野盤子等の變名を用ひて活動してゐるので、量に於て編者自身の作品が最も多い。全篇を歌・詩・賦・行・吟・曲・奏表・敎令・書狀・論・解・傳・記・引・謠・辭・箴・序跋・對向・辯・說・頌・贊・銘・日記・碑文・弔文の二十七類に分つて百三十六篇を類集し、各篇每に渡部ノ狂の名に於て評註を加へてゐる。文には輕快洒脫のものもあるが、俳文家とは稱し難い人や俳文家としては一流に數へ難い作者も多く、從つて文趣措辭必ずしも整調でなく、俳文集としても文集としても雜駁の批難を免れ難い。なほ卷首に、文法・句格の說明、題註・提綱を揭げてゐる。〔各務〕

本朝無題詩（ほんてうむだいし）　漢詩集【編者】詳かでない。併し內容を檢討するに藤原忠通だけは法性寺入道殿下と記し他は姓名のみを揭げてゐる。これ等に據つて案ずるに藤原忠通時代の人々が或は忠通の命に應じて編輯したものとも考へられる。卽ち「本朝一人一首」

この門に入れることもある。【成立】「法性寺入道殿下」の稱呼を用ひてゐる點から推すに、その編輯は二條帝の應保二年以後である。蓋し忠通は、この年六月八日出家入道して法名を圓觀と號した。而して同帝の長寬二年（一一六二四）二月十九日に歿してゐる。これ等によつて思ふに、この集は恐らく應保二年六月以降、長寬二年二月以前の約三ケ年間頃の成立と考へられる。【諸本】群書類從一二八所收本は上・中・下三册で最も流布してゐる。家藏の古

作は何れも四十首以上に及んでゐる。それ等の詩は何れも七言である。五律は僅に一首あるに過ぎない。【價値】殆ど七言の詩のみである事は時代の趨勢を示すものと見える。格調は整備してゐるが、意は餘りあつて而も氣魄に乏しい。林春齋は「本朝一人一首」卷六、藤原忠通の條に、「意到つて句到らず其れ既に衰へたり。無題詩より以後は官家に文字無し云々」と稱した。卽ち公卿社會の詩として最

（卷十）・文和本（卷十四）・永享本（卷十二・十三）・應仁本（卷六）及び金澤文庫本（全部）・寬永本等を對校して異同を欄外に註し、且つ小杉榲邨の說を附註したものである。（四）國書刊行會本。田中本を底本としてゐる。「本朝續文粹」と合册して大正十二年に刊行せられた。（五）日本文學大系本。これも田中本を底本とし、多少の頭註を附してゐる。

【內容】嵯峨帝の弘仁年中から後一條帝の長

も移され、大阪では明和三年五月中座（三五郎の勝頼、雛助の八重垣姫、大五郎の横藏、吉右衞門の慈悲藏、小六の勘助母）、江戸では安永五年六月中村座（團藏の慈悲藏、金作の女房、三五郎の勝頼、菊之丞の八重垣姫、仲藏の高坂と横藏）が各々初演であつた。今日なほ「勘助住家」と「十種香」「狐火」の段とが屢々上演され、前者では延若の横藏、後者では歌右衞門の八重垣姫がそれぞれ代表的なものである。なほ八重垣姫は「祇園祭禮信仰記」の雪姫、「鎌倉三代記」の時姫と共に三姫と呼ばれて重視されてゐる。

【參考】名著全集本解説 黒木勘藏 ○歌舞伎細見

大部孝にならい袖の雨
(次　目)　孝

孝説話を集め綴らうと期したものである。若し果して「新因果物語」の別名があるならば、それは鈴木正三の「因果物語」（別項）に對して命じたものであらう。說話の關する階級は、武士・町人の二つに亙つて、特に町人が多い。又その地域をいへば、京（山城）・伏見（山城）・加賀・大阪（攝津）・近江・熊野（紀伊）・伊勢・駿河・吉

文集　九卷五册【編者】各務支考【刊行】享保三年六月上浣【成立】同二年孟秋日【由來】支考が門人蓮二房及び渡部ノ狂の名に隱れて書いた序によると、森川許六の「風俗文選」（別項）が大凡そ蕉門の作者を集めたものなるに對し、古今の文章の體を選んで百世に傳へようと企て、寶永八年（正德元年）これを蓮二・白狂（渡部ノ狂）に勸めて文を撰ぶ規格まで授けたが、未だ成らずして同年八月十六日遂に歿した。因つて遺弟蓮二・白狂の兩者が遺志

の六之・野航・右範・東羽・馬岐、その他闇如・吾仲・巴靜・童平等である。殊に編者自身は東華坊・西華坊・桃花仙・蓮二房・渡部ノ狂・甕乙子・華表人・橘佐渡入道・是佛坊・坊主仁平・野盤子等の變名を用ひて活動してゐるので、量に於て編者自身の作品が最も多い。全篇を歌・詩・賦・行・吟・曲・奏表・敎令・書狀・論・解・傳・記・引・誄・辭・箴・序跋・對問・辯・說・頌・贊・銘・日記・碑文・弔文の二十七類に分つて百三十六篇を類集し、各篇毎に渡部ノ狂の名に於て評註を加へてゐる。文には輕快洒脫のものもあるが、俳文家とは稱し難い人や俳文家としては一流

に數へ難い作者も多く、從つて文趣措辭必ずしも整調でなく、俳文集としても文集としても雜駁の批難を免れ難い。なほ卷首に、文法・句格の説明、題註・提綱を掲げてゐる。〔各務〕

本朝無題詩 ほんてうむだいし　漢詩集　【編者】詳かでない。併し内容を檢討するに藤原忠通だけは法性寺入道殿下と記し他は姓名のみを掲げてゐる。これ等に據つて案ずるに藤原忠通時代の人々が或は忠通の命に應じて編輯したものとも考へられる。即ち「本朝一人一首」の記載たる「左右の者をしてこれを編輯せしむるか」の記事も首肯することが出來る。【名稱】單に無題詩とも稱する。無題の詩を集めたるが故に起る。無題とは、即事・言志その他凡そ六字又は七字の題を稱する術語である。五字を題とするもの、即ち五言詩の一句（又は七言詩の一句の時もある）等を題にしたものを句題と稱し、三字若しくは四字の題を非句題と稱する（文筆問答抄・王澤抄・作文大體參照）。林春齋の「本朝一人一首」卷六藤原忠通の條に、「此の集未だ誰人の編する所なるかを知らざるなり。蓋し其の編輯既に成りて未だ其の名を題せず。且つ撰者の名を著はさず。故にしばらく無題詩を以て之を呼ぶか」とあるが、從ひ難い。また彼の「國史館日錄」の寛文七年二月二十二日の條にも右の如き記載があり、更に階蓂詞葉と命名してゐる。この字面に關して岡田正之博士は、唐の張彥昭の「人日淸暉閣宴群臣遇雪詩」の中に、「庭樹千花發、階蓂七葉新」の句がある。それによつて故意に命じたものである。階蓂は祥瑞を表はす草と稱せられてゐる。無題を支那には亡題と記したものもある。唐人は漫吟で一定の題を附し難いもの等を稱したこともあり、又は閨情や宮事の詩をこの門に入れることもある。【成立】「法性寺入道殿下」の稱呼を用ひてゐる點から推すに、その編輯は二條帝の應保二年以後である。蓋し忠通は、この年六月八日出家入道して法名を圓觀と號した。而して同帝の長寛二年（一一八二四）二月十九日に歿してゐる。これ等によつて思ふに、この集は恐らく應保二年六月以降、長寛二年二月以前の約三ケ年間頃の成立と考へられる。【諸本】群書類從一二八所收本は上・中・下三册で最も流布してゐる。家藏の古寫本は無題詩と題し上・中・下三册にて、卷序は類從本と異なつてゐる。但し内容は殆ど同じである。この外、内閣文庫本・神宮文庫本・尾州德川家本等もあるが、類從本の系統に屬する。【内容】類從本に從へば、左の如く十卷・三十七門に分れてゐる（岡田博士の日本漢文學史三十六門は山洞を脱してゐる）。

卷一、行幸　宴賀（附貴勸學院新成）　尙齒會
卷二、天象　時節　地儀　植物
動物　人倫　雜物　屛風（附書障）
卷三、花下　月前　七夕（附後朝）
卷四、春（附閏三月）　夏
卷五、秋　冬（附歲暮）　雜
卷六、水閣　池臺（附池亭池頭）　泉亭　林亭
亭　別業（附別庄別墅）
卷七、山家　田家　野店　舊宅
山村（類從本に山林とあるは山村の誤である。古寫本は山村とある）
野外　河邊　旅館（附路次）
卷八、山寺上
卷九、山寺中
卷十、山寺下　雜寺　禪房　山洞

作者は三十餘人中、藤原周光及び藤原忠通の作最も多く九十首以上に達し、その他藤原敦光・釋蓮禪・藤原茂明・中原廣俊・藤原明衡等の作は何れも四十首以上に及んでゐる。それ等の詩は何れも七言である。五律は僅に一首あるに過ぎない。【價値】殆ど七言の詩のみである事は時代の趨勢を示すものと見える。格調は整備してゐるが、意は餘りあつて而も氣魄に乏しい。林春齋は「本朝一人一首」卷六、藤原忠通の條に、「意到つて句到らず其れ既に衰へたり。無題詩より以後は官家に文字無し云々」と稱した。即ち公卿社會の詩として最後の花とも稱すべく、平安末期の詩集として、その時代の詩界を知るの好資料である。

【參考】本朝一人一首詩卷六○文筆問答抄○日本漢文學史 岡田正之　〔山岸〕

本朝文粹 ほんてうもんずゐ　漢文集　十四卷

【編者】藤原明衡と稱される（本朝書籍目錄）。【書名】宋の姚鉉の編輯にかゝる「唐文粹」一百卷に倣つて命名したもの。【成立】卷十一に、戶部尙書尙信の「後一條院御時女一宮御著袴翌日宴和歌序」に、「三年之冬十一月廿一日云々」とある。故に長元三年（明衡四十二歲）以後の編輯にかゝる。恐らく後朱雀帝の長曆・長久・寬德頃の數年間に成立したものであらう。【諸本】從來は專ら寫本として傳來したが、江戶時代に入つて刊行せられた。（一）寬永本。寬永六年冬、野々村知求が木活字を以て刊行したもので、林道春の序と那波道圓の跋とがある。國書刊行會本には林道春の序の前に堀杏菴の序を掲げてある。而して奧に、「按ずるに一古本に附する所の訓點及び奧書は堀杏菴の自筆歟……」と記してゐる。（二）正保本。正保五年春に松永昌易が寬永本の文字の誤脱や訓點の誤謬等を諸家の本によつて校讐して重刊したものである。（三）田中本。明治十九年に田中參が校訂し、弘長本（卷一・二）・乾元本（卷十）・文和本（卷十四）・永享本（卷十二・十三）・應仁本（卷六）及び金澤文庫本（全部）・寬永本等を對校して異同を欄外に註し、且つ小杉榲邨の説を附註したものである。（四）國書刊行會本。田中本を底本としてゐる。「本朝續文粹」と合册して大正十二年に刊行せられた。（五）日本文學大系本。これも田中本を底本とし、多少の頭註を附してゐる。

【内容】嵯峨帝の弘仁年中から後一條帝の長元年中に至る十七代二百餘年間に於ける文辭を、「文選」の體裁に傚つて輯集したものである。而して四百二十七篇を左の如く、三十九類に分けてゐる。

〔一〕賦一五、〔二〕雜詩二八、〔三〕詔六、〔四〕勅書一、〔五〕勅答七、〔六〕位記二、〔七〕勅符三、〔八〕官符三、〔九〕意見封事三、〔一〇〕策問一三、〔一一〕對策一三、〔一二〕論奏二、〔一三〕表四三、〔一四〕奏狀三七、〔一五〕書狀一六、〔一六〕序一五六、〔一七〕詞一、〔一八〕行一、〔一九〕文一、〔二〇〕讃五、〔二一〕論一、〔二二〕銘九、〔二三〕記五、〔二四〕傳二、〔二五〕牒五、〔二六〕祝一、〔二七〕起請一、〔二八〕奉行文一、〔二九〕禁制文一、〔三〇〕怠狀一、〔三一〕落書二、〔三二〕祭文三、〔三三〕呪願二、〔三四〕表白一、〔三五〕發願文一、〔三六〕知識一、〔三七〕廻文一、〔三八〕願文二七、〔三九〕諷誦文六。

これ等は更に又細目に分たれて「文選」の目錄と對比するに甚しく類似し、兩書の關係の密接な事を示してゐる。併し大寶令以來、學制が定まり、文章生は詩賦の考試に應じ、文章得業生は策問に對する必要があつた。又文人は常に詩賦や序を書き、願文・表狀等をも起草しなければならなかつた。されば「文選」に比して奏狀や表や序は頗る多く、願文の如きは「文選」に全くない例である。かくして「文選」や「文苑英華」や「唐文粹」以外にかくの如き本

朝の文辭を編輯したものは時代と社會の要求から必然的に生じたものである。作者としては村上帝を初め、兼明親王・具平親王・菅原道眞・都良香・三善淸行・紀長谷雄等及びやゝ下つて菅原文時・大江朝綱・源順・大江以言・同匡衡等がある。卽ち、宇多・醍醐帝の朝の文人と村上・冷泉乃至は、一條帝の朝の文人とをそれぞれ中心としてゐるやうに見える。その中、文辭の最も多く採錄せられたものは、大江朝綱・同匡衡の四十餘篇、菅原文時・紀長谷雄・菅原道眞・源順等の各三十餘篇、大江以言・慶滋保胤等の各二十餘篇、兼明親王・都良香・紀齊名等の各十餘篇等である。これを家に就いて見れば菅・江二氏の人々が最も多く、紀氏はこれに續ぐ。卽ち菅家の人々は七人八十餘篇、江家は六人百二十篇、紀家も六人五十餘篇となる。蓋し菅・江二家は、當時文筆を司つた家である事にも關係する。これ等の作品に關しては今これを一々述べる事は困難であるが、要するに、字句の雕琢に腐心した爲めに、形式に囚はれて概ね氣魄に乏しく、文辭の風韻に乏しい憾みはある。卽ち六朝の四六駢儷の文の缺陷は、又我が「本朝文粹」の文にも缺陷たるを免れない。【價値】我が中古に於ける文辭の粹たるのみならず實に本朝に於ける文辭の典範と稱するも溢美ではない。卽ち各種の文體を集錄し、辭章に關しても後世文人の模範となつてゐる。殊に秀句は朗詠として當時に朗吟せられ、「和漢朗詠集」「新撰朗詠集」（各別項）にも收載せられて、後の文學に影響した事は擧げて數へられない。加ふるに當時の社會生活を知り、又歷史の缺を補ひ、同時に平安時代の文章の支那との交涉より、延いて當時の讀書界の事情等を知るには缺くべからざるものである。これ等を十分に研究しなければ、國文學や和歌の世界に關しても、十分な徹底した研究は不可能と稱するも過言ではない。【註釋書】本朝文粹註釋二册（柿村重松著）。底本としては從來の諸本に加ふるに名古屋の眞福寺に在る弘安三年の卷子本（卷十四）、奧書なき卷十二の一軸、建保五年の册子本（卷十四）及び松井簡治博士藏の文永本等を參酌し、傍ら他の詩集・記錄・文書等に出入して寫誤を訂し異同を考へ、故事成語の意義と出典を考究して註釋を施したものである。卷末には主なる作家の傳記資料が揭げられてゐる。實に字句・故事・成語の詳解としては、これに過ぎたものはない。又後世かくの如き類の書は再び現はれ難いと思ふ。實に「本朝文粹」研究の燈明となるものである。なほ小柳司氣太博士が本書の註釋を思ひ立ち、啓明會の後援により四ケ年の星霜を經て脫稿したのであるが、偶々その頃柿村氏の註釋が世に出たので刊行しなかつたが、彼此對照すれば學者を益すること少くないであらう。〔山岸〕

本朝文選（ほんてうもんぜん）「風俗文選」を見よ。

本朝用文章（ほんてうようぶんしやう）　淨瑠璃　五段　時代物　【作者】正本に竹本義太夫・近松門左衞門連名の奧付があるが、俄に近松作とは定め難い。【興行】不明【諸本】八行五十丁本、山本九兵衞板。諸種の近松全集所收。【梗概】〔初段〕（京、北畠、玄惠房）日野資朝の家來石見守中原は相模入道と內應し、資朝の子阿新丸を玄惠法印に依賴して剃髮せしめようとする所へ、資朝の執權左衞門尉藤原が馳せつけ、資朝に鎌倉追討の勅諚あり、阿新も一方の大將たるべき身なる旨を告げたので、阿新の出家は中止となる。（市原野、石見山莊）石見は山莊に直甲二百餘騎を伏せ、茶の湯興行と僞り、資朝を茶室に招き暗殺しようとするところへ、左衞門來つて陰謀を看破し、敵を追ひ散らす。〔二段〕（賀茂の川瀨）資朝が叡山さして落ち行く途中、黑木賣の女達に道を尋ねると、その中の二八ばかりの美しい女が道の案內をする。道行。（八瀨の里、菊の姬隱家）入相の鐘の告ぐる頃、資朝は、とある由ありげな屋敷の中に導かれ、その夜女から嘗て資朝と一夜の契を交した花園の大臣の遺兒菊の姬なる事を打明けられる。折から石見が六波羅勢を引具して寄せ來り、姬達の奮戰もかひなく、資朝は捕へられる。〔三段〕（菊の姬道行）阿新は父が佐渡へ流罪の由を聞き、菊の姬と共に佐渡へと出で立つ。（佐渡、本間入道館）阿新・菊の姬は、郡司本間山城入道に會つて、資朝に對面させてくれと賴む。入道は姬を一目見るより橫戀慕し、拒まれるや怒つて兩人を庭の石燈籠に搦めさせ、資朝を引出して首打たしめる。人が寢靜まつてから阿新は燈籠の灯で縛目を燒き切り、姬を助けて寢間に忍び入り、入道を討ち果し、吳竹に縋つて大濠を越し、折柄通りかゝつた驗者妙法坊に救を請ふ。〔四段〕（磯、妙法坊館）妙法坊は二人を己が館に連れ歸り、笈の內に隱し置くを妻が怪しんで嫉妬する。そこへ本間の家の子達が阿新等の行方を占つて貰ひに來り、とゞ妻の嫉妬が禍して事が露顯し、大勢打つてかゝるが、妙法坊に追ひ散らされる。（海上）妙法坊は二人を勞はり、島を遁れんと小舟に乘つて沖へ漕ぎ出す。間もなく追手の大船が背後に迫るが、妙法坊の功力により現はれた惡魚惡龍のために覆へされる。〔五段〕（越路への道筋）左衞門が佐渡へ向ふ途中、阿新等一行と逢ひ、喜んで共に玄惠を訪れる事になる。（京、北畠、玄惠房）玄惠は石見が近く奈良薪の能を興すと告げたので一同好機到れりと、阿新を猿樂に窶さしめ、打連れて奈良に向ふ。（東大寺南門芝居）阿新は、石見を相手に放下僧を演じ、機を見て左衞門・妙法坊と共に一度に斬つてかゝり石見等を亡す。【解說】「太平記」に據つて、阿新丸の事蹟を脚色したもの。趣向や文章に山本角太夫の正本「辨慶京土產」と同樣の點が多く、且つ結末は謠曲「放下僧」の飜案である。古淨瑠璃式な幼稚な敍述である。恐らく近松の作ではあるまいと思はれる。〔高野（正）〕

【參考】近松全集第三卷解題　藤井乙男

本朝麗藻（ほんてうれいさう）　漢詩集　二卷　【撰者】高階積善（江談抄卷五・本朝書籍目錄）。積善は彈正少弼・左少辨等を經て、從四位下行民部大輔となつた。生來、詩を能くし、白居易や元稹に私淑した事は本集中の文によつて知られる。【名稱】「日本國見在書目錄」の總集家中に「文林麗藻集」百卷や「文房麗藻」十卷等の名稱が見える。卽ち平安時代にかくの如き集が舶載せられてゐた。それ等に倣つて本朝の麗藻と題したものであらう。【成立】集中、一條帝の聖作を御製としてゐる故に、帝の御在位中卽ち寛弘八年六月以前の撰にかゝる。又集中に源賴定を源相公と記してゐる。相公は宰相公の略で、我が國では參議の事を稱する。然るに賴定の參議となつたのは寛弘六年三月以後である。又左金吾は賴通、右金吾は懷平である故に、これも同六年三月以後となる。なほ高積善の七言、九月盡日の文中に「今の吏部輔正」とあるが、輔正は同六年十二月歿した。故にこの文は輔正の在世時代のもので、遲くも同六年十二月頃の作にかゝる。それ等を綜合して考へるに、本集の成立は寛弘六・七年の頃と見られる。恐らく同七年頃かと思ふ。【諸本】類從本（群書類從一二〇）・神宮文庫本（二部）・內閣文庫本・山岸德平藏本（九條公爵家舊藏本）等は何れも下卷のみを傳へた寫本である。日本古典全集（類從本による）所收。【內容】一條帝の正曆・寛弘頃の公卿の詩を集めたもの。二卷のうち、上卷は首尾共に缺けてゐるが、前

は「文華秀麗集」（別項）に等しい。【價値】從來は單に下卷のみで、首尾を缺いた上卷の傳來も稀であつたらしい。卽ち林春齋の「本朝一人一首」卷五の高階積善の條に、「惜しい哉、其の上卷をして在らしめば云々」とも見える。本集を平安初期のものに比較すれば、詩として氣魄に乏しい憾はあるが、詩史上よりするも、亦一條帝の正曆寛弘時代に於ける公卿の詩を傳へた唯一のものである點よりするも、共に

紫雲に乘つて來て、侍從に娘を與へようと告げ、約した十八日の夜の月に、十四五許りの美しい姬が天から降つて侍從の妻となつた。帝はこれを羨んで、今は中將となつた侍從に、伽陵頻と孔雀の鳥を七日の間內裏で舞はせるか、汝の妻を七日內裏へ參らせるかとの難題を出されたのを、姬は梵天國から卽時に鳥を呼び寄せて夫の困惑を救つた。鬼の娘の十郎姬を召寄せよとの再度の難問も事なく叶へら

眼を塞ぐと馬は虛空へ飛び上つた。戒められてあるのでずつと眼を塞いでゐたが、馬が身ぶるひして止まつたので、兩眼を開くと陸地に着いてゐた。其處から馬と別れて梵天王の內裏へ辿り着いたけれども、供へられた酒飯を鎖に繫がれてゐる羅刹國のはくもん王と云ふ妖魔と知らずに、乞はれる儘に一口與へた情が仇となつて、妖魔は風雨を起して逃げ去り、梵天王の判を貫つて天覽に供する事が出

しい憾みはある。卽ち六朝の四六騈儷の文の缺陷は、又我が「本朝文粹」の文にも缺陷たるを免れない。**【價値】**我が中古に於ける文辭の粹たるのみならず實に本朝に於ける文辭の典範と稱するも溢美ではない。卽ち各種の文體を集錄し、辭章に關しても後世文人の模範となつてゐる。殊に秀句は朗詠として當時に朗吟せられ、「和漢朗詠集」「新撰朗詠集」（各別項）にも收載せられて、後の文學に影響した事は擧げて數へられない。加ふるに當時の社會生活を知り、又歷史の缺を補ひ、同時に平安時代の文章の支那との交涉より、延いて當時の讀書界の事情等を知るには缺くべからざるもの

本朝文選 ほんてうもんぜん 「風俗文選」を見よ。

本朝用文章 ほんてうようぶんしやう 淨瑠璃 五段 時代物 **【作者】**正本に竹本義太夫・近松門左衞門連名の奧付があるが、俄に近松作とは定め難い。**【興行】**不明 **【諸本】**八行五十丁本、山本九兵衞板。諸種の近松全集所收。**【梗概】**〔初段〕（京、北畠、玄惠房）日野資朝の家來石見守中原は相模入道と內應し、資朝の子阿新丸を玄惠法印に依賴して剃髮せしめようとする所へ、資朝の執權左衞門尉藤原が馳せつけ、資朝に鎌倉追討の勅諚あり、阿新も一方の大將たるべき身なる旨を告げたので、阿新の出家は中止となる。（市原野、石見山莊）

に忍び入り、入道を討ち果し、吳竹に縋つて大濠を越し、折柄通りかゝつた驗者妙法坊に救を請ふ。〔四段〕（磯、妙法坊館）妙法坊は二人を己が館に連れ歸り、笈の內に隱し置くを妻が怪しんで嫉妬する。そこへ本間の家の子達が阿新等の行方を占つて貰ひに來り、とゞ妻の嫉妬が禍して事が露顯し、大勢打つてかゝるが、妙法坊に追ひ散らされる。（海上）妙法坊は二人を勞はり、島を遁れんと小舟に乘つて沖へ漕ぎ出す。間もなく追手の大船が背後に迫るが、妙法坊の功力により現はれた惡魚惡龍のために覆へされる。〔五段〕（越路への道筋）左衞門が佐渡へ向ふ途中、阿新等一行

見える。卽ち平安時代にかくの如き集が

せられてゐた。それ等に倣つて本朝の麗藻と題したものであらう。**【成立】**集中、一條帝の聖作を御製としてゐる故に、帝の御在位中卽ち寬弘八年六月以前の撰にかゝる。又集中に源賴定を源相公と記してゐる。相公は宰相の略で、我が國では參議の事を稱する。然るに賴定の參議となつたのは寬弘六年三月以後である。又左金吾は賴通、右金吾は懷平である故に、これも同六年三月以後となる。なほ高積善の七言、九月盡日の文中に「今の吏部輔正」とあるが、輔正は同六年十二月歿した。故にこの文は輔正の在世時代のもので、遲くも

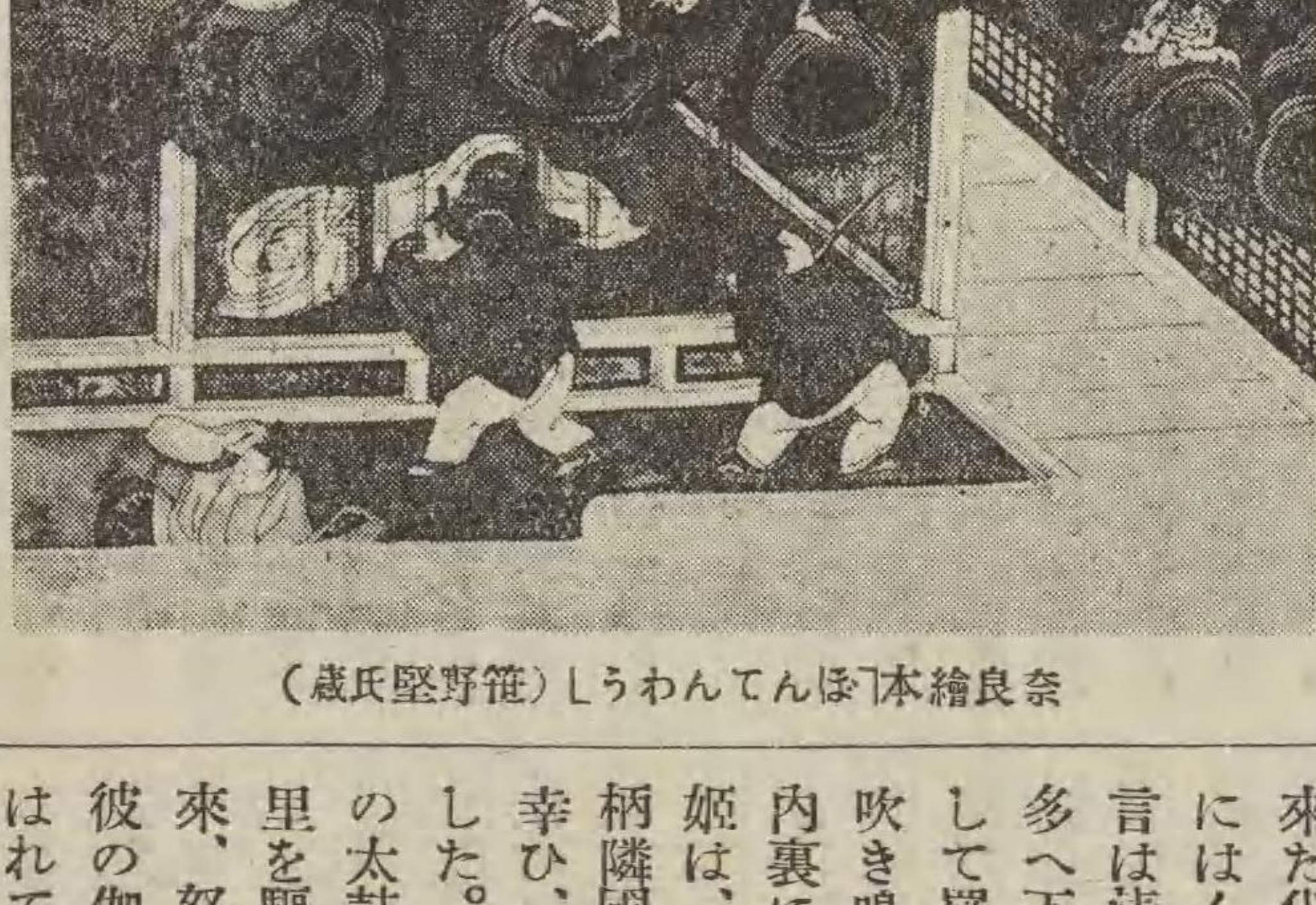
同六年十二月頃の作にかゝる。それ等を綜合して考へるに、本集の成立は寬弘六・七年の頃と見られる。恐らく同七年頃かと思ふ。**【諸本】**類從本（群書類從一二〇）・神宮文庫本（二部）・內閣文庫本・山岸德平藏本（九條公爵家舊藏本）等は何れも下卷のみを傳へた寫本である。日本古典全集（類從本による）所收。**【內容】**一條帝の正曆・寬弘頃の公卿の詩を集めたもの。二卷のうち、上卷は首尾共に缺けてゐるが、前後の關係から推して春部・夏部・秋部である。冬部以下は缺けてゐる。現存する詩數は凡そ五十一首ある。下卷は山水・佛事・神祇・山莊・帝德・法令・書籍・賢人・讚德・詩・酒・贈答・餞送・懷舊・述懷の十五部に分け、凡そ百首である。上下共に詩序のみで詩の缺けたものもあるが、それ等は數へなかつた。それ等の詩の作者には一條帝を初め、中書王具平親王・儀同三司藤原伊周・同道長・同爲時・大江以言・同匡衡・源爲憲・同道濟・同俊賢及び撰者自らの詩を加へてゐる。全體としては七律が多く、詩序の長いもののついたのもある。詩の格調は形態に腐心した跡は明かであるが、氣力に乏しい憾がある。今、藤爲時の「門閑无謁客」を左に掲げて見る。

家舊門閑只長蓬　時无謁客事條空
翟公去尉庠長息　袁氏安貧雪不通
草含國生秋露白　苔封扉帶夕陽紅
久忘倒履逡迎禮　別作洛中泰適翁

「草は閾を含み秋露を生じて白し、苔は扉を封じ夕陽を帶びて紅なり」の如き措辭は、平安初期には絕えてなかつたもので、次第に和臭を帶びた事が知られる。なほ公卿には官を記して姓名を記さない事や、支那風に倣つて江以言や藤爲時の如き三字の姓名を用ひてゐる點は「文華秀麗集」（別項）に等しい。**【價値】**從來は單に下卷のみで、首尾を缺いた上卷の傳來も稀であつたらしい。卽ち林春齋の「本朝一人一首」卷五の高階積善の條に、「惜しい哉、其の上卷をして在らしめば云々」とも見える。本集を平安初期のものに比較すれば、詩として氣魄に乏しい憾はあるが、詩史上よりするも、亦一條帝の正曆寬弘時代に於ける公卿の詩を傳へた唯一のものである點よりするも、共に重要な價値を認めなければならぬ。（山岸）

梵天國 ぼんてんこく 御伽草子（二十三篇の一）三卷 **【成立】**室町季世かと柳亭種彥は「還魂紙料」に言つてゐる。**【諸本】**古板本は、御伽草子本。御伽草子後編（今泉畠山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷・御伽草子（名著文庫）等所收 **【題材・構想】**童話、本地物、遍歷談。音樂特に笛の力を說くのが、「狹衣物語」（別項）を受け、又「御曹子島わたり」（別項）に連り、羅刹國の漂着は「宇津保物語」（別項）の俊蔭の影響もあるのであらう。「御曹子島わたり」とは特に似た點があり、毘沙門の本地にも似通ふ分子がある。難題說話の形式は蟻通傳說（枕の草子「社は」の條。姨捨傳說の異型で、印度の棄老國の傳說を本據としてゐる）などとほぼ同類である。

【梗概】淳和天皇の御代、五條右大臣たかふぢ、淸水に申子の祈願を籠め七日に滿ずる曉、高僧が大臣の袖に玉を移すと夢みて、程なく一子が生れたので玉若と名づけた。二歲にして童殿上し、四位の侍從に任じて異例を開いた。七つの時から笛の天才であつたが、早く母を喪ひ、その後又父に死別したので、手向に笛を吹き澄ますと、その聲遠く梵天國にまで響き、孝心に感動した王は、自ら七日目に紫雲に乘つて來て、侍從に娘を與へようと告げ、約した十八日の夜の月に、十四五許りの美しい姫が天から降つて侍從の妻となつた。帝はこれを羨んで、今は中將となつた侍從に、伽陵頻と孔雀の鳥を七日の間內裏で舞はせるか、汝の妻を七日內裏へ參らせるかとの難題を出されたのを、姫は梵天國から卽時に鳥を呼び寄せて夫の困惑を救つた。鬼の娘の十郎姫を召寄せよとの再度の難問も事なく叶へられた。雷神を參らせよとの三度の難題も、姫に喚ばれた八大龍王の力で解決した。中將は中納言になつた。帝は愈々妬ましく、又々「梵天王の直の御判が見度い」と宣旨が下された。今度は容易ならぬ難事と姫も心を痛め、中納言自身で梵天國へ出向かせた。姫の教へに從つて七日精進し、愛宕山に登り乾の細道の大木の下にゐる三疋の馬のうち、瘦せた鷹毛に三石三斗の豆を秣に飼つた後、これに乘つて眼を塞ぐと馬は虛空へ飛び上つた。戒められてあるのでずつと眼を塞いでゐたが、馬が身ぶるひして止まつたので、兩眼を開くと陸地に着いてゐた。其處から馬と別れて梵天王の內裏へ辿り着いたけれども、供へられた酒飯を鎖に繫がれてゐる羅刹國のはくもん王と云ふ妖魔と知らずに、乞はれる儘に一口與へた情が仇となつて、妖魔は風雨を起して逃げ去り、梵天王の判を貰つて天覽に供する事が出來た代りに最愛の妻は梵天王の憂惧したやうにはくもん王に奪はれてしまつてゐた。中納言は淸水に嘆き訴へ、夢想を受けて筑紫の博多へ下り唐船に便乘すると、十三日目に難破して羅刹國へ漂着した。修行者姿の中納言は吹き鳴らした例の笛のために、はくもん王の內裏に召され、今は一の后となつてゐる彼の姫は、いち早くその音を聞き知つて喜び、折柄隣國の招きに應じて出て行つた王の留守を幸ひ、二千里走る車に中將と同乘して逃げ出した。感付いた侍女の夜叉女が打鳴らす合圖の太鼓に、五百里彼方のけいしん國から三千里を驅ける車を飛ばしてはくもん王は歸つて來、怒つて後を追ひ已に危難が迫つた瞬間、彼の伽陵頻と孔雀との二つの靈鳥が忽然と現はれて、兩車の間を蹴隔て、王の車を奈落の底へ蹴落した。日本五條へ着いた夫婦は、帝初め人々に驚き迎へられた中に、我が家も荒れ果ててゐるし、物憂い都に住みたくないと言つて丹後に下り、姫は成相の觀音、中納言は久世戸の文殊と現はれ、今に衆生を濟度せられるのだとの事である。



奈良繪本「ぼんてんわう」（笹野堅氏藏）

【影響】六段本「梵天國」。說經節にも語られ、歌舞伎にも「梵天國」（「西鶴俗つれ〴〵」に見ゆ）・「梵天國寶船」（元祿十四年森田座、宮崎傳吉作）等

の作がある。

【備考】萬治頃から延寶頃に亙つて、「梵天國」といふ諺が行はれたが、それは貞享・元祿頃まで淨瑠璃の祝言には必ず「梵天國」を語る習慣であつた所から、物事の終りと云ふ意味に、いつしか「梵天國を謠ふ」、或は單に「梵天國」といふやうになつたのであると、「還魂紙料」に見えてゐる。

【參考】還魂紙料上卷　柳亭種彥　〔島津〕

梵灯庵（ぼんとうあん）　連歌師　【姓】朝山氏　【閱歷】足利義滿に仕へ、その同朋を勤めてゐたが、齡四十の頃故あつて仕途を絶ち、江湖に放浪し、筑紫の果、吾妻の奧、又熊野那智の邊に跡を晦ましてゐたこと二十餘年、終に奧の松島に茅の庵を營み、儚なげな生活を營んでゐたが、將軍も流石に懷舊の情に堪へかねて召還した。時は應永二十四年六十九歲の時のことであつた。晩年には多少心の泉も涸れ、詞の花も色あせたとも言はれたが、兎にも角にも斯壇の重鎮であつたと「辨要抄」に見え、三賢（良基・救濟・周阿）の跡を庵主一人殘し留めて天下の鑑と眞下啓阿が評してゐる。「身はいつの煙のために殘るらむ」の名句により、北野の末社に煙の宮として祀られてゐる。應永年中より名の聞えた連歌師として今川了俊・成阿・波多野肥後守・道助・中宣庵主等がゐたが、梵灯庵主は鷄群の一鶴であつた。【編著】梵灯庵主返答書○梵灯庵袖下集（各別項）○初心求詠集○連歌合十五番○鷹詞何木百韻。〔福井〕

梵灯庵主返答書（ぼんとうあんしゆへんたふしよ）　連歌書　二卷　【著者】梵灯庵　【成立】應永二十四年　【諸本】神宮文庫本は一卷で應永三十一年の奧書がある。類從本は二卷で續群書類從連歌部に收めてある。【解說】著者六十九歲の時の作で、連歌の起原・沿革・付合・詞の善惡・良基・救濟・周阿卽ち三賢當時の斯界の狀況及び批評、連歌の諸體、その他連歌並に和歌に關することを擧げ、自家の境遇をも述べたもので、自跋がある。〔福井〕

梵灯庵袖下集（ぼんとうあんそでじたしふ）　連歌書　一卷　【著者】梵灯庵　【名義】初心の者が連歌するに當り、語の季及び附樣などの覺束なき時、備忘のために袖下に備へ置いたといふ事から附けた稱である。宗祇にも「袖下集」（別項）の著があるので、後人が梵灯庵の三字を加へたものである。【諸本】溫古堂本が續群書類從連歌部に所收。【解說】連歌を學ぶ人のために異名その他由緒ある語を順序立てずに擧げ、語義を說き、季・雜等の所屬並に他の語との結び樣などを註したものである。末にある光源氏の十二文名、十二月衣名、木草の異名、鳥の異名以下は後人の附加であらう。〔福井〕

本能主義（ほんのうしゆぎ）　【解說】本能主義といふのは、本能が後天的な種々の掣肘を受けてゐるのに反對し、すべての本能を本來の儘に活動せしめてこそ、眞の人間の生活が出來るものであるとして個人の解放を說く一の思潮である。ルソーが唱へた「自然に還れ」といふのも、また一種の本能主義に屬するが、これを明瞭に主張したのはニイチェである。ニイチェは個人の解放を叫んで個人主義の立場を鮮明にしたのであるが、この個人を解放するといふ思想は、卽ち本能を解放するといふことになるのであつて、ニイチェは、かゝる立場から、宗敎的殊にキリスト敎的禁慾主義等が、個人の本然の生活を制約してゐることを虛僞であるとして盛んに攻擊し、性慾の解放によつて自我を滿足せしむべしといふ思想を鼓吹し、人間の獸性を重んじたのである。【日本に於ける本能主義】日本に於ける本能主義の代表者は高山樗牛であつて、明治三十四年一月雜誌「太陽」に、「文明批評家としての文學者」なる一文を掲げてから、浪漫主義の文學を高潮し、ニイチェの哲學を說き、ニイチェを紹介して、行き詰つた十九世紀文明の一大反抗者たる所以を述べ、それ以前に主唱してゐた國家主義から、一轉して個人主義者となり、遂に本能主義者となつたのである。當時日本に於ては、性慾に對して僞善的な解釋を下してゐたのであつたが、樗牛はかゝる解釋を大膽に打ち破つて本能主義に徹した生活を美的生活と稱し、言葉を極めてそれを嘆美した。「文明批評家としての文學者」を發表したのと同じ年の八月、同じ雜誌に於て發表した「美的生活を論ず」の一文は、この本能主義を說いたものである。彼の論は今日より見れば幼稚な議論と考へられるが、當時の僞善的形式に反抗して本能主義を唱へたことは、浪漫主義者としての彼の立場を光輝あらしむるものである。又自然主義作家の多くも本能主義を主張した。田山花袋・岩野泡鳴等はその代表者である。〔宮島〕

本町絲屋娘（ほんまちいとやのむすめ）　「心謎解色絲」を見よ。

本間久雄（ほんまひさを）　評論家　【閱歷】明治十九年十月、山形縣米澤市に生れ、家は代々能樂を以て藩主上杉家に仕へたので、幼少の折には、祖父から能樂の薰陶を受け、三四度舞臺に立つたこともある。米澤中學校に在學中、坪內逍遙の「文學その折々」を讀んで、文學研究を志した。四十二年早稻田大學文學部を卒業。「早稻田文學」に幾多の研究論文を發表し、殊にオスカア・ワイルドに關するものに依りて、批評家として世の認めるところとなつた。大正二年相馬御風の推擧で、早稻田文學社に入社し、「早稻田文學」を編輯した。同七年、同誌主幹となり、兼ねて早稻田大學文學部講師となつた。その頃から、特に婦人問題に興味を持ち、エレン・ケイの說を祖述して戀愛道德を高調し、またヰリアム・モリスに共鳴して生活美化を主張した。昭和三年早稻田大學海外研究生として英國に渡り、翌四年歸朝した。昭和六年、同大學文學部敎授となり、近代英文學・明治文學史・文學概論等を講じて今日に至つてゐる。以上の外、大正十五年から三年間、國民新聞社客員として評論を書き、昭和六年には、文部省から精神科學研究補助費を受けたこともある。その研究題目は、「本居宣長文學論研究」であつた。【著書】主なるものには、「文學概論」「文學論攷」「近代文學の研究」「現代の思潮及び文學」「婦人問題十講」「生活の藝術化」等があるが、特に「文學概論」は東西文學論の集大成として好評を博し、弘く行はれてゐる。外に飜譯としてはワイルドの「獄中記」「柘榴の家」、モリスの「吾等如何に生くべきか」及びエレン・ケイのものなど。【批評】文藝批評家としてはウォールタア・ペイタアの快樂主義の學說、本居宣長の「もののあはれ」說に私淑して鑑賞の價値を力說し、文藝をして文藝そのものたらしめようと云ふ唯美主義的藝術派の立場に立つてゐる。抱月以後の早稻田派（別項）としては片上伸・相馬御風などよりも正統早稻田派ともいふべき、傳統に忠實な所がある。〔柳田（泉）〕

飜譯文學（ほんやくぶんがく）　【解說】外國文學の飜案若しくは題材の攝取の如き程度のものは日本文學の草創期より既に存在するが、嚴密

な意味に於ける飜譯文學が、日本に於て論議せらるゝに至つたのは明治以降である。佛敎書や儒書の飜譯・解說等は、鎌倉期以降盛んに行はれたが、それは飜譯文學として取扱ふべき性質のものでない。江戸期に至つて漸く支那の小說戲曲等が飜譯若しくは飜案されて、讀本（別項）の世界を初め、各種文學に光彩を放つに至つた（支那文學の影響參照）。又この期歐洲文學の舶載につれて、所謂吉利支丹文學（別項）の一類が生れ、「伊蘇普物語」（別項）等の飜譯が

の「花柳春話」（別項）が現はれた。文學的には價値も乏しいが、森田思軒が、「我國の小說の趨向一變せんとするや、織田氏譯するところの花柳春話その嚆矢をなせり」といつたやうに、その後の飜譯界・讀書界に、一つの方向を與へた功績はある。それから明治二十一年頃になると、他の歐米文化の輸入と共に、知識階級で、歐米文學に親しむ人々も極めて多くなり、讀書界もまた全然過去の日本文學に求められなかつた新文學の色彩に驚異して、爭つ

これより先き、森田思軒は、明治二十年頃に、ジュール・ベルヌの「鐵世界」、同二十一年一月には、同じ著者の「大東號航海日記」（國民之友）等を譯出してゐる。これと共に、明治二十二年三月、小金井喜美子の「星一つ」（大和錦）から、森鷗外・三木竹二共譯の名で出たホフマンの「玉を懷いて罪あり」（讀賣新聞）あたりになつて、明治十八年、坪內逍遙の「慨世士傳」（別項）・「ハムレット」（中央學術雜誌）等と合せて、專門文壇人の飜譯期に入つたものと見るべく、

が、廣汎に輸入されたかの一斑を見るべきである。外にゴルキー、メーテルリンク、トルストイ、ゾラ、チエホフ、ガルシンの外、歐洲自然主義・現實主義の溫床であつた佛露文學、殊にモウパッサンと、ツルゲーネフ、チエホフ等の譯出量は前後にない偉觀で、それは日本の文壇における自然主義の消長を反映する。【第四期】この初期にあつては、自然主義がまだ攻勢を保つてゐたが、一方、鷗外の精力的

天下の鐵と眞下啓阿が評してゐる。一身はいつの煙のために殘るらむ」の名句により、北野の末社に煙の宮として祀られてゐる。應永年中より名の聞えた連歌師として今川了俊・成阿・波多野肥後守・道助・中宣庵主等がゐたが、梵灯庵主は鷄群の一鶴であつた。【編著】梵灯庵主返答書○梵灯庵袖下集（各別項）○初心求詠集○連歌合十五番○鷹詞何木百韻。〔福井〕

梵灯庵主返答書（ぼんとうあんしゆへんたふしよ） 連歌書 二卷 【著者】梵灯庵 【成立】應永二十四年 【諸本】神宮文庫本は一卷で應永三十一年の奧書がある。類從本は二卷で續群書類從連歌部に收めてある。【解說】著者六十九歲の

に活動せしめてこそ、眞の人間の生活が出來るものであるとして個人の解放を說く一の思潮である。ルソーが唱へた「自然に還れ」といふのも、また一種の本能主義に屬するが、これを明瞭に主張したのはニイチェである。ニイチェは個人の解放を叫んで個人主義の立場を鮮明にしたのであるが、この個人を解放するといふ思想は、即ち本能を解放するといふことになるのであつて、ニイチェは、かゝる立場から、宗教的殊にキリスト教的禁慾主義等が、個人の本然の生活を制約してゐることを虛僞であるとして盛んに攻擊し、性慾の解放によつて自我を滿足せしむべしといふ思想を

のである。又自然主義作家の多くも本能主義を主張した。田山花袋・岩野泡鳴等はその代表者である。〔宮島〕

本町絲屋娘（ほんまちいとやのむすめ）「心謎解色絲」を見よ。

本間久雄（ほんまひさを） 評論家 【閱歷】明治十九年十月、山形縣米澤市に生れ、家は代々能樂を以て藩主上杉家に仕へたので、幼少の折には、祖父から能樂の薰陶を受け、三四度舞臺に立つたこともある。米澤中學校に在學中、坪內逍遙の「文學その折々」を讀んで、文學研究を志した。四十二年早稻田大學文學部を卒業。「早稻田文學」に幾多の研究論文を發表し、殊にオスカア・ワイルドに關するものに

の「獄中記」「柘榴の家」、モリスの「吾等如何に生くべきか」及びエレン・ケイのものなど。【批評】文藝批評家としてはウォールタア・ペイタアの快樂主義の學說、本居宣長の「もののあはれ」說に私淑して鑑賞の價値を力說し、文藝をして文藝そのものたらしめようと云ふ唯美主義的藝術派の立場に立つてゐる。抱月以後の早稻田派（別項）としては片上伸・相馬御風などよりも正統早稻田派ともいふべき、傳統に忠實な所がある。〔柳田（泉）〕

飜譯文學（ほんやくぶんがく） 【解說】外國文學の飜案若しくは題材の攝取の如き程度のものは日本文學の草創期より既に存在するが、嚴密な意味に於ける飜譯文學が、日本に於て論議せらるゝに至つたのは明治以降である。佛教書や儒書の飜譯・解說等は、鎌倉期以降盛んに行はれたが、それは飜譯文學として取扱ふべき性質のものでない。江戸期に至つて漸く支那の小說戲曲等が飜譯若しくは飜案されて、讀本（別項）の世界を初め、各種文學に光彩を放つに至つた（支那文學の影響參照）。又この期歐洲文學の舶載につれて、所謂吉利支丹文學（別項）の一類が生れ、「伊蘇普物語」（別項）等の飜譯が行はれた。併し本項に於ては、主として明治以降の飜譯文學に就いて述べる。

【明治以降の飜譯文學】 大體六期に分類され得る。明治五年から、同二十一年までを第一期。同三十三四年頃までを第二期。同四十年頃までを第三期。同四十年頃から大正二年頃までを第四期。昭和二年までを第五期。同九年の現在までを第六期とする。〔第一期〕いはば邦譯文學の胎生時代。殊に明治五年から同十一年までは、文學として見るべき飜譯は現はれない。文久元年六月、神田孝平の譯述した「和蘭美政錄」（「楊牙兒奇談」と「靑騎兵並に右家族・共吟味一件」を含む）は、譯出は最も古いが、發表は明治十年九月の「花月雜誌」である。故に明治初期の飜譯文學は、「魯敏遜全傳」（齋藤了庵、明治五年）「伊蘇普物語」（別項）（渡邊溫）、「訓蒙話草」（福澤英之助、以上同六年）、「後世夢物語」（上條信次）、「西洋孝子流別奇話」（小林謙吉、以上同七年）、「暴夜物語」（別項）（永峰秀樹、同八年）、「天路歷程」（別項）（村上俊吉、同九年）、「胸肉の奇訟」（譯者不明）、「囘生美談」（山田隆正、以上同十年）の順序であり、この原著者で有名なのは、サウジイ、イソップ、バンヤン、シェークスピヤなどである。明治十一年に、織田純一郎の「花柳春話」（別項）が現はれた。文學的には價値も乏しいが、森田思軒が、「我國の小說の趣向一變せんとするや、織田氏譯するところの花柳春話その嚆矢をなせり」といつたやうに、その後の飜譯界・讀書界に、一つの方向を與へた功績はある。それから明治二十一年頃になると、他の歐米文化の輸入と共に、知識階級で、歐米文學に親しむ人々も極めて多くなり、讀書界もまた全然過去の日本文學に求められなかつた新文學の色彩に驚異して、爭つて飜譯文學を歡迎するに至つた。そのために評判になつた飜譯小說だけでも、四五十部に達した。譯文は英語を主とし、それに少數の佛獨語の原文譯があつただけで、當然原著の多數は英國物であり、大陸物ではドイツの次ぎがフランスであつた。ただこの時代の飜譯者は、いづれも專門の文學者でなく、大抵語學通の政客・實業家・新聞記者・學徒などであつたので、原作者や作物の選擇も文學本位でなく、政治物と古典物と文學物と、通俗物の雜然たる混淆であつたことは已むを得ない。〔第二期〕明治二十一年七月に入つて、二葉亭四迷の「あひゞき」（別項）が「國民之友」に掲載され、やがて「都の花」に掲載された「めぐりあひ」（同年十月）と共に、讀者をして「初めて崇高なる文學の意義を了解し、堅實なる新らしい文學の基礎を固め、若しくは感謝して新文藝の開拓を表はすに至らしめた」「啻に飜譯界の新生面を開いたばかりでなく、新らしい文藝の路を輝す光輝ともなつた」「時代の先驅者としての二葉亭の名譽は、今から三十餘年前に、ツルゲーネフを飜譯した功績だけでも、十分承認せねばなるまい」（內田魯庵）。それほどに、この飜譯の價値は劃期的のものであつた。

これより先き、森田思軒は、明治二十年頃に、ジュール・ベルヌの「鐵世界」、同二十一年一月には、同じ著者の「大東號航海日記」（國民之友）等を譯出してゐる。これと共に、明治二十二年三月、小金井喜美子の「星一つ」（大和錦）から、森鷗外・三木竹二共譯の名で出たホフマンの「玉を懷いて罪あり」（讀賣新聞）あたりになつて、明治十八年、坪內逍遙の「慨世士傳」（別項）・「ハムレット」（中央學術雜誌）等と合せて、專門文壇人の飜譯期に入つたものと見るべく、また反對に、好事的な啓蒙飜譯期は幕を下した。一方、歐米詩歌の飜譯は、明治十五年四月、外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎等の「新體詩抄」（別項）等に始まり、ロングフェロー、グレー等を七五調で譯出した。「七五調を用ゐたのは、一時の便宜で、全く一個の新體の調を作爲するにある」と宣言したのから、新體詩の名が出た。しかし譯詩が正格に文壇の對象になつたのは、鷗外が明治二十二年八月、「國民之友」に、「於母影」（別項）を掲載し、レナウ、バイロン、ゲーテ、ハイネ等を典雅な色調に移植した時に始まる。その後、上田敏の「海潮音」（別項）が西詩の妙味を傳へた。〔第三期〕明治三十五年には、フランスのゾラが死んだ。この前後から日本に自然主義が紹介された一方、高山樗牛のニイチェの本能主義や美的生活等の提唱があり、個人主義・社會主義が交錯する時代に入つて、大陸文學の新潮が文壇批判の中心となつた。この頃は大陸もまた思想の混亂期であつた。上田敏の「かたおもひ」（モウパッサン）、蒲原有明の「哀笛」（アラルコン）、厨川白村の「寂滅」（ポー）、吉田荻州の「走馬燈」（ドーデー）、靑木鶴川の「影法師」（シャミソー）等、何れも明治三十五・六年で、いかに歐米の作物が、廣汎に輸入されたかの一斑を見るべきである。外にゴルキー、メーテルリンク、トルストイ、ゾラ、チエホフ、ガルシンの外、歐洲自然主義・現實主義の溫床であつた佛露文學、殊にモウパッサンと、ツルゲーネフ、チエホフ等の譯出量は前後にない偉觀で、それは日本の文壇における自然主義の消長を反映する。〔第四期〕この初期にあつては、自然主義がまだ攻勢を保つてゐたが、一方、鷗外の精力的な努力になるイブセン、ストリンドベリー、シュニッツレル、ウヰド等の紹介により、頹廢派や個人主義やの近代歐洲戲曲の譯出が、漸くその頃の文壇の關心となつて來た。明治四十三年の邦譯だけでも、ショルツ、イブセン、アンドレエーフ、ヴェンツラ、イエツ、メーテルリンク、ショウ、チエホフ、キルイツキ、スタッツケン、シェークスピヤ、ゴリキー、ヴェデキント、シュニッツラー等の作家があり、譯者は鷗外・抱月・薫・蕭々・靑雨・春雨・哲郎・掬香・逍遙・戲庵・正雄・利彥等を網羅してゐる。そしてこの第四期頃は、世界文學の我が國への流入が、最も旺盛になつて來た時代であるが、原書は、獨・英の多數と少數の佛國語であり、歐洲文學は、まだ英語を通じて重譯されてゐる傾向を免かれなかつた。〔第五期〕大正三年は、世界大戰の第一年である。佛・露作家の愛好と戲曲熱は、その儘に引き繼がれてゐた。否、ロシヤ文學は、一九〇五年革命以後の新時代作家群、ソログーフ、カーメンスキー、ガルシン、アルチーバシェフ、ブーニンその他が一層愛好されてゐたにしても、他方、大戰に影響された我が國の文學思潮は、ロオラン、フランス、ドストエフスキー、タゴール、ショウ、トルストイ等、人道主義・自由主義の

世界的作家の譯出を貪り讀ましめた。第二に松村みね子によつて刺戟された愛蘭文學の紹介も記錄すべきであるが、最もこの期の飜譯文學相を目立たせてゐるものは、ロシヤの原語譯によるロシヤ近代文學の氾濫と、革命以後のソヴェート文學の紹介である。〔第六期〕は出版界の革命ともいふべき、昭和二年の圓本時代に始まる。新古世界文學の中で、少しでも目ぼしい作物は、目のとどく限り全圓的にそこに集錄された。この無數の世界文學的圓本の企ては、その機構の中に、飜譯界の新人・舊人の大部分を總動員したと共に、古今の世界文學は、劇・詩・小說に亙つて殆ど大集成された。そしてこの期に於て、初めて飜譯的良心としての原語譯が原則となつたことは、邦譯文學の劃期的記錄といふべきである。次に大戰後の世界政治社會相の變革につれて、歐米の社會主義的文學が當然に我が讀書界にも、旺盛な迫力をもつて飜譯されたこと、また各國の文學を、その國の國語で味得し得る語學者、文壇人が多くなつた結果、その國の最新の文學新潮が、素晴らしいスピードで移植紹介される。ドイツの表現派、新卽物派、勞農ロシヤ藝術、ファシズム文學、「ユリシイズ」飜譯運動の如きが、その一例である。また飜譯が單に戲曲・詩・小說に止まらず、價値のある文學理論・批評・感想等が、片つ端から飜譯されることも、明治の第二期に、森鷗外の「審美綱領」（別項）あたりが、唯一の寶典として取扱はれた過去に對照して、隔世の感そのものである。

【飜譯者と飜譯された文學】 明治邦譯文學の胎生期にあつて、織田純一郎・井上勤・川島忠之助・宮崎夢柳・藤田茂吉・牛山鶴堂等の譯者があるが、いづれも文學者でないし、譯文の出來映えも、啓蒙的なところを何ほども出てゐない。「明治三十年前後までの飜譯壇」は、坪內逍遙が「美文を飜譯して、髣髴原著の現はれ來れるかと思はしむる譯者」は、「英文如來を森田思軒氏とし、獨文如來を森鷗外氏とし、魯文如來を長谷川四迷氏とす。輓近、內田不知庵・原抱一庵の諸氏、また大いに飜譯に力を盡くせり」といつたやうに、鷗外・四迷・思軒・逍遙（各別項）の四人を舉ぐべきであらう。次に明治・大正・昭和にわたつて飜譯界の重立つた人々と業績を略記するならば、「罪と罰」の內田魯庵（別項）、「小公子」の若松賤子（別項）、「聖人歟盜賊歟」の原抱一庵（別項）、「名曲クレーツロア」の小西增太郎、「椿姬」の長田秋濤（別項）、「イブセン社會劇」の高安月郊（別項）、「みをつくし」の上田柳村（別項）、「沙翁全集」の戶澤姑射（別項）、「巖窟王」その他の黑岩涙香（別項）、バイロン及びプラトーンの木村鷹太郎（別項）、ゾラの飯田旗郞・永井荷風（別項）、ゴオゴリその他の德富蘆花（別項）、英國詩歌の大和田建樹（別項）、モリエールの草野柴二、イブセンの千葉掬香から、「いたづら小僧日記」の佐佐木邦、「ルッソー懺悔錄」の石川戲庵等を異色地帶とし、平田禿木・戶川秋骨・馬場孤蝶・吉江喬松・前田晁・生田長江・中澤臨川・島村抱月・登張竹風・昇曙夢・豐島與志雄・米川正夫・笠井鎭夫・有島生馬・中島淸・正宗白鳥・楠山正雄・森田草平・小林愛雄・瀨沼夏葉・竹友藻風・中村白葉・小宮豐隆・後藤末雄・市川又彥・山本有三・鈴木善太郎・有島武郎・北村喜八・成瀨無極・秦豐吉・新關良三・富田碎花・木村毅・岸田國士・岩崎純孝・松居松葉・內藤濯・高垣松雄その外。現時にあつては、すぐれた無名の飜譯家が少くない。森田草平等の「ユリシイズ」の譯出の如きは、最近の成功した良心的譯述だと云はれる。支那文からの飜譯家では、柴田天馬の「聊齋志異」、佐藤春夫の「平妖傳」、幸田露伴・平岡龍城・久保天隨等の「水滸傳」等がある。併し明治以來の飜譯界の功績者は、シェークスピヤの坪內逍遙を初め、森鷗外・二葉亭四迷・小山內薰等に重きを置くべきであらう。なほ海外の一作家だけを、一邦譯家が專門に譯出する新例も開かれたが、その點、坪內逍遙のシェークスピヤの全譯こそ、その冠冕たる名譽を荷ぶべき事業である。昭和八年は、ジイド、コクトオ等を中心にしたフランス文學の邦譯全盛期である。

【譯文と譯語】 明治十二年の「共有雜誌」に、大內靑巒の「譯字の說」がある。「近來我が國に流行する歐米讀書の飜譯は、何の規定もない事をよい事として、甚しきは此方普通の學にも通ぜず、僅かに彼邦の一書を讀めば、從つてこれを飜譯し云々」、かゝる妄濫な譯書を世に流布せしめるのは、中々に容易ならぬ國の禍であるとか、譯字に關しては、十の八九まで意義の同じ熟字があつても、少しでも穩かでない個所があつたら、その字を用ひず、新熟字を作つて當るがよいとか、その頃の飜譯ぶりの痛いところを摘出し、當時の譯書の亂暴極まつた狀態を語つてゐる。邦譯の最初たる明治五年の「伊蘇普物語」は、「譯言と易解とを主旨として、原文の意に隨ひつつ、俗言俚語に書取たり」とある通り、會話が口語體、地の文が文語體なのは、當時の譯文として珍らしいものであつたが、その他の邦譯は、大抵假名交り漢文調の文語であつた。譯者の多くが、漢文の素養に深いためであつたらう。それだけ、自由な歐文脈が稀薄で、肩の張る文體であつた。ただ坪內逍遙の「該撒奇談自由太刀餘波銳鋒」（別項）と、それを眞似た河島敬藏譯「春情浮世之夢」（別項）（明治十九年）だけは、原著がシェークスピヤの戲曲であつたからでもあるが、院本體によつた。なほ明治二十年頃までの邦譯に、四字の對語から成る角書（つのがき）を題名の上に加へることが流行した。例へば「（開卷驚奇）龍動奇談」とか、「一讀千嘆」「二讀三嘆」、或は「（歐洲奇事）花柳春話」「（泰西活劇）春窓綺話」（各別項）とかいふので、これは德川期の讀本（別項）を眞似たものであらう。二葉亭四迷の「あひゞき」その他になつて、初めて逐語譯で、巧みな口語體を驅使した邦譯の典型が現はるゝに至つた。四迷は「余が飜譯の標準」でその苦心を語り、「原文の音調に重きを置いた忠實な逐語譯と根本の詩想を摑んで原文個々の特性を現はす意味譯と、何れを採るべきか。四迷はヂュコーフスキー流の後者をよいとするが、失敗を恐れて無事な逐語譯を採つてゐた」といひ、それを舊飜譯法だと名づけてゐる。また森鷗外は、「卽興詩人時代と現時の飜譯」で、「卽興詩人」（別項）の頃には、しちくどいまでに凝つた文章であつたが、それを今は平易な現代の言葉に替へて來たと、現代語を以て譯文の標準とする自然性を說き、また飜譯は、局部々々にも辭句の上の正しい道を踏まなければならないとて實例から解說してゐる。思軒の文體に關しては、鷗外は「思軒文の卷端に書す」で、「居士善く英書を讀む。存する所の文、飜譯多し、その採擇する所、槪ねロオマンチック派の文、若くは所謂科學小說の類なりき、奇異幻怪の事を行ふに、簡煉刻畫、漢語を驅使する文をもつてす」と云つてゐる。それほど嚴正な漢文調であつた。原抱一庵も、この思軒の譯文體を襲用したが、泉鏡花の初期の作物には、思軒の文體に影響された形がある。そんな風にこの文體は、存外廣く摸倣された。いはば鷗外は雅文體、思軒は漢文體、逍遙は院本體、四迷は何れにも屬しない新口語體である。外に大衆文學としての、探偵怪奇小說の譯者黑岩涙香が、原書を一讀してから、原書と離れ、勝手に原文を取捨して、一種の自

治兵衞・遠山甚四郎）〇比翼蝶春曾我菊（別項）（同十三年正月中村座。濡元の權八・二人長兵衞）〇梅櫻松雙紙（同十三年三月中村座。世話の菅原）〇時鳥貞婦噺（同十三年五月中村座。朝顔日記・御堂前の仇討）〇棲重噂菊月（別項）（同十三年九月中村座。白木屋お駒とおさん茂兵衞）。

【參考】 傳奇作書初編　〔渥美〕

本讀（ほんよみ）　演劇　**【解說】** 歌舞伎の狂言作者が脚本を脫稿して、始めて一座の總役者に

に印刷されるやうになつてからは、直ちに脚本を一座に配布して、本讀を省略する場合が往々ある。〔飯塚〕

ま

舞（まひ）　「踊」を見よ。

的な理想として、形式・內容すべてに調和した理想であり、從つて十體そのもののすぐれたものは有心體であるとすると共に、一方に和歌の特殊性として妖艶美を有心體の性質としたのである。この十體論と共に、詞と心との關係を述べ、心と詞とをかねたのをよき歌としてゐる。しかし定家に於ては心を通して、もしくは詞のつづけがらを通して心が現はれるのを理想とした爲めに、素樸な傾向と異な

最新の文學新潮が、素晴らしいスピードで移植紹介される。ドイツの表現派、新卽物派、勞農ロシヤ藝術、ファシズム文學、「ユリシイズ」飜譯運動の如きが、その一例である。また飜譯が單に戲曲・詩・小說に止まらず、價値のある文學理論・批評・感想等が、片つ端から飜譯されることも、明治の第二期に、森鷗外の「審美綱領」（別項）あたりが、唯一の寶典として取扱はれた過去に對照して、隔世の感そのものである。

【飜譯者と飜譯された文學】明治邦譯文學の胎生期にあつて、織田純一郎・井上勤・川島忠之助・宮崎夢柳・藤田茂吉・牛山鶴堂等の譯者

田建樹（別項）、モリエールの草野柴二、イブセンの千葉掬香から、「いたづら小僧日記」の佐佐木邦、「ルッソー懺悔錄」の石川戲庵等を異色地帶とし、平田禿木・戶川秋骨・馬場孤蝶・吉江喬松・前田晁・生田長江・中澤臨川・島村抱月・登張竹風・昇曙夢・豐島與志雄・米川正夫・笠井鎭夫・有島生馬・中島淸・正宗白鳥・楠山正雄・森田草平・小林愛雄・瀨沼夏葉・竹友藻風・中村白葉・小宮豐隆・後藤末雄・市川又彥・山本有三・鈴木善太郎・有島武郎・北村喜八・成瀨無極・秦豐吉・新關良三・富田碎花・木村毅・岸田國士・岩崎純孝・松居松葉・內藤濯・高垣松雄その外。現時にあつては、すぐれた無名の飜譯

であるとか、譯字に關しては、十の八九まで意義の同じ熟字があつても、少しでも穩かでない個所があつたら、その字を用ひず、新熟字を作つて當るがよいとか、その頃の飜譯ぶりの痛いところを摘出し、當時の譯書の亂暴極まつた狀態を語つてゐる。邦譯の最初たる明治五年の「伊蘇普物語」は、「譯言と易解とを主旨として、原文の意に隨ひつつ、俗言俚語に書取たり」とある通り、會話が口語體、地の文が文語體なのは、當時の譯文として珍らしいものであつたが、その他の邦譯は、大抵假名交り漢文調の文語であつた。譯者の多くが、漢文の素養に深いためであつたらう。それだ

卽興詩人時代と現時の飜譯」で（別項）の頃には、しちくどいまでに凝つた文章であつたが、それを今は平易な現代の言葉に替へて來たと、現代語を以て譯文の標準とする自然性を說き、また飜譯は、局部々々にも辭句の上の正しい道を踏まなければならないとて實例から解說してゐる。思軒の文體に關しては、鷗外は「思軒文の卷端に書す」で、「居士善く英書を讀む。存する所の文、飜譯多し、その採擇する所、概ねロオマンチック派の文、若くは所謂科學小說の類なりき、奇異幻怪の事を行ふに、簡煉刻畫、漢語を驅使する文をもつてす」と云つてゐる。それほど嚴

正な漢文調であつた。原抱一庵も、この思軒の譯文體を襲用したが、泉鏡花の初期の作物には、思軒の文體に影響された形がある。そんな風にこの文體は、存外廣く摸倣された。いはば鷗外は雅文體、思軒は漢文體、逍遙は院本體、四迷は何れにも屬しない新口語體である。外に大衆文學としての、探偵怪奇小說の譯者黒岩涙香が、原書を一讀してから、原書と離れ、勝手に原文を取捨して、一種の自由譯を試みたのは、亂暴ではあるが一つの見解とはいへる。次に邦譯する場合の外國語の記し方に關しては、鷗外・鈴木醇庵・帝國文學記者等の間に鬪はれた西班牙文學問題や山本有三の、ストリンドベリーの發音論爭があり、誤譯の指摘・暴露となると、これは過去から今日までを通じて周期的の年中行事である。嘗て「明星」の「蒲鞭」の無名氏（馬場孤蝶と傳ふ）が著名邦譯家の誤譯を指摘したなどは有名であるが、明治三十六年頃、山縣五十雄と原抱一庵との間に交へられたマーク・トーエン論は、抱一庵の誤譯指摘の最も深刻な論戰で、抱一庵は、これがために飜譯家としての聲價を全然葬り去られたと云はれる。　〔千葉〕

本屋宗七（ほんやそうしち）　脚本作家　【本名】未詳【閲歷】龜井戶天神の社家の子で、放蕩の結果、增山金八の門に入つて作者となり、初めは武井藤吉、後には豐島大作と云つた。大作は大作者になるといふ抱負を表はしたもので、自ら日本一を口癖にした爲めに、日本と諢名をつけられた。文化十二年中村座の顔見世に立作者となつたが、二三年後には番附から名が消えてゐる。【作品】四天王御江戶鏑（文化十二年十一月中村座。二代源氏の顔見世狂言）〇年市膽安賣（同十二年十一月中村座。紙ごま治兵衞・遠山甚四郎）〇比翼蝶春曾我菊（別項）（同十三年正月中村座。淸元の權八・二人長兵衞）〇梅櫻松雙紙（同十三年三月中村座。世話の菅原）〇時鳥貞婦噺（同十三年五月中村座。朝顔日記・御堂前の仇討）〇棲重噂菊月（別項）（同十三年九月中村座。白木屋お駒とおさん茂兵衞）。【參考】傳奇作書初編　〔渥美〕

本讀（ほんよみ）　演劇　【解說】歌舞伎の狂言作者が脚本を脫稿して、始めて一座の總役者に發表するための朗讀を云ふ。昔時の芝居道には脚本の發表までに種々の傳統的格式があつて殊に顔見世狂言には先づ狂言の大綱を定むべき世界定めの式、次いで主なる役者に脚色の大要を發表する寄初或は噺初の式がある。一般に本讀の前には內讀とて、興行主・座頭その他の主なる役者に內々で脚本を讀み聞かせて、その註文によつて添削を加へる。本讀は劇場樂屋の大部屋で、座頭以下の總役者は勿論、衣裳方・大道具方・小道具方・囃子方まで立會ひ、狂言作者は筆役を從へて各々分擔の幕の正本を一種獨特の本讀と稱する朗讀法で讀む。一日の狂言を通して讀むこともあり、幾日にも及ぶこともある。脚本は役者の名で書かれてあるので、同時に役割の發表を兼ねてゐる。一幕毎に讀み了ると祝儀の手打をして筆役の狂言方は銘々に書拔を渡す。書拔の表紙に立者は俳名を記し、その外は實名（藝名）を記す。近頃の歌舞伎の本讀は、全く儀式的意義を脫却して新狂言の顔寄せと發表と書拔を渡すための集會となり、新派劇や新劇の劇團でも大概この慣例を踏襲してゐる。歐米の劇壇に於ても、稽古に入る前に、指揮者或は作者が、一座に脚本を朗讀して聞かせる集會を設けるのが通例であるが、近時、脚本が簡易に印刷されるやうになつてからは、直ちに脚本を一座に配布して、本讀を省略する場合が往々ある。　〔飯塚〕

ま

舞（ひま）　「踊」を見よ。

舞（ひま）　能樂　「能の型」を見よ。

毎月抄（まいげつせう）　歌論書　一册　【著者】藤原定家　【名稱】「毎月抄」といふのは後人の名づけた名稱。「定家卿消息」「和歌庭訓」ともいふ。【成立】定家が承久元年七月に衣笠內府（藤原家良）に送つた書である。【諸本】寫本としては高野辰之博士藏本は室町時代の寫本であり、奧に承久元年七月二日に或る人に返報した旨の奧書があり、藤原朝臣爲家判とある。刊本には、群書類從本と古語深祕抄本とがあるが、群書類從本には高野本にある爲家判の奧書があるが、古語深祕抄本は書名も「和歌庭訓」とあり、爲家判の奧書はなく、群書類從本にもある桑門凝然の奧書、源通秀、桑門宋堤の奧書がある。かくて高野博士本は群書類從本の原本らしいが、併し以上の三本共に本文の異同は殆どない。【內容】本書は毎月衣笠內府が、定家に歌の添削を請うたのに答へて歌を論じたもので、定家の著書の中で信ずべきものの中では最も詳密なる歌論書である。幽玄樣・事可然樣・麗樣・有心體・長高樣・見樣・面白樣・有一節樣・濃樣・鬼拉體の十體を擧げて比較的精細に說き、殊に有心體を最も尊重してゐる如き、注意すべき見解である。さうして有心體に就いては、一面には和歌の普遍的な理想として、形式・內容すべてに調和した理想であり、從つて十體そのもののすぐれたものは有心體であるとすると共に、一方に和歌の特殊性として妖艷美を有心體の性質としたのである。この十體論と共に、詞と心との關係を述べ、心と詞とをかねたのをよき歌としてゐる。しかし定家に於ては心を通して、もしくは詞のつづけがらを通して心が現はれるのを理想とした爲めに、素樸な傾向と異なつて、技巧的な傾向となつてゐるのである。【價値】定家の歌論は日本の歌論の中で劃期的なものであるが、定家の歌論を精細に知り得る資料は「毎月抄」である意味に於て、本書の價値は高いのである。【參考】日本歌學史佐佐木信綱　〇大日本歌學史福井久藏　〔久松〕

迷子札裁斷桂礎（まひごふだきのいしずゑ）　「迷子札裁斷桂礎」を見よ。

舞鶴心中（まひづるしんぢゆう）　小說　【作者】近松秋江　【發表】大正四年一月、「中央公論」。【刊行】大正四年三月、「情話新集」第一編（新潮社）として刊。現代日本文學全集所收。【梗概】學生生活を終へて、大きく旅館を經營してゐる京都の家へ歸つて來た欽之助は、いつか女中のお京とよい仲になつた。併し周圍の事情から一旦お京に暇を出したが、矢張り思ひきれないので、彼女に家を持たせたが、お京は間もなく姙娠した。と、或る日、父の妾である女から匿名の密告書を見せられた。それにはお京が欽之助の目を忍んで役者と關係し、腹の子はその役者のだと書いてあつた。彼はお京にその手紙を見せた。お京はカツとなつて、ただ死ぬと言つた。彼は一方、親類の娘と結婚することになつてゐたが、その娘

はまだ初で苦勞がなく、欽之助にはそれが物足りないので、お京と手を切ることは出來なかつた。一旦深い關係になつた女と他人になつてしまはねばならぬことは、彼には何としても出來なかつた。肉體さへ滅してしまへば、戀する心と心とは永久に一緒になつてゐられるのだと彼は思つてゐたところへ、今までは姿を通していろ〳〵意見をいつてゐた父が、直接彼に向つて頭ごなしに阿呆呼ばはりをした。欽之助は辱しめられたやうに感じてムッとなつた。そしてこんな父親の側にゐるよりも一層亡くなつた母親の側に行きたいと考へて死を決心した。數日後の早曉、舞鶴の漁夫の地曳網にまだ生きてゐるとしか思へない綺麗な男女の抱き合つたまゝの死骸が引つかゝつた。

【批評】この作は、同じ作者の「住吉心中」（大正四年四月）や長田幹彦氏の「祇園夜話」（別項）など共に、その當時の文藝界に、情話文學の流行を作る機緣となつたものである。全體の情趣は、勿論、近松などとは同日に語るべきものではなく、何處となく戀愛遊戲の感があるが、さすがに現代的空氣は漂つてゐる。「別れた妻」（別項）、その他の自叙傳的な作品よりも見劣りするものではあるが、謂ゆる情話文學の流行の魁となつたといふ點で、その名は記憶されてゐる。　〔宮島〕

舞の草子（まひのさうし）「幸若舞」を見よ。

舞の手（まひのて）「能の型」を見よ。

舞の本（まひのほん）「幸若舞」を見よ。

舞姫（まひひめ）小說【作者】森鷗外【發表】明治二十三年一月、「國民之友」。【刊行】明治二十五年七月、「水沫集」に收め、春陽堂より刊行。鷗外全集第五卷・森鷗外集（現代日本文學全集）等所收。

【梗概】太田豐太郎は、ベルリンで二十五歳の年を迎へたが、その頃から自分の性向が政治家にも、法律家にも適しないことを悟つて來た。若い大學生の秀才として某省から留學を命ぜられて以來、官事の取調べに從ふかたはら、大學で政治學まで修めて來たのだが、ただ人の望むが儘に動く機械的人物たらんとばかり努めて、本當に自分を生かすべき勇氣を缺いてゐたことが次第に省みられた。それからは大學へ行つても法科の講筵をよそにして歷史文學に心を寄せるやうになつた。或る日夕暮の散步の途上、太田は薄暗い小路の古寺の前で聲を呑みつつ泣く十六七の少女を見た。憐れな姿に思はず近づいて樣子を聞くと、父を喪つて而も葬る金さへ持つてゐなかつたので、太田は少しばかりの持合せを惠んだ。やがて下宿に禮を言ひに來たが、それ以來、ギクトリヤ座の踊子のこのエリスと呼ぶ少女と、太田との交はだん〳〵繁くなつて行つた。それが人目にもとまり、官邊にも聞えて、太田は遂に免官になつた。丁度その頃、エリスとの仲が離れ難いものになつたので、太田はベルリンに留まつて、國許の親友で天方伯の祕書官をしてゐる相澤の世話で、某新聞の通信員の職を得ることが出來た。それからはエリスの家に寄寓し、憂きが中にもまた樂しい生活を送るうち、エリスは惡阻で舞臺を休む日が續くやうになつた。そこへ思ひがけなくも相澤からの手紙が、天方大臣に隨行してベルリンに來着したことを報じて來た。取敢へず旅館を訪ねると、相澤は今こそ名譽恢復の好機だから、大に才能を示して大臣の信用を求め、且つエリスとの情緣を斷てとすゝめてやまなかつた。この親友の取りなしで、太田は大臣から用務を託され、ロシヤ行きの隨行さへ命ぜられた。しかもそこで通譯官としての役目を見事に果した爲めに十分大臣の信任を贏ち得て、上首尾でベルリンに歸つた。悅び迎へたエリスは、やがて產れる子のために着物の用意さへしてゐるところだつた。四五日經つて大臣に招かれて行くと、一緒に歸朝して日本で世に立つてはどうかといふ好意の勸告だつた。若しこの手に縋らなければ、日本に歸る途もなく、身は廣漠たる歐洲大都の人の海に葬られるばかりだと思ふと、太田はその言葉に從ふより外なかつた。併しエリスにどう言はうかと、それを思ひ惱み、我が身の無情を責めつつ太田は雪の中を彷徨した。家に辿りついてエリスの顏を見ると氣を失つてしまつた。太田が高熱で譫語を言つてゐる時、見舞に來た相澤は、凡ての事情をエリスに語り、太田が歸國の事を告げると、エリスは「我豐太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」と叫んで卒倒した。覺めてももう精神は常態でなかつた。病の癒えた太田は、エリスの生ける屍を抱いて千行の淚を濺いだが、遂に狂女を殘して大臣に從つて歸東の途に上らねばならなかつた。

【批評】歸艤に搭じた太田が、自ら手記した體の物語となつてゐるが、世に出ると共に稱讚の聲盛んに起り、作者はこの一篇に依つて忽ち盛名を擅にすることが出來た。これは、西洋先進國の小說作法に則つて作られた短篇小說の鼻祖であつて、當時の文壇がこの新體この新聲に驚異と讚歎とを強ひられた事は想像に餘りある。單に結構のみの物語ではなく、リアルな生きた人生の姿を捉へ、漢文の諧調と國文の美しさとを巧みに調和させた文體を以て描いてゐるが、殊に主人公太田の優柔な性格描寫のすぐれた成功と清新なロマンティシズムとに依つて、今日に至つてもなほその價値と生命を失つてゐない。偉大なる作家の愛すべき處女作といふ點だけでなく、明治文壇の貴重な道標といふ意味でも、永く記憶せらるべき作品である。　〔水木〕

舞姫（まひひめ）歌集【作者】與謝野晶子【刊行】明治三十九年一月一日、如山堂書店。【解說】表紙は、紋羽二重とクロオスとのはぎ合せ、それに舞姫すがたが金の箔壓になつてゐる。新派和歌集最初の洋綴本である。歌は四號活字、總振假名、一頁二首組、この活字の大きさも歌集には珍しいものであつた。中澤弘光の裝幀で、木版數度刷の插畫「京の清水」がある。凡て三百二首の短歌を收めてゐる。本書は次に來る「春泥集」（別項）と共に、晶子の才華をその絕頂にまで達せしめた歌集である。豐麗にして自在、所謂天馬空を行くの概があつた。その作品價値に於ても、「亂れ髮」（別項）の奔逸を超えること遙かに高く、まことに朗らかに、あてやかに、ほこらしげに見えた。而してこの歌風は時代を打つこと多大で、晶子の時代といふものが、はつきり築き上げられたのは、この歌集にあると云つてもいゝ。この華かさは、みづから「萬葉集」の影響をうけたといふ「佐保姬」の時代までつづいたのである。　〔北原〕

舞々（まひまひ）歌舞【名稱】舞を舞ふと云ふ意。【解說】元來は、曲舞々の略稱である。曲舞々を曲舞とも舞々ともいふ。曲舞々は白拍子（別項）と同源の舞で、鼓で拍子を取る事も兩者同じである。又曲舞々の徒は幸若舞をも舞

つたので、幸若舞（別項）とも同一視せられるに至つた。特に大頭流の舞を曲舞とも稱してゐる。曲舞（別項）は謠曲の中に同化せられてしまつたが、古い曲舞々は民間の大道藝として賤業者の手によつて永く存續せられ、今日でも地方の門附に舞々と稱するものが存する。そしてこの舞々は、今日も幸若舞と聯關のある曲を歌つてゐる。加賀の舞々は、幸若太夫の門流が門附となつて生業を立てたものらし

田螺どの〳〵、翌日は春田へ參らぬか、いやで候〳〵、去年の春田に晝寢して、鳶や烏や梟や、あつちらかい轉ばかいてはかい小突き、こつちらかい轉ばかいてはこん小突き、其疵が〳〵、四節土用や八專さ、雨さよ降ればつうく（うづくの誤か）〳〵、その疵藥は何さ〳〵、山のこそねの蛤さ、海の土底のかちれ栗、夏降る雪の黑燒さ、石の腸、猫の角、是が藥なり（「幸若集」に據る、「俚謠集」福岡縣參照）。

後、同十三年六月、日本プロレタリア文學聯盟が結成され、「種蒔く人」の後身機關誌「文藝戰線」（別項）が創刊されるや、彼は同人として活動した。その後、大正十四年十二月、日本プロレタリア文藝聯盟に加はり、同聯盟が日本プロレタリア藝術聯盟と改稱された後、昭和二年六月、指導理論の相違から脫退して勞農藝術家聯盟を結成し、同七年六月「文藝戰線」が解消するまで、同誌に立て籠つて活躍した。

小說の時代から「默禱」などの目的意識主義の時代、「太陽の黑點」などの新しいリアリズムの時代と、その後の作風と、少くとも四度位の作品基調の變遷發展を示してゐる。　〔片岡〕

前田香雪（まへだかうせつ）小說家【本名】夏繁。後、健次郎【別號】鶯園・小羅浮舍主人・金衣山人。【生歿】天保十二年一月、江戸御徒町に生れ、大正五年十二月歿す。享年七十六。【閱歷】國學者前田夏蔭の子で、平山省齋・海

が、さすがに現代的空氣は漂つてゐる。「別れた妻」（別項）、その他の自叙傳的な作品よりも見劣りするものではあるが、謂ゆる情話文學の流行の魁となつたといふ點で、その名は記憶されてゐる。〔宮島〕

舞の草子 まひのさうし 「幸若舞」を見よ。

舞の手 まひのて 「能の型」を見よ。

舞の本 まひのほん 「幸若舞」を見よ。

舞姫 まひひめ 小説【作者】森鷗外【發表】明治二十三年一月、「國民之友」。【刊行】明治二十五年七月、「水沫集」に收め、春陽堂より刊行。鷗外全集第五卷・森鷗外集（現代日本文學

の仲が離れ難いものになつたので、太田はベルリンに留まつて、國許の親友で天方伯の祕書官をしてゐる相澤の世話で、某新聞の通信員の職を得ることが出來た。それからはエリスの家に寄寓し、憂きが中にもまた樂しい生活を送るうち、エリスは惡阻で舞臺を休む日が續くやうになつた。そこへ思ひがけなくも相澤からの手紙が、天方大臣に隨行してベルリンに來着したことを報じて來た。取敢へず旅館を訪ねると、相澤は今こそ名譽恢復の好機だから、大に才能を示して大臣の信用を求め、且つエリスとの情緣を斷てとすゝめてや

ける屍を抱いて千行の涙を濺いだが、遂に狂女を殘して大臣に從つて歸東の途に上らねばならなかつた。

【批評】歸艖に搭じた太田が、自ら手記した體の物語となつてゐるが、世に出ると共に稱讚の聲盛んに起り、作者はこの一篇に依つて忽ち盛名を擅にすることが出來た。これは、西洋先進國の小説作法に則つて作られた短篇小説の鼻祖であつて、當時の文壇がこの新體この新聲に驚異と讚歎とを强ひられた事は想像に餘りある。單に結構のみの物語ではなく、リアルな生きた人生の姿を捉へ、漢文の諧調

とに朗らかに、あてやかに、ほこらしげに見えた。而してこの歌風は時代を打つこと多大で、晶子の時代といふものが、はつきり築き上げられたのは、この歌集にあると云つてもいゝ。この華かさは、みづから「萬葉集」の影響をうけたといふ「佐保姫」の時代までつづいたのである。〔北原〕

舞々 まひまひ 歌舞【名稱】舞を舞ふと云ふ意。【解説】元來は、曲舞々の略稱である。曲舞々を曲舞とも舞々ともいふ。曲舞々は白拍子（別項）と同源の舞で、鼓で拍子を取る事も兩者同じである。又曲舞々の徒は幸若舞をも舞

つたので、幸若舞（別項）とも同一視せられるに至つた。特に大頭流の舞を曲舞とも稱してゐる。曲舞（別項）は謠曲の中に同化せられてしまつたが、古い曲舞々は民間の大道藝として賤業者の手によつて永く存續せられ、今日でも地方の門附に舞々と稱するものが存する。そしてこの舞々は、今日も幸若舞と聯關のある曲を歌つてゐる。加賀の舞々は、幸若太夫の門流が門附となつて生業を立てたものらしく、舞々三太夫と稱して金澤の町にも舞々太夫が三人ゐたが、天明・寬政頃には既に退轉した。その後を繼いで、石川郡藤江村の舞々太夫が二人、年頭・節句等に金澤に出て曆を配つたり、舞を舞つたりして錢を乞うたが、維新後は絕えた。この類は、埼玉縣・福岡縣等の各地に明治時代までも殘存し、所によつては舞々などとも云つてゐる。【歌詞】古い曲舞々の歌は、「七十一番職人盡歌合」に、「月にはつらき小倉山その名は隱れざりけり」と云ふ歌を揭げてゐる。近代の門附の舞々に關しては、加賀の舞々の曲目は百六十番あると云ひ、大なすり・小なすり・般若・日暮し・林の舞・鷺の舞・安宅・楠正成・狸殿等の曲目を存する。安宅の如く、幸若に類似したものもあるが、何れも歌詞は甚だ滑稽野卑となつてゐる。明治十八年に埼玉縣で刊行せられた「幸若集初編」（此の書名は、舞々と幸若と同一種のものである事を示してゐる）と題する書も、この類を集めたもので、田螺・鎌倉・一の谷・安宅・楠正成（景山公の作）・狸殿（南瓜道人の作）・景淸・橋町の八曲を收めた。福岡縣の舞々は鼓を叩いて物貰ひに來たもので、これも田螺の歌などを歌ひ、歌詞に小異があるが、各地何れも共通の歌を歌つたものである。

田螺どの〳〵、翌日は春田へ參らぬか、いやで候〳〵、去年の春田に晝寢して、鳶や烏や梟や、あつちらかい轉ばかいてはかい小突き、こつちらかい轉ばかいてはこん小突き、其疵が〳〵、四節土用や八寒さ、雨さよ降ればつうく（うづくの誤か）〳〵、その疵藥は何さ〳〵、山のこそねの蛤さ、海の土底のかちれ栗、夏降る雪の黑燒さ、石の腸猫の角、是が藥なり（「幸若集」に據る、「俚謠集」福岡縣參照）。

【參考】石川郡誌○金澤市史（風俗篇）○幸若集 林又兵衞編○俚謠集 〔小寺・藤田〕

前句附 まへくづけ 「川柳」を見よ。

前田河廣一郎 まへだかうくわういちらう 小説家【閱歷】明治二十一年十一月十三日、仙臺市に生れた。父は今川常吉といひ木工、母は前田河さと、微祿な仙臺藩士の末女。生れて三日目の晩に、醉つた父のために廣瀨川に投げ込まれようとした所を、母方の祖母に救はれ、伯父前田河嬰之助（醫師）の家に引き取られた。主として祖母の庇護の下に成長し、後、宮城縣立第一中學校に入學したが、五年を半途で退學して十七歳の時上京、苦學生活に入つたが、十九歳の春、德富蘆花に拾はれて渡米、皿洗ひ・菓子屋の職人・百姓・水夫、その他各種の勞働に從事しながら、半ば放浪的な生活を續けた。その間始終圖書館に入つて勉强する傍ら紐育の文藝雜誌及び邦字新聞に短篇小説或は雜文を投じたり、日米通報の編輯に從事したりした。三十三歳の春、十三年半の米國生活を切り上げて歸朝。雜誌「中外」の編輯に從事した頃から、日本の社會狀態に不滿を感じ、批判する氣持から漸次に左翼的に傾いた。大正九年社會主義同盟の結成に加はり、同十一年十月第二次「種蒔く人」（別項）同人となつた。後、同十三年六月、日本プロレタリア文學聯盟が結成され、「種蒔く人」の後身機關誌「文藝戰線」（別項）が創刊されるや、彼は同人として活動した。その後、大正十四年十二月、日本プロレタリア文藝聯盟に加はり、同聯盟が日本プロレタリア藝術聯盟と改稱された後、昭和二年六月、指導理論の相違から脫退して勞農藝術家聯盟を結成し、同七年六月「文藝戰線」が解消するまで、同誌に立て籠つて活躍した。文壇的處女作は、「中外」誌上に發表した「三等船客」であり、次いで「解放」に「赤い馬車」を發表した頃から、漸く頭角を現はし始めたのであつたが、それ以前は、多く評論家として時代の人道主義・自由主義・享樂主義的風潮と鬪つてゐた。劇作家としては、前衞座に關係して、その作の脚光を浴びたものも少くない。【著作】〔選集〕現代日本文學全集新興文學集（改造社）○新興文學全集日本篇第四卷（平凡社）○日本戲曲全集第四十九卷（春陽堂）○新選名作選集○新選前田河廣一郎集○同續篇（改造社）等。〔創作集〕三等船客○赤い馬車○麵麭○最後に笑ふ者○快樂師の群○脅威○默禱○セムが笑。〔長篇小説〕大暴風雨時代○支那等。〔飜譯〕ジャングル（アプトン・シンクレア原作）○ジミー・ヒギンス（同上）○オイル ○ボストン（同上）○ソヴェートロシヤ風土記（ウヰリアムス）等。他に戲曲及び評論・感想集がある。【作風】特徵は何よりも精力的な點にある。それだけ局面の大きな、がつしりした組み立ての作品が多いので、屢々大陸的といふ評語を與へられる。豐かな作品構成能力もあり、描寫力も强いが、器用さは全然なく、その上古い作品技巧を克服しきれないところがある。「三等船客」以來の自然發生的なプロレタリア小説の時代から「默禱」などの目的意識主義の時代、「太陽の黑點」などの新しいリアリズムの時代と、その後の作風と、少くとも四度位の作品基調の變遷發展を示してゐる。〔片岡〕

前田香雪 まへだかうせつ 小説家【本名】夏繁。後、健次郎【別號】鶯園・小羅浮舍主人・金衣山人。【生歿】天保十二年一月、江戸御徒町に生れ、大正五年十二月歿す。享年七十六。【閱歷】國學者前田夏蔭の子で、平山省齋・海保漁村等に從學し、皇朝學に通じ、古筆の鑑定にも通じた。明治八年繪入新聞に入社、翌年十一月「金之助の話」と題する小説を揭げた。これが我が國の新聞に小説を揭げた最初である。明治十六年朝野新聞の記者となり、更に自ら繪入朝野新聞を起して經營に當つたが、同紙にローマ字雜記を揭げ、寫眞版を用ひなどして人目を惹いた。二十二年一月「新小説」に「水と石」を揭げて以來、二三の雜誌にも寄稿したが、二十四年「新作十二番」に「梅その」の揭げられた頃から文筆生活をやめ、二十五年東京美術學校の敎授、高等工業學校等の講師となり、鑑定家としてまた書道に於ても令名があつた。世を終るまで美術界のために盡した。〔高須〕

前田曙山 まへだしよざん 小説家【本名】次郎【閱歷】明治四年十一月、東京日本橋馬喰町に生る。青年時代、日本英學館及び陸軍豫備校に學んだ。明治二十五年八月、「江戸櫻」を「千紫萬紅」に發表してから小説家として文壇に起ち、春陽堂編輯部員となつたことがある。內田魯庵が社會小説を書いた頃、彼も亦この方面に着眼し、「濁り水」「千枚張」「腕くらべ」等の暗黑面を暴露した作を公にしたが、藝術味に乏しいため、全く顧みられなかつた。

後、一時文壇より遠ざかりて閑藝趣味に沒頭し、この方面の著述二三を出した。大正十四年頃、大衆文學の呼び聲が漸く起るや、再び筆を小說に染め、「燃ゆる渦卷」「落花の舞」等續々作品を公にし、大衆文壇の人氣ある作家の一人に數へられるに至つた。彼は幕臣の子であるため、小說には好んで幕末の材料を擇び、當時の公卿が王政復古に努力した苦心談を構想とするのが特に注目される。〔高須〕

前田夕暮（まへだゆふぐれ）　歌人　【本名】洋三　【閱歷】明治十六年七月二十六日、神奈川縣中郡大根村南矢小南に生れた。病弱と放浪の少年時代を送つて三十七年に上京、尾上柴舟の門に入つた。その主知的・無技巧的な歌風は、若山牧水（別項）の殉情的傾向と對立並稱された。同三十九年白日社を創設して、雜誌「向日葵」（別項）を發刊し、四十二年第一歌集「收穫」（別項）を公にした。四十四年雜誌「詩歌」を發刊し、一時中絶したが、雜誌「日光」（別項）の廢刊後再興して今や全紙を擧げてその唱道する新興短歌（自由律）の壇場となしてゐる。「陰影」「生くる日に」「深林」「虹」「原生林」等の歌集を經て、近く歌集「水源地帶」を出し、新興短歌の礎石を示した。また散文詩的な小品集「綠草心理」「烟れる田園」「雪と野菜」等がある。歌風は感覺的で、現代語的發想の奔放的な格調は、遂に今日の自由律に進化するに至つた。〔土岐〕

前田林外（まへだりんぐわい）　詩人　【本名】儀作　【閱歷】元治元年三月三日、姫路市外青山に生れた。紙屋の主人たる傍ら、東京專門學校・外國語學校に學んだ。初め「明星」（別項）の同人であつたが、後、明治三十六年十一月、岩野泡鳴・相馬御風（各別項）等と純文社を興して雜誌「白百合」を創刊し、四十年四月、四十二號を以て廢刊した。その後次第に詩作に遠ざかつて、民謠の蒐集に從事した。【作品】「夏花少女」（三十八年、純文社）と「花妻」（三十九年、如山堂）とを擧げたい。「夏花少女」には「なつばなをとめ」十二篇、嘗て「明星」紙上に異色ありと認められた「アメリカ彦造の墓」、義經を題材とした物語歌等を收め、「花妻」には、「若き尼に」の外二十篇を收めてある。

【作風】「アメリカ彦造の墓」は、定型を踏襲せず、全く自由な形式を用ひてゐるが、「なつばなをとめ」十二篇の如く、好んで八七調に力を入れた跡がある。また彼は好んで詩語に色彩の濃厚なるものを用ひたが、その用語と詩材を的確に按排することを忽かせにした爲め、表現に必然性を缺いて、完成の域に到り得なかつた。ただ彼が「白百合」の末期に近づいて民謠の研究に志し、その蒐集を始めたのは民謠興隆の先覺者として稱すべきものがある。（白百合派參照）〔河井〕

僞鍍金蓮華組上（まがひめつきれんげのくみあげ）　脚本　五幕十一場　【作者】竹柴其水　【通稱】蓮華往生。單に蓮華往生といふ場合は、多く「法華丈助」を主役とした蓮華往生（近世實錄全書所載）を指すが、これは特殊な蓮華往生である。

【興行】明治三十七年十一月、東京明治座。

〔役割〕魚賣鮫洲の多吉・法華寺住職妙心實は浪人內藤新八郎（市川莚升）、大久保若徒直助實は多吉の兄直助・寺男直助實は直助・松前屋二代目五郎兵衞・大慈院大僧都（市川小團次）、多吉の伯父親魚屋の正兵衞・金貸婆おくら（市川荒次郎）、浪人石垣堅藏・役僧怪典實は堅藏・寺社掛內山宗右衞門（市川九團次）、魚賣生洲の十太（市川左傳次）、奧女中綾重實は松前屋の娘おかよ・多吉の妹おなを（市川女寅）、松前屋女房お梅（市川升若）、仲間權平・番僧伴隨實は權平（市川小平次）、浪人片山吾六・役僧栁全實は吾六（市川左升）、松前屋妹娘おせい（市川しやち丸）。

【題材】默阿彌作「芽出柳翠綠松前」（明治十六年一月新富座上演）の內に物語られてゐる事件、即ち旗本內藤藤左衞門のために、無實の罪に泣く松前屋五郎兵衞を、彦左衞門と一心太助が救助するといふ講釋種の脚本の後日物語で、それに堀の內妙法寺に安置されてある日蓮上人の尊像の由來と、法華丈助で知られてゐる蓮華往生を添加してゐる。

【梗概】〔序幕〕（葺屋町樂屋新道）華かな樂屋口。魚屋正兵衞が惡浪人の內藤新八郎・石垣堅藏・片山吾六等に、理不盡を言ひ掛けられるので、大事な得意の御用に遲れないやうに哀願する。新八郎は親の代より遺恨ある大久保・松前屋の兩家へ出入りの魚屋、殊に一心太助の弟とあつては容赦出來ぬと打擲し、左足を負傷せしめて立ち去る。正兵衞の惣領大久保家の若黨直助と魚屋生洲の十太（多吉の兄弟分）が駈け付けて介抱し、一方浪人共を追跡する時、二男の魚屋鮫津の多吉が、復讐は後日として今日は親父の看護が肝要と留め、座頭成田屋の好意で、釣臺で醫者へ運ぶ。直助・多吉兄弟は、實父太助に死別した後、伯父の正兵衞に養育されたのだつた。頭取吾妻市兵衞が浪人は新堀端の小旗本內藤藤左衞門の二男で新八郎といふので漸く遺恨と復讐の原因が判然となる。奧女中の綾重（松前屋の娘おかよ）が不慮の災難の見舞を述べる。兄弟は新八郎を探索する事となる。〔二幕〕（鮫洲漁師町正兵衞內）妹おなをが正兵衞を看病してゐる。直助が見舞に來、主人用で至急相模の方へ旅立つため、暇乞に來たと言ふ。そして多吉が歸宅したら手紙を渡してくれと涙を隱して立ち去る。歸宅した多吉は、兄が內藤の一味が謀叛を企て、江戶より脫出して密事を計畫してゐるので、その探索に出發した事を知り、己も時期に遲れぬやう、おなをへは三人分の孝行を、十太へは後見を賴み、別れの盃をする。〔三幕〕（丸子玉川の松前屋別莊）二代目松前屋夫妻は、宿下りした娘おかよの綾重と朋輩の竹川への馳走に、次女おせいの舞踊をみせる。多吉が尋ねて來て、新八郎が松前屋を殺さうと目論んでゐる事を語る。五郎兵衞は父太助に勝る仁俠を賞美する。多吉の去つた後、石垣と權平が忍び込む。五郎兵衞が當身にて悶絶せしめ、刀の鍔をはづして了ふ。そして花島村の喜太郎宅に宿泊の多吉へ、後日の證據に送り屆ける。（同手合橋庚申堂前）十二日の月。石垣・權平の兩人は浪人姿を、辻堂に隱してあつた僧形に着替へて、首領新八郎方へ逃げ歸つて報告する。新八郎は妙心といふ法華寺の住職と變身してゐるが、金貸婆おくめを川中へ蹴込んでしまふ。寺男として入り込んでゐる直助が、妙心を迎ひに來る。〔四幕〕（武藏花島蓮華寺門前）おくめの早桶來るが、信者が雜沓してゐるので、一時湯灌場へ置く事とする。綾重が進物の釣臺を持參して遠く江戶から加持を懇請に來る。又僞病人と變裝した十太も、役僧栁全の片山吾六の前身、內藤家の用人時代を知つてゐて、巧みに病氣平癒の祈禱に事寄せ寺內に入り込む。（寺內上段の間）綾重は住職妙心へ酒井雅樂頭の忍びの使として、主人の御老母高齡にして現世に執着なく、蓮華往生致したき願望を述べる。妙心は罪科ある者のみに許可される往生、信仰厚き老人には不必要と拒絕する。綾重は小判を以て役

僧怪典（石垣堅藏）と栁全を籠絡し、蓮華往生の方法の說明を賴む。又綾重は自分の息災延命の祈禱を願ふので、これまで數多の婦人に夜分加持をしたが、場所は中庭の離座敷で修行するとて役僧が案內する。妙心は新八郎の正體を現はし、酒井家は遺恨ある大久保家の緣邊、內藤家を松前屋事件で闕所せしめた當時の大老であるから、言葉巧みに大金を卷き上

作と稱せらるゝもの、この度の事件で寺社掛りの封印を受けることを殘念と存じ、祕かに持參したと訴へる。そして後晴れて刑罰を受ける覺悟を示す。御門主の命を承けた大僧都は、不受不施の一派を弘め、蓮華往生を行ふ等の惡業は、その改心により消滅して助命する旨申渡す。尊像は堀の內妙法寺へ遷移する事となる。

【梗概】遊女梅川の部屋には、中の島屋の客八右衞門が來て居り、節句の金は萬事承知はしてゐるが、忠兵衞と云ふ色客のあるを知つて無駄な金を出すのも愚な事などと言ひ出す。梅川は金を取りたい一心でよく勸める。男藝者萬里が來て八右衞門の相手をする。その隙に梅川は新造梅里の部屋へ行き、忠兵衞と逢ふ。彼は梅里の初會の客とばけて上つたので

元年）と云ふ。それは、忠兵衞が怒りに任せて舞鶴屋舞鶴と契り、戀の三角關係が生ずる筋である。〔山崎〕

籬節（まがきぶし）　流行歌　【名義】籬は、遊里の格子のことで、格子先で歌ふ遊里の流行歌を意味するかとも思はれるが、古くより明曆年中に、大阪新町のまがきと云ふ遊女が歌ひ始めたものと云はれてゐる。【解說】明曆に

近く歌集「水源地帯」を出し、新興短歌の礎石を示した。また散文詩的な小品集「綠草心理」「烟れる田園」「雪と野菜」等がある。歌風は感覺的で、現代語的發想の奔放的な格調は、遂に今日の自由律に進化するに至つた。〔土岐〕

前田林外（まへだりんぐわい） 詩人 【本名】儀作 【閲歷】元治元年三月三日、姫路市外青山に生れた。紙屋の主人たる傍ら、東京專門學校・外國語學校に學んだ。初め「明星」（別項）の同人であつたが、後、明治三十六年十一月、岩野泡鳴・相馬御風（各別項）等と純文社を興して雜誌「白百合」を創刊し、四十年四月、四十二號を

華丈助」を主役とした蓮華往生（近世實錄全書所載）を指すが、これは特殊な蓮華往生である。【興行】明治三十七年十一月、東京明治座。

〔役割〕魚賣鮫洲の多吉・法華寺住職妙心實は浪人內藤新八郎（市川莚升）、大久保若徒直助實は多吉の兄直助・寺男直助實は直助・松前屋二代目五郎兵衞・大慈院大僧都（市川小團次）、多吉の伯父親魚屋の正兵衞・金貸婆おくら（市川荒次郎）、浪人石垣堅藏・役僧怪典實は堅藏・寺社掛內山宗右衞門（市川九團次）、魚賣年洲の十太（市川左傳次）、奧女中綾重實は松前屋の娘おかよ・多吉の妹おなを（市川女寅）、松前屋女房お梅（市川升若）、仲間權平・番僧伴

今日は親父の看護が肝要と留め、座頭成田屋の好意で、釣臺で醫者へ運ぶ。直助・多吉兄弟は、實父太助に死別した後、伯父の正兵衞に養育されたのだつた。頭取吾妻市兵衞が浪人は新堀端の小旗本內藤藤左衞門の二男で新八郎といふので漸く遺恨と復讐の原因が判然となる。奧女中の綾重（松前屋の娘おかよ）が不慮の災難の見舞を述べる。兄弟は新八郎を探索する事となる。〔二幕〕（鮫洲漁師町正兵衞內）妹おなをが正兵衞を看病してゐる。直助が見舞に來、主人用で至急相模の方へ旅立つため、暇乞に來たと言ふ。そして多吉が歸宅したら

花島蓮華寺門前）おくめの早桶來るが、信者が雜沓してゐるので、一時湯灌場へ置く事とする。綾重が進物の釣臺を持參して遠く江戶から加持を懇請に來る。又僞病人と變裝した十太も、役僧柳全の片山吾六の前身、內藤家の用人時代を知つてゐて、巧みに病氣平癒の祈禱に事寄せ寺內に入り込む。（寺內上段の間）綾重は住職妙心へ酒井雅樂頭の忍びの使として、主人の御老母高齡にして現世に執着なく、蓮華往生致したき願望を述べる。妙心は罪科ある者のみに許可される往生、信仰厚き老人には不必要と拒絕する。綾重は小判を以て役

俗怪典（石垣堅藏）と柳全を籠絡し、蓮華往生の方法の說明を賴む。又綾重は自分の息災延命の祈禱を願ふので、これまで數多の婦人に夜分加持をしたが、場所は中庭の離座敷で修行するとて役僧が案內する。妙心は新八郎の正體を現はし、酒井家は遺恨ある大久保家の緣邊、內藤家を松前屋事件で闕所せしめた當時の大老であるから、言葉巧みに大金を卷き上げる惡念。そして加持に事寄せ綾重を誘惑しようとする。又寺の繁昌で手不足のため、直助を威嚇して一味に加擔させて了ふ。直助は心中に喜ぶ。（多吉の蓮華往生）庄屋が多吉を伴ひ來り、破牢した上州無宿の赤城の權次と披露し、蓮華往生を賴む。讀經の聲、燒香の煙、鐘太鼓の響きのうちに蓮華往生は終了し、俗願哲が槍を持つて地下室より現はれ、下方より突上げても手答へなしと言ふので、蓮華の花瓣を開いて調査する。と多吉は、槍の穗先を先に五郎兵衞が奪ひ取つた鍔で受止めて現はれ、この陰謀を摘發するために身を以て忍び入つたと、大立廻りとなる。（元の上段の間）色情を手段に居間へ入り込んだ綾重は、遂に寺社奉行配下の捕手の亂入の騷ぎの間に、妙心を見失つてしまふが、怪典や柳全は捕繩を掛けられる。（湯灌場）拔道より脫出する妙心と捕手の激しい立廻り。早桶倒れて亡者おくめが蘇生し、可笑味ある立廻り。捕手が亡者へ繩をかけ、妙心は逃亡する。〔大詰〕（東叡山御靈屋前）雨の中を背負うた御厨子を蓑で隱した妙心が御本坊へ志す途中、巡行の寺社掛りの內山宗右衞門と出會ひ、だんまり模樣。（御本坊對面所）別當大慈院大僧都へ面會した妙心は、法華寺の日蓮の像、卽ち高祖大士四十二厄除の尊像で日朗上人の作と稱せらるゝもの、この度の事件で寺社掛りの封印を受けることを殘念と存じ、祕かに持參したと訴へる。そして後晴れて刑罰を受ける覺悟を示す。御門主の命を承けた大僧都は、不受不施の一派を弘め、蓮華往生を行ふ等の惡業は、その改心により消滅して助命する旨申渡す。尊像は堀の內妙法寺へ遷移する事となる。

【解說】其水得意の後日物語で、幾分趣向に墮した傾向もあるが、興行價値ある一般向きの一心太助を持出したり、去年逝去した市川左團次が極附の役として好評を博してゐた一心太助の伜多吉を息子の莚升に演出させたり、或は獵奇的な興味のある蓮華往生を點綴したり、その奇智機轉は座附作者の妥當な態度として注目すべき點である。無人芝居ながら莚升は、當時熱中してゐた近松硏究より離れて、目先き興味本位に演出し、殊に亡父寫しの大立廻りは好評であつたといふ。

【附記】日露開戰當時のこととて、國民的意識は歌舞伎劇の臺本にまで波及し、「俺は日本人さ」といふ臺詞があるが、其處に當時の芝居道の新人竹柴其水の面影を見出す。〔尾澤〕

【參考】芽出柳翠綠松前（歌舞伎新報）○近世實錄全書（明治の實錄）○明治座物語 木村錦花

籬の花（まがきのはな） 洒落本 一册 【作者】鼻山人（東里山人）【畫工】無署名【名稱】題簽には「靑樓籬の花」、內題には「（娼妓美談）籬の花」とある。妓樓の美人の義。【刊行】文化十四年【題材】戲曲「冥途の飛脚」（寶永八年）に筋を採つたのであり、後編「廓（さと）宇久爲壽」の結末に至つて、これ皆梅川が三輪の寮での夢であると云ふ趣向は、作者の師たる京傳作「娼妓絹籭（ぶんひ）」（別項）の構想を襲用したのである。

【梗概】遊女梅川の部屋には、中の島屋の客八右衞門が來て居り、節句の金は萬事承知はしてゐるが、忠兵衞と云ふ色客のあるを知つて無駄な金を出すのも愚な事などと言ひ出す。梅川は金を取りたい一心でよく勸める。男藝者萬里が來て八右衞門の相手をする。その隙に梅川は新造梅里の部屋へ行き、忠兵衞と逢ふ。彼は梅里の初會の客とばけて上つたのである。さて梅川は八右衞門に起請文を書いて渡す。八右衞門も安心して節句を總仕舞にすると約し、明日十五兩を持つて來てやらうと云ふ。梅川の策略が成功したのである。梅川は仲の町の引手茶屋へは行かぬと忠兵衞と約束してゐたが、八右衞門が島屋に來てゐるといつて迎へに來たので、これも忠兵衞への勸めと出かける。忠兵衞へ融通の十五兩を取る積りである。忠兵衞途中でこれを見、怒つて梅川を打擲した。八右衞門は茶屋からこれを見、忠兵衞がかゝる無法をするのも深い仲故と譏り出す。梅川思ひ切つて髻を切つて渡した。八右衞門もこれに心解け、約束の金を出す。忠兵衞は金の工面もし、茶屋の勘定もし、公然と梅川の許へ上つた。そして梅川の髮を切つたのは外の客のためで自分のせゐではない。梅川の色客などと言はれては迷惑だと言ひ放ち、止めるのも聞かず飛び出した。

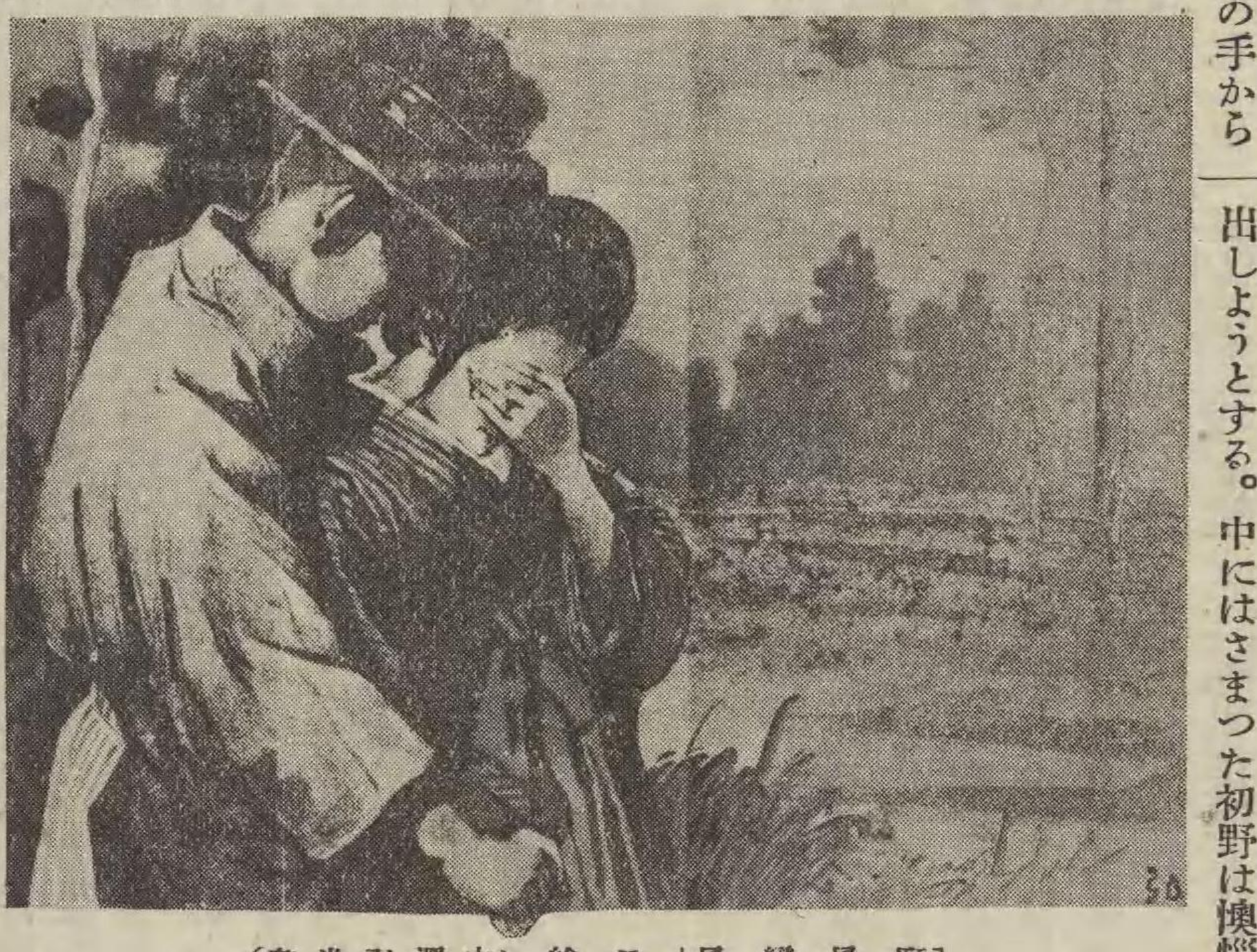
【解說】本書が鼻山人の洒落本の處女作で、爾來彼の作品が續出し、人情本へ推移する橋渡しの役を勸めてゐる。この書は洒落本の型を襲用しただけで斬新な箇所もない。作者もこの點に心づいて諸所に辯解をなし、別に穿らしいものを書いて新味を出さんと努めた。例へば、見世を張る時彈く淸搔（すががき）に種類がある事等である。本書の後編を「廓（さと）宇久爲壽」（文政元年）と云ふ。それは、忠兵衞が怒りに任せて舞鶴屋舞鶴と契り、戀の三角關係が生ずる筋である。〔山崎〕

籬節（まがきぶし） 流行歌 【名義】籬は、遊里の格子のことで、格子先で歌ふ遊里の流行歌を意味するかとも思はれるが、古くより明曆年中に、大阪新町のまがきと云ふ遊女が歌ひ始めたものと云はれてゐる。【解說】明曆に始まり、一時は島原の投節、吉原の繼節と共に三名物と稱せられたが、早く廢れて元祿寶永頃まで辛うじてその節を傳へ、正德年中に至つて絕えた。曲節は投節（別項）と半太夫節（別項）との間のものと云ふが、歌詞は一首も殘つてゐない（新町細見澪標・廓中一覽）。「好色二代男」に「かはりまがきのつれ歌」とあつて、替り歌（變體歌）も存してゐたと見える。「秋田風俗問狀答」に、三月四日傾城しらべとて、能代の遊女が住吉社境內に集り、三味線を彈いて歌ふことを記し、「まかき、とつか、きやらぶしとて三曲あり」とて、「聲はすれども姿は見えぬ籠の鳥のやうらめしや」等の三首の歌をあげ、伴奏樂器に關して「まかきは小鼓三絃也」と記してゐるのは、この古い流行歌が殘存したものであらうか。〔藤田〕

魔風戀風（まかぜこひかぜ） 小說 【作者】小杉天外【發表】明治三十六年二月より讀賣新聞へ連載、九月完結。【刊行】同三十七年、春陽堂（全三册）。明治大正文學全集所收。

【梗概】帝國女子學院の模範生といはれる萩原初野が、自轉車から落ちて片腕を痛め、大學醫院へ入つた。夏本子爵の愛孃で、平生初野を姉の如く慕ふ芳江が絕えず見舞に來る。初野は異腹の兄が東京遊學に反對するのを押して上京した身分なので、學資も不足がち、

自然治療費にも困つたが、深切で、無邪氣で、正直な芳江が、それと察して何彼につけて心配する。初野は費用の都合で早く退院し、下宿で療養してゐると、初野に心を寄せてゐた青年美術家殿井恭一が、物質上の補助をしようと言ひ出す。初野が聴き入れぬので初野の下宿してゐる家の主婦を説いて、その手から殿井の金を借りさせる。初野は同情には感謝したが、にやけた放蕩兒らしい様子には好感を持たない。當時初野の心は、芳江の聟となるべき夏本東吾の男らしい姿に吸ひよせられてゐた。東吾はもう一年經つと法學士になる帝大法科の學生で、彼も許嫁の芳江を好もしくは思ひながら、一方初野の優れた才貌にも心を惹かれ、二人は人知れずロマンチックな夢に醉つてゐる。が、芳江は初野を信じ切つて、初野をも東吾をも疑はない。ただ初野・東吾の關係をほぼ知つた夏本子爵夫妻だけが、どうかして、芳江を初野から離さうとするが、芳江が聴かない。そのうち、初野のもとへ矢張り義兄と合はずに故郷から妹のお浪が逃げ出して來たので、二人で暮さねばならぬ初野の生活は、なほ苦しくなる。資産家の息子である殿井に頼めば、快く金を貸してはくれるだらうが、一度その野心を知つた初野は借りようとはせぬ。と言つて夏本子爵夫妻とは氣まづい間柄になつてゐるので、芳江にも頼めぬ。結局ある植木屋の離座敷を借りて、妹とつつましい自炊生活を送ることにした。これより先き東吾は、殿井に味方する下宿屋の主婦に邪魔されて一時初野から遠ざかつたが、初野の眞情を知つて一段と同情を深め、少からぬ金を彼女に與へる。それが動機となつて東吾と初野はいつか將來を契り合ふ仲となつた。その様子が薄々夏本家に分つたので、養子の東吾は離縁されようとし、芳江は苦悶して家出しようとする。中にはさまつた初野は懊惱の餘り、重い脚氣になやみながらも、靈岸島から房州へ出かけようとする芳江に追ひついた刹那、心臓麻痺で死んで了ふ、駈け付けた東吾と芳江の手を握りながら。



「魔風戀風」口繪（中澤弘光畫）

【批評】當時の若い人々の興味を惹いた女學生の生活を始めて捉へた題材がまづ珍しく、それに本郷學生街の雰圍氣を華やかに描いたので、新聞小說の劃期的な評判を集め、これがために新聞の再版なる稀有な事件さへ起つた。いかに男女學生間にもてはやされたかが想像されるであらう。作物としては興味中心に偏して、主人公初野・東吾の人物が機械的に操られ、却つてお浪及び下宿屋の主婦などの副人物の方が、如實に描かれるといふやうな結果を生じた。芳江も純化せられ過ぎて、不自然な感じがするし、東吾の心理描寫も不十分だが、部分々々と曲折した事件のいきさつでは、この人でなければ出來ない老巧さが到る處にある。なほ單行本の中澤弘光の挿繪は洋畫では最初のものであつた。〔高須〕

【附記】竹柴晋吉の脚色で、明治三十八年三月市川高麗藏・市川猿之助・片岡市藏・坂東秀調・中村芝翫等によつて東京座に上演された。

眞假名（まがな）「萬葉假名」を見よ。

末賀能比連（まがのひれ）　國學書【著者】市川匡麻呂【名稱】文中には末賀能比禮とも書いてゐる。【成立・由來】宣長の「道」についての主著「直毘靈」（別項）に對する駁論書。末賀は禍（まが）であり、比連は領布（ひれ）で、禍心が世に萌し廣まるのを、聖人の道を領布として祓ひ清めようといふ意味である。安永年間の作、刊年不明。【内容】まづ宣長が古語に精通し、歌道に重きをなしてゐる事實を認めて公平ぶりを示し、さりながらその老莊の自然說によつて聖人の說を譏つたのは非であると序言し、「直毘靈」の所說を逐條的に反駁したもので、第一には宣長が古事尊重の基礎とした言傳への價値を否定し、文字傳への確實なのに比して言傳へには謬傳・虛妄の類が多いとし、これによつて我が上代が萬國に勝れてゐるとする國學思想の根據を覆へさうとしてゐる。かくて我が上代の古事は、「後代の天皇の御慮に令成つる祕事」であるとなし、天照大御神は要するに謚であつて、單なる言傳へのまゝに我が國のみを日の神の國とする如きは、日月星辰の普き存在たる理に背き且つ我が國を天地の外に置かんとする謬見であるとした。第二は眞淵・宣長が歷史的事實を擧げて儒道の無力を主張したのに對する反駁で、歷史的に見ても、聖人の道の行はれない世は、人獸の別のない「洪荒の世」で、我が上代もその例に洩れるものではないが、ただ小國故に甚しい缺陷を生じなかつたに過ぎない。かゝる「洪荒の世」を仰ぎ重んずるは以ての外で、漢學渡來によつて聖人の道が行はれたればこそ治績も擧り、君子國たる域にも達し得たのである。かくすることが天皇の御心であり、又幕府の治世方針でもあるとしてある。第三には儒道が人智作爲の空理であるといふ所說を駁し、聖人の道とは「人倫の敎・禮樂・法制」の總稱で、つまりは「人を育て敎へるの料」であり、國學者はこれを空名であるとするけれども、實際は學ぶ者の曉り易からんための設けである。又これを作爲であるとするのは老莊に誤られた謬見であるとし、日本文化史上に於ける儒敎の功績を擧げ、歌道は人心を和げる德はあるが、又偏り易く頑になり易いもので、治世の料にはならないとしてゐる。【價値】聖人の道を治世上最も勝れたものとし、我が文化史上に於ける功績を數へてゐるが、その「聖人の道」の本質を十分に考察しようとはしてゐない。一體に歌學者や歌道を對象としての立論であり、また國學を老莊思想と同一視してゐるのは、眞淵の「國意考」（別項）から宣長の「直毘靈」（別項）への國學思想の發展を理解してゐない所論といはねばならぬ。

【參考】直毘靈本居宣長○葛花同上○級長戸風　沼田順義　〔西尾〕

卷絹（まきぎぬ）「藝能物の謠曲」を見よ。

摩詰庵入日記（まきつあんいりにつき）　俳諧紀行二册【著者】雲鈴（吉井雲鈴とは別である）【名義】冒頭に「摩詰庵が入日記は、ことしの秋草庵を巢作りて、たはぶれに申し侍る名なり」とあるから、摩詰庵に入る日記の謂であらう。略して「入日記」ともいふ。【成立・由來】著者

侍臣といふ）、初め雲嶺、別號摩詰庵・婆且人・茶九蓮寺などと號した。致仕して其角に俳諧を問ひ、次いで支考に學び、後、許六に師事した。各地を遍歴したが、元祿の末佐渡に往來し、後、越後出雲崎に草庵を結び、享保二年二月二日こゝに歿した。

【參考】俳人雲鈴の研究　鈴木重雅（國文敎育五ノ五・六）〔各務〕

莫目（まくも）　樂器【解說】莫牟とも書く。

ない。〔田邊〕

枕詞（まくらことば）　和歌【名稱】枕詞は歌の修辭の上で、普通五音から成る修飾的な語をそへるのをいふ。枕となる詞の意である。枕詞は發語（日本紀私記）・諷詞ともいふ。近世になり、春滿・眞淵等は冠辭といひ、士淸（ことすが）は頭辭ともいふ。【起原】枕詞の最初は意味のある形容詞的な語であつたらしい。「常陸風土記」に風俗諺・俗・風俗說等あるが、これ等を見ると

（枕詞鈔）契沖○冠辭解賀茂眞淵○冠辭考賀茂眞淵○枕詞解鹿持雅澄○枕詞の研究と釋義福井久藏　○枕詞發生の第一頁　生田耕一（國語國文の研究）○枕詞及序の研究　市村平（國語と國文學昭和五ノ六・七）〔久松〕

枕獅子（まくらじし）「石橋」を見よ。

枕慈童（まくらじどう）「仙人物の謠曲」を見よ。

枕草子（まくらのさうし）　隨筆【作者】淸少納言【名稱】「淸少納言が（の）記」ともよばれ（禁祕抄

野のもとへ矢張り義兄と合はずに故郷から妹のお浪が逃げ出して來たので、二人で暮さねばならぬ初野の生活は、なほ苦しくなる。資産家の息子である殿井に頼めば、快く金を貸してはくれるだらうが、一度その野心を知つた初野は借りようとはせぬ。と言つて夏本子爵夫妻とは氣まづい間柄になつてゐるので、芳江にも頼めぬ。結局ある植木屋の離座敷を借りて、妹とつつましい自炊生活を送ることにした。これより先き東吾は、殿井に味方する下宿屋の主婦に

の餘り、重い脚氣になやみながらも、靈岸島から房州へ出かけようとする芳江に追ひついた刹那、心臓麻痺で死んで了ふ、駈け付けた東吾と芳江の手を握りながら。【批評】當時の若い人々の興味を惹いた女學生の生活を始めて捉へた題材がまづ珍しく、それに本郷學生街の雰圍氣を華やかに描いたので、新聞小説の劃期的な評判を集め、これ

ようといふ意味である。安永年間の作、刊年不明。【内容】まづ宣長が古語に精通し、歌道に重きをなしてゐる事實を認めて公平ぶりを示し、さりながらその老莊の自然説によつて聖人の説を譏つたのは非であると序言し、「直毘靈」の所説を逐條的に反駁したもので、第一には宣長が古事尊重の基礎とした言傳への價値を否定し、文字傳への確實なのに比して言傳へには謬傳・虚妄の類が多いとし、これによつて我が上代が萬國に勝れてゐるとする國學思想の根據を覆へさうとしてゐる。かくて我が上代の古事は、「後代の天皇の御慮に合成（ならせ）つ

とし、日本文化史上に於ける儒教の功績を擧げ、歌道は人心を和げる徳はあるが、又偏り易く頑になり易いもので、治世の料にはならないとしてゐる。【價値】聖人の道を治世上最も勝れたものとし、我が文化史上に於ける功績を數へてゐるが、その「聖人の道」の本質を十分に考察しようとはしてゐない。一體に歌學者や歌道を對象としての立論であり、また國學を老莊思想と同一視してゐるのは、眞淵の「國意考」（別項）から宣長の「直毘靈」（別項）への國學思想の發展を理解してゐない所論といはねばならぬ。

【參考】直毘靈本居宣長〇葛花同上〇級長戸風　沼田順義　〔西尾〕

巻絹（まきぎぬ）「藝能物の謠曲」を見よ。

摩詰庵入日記（まきつあんいりにつき）　俳諧紀行　二册　【著者】雲鈴（吉井雲鈴とは別である）【名義】冒頭に「摩詰庵が入日記は、ことしの秋草庵を巣作りて、たはぶれに申し侍る名なり」とあるから、摩詰庵に入る日記の謂であらう。略して「入日記」ともいふ。【成立・由來】著者の結庵並に北國旅行の記念としたもので、許六の跋によると、元祿十六年夏上洛した時の編に係る。芭蕉の「銀河序」の文を掲げ、これを寫し得た由來を附記して序に代へてゐる。【刊行】元祿十六年【諸本】俳諧紀行全集（俳諧文庫）所收。【解説】著者が元祿十三年佐渡に渡つた時の「北國紀行」（上卷）と、元祿十六年佐渡から歸洛した折の旅行記及び往復の旅行中、並に佐渡の草庵在住中に得た著者及び知友の發句・連句・文章等（下卷）とから成つてゐる。北國紀行は、元祿十三年正月末頃明石を立ち、姫路を經て海路但馬に上陸し、丹後・若狹・越前・加賀・越中・越後の各地に立寄り、新潟から佐渡に渡り、六月に至る紀行である。歸洛の旅行は、卯月の末佐渡を立つて出雲崎に上陸し、それから越中・加賀・越前・近江の各地に立寄り、六月京に入つたのである。この旅行中、大聖寺で支考と邂逅してゐる。纏つた文は、下卷冒頭にある著者の「示㆓汎鶴㆒詞」及び同卷中にある吾仲の「待㆓子規㆒辨」の二篇のみで、その他は發句の前書文・説明文の如きものに過ぎないが、その中にも生彩の掬すべきものがあり、又著者の作の外各地の蕉門俳人の作の見られるのが本書の價値である。【著者小傳】雲鈴は奥州南部の藩士（本庄家の侍臣といふ）、初め雲嶺、別號摩詰庵・婆且人・茶九蓮寺などと號した。致仕して其角に俳諧を問ひ、次いで支考に學び、後、許六に師事した。各地を遍歴したが、元祿の末佐渡に往來し、後、越後出雲崎に草庵を結び、享保二年二月二日こゝに歿した。【參考】俳人雲鈴の研究　鈴木重雅（國文教育五ノ五・六）　〔各務〕

莫目（まくも）　樂器　【解説】莫牟とも書く。古代の百濟樂及び高麗樂に於て用ひられた所の樂器で、今日は全く滅び、今はその形さへ全く不明となつてしまつた。平城天皇大同四年の太政官符には、高麗樂師及び百濟樂師の中に莫目師の名があるから、その頃迄は行はれてゐたものらしい。然るにこの名稱は我が國にのみあつて、朝鮮に於ても支那に於ても全く古書の中に見當らない。從つてこの樂器の性質を知ることが出來ない。ただ「歌舞品目」には「按ズルニ是レ管籥ノ類ナルニヤ。其形狀未詳」とあり、又「和名抄」には、これを管籥類に入れてある。これに由つて見ると縦に吹く笛であつたらしい。古畫には箜篌（くだらごと）などと共に縦笛を用ひてゐる畫もあるから、これが莫目かも知れない。又朝鮮の古樂器の中には小管子とて小なる縦笛があり、或は又郷觱篥とて八孔の小篳篥があるが、後者は古代の三韓の時に生じたもので、その頃には桃皮を卷いたものらしい。「まくも」といふ名は當時我が國でこれを呼んだものかも知れない。のみならず、この郷觱篥は支那の篳篥に比して不完全なところから、平安朝になつて樂制改革後に支那篳篥を以てこれに代用することになつたので、嵯峨天皇頃から莫目の名稱が消えてしまつたのであらう。併しこの説は推測に過ぎない。　〔田邊〕

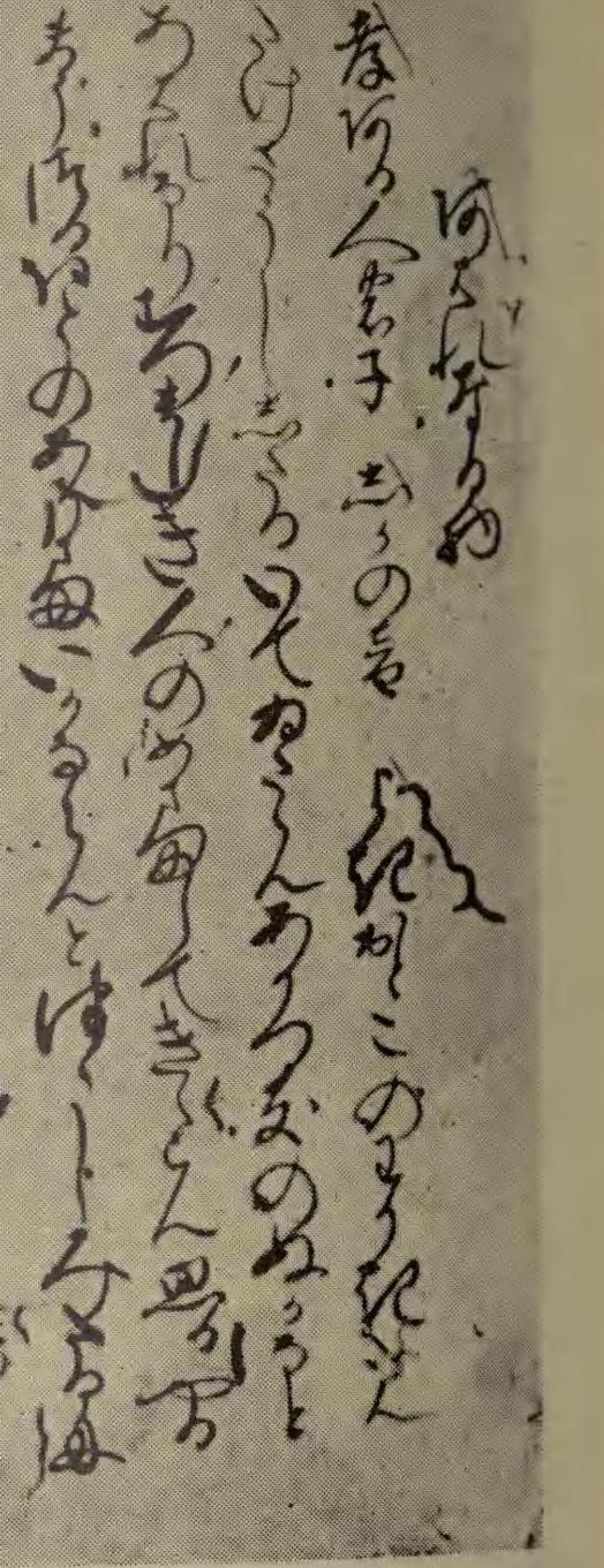
枕詞（まくらことば）　和歌　【名稱】枕詞は歌の修辭の上で、普通五音から成る修飾的な語をそへるのをいふ。枕となる詞の意である。枕詞は發語（日本紀私記）・諷詞ともいふ。近世になり、春滿・眞淵等は冠辭といひ、士清（ことすが）は頭辭ともいふ。【起原】枕詞の最初は意味のある形容詞的な語であつたらしい。「常陸風土記」に風俗諺・俗・風俗説等あるが、これ等を見ると「白遠（しらとほ）新治之國」「握飯筑波之國」など、枕詞として解されるものが多い。これは枕詞の最初が「諺」といふやうな性質を有してゐたのであらう。それが次第に直接の意味を失ひ、單純な修飾語となつたものであらう。【種類】枕詞の總數は極めて多い。「枕詞の研究と釋義」によると、その總數を約千二百語とし、「古事記」「日本紀」の時代の枕詞が凡そ百三十、「萬葉集」には約五百、「三代集」には約三百、鎌倉・室町時代に創始されたものは殆どなく、江戸時代には二百六十ほどあるとしてある。この枕詞を音數の上から見ると大部分は五音で、外に「あさひの」「あめなる」「あまだむ」の如き四音、「かぜのおとの」「きみをおきて」「このくれやみ」の如き六音、「あやめのくさの」「いつしばはらの」の如き七音の枕詞が少數ある。また性質の上から分けると、（一）音の連續によるもの「あさぢはらつばらつばらに」「ありぎぬのありてのちにも」「さゆりばなゆりもあはむと」の如きもの。（二）觀念の上の聯想によるもの「あしがちるなには」「かもじもの水に浮きゐて」の如きもの。（三）感情の聯想をひきおこす「あさぎりのおもひまどひて」の如きものとに分れる。【參考】枕詞燭明抄下河邊長流〇萬葉代匠記（枕詞部）契沖〇冠辭解賀茂眞淵〇冠辭考賀茂眞淵〇枕詞解鹿持雅澄〇枕詞の研究と釋義福井久藏〇枕詞發生の第一頁　生田耕一（國語國文の研究）〇枕詞及序の研究　市村平（國語と國文學昭和五ノ六・七）　〔久松〕

枕獅子（まくらじし）「石橋」を見よ。

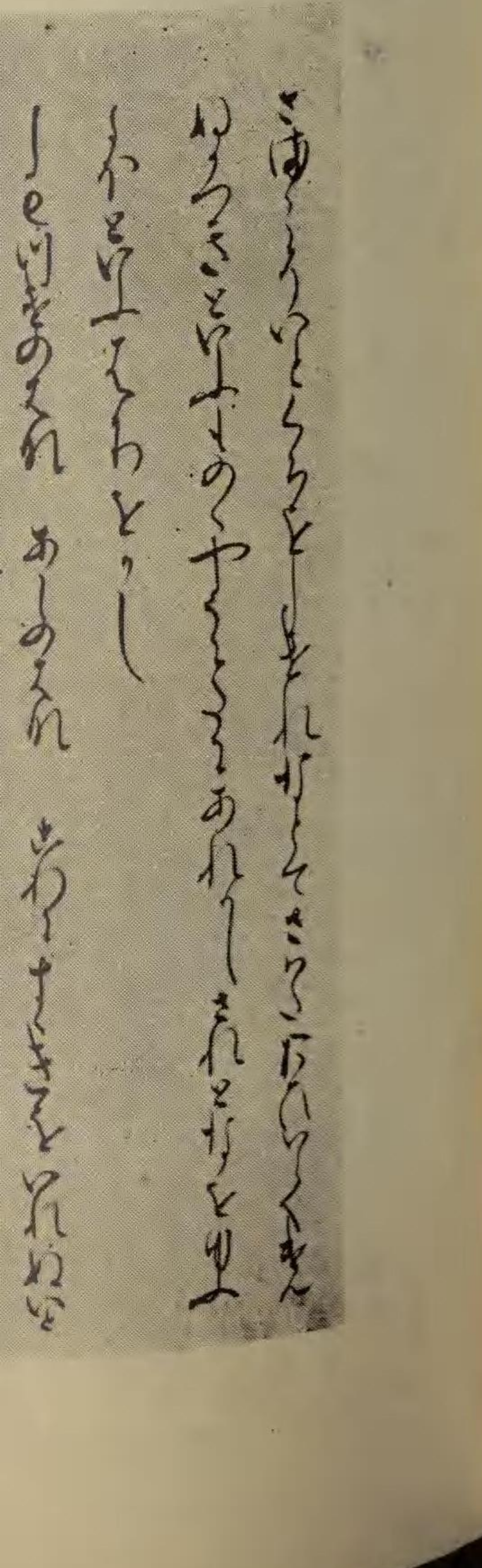
枕慈童（まくらじどう）「仙人物の謠曲」を見よ。

枕草子（まくらのさうし）　隨筆　【作者】清少納言【名稱】「清少納言が（の）記」ともよばれ（禁祕抄八雲抄）、略して「清少納言」ともよばれた（明月記その他）。「清少納言枕草子」とあるのは、「清少納言が枕草子」、或は「清少納言の枕草子」とよむべきであらう。「枕草子」とのみよばれるのは古い慣例ではあるまい。「枕草子」は「の」の字を附してよむのが普通である。草子は草紙とも、双紙とも書かれるが、これには諸説があつて明確に斷定し難い。冊子の轉化であらうとも、雙び紙の意であらうとも、草稿の意であらうとも云はれる。内容的に云へば、草稿風なもの、表向きでないものを集めたものであるが、言葉の成立から見れば冊子の轉化であると見る説が一般に有力である。別に「枕雙紙」と稱する本があるが、これは跋文に「晝置ニ座右ニ夜置ニ枕上ニ」とあつて、惠心僧都の作である。次に所謂「清少納言枕草子」に、なぜ「枕草子」といふ名がつけられたのであるか、つけた人は誰であるか、全く不明である。古來諸説が多く傳はつてゐるが、北村季吟は「春曙抄」に於て二説をあげてゐる。その一は、この草子に先づ枕詞即ち題詞を書き、その下に本文を書き連ねてゐるからであるとし、その二は、この草子の跋文にある記事を引用して、枕にこそはし侍らめとて申うけたる物にかゝれた草子であるからであるとしてゐる。

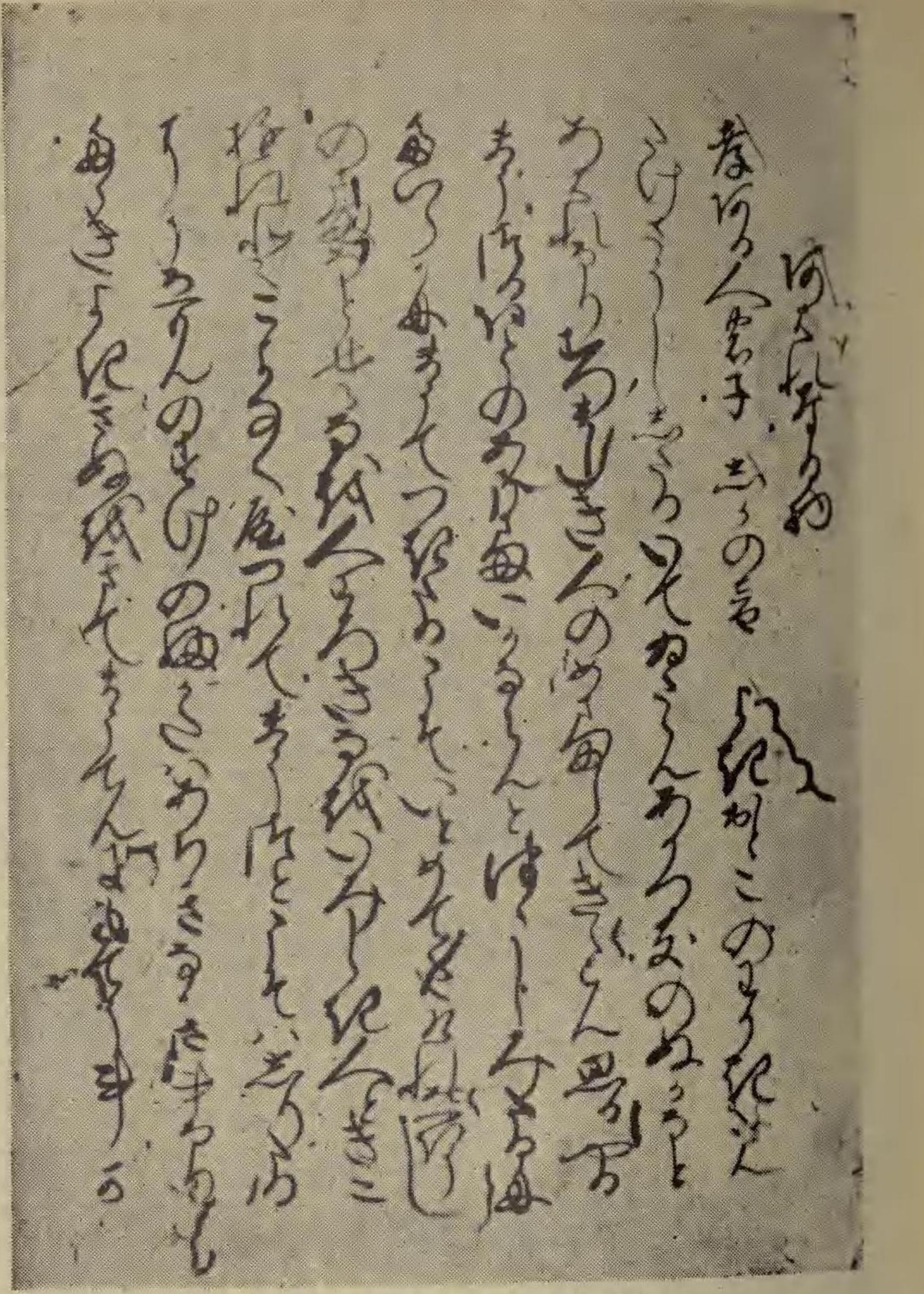
契沖も「河社」卷二に於て、「枕草子となつくるよしは、彼草子の奥にみづからかけるがごとし」と云つて、跋文に據るといふ説を肯定してゐる。しかし跋文そのものが、果して清少納言自ら記するところであるか否かは確證がないのであるから、かりに「枕草子」といふ名稱が跋文から出たものであるにしても、清少納言自ら題した名稱であるとは斷定し難い。「枕草子」といふ意味は、枕にするばかり身に近くもてあそぶといふ心であらうと契沖の説があるが、從ふべきであらう。【成立】確證はないが、草子中に寛和二年六月と思はれる記事が見えるのが最初で、それから十五年後の長保二年八月と思はれる記事の見えるのが最後であるから、少くとも長保二年以後に完成したものと見るべきであらう。清少納言が中宮定子に仕へたのは、正曆年中であつたらしい。草子の中の記事もこの頃から多くなつて、長德・長保、わけて元年・二年の記事が多い。「三卷本枕草子」の終りに、「左中將まだ伊勢の守と聞えし時云々」とて、「枕草子」の草稿本が左中將の手で世に出された由の記事が見える。この跋は後人の追記で、遽かに信用し難いが、もし何等かの根據があつて書かれたものであるとすれば、左中將即ち源經房が伊勢權守たりし時、即ち長德元年同二年の頃、已に「枕草子」の一部が脱稿してゐた事になる。一體「枕草子」は、如何なる事情で執筆されたか。短日月の間に執筆されたか、或は相當長い年月の間に執筆されたか、清少納言自筆の本は現在傳はつてゐる流布本と同樣の形のものであつたか否か、さういふ問題が不明である。跋文によれば、執筆の事情がほぼ明かであるが、これも前記の如く果して少納言の記したものであるか否か不明である。吉野吉水社藏の樂書によれば、この草子は「源氏物語」（別項）に對抗して執筆されたものとなるが、この説も恐らく後人のさかしらであらう。「枕草子」の成立の年代又は事情は、精密な異本研究と詳細な作者の傳記考證とを基礎として、明かにされなければならない。そして今の所では、この兩方の研究が、大成されるまでになつてゐないのであるから、成立に關する問題については、何とも斷定を下す譯に行かない。【諸本】異本が甚だ多い。岡西惟中の「枕草紙旁註」に、當時三種の異本が行はれてゐた事をのべてゐる。三種の異本中、第一種は三卷本、第二種は五卷本、第三種は七卷本である。三卷本は三卷（三冊或は四冊に分つ。もと二冊の本ありしにや）から成つてゐて、他の諸本よりも比較的正しい本文を傳へてゐるやうに見えるが、後世あまり行はれなかつたらしく、現在ではわづか數部（宮內省圖書寮・近衞公爵家・故富岡謙藏氏・前田侯爵家・內閣文庫・松井簡治博士・久原文庫・京都帝國大學・狩谷文庫・鈴鹿三七氏等）の古寫本が傳へられてゐるに過ぎない。淺野侯爵家にはこの本の本文によつた繪卷が傳へられてゐる。まだ何人も實物を精査してゐる譯ではないが、勸修寺伯爵家に、敎秀自筆と思はれる古傳本が藏せられてゐることは確かである。この系統の本の奥書には、「本云往事所持之荒本紛失年久、更借出一兩本、令書寫之、依無證本不散不審、但管見之所及勘合舊記等、注付時代年月等、是亦謬案歟、安貞二年三月　耄及愚翁在判」とあり、更に「文明乙未之仲夏廣橋亞槐送實相院准后本下之本末兩册見示曰余書寫所希也嚴命弗獲默馳禿毫彼舊本不及切句此新寫讀而欲容易故比校之次加朱點畢　正二位行權大納言　藤原朝臣敎秀」とあつて、奥書を有する傳本中最も古いものの一つである。この三卷本は、惟中が「少而見者亦少」といひ、季吟が「尾州より一本を得たり。上下二册、其本紙ふるく手跡中古の筆體なりき云々」と云つてゐる。この系統の本は、當時かなり珍重され、ひそかに諸家の間に書寫された。第二の五卷本は、もと能因が所持してゐた系統の本であるらしく、三條西家の實隆か誰かに傳へられて二冊に寫され（この間の事情は明かでないが、現に三條西家に古寫本二冊を藏す）、更にそのまゝ細川幽齋によつて寫し傳へられた（細川侯爵家藏幽齋自筆本の奥書）。そしてこの本は、幽齋から因州藩士宮木孝庸に傳へられ、更に惟中に傳はつたものである（枕草紙旁註）。尤も幽齋自筆の本は二册になつてゐるから、惟中がどうして五卷の本と云つたか。幽齋は三條西家の本を寫した本以外に、別に五册の本を所持してゐて、それを孝庸に傳へたのであらうか。幽齋自筆本は、旁註本よりも、むしろ慶安の木版刊本に類似するのはどうしたことであらうか。この點は不明であるが、今は假りに、旁註本は幽齋自筆本の系統に屬すべきものと見て、當時流行の他の異本を以て校合した爲めに、かく可なりの本文の異同が生じたと考へておきたい。なほ幽齋自筆本の系統としては、十行、十二行、十三行の古活字本がある。右の中、十行本は、最も古い活字本で、傳本も少くただ內閣文庫に五册あるのみである。次に十二行古活字本は、十行本によつて更に飜刻したもので、年代はずつと新しいものである。岩崎文庫・近衞公爵家・京都帝國大學・神宮文庫等に藏せられてゐる。十三行本は、寛永頃のものと思はれ、岩崎文庫（二部）・久原文庫・內閣文庫（二部）・京都帝國大學・帝國圖書館・廣島高等師範學校・靜嘉堂文庫等に藏せられてゐる。以上の古活字本は、五卷本の系統に屬するが、幽齋自筆本と比校して見ると多少の相違がある。幽齋本は必ずしも古活字本の親本になつたとは云へない。むしろ二つは姉妹の關係に立つと考へた方が正しいかも知れない。活字本は又旁註本に比校して見ても相互に異同が少くない。北村季吟の「春曙抄」、加藤盤齋の「枕草紙抄」等にも五卷本の影響はたしかにある。これ等の本文の亂れたのは、諸本による校合の結果であらう。次に第三の七卷本とは、「清少納言」の題簽を有する木版本のことである。この本は明かに卷數を示さないため、後世或は七册、或は五册、或は四册に分けてあるが、普通七册になつてゐる。奥に「慶安二曆初夏上旬、二條通澤田庄左衞門刊板」とある本で、惟中が「七卷之本書林風月堂開板多行于世」と云つた本である。この本は細川幽齋自筆本即ち五卷本に最も類似した內容を有し、これと同じ系統に立つ本であるが、或る時代に傳寫の、誤差を生じたまゝ傳へられて今日に及んだものと思ふ。從つて五卷本と七卷本とは、形式的な差異に重きを置いた名稱であつて、內容的には著しく異なつたものではない。以上は大同小異の異本であるが、これ等の本に對して、全然異なつた系統の本と思はれるものに、「異本枕草子」がある。この本は別に「後光嚴院宸翰本」ともよばれ、その奥に「這本以　後光嚴院宸翰不違一字書寫功了、右清少納言枕册子原爲一册、標題無之、半面十一行書之、今分上下加題目、且文章中、雖有可疑者、以謂後光嚴院宸翰、不違一字書寫、不敢改之、如假名遣



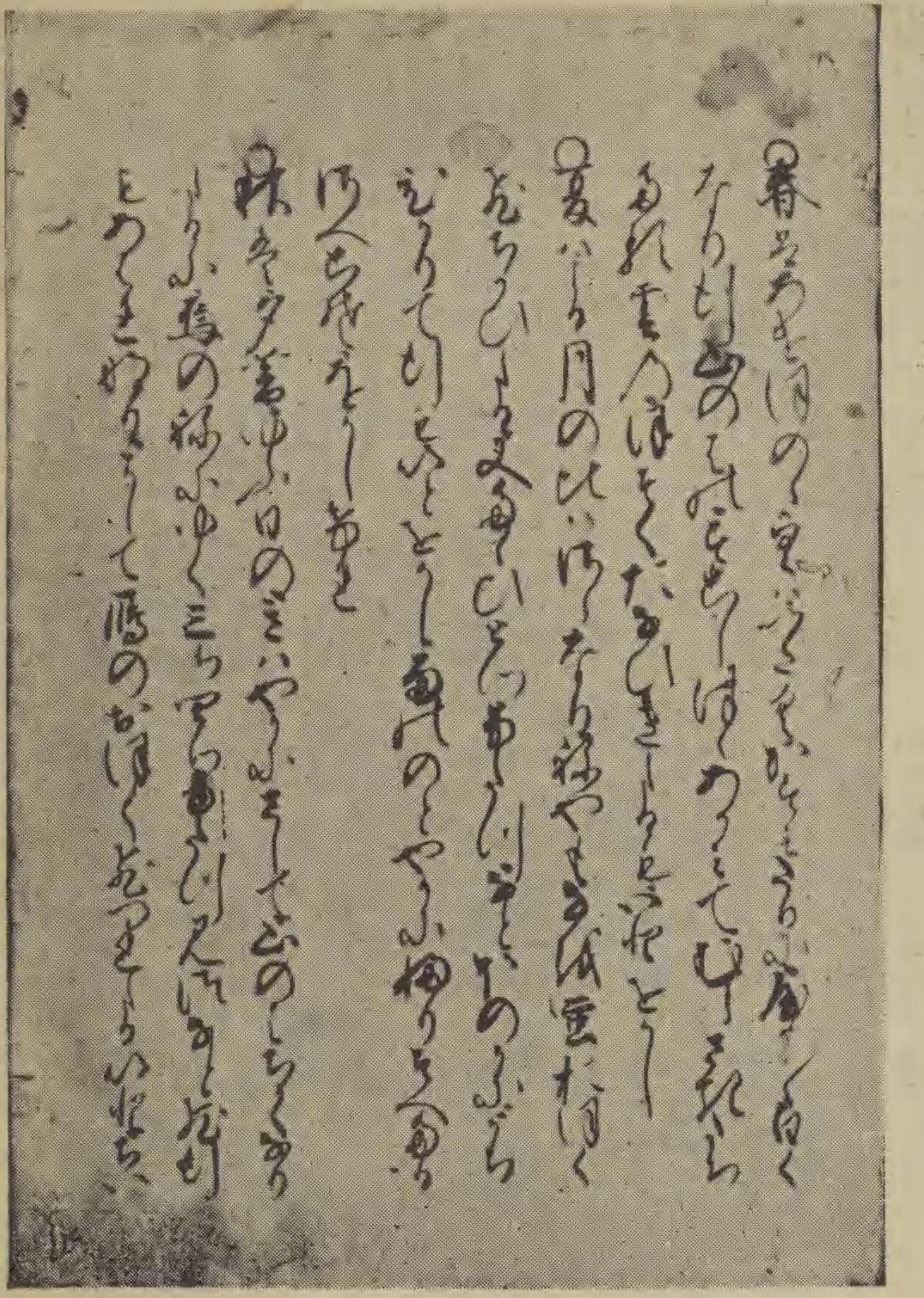
五巻本枕草子



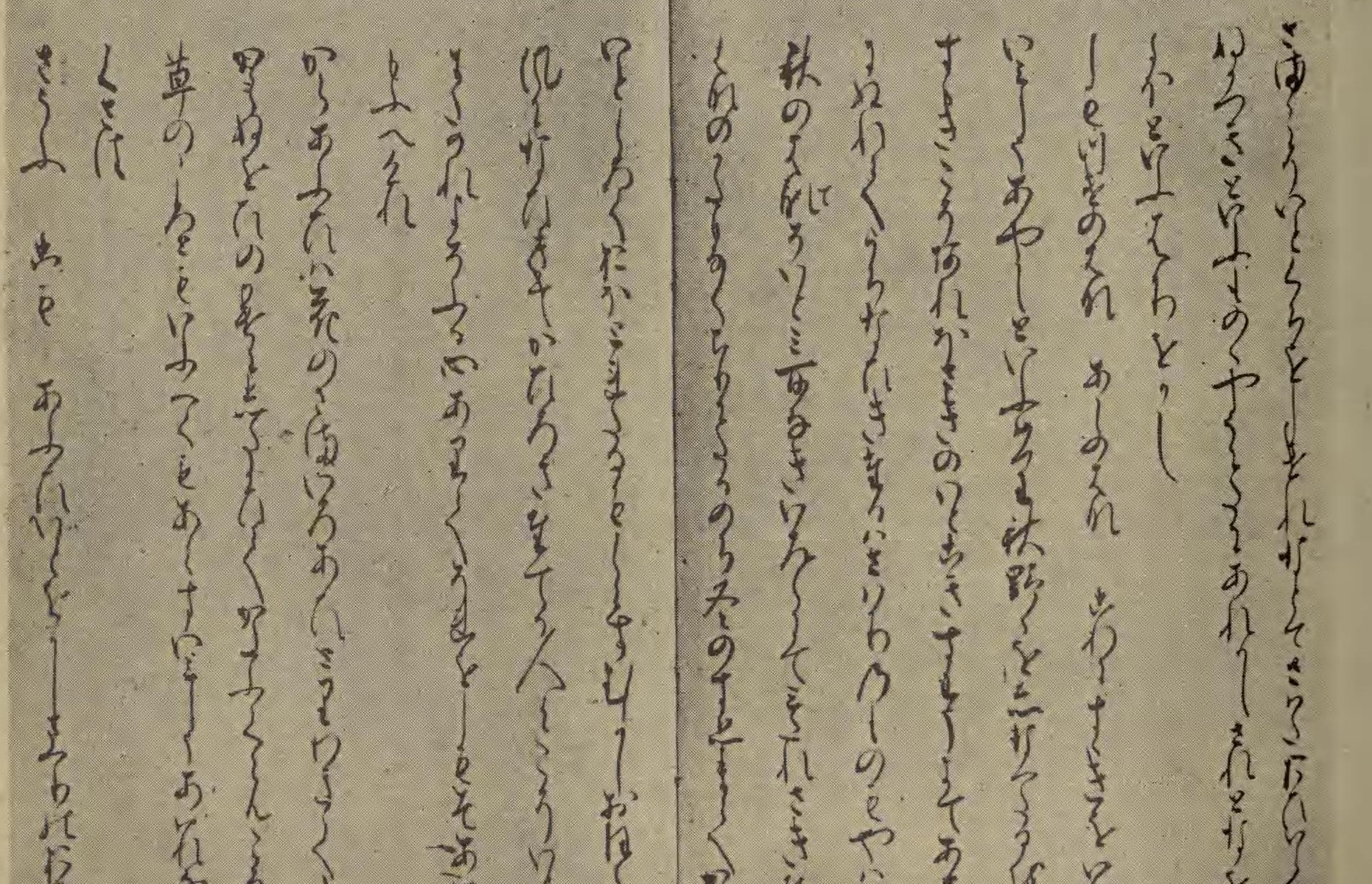
枕草子古寫本



五卷本枕草子（高野辰之氏藏）



摺本枕草子（高野辰之氏藏）



前田家本枕草子（前田侯爵家藏）

この跋は後人の追記で、遽かに信用し難いが、もし何等かの根據があつて書かれたものであるとすれば、左中將即ち源經房が伊勢權守たりし時、即ち長徳元年同二年の頃、已に「枕草子」の一部が脱稿してゐた事になる。一體「枕草子」は、如何なる事情で執筆されたか。短日月の間に執筆されたか、或は相當長い年月の間に執筆されたか、清少納言自筆の本は現在傳はつてゐる流布本と同樣の形のものであつたか否か、さういふ問題が不明である。跋文によれば、執筆の事情がほぼ明かであるが、これも前記の如く果して少納言の記したもの

寫本が傳へられてゐるに過ぎない。淺野侯爵家にはこの本の本文によつた繪卷が傳へられてゐる。まだ何人も實物を精査してゐる譯ではないが、勸修寺伯爵家に、敎秀自筆と思はれる古傳本が藏せられてゐることは確かである。この系統の本の奥書には、「本云往事所持之荒本紛失年久、更借出一兩本、令書寫之、依無證本不審、但管見之所及勘合舊記等、注付時代年月等、是亦謬案歟、安貞二年三月　耄及愚翁在判」とあり、更に「文明乙未之仲夏廣橋亞槐送實相院准后本下之本末兩册見示曰余書寫所希也嚴命弗獲默馳禿毫彼舊本不及切句此新寫讀而欲容易故比校之次加朱點畢　正

ことであらうか。この點は不明であるが、今は假りに、旁註本は幽齋自筆本の系統に屬すべきものと見て、當時流行の他の異本を以て校合した爲めに、かく可なりの本文の異同が生じたと考へておきたい。なほ幽齋自筆本の系統としては、十行、十二行、十三行の古活字本がある。右の中、十行本は、最も古い活字本で、傳本も少くただ内閣文庫に五册あるのみである。次に十二行古活字本は、十行本によつて更に飜刻したもので、年代はずつと新しいものである。岩崎文庫・近衞公爵家・京都帝國大學・神宮文庫等に藏せられてゐる。十三行本は、寛永頃のものと思はれ、岩崎文庫

に立つ本であるが、或る時代に傳寫の、誤差を生じたまゝ傳へられて今日に及んだものと思ふ。從つて五卷本と七卷本とは、形式的な差異に重きを置いた名稱であつて、内容的には著しく異なつたものではない。以上は大同小異の異本であるが、これ等の本に對して、全然異なつた系統の本と思はれるものに、「異本枕草子」がある。この本は別に「後光嚴院宸翰本」ともよばれ、その奥に「這本以　後光嚴院宸翰不違一字書寫功了、右清少納言枕册子原爲一册、標題無之、半面十一行書之、今分上下加題目、且文章中、雖有可疑者、以謂後光嚴院宸翰、不違一字書寫、不敢改之、如假名遣

亦偏任太畢」とあつて、群書類從にをさめられてゐるが、この系統の本は、前述の諸本とは全く異なつた別の本で、字句はもとより章段の數及び順序も著しく異なつてゐる。三卷本・五卷本・七卷本の系統の諸本は、何の順序も組織もなく、雜然と章段が記述されてゐるが、この宸翰本には一つの組織がある。即ち記事の分類が三部に分れてゐて、第一類は天地自然の現象又は事物に關するもので、第二類は

はれなる事どもに對する感想を記し、最後に衞門佐のふかた（一本にのふたかとあり）が御獄に詣でた事について述べて卷を終つてゐる。

上述の諸本の外に、全然異つた本は、前田侯爵家藏の本である。この本は四册から成つてゐて、育德財團から複製された。古筆家は、藤原爲氏の筆とも、民部卿局の筆とも云つてゐるが、少くとも鎌倉中葉以前の書寫である。この本は、大體堺本系統の本であるが、まゝ

するもの、例へば、木は、とりは、むまは、ねこは等。(五)神佛に關するもの、例へば、佛は、神は、だらには、修法は等。(六)人に關するもの、例へば、法師は、をんなは、大夫は等。(七)趣味・娛樂に關するもの、例へば、ひくものは、歌は、ものがたりは、あそびは等。(八)裝束に關するもの、例へば、そくたいは、狩衣は、夏のうはぎは等。(九)日用品又は調度に關するもの、例へば、ひあふぎは、

類書はない。特殊な氣品と風格とを具へた點において、王朝時代の文壇に光輝を放つ。この草子は、後世日本文學の諸作品に著しい影響を與へた。この草子は、古くから李義山の雜纂に摸倣して作られたものとされる。しかしその說が當を得てゐないことは、古くから石原正明の「年々隨筆」をはじめ、近世諸家の等しく論じた所である。武藤元信が云つたやうに、清少納言は和歌をものするやうな氣持、

亦偏任本畢」とあつて、群書類從にをさめられてゐるが、この系統の本は、前述の諸本とは全く異なつた別の本で、字句はもとより章段の數及び順序も著しく異なつてゐる。三卷本・五卷本・七卷本の系統の諸本は、何の順序も組織もなく、雜然と章段が記述されてゐるが、この宸翰本には一つの組織がある。即ち記事の分類が三部に分れてゐて、第一類は天地自然の現象又は事物に關するもので、第二類は人間の精神生活に關するもので、第三類は四季の情趣に關するものである。宸翰本以外の諸本にはこの組織がなく、雜然と纂輯してある。宸翰本の系統の本で今一本珍らしい本は堺本である。堺本とは「春曙抄」及び「群書一覽」に「又一本（上下二冊）堺本とて宮内卿清原氏の奥書あり。發端より一紙がほどはよのつねの本に大かた似て、其次、枕詞の次第など大に異なり云々」と見えてゐる本である。この本には奥書に「(前略)泉のさかゐに世をそむきたるわさしていとまあるを幸として好事の佳士道巴といふ翁の心の月をすまして身のさとり明かなるか持なれたる本をしはし借もちひて書寫せしむる處也云々」とあるから、名づけられたのであらう。古く幽齋もこの本を見たし、季吟も盤齋も見てゐるけれど、古來極めて稀な本で、今でも傳本は甚だ少い。無窮會文庫・靜嘉堂文庫・高野辰之博士等の所藏本の外に、前田侯爵家に「四季物語賦之申ノ書」と題する殘缺本がある。堺本は宸翰本の系統のものであるが、宸翰本と異る所は、その章段が多いといふことである。即ち宸翰本は、「きよけなるわらはへの云々」の段で終つてゐるが、堺本は更に「七月つこもりかたに云々」の段につづき、四季の情趣を主にして敍し、人事上のあはれなる事どもに對する感想を記し、最後に衛門佐のふかた（一本にのふたかとあり）が御獄に詣でた事について述べて卷を終つてゐる。上述の諸本の外に、全然異つた本は、前田侯爵家藏の本である。この本は四冊から成つてゐて、育德財團から複製された。古筆家は、藤原爲氏の筆とも、民部卿局の筆とも云つてゐるが、少くとも鎌倉中葉以前の書寫である。この本は、大體堺本系統の本であるが、まゝ三卷本の要素も、古活字本の要素も、公平に含んでゐる。第一冊は自然の現象又は事物についてのべ、第二冊は人間の情意生活について記し、第三冊は折にふれて四季の情趣、人事上の興趣についてのべ、第四冊は當時清少納言の見聞した事どもについて記してゐる。第五冊は、もと必ず有してゐたと考へられるが、今はない。これ等の分類の仕方は、たしかに原本に近いもののやうに思はれる。尤も前田家本は原本の散佚後、何人かの手によつて整理し直されたものであることは勿論である。前田家本が諸本の要素を公平に含んでゐるといふ點から推して、もしこの本が諸本を綜合整理した集成校合本であるとすれば、かかる大事業が已に鎌倉中期以前に於て成されたといふ興味ある事實が明かにされる譯であるが、それは何とも斷言する譯に行かない。

【内容】異本によつて、多少内容に增減があるが、しかし編纂の仕方又は順序に大異のあるほど内容に異同はない。(一)自然の現象に關するもの、例へば、春は、夏は、日は、雲は、ふるものは等。(二)地理・地文に關するもの、例へば、山は、森は、池は、島は等。(三)土木・家屋に關するもの、例へば、關は、橋は、みささぎは、社は、寺は等。(四)動植物に關するもの、例へば、木は、とりは、むまは、ねこは等。(五)神佛に關するもの、例へば、佛は、神は、だらには、修法は等。(六)人に關するもの、例へば、法師は、をんなは、大夫は等。(七)趣味・娛樂に關するもの、例へば、ひくものは、歌は、ものがたりは、あそびは等。(八)裝束に關するもの、例へば、そくたいは、狩衣は、夏のうはぎは等。(九)日用品又は調度に關するもの、例へば、びあふぎは、おりものは、すゝりのはこは、たゝみは等。以上は第一類に屬するもので、主として天然自然の現象又は客觀的に見られた事物に關するものである。次に(一〇)めでたきもの、あはれなるもの等は、主觀的な精神内容に關するもので、第二類に屬す。次に(一一)正月一日は、五六月のゆふつかた等は、四季の情趣に關するもので第三類に屬す。次に(一二)男はおやなくなりて云々。若くてよき男の云々等の記事は、自然又は人生の面白味についてのべた感想又は隨筆であつて第四類に屬す。最後に(一三)小白河といふ所は云々、しげいしや東宮にまゐりたまふ云々等の記事は、著者が、當時自ら見聞した事どもに對する日記・紀行・感想であつて第五類に屬す。枕草子の内容は、上述の如くこれを五類に分けることが出來る。前田侯爵家本は、この分類のまゝに冊を立ててあつて、これが最も原本の面影を忠實に傳へたものではないかと思はれる。

【史的地位】假名文で表現せられた物語としては、「竹取物語」「伊勢物語」「宇津保物語」「大和物語」「落窪物語」（各別項）等があり、日記としては「土佐日記」「蜻蛉日記」（各別項）等がある。「枕草子」は、それ等の諸書とは全然異つた方面を開拓して生れた作品であつて、他に類書はない。特殊な氣品と風格とを具へた點において、王朝時代の文壇に光輝を放つ。この草子は、後世日本文學の諸作品に著しい影響を與へた。この草子は、古くから李義山の雜纂に摸倣して作られたものとされる。しかしその説が當を得てゐないことは、古くから石原正明の「年々隨筆」をはじめ、近世諸家の等しく論じた所である。武藤元信が云つたやうに、清少納言は和歌をものするやうな氣持、換言すれば熱心なる創作慾に驅られて筆を執つたのである。そこには感受性の清新鋭敏、聯想の自由奔放なるものが認められるから、作者にあらでは見られない自然、感じられない人間の一面が、しつかりと把握されてゐる。さういふ意味に於て、この草子は個性に徹した作品である。この草子の成立した時代は、王朝時代の宮廷女流文藝が、最高潮に達しようとしてゐた時代である。即ち日本文學に於けるロマンチシズムの傾向が、爛熟の頂點に達しつつあつた時代である。從つて當時の作品は、いづれも多かれ少かれ、幻想的・感傷的傾向を持たないものはない。和泉式部でも、紫式部でも、皆同樣である。然るに「枕草子」は、浪漫的精神を多分に盛りながら、しかも著しく感傷的傾向を見せず、冷靜なる知性と實寫的傾向とを示すところに、作者清少納言の性格の反映が見られる。そして、そこに「枕草子」の價値は存する。

【研究史】「源氏物語」と並び稱せらるゝ國文學上の大作であるにかゝはらず、近世に至るまで、「枕草子」は研究の埒外に置かれてきた。「本朝書籍目錄」に「清少納言枕草子二卷、同注十卷、季經卿注」とある本は今傳はらないが、「花園院御記」にも引かれて、たしかにあつた

にはあつたらしい。季經といふ人の傳記は明かでないが、顯輔の子宮內卿季經ではないかと思はれる。六條家の學統に立つ彼が、「古今六帖」の影響を非常に受けたらしい「枕草子」の註を書くことはありさうな事である。鎌倉初期には、耄及愚翁と名乘る人が、この草子の本文を校定し、勘物を加へた。降つて足利中葉に至り、姉小路濟繼は、「枕草子」を書寫して研究したが、その本は、能因所持の舊本の系統のものであつた。この系統の本は、三條西家に傳はり、更に細川幽齋に傳はつた。幽齋は、三卷本、堺本等の異本によつて研究し、これを宮木孝庸に授け、更にその說は岡西惟中に傳はつた。惟中は傳來の本即ち五卷本に諸本を校合し、師說を祖述して「枕草紙傍註」十一卷（別項）を著はした。幽齋の「枕草子」研究は、他の方面にも感化を及ぼし、松永貞德の門に出た加藤盤齋と北村季吟の研究を導いた。前者は「淸少納言枕草紙抄」十五卷であり、後者は「枕草紙春曙抄」十二卷（各別項）である。「枕草子」の研究は、この三書によつて大成されたと云つてもよろしい。就中、「春曙抄」は他の二書を壓して、「枕草子」の定本の如く考へられて今日に及んだ。「春曙抄」以後、この草子の研究は引きつづきなされたが、そのうち最も代表的なのは、伊勢貞丈の作と稱せられる「枕草子抄」一卷である。これは、「枕草子」中から、有職故實・家具調度等に關する事項を抄出してこれに考を加へ、中に作者淸少納言の傳記、草子の名義・成立等に關する考證を附したものである。一々信をおけない蕪雜な說も多いが、注目すべきものである。次いで橘千蔭父子は、諸本を以て校合し、根本的な問題について研究し、契沖・正明等は、この草子の諸種の問題について考證し、淸水濱臣・山崎美隆等は、本文の解釋にすぐれた業績をのこした。藤井高尙は「枕册子新釋」をものし、藤井高雅は「枕草子參考」を書いたといふことである。その他、前田夏蔭・黑川春村・齋藤彥麿等も解釋上に新說を出した。殿村常久の「千草の根ざし」は、「枕草子」中にあらはれた草木について參考すべく、壺井義知の「裝束抄」は、服飾故實に關して指針となる。その他、伴直方の「枕册子考」、岡本保孝の「枕草子存疑」等は、この草子の重要なる疑點を明かにしようと努力したものである。明治以後の研究としては、先づ鈴木弘恭の「訂正增補枕草紙春曙抄」があり、「春曙抄」の誤りを正し、足らざるを補つた。また松平靜の「枕草紙評釋」は黑川眞頼の講義を基として諸說を集成した。その他に、佐々木弘綱・萩野由之氏等の研究もあるが、武藤元信の「枕草紙通釋」（別項）と、東洋學藝雜誌の上に發表した「枕草子」の研究論文とは、研究史上の一時期を劃した程、學界に貢獻するところがあつた。又金子元臣・永井一孝・栗原武一郎氏等の解釋學的研究も注目すべきである。

【參考】淸少納言枕草紙抄（加藤盤齋）○枕草紙春曙抄（北村季吟）○枕草紙傍註（岡西惟中）○枕草子抄（伊勢貞丈）○橘千蔭書入本（關根正直氏藏）○淸水濱臣手澤本（無窮會文庫藏）○枕草紙裝束抄（壺井義知）○千草の根ざし（殿村常久）○枕草子口傳書（京都帝國大學藏）○枕双紙纂誤（同上）○枕草子目錄（宮內省圖書寮藏）○枕草子註（齋藤彥麻呂（久松濟一氏藏））○枕册子考（伴直方（南葵文庫藏））○枕草子木草考（阿閑喜佐（帝室博物館藏））○訂正增補枕草紙春曙抄（鈴木弘恭）○枕草紙評釋（松平靜）○標註枕草紙讀本（佐々木弘綱）○標註枕草紙（萩野由之）○枕草紙通釋（武藤元信）○枕草紙評釋（窪田空穗）○枕草子評釋（金子元臣）○前田家本枕草子解說（育德財團）　【池田】

枕草紙繪卷 まくらのさうしゑまき

繪卷　【解說】淺野侯爵所藏一卷。詞繪とも各七段、即ち二月十日淑景舍が一條院中宮を訪ねて團欒する段、五月淸少納言が「此の君」の故事で才を示す段、九月十日職の御曹司で酒宴の際頭中將齊信が菅公の詩を吟ずる段、一條院が琵琶「無名」を彈いて中宮と問答する段、師走十日雪遊びの段、元旦中宮が齋院から來た卯杖を見る段、八幡より還幸の段の七段である。繪はすべて描寫の纖細なもので、人物の髮や眉や調度等に焦墨を塗り、唇に朱を點ずる位で殆ど全く色彩拔きの白描畫である。純大和繪に於ける白描趣味は、鎌倉時代に於ける斯派の新傾向で、歌仙繪などにもこの例を見るが、この繪卷は描寫最も纖巧で、この種遺品中の代表作と云はれる。詞は後光嚴院宸筆、繪は女筆と傳へられてゐるが、「看聞御記」によると、永享十年後崇光院が足利將軍家から借り受けた時は二卷であつて、詞は伏見院宸筆といはれてゐたが明かならず、繪は或は伏見院の皇女進子內親王の筆かとも記してゐる。畫致から見てもまづ南北朝頃の作と思はれ、その纖細な描寫の趣が女性の筆と鑑せられた所以であらう。　【田中（一）】

枕草紙春曙抄 まくらのさうししゆんしよせう

註釋書　十二卷十二册【著者】北村季吟【成立】卷十二の終りに、「延寶二年甲寅七月十七日、北村季吟書」とあるから、この時に成つたものであらう。「寬政六甲寅七月購版。江戶淺草茅町二丁目、須原屋伊八」とある本もあるが、初版のものではない。初版の刊行年月は未詳。【諸本】刊行年月を記さぬ印本と、寬政六年刊本とがある。但し同一の版式。次に明治二十六年、青山堂の發行にかゝる鈴木弘恭の「訂正增補枕草子春曙抄」十二卷三册（又は一册）は、「春曙抄」の足らざると、誤れるとを增補訂正したもので、その緖言に、註釋書あまたある中に、「春曙抄」をもつてよろしとする由を云ひ、「されど、その抄中なほ校考のいまだしきところ、假字の誤りたるものどものあるは、いとあかぬ心ちせられて、こたび「萬歲抄」、活字本・淸水濱臣校合本・黑川春村校合本・天文五年古鈔本、その他一二の異本をもて訂正を加へ、ならびに假字の誤をも書きあらため、さて舊註に漏れたるところ、或はあやまれるふしのあるは、加藤盤齋・淸水濱臣の考、幷に契沖阿闍梨・石原正明・橘千蔭・黑川春村等先達の說をもてこれを增補す。しかのみならず、わが師黑川眞頼翁の考、および愚考をもよりよりにかつけたり」と云つてゐる。

【內容】卷一の開卷第一に、「枕草子」に關する概說を試み、その第一に、淸少納言の傳記を考證し、「榮華物語」（別項）に、少納言が三條院女御淑景舍（定子妹）に宮仕せし由見ゆとて、その年代につきて考をのべ（この點季吟誤る。「榮華」にかゝる記事なし）、赤染衞門との交友につきて記し、老後四國に渡りしこと、誓願寺にて出家せしこと、その寺に墓あること等につきて考證し、次にこの草子の題號を「枕」といへるは、「枕にこそはし侍らめ」とて申し受けたるに基くと云ひ、草紙又は双紙の意義をのべ、次にこの草子古今稱美の事に及び、更に異本について、「此草紙異本さまざまあり。或は二册、或三册、或五册、一決しがたし（中略）。承應二年の春、尾州より一本を得たり。（上下二

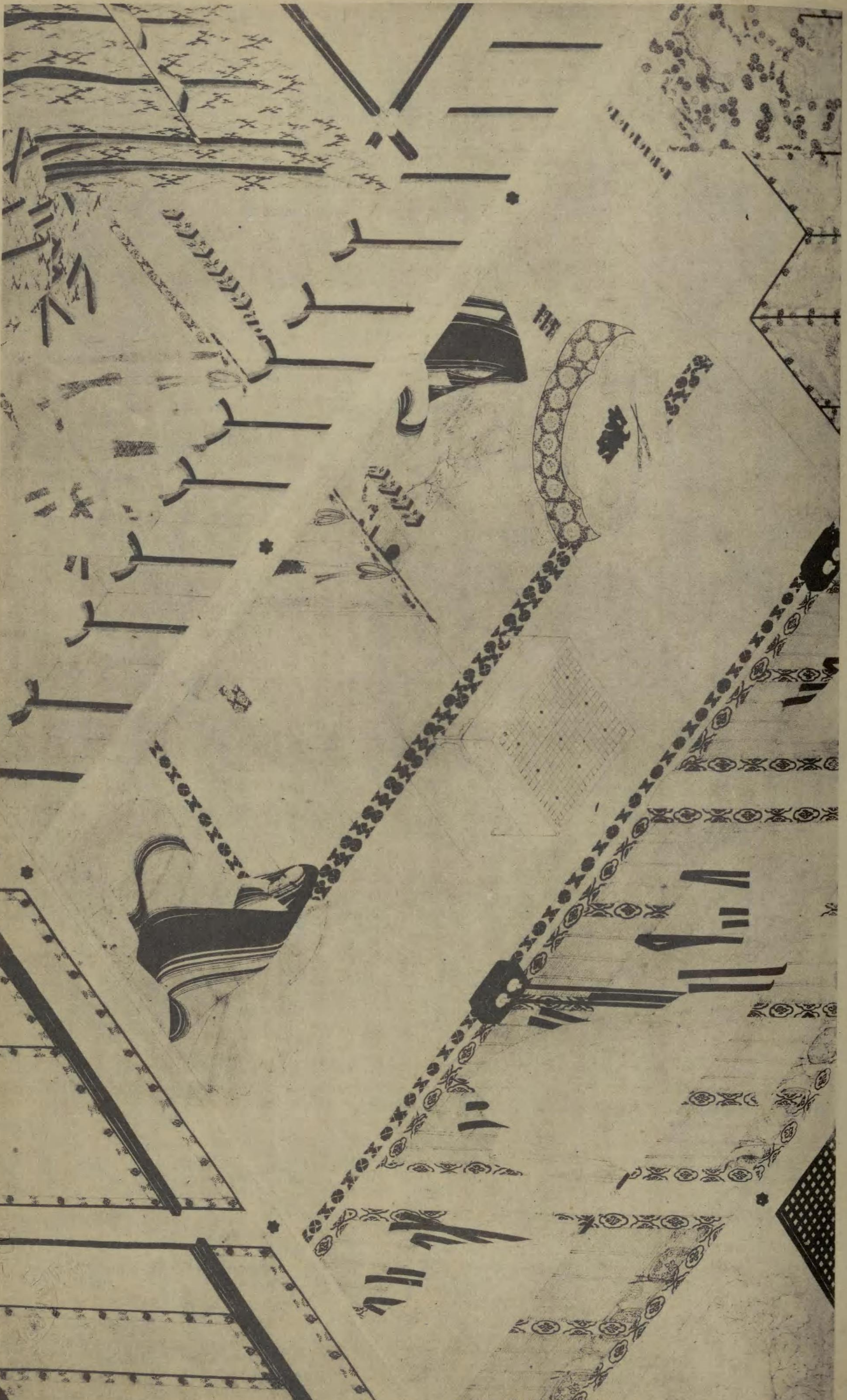
大成されたと云つてもよろしい。就中「春曙抄」は他の二書を壓して、「枕草子」の定本の如く考へられて今日に及んだ。「春曙抄」以後、この草子の研究は引きつづきなされたが、そのうち最も代表的なのは、伊勢貞丈の作と稱せられる「枕草子抄」一卷である。これは、「枕草子」中から、有職故實・家具調度等に關する事項を抄出してこれに考を加へ、中に作者清少納言の傳記、草子の名義・成立等に關する考證を附したものである。一々信をおけない蕪雜な說も多いが、注目すべきものである。次いで橘千蔭父子は、諸本を以て校合し、根本的な問題について研究し、契沖・正明等は、こ井一孝・栗原武一郎氏等の解釋學的研究も注目すべきである。

【參考】清少納言枕草紙抄（加藤盤齋）○枕草紙春曙抄（北村季吟）○枕草紙傍註（岡西惟中）○枕草子抄（伊勢貞丈）○橘千蔭書入本（關根正直氏藏）○清水濱臣手澤本（無窮會文庫藏）○枕草紙裝束抄（壺井義知）○千草の根ざし（殿村常久）○枕草子口傳書（京都帝國大學藏）○枕双紙纂誤（同上）○枕草子目錄（宮內省圖書寮藏）○枕草子註（齋藤彥麻呂（久松濟一氏藏））○枕册子考（伴直方（南葵文庫藏））○枕草子木草考（阿閉喜佐（帝室博物館藏））○訂正增補枕草紙春曙抄（鈴木弘恭）○枕草紙評釋（松平靜）○標註枕草紙讀本（佐々木弘綱）○標註枕草

時は二卷であつて、詞は伏見院宸筆といはれてゐたが明かならず、繪は或は伏見院の皇女進子內親王の筆かとも記してゐる。書致から見てもまづ南北朝頃の作と思はれ、その纖細な描寫の趣が女性の筆と鑑せられた所以であらう。〔田中（一）〕

枕草紙春曙抄（まくらのさうししゆんしよせう） 註釋書 十二卷十二册【著者】北村季吟【成立】卷十二の終りに、「延寶二年甲寅七月十七日、北村季吟書」とあるから、この時に成つたものであらう。「寬政六甲寅七月購版。江戶淺草茅町二丁目、須原屋伊八」とある本もあるが、初版のものではない。初版の刊行年月は未詳。【諸

證し、「榮華物語」（別項）に少納言が三條院女御淑景舍（定子妹）に宮仕せし由見ゆとて、その年代につきて考をのべ（この點季吟誤る。「榮華」にかゝる記事なし）、赤染衞門との交友につきて記し、老後四國に渡りしこと、誓願寺にて出家せしこと、その寺に墓あること等につきて考證し、次にこの草子の題號を「枕」といへるは、「枕にこそはし侍らめ」とて申し受けたるに基くと云ひ、草紙又は双紙の意義をのべ、次にこの草子古今稱美の事に及び、更に異本についてのべ、「此草紙異本さま〴〵あり。或は二册、或三册、或五册、一決しがたし（中略）。承應二年の春、尾州より一本を得たり。（上下二



枕草子繪卷（淺野侯爵家藏）

冊）其本紙ふるく、手跡中古の筆體なりき」とて、三卷本（枕草子參照）の奥書二種を示し、更に「又一本上下二冊堺本とて宮內卿清原氏の奥書あり。發端より一紙がほどは、よのつねの本に大かた似て、其次枕詞の次第など大きに異也」とて堺本（「枕草子」參照）の解說を試み、三卷本の方が後世に引用せられたりとて、「禁祕抄」「八雲御抄」「悅目抄」「徒然草」等を引いてゐる。次にこの草子の註釋書として「季經抄」

明治四十三年十二月著者の緖言があり、同四十四年四月のはじめ文學博士本居豐穎の序がある。同年九月二十八日、有朋堂。

【內容】 緖言に於て、「枕草子」が國文學上優秀の作品なる所以を說き、これを隨筆と云ふものあれど、かの全く結構なき隨筆の類にあらず、四季のをりをりの景物、山川草木鳥蟲風月の題目、又はにくきもの、あはれなるもの、うつくしきもの、きたなげなるものなどの題目

本（三卷本）七本・宸翰本・堺本・別本（前田家本）・略本（著者所藏拔書本）の十種二十本である。次に清少納言の小傳を古書を渉獵して述べてゐる。本文は「春はあけぼの」といふより、「みぐるしきもの」まで三百十九段とし、終りに、「物くろうなりて」の段と、「左中將のいまだ伊勢のかみときこえし時」の段とをあはせてゐる。本文の語句は、大體「春曙抄」をもととし、諸本を見比べて、よろしと思はれるものに從つた。

も、學問的價値高きものと云ふことが出來ない。しかし、幸にその改竄の箇所に黑點を附し、明瞭にあとを示したのは、さすがに著者の見識の高さと用意の周到を思はせる。近代「枕草子」の學術的研究に於て、最高位に在るべき著述である。

【著者小傳】 元信は裕軒と號し、その家を何故樓といふ。加賀藩士武藤濃之助の子。東洋學藝雜誌上に論文を發表し、學界に貢獻する所

册）其本紙ふるく、手跡中古の筆體なりき」とて、三卷本（枕草子參照）の奥書二種を示し、更に「又一本上下二册堺本とて宮內卿清原氏の奥書あり。發端より一紙がほどは、よのつねの本に大かた似て、其次枕詞の次第など大きに異也」とて堺本（「枕草子」參照）の解説を試み、三卷本の方が後世に引用せられたりとて、「禁祕抄」「八雲御抄」「悅目抄」「徒然草」等を引いてゐる。次にこの草子の註釋書として「季經抄」ありし由なれど未だ見ずと云ひ、この書に引用參考せし古書の大略をのべてゐる。さて本文は、「湖月抄」（別項）の如く、草子の本文を文段に分けてかかげ、傍註を施し、校合を加へ、更に頭に標註をかかげ、詳細なる考證を試みてゐる。

【史的地位】　この書は、延寶二年七月に成つたのであるが、出版はこれより後れしことゝ思はれる。然るに、加藤盤齋の著と思はれる「清少納言枕草紙抄」は、延寶二年五月刊行されたことが確かであるから、「春曙抄」は、前者の影響を受けてゐると推定される。季吟は、盤齋とほぼ同樣の異本を見てゐるが、校合に對する態度は兩者とも正しい態度ではない。盤齋は文段を立つる際や、語句を註釋する際に、可なりひどい附會の説を立てた。季吟は、盤齋に比して概ね穩健の説である。盤齋の抄は、後世ほとんど行はれなかつたが、季吟の「春曙抄」は、一般に廣く流布し、「枕草子」を研究せんとする者の必ず見なければならない書となつた。

【參考】國文學研究史野村八良○清少納言枕草子研究（國語と國文學昭和三ノ一）〔池田〕

枕草紙通釋

まくらのさうしつうしやく　註釋書　二卷

【著者】武藤元信【成立・刊行】上卷の卷頭に明治四十三年十二月著者の緒言があり、同四十四年四月のはじめ文學博士本居豐穎の序がある。同年九月二十八日、有朋堂。

【內容】緒言に於て、「枕草子」が國文學上優秀の作品なる所以を説き、これを隨筆と云ふものあれど、かの全く結構なき隨筆の類にあらず、四季のをりをりの景物、山川草木鳥蟲風月の題目、又はにくきもの、あはれなるもの、うつくしきもの、きたなげなるものなどの題目をかかげ、類似の事物を捉へてこれを敷衍し、世態人情の機微を摘發してその間に點綴し、見聞せし事實自己の經歷談などに關聯して今昔の感を寓し、おのづから一種獨特の結構をなせりとて、「枕草子」成立の動機に言及し、作者は歌よむ心ばへにて書き出でたる事疑ひなしとて、「草子」中の詩趣を論じ、作者が和歌に於て同輩にぬきんづる能はざりし餘憤を、散文に於て發表せしものと觀じ、李義山の雜纂に倣へりとなす説の當らざるを論じ、少納言の境遇順調ならざりしがために、文章氣骨に富み、柔和を缺くは已むを得ざることとなし、更に「源氏物語」が古來一般に愛讀せられ研究せられたるに拘はらず、「枕草子」については見るべきものなし、さればこの草紙の研究は今より起さざるべからず、先づ定本を作り、然る後に解釋おのづから正鵠を失はざるべしとて十七年前より校合を思ひ立ち、遂に十九本の異本に對校し、考異一卷をあみてより、五年後、やうやく本書を成すに至つた次第を細叙してゐる。次いで凡例に於て、本書編纂の用意についてのべ、「清少納言枕草紙異本大概」に於て著者の見た諸本の解説がしてある。諸本とは活字本（十行・十二行・十三行）三本。慶安刊本・清少納言枕草紙抄・同春曙抄・同旁註・古本（三卷本）七本・宸翰本・堺本・別本（前田家本）・略本（著者所藏拔書本）の十種二十本である。次に清少納言の小傳を古書を涉獵して述べてゐる。本文は「春はあけぼの」といふより、「みぐるしきもの」まで三百十九段とし、終りに、「物くろうなりて」の段と、「左中將のいまだ伊勢のかみときこえし時」の段とをあはせてゐる。本文の語句は、大體「春曙抄」をもととし、諸本を見比べて、よろしと思はれるものに從つた。それ故に、全く別の本文が成立した。解釋は諸抄を參考し、新説を加へ、詳細といふよりも、的確といふことを期したやうである。近世諸家の説は、大抵これを集めて、そのよろしきを取つた。また濱臣・美隆・保孝等の説も參考され、廣く和漢の書が引用されてゐる。終りに「清少納言枕草紙考異」の全文が「索引」と共に附してある。

【價値】「春曙抄」以後、「枕草子」の學術的研究としては注目すべき著作である。殊に異本研究に於ては、一時期を劃した苦心の勞作である。研究の方法や態度も概ね穩健であつて、近世諸家の註のやうに冗漫繁雜に流れず、牽强附會に陷らず、しかも要を得て簡潔にのべられてゐる。註としても詳密ではないが、しかし的確である。不要な説明や、詮索すぎる引用はない。奇説のない代りに信用すべき説である。ただ校勘にあたつて、みだりに異本の本文を取捨して、語句を改めたのは、この書の缺點である。「枕草子」の本文は、一層讀み易くなり、整頓されたかも知れないが、本文は諸本の要素を加へ、全く別箇の「通釋」本が成立してしまつた。かかる校定本は、一著者の意見によつて改められたものであるから、たとひ文意が通じ易くとも、學問的價値高きものと云ふことが出來ない。しかし、幸にその改竄の箇所に黑點を附し、明瞭にあとを示したのは、さすがに著者の見識の高さと用意の周到を思はせる。近代「枕草子」の學術的研究に於て、最高位に在るべき著述である。

【著者小傳】元信は裕軒と號し、その家を何故樓といふ。加賀藩士武藤濃之助の子。東洋學藝雜誌上に論文を發表し、學界に貢獻する所があつた。重野安繹・中村正直・本居豐穎・井上賴圀・物集高見・三島毅等と親交があつた。第四高等學校教務囑託となつた事もあつた。大正七年十二月歿す。「枕草紙考異」一卷、「枕草紙通釋」二卷の著がある。「考異」は元信が十九種の異本を得て彼是見合せて校合し、そのよろしきを取つた箇所を表示したものである。歿後遺命によつて、遺著「清少納言枕草紙別記並逸文」なる小册子が公刊せられた。「通釋」後の元信の學説をさめたものである。なほ枕草子に關して、東洋學藝雜誌上に掲載せられた論文に、清少納言枕草紙考異（明治三十九年、二九七・二九八・二九九）・清少納言傳（同三〇二）・清少納言枕草紙錯簡考（明治四十一年、三一八）・清少納言枕草紙異本考（明治四十二年　三四四）等がある。〔池田〕

枕草紙傍註

まくらのさうしばうちゆう　「清少納言傍註」を見よ。

枕物狂

まくらものぐるひ　能狂言　【格式】重習（大藏流）。

【梗概】百歳に餘る祖父が戀に惱むと聞いて、孫共が訪ねると、枕物狂の有樣に、叶へてあげるから眞實を打明けて下されと言ふ。祖父は否みながらも志賀寺の上人の話に事寄せて戀の物語をする。孫共は問はぬに落ちたから

有樣に仰せられてくれと頼み、祖父も終に先の月の地藏講に刑部三郎の娘を見染めたと告白するので、連れ來つて思ひを叶へさせる。
【解說】能樂の物狂能を狂言に仕立てたものであらう。大分能がかつたもので、曲中に「松風」の謠も取込まれてゐる。この曲や「柿山伏」や「西翁」には、鐵砲といふ言葉が出て來るので、鐵砲傳來以後の作であらうとの說もあるが、古本にはそれ等の文字は全く見えず、江戸期以後の竄入である事が明かである。なほ枕に狂ふ謠の中に、「閑吟集」（別項）にも見える小歌「逢ふ夜は君が手枕、來ぬ夜は己が袖枕、枕餘りに床廣し、寄れ枕、こち寄れ枕、枕さへ疎むか」が取られてゐる事は注目すべきであらう。　〔瀧田〕

磨光韻鏡 まくわうゐんきやう　語學書　二卷二册
【著者】文雄【刊行】延享四年八月刊。天明七年五月再刻。太宰純の序、延享元年六月。法慧元聰の跋、延享四年八月。【內容】韻鏡（別項）の研究で、圖を校定し、漢吳音と反切を加へ、且つ韻鏡を著者の新見解を以て解說したものである。上卷は凡て圖說で、初めに四十三轉輕重字母定局の圖、次に內轉第一合から內轉四十三合までの圖を出してゐる。下卷は「韻鏡索隱」と「飜切法門」、即ち韻鏡の使用法を說いてゐる。【價値】本書は韻鏡研究史上第一に擧げるべき名著である。韻鏡は後奈良天皇の享祿年間に開版せられて以來漸次研究せられて來たのであるが、當時に於ては韻鏡を專ら反切のために用ひてゐた。文雄はその誤りである事を論じ、韻鏡は音譜であつて、反切のために作つたものでない事を明かにした。次に文雄以前の學者で字母の解釋を試みた人もあるが、何れも日本音に依つた爲めに頗る不完全であつた。文雄は唐音を研究して字母を解釋した。即ち脣音・舌音・齒音の輕重の別を明かにし、曉母・匣母の別を明かにした。かくの如きは從來の學者の企及し得なかつた所である。又開口音・合口音の區別を說明した事は、若干の誤りはあるが、文雄が初めて說いた事で一大創見である。なほ漢音・吳音・唐音を假名で示し、廣韻に依つて字子に反切を添へた事も、音韻研究史上の大きな進歩である。
【備考】「磨光韻鏡」には後編及び餘論がある。韻鏡をあらゆる方面から論じ、解說したもので、必ず併せ見ねばならぬものである。共に著者の歿後遺稿を刊行したものである。後編は「指要錄」一册（丹山文龍の序は明和九年、安永二年刊。內容は韻鏡大旨、非反切圖、撰者時世、內轉外轉、一十六攝、五音七音、清濁次音、脣音輕重、三十六母、二百六韻、韻鏡用法等の二十九項について記してゐる）。「本圖」一册（安永九年刊。內容は正字韻鏡。卷末に文龍の無相上人略傳を添ふ）。「字庫」二册（源義張の跋は安永三年。安永九年刊）。「飜切伐柯篇」一册（安永二年二月刊。內容は反切總論、反切要訣、三折一律、反切字義、七音圖說、字母反切、切母類聚、韻字正音の八項に分けて說いてゐる）。「餘論」上中下三卷三册（香月院深勵の序は享和三年。川愿の序。文化四年刊）は「磨光韻鏡」の講義で、初めに韻鏡の歷史を說き、次に「磨光韻鏡」について（一）序、（二）跋、（三）緒言、（四）本圖、（五）索隱、（六）門法の六章に分けて說いてゐる。なほ文雄の音韻に關する研究は、「三音正譌」「和字大觀抄」（別項）「經史莊嶽音」「字彙莊嶽音」等に見えてゐる。併せ見るべきである。
【參考】韻鏡研究史上に於ける文雄の位置　滿田新造（國學院雜誌二八ノ一二）○文雄の韻鏡南方音說を評す　同上（同二九ノ四）　〔滿田〕

馬子歌 まごうた　民謠　【名稱】馬方歌・馬追歌・馬喰節・馬喰歌なども云ふ。【解說】海の交通運輸機關たる船に對し、陸の交通運輸機關としての馬は、重要な位置にあつたから、その馬を取扱ふ馬子が歌ふ馬子歌は、船歌と並んで、民謠のうち、重要な地位を占める。催馬樂（別項）が馬子歌より出たとする說がある。雜藝（別項）の一、滿固（一に滿周）も、これと關係があるかも知れぬ。しかし船歌ほどの記錄は認められない。江戸時代に至つて、その內容はやゝ明かとなつた。馬子歌の一般に流傳したものが、小諸節（小室節）や追分節の如き名高い民謠、流行歌を形作つてゐる。「松の葉」卷三の「馬方」、「落葉集」卷四の「馬士踊」等も、これより出た元祿時代の流行歌で、その中には、馬子歌が取り入れられてゐる。「鄙雜俎」には、

信州小諸より諷ひ出たりとて、旅行馬子の多く歌ふ、諸歌は樣々有るべし、今に稀に諷ふ馬子もあり、加賀ぶし、小諸ぶしも時代は同じ頃に始りなん、歌に、
○花はみよし野紅葉は龍田月はむさし野名が高い
○雲にかけはし霞に千鳥我は波間に夜船こぐ
○關の御地藏はおらよりましぢや人も（又親こも）定めぬ妻をもつ

と見え、幕末の「御笑草諸國の歌」に馬士歌として記す所は、

やれやれな引　お前とおらはよ引　水もない火もな
國の果までも引

と云ふ歌である。雲助歌（長持歌・駕かき歌）も馬子歌と異名同種のもので、名高い「箱根八里は馬でも越すが」の歌は、この兩樣に用ひられる。「坂は照る〳〵鈴鹿は曇る」も、馬子歌として名高い。關東小六の小六節や丹波與作の與作節なども、馬子歌と關係があらう。馬子歌は既に江戸時代に頽勢を見せてゐるが、明治以後、交通の變化發達は、一層馬子歌を忘れさせる事となつた。併し少數はなほ民謠の中に殘存してゐる。それ等は「俚謠集」や「俚謠集拾遺」にも錄された。節については「歌謠字數考」に、「馬子の歌ふものを、馬子唄といひて、其の中には、雲助と同じものもあれど、馬子の方は、追分節の少し變化したるものにて、雲助唄の節とは、大いに異なり」とある。併し大體似た趣味の節であるが、雲助歌には、馬子歌に似た息を長く引くものと、可なり急調の節とがあり、馬子歌は、追分節と同樣の長く引張る歌ひ方である。　〔藤田〕

信 まこと　雅樂家【姓】源。一條の北邊に居があつたので、俗に北邊大臣と稱す。【生歿】弘仁元年生れ、貞觀十年（一五二八）閏十二月二十八日歿す。享年五十九。【閱歷】嵯峨天皇の皇子で、源姓を賜はつた最初の人である。「三代實錄」清和天皇貞觀十年閏十二月二十八日の條に、左大臣正二位源朝臣信の薨去を記してゐる。御母は廣井宿禰である。その傳ふるところによれば、この大臣は率性強雅、風尙不恒、書傳を讀むことを好み、兼ねて草書・隷書をよくし、又圖畫に巧みで、馬を描くとその形が眞を寫してゐた。嵯峨天皇が、親ら笛を吹き琴箏を鼓し、琵琶を彈ずることを敎へ給うた。かく多藝であつたが、鷹・馬・射獵に至つては最も留意された。後、鷹狩に出て落馬したのがもとで歿したといふ。【業績】樂舞の各技に精通した中に、殊に箏をよくしたことは「秦箏相承血脈」に、箏の相傳を、大唐海州冰陽縣孫賓より我が朝の源信に

傳へ、信を以て我が國の箏の祖となし、信から仁明天皇及び清和天皇に傳へ奉つたやうに記してあるのを見ても分る。又「今昔物語」にはその箏に感じて天人が舞つたといふ傳說が記してある。又「敎訓抄」「體源抄」に、「五常樂急」の箏の手に、この信の夢の說と稱する祕曲の手のあることを述べてゐる。また信が舞を善くしたことに就いても、「敎訓抄」（卷二）をはじめ諸書に記載がある。信の子に叶・平・恭・

學の根本にある不易的普遍的な精神である。この「まこと」は自然のまゝを重んずる所に寫實的性質もあるが、同時に理想的でもあるのである。日本文學に於ては、一貫してこの「まこと」を根柢に有するが、特に大和時代の文學は「まこと」がその全體の特質となつてゐるのである。「古事記」にも「萬葉集」にも「まこと」が根柢となり、それが建國の事實の上にたつ國體と融合し統一されて具體的な形象となつ

のと理想的なるものとが一元となつて居り、寫實と理想との一如となつてゐる點に、虛實と同じく日本民族の特異性の上にたつてゐる點が多いのである。
【參考】ひとりごと　鬼貫　○眞言辨　富士谷御杖○上代日本文學の研究　久松潛一　○國文學體系　垣內松三編　〔久松〕

眞言辨 まことべん　歌論書　二卷【著者】富士谷御杖【成立】成元の署名により文化八年

公の道理の外にあるので、一身の問題のみならず、國家を治むる上にも眞を以てせねばならぬ。大約上述の如き主旨を論理的に精細に論じたもの。【價値】その說、全く神道的立場により、歌を以て幸を受けんがための手段としてゐる點、異論もあらうが、而もその說、深遠精細異彩を放ち、歌學史上特異なる地位を占むべきものである。　〔相原〕

正明 まさ　國學者【姓名】

である。上卷は凡て圖說で、初めに四十三轉輕重字母定局の圖、次に內轉第一合から內轉四十三合までの圖を出してゐる。下卷は「韻鏡索隱」と「飜切法門」、即ち韻鏡の使用法を說いてゐる。【價値】本書は韻鏡研究史上第一に擧げるべき名著である。韻鏡は後奈良天皇の享祿年間に開版せられて以來漸次研究せられて來たのであるが、當時に於ては韻鏡を專ら反切のために用ひてゐた。文雄はその誤りである事を論じ、韻鏡は音譜であつて、反切のために作つたものでない事を明かにした。次に文雄以前の學者で字母の解釋を試みた人もあるが、何れも日本音に依つた爲めに頗る不完

要訣、三折一律、反切字義、七音圖說、字母反切、切母類聚、韻字正音の八項に分けて說いてゐる）。「餘論」上中下三卷三册（香月院深勵の序は享和三年。川愿の序。文化四年刊）は「磨光韻鏡」の講義で、初めに韻鏡の歷史を說き、次に「磨光韻鏡」について（一）序、（二）跋、（三）緒言、（四）本圖、（五）索隱、（六）門法の六章に分けて說いてゐる。なほ文雄の音韻に關する研究は、「三音正譌」「和字大觀抄」（別項）「經史莊嶽音」「字彙莊嶽音」等に見えてゐる。併せ見るべきである。

【參考】韻鏡研究史上に於ける文雄の位置 滿田新造（國學院雜誌二八ノ一二）○文雄の韻鏡南方音說を評す 同上（同二九ノ四） 〔滿田〕

○花はみよし野紅葉は龍田月はむさし野名が高い
○雲にかけはし霞に千鳥我は波間に夜船こぐ
○關の御地藏はおらよりましぢや人も（又親こも）定めぬ妻をもつ

と見え、幕末の「御笑草諸國の歌」に馬士歌として記す所は、

やれやれな引 お前さおらはよ引 水もない火もな
國の果までも引

と云ふ歌である。雲助歌（長持歌・駕かき歌）も馬子歌と異名同種のもので、名高い「箱根八里は馬でも越すが」の歌は、この兩樣に用ひられる。「坂は照る〳〵鈴鹿は曇る」も、馬子歌と

日の條に、左大臣正二位源朝臣信の薨去を記してゐる。御母は廣井宿禰である。その傳ふるところによれば、この大臣は率性強雅、風尙不恒、書傳を讀むことを好み、兼ねて草書・隸書をよくし、又圖畫に巧みで、馬を描くとその形が眞を寫してゐた。嵯峨天皇が、親ら笛を吹き琴箏を鼓し、琵琶を彈ずることを敎へ給うた。かく多藝であつたが、鷹・馬・射獵に至つては最も留意された。後、鷹狩に出て落馬したのがもとで歿したといふ。

【業績】樂舞の各技に精通した中に、殊に箏をよくしたことは「秦箏相承血脈」に、箏の相傳を、大唐海州氷陽縣孫賓より我が朝の源信に傳へ、信を以て我が國の箏の祖となし、信から仁明天皇及び淸和天皇に傳へ奉つたやうに記してあるのを見ても分る。又「今昔物語」にはその箏に感じて天人が舞つたといふ傳說が記してある。又「敎訓抄」「體源抄」に、「五常樂急」の箏の手に、この信の夢の說と稱する祕曲の手のあることを述べてゐる。また信が舞を善くしたことに就いても、「敎訓抄」（卷二）をはじめ諸書に記載がある。信の子に叶・平・恭・有・好・保・任・昌・尋等があるが、その中で叶はまた音樂を善くし、貞觀中雅樂頭となつた。作品は「永隆樂」の作曲の外、仁明天皇聖作の「長生樂」に舞を附した。

【參考】三代實錄○今昔物語○大日本史（卷九・一〇）○敎訓抄○體源抄○秦箏相承血脈○日本音樂史考 東儀季治○日本音樂史 田邊尙雄（日本風俗史講座二三） 〔田邊〕

まこと 文學論 【語義】「まこと」は誠であり、誠實であり眞實である。これを語の構成から見ると眞言であり、眞事である。言と事とは言靈信仰の上からも同一の意味を有して、言は事として實現されるのである。近世の富士谷御杖は「眞言辨」の中に眞を「私」「公」に對して、正しくして情のある境地であると說き、「眞言」は情のまゝに言つて而も正しい言であり、眞事は自然のまゝに行つて而も正しい行爲であると論じてゐる。「まこと」は一面に於て自然のまゝに行ふことであるが、同時に正しい理想を有して居り、道德的である事はこの點から理解される。【文學論としての「まこと」】「まこと」は人生のあらゆる方面にも見られるが、文學に於てもこの「まこと」を文學の中心とし、文學觀の根柢とする見解は多いのである。文學に於ての「まこと」は文學の根本にある不易的普遍的な精神である。この「まこと」は自然のまゝを重んずる所に寫實的性質もあるが、同時に理想的でもあるのである。日本文學に於ては、一貫してこの「まこと」を根柢に有するが、特に大和時代の文學は「まこと」がその全體の特質となつてゐるのである。「古事記」にも「萬葉集」にも「まこと」が根柢となり、それが建國の事實の上にたつ國體と融合し統一されて具體的な形象となつてゐるのである。平安文學以後にしてもこの「まこと」を根柢としてその上に時代の特殊性を加へて、「もののあはれ」（別項）ともなり、「幽玄」（別項）ともなつてゐるのである。さうして文學の展開の上に於て固定化因襲化が生ずる時、この根柢としての「まこと」に復らうとする機運が生ずるのである。さうして、この「まこと」に復ることによつて、文學の出發點に歸り、その上にたつて新しい展開を始めるのである。この場合に自覺的に「まこと」を文學の上に求めようとする精神が起る時、文學論としての「まこと」論が生ずるのである。近世に於て鬼貫が俳諧は「まこと」であると說いたのもこの立場であり、眞淵が「萬葉集」の精神としての眞情をとき、それを歌の理想としたのもこの「まこと」論である。香川景樹の歌論に於て誠實を調とともに說いたのも、この「まこと」を根柢としてゐたのである。これは、芭蕉の「さび」にしても「風雅の誠」を說いてゐるのは「まこと」を根柢として、その上に風雅を求めたと思はれる。要するに、文學に於ける「まこと」は、文學に於て時代を貫いて存する不易的なるものであり、文學の出發點であるとともに、窮極點でもあるのである。さうして「まこと」は知行合一の境地であり、現實的なるものと理想的なるものとが一元となつて居り、寫實と理想との一如となつてゐる點に、虛實と同じく日本民族の特異性の上にたつてゐる點が多いのである。

【參考】ひとりごと 鬼貫 ○眞言辨 富士谷御杖○上代日本文學の研究 久松潛一 ○國文學體系 垣內松三編 〔久松〕

眞言辨（まことべん） 歌論書 二卷【著者】富士谷御杖【成立】成元の署名により文化八年以前なる事が知られる。【諸本】傳本としては竹柏園本、帝國圖書館本がある。日本文學類從（隨筆文學集）所收。【內容】神道的立場より歌を論じたもの。上卷には、歌道の旨趣・戀歌・賢愚の則・神道の旨趣、下卷は、時の辨・言靈の辨・言語詠歌の別・敎誨の論・五典・眞の辨・五級の辨・表裏境の辨・感の辨等の諸篇から成つてゐる。先づ心を分けて偏心・一向心・眞心の三となし、その理想たる時宜を全うせんためには、神道によつて、偏心を制し、歌道によつて一向心を和げ、それを眞言に詠み出づることによつて眞心を得るにある。即ち神道と歌道とは、眞心を得、時宜を全うせんがために互に助け合はねばならぬ。而して歌道とは一に眞心を得るためのものである故に、所欲を達せんがために、歌を詠むが如きは最も宜しからず、反之、それが眞言であるならば戀歌も道に反かぬ。かの古今序に歌を以て賢愚の則とし給ふとあるも、結局言によつて爲（わざ）を制する點を指したのである。かく時宜を全うせんがために歌詠む時には、歌は形あるもの故、その歌に必ず靈が宿り、以て神人を感動せしむることが出來る。又眞言に歌ひ出づることによつても、なほ眞心を得られぬ時には、不得已眞爲に出だすべきで、眞は公の道理の外にあるので、一身の問題のみならず、國家を治むる上にも眞を以てせねばならぬ。大約上述の如き主旨を論理的に精細に論じたもの。【價値】その說、全く神道的立場により、歌を以て幸を受けんがための手段としてゐる點、異論もあらうが、而もその說、深遠精細異彩を放ち、歌學史上特異なる地位を占むべきものである。 〔相原〕

正明（まさあきら） 國學者 【姓名】石原將聽。後正明。通稱喜左衞門【號】蓬堂【生歿】寶曆十年尾張國海部郡神守驛に生れ、文政四年（二四八一）正月七日名古屋に歿した。享年六十二。【墓所】神守村三昧【閱歷】寛政四年本居宣長の名古屋に到つた時、その門に入り、後江戸に出て塙保己一に從ひ、群書類從の編纂に携はつた。【著書】冠位通考一册（刊）○尾張廼家苞九册（別項）○江戸職人歌合二册（刊）○年々隨筆三册（別項）（文化二年成）○蓬堂集○百人一首抄○律解○制度通考○宰相通考○百僚補正○臣連二造考等。

【學風・歌風】學は考證を主とし、有職故實に精通した。その著書中屢々師の宣長の說を駁して一家の見を樹て、尾張に於ける宣長門下の中に異彩を放つてゐる。歌に於ては、「新古今」を愛して、その歌風もつとめてこれに似せてゐたといふ。有名な「尾張廼家苞」（別項）はこの立場から書かれた「新古今」の註釋書である。歌はその好む所でもあり、得意でもあつて達吟を以て聞えてゐた。その傑れたものは「新古今」に出入すると許されてゐるが、「新古今」ほど技巧が凝つてもゐないし、又その幽玄さをも持つてゐない。蓋し力が足りなかつたのである。大體に於て、宣長の後世風をやゝ醇化したところに、その歌風はあるやうであ

る。知的・構成的である點、懸詞・緣語の多い點、三句切の多い點、又鑑賞の細く行き亙つてゐる點など、その特徵と言へよう。

青柳の花だの糸にぬく玉を露なりけりと春風ぞ吹く
色ふかき楓の紅葉散りてけり夜半のあらしや月に吹くらむ
〔窪田・森〕

【參考】古學小傳　濱宮秀堅○名古屋市史學藝篇

正章千句（まさあきらせんく）　俳諧　一冊　【作者】安原貞室　【成立】正保四年十一月　【刊行】慶安元年九月　【諸本】芭蕉以前俳諧集上卷（俳諧文庫）所收。【内容】貞室の獨吟千句並に追加百韻を、師の貞德に批點批評を乞うて上木したものである。長點が第一鶯の卷十四點、第二花の卷十六點、第三蝦の卷十五點、第四郭公の卷十七點、第五五月雨の卷十五點、第六七夕の卷二十點、第七秋螢の卷十三點、第八八月十五夜小野月といふことを の卷二十點、第九初冬落葉の卷十五點、第十雪の卷十點、追加の卷十七點で、都合長點百七十二である。正保四年十一月下旬の一嚢子（貞室）跋、長頭丸の奧書代りの長歌がある。【解說】貞室の三十七歲の時の作で、貞室早期の作調が知られ、又貞德の評言は、貞德の俳諧觀や式目上の意見等を知るに頗る參考になる。然るに貞室が比較的後輩でありながら、貞德の寵を得たやうな關係から、貞德歿後の寛文三年に至つて、貞室よりは故參の門人椋梨一雪が「茶杓竹」を著はして攻撃し、これに對して貞室門の乾貞恕が、翌寛文四年に「蠅打」を著はして返答した。〔萩原〕

正岡子規（まさおかしき）　「子規」を見よ。

將門（まさかど）　所作事　淨瑠璃物　【別名】瀧夜叉姬　【本名題】（一つ家に遊女も寢たり芳宜と月）「忍夜戀曲者」　【別名題】忍夜孝事寄　【初演】天保七年七月十五日初日、江戸市村座「世善知鳥相馬舊殿」第一番目大詰　【作詞】寶田壽助　【曲節】常磐津節　【太夫】三代常磐津小文字太夫（後の四代文字太夫）　【作曲】五代岸澤式佐　【振附】二代藤間勘十郎・四代西川扇藏　【傳來】曲・振ともに傳存　【題材】平將門、又は相馬の古御所。將門の遺子瀧夜叉姬、將軍太郎良門等を材料にしたものでは、古淨瑠璃山本土佐掾の「平親王將門」が古く、歌舞伎にも元祿年代これを移して演じたが、後世に最も影響を及ぼしたのは、近松門左衞門作の操淨瑠璃「關八州繫馬」（別項）である。又歌舞伎では「產衣女將門」（作者富永傳兵衞、元文四年河原崎座）や「男哉婦將門」（作者並木五瓶、享和元年市村座）等の「女將門」の趣向も作られた。本作は、これ等とは直接の關係はなく、その藍本となつたものは山東京傳の讀本「善知鳥安方忠義傳」（別項）で、即ちこれによつて脚色したものである。【諸本】常磐津節正本。日本歌謠集成卷十・歌謠音曲集（日本名著全集）所收。【内容】將門山の古御所へ妖怪が現はれるとの噂に、大宅太郎光國（十二代市村羽左衞門）が、源賴信の命をうけて、その樣子を見極めに忍び込むと、將門の娘瀧夜叉姬（三代市川九藏後の六代團藏）が島原の傾城如月と身をやつして出で、味方に引き入れんと色めかしい口說き模樣で言ひよる。光國はわざと心を許して、將門が島廣山の最期の樣を物語る。それを聞いて無念がる如月の樣子から疑はれ、更に懷中より相馬錦の旗を取り落すので、遂にその本性を見顯はされる。如月は、早やこれまでと本名を名乘り、蝦蟇の妖術で光國と挑み合ふ。そしてこの間に鷲沼六郎（市川團三郎）が瀧夜叉姬へ注進する件が入つてゐる。【參考】花江都歌舞妓年代記　石塚豐芥子（新群書類從四）〔秋葉〕

將門記（まさかどき）　「將門記」を見よ。

雅兼（まさかね）　歌人【姓】源【通稱】薄雲中納言【生殁】承曆三年に生れ、康治二年（一八〇三）薨ず。享年六十五。【閱歷】大治五年參議に任じ、天承元年從三位權中納言に進み、保延元年病を以て職を辭して出家した。退職後、正二位に陞つた。學識があり詩歌をよくし、白河法皇は深くその才幹を稱し給ひ、通俊・匡房（各別項）にも劣らないと仰せられた。【作品】家集に「中納言雅兼卿集」（群書類從二三八所觀本は短歌八十首を收め四季・戀・雜の順に排列されてゐる。返歌として他人の作が七首混入してゐる。勅撰集に見える九首は凡て集中に見えるが、歌合その他のものの二三は集中に見えない）があり、勅撰集に入る歌は「金葉」五首、「千載」三首、「新續古今」一首、私撰集に入るものは「後葉」二首、「續詞花」三首、「堀河院艷書合」「天永元年歌合」等の作者。【批評】彼は、歌を作るに美的陶醉を彫琢するよりは、そのまゝに表現してゐるやうであるが、自然に彫琢の巧を得てゐる。藤岡作太郎氏は、「その詠多からざれども、風吹けば波の綾おる池水に絲ひきそふる岸の青柳の如く、巧緻綺麗の格に長じたるが如し」とこれを評してゐる。【參考】大日本史（卷一四二）○國文學全史平安朝篇○公卿補任○尊卑分脈○今鏡○古事談〔西下〕

村上天皇―具平親王―師房―俊房―師頼
　　　　　　　　　　　　└顯房―雅兼

眞幸（まさき）　國學者【姓名】長瀨氏。通稱七郎平【號】田廬【生殁】明和二年に生れ、天保六年（二四九五）五月二十八日殁す。享年七十一。【墓所】熊本市新鍛冶町養壽院【閱歷】眞幸は角右衞門正常の子、家は肥後藩士、秩祿百五十石を食んだ。眞幸は寛政五年東游し、宣長の門に入り、江戸に村田春海・加藤千蔭等と往來し、得る所が多かつた。享保二年家督を嗣ぎ、諸役を歷任して御鐵砲頭に至つた。熊本に國學の興つたのは眞幸の力によるといふ。又彼は、眞淵の「萬葉考」の一・二兩卷とその別記のみが刊行せられて、卷三より卷六までとその別記並に人麻呂歌集の寫本のまゝに傳へられてゐたのを、書肆中村某に謀つて上梓せしめた。その功また沒すべからざるものがある。「萬葉集佳調」の著がある。【參考】肥後先哲遺蹟　武藤嚴男〔森〕

正濟本城の段（まさきよほんじやうのだん）　「八陣守護城」を見よ。

雅亮（まさすけ）　有職家【姓】源【閱歷】父雅職（醍醐天皇八世の孫）、兄淸職は、共に藏人の五位で、左大臣藤原賴長に仕へて事ある時はその前驅となり、又陪膳の役を勤めた。雅亮も亦賴長に仕へ前驅を勤めたりしたが、賴長の日記「台記」久安二年の條には六位、同六年の條には大舍人亮、仁平三年七月には院判官代右近將監とあり、同八月二十八日の條には皇后宮少進に任じ、從五位下に敍せられたことが見え、又雅亮は賴長の乳母肥前の養子で、その翌日二十九日に賴長の家の職事となり、夫人の家司に補せられたことが見える。なほ「山槐記」治承三年二月二十二日の條には前伊賀守とある。「尊卑分脈」に據ると、雅亮の父雅職のことを裝束師と記してあるが、「台記」裏書には、五節の童女下仕の裝束に淸職・雅亮

の兄弟が奉仕したことが見えてゐるから、裝束のことは、一家の世職としてゐたものであると見える。「雅亮裝束抄」三卷（別項）の著がある。〔石村〕

雅亮裝束抄（まさすけしやうぞくせう）　有職　三卷一册【著者】源雅亮【別名】假名裝束抄【諸本】「滿佐須計裝束抄」として群書類從一一二に收められてゐる。【解說】平安末期に於ける室内裝飾及び男女裝束に就いて假名で記し

一日大炊御門冬信の奧書には、この本の目錄は朽損してないのを、前少納言顯藤が書寫した本に據つて書き加へたもので、本來は假名の目錄であつたのであらうが、顯藤がそれを漢字に書き直したものであらうと見える。この書は現存「裝束抄」中、最も古いので有名である。〔石村〕

雅澄（まさずみ）　國學者【姓名】鹿持氏。通稱藤太【號】古義軒、また山齋【生殁】寛政三

る多くの國語に關する著書がある。〔以上森〕

【業績】雅澄の最も大きな業績は、彼以前の萬葉集研究を大成して、「萬葉集古義」（別項）を完成した點であるが、更に「萬葉集」を中心とする上代國語の研究から、幾多の國語學書を著はしてゐる。いづれも豐富な學殖と獨創的な識見とから生れたもので、その學術的價値は甚だ大なるものがある。即ち動詞古形の研究の如きは、實に前人未發の見であり、延約・手

册」一卷一册、上代國語の音韻を研究したもので、一音の語は凡て淸音、二音以上の語は初めの音は淸音、中の音は濁音になる事がある。下の音は濁音或は半舌音に成る事があるが、それ等は何れも正音である。而して語の初めの音が濁音又は拗音に成つてゐるのは不正音であると云つてゐる（明治廿六年刊）。〔辭書類「古言譯通」本文四卷・目錄一卷（天保八年成、明治廿六年刊）、「萬葉集」「祝詞」「宣命」等の語

室の三十七歳の時の作で、貞室早期の作調が知られ、又貞德の評言は、貞德の俳諧觀や式目上の意見等を知るに頗る參考になる。然るに貞室が比較的後輩でありながら、貞德の寵を得たやうな關係から、貞德歿後の寛文三年に至つて、貞室よりは故參の門人椋梨一雪が「茶杓竹」を著はして攻擊し、これに對して貞室門の乾貞恕が、翌寛文四年に「蠅打」を著はして返答した。〔萩原〕

正岡子規（まさおかしき） 「子規」を見よ。

將門（まさかど） 所作事 淨瑠璃物【別名】瀧夜叉姬【本名題】「一つ家に遊女も寢たり芳宜と月 忍夜戀曲者（しのびよるこひはくせもの）」

所へ妖怪が現はれるとの噂に、大宅太郎光國（十二代市村羽左衞門）が、源賴信の命をうけて、その樣子を見極めに忍び込むと、將門の娘瀧夜叉姬（三代市川九藏後の六代團藏）が島原の傾城如月と身をやつして出で、味方に引き入れんと色めかしい口說き模樣で言ひよる。光國はわざと心を許して、將門が島廣山の最期の樣を物語る。それを聞いて無念がる如月の樣子から疑はれ、更に懷中より相馬錦の旗を取り落すので、遂にその本性を見顯はされる。如月は、早やこれまでと本名を名乘り、蝦蟇の妖術で光國と挑み合ふ。そしてこの間に鷲沼六郎（市川團三郎）が瀧夜叉姬へ注進する件

年歌合」等の作者。【批評】彼は、歌を作るに美的陶醉を彫琢するよりは、そのまゝに表現してゐるやうであるが、自然に彫琢の巧を得てゐる。藤岡作太郎氏は、「その詠多からざれども、風吹けば波の綾おる池水に絲ひきそふる岸の青柳の如く、巧緻綺麗の格に長じたるが如し」とこれを評してゐる。【參考】大日本史（卷一四二）○國文學全史（平安朝篇）○公卿補任○尊卑分脈○今鏡○古事談〔西下〕

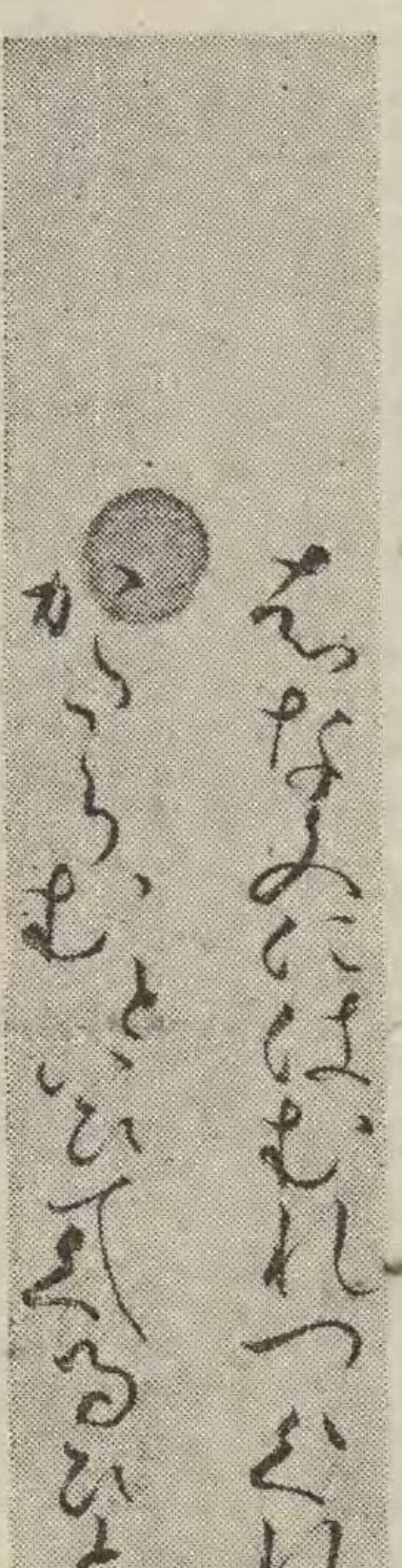
眞幸（まさき） 國學者【姓名】長瀨氏。通稱

亦賴長に仕へ前驅を勤めたりしたが、賴長の日記「台記」久安二年の條には六位、同六年の條には大舍人亮、仁平三年七月には院判官代右近將監とあり、同八月二十八日の條には皇后宮少進に任じ、從五位下に敍せられたことが見え、又雅亮は賴長の乳母肥前の養子で、その翌日二十九日に賴長の家の職事となり、夫人の家司に補せられたことが見える。なほ「山槐記」治承三年二月二十二日の條には前伊賀守とある。「尊卑分脈」に據ると、雅亮の父雅職のことを裝束師と記してあるが、「台記」裏書には、五節の童女下仕の裝束に淸職・雅亮

の兄弟が奉仕したことが見えてゐるから、裝束のことは、一家の世職としてゐたものであると見える。「雅亮裝束抄」三卷（別項）の著がある。〔石村〕

雅亮裝束抄（まさすけしやうぞくせう） 有職 三卷一冊【著者】源雅亮【別名】假名裝束抄【諸本】「滿佐須計裝束抄」として群書類從一一二に收められてゐる。【解說】平安末期に於ける室內裝飾及び男女裝束に就いて假名で記したもので、一卷は母屋廂の調度立つる事、大饗の事、臨時客の事、祭の使の出立ち、大將あるじの事、五せち所の事、姬君の裝束、童裝束の寸法、下仕の裝束の寸法、打出をすること、車の衣を出す事、文を裹む事、大臣辭退の表納るゝ函を裹む事、名香を裹む事、平包みにて物をつゝむ事、童の裝束を裹むべき樣、僧の裝束を裹む事、二卷は束帶の裝束の事、闕腋の事、布袴の事、衣冠・直衣に衣を出す事、舞人の裝束の事、陪從の裝束、小忌の事、童殿上の事、みづらを結ぶ事、禮服を着る事、中少將の甲着る樣、上帶をひく事、平緒をかへすべき樣、をとこになる間の事、御髻をとる事、三卷は狩衣の色々樣々、指貫、女房の裝束の色等が記されてある。その本文の間々に、裏に押紙したもの、頭書、又片假名の文などが本文より一段低く書いてある。これは假名書の奧書に依ると、本文は雅亮の自筆、押紙は「すけゆき」、頭書は「こ殿」、片假名は「わらは」の書いたものであるとしてある。これに就いて、「古事類苑」服飾部裝束書の條には、「すけゆき」は藤原資盛の子資行、「こ殿」は賴長の妻の兄なる藤原公能、「わらは」は公能の女で近衞天皇の皇后であつた多子の自稱であらうと推定してゐる。又康永二年十二月十一日大炊御門冬信の奧書には、この本の目錄は朽損してないのを、前少納言顯藤が書寫した本に據つて書き加へたもので、本來は假名の目錄であつたのであらうが、顯藤がそれを漢字に書き直したものであらうと見える。この書は現存「裝束抄」中、最も古いので有名である。〔石村〕

雅澄（まさずみ） 國學者【姓名】鹿持氏。通稱藤太【號】古義軒、また山齋【生歿】寛政三年四月二十日、土佐國土佐郡福井村に生れ、安政五年（二五一八）九月五日同所で歿す。享年六十八。【閱歷】雅澄は土佐藩の徒士鹿持惟則の長子、皇學を宮地仲枝に受け、後、獨學を以て古典を研究した。家もと貧、藩老福岡氏その篤志に感じ、藏書を借覽せしめ、なほ請ひに應じて書を求めて研鑽に資した。僻境にあつてその名聲大に揚り、教を受くるもの數百人に及び、淸水濱臣・小山田與淸などの名家も遙かに書を寄せて事を問うた。後、擧げられて藩黌教授館の師範となり、弘化三年特に士格に列した。雅澄、大義名分を說き、藩の子弟を教化した功は尠くなかつた。土佐勤王黨の領袖武市半平太は、雅澄の義姪であり、常にその薰陶を受けた。吉村寅太郎等も雅澄の門人だつた。【著作】萬葉集古義百五十二卷（別項）○南京遺響（續日本紀・日本後紀の歌の註釋。日本歌謠集成に收む）○日本外史評一冊（刊）○山齋集一冊○山齋長歌集（續日本歌學全書第九編近世長歌今樣家集の內）○千首のくり言（稿本叢書第一卷に收む）○巷謠篇。その他後に記述する多くの國語に關する著書がある。〔以上森〕



雅澄筆蹟

【業績】雅澄の最も大きな業績は、彼以前の萬葉集研究を大成して、「萬葉集古義」（別項）を完成した點であるが、更に「萬葉集」を中心とする上代國語の研究から、幾多の國語學書を著はしてゐる。いづれも豐富な學殖と獨創的な識見とから生れたもので、その學術的價値は甚だ大なるものがある。卽ち動詞古形の研究の如きは、實に前人未發の見であり、延約・手爾乎波・國語音韻等の研究は、宣長・春庭等の研究の上に更に一步を進めたもので、頗る傾聽に値するものであり、「萬葉集品物解」「同枕詞解」の如きは、一種の萬葉集辭典として、今日もなほ最高の權威を保持してゐるものである。ただ惜しむらくは、雅澄の時代が、幕末の物情騷然としてゐた時であり、又その生涯を土佐で送つた爲めに、その學說は明治の中期に至るまで中央の學者に多く知られなかつた。故に學界に與へた直接的影響は、その研究の深さに比例しなかつた。〔活用に關する研究〕「用言變格例」一冊（別項）動詞の活用は四段活用が根本で、他は四段活用から轉生したものであると說いたもの。〔手爾波の呼應に關するもの〕「鍼嚢（はりぶくろ）」（一名「歌詞三格例」）二卷二冊（別項）。「結詞例」一卷一冊。「萬葉集」及び「古事記」「日本書紀」等の結辭を蒐集し類別し、奈良朝と平安朝以後との相違を研究したもの（明治二十七年刊）。〔延約に關する研究〕「雅言成法」二卷二冊（別項）、「舒言三轉例」一卷一冊（別項）。〔國語の音韻に關する研究〕「言靈徳（ことたまのさち）用」一卷一冊、上代國語の音韻を研究したもので、一音の語は凡て淸音、二音以上の語は初めの音は淸音、中の音は濁音になる事がある。下の音は濁音或は半舌音に成る事があるが、それ等は何れも正音である。而して語の初めの音が濁音又は拗音に成つてゐるのは不正音であると云つてゐる（明治廿六年刊）。〔辭書類〕「古言譯通」本文四卷・目錄一卷（天保八年成、明治廿六年刊）、「萬葉集」「祝詞」「宣命」等の語を五十音順にして口語譯を附した辭書。「萬葉集枕詞解」五卷（文政五年成る。明治廿七年刊。爾後數度刊行）。「萬葉集」の枕詞を解釋したものであるが、「古事記」「日本書紀」等に見える枕詞も併せ解いてゐる。「萬葉集品物解」四卷、目次一卷（別項）。「萬葉集品物圖繪」三冊（別項）その他、「玉蜻考」一卷（文政六年成。明治廿七年刊）は、「玉蜻」「珠蜻」等を「たまかぎる」と讀むべきで、「かぎろひの」とは讀むべきでない事を考證したものである。〔以上鑑田〕

【參考】鹿持雅澄翁傳 井野邊茂雄（國書刊行會本萬葉集古義首卷）○土佐に於ける萬葉學の源流 佐佐木信綱（史學雜誌二八ノ七）

摩擦音（まさつおん） 「子音」を見よ。

正朝（まさとも） 「八十翁疇昔話（やそのおきなむかしばなし）」を見よ。

齊名（まさな） 儒者【姓名】本姓は田口。後、紀と改めた（東鑑卷二十二）。齊名はタダナとも訓む。【生歿】康保三年に生れ、長保元年（一六五九）十一月歿す。享年三十四。【學統】「江談抄」卷五詩事に「齊名は橘正通の弟子なり。正通は源順の弟なり」等の記載がある。【閱歷】やゝ長じて方略の試に應じて及第。長德二年（三十一歲）三月二十八日、東三條院詮子の不豫によつて天下に大赦す。詔は大內記の齊名が作つたものである。同年十二月二十六日、大

宋國の天台宗源清を下して、日本の天台法文七卷幷に牒狀二通、座主暹賀の解文を送り來つたに對して、齊名は匡衡の命によつてその反牒を作つた。翌三年八月十五日、文章博士大江朝臣匡衡の愁申した學生、同時棟の省試に獻じた詩の病累瑕瑾を辨申するの狀を記した。時に從五位下、大內記越中權守である。同四年三月十二日、左大臣藤原道長の上表（辭表）に對する敕答を書かしめられた。長保元年（三十四歲）病に臥した時、具平親王來つて問はせ給うたといふ。【著作】扶桑集十六卷（別項）。散佚して今存するものは殘篇二卷（群書類從一二六所收）○齊名集一部一帖（「通憲入道藏書目錄」には見えてゐるが今傳はらない）。

【批評】詩文に篤志な詩人である。自己の作品の毀譽褒貶に對しては寧ろ神經質とも思はれる程敏感であつた事は、當時の藝術家がその作品に魂を打ち込む熱心さを示してゐる。又文章家としては大江匡房が「齊名は、偏に古集を心腹に取つて敢て新意なし。文々句々皆古詞を採取す。故に風騷の體あれども、若しその意を得ざれば、新意なくして目を驚かすなし」と評してゐる。若しその體を備へ、意を得れば、常人の及ばないところもあらう。ただ新意の乏しいのは獨創的天賦の詩人ではなかつたのかも知れない。

【參考】類聚句題抄 ○朝野群載卷十三（擬文章生詩瑕瑾）○本朝文粹（卷一賦、卷二勅答、卷三對冊、卷六奏狀、卷七奏狀、卷八序、卷十序、卷十一序）○江談抄（卷四・五・六）○和漢朗詠集（紅梅・秋夜・風・田家・佛事・戀）○新撰朗詠集（柳・閏三月・首夏・花橘・蓮・七夕・蟬・初冬・王昭君・雲・山）○十訓抄○古今著聞集（卷四）○今鏡上　〔山岸〕

雅信（まさのぶ）　郢曲家【姓】源氏。俗に一條雅信と稱す。【家名】鷹司【法號】覺實【生歿】延喜二十年に生れ、正曆四年（一六五三）七月二十九日歿す。享年七十四【閱歷】宇多天皇の第八皇子式部卿敦實親王の三男、母は左大臣藤原時平の女。承平三年十二月昇殿（十四歲）、同六年正月七日從四位下、天慶元年十二月十四日侍從（十九歲）、後諸官を經て天祿三年正月二十四日大納言（五十三歲）、貞元二年正月從二位、四月右大臣、六月上表して辭退するも許されず、十二月兼皇太子傅（五十八歲）、天元元年十月左大臣（五十九歲）、同二年三月正二位、寬和二年正月、輦車に乘じて待賢門より出入する事を聽さる（六十七歲）、同三年從一位、永祚元年七月、牛車を聽さる（七十歲）。正曆四年五月、病によつて辭職するも許されず、七月二十八日（一說に二十六日）出家し、同月二十九日薨ず、贈正一位。

【業績】郢曲家としての雅信は、父親王より學んで出藍の譽あり、一代の名手であつた。郢曲（別項）の家の中、源家と藤家の二流が主なる流派で、各々その歌ひ方を若干異にしてゐるが、雅信は實に源家の元祖であり、郢曲の名家綾小路家は雅信を祖とする。現今傳はる催馬樂（別項）の譜は、雅信の所作であると云ふ。神樂と和琴（各別項）とは、父君敦實親王より世に傳へられ、雅信がこれを受け繼いだものである。就中、朗詠（別項）に至つては雅信の興す所であつて、元來朗詠の根本は僅か七首より世に行はれなかつた。この根本七首の中には、雅信が貞元二年右大臣に任ぜられた時、上表した辭退の上表文の一節が入つてゐる。これは菅原文時の作にかゝるものであるが、その表の中「傅氏巖ノ嵐」の句と「春過ギ夏闌ケヌ」の句が、根本七首の中の二首を占めてゐる。これによつても、朗詠は雅信より始まると云つても差支ないことが分る。よつて源家では「傅氏巖ノ嵐」の句を特に祕曲としてゐると云ふ。その他雅信の音樂勘能の事は「大鏡」にも見えてゐる。藤家は右大臣賴宗を流祖として遂に十四代の權中納言宗宣に至り、その郢曲は斷絕して藤家の傳は亡んだが、源家は綾小路家として永く郢曲の道を傳へ、郢曲に關する種々な著作を世に殘して、斯道のために盡し、今日もなほその家を傳へてゐる。〔藤田〕

正秀（まさひで）　俳人【姓名】水田正秀。通稱利右衛門。【號】竹青堂・節青堂【生歿】萬治元年生れ、享保八年（二三八三）八月三日歿。享年六十七。【墓所】近江國粟津龍ケ岡（辭世）行く時は月にならひて水の友【俳系】芭蕉門【閱歷】近江の人、膳所侯本多家に仕へた。「俳人小傳」には「膳所藩中物頭、曲翠が伯父なり」とあるが、確かなことはわからぬ。併し「家族繁富而姓名爲州里見重」（水の友）といふから、相當重い地位であつたらしい。若い頃から竹內正三位殿にたよつて和歌を學び、後俳句に轉じ、芭蕉に就いたが、それは元祿初年頃であるらしい。かくて元祿四年に芭蕉のために義仲寺の無名庵を修理し、同年仲秋芭蕉等と湖上の月を賞したりした。芭蕉の難波病臥の際は早速駈けつけ、その歿後も年回每に力を盡した。元祿十年の頃致仕したが、暫く伏見に隱棲し、後、京都に居住したが、再び膳所に歸り、元祿十五年、洒堂と「白馬集」を撰した。この後は近江蕉門の故老として重きをなし、蕉門俳士の需に應じて序跋を記すこと、凡て三十六集に及んだと云はれ、又俳諧の理窟に落ちざらんことを說いて後進を導いた。門人箕田松琶は、一周忌追善集「誹諧水の友」を撰し、中に、正秀の行狀記「雅行記」を記してゐる。【著作】白馬集（濱田洒堂共撰、元祿十五年刊、蕉門珍書百種）○粟津（長崎古道共撰、寶永元年刊）○蕉門名家句集（正秀の部）（安井小酒編、昭和四年刊）　〔志田〕

【參考】誹諧問答森川許六○誹諧水の友箕田松琶（蕉門珍書百種）○蕉門諸生全傳遠藤曰人○俳林小傳中村光久○俳諧人物便覽三浦若海

正英（まさひで）　神道家【姓】玉木氏。本姓橘【號】葦齋・五十鰭翁【生歿】元文元年（二三九六）七月八日歿す。享年未詳【閱歷】詳かでないが、ただ彼が正親町公通（別項）の門人で山崎闇齋の道の孫たるは事實である。垂加派の神道家であると同時に橘家神道を唱道したと云はれる。學說として一家の見がないではないが、その主とするところは垂加神道の紹述であつた。彼が垂加神道の一人物として當時に重きをなし、學界にその名を馳せたのは、「日本書紀通證」及び「和訓栞」の著者として世に知られた谷川士淸の如きが、その門に出でたるによつても知られる。試みに正英が士淸に與へたる神道免許狀なるものを見るに、「天兒屋根命之嫡傳、垂加靈社直授相承之神道云云、諸傳悉面授口訣畢云云。汝宜守誓約之義以愼而莫怠者也。享保十七年壬子九月廿七日玉木正英」とある。彼はこれより後、五年にして歿した。〔田中（義）〕

【著書】神代卷藻鹽草○神武紀藻鹽草○神道日蔭草○中臣祓風水草管窺○玉籤集等

匡衡（まさひら）　漢學者・歌人【姓】大江氏。匡衡はただひらとも訓む。【生歿】天曆六年に生れ、長和元年（一六七二）七月十六日に歿した。享年六十一。【家系】平城帝の後で、維時（從三位中納言）の孫。【學統】大江家の學風を

平城帝―音人―千古―維時―重光―匡衡―擧周
　　　　　　　　　　　　―齊光―定基

繼承したのは勿論であるが、特に祖父維時の敎を多く受けた。【閱歷】「江吏部集」によると、七歲で讀書を始め、九歲の時には詩を作つた。十三の時元服し、祖父維時の訓誡を受け、「汝は帝王の師たるの風體がある」と勵まされて深く感悟する所があつた。長ずるに從

が翌年遂に歿した。【著作】江吏部集（別項）○大江匡衡朝臣集（續群書類從四三九所收。格調は、まだ拾遺集頃のもので、特に言ふべき特色はないが、儒者で歌人である點は、菅原道眞・源順・源經信・大江匡房その他、所謂和漢兼作者中の一異彩と稱すべきものである）。詩は「本朝文粹」「本朝麗藻」「朝野群載」「三十五文集」等に見え、歌は「後拾遺」「詞花」「新古今」「續古今」「新續古今」「後六々

人であり、左衞門權佐と右少辨を兼ぬるを三事兼帶と稱し、非凡の者のみ望み得るものであつた。一世の名譽である。左衞門權佐となつた時、京師に令して夜行を嚴禁した。そのために後三條帝の代には、盜賊や追剝の心配はなかつたといふ。延久四年（三十二歲）四月には備中介を兼ねて、防鴨河使となつたが、十二月俄に御讓位があり、ついで白河帝の御

二年（承德元年）三月、太宰權帥を兼ね、翌承德二年九月、筑前に下向した。施政宜しきを得、百姓の仰慕するところとなつた。又菅公のために、康和三年夢想によつて安樂寺の祭を始め、八月二十一日菅公の車を駐めた淨妙寺に神輿を巡らし、二十四日に太宰府に歸つた。歸來、太宰府の南の頓宮に、神輿を留めて祭をなし、翌日は竟宴の詩會を行つた。題は「神

その意を得されば新意なくして目を驚かすなし」と評してゐる。若しその體を備へ、意を得れば、常人の及ばないところもあらう。ただ新意の乏しいのは獨創的天賦の詩人ではなかつたのかも知れない。

【參考】類聚句題抄 ○朝野群載卷十三（擬文章生詩瑕瑾）○本朝文粹（卷一賦、卷二勅答、卷三對册、卷六奏狀、卷七奏狀、卷八序、卷十序、卷十一序）○江談抄（卷四・五・六）○和漢朗詠集（紅梅・秋夜・風・田家・佛事・戀）○新撰朗詠集（柳・閏三月・首夏・花橘・蓮・七夕・蟬・初冬・王昭君・雲・山）○十訓抄○古今著聞集（卷四）○今鏡上 〔山岸〕

雅信（まさのぶ） 郢曲家 【姓】源氏。俗に一條

か、雅信は實に源家の元祖であり、郢曲の名家綾小路家は雅信を祖とする。現今傳はる催馬樂（別項）の譜は、雅信の所作であると云ふ。神樂と和琴（各別項）とは、父君敦實親王より世に傳へられ、雅信がこれを受け繼いだものである。就中、朗詠（別項）に至つては雅信の興す所であつて、元來朗詠の根本は僅か七首より世に行はれなかつた。この根本七首の中には、雅信が貞元二年右大臣に任ぜられた時、上表した辭退の上表文の一節が入つてゐる。これは菅原文時の作にかゝるものであるが、その表の中「傅氏巖ノ嵐」の句と「春過ギ夏闌ケヌ」の句が、根本七首の中の二首を占めてゐる。

後俳句に轉じ、芭蕉に就いたが、それは元祿初年頃であるらしい。かくて元祿四年に芭蕉のために義仲寺の無名庵を修理し、同年仲秋芭蕉等と湖上の月を賞したりした。芭蕉の難波病臥の際は早速馳けつけ、その歿後も年回每に力を盡した。元祿十年の頃致仕したが、暫く伏見に隱棲し、後、京都に居住したが、再び膳所に歸り、元祿十五年、洒堂と「白馬集」を撰した。この後は近江蕉門の故老として重きをなし、蕉門俳士の需に應じて序跋を記すこと、凡て三十六集に及んだと云はれ、又俳諧の理窟に落ちざらんことを說いて後進を導いた。門人箕田松琶は、一周忌追善集「誹諧水の

與へたる神道免許狀[illegible]屋根命之嫡傳、垂加靈社直授相承之神道云云、諸傳悉面授口訣畢云云。汝宜守誓約之義、以愼而莫怠者也。享保十七年壬子九月廿七日玉木正英」とある。彼はこれより後、五年にして歿した。 〔田中（義）〕

【著書】神代卷藻鹽草○神武紀藻鹽草○神道日蔭草○中臣祓風水草管窺○玉籤集等

匡衡（まさひら） 漢學者・歌人 【姓】大江氏。匡衡はただひらとも訓む。【生歿】天曆六年に生れ、長和元年（一六七二）七月十六日に歿した。享年六十一。【家系】平城帝の後で、維時（從三位中納言）の孫。【學統】大江家の學風を

平城帝—音人—千古—維時—┬重光—匡衡—擧周
　　　　　　　　　　　　└齊光—定基

繼承したのは勿論であるが、特に祖父維時の教を多く受けた。【閱歷】「江吏部集」によると、七歲で讀書を始め、九歲の時には詩を作つた。十三の時元服し、祖父維時の訓誡を受け、「汝は帝王の師たるの風體がある」と勵まされて深く感悟する所があつた。長ずるに從ひ、博覽强記を以て嶄然頭角を現はし、及ぶ者がなかつた。天元三年（二十四歲）十月二十八日、文章生となり、秀才に補せられ、翌年正月越前の權大掾に任ぜられた。天元五年（三十一歲）正月、右衞門の權尉となり、翌二月八日、檢非違使の宣旨を蒙つた。未だ秀才で檢非違使の宣旨を蒙つた例は、全く特例として當時一般の人々を驚歎させた（小右記）。永觀二年（三十三歲）には從五位となり、甲斐の權守・彈正少弼等に任ぜられた（中古歌仙三十六人傳）。永祚元年（三十八歲）正月、從五位上となり、十一月文章博士となつた。また一條帝の侍讀として「詩經」「書經」「文選」「禮記」「老子」等の侍講をなした（江吏部集卷中）。正曆二年（四十歲）正月に侍從となり、翌年正月尾張の權守を兼ね、長德元年に正五位下に進み、式部權少輔を兼ねた。長德三年（四十六歲）に越前權守を兼ね、又東宮學士でもあつた。翌年、從四位下となり、式部權大輔に轉じ、十一月二十三日に初めて昇殿を許された。「古調百韻」には沈淪した由を述べてゐる。長保三年（五十歲）正月、尾張權守を兼ね、十一月正四位下に叙せられた。ついで寬弘三年（五十五歲）式部權大夫を辭し、翌年九月には東宮學士をも辭した。寬弘五年正月、又式部權大輔となり、同七年に式部大輔に轉じ、丹波守を兼ね、或は侍從となつたが翌年遂に歿した。【著作】江吏部集（別項）○大江匡衡朝臣集（續群書類從四三九所收。格調は、まだ拾遺集頃のもので、特に言ふべき特色はないが、儒者で歌人である點は、菅原道眞・源順・源經信・大江匡房その他、所謂和漢兼作者中の一異彩と稱すべきものである）。詩は「本朝文粹」「本朝麗藻」「朝野群載」「三十五文集」等に見え、歌は「後拾遺」「詞花」「新古今」「續古今」「新續古今」「後六々撰」等に見えてゐる。 〔山岸〕

【參考】江吏部集○中古歌仙三十六人傳○小右記（寬弘九年七月十七日）○本朝續文粹卷六

匡房（まさふさ） 漢學者・歌人 【姓】大江 【生歿】長久二年に生れ、天永二年（一七七一）十一月五日薨じた。享年七十一。【家系】平城帝の後、匡衡（別項）の曾孫。

匡衡—擧周—成衡—匡房—┬隆兼
　　　　　　　　　　　└維順—維光—廣元

【閱歷】匡房の「江納言暮年詩記」（朝野群載卷三）に據れば、四歲の時から書物を讀み、八歲に至つて、「史記」「漢書」に通じ、神童とまで賞讃せられた。當時源師房が、雪裏看松貞の題で詩を賦させたが、停滯なく出來たので驚嘆した事もある。それを後冷泉帝に獻じたので、帝も感嘆され、學問料を給せられた。天喜四年、十六歲で文章得業生に補せられ、翌々康平元年十二月對策に及第し、同三年（二十歲）三月、式部少丞に遷り、間もなく從五位下に叙せられた。治曆三年（二十七歲）二月東宮學士に任ぜられ、翌年七月中務大輔となり、正五位下に叙せられた。かく二階を一時に越えたのは、その年、後三條帝の即位により、先きの東宮學士の時の功績によるのである。又帝の即位と共に藏人に補せられた。延久元年（二十九歲）正月、左衞門權佐に遷り、同四月再び東宮學士となつた。藏人であり、左衞門權佐と右少辨を兼ぬるを三事兼帶と稱し、非凡の者のみ望み得るものであつた。一世の名譽である。左衞門權佐となつた時、京師に令して夜行を嚴禁した。そのために後三條帝の代には、盜賊や追剝の心配はなかつたといふ。延久四年（三十二歲）四月には備中介を兼ねて、防鴨河使となつたが、十二月俄に御讓位があり、ついで白河帝の御即位があつた。けれども、新帝の藏人に補せられ、又東宮學士をも兼ねた。延久五年に後三條法皇は崩じ給うた。翌承保元年正月、美作守、從四位下に叙せられ、防鴨河使備中介、東京學士は從前の如くであつた。東宮學士を三度勤務する事は匡房を以て濫觴とする。翌年正四位下に叙せられた。承曆四年（四十歲）八月權左中辨に遷り、美作守を罷めた。その頃、高麗王が病んで日本の名醫を召すとの牒狀が太宰府に來た。やがて奏聞に達したが、牒狀の文中に聖旨の二字が舊例に相違してゐた爲めに、禮を失するものとしてその請を拒絕した。匡房はその文を作つてゐる。その後式部權大輔・備前權守・左大辨等を歷任し、應德二年（四十五歲）二月、勘解由長官を兼ね、翌年從三位に進んだ。寬治元年（四十七歲）正月、式部大輔に轉じ、翌年は正三位、周防權守を兼ね、又參議となつた。寬治六年（五十二歲）正月、越前權守を兼ね、同八年六月に正三位權中納言に進んだ。秀才出身者でかくの如き昇進は異例である。その年八月八日の釋奠の上卿を勸めた。名聲いよ〳〵揚り、白河帝は「朕は文王なり……朕匡房を抽賞するは文道を尊ぶにあらずや。文道を尊ぶを文王とはいふべきなり」とさへ仰せられたといふ。次いで嘉保二年（五十五歲）正月、從二位に進み、翌々永長二年（承德元年）三月、太宰權帥を兼ね、翌承德二年九月、筑前に下向した。施政宜しきを得、百姓の仰慕するところとなつた。又菅公のために、康和三年夢想によつて安樂寺の祭を始め、八月二十一日菅公の車を駐めた淨妙寺に神輿を巡らし、二十四日に太宰府に歸つた。歸來、太宰府の南の頓宮に、神輿を留めて祭をなし、翌日は竟宴の詩會を行つた。題は「神德契遐年」であり、匡房は詩序を書いてゐる（古今著聞集卷四）。翌年正月、正二位に進み、五年の任を果して上洛の時、安樂寺の曲水宴に參列した。その時も、詩の序を書いた（古今著聞集卷四）。長治三年（六十歲）三月再び太宰權帥となつたが、足を病んで赴任する事が出來ず、在京して事務を決裁し、裁判沙汰等が頻繁で世人はこれを非難した事もある。天永二年七月、七十一歲で大藏卿に任ぜられて後、間もなく九月中旬より病み、十一月五日に薨じた。【著作】狐媚記（類從一三五、本朝續文粹卷十一所收。康和三年、洛陽に狐媚の妖のあつた事を記した短文）○暮年記（類從一三五、本朝續文粹卷一一、朝野群載卷三。正しくは、暮年詩記とあるべきである。少年時代から詩に勝れてゐた事を記し、且つ暮年詩の由緒を記したもの）○遊女記（別項）○傀儡子記（別項）○對馬貢銀記（類從五〇〇、朝野群載卷三所收。對馬から貢する銀の採掘や精製の事を略記したものである）○洛陽田樂記（類從三六三、朝野群載卷三所收。永長元年の夏、田樂の流行した狀況を記してゐる）○筥崎宮記（朝野群載卷三所收。筥崎の宮の事蹟）○歌合祭文（朝野群載卷三所收。橘俊綱等二十二人右方の方人が梅宮の大神に優勝を祈つた文）○高麗國牒（本朝續文粹卷一一所收）○白頭歌（本朝續文粹卷一一所收）。（以上はみな短文）○續本朝往生傳（往生傳參照）○石淸水不斷念佛

緣起（類從四二七所收。延久二年十月記。治暦三年十月、石淸水八幡の寶前に不斷念佛を初めて修した緣起を記したもの）○皇慶阿闍梨傳（續類從二一四所收。「谷阿闍梨傳」ともいふ。延暦寺の皇慶の傳を天仁二年四月に記したもの）○中御室御灌頂記（續類從七四七所收。寛治三年三月、仁和寺に中御室卽ち覺行の御灌頂の記である）○本朝神仙傳（續類從一九三所收。役行者・弘法大師・慈覺大師等八名の僧の傳である）○天仁大嘗會記（續々類從所收）○江談抄（別項）○江家次第（別項）○江帥集（寫本一卷）（圖書寮に在り、萬葉集の研究にも關係したので、その歌には萬葉集の格調を有するものがある）。

【業績】歌人としては、從來特に稱せられなかつたが、「江帥集」一卷の存世は、更に彼をして「萬葉集」の研究家の和歌たるの特色を發揮せしめてゐる。詩人としては、十歲の時、源師房の邸で、抄物や切韻の書を持たずに雪裏看松貞を賦し、十五歲の時には秋日閑居賦を作つた。大學頭藤原明衡は、これを見て「其の鋒、森然、定めて敵する者少からん」と賞讃した。翌年、又落葉埋泉石の詩を見て、明衡は更に驚嘆し、「既に佳境に到る」と言つた。或は源師房は、匡房の詩に對して「馬は吳坂の風に嘶き、龜は盧江の波に游ぐ勢あり」と言つた。その他彼の詩文の勝れたものは對として人口に膾炙せられ、又短文として多く流布してゐるものによつても、全豹を窺ひ知る事が出來る。又博學の點に關しては、藤原頼通が平等院を建設しようとした時、匡房は十一歲で、源師房と同道して行つた。この地は地勢の關係で大門を北にしなければならなかつたが、左樣の寺の例を師房は知らなかつた。匡房は尋ねられる儘に、天竺の那蘭陀寺、支那の西明寺、本朝の六波羅蜜寺、共に大門は北に在ると答へた。これを聞いて、頼通は「稽古の力、有職の才、此の者に超えたるはあるべからず。後必ず大位に至るべし」と賞せられた。その他、正直であり、同時に内剛の點もあつたらしい。後三條帝が伊勢へ勅使を立てるために宸筆の宣命を匡房に示し給うた。その中に「卽位以來政道を私せず」との意が記されてゐた。匡房がその處を讀んで中止してゐると、帝は「僻事やある」と仰せられた。時に匡房は、「先きに藤原實政を左中辨とし給ひしは、豈隆方を措きしにあらざらんや。叡慮を垂れ給はずば殆ど神明を欺き給ふに近からんか」と。帝は恥ぢて内に入り給うた。かくの如き直諫も數度あつた事は、彼が單に學才のみの人ではなかつた故であらう。而も帝も亦、その直諫を納れ給うたのは君聖智、臣賢明の致すところと言はうか。なほ匡房は藏書家としても著名であつた。六條坊門の北、西洞院の東の千草殿は具平親王の家であつたが、匡房はこれを購求したのである。其處に校倉作りの書庫を營んだのであるが、仁平三年四月十五日の火災に燒失してしまつた。

【參考】本朝續文粹○本朝無題詩○朝野群載○江談抄○新撰朗詠集○本朝小序集（山岸）

政方（まさみち）

漢學者・國語學者【姓名】初め關藤氏、後、關と改む。通稱立介、字は士常。政方は政三千・政御路・萬沙御路・磨沙密などとも書く。【號】鳧翁・葭汀・嘉平田舍【生歿】天明六年十二月生れ、萬延二年（二五二一）正月二十二日歿す。享年七十六。【墓所】備中國小田郡笠岡町古城山（舊名「海松岡」）【閱歷】備中小田郡吉濱の人、父は關藤左京政信と云ひ、同地の神官である。政方は若年の頃京都へ出でて村山伊豆守に從つて醫學及び漢學を修めた。後鄕里へ歸り、そこで一生を終つた。又本居宣長・同春庭（各別項）等の書に依つて國學を修めたが、國學は獨學であつたやうである。天保十三年の秋から東條義門（別項）と交り、頗る親しかつたが、間もなく義門は歿した。

【著作】傭字例一卷一册（天保十三年刊。ン・ムの別を研究し、漢語から轉訛したと思はれる國語について論じたもの。蟬・文・旻樂・支那・近義・灘等十五語について論考し、せみ・ふみは蟬・文の字音から出來た語でないとしてゐる。なほ附錄として「漢吳音圖」（別項）に依つて芭蕉・杲・鐘禮等十二語について說いてゐる）○傭字例評辨一册（これに二部ある。一は東條義門が「傭字例」を批評したのに答へたもの、一は江戶の某氏の批評に答へたもので、共に「傭字例」の補遺とも見るべきものである。兩書共天保十三年の冬脫稿。なほ本書の奥に或る人の問に答へて因高・淡等・宇合・賀能について記してゐる）○聲調篇二卷（別項）（天保十一年成）○男信質疑一卷（「聲調篇」の附錄として附いてゐる事もある。「男信」（別項）について疑はしい所、誤りと思ふ所を記したもの）。

【業績】政方の著述は大體以上の如く、漢字の音韻に造詣深く、その方面から國語の研究をなしてゐる。就中、「傭字例」は義門の「男信」（別項）と内容に於て相通ずるものであるが（兩者は別々に研究したものである）、男信の缺を補ふ點もあり、國語學上に貢獻するところ少くないものである。（龜田）

【參考】關鳧翁の傳井上通泰（藝文一）○義門上人と政方大人岡井愼吾（國語國文の研究六）

正宗白鳥（まさむねはくてう）

小說家【本名】忠夫【閱歷】明治十二年三月、岡山縣邑久郡穗浪村の舊家に生る。明治二十五年、高等小學校を終へ、近隣の池田光政時代からの藩校である閑谷黌に入つて漢籍を學ぶ傍ら、近松物や「水滸傳」などを讀み、現代物では民友社の出版物に最も親しんだ。二十七年に胃を病み、岡山市に寄宿して病院に通ふ傍ら、米國宣教師經營で、安部磯雄校長の薇陽學院で英語を學んだ。二十九年上京、東京專門學校（早稻田大學前身）英語專修科に入學、三十四年文學科卒業。在學中、既に島村抱月指導の下に、讀賣新聞月曜附錄に批評文を寄稿した。卒業後は早大出版部に入り、文學科講義錄の編輯に携はつた。思想的に多少動搖するところあり、嘗て植村正久から洗禮を受け、市ケ谷の日本基督敎會の會員となり、又内村鑑三の著書や講演に依つて感化されたことが尠くなかつたが、後、その基督敎を捨てるに至つた。三十六年讀賣新聞社に入り、美術・文藝・敎育に關した記事を擔當し、傍ら劇評の筆を執つた。三十九年、自然主義運動漸く盛んになり、文壇の風潮が將に變化しようとしてゐたのに乘じ、「早稻田文學」に小品「二階の窓」、「新小說」に短篇「舊友」を寄せた。四十年、「趣味」所載の「塵埃」（別項）の世評よく、新進作家として注目されるに至つた。四十一年には、「何處へ」（別項）「玉突屋」「五月幟」「世間並」等の短篇、長篇「二家族」（別項）を次々に發表して自然主義作家の雄を以て稱せられた。四十三年、讀賣新聞社を退く。同年「徒勞」「微光」（別項）を出し、益々聲價を高め、文壇に確乎たる地位を築くやうにな

正宗白鳥

つた。爾來作家生活に入り、數篇の長篇小說、數十篇の短篇小說、脚本數種、その他多くの隨筆を公けにして今日に至つた。昭和三年十一月、夫婦相伴うて世界漫遊の途につき、四年秋歸朝した。【作品】彼の短篇小說は、百篇を越えてゐる。前に擧げたものの外、世評の高かつた作品を列擧すると、「泥人形」（別項）（明治四十四年）、「初旅」（大正三年）、「入江のほとり」（同四年）、「牛部屋の臭ひ」（別項）（同五年）「死者生者」

說では盛り得ず、たとひ盛り得ても效果がより少くなるやうな主題へ轉向した。卽ち人生の平凡・無爲・虛無・幻滅から、終には生ぜずにはゐない鬼氣・妖氣が、その發言を求めるのであつた。尤もこの傾向は、小說に於ては、古くは既に「微光」などにも仄かに見え、小說として比較的近作に屬する「毒婦のやうな女」「生れざりしならば」等に現はれてゐるが、その後の戲曲「人生の幸福」（別項）「影法師」の如

七十八。【法名】六樹院臺譽五老居士【墓所】淺草黑船町正覺寺（榧寺）地中哲相院【家系】祖先は詳かでないが、代々糠屋七兵衞を通稱とし、彼の四代前から旅籠屋を業とした。父覺翁は石川家から糠屋へ養子に來たもので、その妻は家付の娘であるが、この石川家は元北條氏の臣で、三代孫三郎は天正の亂に小田原で戰死した。覺翁は石川豐信と名乘り、又秀葩と號した浮世繪の大家で、彼も弱年の頃

太郞方に同居し、同家で病歿した。狂歌は初め頭光に從ひ、後、四方赤良（別項）に師事し、終に一家を成してその社中を五側と稱し、頭光・鹿都部眞顏・錢屋金埒（各別項）と共に、狂歌四天王と呼ばるゝに至つた。文化の初年眞顏が俳諧歌を唱道したのに反對し、狂歌は落書より出たものだと論じてこれと爭ひ、一時絕交に及んだが、文化十四年蜀山人の仲裁に由つて和解した後、眞顏と共に宗匠號を受かり、そ

は源師房は、匡房の詩に對して「馬は吳坂の風に嘶き、鷁は盧江の波に游ぐ勢あり」と言つた。その他彼の詩文の勝れたものは對として人口に膾炙せられ、又短文として多く流布してゐるものによつても、全豹を窺ひ知る事が出來る。又博學の點に關しては、藤原賴通が平等院を建設しようとした時、匡房は十一歲で、源師房と同道して行つた。この地は地勢の關係で大門を北にしなければならなかつたが、左樣の寺の例を師房は知らなかつた。匡房は尋ねられる儘に、天竺の那蘭陀寺、支那の西明寺、本朝の六波羅蜜寺、共に大門は北に

あるが、仁平三年四月十五日の火災に燒失してしまつた。

【參考】本朝續文粹○本朝無題詩○朝野群載○江談抄○新撰朗詠集○本朝小序集　（山岸）

政方（まさみち）　漢學者・國語學者【姓名】初め關藤氏、後、關と改む。通稱立介、字は士常。政方は政三千・政御路・萬沙御路・磨沙密などとも書く。【號】梟翁・葭汀・嘉平田舍【生歿】天明六年十二月生れ、萬延二年（二五二一）正月二十二日歿す。享年七十六。【墓所】備中國小田郡笠岡町古城山（舊名「海松岡」）【閱歷】備中小田郡吉濱の人、父は關藤左京政信と云ひ、同地の神官である。政方は若年の頃京都へ出

【業績】政方の著述は大體以上の如く、漢字の音韻に造詣深く、その方面から國語の研究をなしてゐる。就中、「傭字例」は義門の「男信」（別項）と內容に於て相通ずるものであるが（兩者は別々に研究したものである）、男信の缺を補ふ點もあり、國語學上に貢獻するところ少くないものである。　（龜田）

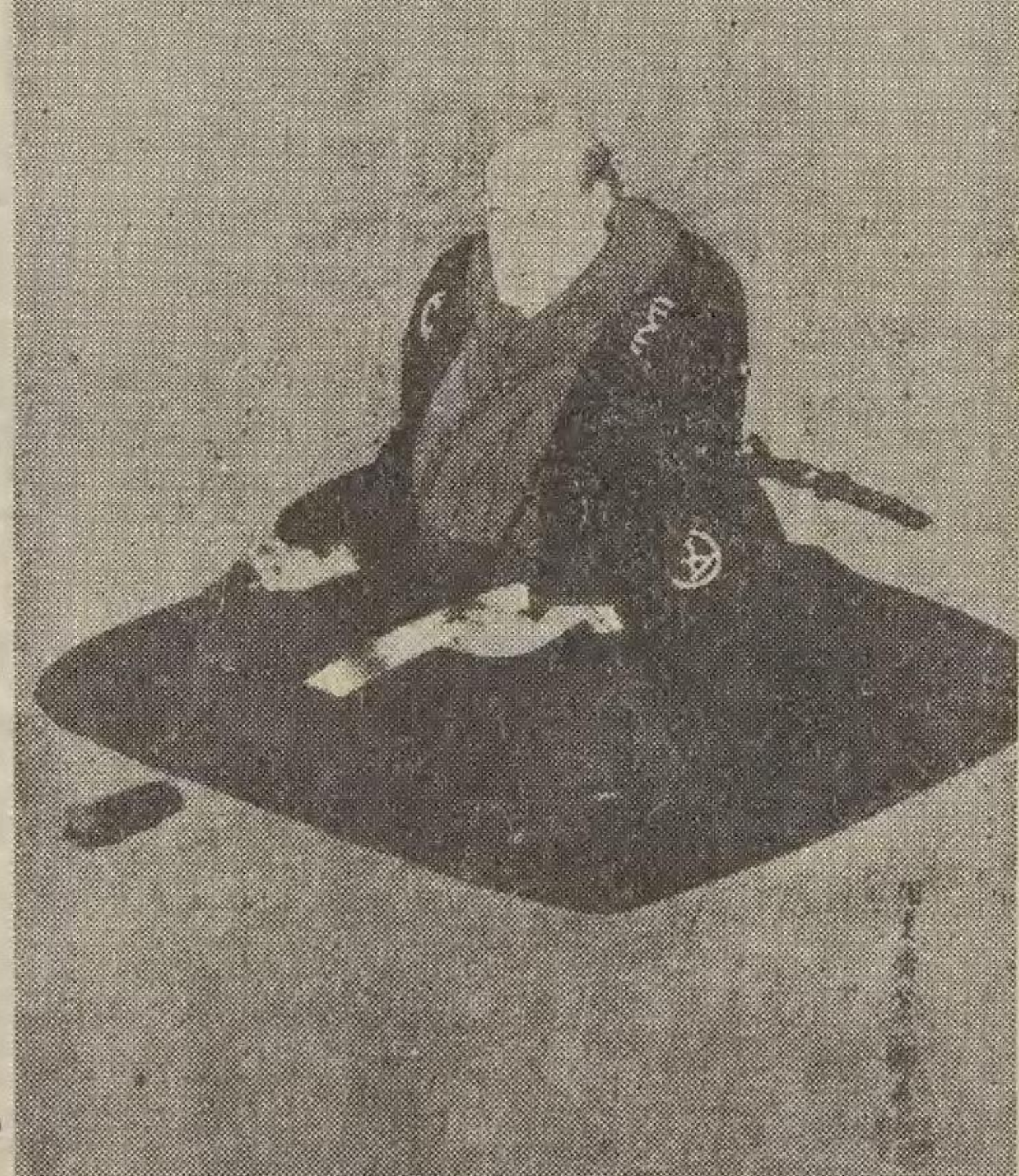
【參考】關梟翁の傳井上通泰（藝文一）○義門上人と政方大人岡井愼吾（國語國文の研究六）

正宗白鳥（まさむねはくてう）　小說家【本名】忠夫【閱歷】明治十二年三月、岡山縣邑久郡穗浪村の舊家に生る。明治二十五年、高等小學校を終へ、近隣の池田光政時代からの藩校である

した記事を擔當し、傍ら劇評の筆を執つた。三十七年、處女作「寂寞」を發表した。三十九年、自然主義運動漸く盛んになり、文壇の風潮が將に變化しようとしてゐたのに乘じ、「早稻田文學」に小品「二階の窓」、「新小說」に短篇「舊友」を寄せた。四十年、「趣味」所載の「塵埃」（別項）の世評よく、新進作家として注目されるに至つた。四十一年には、「何處へ」（別項）「玉突屋」「五月幟」「世間並」等の短篇、長篇「二家族」（別項）を次々に發表して自然主義作家の雄を以て稱せられた。四十三年、讀賣新聞社を退く。同年「徒勞」「微光」（別項）を出し、益々聲價を高め、文壇に確乎たる地位を築くやうにな

つた。爾來作家生活に入り、數篇の長篇小說、數十篇の短篇小說、脚本數種、その他多くの隨筆を公けにして今日に至つた。昭和三年十一月、夫婦相伴うて世界漫遊の途につき、四年秋歸朝した。【作品】彼の短篇小說は、百篇を越えてゐる。前に擧げたものの外、世評の高かつた作品を列擧すると、「泥人形」（別項）（明治四十四年）、「初旅」（大正三年）、「入江のほとり」（同四年）、「牛部屋の臭ひ」（別項）（同五年）「死者生者」（同年）、「毒婦のやうな女」「尾花の蔭」（同九年）、「人さま〲」（同十年）、「生れざりしならば」（同十二年）等。長篇小說には「二家族」（別項）（明治四十一年）、「落日」（同年）、「毒」（同四十四年）、「生靈」（大正元年）、「波の上」（同五年）、「稻妻」（同十一年）、「人を殺したが…」（同十五年）等がある。【批評】彼は人生の最も平凡な姿を最も深く鋭く感受し、平凡生活に如何に戰慄すべき要素があるかを世に示した作家である。彼の特色の凡てはそこから出發してゐる。彼は決して光明ある人生を描いたことがない。常に生きるに甲斐なく、求めるに賴りのない人生になほも喘ぎながら生きて行かねばならぬ生活の姿を克明に寫し出す。大體から見て、彼の作には人生に何等の光明もなく、信仰もなく、無自覺に生きて行く中產階級者及び下層民の生活と、初めには光明もあり、理想もあり、青春も戀もあるが、次第に幻滅を感じて、投げやりになり、頹廢的となるやうなインテリゲンチヤの生活が展開されてゐる。それ等の生活のあらゆる場合、あらゆる樣相を表はしたのが、彼の作品の大部分である。尠くとも大正十一二年頃、主として戲曲を書き出すまではさうであつたと見てよい。創作慾を專ら戲曲に移すやうになつた彼は、內容的にも小說では盛り得ず、たとひ盛り得ても效果がより少くなるやうな主題へ轉向した。卽ち人生の平凡・無爲・虛無・幻滅から、終には生ぜずにはゐない鬼氣・妖氣が、その發言を求めるのであつた。尤もこの傾向は、小說に於ては、古くは既に「微光」などにも仄かに見え、小說として比較的近作に屬する「毒婦のやうな女」「生れざりしならば」等に現はれてゐるが、その後の戲曲「人生の幸福」（別項）「影法師」の如きに至つて愈々尖銳の度を加へて來た。彼はニヒリストだといふ定評を得てゐる。幸福さうに公園を散步してゐる若い男女があれば、彼等から早速その幸福を奪ひ去つてしまふ。さういふ意味で、彼はニヒリストだ。彼くらゐロマンチシズムを否定し拒否する作家は日本に珍らしい。その點では、彼はロシヤのチェーホフである。ただ彼とチェーホフとが異なる點は、彼が完全に突き放した第三者的、寧ろ冷笑的態度で以上の如き生活を描いてゐるに對し、チェーホフは飽くまでも淚を以て抱くやうな氣持で、虛無・自滅・頹廢の生活を描いてゐる點である。技巧家として彼は淡々として投げやり、所謂無技巧的に見えて、最も細心に表現的努力を積んでゐるやうに思はれる。所謂無技巧の技巧の極致に達してゐる。彼の表現樣式は決して新しくはない。どうかすると西鶴や草雙紙を思はせる場合もある。併しながら、それにも拘らず、新しく讀ませるところに、彼の老熟さがある。　（宮島）

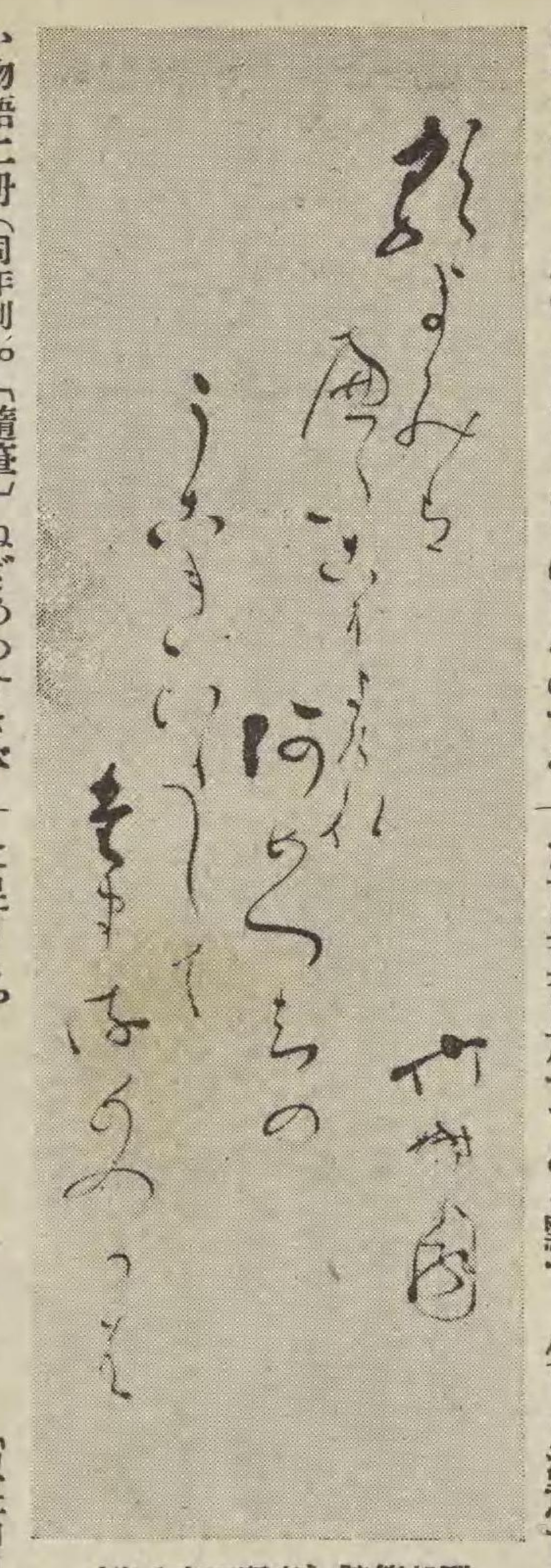
雅望（まさもち）　國學者・狂歌師【姓名】石川氏。字は子相。通稱糠屋七兵衞、後、中村屋五郎兵衞【號】宿屋飯盛・六樹園・蛾術齋・五老翁【生歿】寶曆三年十二月十四日江戶に生れ、天保元年（二四九〇）閏三月二十四日歿す。享年七十八。【法名】六樹院臺譽五老居士【墓所】淺草黑船町正覺寺（榧寺）地中哲相院【家系】祖先は詳かでないが、代々糠屋七兵衞を通稱とし、彼の四代前から旅籠屋を業とした。父覺翁は石川家から糠屋へ養子に來たもので、その妻は家付の娘であるが、この石川家は元北條氏の臣で、三代孫三郎は天正の亂に小田原で戰死した。覺翁は石川豐信と名乘り、又秀葩と號した浮世繪の大家で、彼も弱年の頃父に就いて畫を學んだ事があり、蛾術齋の號はこれに基いたものである。又彼もこの時より石川姓を名乘る事となつたが、糠屋の本姓は加藤であつたとの說がある。雅望は五男であるが四兄は皆夭折し、その妻りきは相川久左衞門の女で、その子の淸三郎は塵外樓淸澄（別項）と號して、父と共に狂歌を詠じ、五側の判者として名高く、その子に梅太郎・松三郎・竹四郎といふ三人の兄弟があつて長子梅太郎は梅多樓善福と號し、靈岸島本湊町に筆耕を業とし、店では紙類を鬻いでゐたが、天保の末、四谷傳馬町に移轉し、明治三年に歿す。【閱歷】初め津村宗庵（正恭）に就いて國書を學んだといふのみで、その後は獨學自修、和漢の書を涉獵し、博覽強記、狂歌師中での學者と稱せられた。一說には漢學を古學昔陽に、書道を澤田東江に學んだといふ。初めは小傳馬町（舊名六本木卽ち六樹園の號ある所以）で宿屋を營んでゐたが、寬政三年公事宿の嫌疑を蒙つて江戶構へに處せられ、妻子と共に府中在鳴子村に退隱し、更に內藤新宿に移つた。その顚末は「不問物語」に精しい。晚年は靈岸島の孫梅太郎方に同居し、同家で病歿した。狂歌は初め頭光に從ひ、後、四方赤良（別項）に師事し、終に一家を成してその社中を五側と稱し、頭光・鹿都部眞顏・錢屋金埒（各別項）と共に、狂歌四天王と呼ばるゝに至つた。文化の初年眞顏が俳諧歌を唱道したのに反對し、狂歌は落書より出たものだと論じてこれと爭ひ、一時絕交に及んだが、文化十四年蜀山人の仲裁に由つて和解した後、眞顏と共に宗匠號を授かり、その披露會を催した事もあるが、この宗匠號授與の事は全く或る人の詐欺に出たもので、眞に宗匠號を授かつたのは、碑文に「京師縉紳之家、嘗覽㆓君之著書㆒、感歎不㆑措、授以㆓宗匠之號㆒、敍㆓之法眼㆒、歿之後宣文始到㆓于東都㆒」とある通り、飯盛が歿した後の事である。文化・文政年間は實に雅望の全盛期で、眞顏の四方側に對峙して、全國に亙つて門人三千人を有し、その中より數十人の判者を出してゐるが、就中、福廼屋・神歌堂・橘樹園・六朶園・六史園・江都園・六極園・綠樹園全亭等は勝れた門弟であつた。【人物】所謂學者肌の性格で、自信が強く、寬裕溫柔の風に乏しく、ために人と爭う



石川雅望（國貞畫）

て敵を作る事もあつて、「嬉遊笑覧」の著者の如きは「飯盛は大言して人を誘る本性なり」と評してゐるが、一方また知己に對しては友情に厚く、門人を薫陶するにも嚴格のうちに懇切なところがあつたと云ふ。

【著書】石川雅望集（有朋堂文庫）○六樹園家集野崎左文編（新群書類從第十所收）。【國文關係】源注餘滴五十四卷（國書刊行會）○雅言集覽（中島廣足補）三冊（別項）○徒然草新註二卷。【和文戲著】都の手振一冊（文化六年刊。百家說林正編上所收）（別項）○北里十二時一冊（文化七年刊。溫古叢書第五編、百家說林正編上所收）（別項）○狂文あつまなまり二冊（天保十年刊）○しみのすみか物語二冊（同年刊）。【隨筆】ねざめのすさび三卷（百家說林續編上所收）（各別項）。【自傳】不問物語一冊。【狂歌狂文に關するもの】五十人一首狂歌文庫一冊（天明六年刊）○百人一首狂歌袋一冊（同七年刊）○吾嬬那萬俚一冊（文化十年刊）○（文化新撰）狂歌百人一首（重政畫）一冊（文化六年刊）○自讃狂歌集一冊（同八年刊）○狂歌五十人一首一冊（同十年刊）○狂歌堀川太郎百首二冊（同年刊）○狂歌堀川次郎百首二冊（同年刊）○狂歌百人一首（北溪畫）一冊（同年間刊）○萬代狂歌集四冊（同年間刊）等が整つたもので、又歌合體の職人盡狂歌合二冊（文化二年刊）○狂歌評判記（一名筆果報）一冊（同五年刊）○飲食狂歌合一冊（同十一年刊）○武者盡狂歌合一冊（同年間刊）○雪月花狂歌合一冊（同年間刊）○今樣職人盡狂歌合（眞顏と合評）二冊（文政八年刊）等。なほ狂歌狂文に關するものは天保初年に至る迄その數凡そ六十餘部に及んでゐる。〔以上野崎〕



雅望筆蹟（高野辰之氏藏）

【黃表紙作者として】二種の黃表紙の作がある。一は宿屋飯盛の署名、天明三年刊の「櫻草野邊錦」で、なますの盛方の序、四方赤良の跋を附してゐる。一は六樹園の署名、文化五年刊の「敵討記乎汝」（別項）である。共に一時の戲れに過ぎないが、後者は當時の黃表紙に於ける敵討物の流行を揶揄したものである。また古典臭を加へてゐる點で、少しく注意するに足りる。〔以上山口〕

【讀本作者として】「近江縣物語」「天羽衣」「飛驒匠物語」「しみのすみか物語」（各別項）等の作を以て、讀本に特殊な位置を占めてゐる。もと文化文政頃、讀本の盛時にあつて、國學者としての素養になるもので、平明典雅な文章になり、雅文小說ともいふべきであるが、又支那文學を巧みに脫化し、傳奇風の浪漫小說をなして、讀本の特性を備へてゐる。殊に「近江縣物語」「飛驒匠物語」の二作は、讀本に獨自な立場を認めさせるものであらう。〔以上笹野〕

【國語學上の業績】雅望は中古文學の造詣深かつたが、直接國語學上の業績としては、「雅言集覽」（別項）を擧げねばならぬ。本書はその名の示す如く、所謂雅言のみを集めたものである。辭書としては語釋が不十分であるが、語彙は頗る豐富で、且つ出據を記してゐる事は大に多とすべきである。江戶時代には中古文學の研究が盛んであり、又一方擬古文が流行した爲めに、學者は中古文學の辭典を必要とし、その編纂に着手した人は實に枚擧に遑ない程である。而も多くは小規模で、自分の歌文を草する時の手控へに過ぎなかつた。本書は所收語の範圍は狹いが、語彙の豐富な點では江戶時代に於て本書の右に出づるものがない。辭書としては缺陷があるが、而も「和訓栞」「俚言集覽」（各別項）と共に江戶時代に於ける辭書を代表するものである。〔以上龜田〕

【參考】小說家としての石川雅望武島羽衣○六樹園漫考萩上良一（國語と國文學昭和五年）

雅之（まさゆき）　歌學者【姓名】鈴木氏。通稱一平【生歿】天保八年、下總國香取郡鏑木村に生れ、明治四年四月二十一日歿。享年三十五。【閱歷】雅之は、下總國埴生郡飯岡の田園歌人、神山魚貫の門に入つて作歌を學んだ。後、同國香取郡の歌人、伊能穎則の敎をうけた。穎則は中頃東京に住み、大學大講義の位地にあり、後、故鄉に歸つて香取神宮少宮司となり、更に權少敎正を兼補した人で、歌學・史學・神道に關する著述がある。雅之は、和漢の學に精しく、殊に古道では、夙くから一家を成してゐた。古道の立場は、獨自のものであつたとはいへ、大體において平田派を學んでゐたもののやうである。歌學については、「歌學正言」「歌學新語」の二書がある。「歌學正言」は、慶應三年、雅之が三十一歲の時に成つた書で、「歌學新語」は「歌學正言」の前後に著はされたものである。情を第一とし、言葉と調とは、それに次ぐべきものとすること、俗言を退け、雅言を取ること、調の價値は昔も今も變ることはないから、古きに從ふべきこと、二書は大略、かう說いてゐるのである。景樹の歌學に、一矢をむくいてゐることが解るのである。雅之は、この方面では宣長を思慕してゐた。明治の初め、大學少助敎となり、後、宣敎中講義生に任ぜられた。早く世を去つてはゐるが、しかし多くの業績を殘してゐる。

【著書】古事記譯解○日本書紀名物正訓○宮賣神考○天津祝詞考○天津祝詞說略○撞賢木○靈魂說略○理學新論○史論○民政要治○治安策○活語全圖○詞の花筐○類題八代選○類題淸風集○類題淸風集二編○百體百首○花實百首○歌學正言○歌學新語○春秋贊義○大學辨○論語辨○中庸辨○孟子辨○花のしべ○客居偶錄○客居雜錄○四大恩書

【參考】農村の生んだ國學者鈴木雅之村岡典嗣（思想昭和五ノ八）〔鎌田〕

雅嘉（まさよし）　國學者【姓名】尾崎氏。通稱俊藏（春藏ともいふ）。字は有魚【號】蘿月庵・華陽・春の屋・博古知今堂【生歿】寶曆五年大阪に生れ、文政十年（二四八七）十月三日歿す。享年七十三【法名】淸宵院石叟蘿月居士【墓所】大阪市杤繩坂春陽軒【閱歷】初め醫を業としたが、少時より讀書に耽り、學問の進んだところから、後、醫業を廢し、學者として立ち、多くの書を著はした。歌をもよくし、中世の體を好んで詠み、老いていよ〳〵その調が高かつた。國學に、漢學に、歌道に、就いて學ぶ者が多かつた。その人物の善良であつたことは、門人澤邊熹之の書いた小傳に、「たときに諂ふ事なく、初學びの者等をねもころに

さとし云々」と記されてゐる。餘技としては、香道に達してゐたといふ。子がなく、弟谷川予裔の子某がその跡を嗣いだ。雅嘉の家は、「書を鬻ぐを以て業とするが故に云々」と「三十六家集略傳」に記されてゐるところから、雅嘉自身もその業を營んでゐたやうに思はれて來たが、住所その他から、幸田成友博士はこれを否定してゐる。前記の熹之の小傳にも、雅嘉の文稿・歌稿の類にもその由は見えない。

して辭したが、更に天明七年山內豐雍の藩政改革に際し、郡奉行兼普請奉行に擢でられ、ついで物頭格に進んで官祿五十石を加給され、ついで大目付役となり、前に給する所の官祿を以て世祿に併せ、別に五十石を支給された。彼は固辭したけれども、藩主許さず、努めて事を執らせた。然るに藩制上儒者としてかくの如き位置に立つた先例がなく、非難が續出したけれども、彼はこれに屈せず、あくまで中

した。雅量があつて直言を好んだが友誼に厚く、和歌を嗜み、研究には甚だ勤勉であつた。

【參考】北溪先生行狀（土佐國群書類從八一）○土佐人物傳（土陽叢書第六）○土佐に於ける萬葉學の源流 佐佐木信綱（史學雜誌一八ノ六）○萬葉集古義の特質と系統 久松潜一（校本萬葉集首卷下）○國學者傳記集成○日本敎育史資料第五册〔西尾〕

間島冬道（まじま ふゆみち）　歌人、【通稱】萬次

時忠がこれを得たる時の物語と、後にこれを源義光に傳へて、義光後三年の役に出征の時、再びこれを手に入れたことの物語と二つの傳說がある（續世繼）。〔田邊〕

增鏡（ますかがみ）　歷史物語【著者】（一）一條冬良（兼良の子）。古くから傳へられた說であるが、冬良の生れた寬正五年より八十九年前永和二年の奧書ある永和本、六十三年前應永九年寫の應永本が發見されたので、誤りである

さとし云々」と記されてゐる。餞抜としては、弟谷川千蔔の子某がその跡を嗣いだ。雅嘉の家は、「書を鬻ぐを以て業とするが故に云々」と「三十六家集略傳」に記されてゐるところから、雅嘉自身もその業を營んでゐたやうに思はれて來たが、住所その他から、幸田成友博士はこれを否定してゐる。前記の喜之の小傳にも、雅嘉の文稿・歌稿の類にもその由は見えない。

【著作】群書一覽六冊（享和二年刊）○蘿月庵國書漫抄七卷（國書刊行會編百家隨筆第一冊に收む）○古今集鄙言二十冊（寛政八年刊）○古今集兩序鄙言二冊（寛政八年刊）○百人一首一夕話九冊（天保四年刊）○百人一首ひな言四冊（刊）○掌中題林抄一冊（寛政九年）○和歌呉竹集（校）十冊（寛政七年刊）○和歌枕詞補註二冊（寛政十年）○增補和歌明題部類二冊（寛政六年）○續和歌明題部類二冊（寛政六年）○增補松葉名所和歌集八冊（刊）○新松葉名所和歌集二冊（刊）等。

【參考】尾崎雅嘉幸田成友（讀史餘論の內）○尾崎雅嘉傳補遺 同上（上方六） 〔森〕

眞潮 ましほ 國學者【姓名】谷、また大神氏。初名擧準、字は丹內、通稱虎藏【號】北溪【生歿】享保十二年正月三日に生れ、寛政九年（二四五七）十月十七日歿す。享年七十一。【墓所】秦泉寺山【閲歷】土佐國香美郡山田村に神道家谷垣守を父として生れた。祖父の重遠は山崎闇齋に師事した垂加神道家であり、父垣守も京都に於て神道家玉木葦齋に學び、又眞淵の門に入つて國學を研鑽した。眞潮は幼少から慷慨の質で、世俗の頽廢を歎き、上書して政治の得失を論じた事があつたといふ。初め藩の教授役となり、轉じて浦奉行となり、在職數年にして辭したが、更に天明七年山內豐雍の藩政改革に際し、郡奉行兼普請奉行に擢でられ、物頭格に進んで官祿五十石を加給され、ついで大目付役となり、前に給する所の官祿を以て世祿に併せ、別に五十石を支給された。彼は固辭したけれども、藩主許さず、努めて事を執らせた。然るに藩制上儒者としてかくの如き位置に立つた先例がなく、非難が續出したけれども、彼はこれに屈せず、あくまで中興の事業を助け、藩主の歿後は辭して再び教授役となつた。三子皆夭折し、弟好井（萬六）を養つて嗣子とした。【著作】神道本論（帝國圖書館藏、土佐國群書類從第一五〇冊中「北溪集」にある。同集にはこの外、武庚三監論・金縢臘檄・論佛及び詩經春秋の評論・人物傳等所收）○流澤遺事（同類從第二二冊）○北溪先生餘謌 ○北溪撰集一卷（同類從第三一冊）○論聖○舊事記僞撰考○御國の學び ○家內獨見書辨 ○北溟雜纂 ○孫子祕解 ○東武旅日記 ○歸鄉日記 ○北溪遺稿三卷 ○軍役考 ○古事拾遺等。

【人物・學風】父垣守が江戶に在つて在滿や眞淵に教を乞うた時、共に國學に志した。眞淵にうけひ文を出したのは、寶曆十三年（三十七歲）である。土佐に歸住してから神道・儒學と共に國學の獎勵に力を入れ、特に「萬葉集」の研究に白文を用ふべきを主張せる如きは注意すべき點である。門人今村樂・橫田美水の著はした無點活字本「古萬葉集」（享和三年刊）はその成果であるが、更に門下中に中山巖水・宮地仲枝等が「萬葉集」研究者を出し、仲枝門下には鹿持雅澄（別項）が出てゐる。神道に於ては父祖と傾向を異にし、別に一家の見を樹てた。儒學は程朱學を本とし、雜ぶるに諸家の說を以てし、また兵學を好み、最も孫子を宗とした。雅量があつて直言を好んだが友誼に厚く、和歌を嗜み、研究には甚だ勤勉であつた。

【參考】北溪先生行狀（土佐國群書類從八一）○土佐人物傳（土陽叢書第六）○土佐に於ける萬葉學の源流 佐佐木信綱（史學雜誌二八ノ六）○萬葉集古義の特質と系統 久松潛一（校本萬葉集首卷下）○國學者傳記集成 ○日本教育史資料第五冊 〔西尾〕

間島冬道 まじまふゆみち 歌人【通稱】萬次郎【生歿】文政十年十月八日名古屋に生れ、明治二十三年九月三十日東京に歿す。享年六十四。【閲歷】維新の際勤王を唱へ、權辨事に任じ、尋いで涌谷縣知事となつたが、後辭して十五銀行支配人、日本鐵道會社檢査役等になつた。明治十九年十一月、御歌所寄人に列し、歿前正五位に叙せられた。【著書】歌集には、「殘月和歌集」「冬道翁家集」「間島冬道翁全集」等があり、また歌話がある。

【歌論】「古今集」を尊重してゐるが、歌の起原說として性慾を說いてゐるのは注目される。歌の技巧に就いても說いてゐるが、歌のひきつける力は、「まこと」であるとする見解には、注意すべき點が多い。彼の古今的な歌風と共に併せてその歌論を見るべきである。 〔相原〕

交丸 まじりまる 樂器【名稱】交麿とも書く。【解說】笙の名器。和漢の竹を相交へて作つたもの。「續世繼」には「此の大臣（源雅定）は、笙の笛など優れ給へりける。（中略）交丸といふ笛をも傳へ給へり。交丸とは唐の竹日本の竹の中に、優れたる音なるを擇び作りたるとなん。交丸といふ笙の笛は二つぞ侍るなる。時元（豐原）が兄にて時忠といひしも作り傳へ侍るなり云々」とある。「續教訓抄」十一にも、やゝ詳しい記載がある。この交丸に就いては時忠がこれを得たる時の物語と、後にこれを源義光に傳へて、義光後三年の役に出征の時、再びこれを手に入れたことの物語と二つの傳說がある（續世繼）。 〔田邊〕

增鏡 ますかがみ 歷史物語【著者】（一）一條冬良（兼良の子）。古くから傳へられた說であるが、冬良の生れた寛正五年より八十九年前永和二年の奥書ある永和本、六十三年前應永九年寫の應永本が發見されたので、誤りである事が明かとなつた。（二）二條良基、（三）一條經嗣等の說もあるが、何れも確證がない。（四）南朝に心を寄せた人である事は、筆致から察して知られるが名は分らない。【名義】眞澄鏡（ますみのかがみ）の略。增は借字。序に話者老尼の歌「愚なる心や見えむます鏡古き姿に立ちは及ばで」、筆記者の歌「今もまた昔を書けばます鏡ふりぬる代々のあとにかさねむ」と二つの歌をあげて、著者自ら書名の意を示してゐる。「大鏡」「今鏡」（各別項）等のあとをつぐ意及びそれ等に對して著者が謙遜の態度である事が分る。

【卷冊數】「群書一覽」「國史學の栞」（小中村淸矩著）には十卷と記してあるが、永正本奥書には三冊とあり、現存の諸本は三冊・五冊・六冊・十冊等、種々あつて一定しない。蓋し全編二十章より成るを以て、便宜綴ぢ合せたるによるものであらう。【成立】後醍醐天皇の元弘三年即ち北朝光嚴院の正慶二年（記事最終の年）以後、後龜山天皇の天授二年即ち北朝後圓融院の永和二年まで（永和二年の奥書本あり）の四十三年間。恐らく建武中興後間もなくであらう（伴信友「比古婆衣」）。【諸本】（一）永和本。永和二年の奥書がある。女子の手に成れる最古の寫本なること、應永本の奥書によつて知られるが所在不明。恐らく佚亡したであらう。

三卷（百家說林續編上所收）（各別項）。【自傳】不問物語一冊。【狂歌狂文に關するもの】五十人一首狂歌文庫一冊（天明六年刊）○百人一首狂歌袋一冊（同七年刊）○吾嬬那萬俚一冊（文化十年刊）○（文化新撰）狂歌百人一首（重政畫）一冊（文化六年刊）○自讃狂歌集一冊（同八年刊）○狂歌五十人一首一冊（同十年刊）○狂歌堀川太郎百首二冊（同年刊）○狂歌堀川次郎百首二冊（同年刊）○狂歌百人一首（北溪畫）一冊（同年間刊）○萬代狂歌集四冊（同年間刊）等が整つたもので、又歌合體の職人盡狂歌合二冊（文化二年刊）○狂歌評判記（一名筆果報）一冊（同五年刊）○飲食狂歌

【讀本作者として】「近江縣物語」「天羽衣」「飛驒匠物語」「しみのすみか物語」（各別項）等の作を以て、讀本に特殊な位置を占めてゐる。もと文化文政頃、讀本の盛時にあつて、國學者としての素養になるもので、平明典雅な文章になり、雅文小說ともいふべきであるが、又支那文學を巧みに脫化し、傳奇風の浪漫小說をなして、讀本の特性を備へてゐる。殊に「近江縣物語」「飛驒匠物語」の二作は、讀本に獨自な立場を認めさせるものであらう。 〔以上笹野〕

【國語學上の業績】雅望は中古文學の造詣深かつたが、直接國語學上の業績としては、「雅

後、同國香取郡の歌人、伊能穎則の教をうけた。穎則は中頃東京に住み、大學大講義の位地にあり、後、故鄉に歸つて香取神宮少宮司となり、更に權少教正を兼補した人で、歌學・史學・神道に關する著述がある。雅之は、和漢の學に精しく、殊に古道では、夙くから一家を成してゐた。古道の立場は、獨自のものであつたとはいへ、大體において平田派を學んでゐたもののやうである。歌學については、「歌學正言」「歌學新語」の二書がある。「歌學正言」は、慶應三年、雅之が三十一歲の時に成つた書で、「歌學新語」は「歌學正言」の前後に著

華陽・春の屋・博古知今堂【生歿】寶曆五年大阪に生れ、文政十年（二四八七）十月三日歿す。享年七十三【法名】淸宵院石叟蘿月居士【墓所】大阪市朽繩坂春陽軒【閲歷】初め醫を業としたが、少時より讀書に耽り、學問の進んだところから、後、醫業を廢し、學者として立ち、多くの書を著はした。歌をもよくし、中世の體を好んで詠み、老いていよ〳〵その調が高かつた。國學に、漢學に、歌道に、就いて學ぶ者が多かつた。その人物の善良であつたことは、門人澤邊亶之の書いた小傳に、「たときに諂ふ事なく、初學びの者等をねもごろに

(二)應永本。應永九年の奧書がある。永和本を寫したもので、その奧書に曰く、「永和二年卯月十五日。この本女房のうつしがきにて侍を、其まゝうつし侍る程に如法ふしんなることゞも侍り。いとゞ僻書も多く侍らん。よき本をたづねてしづかになをし侍べし。應永九年六月三日うつしおはりぬ」。この奧書ある寫本は、尾張德川家本（圖書寮にその謄寫本あり）・北野本・賀茂本・柳原家本・京都田中敎忠氏藏本等である。(三)永正片假名本。永正十八年の奧書がある。谷森善臣藏。(四)烏丸光廣寫本。松井簡治氏藏。(五)近衞家本。(六)前田家本。(七)神宮文庫本。(八)淺野長祚（號梅堂）舊藏古寫本。靜嘉堂文庫藏。(九)古活字本。狩谷棭齋舊藏、靜嘉堂文庫藏。(十)屋代弘賢校本。古活字本・永和本・塙本・眞田本・横田本・稻葉本・米山本、外數本を以て校合す。「史籍集覽」に收めてある。(十一)大澤清臣校本。應永本・永正本・屋代校本・米山本等、十數本を以て校合す。大澤小源太氏藏。(十二)校定増鏡。萩野・松井・關根三氏合編。校定四鏡のうち、主として烏丸本によつて校定した。(十三)増鏡詳解本（別項）。和田英松・佐藤球合著。なほ叢書に收められたものは、史籍集覽・日本文學全書・國史大系・國文大觀・國民文庫・有朋堂文庫・校註國文叢書・新釋日本文學叢書・校註日本文學大系等である。

【錯簡】古寫本・古版本共に誤脫・重複・錯簡があつて、前後連絡しない個所がある。後出内容の項に掲げた順序は、「増鏡詳解」（別項）及び國史大系本に於て、史實を考證して年代順に列べかへたものである。本文の錯誤に關する從來の研究の結果を總合すると、その主なるものは次の三點である。

(甲) 原本第六　おりゐる雲　第七、烟の末々　第八、北野の雪　第九、山のもみぢばを、新たに第六、烟の末々　第七、おりゐる雲　第八、山のもみぢば　第九、北野の雪の順におきかへた事。

(乙) 原本第五、内野の雪の終りを、新第六、烟の末々の終りに移した事。

(丙) 北野の雪の初と重複する山のもみぢばの終りを削つた事。

然るに烟の末々・北野の雪の二篇は、永正本・近衞本・前田家一本・尾張家本にない點から考へると、これは贅篇で、本書の作者（又は別の人）が委しい材料によつて別に書き直したものであらう。贅篇とすれば重複もなく、年代錯誤もなく、隨つて本文を變更する必要はない事になる。

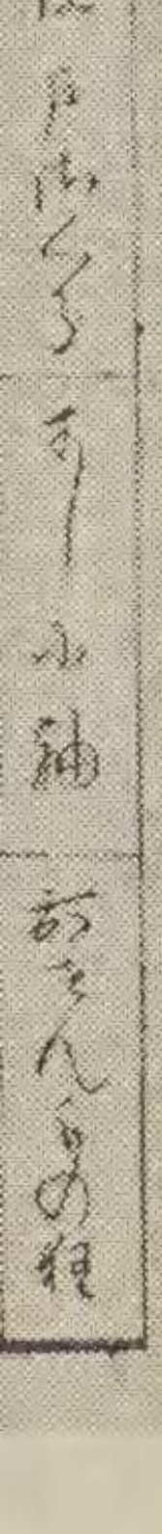
【組織・内容】三鏡或は四鏡中、最後に出た本書は、壽永二年八月二十日後鳥羽天皇踐祚から、元弘三年六月五日後醍醐天皇が隱岐より二條富小路里内裡還幸まで、十五代百五十一年間（治承四年後鳥羽天皇御生誕より踐祚まで略叙せる故、これを加へると百五十四年、うち第三藤衣の次の仁治元年、第五内野の雪の次の寶治元年、第十四つげの小櫛の次の德治元年の記事はない）の事實を記した編年體の歴史物語である。著者は朝廷に滿腔の情を寄せ、武家の跋扈を憤つた人で、頼朝が總追捕使となつたのを「日本國の衰ふるはじめ」（新島守）と考へ、鎌倉幕府開創以來の公武爭鬪史を明かにしようとの理想から執筆したのであるから、蒙古襲來の如き大事件も簡略に叙し去り、朝廷の勢力を弱めようとの武家の策から出た兩統迭立關係、公武の葛藤に根ざして生れた變態的の攝家將軍、親王將軍、武家に接近した爲めに榮えた公家の西園寺家などについては委しく記し、特に公武爭鬪の焦點である承久・元弘の二大亂には最も力をそゝいだので、これが本書の二大中心をなして居り、後鳥羽院に關する第一おどろの下、第二新島守、後醍醐天皇に關する第十八村時雨、第十九久米の皿山、第二十月草の花の各章は全卷中出色の文字である。結構は「大鏡」「今鏡」「水鏡」（各別項）にならひ、物語體にし、「榮華物語」（別項）を摸して卷中の雅語・歌語による優雅の題目を附してゐる。序文に於て、場所は嵯峨清涼寺、時は鎌倉時代、或る年の二月十五日釋迦入滅の日、人物は老尼（百歳以上）と尼の具した年若き女房と、筆者その他を點出して「大鏡」に倣つてゐる。本文（詳解本・國史大系本による）は、

第一、おどろの下（後鳥羽・土御門・順德）
第二、新島守（順德・仲恭）
第三、藤衣（後堀河・四條）
第四、三神山（四條・後嵯峨）
第五、内野の雪（後嵯峨・後深草）
第六、烟の末々　第七、おりゐる雲（以上後深草）
第八、山のもみぢば　第九、北野の雪、第十、飛鳥川（以上龜山）
第十一、草枕　第十二、老の波（以上後宇多）
第十三、今日の日かげ（伏見）
第十四、つげの小櫛（伏見・後伏見・後二條）
第十五、浦千鳥（後二條・花園）
第十六、秋のみ山　第十七、春の別　第十八、村時雨　第十九、久米の皿山　第二十、月草の花（以上後醍醐）

【價値】「大鏡」は、道長の榮華を描くを目的とした故紀傳體（別項）が適當であるが、本書は長期間にわたる公武の爭鬪史であるから、編年體（別項）によつた事は適當なる述作の態度であり、材料も公家の日記によつたと思はれ、史實もほぼ正確であり、且つ他書に見られぬ獨特の記事があつて、史書として大なる價値がある。文學としては著者の學殖が多くの國書、有職故實は固より、内典・外典にも弘い造詣を持つてゐたので、語彙豐富、引用自在、特に「源氏物語」「榮華物語」の愛讀者らしく、その影響を著しく受け、優雅艶麗の筆致で情趣を寫した部分が優れて居り、本書の理想とは緣遠い情事説話の多い點は、假作物語に類した面白味もある。元弘・建武の頃は、既に文體は平安朝に比し著しく變つて、和漢混淆の强い新文體が行はれてゐたのに、擬古の雅文體で記したのは、著者に倘古的公家氣風の强かつたことが察せられ、隨つて氣魄乏しく迫力を缺き、袴着・元服・花紅葉の遊覽等、儀式・行事・服裝に關する同種同樣の記事が重出する點は、「榮華物語」（別項）とひとしく、煩冗單調の感がある。公武の葛藤を描くを目的とはしたが、朝威を振興せしめようとの强烈なる熱意が乏しかつた爲めに、「神皇正統記」（別項）に見えるやうな勁健な筆致は見られないし、「大鏡」の結構を摸したが、歴史の眞相を明かにし、これに批判を加へた「大鏡」の痛快味はない。老尼の物語體に擬した最初の結構は面白いが、「大鏡」の如く全卷を通じて對話者が活躍してゐない。「今見ゆべき事なれども、物の心もとなきはさ覺ゆるわざぞかしと、例の口すげみてほゝゑむ」（三神山）など、時にその風丰を叙してはゐるが、終の部分になると全く老尼の物語である事を忘れ、對話ではなく單なる叙述に陷つてゐるのは、作者の大なる不注意で、首尾不統一の譏を免れない。要するに「源氏」「榮華」「大鏡」等を只管摸倣し、獨創の妙味に乏しいのが本書の最大缺陷であるが、四鏡中「大鏡」につぎ第二位を占めるべきものである事は確かである。

【參考】増鏡問答 伊勢貞丈○増鏡系圖目錄土肥經平○増鏡詳解 和田英松・佐藤球○口譯増鏡 內海弘藏○校定増鏡新釋 永井一孝・竹野長次○新釋増鏡高木武○増鏡通解 和田英松・石川佐久太郎○參考増鏡新釋小林好日○比古婆衣卷六伴信友○増鏡攷岡本保孝（靜嘉堂文庫藏）○三鏡考 高田與清○増鏡の著者につきて 松本愛重（新國學第二）○増鏡解題（史學界一ノ二、六ノ六・七）○古文學書解題及評論小中村義

第四代河東が初祖三十三回、又は先人十三回の追善であるから寶曆八年に當り、「巢籠花有里」は、寶曆十二年の作であることなどから考へて寶曆・明和頃か。【解說】河東節六十四種の寄せ本で、稽古本として最も廣く行はれた。松壽菴蛙兒といふ人の序文をつけ、奧付には「右此正本はいにしへより世に數多これ有といへども古板にして殊に細字たるゆへ見えわ



まつのうち　かぶろ萬歳 竹婦人述
京わらんべ　四季のほうらひ
貝づくし　班女扇八景
淸見八景　水上蝶の羽番
帶曳男結び　灸すへ巖の疊夜着
酒中花　紋づくし
紋づくし蜑の竹輿蒲團　竹馬の鞭
きぬた　式三獻神樂獅子 上の卷
神樂獅子忍びの段下の卷　江のしま
きやう女新所帶　出端雛の出づかひ

の二を省き、「蓬萊」「おせん物ぐるひ」「やわらぎ曾我」「助六後日道行」「きよつら道行」「伊達ひめ道行」「しのだづま」「やりおどり」「傾城うけ狀」「柱ごよみ」「ひとゑ帶」「うかぶ瀨」「ぬれゆかた地主の櫻」「さくらの曙」「契情反魂香」「助六廓花道」「四季の屛風」「常陸帶花柵」の十八種を加へてゐる。この増補のうち、最後の「常陸帶花柵」は寬政三年に六代目河東の節付なれば、同年以後の發行なることは明かである。

鏡詳解本（別項）。和田英松・佐藤球合著。なほ叢書に收められたものは、史籍集覽・日本文學全書・國史大系・國文大觀・國民文庫・有朋堂文庫・校註國文叢書・新釋日本文學叢書・校註日本文學大系等である。

【錯簡】古寫本・古版本共に誤脫・重複・錯簡があつて、前後連絡しない個所がある。後出内容の項に掲げた順序は、「增鏡詳解」（別項）及び國史大系本に於て、史實を考證して年代順に列べかへたものである。本文の錯誤に關する從來の研究の結果を總合すると、その主なるものは次の三點である。

實を記した編年體の歴史物語である。著者は朝廷に滿腔の情を寄せ、武家の跋扈を憤つた人で、賴朝が總追捕使となつたのを「日本國の衰ふるはじめ」（新島守）と考へ、鎌倉幕府開創以來の公武爭鬪史を明かにしようとの理想から執筆したのであるから、蒙古襲來の如き大事件も簡略に敍し去り、朝廷の勢力を弱めようとの武家の策から出た兩統迭立關係、公武の葛藤に根ざして生れた變態的の攝家將軍、親王將軍、武家に接近した爲めに榮えた公家の西園寺家などについては委しく記し、特に公武爭鬪の焦點である承久・元弘の二大亂に

第十四、つゆの小柳（伏見・後伏見・後二條）
第十五、浦千鳥（後二條・花園）
第十六、秋のみ山　第十七、春の別　第十八、村時雨　第十九、久米の皿山　第二十、月草の花（以上後醍醐）

【價値】「大鏡」は、道長の榮華を描くを目的とした故紀傳體（別項）が適當であるが、本書は長期間にわたる公武の爭鬪史であるから、編年體（別項）によつた事は適當なる述作の態度であり、材料も公家の日記によつたと思はれ、史實もほぼ正確であり、且つ他書に見られぬ獨特の記事があつて、史書として大なる價値

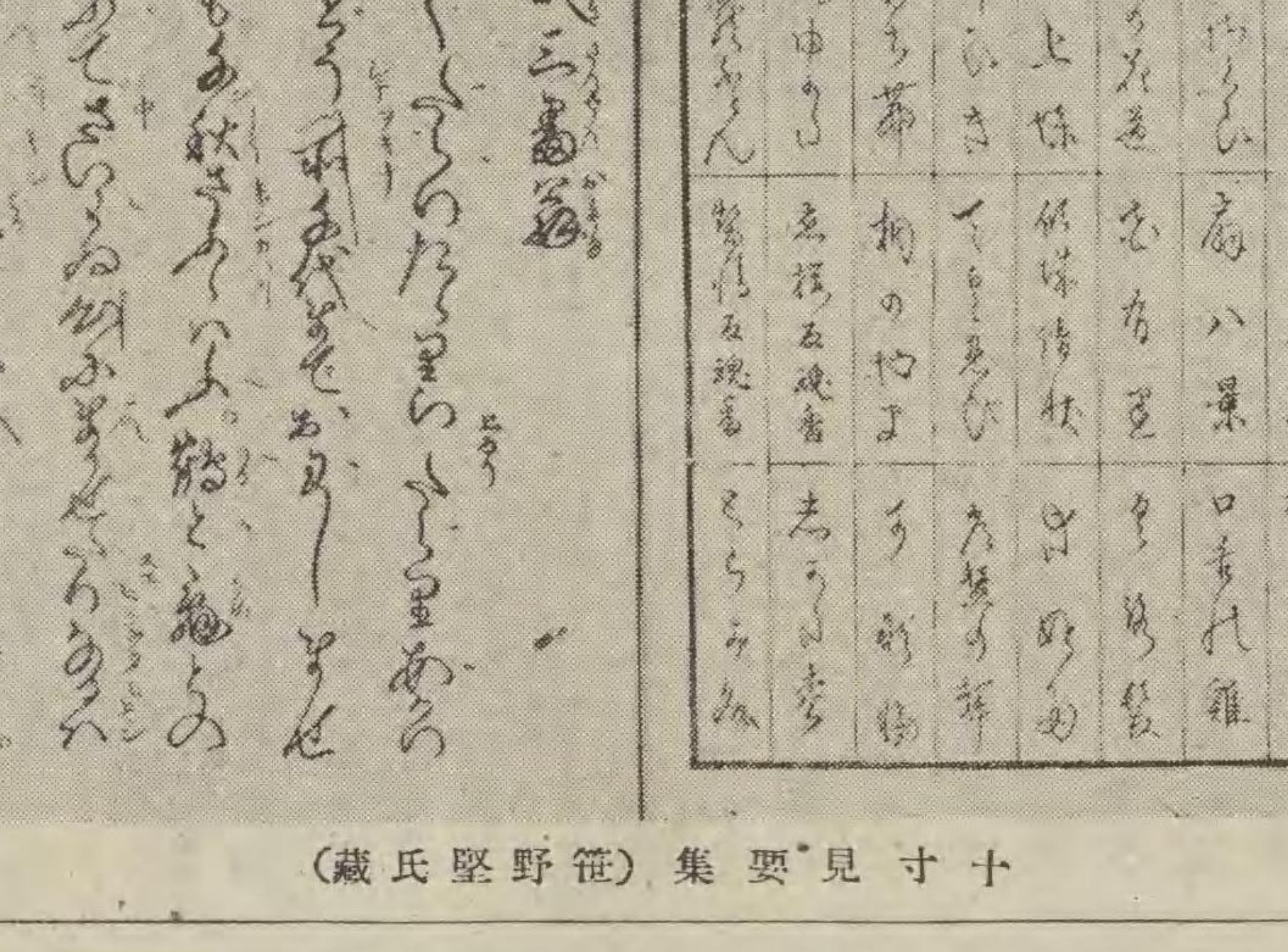
白いが、「大鏡」の如く全卷を通じて對話者が活躍してゐない。「今見ゆべき事なれども、物の心もとなきはさ覺ゆるわざぞかしと、例の口すげみてほゝゑむ」（三神山）など、時にその風丰を敍してはゐるが、終の部分になると全く老尼の物語である事を忘れ、對話ではなく單なる敍述に陷つてゐるのは、作者の大なる不注意で、首尾不統一の譏を免れない。要するに「源氏」「榮華」「大鏡」等を只管摸倣し、獨創の妙味に乏しいのが本書の最大缺陷であるが、四鏡中「大鏡」につぎ第二位を占めるべきものである事は確かである。

【參考】增鏡問答（伊勢貞丈）○增鏡系圖目錄（土肥經平）○增鏡詳解（和田英松・佐藤球）○口譯增鏡（内海弘藏）○校定增鏡新釋（永井一孝・竹野長次）○新釋增鏡（高木武）○增鏡通解（和田英松・石川佐久太郎）○參考增鏡新釋（小林好日）○比古婆衣卷六（伴信友）○增鏡攷（岡本保孝）（靜嘉堂文庫藏）○三鏡考（高田與清）○增鏡の著者につきて（松本愛重）（新國學第二）○增鏡解題（史學界一ノ二、六ノ六・七）○古文學書解題及評論（小中村義象）（國學院雜誌一ノ一）○歴史物語の本質（沼澤龍雄）（國語と國文學三六）○歴史物語（芳賀矢一）〔沼澤〕

增鏡詳解（ますかがみしやうかい）　註釋書　和裝四册合本洋裝一册【著者】和田英松・佐藤球（小中村淸矩校閲）【刊行】明治三十一年、明治書院。【解說】一册本は卷頭に頗る精細な索引・系圖・年表と主要地圖とを附してある（四册本の附錄）。本文は印本を基とし、大澤淸臣校本・某家祕藏古寫本・史籍集覽本によつて校定し、諸本の異同を頭註として掲記してあるのみならず、大なる錯簡を改めて年代の錯誤を除き、前後の混雜を防いだ點は一大特色である（增鏡參照）。語句の解釋は要を得、出典は委しく、史實の參考資料も提示し、且つ各卷とも概要目次を卷頭に掲げて、全卷の大要を一瞥する便に供し、緒言に著者・異本・錯簡についての考說をあげたなど、凡て詳解の名に負かない。從來見るに足る註釋書のなかつた時に出でて大に學界を裨益した良著である。〔沼澤〕

十寸見河東（ますみかとう）「河東節」を見よ。

十寸見要集（ますみえうしふ）　河東節寄本　半紙本一册【刊行】未詳。但し「ますみざら」は、第四代河東が初祖三十三回、又は先人十三回の追善であるから寶曆八年に當り、「巢籠花有里」は、寶曆十二年の作であることなどから考へて寶曆・明和頃か。【解說】河東節六十四種の寄せ本で、稽古本として最も廣く行はれた。松壽菴蛙兒といふ人の序文をつけ、奧付には「右此正本はいにしへより世に數多これ有といへども古板にして殊に細字たるゆへ見えわからず依て此度大夫河東自ら筆を採て文句の誤りを正し當世見やすからむが爲六行りに致し亦板元を今あらためて淺草里以勢屋吉十良に相定めあまねく一世に弘むる者也　十寸見河東印　武江淺草御地内　伊勢屋吉十郎板」とある。總目錄を擧げる。


十寸見要集（笹野堅氏藏）

式三番翁	三番叟
まつのうち	かぶろ萬歳 竹婦人述
京わらんべ	四季の居うらひ
貝づくし	班女扇八景
淸見八景	水上蝶の羽番
帶曳男結び	灸すへ巖の疊夜着
酒中花	紋づくし
紋づくし翼の竹輿蒲團	竹馬の鞭
きぬた	式三獻神樂獅子 上の卷
神樂獅子忍びの段下の卷	江のしま
きやら女新所帶	（金作　初瀬）出端雛の出づかひ
放下僧の道行	（はうか僧　三段目）八郎鐙の段
放下僧 同かつこのだん	溫泉揃
狂女のだん	隅田川舟の内 上の卷
すみだ川 下の卷	髮すき曾我
げんぶく五郎	袖とめそが髮結の段
とらがふみ	祐成相撲物語
小袖模樣の段	小鍛冶名劍のまき
華がたみ	ひとせ川
そで鏡	水調子
風流しかた松	みつの且
江口の道行	天皇忍びのだん
二星鵲のかし小袖	咲分相のやま
丹前里神樂	丑の時參り鐵輪
ぬれあふぎ	いの字扇 竹婦人
亂髮夜編笠	よるのにしき
千とせのえだ 訥子述	ときはのこゑ
はつかの月	くぜつの雛
梳櫛男の黑かみ	戀櫻反魂香
介六廓の家櫻	（富士　筑波）卯月里
ますみざくら	雛の磯
ゆかりの江戸櫻	巢籠花有里 壕越二三治
三燕櫻朧夜 壕越二三治	

二册本は序も跋も同樣であるが、上卷に三十九、下卷に四十二、合計八十四種を收め、大部分は兩書共通であるが「とらがふみ」「そで鏡」の二を省き、「蓬萊」「おせん物ぐるひ」「やわらぎ曾我」「助六後日道行」「きよつら道行」「伊達ひめ道行」「しのだづま」「やりおどり」「傾城うけ狀」「柱ごよみ」「ひとゑ帶」「うかふ瀬」「ぬれゆかた地主の櫻」「さくらの曙」「契情反魂香」「助六廓花道」「四季の屛風」「常陸帶花柵」の十八種を加へてゐる。このうち、最後の「常陸帶花柵」は寬政三年に六代目河東の節付なれば、同年以後の發行なることは明かである。なほ序文の裏の太夫三味線の連名にも左の異同がある。〔藤井〕

（一册本）

十寸見沙洲	山彥河良
十寸見蘭洲	山彥源四郎
十寸見蘭爾	山彥秀屋
江戸太夫河東	山彥良波
十寸見河洲	山彥百次
十寸見東佐	山彥二朝
十寸見東洲	山彥新九郎
十寸見東曉	

（二册本）

十寸見蘭洲	山彥源四郎
十寸見沙洲	山彥河良
十寸見東佐	山彥百次
十寸見東洲	山彥二朝
江戸太夫河東	山彥孫四郎
十寸見東雅	山彥秀屋
十寸見蘭爾	山彥良波
十寸見東市	山彥長藏
十寸見文示	山彥半次

增山金八（ますやまきんぱち）　劇作家【本名】未詳【別號】吳山【閱歷】未詳。立作者になつたのは安永三年十一月の森田座が最初らしい。寬政中期までその名が見えるが、立作者として出勤したのは、そのうち幾年もないやうで

自ら志願して某劇團の女優となり、同時に劇團の關係者前澤某と再婚した（二十二歳）。同四十二年（二十四歳）、文藝協會（別項）の女優募集に應じて、その第一期生となつた。この頃よりいよ〳〵藝を勵み、猛烈な稽古振に人々を驚かした。四十二年前澤と別れ、四十四年文藝協會研究所を卒業した。その年五月、帝劇に於ける第一回公演「ハムレット」に出演、オフェリヤに扮して好評を博した。喧々囂々の

を得ない。その當り役は「人形の家」のノラ、「アンナ カレニナ」のアンナ、「復活」のカチュウシヤの如きである。かくてその得意の絶頂にあつた須磨子は、大正七年十一月五日抱月の急逝に遭ひ、悲嘆甚しく、遂に翌年一月五日その跡を慕つて縊死した。最後の舞臺は、有樂座の「カルメン」であつた。なほ須磨子には、「牡丹刷毛」の著がある。（藝術座參照）

【批評】彼女は、我が國の演劇界に純粹の新劇

「日本百傑傳」と共に當時最も多く讀まれた著述の一つである。二十三年秋、大岡育造の中央新聞を創刊するに際し、彼は廣津柳浪の推薦によつて入社し、論説記者となつた。江見水蔭・田山花袋・武内桂舟の諸氏同社にあり、この新聞が文學的光彩を放つてゐた時代であつた。三十五年聘せられて「萬朝報」に入り、四十年春、更にやまと新聞に入つた。大正三年、桂太郎の同志會成立に援助し、山本内閣の

德二年の奥書を信ずるとすれば、鎌倉末葉から南北朝時代にかけての成立と見なければならない。

【梗概】〔山の井〕山の井の中納言と云ふ東宮職兼任の方があつた。笛が巧みで、常に御前に召されて、藤の内侍の琴の對手を仰せつけられる内に、何時か内侍を思ひ染め、乳母の侍從を語らつて文を贈るが手に取らうともしない。年も明ける頃、どうにか返事は來るや

ある。【作品】一富玉盤顔見世（安永三年十一月森田座。義經記の顔見世狂言）○信田楪蓬萊曾我（安永四年正月森田座。曾我に信田小太郎・梅の由兵衞）○けいせい月の都（安永四年八月森田座。不破名古屋と御堂前仇討）○幼兒硯靑柳曾我（安永六年正月中村座。曾我に愛護の若）○開増梅愷樂（安永七年十一月市村座。荏柄平太と荒岡源太）○蝶千鳥若榮曾我（安永八年二月市村座。曾我に愛護の若）○歸花英雄太平記（安永八年十一月中村座。太平記の顔見世狂言）○初紋日艷鄕曾我（安永九年正月中村座。曾我に富士淺間）○妻迎越路の文月（安永九年七月中村座。川中島合戰）○御影講御法鉢木（寛政三年十一月河原崎座。佐野と日蓮記）○けいせい金秤目（寛政四年正月河原崎座。伊達騷動に女鳴神）○神明祭禮女團七（寛政四年八月河原崎座。女團七とお房德兵衞）〔遲美〕

マソヒズム〔英〕Masochism【名義】變態性慾の一種で、被虐待淫亂症、又は受働的疼痛淫亂症といふ譯語がそれに當る。獨逸のザヘル・マゾホ（Sacher Masoch）の小說に現はれた變態性慾に對して、フォン・クラフトエビングが命名した語である。【解說】自分が相手の者に虐待されて、それに堪へることによつて性慾の滿足を補つたり、又は滿足を得たりするところの特殊な性慾的心理狀態をさすのである。この反對の變態性慾はザディズム（別項）である。日本では谷崎潤一郎（別項）がこの方面に題材を得て、數種の小說を書いてゐる。〔宮島〕

再春菘種蒔　「三番叟」を見よ。

眞龍　國學者【姓名】内山氏。幼名市六、後に彌兵衞【生歿】元文五年一月一日遠江國豐田郡大屋村に生れ、文政四年（二四八一）八月二十二日歿す。享年八十二。【閱歷】父は内山德右衞門美眞と言つた。眞龍は眞淵と同じく渡邊蒙庵に師事し、蒙庵の子友益の女たる布佐を後妻に迎へた。後眞淵に古學を承け、眞淵歿後は宣長の弟子分となつた。小國重年はその高弟である。【著作】古事記謠歌註二卷（別項）○日本紀類聚解十五卷（文化九年五月十日成）（別項）○出雲風土記解三卷（天明七年二月十四日成）○遠江風土記傳十三卷（刊）○國圖五卷（享和三年一月成）○國號考（寛政八年の自序）○地名記十二卷○神號解。【學風】學問上の業績としては、記・紀・風土記の研究が主なるものである。その特徵とする所は學究的態度の確立してゐる點であつて、本文批評を精密にし、その校訂の理由を擧げ、先人の說を參考し、又比較研究を行つてゐる。記・紀・歌謠を修辭法上から歌調形と標してその結構を考究してゐる點、又「書紀」の記載法に於て訓假名は用ひられてゐないとしてゐる說等には注意すべきものがある。風土記の研究には本文校訂の嚴正を期したのは言ふまでもないが、更に實地踏査をなし、又地圖を附する等の努力を加へてある。先人の說としては主として契沖・眞淵に從ひ、宣長の說を駁する所が多かつた。自說を主張する點は主に風土記の研究に多く見られる。地方に於ける眞淵門下として著名な一人である。【參考】古學小傳卷一（淸宮秀堅）○國學者傳記集成（大川茂雄・南茂樹）○國文學研究史（野村八良）○國學全史下卷（同上）〔西尾〕

松居松翁　劇作家【本名】眞玄【初號】松葉【生歿】明治三年二月十八日生れ、昭和八年七月十四日歿す。享年六十四。【閱歷】仙臺城下鹽釜町に生れた。祖父眞則は伊達家の財用方となつたが祿を食まず、父眞房に至つて士分に列した。十一歲、宮城中學校に入學したが、同十五年父を亡ひ廢學した。一時商業に就いたが、志を立てて上京し、國民英學會を卒業した。坪内逍遙の第一次「早稻田文學」（別項）創刊に際してその編輯に從事した。明治二十七年、處女脚本「昇旭朝鮮太平記」を讀賣新聞に發表した。同二十八年、中央新聞記者となり、後、報知・萬朝にも筆を執つた。この頃市川團十郎と知り、「市川團十郎昔話」を報知に連載した。又その頃から專心劇作に志し、三十二年先代市川左團次のために「惡源太」を執筆し、彼の死に至るまで數篇を提供した。その歿後は現左團次を援けて、その相談役となつた。三十九年、歐米演劇視察の途に上つたが、途中から左團次と同行し、翌年歸朝した。かくて左團次歸朝第一回興行に當り、茶屋・出方を廢して今日の如き興行法を行つた爲め、一部の反感を買ひ、失敗を招いた。彼はその責任を負うて明治座を去つた。この頃より極度の神經衰弱にかゝり、一家を擧げて靜岡縣原町在に隱棲した。翌年秋、日比翁助・坪内逍遙等の慫慂により上京した。駿河町人・大久保二八の別號を用ひたのはこの頃である。同四十四年帝國劇場に入り、翌々大正二年、河合・小織等と公衆劇團を組織した。同七年松竹の文藝部顧問となり、翌年再び戰後の歐米劇團視察のため外遊した。劇界に關係すること實に三十餘年、創作・飜譯・飜案の脚本は百篇を超え、その上演回數百五十回に近い。大正十三年從來の松葉を改めて松翁と號した。脚本の著作の外に、演劇に關する著述並に演劇時評の執筆も多く、晩年は松竹合名會社の顧問であつた。

【業績】演劇界に於けるその業績は、まづ第一に劇場外部の作家の脚本を上演せしむる機運を作つたことを擧げなければならぬ。古い傳統を固守して座付作者以外の脚本には一顧をも與へなかつた當時の陋習を打破して、劇場を外部の作者に解放したといふことは、明治・大正の演劇の興隆に關しては絶大な關係を有してゐたのである。のみならず彼は演劇の實際家として泰西名戲曲の飜譯又は飜案を提供する外、或は舞臺監督乃至は有力な演劇界の一指導者としても、重きをなしてゐた。その脚本の種類の如きも、新歌舞伎劇乃至は史劇及び現代劇・社會劇・喜劇等の極めて廣い範圍に亙つてゐる。我が演劇界に於ける彼の業績は、日本演劇史の或る頁を飾るに十分なものがある。〔武藤〕

【參考】松翁年譜（松居桃多郎編）（舞臺四ノ九）

松居松翁

松井須磨子　女優【本名】小林正子【生歿】明治十九年二月、長野縣埴科郡松代在淸野村に生れ、大正八年一月五日東京牛込の藝術俱樂部にて歿す。享年三十四【法名】貞祥院實應須磨大姉【墓地】東京青山墓地【閱歷】家は代々眞田家の家臣で、父藤太は維新の際に佐幕黨として活躍した。正子はその末子である。六歲の時、上田の親戚長谷川家の養女となつたが、十六歲で養父を亡ひ、實家に引取られ、續いて父を亡つた。父の遺言により、翌明治三十五年四月姉夫婦を頼つて上京、戶板裁縫女學校に入學した。この年の暮、一度結婚したが離緣となつた。その後

が相手の者に虐待されて、それに堪へることによつて性慾の滿足を補つたり、又は滿足を得たりするところの特殊な性慾的心理狀態をさすのである。この反對の變態性慾はザディズム（別項）である。日本では谷崎潤一郎（別項）がこの方面に題材を得て、數種の小說を書いてゐる。〔宮島〕

再春菘種蒔（をくるはるすずなのたねまき）「三番叟」を見よ。

眞龍（またつ）　國學者【姓名】內山氏。幼名市六、後に彌兵衞【生歿】元文五年一月一日遠江國豐田郡大屋村に生れ、文政四年（二一四八一）八月二十二日歿す。享年八十二。【閱歷】

は主として契沖・眞淵に從ひ、宣長の說を駁する所が多かつた。自說を主張する點は主に風土記の研究に多く見られる。地方に於ける眞淵門下として著名な一人である。

【參考】古學小傳卷一（淸宮秀堅）○國學者傳記集成（大川茂雄・南茂樹）○國文學研究史（野村八良）○國學全史下卷（同上）〔西尾〕

松居松翁（まつゐしようをう）　劇作家【本名】眞玄（まさはる）【初號】松葉【生歿】明治三年二月十八日生れ、昭和八年七月十四日歿す。享年六十四。【閱歷】仙臺城下鹽釜町に生れた。祖父眞則は伊達家の財用方となつたが祿を食まず、父

行法を行つた爲め、一部の反感を買ひ、失敗を招いた。彼はその責任を負うて明治座を去つた。この頃より極度の神經衰弱にかゝり、一家を擧げて靜岡縣原町在に隱棲した。翌年秋、日比翁助・坪內逍遙等の慫慂により上京した。駿河町人・大久保二八の別號を用ひたのはこの頃である。同四十四年帝國劇場に入り、翌々大正二年、河合・小織等と公衆劇團を組織した。同七年松竹の文藝部顧問となり、翌年再び戰後の歐米劇團視察のため外遊した。劇界に關係すること實に三十餘年、創作・飜譯・飜案の脚本は百篇を超え、その上演回數百五

正子（まさこ）【生歿】明治十九年二月、長野縣埴科郡松代在淸野村に生れ、大正八年一月五日東京牛込の藝術倶樂部にて歿す。享年三十四【法名】貞祥院實應須磨大姉【墓地】東京青山墓地【閱歷】家は代々眞田家の家臣で、父藤太は維新の際に佐幕黨として活躍した。正子はその末子である。六歲の時、上田の親戚長谷川家の養女となつたが、十六歲で養父を亡ひ、實家に引取られ、續いて父を亡つた。父の遺言により、翌明治三十五年四月姉夫婦を賴つて上京、戶板裁縫女學校に入學した。この年の暮、一度結婚したが離緣となつた。その後

自ら志願して某劇團の女優となり、同時に劇團の關係者前澤某と再婚した（二十二歲）。同四十二年（二十四歲）、文藝協會（別項）の女優募集に應じて、その第一期生となつた。この頃よりいよ〳〵藝を勵み、猛烈な稽古振に人々を驚かした。四十二年前澤と別れ、四十四年文藝協會研究所を卒業した。その年五月、帝劇に於ける第一回公演「ハムレット」に出演、オフェリヤに扮して好評を博した。喧々囂々の世評を惹起した島村抱月（別項）との戀愛はこの頃から胚胎してゐた。この問題は彼等を非難の渦中に投じ、ために抱月は公職を辭し、文藝協會の幹部をも辭し、惹いては協會の解散といふ結果をすら招來した。しかし須磨子の熱情は、この苦境にある抱月を扶けて遂に藝術座（別項）の結成に成功した。その後の須磨子は、その死に至るまで藝術座のために奮鬪を續けた。而して女優としての彼女の眞價が發揮されたのは實にこの以後である。一方元來自我の強い須磨子は、藝術座の女王となるに及んでその我が儘は益々助長され、座員の反感を買ふこと屢々であつた。然るにも拘はらず六年の長期に亙つて一座の中心たり得たといふことは、やはりその天分を認めざるを得ない。その當り役は「人形の家」のノラ、「アンナ　カレニナ」のアンナ、「復活」のカチュウシャの如きである。かくてその得意の絕頂にあつた須磨子は、大正七年十一月五日抱月の急逝に遭ひ、悲嘆甚しく、遂に翌年一月五日その跡を慕つて縊死した。最後の舞臺は、有樂座の「カルメン」であつた。なほ須磨子には、「牡丹刷毛」の著がある。（藝術座參照）

【批評】彼女は、我が國の演劇界に純粹の新劇女優として大成した最初の女性である。役柄は浪漫的な傾向の劇的性格よりも、現實的な傾向の性格に成功した。その藝風は荒削りな若干野性を帶びた精力的な裡に一脈の感傷味を湛へてゐた。この點が一般の觀客を捉へたのであつたらう。何れにしても彼女が藝術座の存在を、延いては新劇の存在を、はじめて社會に知らしめたといふ點だけでも、その功績は十分記憶さるべきである。殊に演劇に對する熱意とその才能とは、よく藝術座を支へて、新劇界としては實に劃期的な事業を成就せしめたのであつた。〔水木〕

松井須磨子（「故郷」のマグダ）

【參考】松井須磨子の一生（仲木貞一・秋田雨雀）

松井柏軒（まついはくけん）　評論家【本名】廣吉【閱歷】慶應元年越後村松町に生る。十八歲の時、長岡市で發行した越佐每日新聞社に入り論說記者となつた。居ること四年、明治二十年、大橋佐平が博文館を起して出版業を始むるや、彼は編輯一切に關與し、博文館の發展に盡すところ多く、當時の著述になる「日本帝國史」は、訴訟事件を起したが、淸新な記述として、その後、北村紫山との共同執筆になる「日本百傑傳」と共に當時最も多く讀まれた著述の一つである。二十三年秋、大岡育造の中央新聞を創刊するに際し、彼は廣津柳浪の推薦によつて入社し、論說記者となつた。江見水蔭・田山花袋・武內桂舟の諸氏同社にあり、この新聞が文學的光彩を放つてゐた時代であつた。三十五年聘せられて「萬朝報」に入り、四十年春、更にやまと新聞に入つた。大正三年、桂太郎の同志會成立に援助し、山本內閣の倒壞運動に力を入れた記者團中の有力な一人であつた。大正九年春、大連新聞の創刊に參畫し、翌年聘せられて松江の松陽新報主筆となり、今日に至つてゐる。中央新聞時代に「中央公論」の卷頭の論文を執筆して、論壇から注目された。平明な文體の中に、情理をつくし、感情に偏らない觀察が、その論文の特色である。【著書】日本內閣論○日本帝國史○日本百傑傳○伊太利獨立戰史等。〔高須・千葉〕

松尾（まつを）「神事物の謠曲」を見よ。

松岡國男（まつをかくにを）「柳田國男」を見よ。

松陰中納言物語（まつかげちゆうなごんものがたり）　物語　五卷五冊【作者】未詳【名義】主人公が庭に多くの松を植ゑて、世人から松陰中納言と呼ばれたに由る。【諸本】古來飜刻された事なく、僅かな寫本によつて殘つてゐる。佐佐木信綱氏・前田侯爵家・名古屋圖書館・山口圖書館・水戶彰考館（二本）・東北帝大等に各々藏されてゐるが、著しい異同はない。ただ東北帝大本及び彰考館の一本には、「建德二辛亥六月南陽伯（花押）」の奧書がある點は注目すべきである。【成立】「國朝書目」に「松蔭中納言」とあるのは、この物語を指すらしいが、それ以後殆ど紹介されずに最近に至つた。「風葉集」「無名草子」等にもこの名は見えないから、建德二年の奧書を信ずるとすれば、鎌倉末葉から南北朝時代にかけての成立と見なければならない。

【梗槪】〔山の井〕山の井の中納言と云ふ東宮職兼任の方があつた。笛が巧みで、常に御前に召されて、藤の內侍の琴の對手を仰せつけられる內に、何時か內侍を思ひ染め、乳母の侍從を語らつて文を贈るが手に取らうともしない。年も明ける頃、どうにか返事は來るやうになつた。如月十五日、帝が弘徽殿の花を御覽になる時忍んで行くが、折から上のお召しがあつて、內侍は御前に參上し、機會を取逃がして了ふ。〔藤の宴〕彌生、松陰中納言の家に藤見の御幸があつた。美しい松陰殿の樣子に御滿足のあまり、中納言は權大納言になされ、剩へ藤の內侍を下さるのであつた。翌日又春宮の行啓があり、宮は大納言の姬君に目をとめられ行末を契られる。大納言の故北の方は內親王であつたが、その間に十五になる少將、十三の妹君、次に田鶴君といふ童君があつた。今一人の幼い姬君は內侍にあづけて育てさせられる。折から東國に亂があり、大納言の弟右衞門督に武藏守を兼任させて、鎭定にさし向はされる。〔ぬれ衣〕山の井中納言は、この噂を聞いて心惱み、引籠つてゐると、長月初めの頃、左宰相中將、行川の少將、前右馬頭等が訪ねて來て大納言を盛んに嫉む。宰相は大納言に書を習つた親しい間柄であるが、內侍を戀ひしたことが知れて疎遠になつたのである。又行川の少將は大納言の姬君に文をやるが、春宮の事があるので大納言に妨げられてゐる。ところがこゝに麗景殿の女御は、大納言の故北の方と姉妹であるのに、何故か大納言と仲違ひされてゐる。又山の井中

淀みも弛みもない。所々に海女の身代りや車違への可笑味等があつて、作者の態度には如何にも餘裕が見える。如何なる點景・人物も、むだには出してなく、一度出た人物は、後で必ず何かの役割を果してゐる等、少しの隙もない。複雜な事件に多數の人物を動かして、かく破綻なく完結せしめたのは、餘程すぐれた技能を豫想しなければならない。全篇を貫く淡い因果應報思想の中に、戀愛・別離・讒言・

【參考】國文學槪說　藤田德太郎　〔永積〕

松風（まつかぜ）「戀慕物の謠曲」を見よ。

松風（まつかぜ）所作事【解說】松風村雨の傳說に基づく。これを劇化したものでは謠曲に「松風」があり、その歌詞の一部や汐汲の演伎等が取入れられた。操淨瑠璃にこれ等を攝取したものは種々あるが、就中、歌舞伎に最も影響を及ぼしたのは、元祿七年三月大阪竹本座上場の近松門左衞門作「松風村雨束帶鑑」（別

月同座の「松君呼磨郞」第二番目「松似候男姿」（通稱松風。作者壕越二三治）が古い。後者は松風（中村富十郞）・行平（市村龜藏）・此兵衞（二代澤村宗十郞）等で演じたもので、「松風」としての形式を備へ、その後の常磐津・富本等に出來た各種の松風物に影響した點に於て、注目すべき曲である。富本節では天明七年五月森田座の「行平磯松風」が古く、變化舞踊では寛政四年四月河原崎座の「杜若七重の染衣」（四代岩

【濱松風戀歌】長唄〔通稱〕濱松風〔初演〕文化五年八月十日初日、江戸中村座「行平磯馴松」大切〔作詞〕二代瀨川如皐〔立唄〕富士田千藏〔作曲〕九代杵屋六左衞門〔振附〕市山七十郞。曲・振とも傳存。〔内容〕田井の畑の太夫の下女小藤（四代瀨川路考）は、亡き蜑松風が形見の烏帽子狩衣を着ると、松風の怨念で狂氣し、汐汲桶を携へて來る。漁師此兵衞（三代中村歌右衞門）は、これを待ちう

納言の文を取次いだ侍從も疎遠され、大納言を怨んでゐる。相談は成つて、宰相は大納言に似せた文をかき、侍從の計ひで女御に宛てた戀文が屆く。一方、右馬頭は、大納言の弟右衞門督が、東夷を從へて都に攻め上らうとしてゐると讒言する。かくて大納言は捕へられて、隱岐の島へ流されて了ふ。〔あづまの月〕東夷を平定した右衞門督は、下野國に赴く。下野守の妻は、故大納言北の方の乳母の妹で、前右馬頭の美しい娘を育ててゐる。饗應の舟遊びの折、不思議な海女が現はれて、百濟帝が聖德太子に獻じたのを、守屋が奪つて難波の浦に捨てたと云ふ玉を捧げる。督は前右馬頭の娘と契り、共に都へ上らうとすると、何故か、下總國に止まれと命令が下[illegible]て來た。〔あしの屋〕中將（舊少將）の君は、父の島流しを嘆き、上にお願ひして須磨に籠る。山の井中納言の子少將も、別れの寂しさに耐へかね、暇を戴いて須磨を尋ねる。二人で寂しさを語るにつけても島の大納言は、どんなにか都が戀しからうと互に哀れがるのであつた。山の井中納言には、本妻の子以外に二人の子がある。一人はこの少將、今一人は美しい妹君、松陰中將はこの君に思ひをかけてゐた。山の井北の方が嫉妬深いので、姫は蘆屋に遁れて住むが、なほ物足りないのか、播磨國の祗承の官人に姫をやると言つた。この男は喜んで連れ出し、須磨の汀で船を探してゐた。折から船あそびしてゐた少將がこれを助け出し、姫の代りに車の中に蜑を入れる。男はあわてて、北の方にはかられたと思ひ、姫を返しに行く。北の方も一目見て、變化の物だと恐れ騷ぐ。少將はこの機會に姫を中將にわたして自らは京へ歸る。〔車たがへ〕大納言が島流しされてから寂しい内侍の許に、侍從は中納言を、少納言は宰相中將をそれ〴〵勸める。上からも以前のやうに宮仕へしてはとの仰せがある。うるさい取りなしに萬一を慮り、内侍は頭中將家に隱して貰はうと車を請ふ。これを知つた侍從は、中納言から車を出させて西の對に、少納言も宰相の車を東の對に出して待つてゐる。内侍のお出ましを二人が爭つて袖引き合ふ時、頭中將が見える。中將は密かに二人の車の位置を反對にし、それ〴〵の女に暮に參上させると云はれる。二人は喜んで歸るが、車が違へてあるので、侍從は宰相中將の、少納言は中納言の所へ着いて、驚くところを押込められて了ふ。内侍は無事頭中將家に着かれるが、山陰の邸は庭も荒れて益々寂しい住ひとなつて行く。〔むもれ木〕春宮は、山の井家及び松陰家に行啓、例の僞手紙を御覽になり、又田鶴君の案内で、松陰の姫君と契られ、翌朝伴れてお歸りになる。〔文あはせ〕春宮は頭中將をお召しになり、例の文を御覽になる。頭中將は行川の中將が白狀した事、宰相中將が大納言の妹に通つてゐるのも、後の事を思へばこそであらうと申上げる。春宮は仔細を奏上され、終に中納言は按察使、宰相は大貳、少將は少貳、右馬頭は對馬守に遷される。〔おきの島〕島の阿闍梨を話相手に大納言は侘しい生活をしてゐる。夢のお告げも、この法師のみにお告げになるほどの親しさである。或る日津浪があつて、都から下向中の宰相の船がこの島に打上げられる。船には、息もたえ〴〵に妹君が居られる。侍從から總てを聞かれて恨めしく思ひ、妹君を留めて他は送りかへす。九月愈々都の御迎へが來て、途中明石に上陸、中將と面會される。中將は姫娠中の姫を蜑少女と稱して京へつれて行く。〔九重〕大納言の御船は鳥羽に着き、やがて參内、直ちに右大將になされ、中將は三位になる。さて上は御讓位になり、姫君は女御として弘徽殿に入御、大將は内大臣を兼ねる。右衞門督は中納言に、下總守は修理大夫に、それぞれ任命される。三位の中將には若君が生れ、内大臣は蜑の子だと相手にされぬが、事情を聞いて蘆屋から行方不明になつた姫と知り、色々引出物をなさる。〔子の日〕年改まつて松陰家の賑かさは去年に似るべくもない。〔うゐかぶり〕冷泉院は、物靜かに仙洞の春をお迎へになる。三の宮の御元服と同時に田鶴君をも初冠させ、將來、五の宮に配はさうとなさる。田鶴君はやがて少將になる。その頃弘徽殿の女御が御產のため下られる途中、怪しい風のため惱み心地となられる。島の阿闍梨の御修法で侍從の生靈は退散し、男宮が生れる。阿闍梨は權僧都になされ、大臣は喜んで加茂川の御堂を修築する。その折不思議な石の箱が出るが、大臣と僧都は島で見た夢を思ひ合せ、翌年の御八講を計畫する。〔をと羽〕女御、五の宮、前麗景殿、三位中將の上内侍君等が集まつて仲秋の月を愛でる。また大臣も淸水へ詣られるが、そこでおちぶれた侍從に會つて連れ歸られる。〔みなみの海〕侍從は「例の少貳は、大風のため小島に吹き寄せられ、松の木につかまる。夜明けて見ると、大松の梢につかまつてゐて生きた心もない。觀世音を念じてゐると、下枝に大きな鶴がゐた。首に取りつくと鶴は硫黃島に運んで呉れる。不思議な翁の助けで、白い島に文を傳へて貰ひ、太宰府の大貳に迎へられる。その時、翁は光を放つて失せた。それで私も、觀世音に祈つて罪を許して頂かうと思つて淸水へ來ました」と懺悔する。〔やまぶき〕九月の末頃、四位少將は三位中將に陞り、なほ内大臣から大將を讓られる。この頃、女院の許に御幸があり、御伴に從つた中將は、山吹の花をゆかりに、名を明かさない女と契つた。〔花のうてな〕例の侍從は、終に尼になる。松陰大臣の造られた御堂は莊嚴に完成し、六月、御八講の時が來た。弟の中納言は例の東國の海で得た不思議な玉を捧げる。玉には觀世音の御姿が現はれるので、先きに掘り出した石の上に安置する。中納言は東宮大夫を兼ね、大貳も按察使も筑紫から歸つて來る。さて山の井北の方は、右大將北の方と對面し、蜑の子と思つたのが、蘆屋の姫君であることを知り、大に恥ぢる。〔はつ瀨〕彌生の頃、大臣は初瀨に詣らうとし、途中女院の造られた家に宿る。この時、中將は山吹の女に再會する。初瀨からの歸途、入道した右馬頭に會ひ、その後また奈良の興福寺に行ひすましてゐる少貳にも會つた。〔宇治川〕山吹の女は、女院に仕へる阿波の局と帥の中納言との間に生れた娘である。女院は大貳に配はさうとされ、大貳は迎へに行く。これを聞いた中將はあわてて舟で漕ぎ寄せる。一方、姫は中將を思ひ、母上との別れを悲しみ、水に身を投げる。驚いた母上も同じく投身してはかなくなるが、姫君は偶然にも中將の舟に助けられる。大貳はこゝに罪を嘆いて出家する。さて内大臣は、やがて太政大臣となり、按察使に内大臣を讓り、思ひ殘す事もないからと、山の井殿を寺に造つて入道するのであつた。

【構想】甚だ複雜であり、且つ大きい。場面は絕えず變轉して、事件は快く進捗し、少しの

る。一人はこの少將、今一人は美しい妹君、松陰中將はこの君に思ひをかけてゐた。山の井北の方が嫉妬深いので、姫は蘆屋に遁れて住むが、なほ物足りないのか、播磨國の祇承の官人に姫をやると言つた。この男は喜んで連れ出し、須磨の汀で船を探してゐた。折から船あそびしてゐた少將がこれを助け出し、姫の代りに車の中に蟹を入れる。男はあわてて、北の方にはかられたと思ひ、姫を返しに行く。北の方も一目見て、變化の物だと恐れ騷ぐ。少將はこの機會に姫を中將にわたして自らは京へ歸る。〔車たがへ〕大納言が島流し

事を思へばこそであらうと申上げる。春宮は仔細を奏上され、終に中納言は按察使、宰相は大貳、少將は少貳、右馬頭は對馬守に遷される。〔おきの島〕島の阿闍梨を話相手に大納言は侘しい生活をしてゐる。夢のお告げも、この法師のみにお告げになるほどの親しさである。或る日津浪があつて、都から下向中の宰相の船がこの島に打上げられる。船には、息もたえ〳〵に妹君が居られる。侍從から總てを聞かれて恨めしく思ひ、妹君を留めて他は送りかへす。九月愈々都の御迎へが來て、途中明石に上陸、中將と面會される。中將は姫

女御、五の宮、前麗景殿、三位中將の上内侍君等が集まつて仲秋の月を愛でる。また大臣も淸水へ詣られるが、そこでおちぶれた侍從に會つて連れ歸られる。〔みなみの海〕侍從は「例の少貳は、大風のため小島に吹き寄せられ、松の木につかまる。夜明けて見ると、大松の梢につかまつてゐて生きた心もない。觀世音を念じてゐると、下枝に大きな鶴がゐた。首に取りつくと鶴は硫黃島に運んで吳れる。不思議な翁の助けで、白い島に文を傳へて貰ひ、太宰府の大貳に迎へられる。その時、翁は光を放つて失せた。それで私も、觀世音に祈

女院は大貳に配はさうとされ、大貳は迎へに行く。これを聞いた中將はあわてて舟で漕ぎ寄せる。一方、姫は中將を思ひ、母上との別れを悲しみ、水に身を投げる。驚いた母上も同じく投身してはかなくなるが、姫君は偶然にも中將の舟に助けられる。大貳はこゝに罪を嘆いて出家する。さて内大臣は、やがて太政大臣となり、按察使に內大臣を讓り、思ひ殘す事もないからと、山の井殿を寺に造つて入道するのであつた。

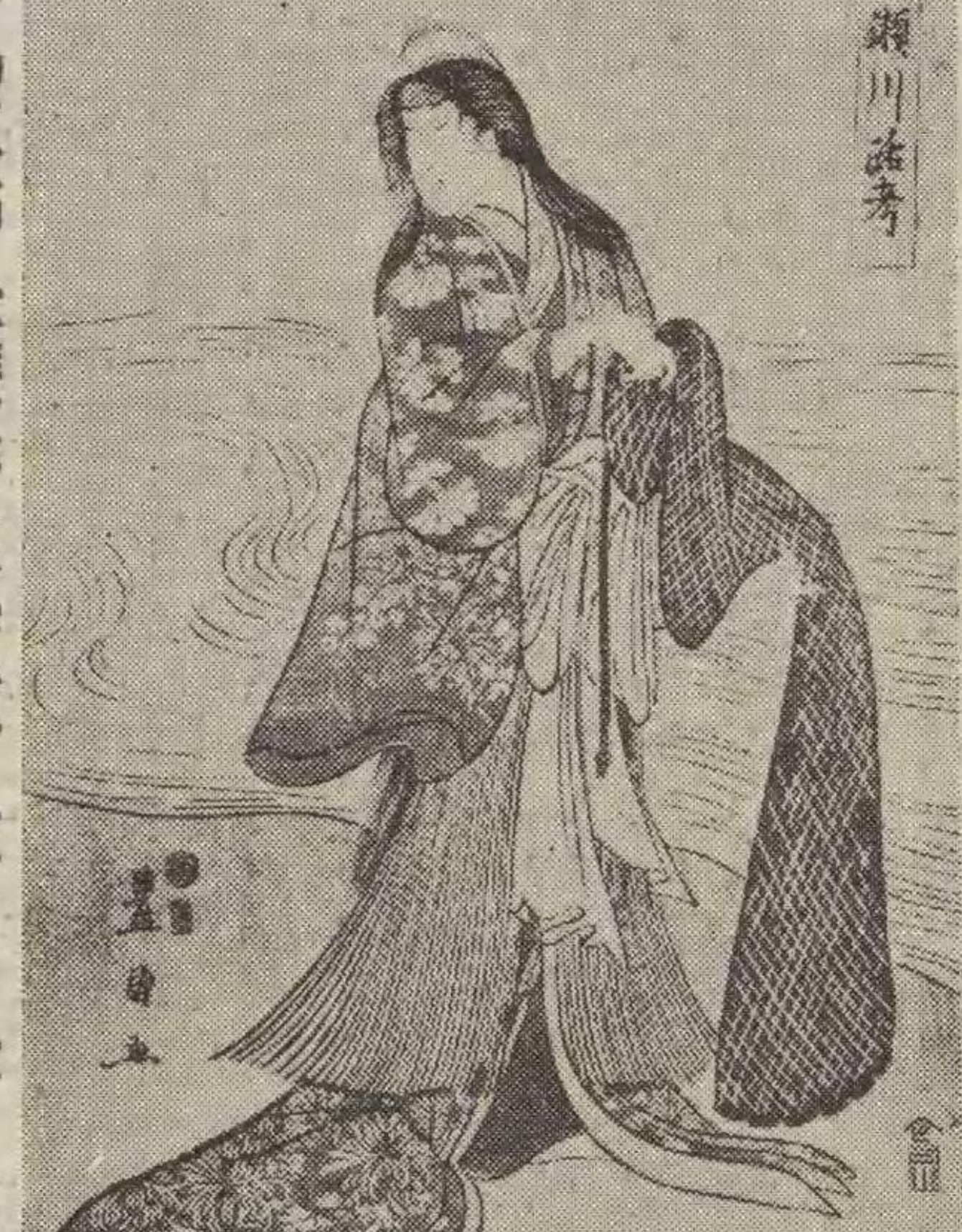
【構想】甚だ複雜であり、且つ大きい。場面は絶えず變轉して、事件は快く進捗し、少しの

淀みも弛みもない。所々に海女の身代りや車違への可笑味等があつて、作者の態度には如何にも餘裕が見える。如何なる點景・人物も、むだには出してなく、一度出た人物は、後で必ず何かの役割を果してゐる等、少しの隙もない。複雜な事件に多數の人物を動かして、かく破綻なく完結せしめたのは、餘程すぐれた技能を豫想しなければならない。全篇を貫く淡い因果應報思想の中に、戀愛・別離・讒言・遠島・繼子いぢめ・神仙・生靈・神鳥等樣々な事件を盛つてゐる。隱岐や須磨の生活敍述は、源氏の須磨・明石を髣髴せしめ、山吹・宇治川の卷々には宇治十帖の影響が見える。主人公の流謫や山吹の君の入水等、また各卷別にそれぞれの卷名を付けたのも源氏を倣つたものと思はれるが、文章は流麗で具象的である。なほ蘆屋の姫君で、繼子いぢめを描いてゐるが、後に姫が三位中將の北の方になつてからも、落窪のやうに手痛い報復はなく、至極おほどかである。暴風で大貳の船が隱岐へ吹き寄せられる事や、少貳が觀世音に助けられ、烏の翼に文を託すなど、傳奇的な物語を挿入しても、無理に怪奇化してゐないのは、平安朝期の傳記的な物語と區別さるべきである。一體この物語は、事件と人物との推移・とり合せ・調和に於て甚だ秀れてゐるが、各々の人物の性格は、必ずしも深く描かれてゐない。性格を內面的に洞察するよりも、その身に懸り及ぶ事件によつて描かうとしてゐる。こゝにこの物語の弱點があると思ふが、併しかゝる個性の掘り下げの稀薄さこそ、この物語が前述の成立期に入るものであることを示すものと考へる。ともあれ、當期の擬古物語中では、特に注目さるべき作品であると思はれる。

【參考】國文學槪說 藤田德太郎　〔永積〕

松風 「戀慕物の謠曲」を見よ。

松風 所作事 【解說】松風村雨の傳說に基づく。これを劇化したものでは謠曲に「松風」があり、その歌詞の一部や汐汲の演伎等が取入れられた。操淨瑠璃にこれ等を攝取したものは種々あるが、就中、歌舞伎に最も影響を及ぼしたのは、元祿七年三月大阪竹本座上場の近松門左衞門作「松風村雨束帶鑑」（別項）と、元文三年正月同座上場の文耕堂と三好松洛等の合作「行平磯馴松」（別項）との二種である。殊に後者の第四段目「形見忍夫摺」は、後の松風物の粉本、又は原作をなすものである。【沿革】歌舞伎では寬文頃とおぼしき歌舞伎舞踊圖に、既に「汐汲」の所作が畫かれてゐるので、古くから行はれてゐたと見られるが、記錄では、元祿十三年京都萬太夫座の「松風」や、同十六年四月江戶森田座の「成田山分身不動」（別項）等の中に演じられた「汐汲」の所作が古い。また元祿十七年刊の「落葉集」にも「松風」が見えてをり、元祿期の三絃の名手と言はれた岸野次郎三郎の作曲中にも「松風」が見えてゐる。長唄では寬延二年十一月市村座の「松風」が古く、常磐津節では寶曆七年十一月同座の「松君陣磨廓」第二番目「松似候男姿」（通稱松風。作者壕越二三治）が古い。後者は松風（中村富十郎）・行平（市村龜藏）・此兵衞（二代澤村宗十郎）等で演じたもので、「松風」としての形式を備へ、その後の常磐津・富本等に出來た各種の松風物に影響した點に於て、注目すべき曲である。富本節では天明七年五月森田座の「行平磯馴松風」が古く、變化舞踊では寬政四年四月河原崎座の「杜若七重の染衣」（四代岩井半四郎七變化）の中の「汐汲の松風」が古い。かくて後に淸元節にも出來、長唄と豐後三流に各種各樣の松風物が生れて、一系統をなすに至つた。左に傳存の主な曲を擧げる。



濱松風（小ふじ）

【徒髮戀曲者】富本〔通稱〕松風〔初演〕寬政八年十一月一日初日、江戶桐座「銀積松行平」第二番目大切〔作詞〕松井由輔〔太夫〕二代富本豐前太夫〔作曲〕名見崎喜總治〔振附〕山口七十郎〔傳來〕曲のみ傳存。また淸元節にも移調されて現存。上の卷「戀すてふ鄙手枕」は、後に下の卷の名題に一括された。〔內容〕在原行平（三代澤村宗十郎）が勅勘を蒙つて須磨の浦邊に謫居の中に、蜑の松風（三代瀨川菊之丞）と馴染を重ねたが、勅勘が許りて別れる時、「立ち別れ云々」の遺物の一首を與へ、共に名殘りを惜しむ振あつて歸洛する。松風は形見を抱いて別離を嘆き、遂に狂ひ亂れる。これに漁師磯馴の松兵衞（三代坂東彥三郞）と須磨の此兵衞（嵐龍藏）とが搦み、萬歲の振事あつて立廻りになる。上の卷は松風の汐汲、下の卷は松風の狂亂を眼目とする。淸元の「今樣須磨」（後出）は本曲に負ふ所が多い。

【濱松風戀歌】長唄〔通稱〕濱松風〔初演〕文化五年八月十日初日、江戶中村座「行平磯馴松」大切〔作詞〕二代瀨川如皐〔立唄〕富士田千藏〔作曲〕九代杵屋六左衞門〔振附〕市山七十郎。曲・振とも傳存。〔內容〕田井の畑の太夫の下女小藤（四代瀨川路考）は、亡き蜑松風が形見の烏帽子狩衣を着ると、松風の怨念で狂氣し、汐汲桶を携へて來る。漁師此兵衞（三代中村歌右衞門）は、これを待ちうけ口說いたが、松風が乘り移つてゐるので取合はず、行平の名を呼んで狂ひ廻る。此兵衞は焦つて斬りかけるを防ぎながら手踊模樣の所作タテになる。手踊の件の曲の妙、振の巧みさはこの種の所作事中の白眉と稱へられてゐる。元來が義太夫狂言の一部を所作化したものなので、現今でも正式には義太夫（形見忍夫摺）との掛合にする事になつてゐる。

【七枚續花の姿繪】長唄と常磐津との掛合。變化物〔通稱〕汐汲〔初演〕文化八年三月六日初日、江戶市村座「盤話水滸傳」第二番目大切〔作詞〕二代櫻田治助〔立唄〕芳村伊十郞〔作曲〕二代杵屋正次郞〔振附〕藤間勘十郞〔傳來〕振は傳存。曲は長唄のみ傳存。但し曲・振とも文政六年森田座所演「法花姿色全」（五變化）の中「松風浦月草」（長唄のみ）で再演された時のものと思はれる。〔內容〕須磨の蜑松風（三代坂東三津五郞）は汐汲桶を荷ひて海邊へ來り、汐汲む振あつて筐の狩衣を手に口說模樣、最後に花傘を使つて賑やかな踊になる。現流行曲。女三の宮・梶原源太・猿廻し・願人坊主・老女・關羽と組合せた七變化の一。

【戀男調松風】長唄〔通稱〕「調松風」「勇次郎の汐汲」〔初演〕文化九年六月十八日初日、江戶森田座「行平磯馴松」第一番目大詰

〔作詞〕木村松陸〔立唄〕岡安喜三郎〔作曲〕四代杵屋六三郎〔振附〕松本豐柳、曲・振とも傳存。〔內容〕前出の「濱松風」と大同小異であるが、歌詞は大に異にしてゐる。松風娘小藤（淺尾勇次郎、後の實川額十郎）・此兵衞（中山豐五郎）。名作の一で、鄙びた中に松風物の特徵があつて面白い。

【今樣須磨の寫繪】清元〔通稱〕「今樣須磨」「村雨松風」〔初演〕文化十二年五月十五日初日、江戶市村座「箱根靈驗躄仇討」第二番目大切〔作詞〕二代櫻田治助〔太夫〕清元延壽太夫〔作曲〕清澤萬吉〔振附〕藤間勘十郎、曲・振とも傳存。〔內容〕上下二段の形式で、上段は松風（二代市川團之助）、村雨（二代岩井粂三郎）の汐汲から行平（二代嵐三五郎）との情事。姉妹の嫉妬の爭ひ、行平が松の木に烏帽子狩衣に一首の歌を添へ形見に殘しての歸洛。下段は姉妹が行平との別離の悲嘆、次いで村雨は行平の跡を慕うて船場へ走る。松風に平素心をかける漁師此兵衞（早替り、二役嵐三五郎）が口說きから松風の狂亂。後に松風と漁師との立廻りになる。松風物としては集大成された觀があり、現行（舞踊）では最も上演度數が多い。

【諸本】日本歌謠集成（卷九・一〇）・歌謠音曲集（日本名曲全集）・日本音曲全集（第一・三・九卷）所收。

【參考】劇代集（二代櫻田左交）○近世邦樂年表○近世江戶舞踊史 九重左近 〔秋葉〕

松風村雨（まつかぜむらさめ） 御伽草子 三卷 【作者】不詳【別名】行平物語【成立】室町末期か。【諸本】古板本は萬治二年板（野田彌兵衞板行）。「行平物語」と題する鱗形屋板もある。【內容】在原行平と、須磨の蜑姉妹松風・村雨との情話。謠曲「松風」より出づ。行平配流の原因を官女青柳の前との情交の露顯とし、兩姉妹の本名を藻鹽菊女と記し、召還後行平の死を聞いて松風は海に投じ、村雨は尼となる事を作る。挿話として行平の語る七草の由來は、大略「七草の草子」（別項）に同じ。【影響】近世の戲曲その他音曲物でこれを題材とするは、主として謠曲からの影響であらう。

【參考】廣益俗說辨正編卷九 〔島津〕

松風村雨束帶鑑（まつかぜむらさめそくたいかがみ） 淨瑠璃 五段 時代物 【作者】近松門左衞門

【興行】明和板「外題年鑑」に、元祿七年三月三日より竹本座の興行としてあるが、三段目の「龍神風流」の條に賴母・若太と記してあつて、竹本賴母と豐竹若太夫が掛合で語つた事が示されてある。若太夫は最初竹本采女と稱へ、元祿十六年に若太夫と改名したのであるから本作はそれ以後の興行であらう。【諸本】八行六十二丁本、山本九兵衞板。近松傑作全集第二・近松時代淨瑠璃（帝國文庫）・近松淨瑠璃集上（有朋堂文庫）。諸種の近松全集所收【題材】謠曲「松風」から着想し、浦島傳說や狂言「靱猿」の趣向を取入れたもの。謠曲「松風」系統のものは、假名草子に萬治二年板の「松風村雨」、歌舞伎狂言に、元祿十年（推定）荒木與次兵衞座興行の「日本女護島」、同十三年都萬太夫座上場の「松風」、淨瑠璃に土佐少掾正勝の正本「現在松風」があるが、何れも本作との特殊關係は認められない。

【梗概】〔第一〕（坂本山王權現）日嗣の皇子降誕の御忌明に傅在原行平・北の方司の前・僧正遍昭等がお伴をして山王權現に產神詣に赴くと、突然皇子が急驚風で薨ぜられる。先帝の皇子恒寂僧都が竊に皇位を窺つてゐるのを知る行平は思案に暮れ、皇子に代るべき御子を索める折柄、浦島太郞が龍宮より歸り、乙姬との間に出來た嬰兒を抱いて茫然として佇んでゐるのに會ひ、請うてその子と皇子の亡骸とを取換へる。（和歌の浦）司の前の兄花室の三位葎丸は恒寂・伴健宗・千劔逸勢等と謀り、皇子を初め行平一家を河豚で毒殺しようと釣針を垂れたところ、俄に一疋の大魚が現はれ、釣針を呑んで絲をくひ切る。（行平館）嘗て行平と契つた須磨の蜑松風が、行平に會はんため若宮の乳母として奉公に出ると、乙姬の魂が松風に乘り移り、若宮を抱いて種々とかき口說く。これを物蔭から聞いてゐた司の前は、さては浦島の子と言つてゐたのは行平と松風との間に出來た子であつたかと感違ひをし、嫉妬の餘り守刀をとつて討たうとすると、數千の小蛇が現はれて二人を護る（行平が數多の乳持を呼び寄せて若宮の乳母を選定する所に、節事「今樣うばぞろへ」がある）。（廣澤の池畔）司の前が兄葎丸にかくと告げたので、行平の館は恒寂等の押寄せる所となり、大夫雛形右衞門尉は若宮を抱き松風と共に逃れる途中、僧正遍昭に逢ひ、共に力を協せて追手と戰ひ、既に危く見えたが、廣澤の池より乙姬が大蛇となつて姿を現はし、敵を追ひ散らして、我が子並に行平が天子より預る日の御座の寶劍を抱いて池中に消える。〔第二〕（浦島塚）浦島は故鄉水の江に歸り、所緣を尋ねるが里人達は笑つて相手にせず、ただ浦島塚を指すのみである。途方に暮れた浦島は、せめて皇子の骨なりと葬らうと塚を穿つ所を田夫共に發見され、古墳を發く盜人の嫌疑を受けて難澁してゐるのを、通りかゝつた龜彥の庄司に助けられる。（龜彥の庄司館）山路の右中辨が、敕使として來り、行平の類屬を見つけ次第討てとの敕諚がある。所が敕使が去ると間もなく歸宅した子の由良太が途中で松風を助けて伴ひ歸つたので、庄司はこれを討たうと決心し、今は和田松と名乘つて下人奉公してゐる浦島に相談するのを、由良太の女房に立ち聞きされる。和田松は話の中に庄司が己が六世の孫なるを知るが、恩義ある行平のため庄司を討つて松風を救はうと決心する。その夜由良太の女房は夫の意を酌んで松風を落さうと一間に忍び入るのを、庄司が松風と過つて刺し通し、庄司も亦時を同じうして忍び寄つた和田松のために刺される。かくて家中の騷ぎとなり、由良太は父の敵と和田松に詰め寄る。そこへ敕使山路の右中辨が入り來るが、忽ち松風のために葎丸なる事を見顯はされ、こゝに和田松・葎丸の一騎討となる。この騷ぎの中に葎丸の郎黨が玉手箱を開いた爲め和田松は一瞬にして白髮の老翁となり、こゝに始めて浦島太郞と名乘り、龍神の神力によつて葎丸等を亡す。〔第三〕（柴屋）行平の弟業平は日の御座の寶劍の行方搜索のため、健宗は行平の行方詮議のため、それ〲敕命を蒙つて須磨へ下り、業平は鹽屋に、健宗はその隣の柴屋に宿をとる。所へ行平が須磨の昔懷しくさまよひ來る。折柄柴屋で下女の松風が妹の村雨に手傳はれて米搗をしてゐたが、行平の姿を見るや走り寄つて縋りつくを健宗の郎黨に發見される。物音に走り出でた業平は、この有樣に吃驚するが、辨慶の故智に倣ひ、松風と共に行平を打据ゑ、一方村雨が自分の夫であると主張するので健宗は始めて疑ひを晴らす。（行平隱家）行平・村雨は健宗の目を掠めるため假に夫婦の契を結ぶ事となつたが、松風はこれを嫉妬し、その怨魂が焰となつて行平夫婦の閨のあたりを飛

び廻れば、村雨の懷からも赤志の焰が顯はれ出でて打合ふ。これを見て行平はそのあさましさを呪ひ、姉妹のうち龍宮に分け入つて日の御座の寶劍を奪ひ返した者こそ二世迄の夫婦であるが、それ迄は二人とも夫婦の緣を絕つと言ひ放つ。（龍神風流）松風・村雨が夢の中に龍宮に至つて寶劍を取戾すといふ景事。〔第四〕（司の前道行）司の前は夫を慕ひ、僧正遍昭を伴つて須磨へと志し、やがて西の宮に

れは徒らに趣向の奇をのみ狙つた結果といふべく、兎に角近松としては愚作の方である。

【影響】元文三年正月二十五日より竹本座興行の「行平磯馴松」は本作の系統に屬するものである。

【參考】近松傑作全集卷之二解題 水谷不倒○大近松全集第六卷解說 木谷蓬吟○近松全集第四卷解題 藤井乙男○日本歌謠集成卷七○日本演劇史 伊原敏郎 〔高野（正）〕

べて國學に關する考古的記事を雜纂したものであつて、家屋・調度・服飾・文房・樂器・有職故實・一般風俗等の事物にも及んでゐる。卷一に大吉備津彥命と申す御名以下五十一條、卷二に神の人にかゝり給ふ事以下三十二條、卷三に賀茂の御社以下五十三條、卷四に神の宮人の於々といふ聲を高くたつる事以下八十五條を收めてあり、また文政十二年中村寬の序がある。 〔和田〕

の新曲の部分を正本として刊行したものである。後、芝金と芝勢以とが分離するに至り、芝勢以派では、昭和五年に「小曲紫紅の友」五册を菊壽堂から刊行したが、內容は殆ど「松のみどり」と同じで、順序が多少異つてゐる。なほ芝派の「松のみどり」に對して、寅派の正本には「小曲松葉巴」三册（明治三十九年刊）がある。この外、創始時代の歌澤の歌詞を集めた書は數が多い。（歌澤參照） 〔藤田〕

りになる。松風物としては集大成された觀があり、現行（舞踊）では最も上演度數が多い。【諸本】日本歌謠集成（卷九・一〇）・歌謠音曲集（日本名曲全集）・日本音曲全集（第一・三・九卷）所收。【參考】劇代集（二代櫻田左交）○近世邦樂年表○近世江戸舞踊史 九重左近　〔秋葉〕

松風村雨（まつかぜむらさめ）　御伽草子　三卷　【作者】不詳【別名】行平物語【成立】室町末期か。【諸本】古板本は萬治二年板（野田彌兵衞板行）。「行平物語」と題する鱗形屋板もある。【內容】在原行平と、須磨の蜑姉妹松風・村雨との情話。謠曲「松風」より出づ。行平配流の原因

「靱猿」の趣向を取入れたもの。謠曲「松風」系統のものは、假名草子に萬治二年板の「松風村雨」、歌舞伎狂言に、元祿十年（推定）荒木與次兵衞座興行の「日本女護島」、同十三年都萬太夫座上場の「松風」、淨瑠璃に土佐少掾正勝の正本「現在松風」があるが、何れも本作との特殊關係は認められない。【梗概】〔第一〕（坂本山王權現）日嗣の皇子降誕の御忌明に傅在原行平・北の方司の前・僧正遍昭等がお伴をして山王權現に產神詣に赴くと、突然皇子が急驚風で薨ぜられる。先帝の皇子恒寂僧都が竊に皇位を窺つてゐるのを知る行平は思案に暮れ、皇子に代るべき御子を

昭に逢ひ、共に力を協せて追手と戰ひ、既に危く見えたが、廣澤の池より乙姫が大蛇となつて姿を現はし、敵を追ひ散らして、我が子並に行平が天子より預る日の御座の寶劍を抱いて池中に消える。〔第二〕（浦島塚）浦島は故鄕水の江に歸り、所緣を尋ねるが里人達は笑つて相手にせず、ただ浦島塚を指すのみである。途方に暮れた浦島は、せめて皇子の骨なりと葬らうと塚を穿つ所を田夫共に發見され、古墳を發く盜人の嫌疑を受けて難澁してゐるのを、通りかゝつた龜彥の庄司に助けられる。（龜彥の庄司館）山路の右中辨が、敕使として來り、行平の類屬を見つけ次第討てとの敕諚

め それ〳〵敕命を蒙つて須磨へ下り、業平に

鹽屋に、健宗はその隣の柴屋に宿をとる。所へ行平が須磨の昔懷しくさまよひ來る。折柄柴屋で下女の松風が妹の村雨に手傳はれて米搗をしてゐたが、行平の姿を見るや走り寄つて縋りつくを健宗の郞黨に發見される。物音に走り出でた業平は、この有樣に吃驚するが、辨慶の故智に倣ひ、松風と共に行平を打据ゑ、一方村雨が自分の夫であると主張するので健宗は始めて疑ひを晴らす。（行平隱家）行平・村雨は健宗の目を掠めるため假に夫婦の契を結ぶ事となつたが、松風はこれを嫉妬し、その怨魂が焰となつて行平夫婦の閨のあたりを飛

び廻れば、村雨の懷からも赤恚の焰が顯はれ出でて打合ふ。これを見て行平はそのあさましさを呪ひ、姉妹のうち龍宮に分け入つて日の御座の寶劍を奪ひ返した者こそ二世迄の夫婦であるが、それ迄は二人とも夫婦の緣を絕つと言ひ放つ。（龍神風流）松風・村雨が夢の中に龍宮に至つて寶劍を取戻すといふ景事。〔第四〕（司の前道行）司の前は夫を慕ひ、僧正遍昭を伴つて須磨へと志し、やがて西の宮に着く。（行平本陣）行平は寶劍が再び手に入つたので松風・村雨を伴ひ歸洛を急ぐ途中、西の宮に宿を求め司の前と不思議の邂逅をする。行平は松風・村雨の貞節を語り聞かせて司の前を責めると、司の前は深く己が罪を悔いる。そこへ雛形右衞門尉と由良太が駈け來り、健宗を討取つた事を告げる（司の前が行平と知らずに本陣に立ち寄つて宿を求め、出女達に獨樂を廻して見せる節事「當世獨樂盡し」がある）。〔第五〕（廣澤の池畔）行平は都に歸り、目出度く敕勘が赦されて歸任したので、僧正遍昭が導師となつて龍神を供養し、芝居を構へ狂言師を集め、行平も立ち交つて狂言を催す。次が劇中劇の狂言「靱猿」、舞ひ納めると見えた時、突然猿の役人が面を取つて棄てると恒寂が現はれ出で、我は元他方海の龍神なりと名乘つて行平を取つて伏せるが、折から馳せ來つた浦島に亡される。

【構想】景事・節事等見せ場の多い作であるがそれだけ目先本位で全體としての組立は散漫であり、殊に浦島傳說を取入れたなどは荒唐無稽に過ぎる感がある。その錯綜した筋は、豫め正本を讀んで行つた見物以外には理解が困難であつたらう。二段目で浦島が庄司を殺す動機に至つては甚だしい無理があるが、これは徒らに趣向の奇をのみ狙つた結果といふべく、兎に角近松としては愚作の方である。【影響】元文三年正月二十五日より竹本座興行の「行平磯馴松」は本作の系統に屬するものである。

【參考】近松傑作全集卷之二解題水谷不倒○大近松全集第六卷解說 木谷蓬吟○近松全集第四卷解題 藤井乙男○日本歌謠集成卷七○日本演劇史 伊原敏郞　〔高野（正）〕

松崎天神緣起（まつざきてんじんえんぎ）「天神緣起」を見よ。

松園梅彥（まつぞのうめひこ）「四方梅彥」を見よ。

松田和吉（まつだわきち）「文耕堂」を見よ。

松波資之（まつなみすけゆき）　歌人　【號】遊山【生殁】天保元年廣島在に生れ、明治三十九年九月十三日橫濱に殁す。享年七十七。【閱歷】鄕士の家に生れ、後京都に上つて德大寺家に仕へ、歌を香川景樹に學んだが、景樹の長子景恒殁して後は、自ら東塢塾を主宰した。後北面の武士松波家を繼ぎ、大學大允と稱したが、維新の後は皇太后宮の內舍人となり、次いで雜掌に轉じ、太后崩後は橫濱に閑居した。歌集には「花仙堂家集」「同拾遺」「かるかや集」等がある。【歌風】景樹の直系の門人は資之を以て終りとすると云はれてゐる。淡々として水の如き作風は、景樹の癖を漉し去つて、その自在平明な部分を傳へたといふべきである。その書も歌に似て自然である。〔相原・金子〕

松の落葉（まつのおちば）　歌謠　「落葉集」を見よ。

松の落葉（まつのおちば）　隨筆　四卷・目錄一卷【著者】藤井高尙【名稱】著者の號を松の舍といつたので、松の落葉と名づけたのである。【刊行】文政の末か。【諸本】百家說林續編上卷所收。【解說】神道・國史・國語・國文等、すべて國學に關する考古的記事を雜纂したものであつて、家屋・調度・服飾・文房・樂器・有職故實・一般風俗等の事物にも及んでゐる。卷一に大吉備津彥命と申す御名以下五十一條、卷二に神の人にかゝり給ふ事以下三十二條、卷三に賀茂の御社以下五十三條、卷四に神の宮人の於々といふ聲を高くたつる事以下八十五條を收めてあり、また文政十二年中村寬の序がある。〔和田〕

松の綠（まつのみどり）　歌謠書　五冊【編者】哥澤芝金（初代―四代）【名稱】「小曲松のみどり」と角書がある。初編の初めに揭げた「松の綠」（哥澤芝金調、假名垣魯文作）をもつて書名とした。【刊行】初編慶應三年（但し、明治元年の序文がある）、二編明治十五年、三編同二十二年、四編同四十二年、五編大正十一年。刊行所廣岡屋幸助（菊壽堂）。【解說】哥澤芝派の歌詞を集めたもの。芝派の正譜の本であり、同時に哥澤の歌謠集としては歌數最も多く、標準の書となつてゐる。初編には明治元年の細木香以の序があり、五十九章を收む。二編には十五年の假名垣魯文の序があり、五十二章を收む。三編には二十二年の魯文の序があり、七十章を收む。四編には四十二年の理學博士田中正平の序があり、六十章を收む。五編には序に聲曲拾誠を附し、三十一章を收む。かくて逐年新曲を增加した。各編とも目次及び太夫の連名があり、歌詞には、何れも頭に調子付が符號で記してある。【備考】「歌澤柴紅之友」は大正三年刊、柴田芝章著。小本二冊。「松のみどり」の四篇までを一部とし、また新曲十六章を增加して、これに略註を加へたもの。大正五年版には、又新曲十五章を增補した。「松のみどり」五篇は、この新曲の部分を正本として刊行したものである。後、芝金と芝勢以とが分離するに至り、芝勢以派では、昭和五年に「小曲柴紅の友」五冊を菊壽堂から刊行したが、內容は殆ど「松のみどり」と同じで、順序が多少異つてゐる。なほ芝派の「松のみどり」に對して、寅派の正本には「小曲松葉巴」三冊（明治三十九年刊）がある。この外、創始時代の歌澤の歌詞を集めた書は數が多い。（歌澤參照）〔藤田〕

松屋叢考（まつのやそうかう）　隨筆　三卷　【著者】高田與清【刊行】文政九年【解說】三樹考・三絃考・歌詞考の三篇を倂せたもの。三樹考は賢木・桂・欅の三樹のことを四十八則を立てて仔細に考證し、柏の名義、かゞみ葉・木犀・多夫の木・ナンジャモンジャの木等に言及してゐる。末に、文政九年三月門人田吹重明・中野義接同校とある。三絃考は神樂の濫觴、樂府の歌等十八則を立て琵琶・平家曲・淨瑠璃曲・鼓弓・馬尾胡琴等に言及してゐる。卷末に文政九年六月門人間宮升芳・林堯臣同校とある。歌詞考はみたまのふゆ、かぢ緒たえ、あめつちの袋、あさ木の柱、ものぐさ、長殿のひたちの御藏、いぬゐのこ、はしたかのこもつちごゑの八條を立て、各條下に細目を擧げて考證を悉してゐる。卷末に、文政九年七月門人香取蘊麿・阿部正名同校とある。三篇いづれも卷首に引用書目を擧げ、卷中に圖畫を加へてゐる。序跋はない。〔和田〕

松屋叢話（まつのやそうわ）　隨筆　二卷　【著者】高田與清【刊行】文化十一年【解說】美濃の人、梁卯の所校。江戶時代の歌人・詩家等の逸傳及び作歌に係る事どもが多い。まゝ古事・古物に關する考說を交へてゐる。卷一に蒲生氏鄕千宗易贈答歌の話以下五十五條、卷二に石

の中に取材して、素純な情味のあるものを歌ふのを特色とする。 〔金子〕

松村春風（まつむらしゆんぷう） 雜學者 【本名】操【別號】雅堂・弘道・北陸。別に戲號垂柳亭春風居士【生歿】明治十七年四月六日歿。享年四十二三か。【法名】榮譽松月智道居士【閲歷】越後柏崎の人。鄕里の原修齋に學び、同門の駿足を以て稱せられた。學友二三子と社を結び、經史を會講した。明治四年柏崎學校

てゐた。春輔自らの語によると、山口縣（長州藩）の生れで、平民と名乘つてゐるが、恐らく輕格の士族であつたらう。その著「實事新話」の自序に、「余等文久年間より明治改元の際に至りし迄國事の端に關係して京攝東武の間を周旋せし數歲あり、或時は戰場に生死を爭ひ、或時は四國九州の島根まで時勢を探知せんが爲め往復せしは屢々なりし」とあり、又「復古夢物語」（五輯）の叙で、假名垣魯文は、「松村其

一聲」「浮世之人情」「二十年間實事新話」（初編）等を著はした。この最後の作は十六年十月であるが、これ以後、春輔作の小說は絕無といつていゝ位であるから、十六年から十七年へかけて彼は死去したか、或は戲作生活の足を洗つたか、何れかでなくてはなるまいと思ふが、何等聞えるところがない。

【業績】春輔は明治初期の異色ある小說家の一人である。戲作家系の門戸によらずに一流

〔墓所〕駒込寺町千年山榮松院〔閲歷〕元祿の初め江戸へ出で、俳優久松多四郎に入門して小四郎と稱し、のち本姓を名乘つて松本小四郎といつたといふ。初め若衆方で、元祿七年新發見の評判記には「ほノ上中」の位附に置かれたが、やがて上文字の位に進められた。同十二年夏若立役に轉じ、荒事、死靈の輕業（かるわざ）等に好評を得たが、更に敵役に扮してから、正德三年立役の上上吉に昇せられた。爾後「今の

敢當の考以下三十七條を收める。文化十一年大田元貞の序、無年紀村田たせ子及び藤原正臣の題辭がある。校者梁卯は、詩人梁川孟緯（星巖）の初名で、本書卷末に同人の小傳が出てゐる。星巖が與淸に師事した趣はこれによつて知られる。 〔和田〕

松屋棟梁集（まつのやとうりやうしふ） 隨筆 一卷【著者】高田與淸【刊行】文化十三年【解說】隅田河埋木文臺記の項下に、隅田河の名義以下十一條、答二赤松知則一書の項下に、關東・關西以下十條、東都稱呼辨の項下に、あづまの都以下四條、復二小谷三思一書の項下に、富士山の名義以下十五條、三社託宣論の項下に、甲陽軍鑑の沙汰以下三條、寄二猿渡盛章一書の項下に、六所分配宮以下十五條を收めてある。すべて考證的論篇で、高島千春・谷文晁筆の圖畫がある。所刊は卷一のみであるが、次第に刊出の豫定であつたらしい。文化十三年岸本由豆流、同年村田たせ子の兩序及び同年片岡寬光の跋がある。 〔和田〕

松屋筆記（まつのやひつき） 隨筆 零本八十四卷【編者】高田與淸【諸本】自筆稿本は、もと東京帝大圖書館に藏せられてゐたが、當時既に缺本であつた。それは大正十二年の大震火災で燒失した。轉寫本は少いが國書刊行會本がある。【解說】編者が、文化末年頃より歿前二年の弘化二年頃までの凡そ二十年間に、羣書を閱讀の際、會心の章節を拔抄し、考說を加へ評論を施しなどしたものが、積り積つて百二十卷の大部を成したものである。全部百二十卷のうち卷十七より三十六、卷四十一より四十八、卷百一・百二・百八・百十・百十一・百十三・百十四・百十六の三十六卷は散逸して傳はらぬ。系統的に編纂されたものではないけれど、該博な編者が和漢古今の史書から一ふしあるところを拔いて子孫等の覽に遺したものであるから、一般國學者をも裨益すべきものがある。 〔和田〕

松帆の浦物語（まつほのうらものがたり） 物語 一卷【作者】未詳【名義】主人公が、松帆の浦に追放された人を尋ねて行くによる。【成立】類從本等の奧に「兼載在判」の識語があり、「古物語類字鈔」も、室町中期の作らしい「嵯峨物語」の序に、「松帆の草子云々」と記してゐるから兼載より今少し古いと考勘されてゐる。猪苗代兼載は筆寫者であつて作者ではない。從つて文明を下らぬ室町中期の作と見るべきである。【諸本】群書類從卷三一一。畠山健氏の「古物語」。兒物語部類（續史籍集覽所收）・國文大觀物語部・日本文學大系等に收められ、內閣文庫には一寫本を藏してゐる。

【梗概】京都四條の邊に、中納言で右衞門督を兼ねた人があり、中將殿と云ふ一人子があつたが、久しく間を置いて、又美しい男子が生れたので甚だ寵愛された。そのうち父君は亡くなられ、中將殿は父の代りをする。弟は十歲の頃、叔父なる橫河の禪師の勸めで、山にのぼつて修學する。容貌才覺秀れた童とて、一山の人に愛され、叔父は出家を勸めるが、寂しい母上は許さず、遂に都に召し返し、元服の後、藤侍從と呼んだ。十四の春、昔なじみの橫河の僧達と北山へ櫻狩に行く。上品な三十許りの僧が侍從に目を留めて文をよせる。この僧は、岩倉に住む宰相と申す人であつた。その後宰相は、夜每門に佇み、又文をよこすので、侍從も情に負けて、後には岩倉の坊に伴はれるやうになつた。かくて三年は過ぎる。時に太政大臣の御子左大將殿、この事を聞いて心を動かし、頻りにお召しになる。宰相は、侍從は病だと稱して會はせようとしない。或る日ひそかに宰相と侍從が岩倉に行つたのを見付けられた。侍從は兄に伴はれ、左大將邸に參つてそのまゝ寵愛され、宰相は淡路の國へ追放される。これを聞くより侍從は病となつたので、母上は自邸へ連れ歸る。侍從は宰相のゆかりの伊與と云ふ法師を呼び、淡路へつれて行けと願ふ。九月、中將の不在を窺つて投身すると書き置きして出奔する。途中須磨に宿かる一夜、瘦せ衰へた宰相を夢みる。京では母上は歎きの餘り立つ事も出來ない。さて二人は宰相の住むと聞いた松ほの浦邊を尋ねるが、日も暮れ果てゝ、とある小庵に立ち寄つた。この庵の老僧から宰相は既に亡くなり、今宵はその七日にあたるとて形見の品々や文を見せられる。須磨で見た夢も思ひ合せられて二人は泣きくづれる。翌朝老僧の案內で、宰相の墓を尋ね、侍從は悲しさの餘り、身を投げようとさへするが、遂に十六の美しい姿を剃髮し、出家したのであつた。その後、伊與法師がお供をして高野山にでも上つたのか、行方は知れなかつた。

【構想】戀愛物語の對象を稚兒にした室町時代の一般的な作品である。ただ同種類の「秋の夜の長物語」「鳥部山物語」（各別項）等と異なる所は、後二者は稚兒を愛したがために、僧が成道するのだが、この物語では結局稚兒が入道することになつてゐる。後二者は佛敎的要素に富んでゐるが、この物語は寧ろ普通の悲劇的な戀愛譚と見做される。ただ鎌倉時代の物語に比して、題材に於ても文章に於ても擬古臭味が薄らぎ、次期の文學形態を孕んでゐることを注意すべきであらう。 〔永積〕

【參考】古物語類字鈔 黑川春村○近古小說解題 平出鏗二郎○室町時代文學史 藤岡作太郎

松蟲（まつむし） 「戀慕物の謠曲」を見よ。

松蟲鈴蟲（まつむしすずむし） 詩集【著者】三木天遊・繁野天來【刊行】明治三十年五月東華堂。翌年岡崎屋書店より新體詩叢書第三編として再版。【解說】天遊・天來各二十篇づつの詩を收む。共に主として當時の「早稻田文學」に揭げたもの。天遊は「新著月刊」（明治三十年）に「雨聲鳥語集」と題し、短唱を纏めて發表した。局限されたる世相の一面を單純なる情感の動くまゝに表現したのであつて、格別淸新なる印象は與へなかつたが、天來の「瓜盜人」は好評であつた。「霜夜の月」もやゝ長篇の力作だが、共に實社會の世相に觸れた點が當時の詩としては珍らしく感じられた。なほ天來は自然を對象とする場合、表現に一種の樣式を工夫し、天遊の如く七五調本位でなかつた。短い詩の末尾を五七五の俳句型で止めてあるのは天來獨特の技法であつた。

【著者小傳】天遊は兵庫縣の人、東京專門學校に學んだが、半ばにして詩作を廢し、行く所を知らない。天來は阿波の人、明治七年に生れ、昭和八年二月歿した。同じく專門學校出身、英文學の造詣深く、早稻田大學敎授であつた。 〔河井〕

松村英一（まつむらえいいち） 歌人【閱歷】明治二十二年十二月三十日、東京市芝區愛宕下に生れた。窪田空穗の門下で、歌集「春かへる日に」「やますげ」、論集「短歌論鈔」等がある。主として雜誌「國民文學」編輯に當つてゐる。

【歌風】「白粥の煮えをよろしとわが妻に病みてやさしきものいひにけり」の如く、日常生活

京帝大圖書館に藏せられてゐたが、當時既に缺本であつた。それは大正十二年の大震火災で燒失した。轉寫本は少いが國書刊行會本がある。**【解說】**編者が、文化末年頃より歿前二年の弘化二年頃までの凡そ二十年間に、羣書を閲讀の際、會心の章節を拔抄し、考說を加へ評論を施しなどしたものが、積り積つて百二十卷の大部を成したものである。全部百二十卷のうち卷十七より三十六、卷四十一より四十八、卷百一・百二・百八・百十・百十一・百十三・百十四・百十六の三十六卷は散逸して傳はらぬ。系統的に編纂されたものではないけ

の頃、叔父なる横河の禪師の勸めで、山にのぼつて修學する。容貌才覺秀れた童とて、一山の人に愛され、叔父は出家を勸めるが、寂しい母上は許さず、遂に都に召し返し、元服の後、藤侍從と呼んだ。十四の春、昔なじみの横河の僧達と北山へ櫻狩に行く。上品な三十許りの僧が侍從に目を留めて文をよせる。この僧は、岩倉に住む宰相と申す人であつた。その後宰相は、夜毎門に佇み、又文をよこすので、侍從も情に負けて、後には岩倉の坊に伴はれるやうになつた。かくて三年は過ぎる。時に太政大臣の御子左大將殿、この事を聞い

か、行方は知れなかつた。

【構想】戀愛物語の對象を稚兒にした室町時代の一般的な作品である。ただ同種類の「秋の夜の長物語」「鳥部山物語」（各別項）等と異なる所は、後二者は稚兒を愛したがために、僧が成道するのだが、この物語では結局稚兒が入道することになつてゐる。後二者は佛敎的要素に富んでゐるが、この物語は寧ろ普通の悲劇的な戀愛譚と見做される。ただ鎌倉時代の物語に比して、題材に於ても文章に於ても擬古臭味が薄らぎ、次期の文學形態を孕んでゐることを注意すべきであらう。〔永積〕

に學んだが、半ばにして詩作を廢し、行く所を知らない。天來は阿波の人、明治七年に生れ、昭和八年二月歿した。同じく專門學校出身、英文學の造詣深く、早稻田大學教授であつた。〔河井〕

松村英一（まつむらえいいち） 歌人 **【閲歷】**明治二十二年十二月三十日、東京市芝區愛宕下に生れた。窪田空穗の門下で、歌集「春かへる日に」「やますげ」、論集「短歌論鈔」等がある。主として雜誌「國民文學」編輯に當つてゐる。**【歌風】**「白粥の煮えをよろしとわが妻に病みてやさしきもの いひにけり」の如く、日常生活

の中に取材して、素純な情味のあるものを歡ふのを特色とする。〔金子〕

松村春風（まつむらしゅんぷう） 雜學者 **【本名】**操 **【別號】**雅堂・弘道・北陸。別に戲號垂柳亭春風居士 **【生歿】**明治十七年四月六日歿。享年四十二三か。**【法名】**榮譽松月智道居士 **【閲歷】**越後柏崎の人。鄕里の原修齋に學び、同門の駿足を以て稱せられた。學友二三子と社を結び、經史を會講した。明治四年柏崎學校敎師となり、翌年東京に出でて中村敬宇（別項）に西學を學び、傍ら阪谷朗廬に文を問うた。同八年歸鄕して六番小學校敎頭となつた。同十年再び上京、下谷に住した。同十五六年頃、東京兎屋書林（思誠堂主誠）番頭兼編輯員となり「實事譚」數十篇を出して大に出版界を賑はした。彼の著作物は大部分は古書の編纂物であつて、創作は至つて尠かつた。因みに彼は姓名の似通へるところから、從來戲作を多く出してゐる松村春輔と混同されてゐたが、全く別人なることが最近に至つて判明した。**【編著】**朝野新聞（明治十年七・十二月）○日本小學の論二篇○劇場新報（十一年二月より）○娛多々々珍聞（十二年一月創刊）○文典小解○山陽象山言行錄 ○東京穴探 ○原本譯解醉菩提全傳 ○明治外史○日本水滸傳○東洋立志篇○敬宇先生詩文偶抄○近世先哲叢談（別項）○（開卷驚奇）演義日本外史○曲亭遺稿附馬琴行狀記 ○（原本譯解）金瓶梅○開化千字文○京濱間汽車乘合話。

【參考】東京新誌（一ノ五） 〔石川（巖）〕

松村春輔（まつむらはるすけ） 戲作者 **【號】**櫻雨・紅雪・柳東・其蜩 **【生歿】**未詳。從來明治十七年四月六日歿などといはれてゐたが、これは松村春風を同一人と誤つての說である。**【閲歷】**從來は松村春風（別項）の閲歷と混同されてゐた。春輔自らの語によると、山口縣（長州藩）の生れで、平民と名乘つてゐるが、恐らく輕格の士族であつたらう。その著「實事新話」の自序に、「余等文久年間より明治改元の際に至りし迄國事の端に關係して京攝東武の間を周旋せし緈歳あり、或時は戰場に生死を爭ひ、或時は四國九州の島根まで時勢を探知せんが爲め往復せしは屢々なりし」とあり、又「復古夢物語」（五輯）の叙で、假名垣魯文は、「松村其蜩先生は、維新の始め勤王の役に揮ひし銃鎗の兇器を捨て、目下開明の治世と共に、翰林墨池の幽栖に行ひ澄し、鶯舌玉轉の歌曲に戲れ、故里の懷舊を奏すの餘り、梅の春輔の名に背かず、赤間の硯に浪を湛へ、筆草生ふる水莖の蹟を尋ねて暴雄と驅域を隔絕せり」といつてゐる。何故に劍を棄てて小說の筆に衣食するに至つたかは分らない。だが、壯時から文學が好きであり、又詩歌文章なども一通り出來たので、戲作者系の門戶を借りなくとも、自力で一人前の作者になり得た。明治六年の「復古夢物語」（八編まで）をその作家としての第一聲とし、八・九年「（春雪奇談）近世櫻田紀聞」（三編完）、九―十五年「（開明小說）春雨文庫」（八編まで、三編以下和田定節著）を出すに及んで文名が揚り、一流の作家とされた。同時に、服部撫松の「東京新誌」を援け（九年）、又「小說一夕話」（十一年）といふ小說雜誌を編輯したりしたが、性に合はなかつたか間もなく止め、著述の筆を續けて十四・十五年「（落花淸譚）春風日記」（六編完）、十四年「（昇平鼓腹）三府膝栗毛」（三編完）、「聞多風流西洋床」（二編）、「朧月夜花の居」（二編）、「轉猫座敷の嗜」「（貞操節義）娘水滸傳」（刊否未詳）、「（開化小說）東の秋雨」（刊否未詳）、「（貞操節義）明治烈婦傳」（二編）、十五年「東京娘風俗」（第一編）、十六年「（人情淸談）蜀魂雲井一聲」「浮世之人情」「（二十年間）實事新話」（初編）等を著はした。この最後の作は十六年十月であるが、これ以後、春輔作の小說は絕無といつてい丶位であるから、十六年から十七年へかけて彼は死去したか、或は戲作生活の足を洗つたか、何れかでなくてはなるまいと思ふが、何等聞えるところがない。

【業績】春輔は明治初期の異色ある小說家の一人である。戲作家系の門戶によらずに一流の地步を得、假名垣・柳亭・爲永系以外に獨立してゐた點は注目されてい丶。前身が前身だけに、その作の大半は幕末維新の歷史小說風のものであり、而も勤王黨側から見たものだけに、明治十年頃までは大に歡迎された。十年以後士族階級の沒落と共にこの種の正史和解式の實錄物は幾分人氣を失つて來たので、春輔も勸懲主義の人情物に轉じ、爲永張りの筆意で大に努めたが、文情ともに多少の新機軸を示してゐる。だが何をいつても當時は新聞雜誌の時代になりつつあつたので、それと緣の薄かつた春輔は、時代の讀者と步調を合せる術を知らず、遂に失意の裡に文壇を去つた。併し彼の小說は、幕末維新の大事局に就いての認識を大衆的なものにした點で、又歷史小說・實話文學（各別項）の先驅的現はれとして、明治文學史上多少の頁を割かれてもよいものである。〔柳田（泉）〕

松村みね子（まつむらみねこ） 「片山廣子」を見よ。

松本幸四郎（まつもとこうしろう） 俳優 **【初代】**〔本姓〕傳松本氏 〔初名〕松本小四郎 〔俳名〕小見川、後（一說に剃髮後）男女川 〔家號〕傳大和屋 〔生歿〕延寶二年、下總國小見川に生れ、享保十五年（二三九〇）三月二十五日江戶に歿す。享年五十七。〔法名〕白譽單然直道大德 〔墓所〕駒込寺町千年山榮松院 〔閲歷〕元祿の初め江戶へ出で、俳優久松多四郎に入門して小四郎と稱し、のち本姓を名乘つて松本小四郎といつたといふ。初め若衆方で、元祿七年新發見の評判記には「ほノ上中」の位附に置かれたが、やがて上文字の位に進められた。同十二年夏若立役に轉じ、荒事、死靈の輕業等に好評を得たが、更に敵役に扮してから、正德三年立役の上上吉に昇せられた。爾後「今の世の萬能丸」などと持て囃され、享保元年幸四郎と改名し、二代市川團十郎と相拮抗し、當時に於ける名優の一人に數へられた。小兵だが、藝大場で、荒事と實事とを得意として愁嘆事にすぐれ、且つ武道をも能くした。

【二代】四代市川團十郎（市川團十郎參照）。

【三代】五代市川團十郎（同上）。

【四代】〔初名〕瀨川金吾・瀨川錦治・市川武十郎・市川染五郎・市川高麗藏。後、男女川京十郎 〔俳名〕錦考・錦江 〔家號〕高麗屋 〔生歿〕享和二年六月二十七日江戶に於て歿す。享年六十六。〔法名〕旋譽錦江卿山 〔墓所〕本所押上大雲寺 〔閲歷〕初め初代瀨川菊之丞の門下で、延享元年冬江戶中村座へ色子として出で、後、若衆方となり、同七年四代市川團十郎の門に轉じ、和事と所作事で次第に名を揚げ、天明末より立役の雄鎭として重きをおかれ、寬政六年極上上吉に昇せられ、享和元年冬幸四郎の名をその子高麗藏に讓り、自ら男女川京十郎といつた。容姿と品位と口跡とにすぐれ、且つ愛嬌に富み、時代と世話を兼ね、和事と實事とを本領としたが、男達・相撲等にも適し、また所作事にも巧みだつた。壯時は色立役を最も得意としたが、晩年には實惡にも成功した。

【五代】〔初名〕市川純藏・市川高麗藏〔俳名〕金升・錦升〔家號〕高麗屋〔生歿〕天保九年（二四九八）五月十日に歿す。享年七十五。〔法名〕猛譽勇山寛罔〔墓所〕四代に同じ。〔閲歷〕四代の實子、明和七年正月中村座で「春寶東人形」（長唄）に傀儡師人形を勤めたのが初舞臺。安永元年冬同座で高麗藏を繼ぎ、同七年冬（この時五代團十郎の養子分となる）、子役から若衆方となり、天明三年冬立役に轉じ、漸次昇進して享和元年五代を襲名、名實共に一代を壓し、文政十年眞極上上吉となり、天保五年古今無類の位に置かれ、三ケ津隨一と稱せられた。鼻高く、眼つきの鋭くして凄みあるを特色としたので、俗に「鼻高の幸四郎」と呼ぶ。初め父と同じく和事を本領としたが、後に實惡を得意とした。時代物と世話とを兼ね、殊に世話物にも妙を得、寫實の新演出法を創始して劇壇に寄與した。

【六代】〔初名〕市川高麗藏〔俳名〕錦子・錦升〔家號〕高麗屋〔生歿〕嘉永二年（二五〇九）十一月三日歿す。享年三十九（一說三十七）。〔法名〕寛譽芳山哲雄〔墓所〕四代と同じ。〔閲歷〕五代の子。文化十一年十一月市村座の「世界花菅原傳授」に、傀儡師でくろく六藏に扮したのが初舞臺。天保三年河原崎座「忠臣藏」の石堂と定九郎とが出世役となり、同十四年中村座で對面の五郎・仁木彈正等を勤めて「親に劣らぬ大達者」といはれ、弘化元年三月同座で六代を相續。同三年十一月河原崎座で、俳名松本錦升を藝名に改め、嘉永元年白大上上吉に昇つた。口跡に優れ、父を祖述した。父よりも上手の質だつたが、ただ德なき故に、その名を高うするに至らなかつたと云ふ。

【七代】〔本名〕藤間勘右衞門（初め豐吉、また金太郎）〔初名〕市川金太郎・市川染五郎・市川高麗藏〔別名〕藤間勘齋（舞踊藤間流別派家元）〔俳名〕錦升・琴松〔家號〕高麗屋〔生年・閲歷〕明治三年五月十二日伊勢に生る。幼時藤間勘翁（二代勘右衞門）の養子となり、後、九代市川團十郎の門に入り、明治十四年十月東京春木座の「近江源氏先陣館」に高綱の一子小四郎を勤めたのが初舞臺。同三十六年五月高麗藏を襲名、「碁盤忠信」を勤む。同四十四年十一月帝國劇場で七代を襲名、扮裝に巧みで風格・容貌、當代市川流荒事の隨一と稱せられ、實事・實惡・所作事をも能くす。當り役に、「勸進帳」の辨慶・大森彦七・矢の根・出世景淸・意休・助六・幡隨長兵衞・暫・高時・毛剃九右衞門・名和長年・二人袴・素袍落・關の扉（關兵衞）・戻駕（次郎作）・紅葉狩等がある。

【參考】劇代集（二代櫻田左交）○歌舞伎叢書（佐々醒雪）○松本幸四郎の代々（秋葉芳美）（しがらみ二ノ一二）○近世日本演劇史（伊原敏郎）○俳優系譜（關根只誠）（歌舞伎研究二十三輯）〔秋葉〕

松本治太夫（まつもとぢだいふ）「山本角太夫」を見よ。

松山鏡（まつやまかがみ）昔話【解說】現在我が國の昔話の中では、これ一つだけが頗る特異なる經路を取つて、變化して來たやうに思はれる。越後の松の山家といふ僻村に生れた女が、鏡が影を映すものだといふことに全然無知であつて、その中の姿を亡き母と信じて慕ひかしづいたといふ話などは、他に類型を求めると、笑話以外には一つもなく、これも亦曾てはさういふ中に於て珍重せられてゐたものが、何かの機緣に於てもう一度、眞面目な話の方へ引戻されたものらしい。中世の說話業者等は、自身も旅人でありながら、あぶない冒險をした。即ち交通の最も少なさうに思はれる奥在所を笑ひ草にして幾つかのおろか村話といふものを假作したのであつた。信州の秋山話や遠山話の如く、諸國には大抵一二箇所づつの、無知を以て著名なる村が設けられてゐて、そこに全日本共通の「ちやうづをまはせ」だの、「のうせんかつらの皮」だのといふ滑稽談を持つて來て押付けたのは彼等の所爲であつた。似た例としては蠟燭を煮て食つたとか、かずのこを食ふのに藪を借りに來たとか、さては屛風をおさへてゐたとか、蚊帳を逆さに吊つて飛び込んだといふやうな、如何にも有りふれた事物を全く知らなかつたといふことを以て、凡人大衆を哄笑させてゐた名殘が、今だに落語家どもの間には幾分かは傳はつてゐる。勿論その土地の人々が聞き知つたならば、苦情を言ふべき失禮な噂ばかりで、それをただ彼等の居合はせないのをよい事にして、いつ迄も話し合つてゐたのであつた。ところが松の山家は山中とは言ひながら、隣國への通路でもあり、又溫泉があつて諸方の人の入り集ふ土地でもあつた。かういふ笑話の舞臺としては、似つかはしくなかつた。それがこの鏡を知らなかつたといふ一話だけ、夙に變形しなければならなかつた事情かと思ふ。だからこれと同系の話には、今でも噺し家のよく使ふ比丘尼の仲裁、「もう髮を剃つてゐるから宥して遣れ」と言つたといふ類の形が、依然として行はれてゐるのである。多くの說話は、元はただ一部分の輕い可笑味を含んでゐたのが、聽衆の興味に引かれて次第にその點を誇張し、後には慾深爺の失敗や、愚者の眞似そこなひだけを分離させて、現在ある笑話は成長して來たのである。笑話や大話は變化の終局で、それが再び末めでたしの本格的說話に復する事はないものとしてある。ところが、松山鏡ばかりは孝女の立身譚であり、後更に幾多の潤飾を加へられて、今ではこれを御伽話の一つに算へることすらも無理なやうになつてしまひ、どうしてその主人公に鏡を知らなかつたといふが如き愚かな逸話を携へさせたかの動機が不明になつた。さうして土地の人々は、却つて事實そのやうな事が昔はあつたかの如く考へるに至つた。これは可なり奇異なる昔話の傳說化の例であり、又記錄文藝が後代の口承文藝の上に及ぼした一つの反射作用の好い見本である。これとやゝ似寄つたもの、世界的なシンドレラ說話が、日本に入つて來てから物哀れなる繼子話、又はお銀小銀のやうな姉妹の愛情譚を展開したことなどであらうが、双方共に座頭や歌比丘尼などの、旅の說話業者の介在に基づくものと私などは考へてゐる。〔柳田（國）〕

松山鏡（まつやまかがみ）「繼子物の謠曲」を見よ。

松山天狗（まつやまてんぐ）「西行物の謠曲」を見よ。

松浦小夜姫（まつらさよひめ）「人柱」を見よ。

松浦佐用媛石魂錄（まつらさよひめせきこんろく）讀本　十卷十五册【作者】曲亭馬琴【畫工】一柳齋豐廣（前集）・柳川重信（後集）【名稱】石に化した松浦佐用比賣の傳說を題材にしてゐるので、かく名づけたのであるが、又別に作中の義男節婦を、霜に痛められてもなほ屈せぬ菊の操に譬へて「唐逢大和言葉」ともいふ。作者は初めこれを本名としてゐたが、出版に際して題材より得た名を取つた。【刊行】文化五年（前集）・文政十一年（後集）。【諸本】前集は江戶雙鶴堂の刊行に係るが、千翁軒後集を出すに當り、雙鶴堂版をも求版して共に板行した。又明治十六年東京金玉出版社これを複刊し、又

曲亭馬琴叢書（銀花堂）・名著文庫（富山房）・繪本稗史小說（博文館）に收められてゐる。【題材】松浦佐用比賣の名は、早く「萬葉集」卷五山上憶良の歌に出で、「和歌童蒙抄」所引の「肥前國風土記」、謠曲「松浦鏡」にも見えてゐるが、この佐用比賣傳說が本篇の根本の構成要素である。この傳說に「十訓抄」卷中第六、「古今著聞集」卷五和歌第六の條に見える領巾振山傳說、及び「幽明錄」、「古今著聞集」卷五、「曾我物語」

聟となつて名を瀨川釆女吉次と改め、同家中の博多彌四郎の女秋布と婚したが、吉次・秋布の文才を妬んだ鼠川嘉二郎・長城野兵太等は、これを讒したが、却つてその奸計を看破られて追放された。折しも太宰府の守護平經高謀叛の報至り、吉次は秋田實政に從つて出征した。秋布は夫の身を案じて日々衰へるので、彌四郎は僕蓑七に秋布の書信を持たせて西下させたが、嘉二郎等に妨げられ、書信は吉次に

經高、仇嘉二郎が乘り込んでゐた。嘉二郎は兵庫で得た名刀を賣らうとし、吉次等の身に試さうとするが、却つて秋布に討たれ、經高も亦吉次に斬られた。なほ彼等の後を追うて來た糸萩は、船中に囚へられてゐた浦二郎にめでたく廻り合つた。歌二郎とは即ち吉次等を護る龍神の化身であつた。【解說】前集と後集とが二十一年を隔てて出版されてゐる。即ち前集は多く短篇を作つて

本書にあふけれど、「色葉集」には見えない。文體詞遣等から云つても鎌倉初期であらうと云つてゐる。又藤岡博士は、用語や故實の貞觀まで遡り得ない實例を擧げられた。「無名草子」に「むげに此頃出で來るもの數多見えしこそなか〳〵古きものよりは詞づかひ有樣などいみじげなるも侍るめれど何ねざめ、狹衣、濱松ばかりなるこそえ見侍らめ」と云ひ、次いで鎌倉時代の物語を批評し始め、「松浦宮」に及

五代の子。文化十一年十一月市村座の「世界花菅原傳授」に、傀儡師でくろく六藏に扮したのが初舞臺。天保三年河原崎座「忠臣藏」の石堂と定九郎とが出世役となり、同十四年中村座で對面の五郎・仁木彈正等を勤めて「親に劣らぬ大達者」といはれ、弘化元年三月同座で六代を相續。同三年十一月河原崎座で、俳名松本錦升を藝名に改め、嘉永元年白大上上吉に昇つた。口跡に優（すぐ）れ、父を祖述した。父よりも上手の質だつたが、ただ德なき故に、その名を高うするに至らなかつたと云ふ。【七代】〔本名〕藤間勘右衞門（初め豐吉、また金

國の昔話の中では、これ一つだけが頗る特異なる經路を取つて、變化して來たやうに思はれる。越後の松の山家といふ僻村に生れた女が、鏡が影を映すものだといふことに全然無知であつて、その中の姿を亡き母と信じて慕ひかしづいたといふ話などは、他に類型を求めると、笑話以外には一つもなく、これも亦曾てはさういふ中に於て珍重せられてゐたものが、何かの機緣に於てもう一度、眞面目な話の方へ引戻されたものらしい。中世の説話業者等は、自身も旅人でありながら、あぶない冒險をした。即ち交通の最も少なさうに思

れがこの鏡を知らなかつたといふ一話だけ、夙に變形しなければならなかつた事情かと思ふ。だからこれと同系の話には、今でも嘶し家のよく使ふ比丘尼の仲裁、「もう髮を剃つてゐるから宥して遣れ」と言つたといふ類の形が、依然として行はれてゐるのである。多くの説話は、元はただ一部分の輕い可笑味を含んでゐたのが、聽衆の興味に引かれて次第にその點を誇張し、後には慾深爺の失敗や、愚者の眞似そこなひだけを分離させて、現在ある笑話は成長して來たのである。笑話や大話は變化の終局で、それが再び末めでたしの本

本 十卷十五册【作者】曲亭馬琴【畫工】一柳齋豐廣（前集）・柳川重信（後集）【名稱】石に化した松浦佐用比賣の傳説を題材にしてゐるので、かく名づけたのであるが、又別に作中の義男節婦を、霜に痛められてもなほ屈せぬ菊の操に譬へて「唐逢大和言葉（からよもぎやまとことば）」ともいふ。作者は初めこれを本名としてゐたが、出版に際して題材より得た名を取つた。【刊行】文化五年（前集）・文政十一年（後集）。【諸本】前集は江戸雙鶴堂の刊行に係るが、千翁軒後集を出すに當り、雙鶴堂版をも求版して共に板行した。明治十六年東京金玉出版社これを複刊し、又

曲亭馬琴叢書（銀花堂）・名著文庫（冨山房）・繪本稗史小説（博文館）に收められてゐる。【題材】松浦佐用比賣の名は、早く「萬葉集」卷五山上憶良の歌に出で、「和歌童蒙抄」所引の「肥前國風土記」、謠曲「松浦鏡」にも見えてゐるが、この佐用比賣傳説が本篇の根本の構成要素である。この傳説に「十訓抄」卷中第六、「古今著聞集」卷五和歌第六の條に見える領巾振山傳説、及び「幽明錄」、「古今著聞集」卷五、「曾我物語」卷四等にある望夫石の説話が伴つてゐる。馬琴も序に「領巾麾山考」と題してこの傳説に關する考證をしてゐるが、これ等の傳説を大體の骨子として潤色し、次の傳説をも參酌したらしい。即ち文祿年間、豐臣秀吉征韓の砌、肥前名護屋の行營に同國の士瀨川采女といふ者があつた。その妻菊は孤閨に悶え焦れて、遂に夫瞻望の情を備さに書いて小函に封じ、便船に託したが、偶々逆風のために難船して博多に漂着し、行營に送られて秀吉に知らるゝに至つた。秀吉その情を憐んで龍造寺政家に命じて采女を歸國せしめたといふ。なほ「蘭曲松浦物狂」に、松浦の住人某が讒者のために寃罪を蒙り、都に上つた後音信のないのに悲しみ焦れる妻子二人が、松浦の濱邊で人買ひにたばかられて便船するといふ話なども、本篇構成の上に與つて力があつたであらう。又その人物の上に、支那明代の小説「平山冷燕」の影響が極めて著しいものがある。

【梗概】〔前編〕肥前松浦郡の浪士瀨川健三道孝は、子なきを憂へて鏡神宮に祈り、領巾麾山に美女玉島を得てこれを妾とし、松太郎・浦二郎の雙子を生んだ。やがて執權北條時宗の召に應じて、玉島と浦二郎を殘し、妻及び松太郎を運れて鎌倉に上つた。松太郎は時宗の近習となつて名を瀨川采女吉次と改め、同家中の博多彌四郎の女秋布（あきしく）と婚したが、吉次・秋布の文才を妬んだ鼠川嘉二郎・長城野兵太等は、これを讒したが、却つてその奸計を看破られて追放された。折しも太宰府の守護平經高謀叛の報至り、吉次は秋田實政に從つて出征した。秋布は夫の身を案じて日々衰へるので、彌四郎は僕蓑七に秋布の書信を持たせて西下させたが、嘉二郎等に妨げられ、書信は吉次に渡らずに紛失する。偶々時宗は江の島辨財天に詣で、七里ヶ濱に漂着せる秋布の書簡を得、その情の切なるを憐んで吉次を召還することとなつた。一方吉次は經高の軍師牛淵清繩を追跡して、圖らずも玉島・浦二郎に會つた。玉島は清繩の實姉で、清繩を匿まつてゐたが、義理にからまつて自害し、清繩も運命を知つて吉次に討たれた。〔後編〕吉次は鎌倉からの命により單身歸國の途次、動（ゆるぎ）の磯に於て嘉二郎・兵太に襲はれ、重傷を負うて浪に沒はれた。偶々博多彌四郎は嘉二郎等の奸計に落ちて時宗に斬られたので、秋布は意を決して僕俊平を連れて仇討の途に上つた。浪華にて圖らず蓑七に廻り合ひ、嘉二郎が伊萬里に在る事を聞き、急ぎ赴きて誤つて根塚若二郎なる者に斬り込むが、偶々蓑七が吉次と共に虚無僧に扮して入り來り、嘗て動の磯で浪に沒はれたのは、吉次の身代りとなつて危難を救つた弟浦二郎であることが分る。こゝに一同力を合せて敵を探すこととなつたが、浦二郎と許嫁の間柄であつた若二郎の一女糸萩は、今吉次を見て浦二郎と思ひ違へ、怨んで秋布を殺さうとするので、吉次等はこれを避けて此處を立ち退かうとし、清繩の弟子歌二郎を首領とする海賊船に囚へられた。船中には敗軍の將經高、仇嘉二郎が乘り込んでゐた。嘉二郎は兵庫で得た名刀を賣らうとし、吉次等の身に試さうとするが、却つて秋布に討たれ、經高も亦吉次に斬られた。なほ彼等の後を追うて來た糸萩は、船中に囚へられてゐた浦二郎にめでたく廻り合つた。歌二郎とは即ち吉次等を護る龍神の化身であつた。

【解説】前集と後集とが二十一年を隔てて出版されてゐる。即ち前集は多く短篇を作つてゐた時代のもの、後集は多く長篇を作つてゐた時代のもので、作者が初め、これを短篇長篇いづれにするつもりであつたかは推測されないが、長篇に馴れた手法を以て、短篇的な構成の結末に當つたことは、全體の内容にも觀られ、その創作過程にも察せられるものがある。大體に美人漂泊型の説話を骨子とし、種々の事件を介在させて單調を避け、興味を狙つてゐるのであるが、やゝ錯雜した内容にその勸懲主義を以て解釋づけて行くところは説明に過ぎ、因果關係の不自然さを來たし、作爲の跡を分明ならしめてゐる。それは後編に至つて甚だしく、前半の割合に平易に筋を運んでゐるのに對して、後半はやゝ後始末にのみ追はれて、多くの不自然さを加へた憾みがある。〔笹野〕

松浦宮物語（まつらのみやものがたり） 物語 三卷三冊【作者】未詳【名稱】主人公辨少將が渡唐する時、その母「松浦の山に宮を造りて歸り給はん迄はそなたの空を見む」と云つたのによる。【成立】一般に、貞觀三年四月十八日成立の奥書があるが、早く高田與清は、文中「隱れ蓑のためし」の語があるから、「隱れ蓑物語」以後の成立であり、貞觀年中の作とは云へないとし、黑川春村は「風葉集」の歌（十八首）は全部本書にあふけれど、「色葉集」には見えない。文體詞遣等から云つても鎌倉初期であらうと云つてゐる。又藤岡博士は、用語や故實の貞觀まで遡り得ない實例を擧げられた。「無名草子」に「むげに此頃出で來るもの數多見えしこそなか〳〵古きものよりは詞づかひ有樣などいみじげなるも侍るめれど尙ねざめ、狹衣、濱松ばかりなるこそ見侍らめ」と云ひ、次いで鎌倉時代の物語を批評し始め、「松浦宮」に及んでゐる。これに依つても「寢覺」「濱松」より後、「無名草子」の少し前に成立したものと考へられる。なほ文永・弘安の交成立した「塵袋」にも、この物語の名が見えてゐる。住吉明神を軍神とし、「和國はつは物の國」といひ、文中著しく漢語使用の目立つことや、現實性を喪失した構想が、「濱松中納言」と一聯の物語であることを思はせる等、少くとも現存本が鎌倉初期の作品たるを頷かせる材料は多い。ただ「近古小説解題」のみは、「宇津保物語」（別項）に類似した構想から、一部分は平安朝のものであり、「隱れ蓑」の如き加筆かも知れないと疑つてゐる。【諸本】異本と稱すべき程のものもなく、書寫年代も近世のもののみである。内閣文庫及び無窮會の藏本は和學講談所本の寫本で、後花園院親翰本を寫したもの、伴直方もこの種のものを所持したらしい（物語書目備考）。なほ宮内省圖書寮・前田侯爵家・靜嘉堂文庫・松井簡治氏・三手文庫・京大國文研究室等に各一本を藏し、活版本には續群書類從・國文大觀・日本文學大系本等がある。

【梗概】昔、藤原の宮の御時、正三位大納言兼中衞大將橘冬明と申す方があつた。その方と明日香の女王との間に生れた一人の男君、みめ美しく心秀れ、十六の時、既に式部少輔右

少辨中務少將を兼任し、從五位上であつた。若者らしい浮いた噂もなく、眞面目に學問してゐるやうに見える。が、少將の心の内には、ただ一つ人やりならぬ思ひがあつた。幼などちのかんなびの女王、后腹の美しい姫君に向けられた戀心がこれである。或る九月菊の宴の後、機會はめぐつて二人は相寄り契を結び得たが、思ひは愈々增すばかりである。再會を思ふ内に女王は入內される事になり、剩へ少將は明年の遣唐副使に任命される。遣唐大使は安倍のをきまろである。いよ〳〵出發の時、女王は名殘惜しさの文を送り、母君は松浦の山に宮を造り、少將の歸るまで唐の空を眺め暮らさうと云はれる。父大將もそれではと太宰府まで送られる。航海は案外平穩で、七日目には無事唐に着いた。萬事に秀れた少將は、忽ち帝の寵を得て目をかけられる事、お側の者の諫めるばかりである。が、國に殘した人々を思ふ少將の心は寂しかつた。或る夜秋草の中をさまよふと、高樓に妙なる琴の音がする。八十許の翁が氣高く彈きすましてゐるのを、曉まで立ちつくして聞いた少將は、翁と問答の末、「日本の君が唐へ來たのは外でもない。此の琴を習ふ爲である。華陽公主といふ方が、八九月の頃、しやう山で琴をひくから、それに習ひ給へ」と敎へられ、翁から琴を授かる。翁の敎へのまゝに行くと、玉の如き女が琴を彈いてゐた。亂れ勝ちの心を念じて遂に祕曲を授かるが、切々たる思ひは止まず、十月三日を約して別れる。折しも帝は病に惱まれ、辨を呼んで「自分の死後必ず國は亂れる。汝は恐れず太子に從へ」と約する。さて約束の期日、心ときめきながら、五鳳樓の下に到り、にほやかな姬と契を結んだ。姬は形見に水晶の玉を與へ、國へ歸つても忘れないならば、日本の初瀨寺に玉を携へて三七日の法を行ひ給へ。再會出來ようと云ふ。姬は琴を天外に飛び去らせ、自らも露の如く失せる。人々の悲しみの内に帝も崩御され、豫言の如く國は亂れ、弟の燕王は太子の幼弱に乘じて攻め寄せる。太子・母后・少將等遁れ遁れて蜀山に向ふが、道は遠く追擊は急である。少將は死を覺悟して逆襲し、敵の猛將宇文會以下を神の加護に依つて一刀の下に斬り捨てた。折しも忠臣憲德の率ゐる三千の援兵と合し、再び神將の援護で都に燕王を破る。さて天下は再び太平となり、少將は頻りに歸國を思ふが、急には思ひ立てない。年改り月の美しい或る夜、母后と目近に會ひ、お互の心は次第に相寄るのである。次の日の夕暮、あくがれ出ると、簫を調べる女がゐる。なつかしげに打靡く女と不思議な契を結び、その後も度々この女に會ふが誰ともわからない。秋いよ〳〵歸國の日は迫る。母后は或る夜、辨を呼んで祕密を明かし、「宇文會は阿修羅、私は第二の天の天衆、そなたは天童であつて、二人は阿修羅を懲すため、天から下されたのである。人の世に生れたばかりに亂り心も起つた」と、不思議な女が母后であつた事をも知らせ、形見に鏡を與へる。辨は無事に歸朝し、みかどは大に喜ばれるが、もどかしく初瀨に參つて三七日の法を行ふと、果して山の峰に琴の音が聞える。再會の喜びに、はゞかる所なく、華陽公主と琴を合せる。幼なじみのかんなびのみこは、これをねたましく思はれる程である。又母后から貰つた鏡を見ると、今迄の生活がありありと見える。さて、かんなびのみこにあふが、その姿は唐で思ひそめた人にどことなく似てゐる。思ひかへして引寄せるが、何となく打とけない樣子、あゝ自分は何といふ悲しい運命を與へられた身であらうかと、再び思ひは亂れるのであつた。（以下「このおく本くちらせてはなれおちにけり。」とあり、未完殘缺である）。

【構想】文體も、構想も「宇津保物語」（別項）を摸してゐる。その神仙的・傳奇的な點では又「濱松中納言」（別項）に類するものがある。歌も、形式的にのみ萬葉ぶりであるのによつて、この物語の後世のものなるを暗示する。併し一體この物語は殘缺であり、成立も明瞭とは云へないが、焦點のはつきりしない所がある。前半、少將の父母の心境にかなり立ち入つてゐるのに、後半では全く忘れてしまひ、遣唐大使の歸朝にも殆ど觸れてゐない。書名の松浦の宮が本書の要件とあはないし、「風葉集」に辨少將の名を氏忠としてゐるが、本書には名が見えない。その他現存本には、前後幾多の破綻があり、從つて構想上失敗の作といはねばならない。神仙的な部分に著しく力を用ひてゐるが、その描寫は如何にも單純である。初瀨觀音・住吉明神を取入れても、殊更に利生を說かず、主人公も他の人物も、鎌倉期一般のものの如く、じめ〳〵した所が少い。而もかゝる著しい破綻があり、殘缺本でもある事から、或は現存本は鎌倉初期の成立であるが、それは既存原本の殘缺に、後人が手を加へたものではないかとも考へられる。すると、「近古小說解題」の加筆說 も、一應反省の要を生ずるのであるが、その加筆は單なる增補に止まらず、原本の文章に對しても、相當の書き改めを行つたものと考へなければならない。

【參考】松浦宮物語考 高田與淸（德島縣光圖書館藏）○古物語類字鈔 黑川春村 ○近古小說解題 平出鏗二郎 ○鎌倉室町時代文學史 藤岡作太郎 ○鎌倉時代の小說 野村八良（岩波講座日本文學）○日本文學書目解說 山岸德平（同上）　〔永積〕

窓村武（まどのむらたけ） 狂歌師 【本名】多田敏包。通稱千次郎 【別號】青峨堂。後、二世芬陀利華庵 【生歿】寛保三年生れ、文政七年（二四八四）十一月二十二日歿す。享年八十二 【墓所】青山北町智學院 【閱歷】江戸青山久保町に住んで八百屋を業としてゐたが、性狂歌を好み、朱樂菅江・節松嫁々（各別項）の門に入つて勉强し、菅江の歿後その別號の芬陀利華庵を襲いで菅江側の判者となつた。青山に住む某侯村武の狂歌に堪能なるを聞き傳へ、扶持を給して狂歌の指南役に召し抱へたので、昨日まで天秤棒を肩にした八百屋が、急に大小を橫たへてその邸に出仕したといふ一奇談もある。「狂歌三十六歌仙」「狂歌花のしをり」等がある。　〔野崎〕

眞名（まな） 「漢字」を見よ。

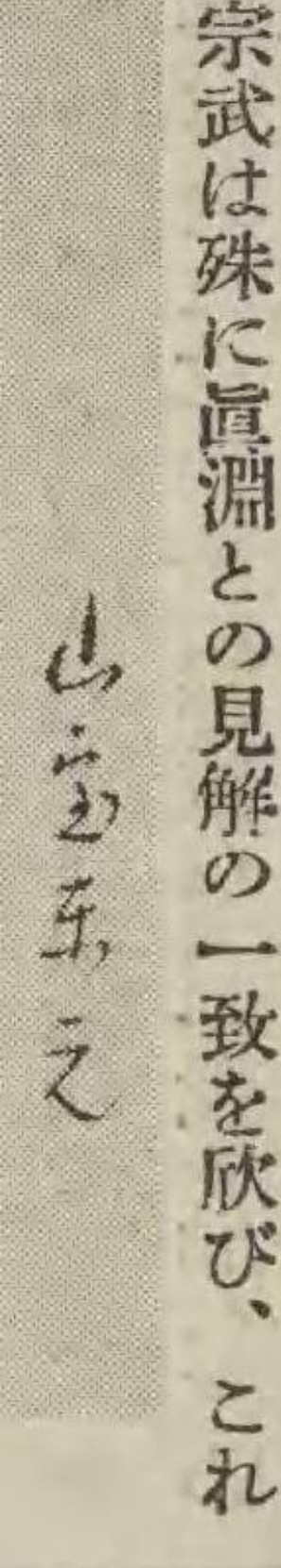
眞淵（まぶち） 國學者・歌人 【姓名】岡部氏。本姓賀茂。名は春栖（はすみ）、又政躬、後政藤。更に眞淵。通稱莊助、又は參四（さうし）、後衞士（ゑじ）。【號】縣居 【生歿】元祿十年三月四日生れ、明和六年（二四二九）十月三十日歿す。享年七十三。【法名】玄珠院眞淵義龍居士 【墓所】東京市品川區品川東海寺 【家系】賀茂氏は八咫烏となつて神武天皇を導き奉つたといふ鴨武津身命から出てゐる。遠祖賀茂神主成助は歌人で、「勅撰作者部類」によれば、その歌は「後拾遺」「金葉」「詞花」「千載」「新古今」「玉葉」「新拾遺」に收められてゐる。始祖師重の女筑前局は女官で、遠江國敷智郡濱松庄岡部鄉に封戶五百戶を賜はつたので、そこに私かに賀茂の新宮を

祀り、亡き後は神領として永く一族のものに
領せしめられんことを請ひ、弟道久が岡部の
代官たることを許された。文永十一年に道久
はこれを弟師繼（改名師朝）に讓つた。孫定朝
は京から岡部鄉に移り、後、歸國して卒した
が、その子常久は岡部に生れ、そこに土着し
て氏を岡部と稱し、家紋は井筒に右三巴を用

片岡爾宜 顯一流之祖 始祖師重―五男 師繼―二男 朝久―定朗―常久―政常―二男 定詮―

に濱松本陣梅谷甚三郎の聟養子となり、一子
（後に市左衞門）を擧げた。この間に彼は太宰春
臺の門下で「國語解」を著はした渡邊蒙庵に就
いて漢學を修めた。蒙庵は古文辭學派の學者
で、老莊にも親しんでゐた。又知友には東麿
門下なる諏訪大祝杉浦信濃守國頭（くにあきら）及び五社神
主森民部少輔暉高があつた。殊に國頭は東麿
の姪眞崎を娶つてゐた關係上、東麿（春
滿）が江戸往返の途次、その家に宿泊す

歌考」が成り、延享二年（四十九歲）正月には寳
母の死に逢つて歸鄉し、「後岡部日記」がある。
翌延享三年（五十歲）には八丁堀の寓居が火災
に罹り、その秋には荷田在滿（別項）の推薦に
よつて田安宗武（別項）に仕へて國學の師とな
つた。在滿が致仕するに至つたのは、宗武と
の歌學上の意見の相違のためであつたから、
宗武は殊に眞淵との見解の一致を欣び、これ



成し、確乎たる足跡を國學史上に印した。ま
た寳曆四年（五十八歲）十一月には、宗武四十
の賀筵に列り、衣を賜はりなどして信任が厚
かつたが、寳曆十年（六十四歲）、病を以て致仕
し、養女（同族岡部孫兵衞政舍の女）の婿養子定
雄（武藏國中根修理の三男）を以て代らしめ、自
らは隱居料五人扶持を與へられた。なほこの
年、春滿二十五年祭を營んでゐる。同十三年
（六十七歲）、宗武の內命を受けて村田春鄉・春

翁と問答の末、「日本の君が唐へ來たのは外でもない。此の琴を習ふ爲である。華陽公主といふ方が、八九月の頃、しやう山で琴をひくから、それに習ひ給へ」と敎へられ、翁から琴を授かる。翁の敎へのまゝに行くと、玉の如き女が琴を彈いてゐた。亂れ勝ちの心を念じて遂に祕曲を授かるが、切々たる思ひは止まず、十月三日を約して別れる。折しも帝は病に惱まれ、辨を呼んで「自分の死後必ず國は亂れる。汝は恐れず太子に從へ」と約する。さて約束の期日、心ときめきながら、五鳳樓の下に到り、にほやかな姫と契を結んだ。姫は形見

羅を懲すため、天から下されたのである。人の世に生れたばかりに亂り心も起つた」と、不思議な女が母后であつた事をも知らせ、形見に鏡を與へる。辨は無事に歸朝し、みかどは大に喜ばれるが、もどかしく初瀨に參つて三七日の法を行ふと、果して山の峰に琴の音が聞える。再會の喜びに、はゞかる所なく、華陽公主と琴を合せる。幼なじみのかんなびのみこは、これをねたましく思はれる程である。又母后から貰つた鏡を見ると、今迄の生活があり〳〵と見える。さて、かんなびのみこにあふが、その姿は唐で思ひそめた人にどこと

初瀨觀音・住吉明神を取入れても、殊更に利生を說かず、主人公も他の人物も、鎌倉期一般のものの如く、じめ〳〵した所が少い。而もかゝる著しい破綻があり、殘缺本でもある事から、或は現存本は鎌倉初期の成立であるが、それは既存原本の殘缺に、後人が手を加へたものではないかとも考へられる。すると、「近古小說解題」の加筆說も、一應反省の要を生ずるのであるが、その加筆は單なる增補に止まらず、原本の文章に對しても、相當の書き改めを行つたものと考へなければならない。

【參考】松浦宮物語考　高田與淸（德島縣光慶圖書館

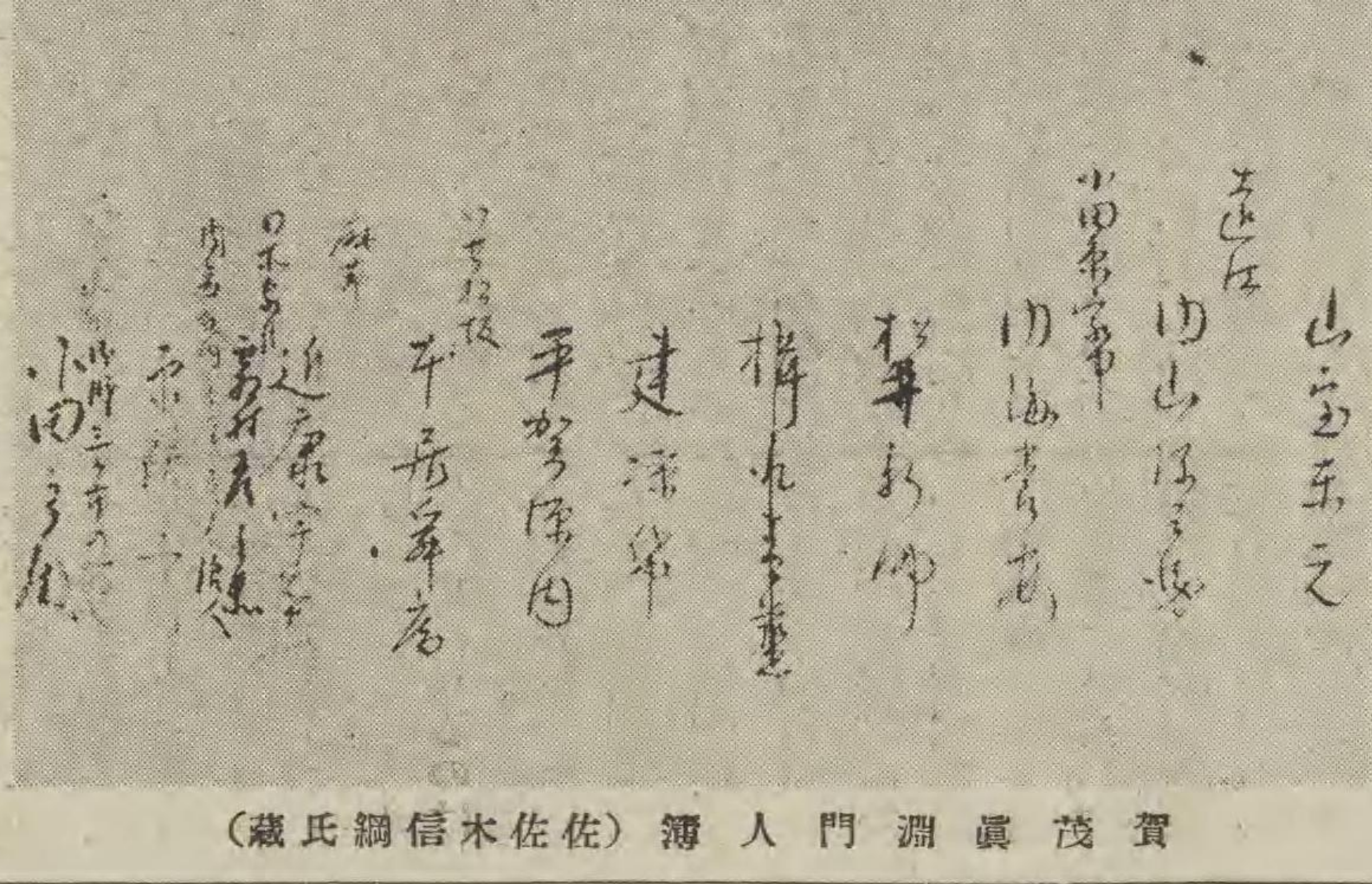
眞淵。通稱莊助、又は參四、後衞士。【號】縣居【生歿】元祿十年三月四日生れ、明和六年（二四二九）十月三十日歿す。享年七十三。【法名】玄珠院眞淵義龍居士【墓所】東京市品川區品川東海寺【家系】賀茂氏は八咫烏となつて神武天皇を導き奉つたといふ鴨武津身命から出てゐる。遠祖賀茂神主成助は歌人で、「敕撰作者部類」によれば、その歌は「後拾遺」「金葉」「詞花」「千載」「新古今」「玉葉」「新拾遺」に收められてゐる。始祖師重の女筑前局は女官で、遠江國敷智郡濱松庄岡部鄕に封戸五百戸を賜はつたので、そこに私かに賀茂の新宮を

祀り、亡き後は神領として永く一族のものに領せしめられんことを請ひ、弟道久が岡部の代官たることを許された。文永十一年に道久はこれを弟師繼（改名師朝）に讓つた。孫定朝は京から岡部鄕に移り、後、歸國して卒したが、その子常久は岡部に生れ、そこに土着して氏を岡部と稱し、家紋は井筒に右三巴を用ひた。

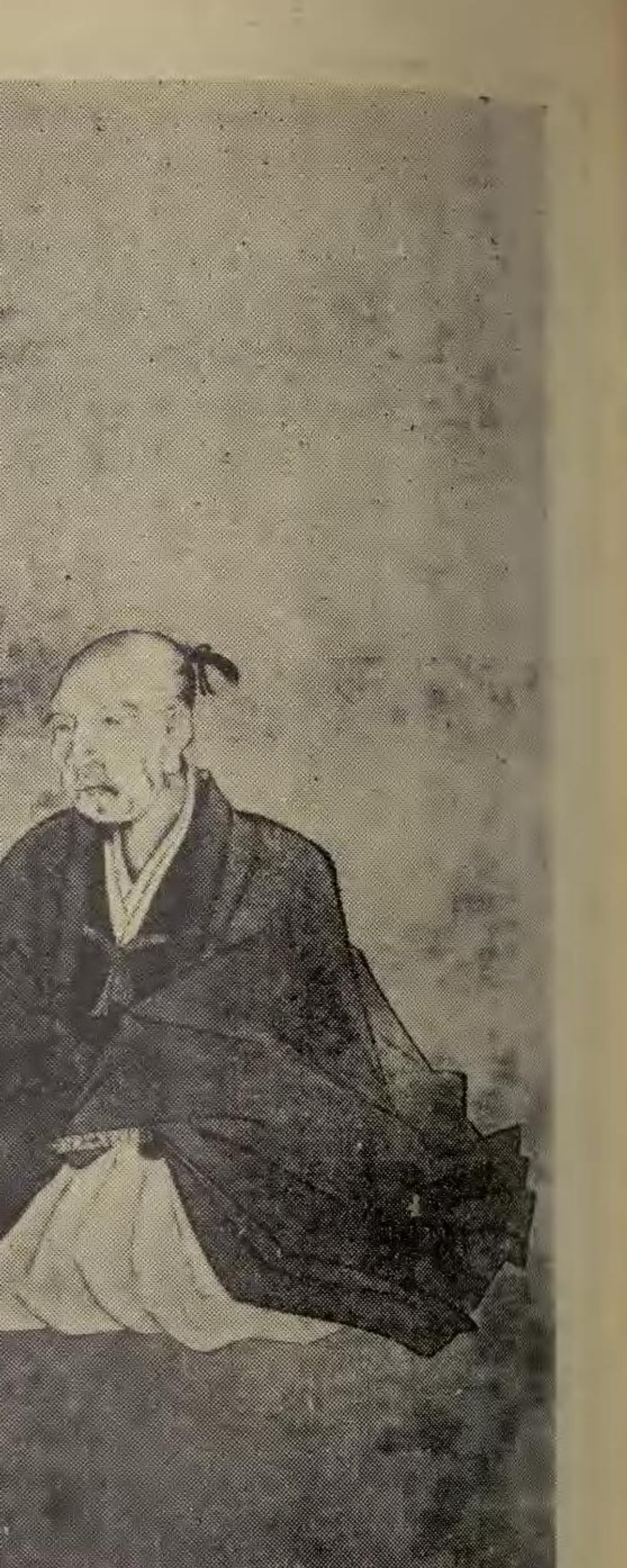
始祖 片岡爾宜 顯一流之祖 五男 再—師繼—二男 朝久—定朗—常久—政常—二男 定詮—
—政久—政定—政次—政家—
—定長（享保十七年閏五月十四日歿、七十九歲）—與三郎定信—
—治信—三之丞政勝
—女子三人—太吉政照
—眞淵—（梅谷氏ヲ繼グ）—市左衞門
養子 定雄
（岡部家譜）

常久三世の孫政久は政定を聟養子とした。政定は元藤原氏、駿河國原の一黨として家康に屬し、元龜三年十二月二十二日三方原合戰に軍功があつて恩賞に預つた。政定から政次・政家・定長を經て眞淵の父定信に至つてゐる（岡部家譜考證に據る。玉襷には異傳がある）。

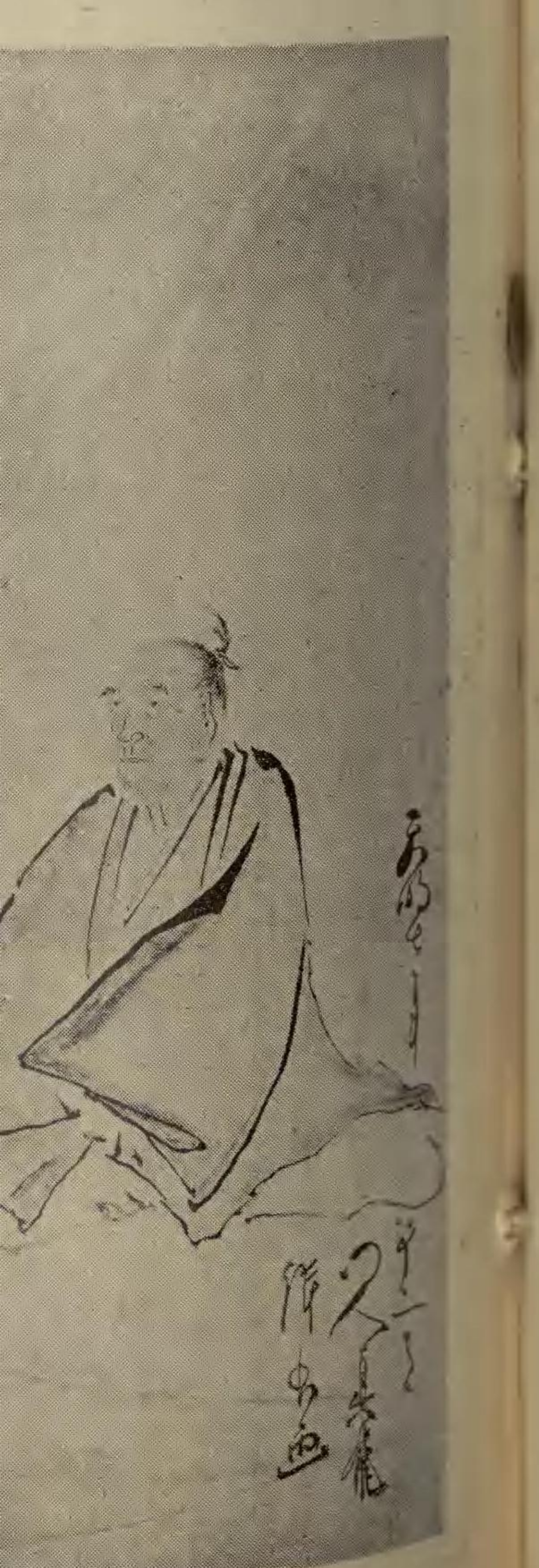
【閱歷】父は定信、母は同郡天王村竹山孫左衞門茂家の女で、兩親共に學才があつた。眞淵の生涯は、その在住地によつて第一期濱松時代（三十七歲まで）、第二期京都時代（三十七歲から四十一歲まで）、第三期江戸時代（四十二歲か七十三歲まで）に分つて考へることが出來る。〔第一期〕在鄕して專ら一般的な素養を積んだ時期であつて、この間、彼の一身上には波瀾が多かつた。最初彼は姉聟政盛の養子となつたが、やがて政盛に實子政友が生れたので養家を退き、後從兄政長の聟養子となつたが、享保九年（二十八歲）、妻の死にあつて再び養家を去り、僧たらんとして果さなかつた。享保十年、更に濱松本陣梅谷甚三郎の聟養子となり、一子（後に市左衞門）を擧げた。この間に彼は太宰春臺の門下で「國語解」を著はした渡邊蒙庵に就いて漢學を修めた。蒙庵は古文辭學派の學者で、老莊にも親しんでゐた。又知友には東麿門下なる諏訪大祝杉浦信濃守國頭及び五社神主森民部少輔暉高があつた。殊に國頭は東麿の姪眞崎を娶つてゐた關係上、東麿（春滿）が江戸往返の途次、その家に宿泊するので、眞淵が東麿を知り、これに師事する機緣となつた。かくて享保十八年（三十七歲）、年來の志望により、且つは賢妻梅谷氏の激勵によつて京に出でて、東麿の門に入ることになつた。〔第二期〕京都に遊學して春滿（別項）に師事した時期で、彼が一生の學の基礎はこの間に築かれた。當時すでに國學精神を確立してゐた春滿に從ひ學ぶこと四年、古典・古語の研究は固より、佛・儒を排して古道を復興せんとするその上代主義を體得し、元文元年師の歿後も、なほその弟暗滿（信名）に就いて硏鑽に努めたが、元文二年（四十一歲）、一旦歸鄕し、翌三年江戸に出た。〔第三期〕彼が江戸に於て國學者として一家を成した時期で、この間大川端・八丁堀・濱町に居を移してゐる。最初彼は村田春道宅に假寓し、次いで加藤枝直の近隣（北八丁堀）に招かれて住んだ。春道・枝直の外に、小野古道・楫取魚彦等の入門する者多く、服部南郭と親しく交つたのもこの頃のことであつた。江戸に出た後は梅谷の稱を止めて舊姓に復したけれども、元文五年（四十四歲）七月には歸鄕して妻子にも會ひ、九月江戸に歸つてゐる。「岡部日記」がある。寛保二年（四十六歲）には、「古今和歌集左註論」「萬葉集遠江歌考」が成り、延享二年（四十九歲）正月には賀母の死に逢つて歸鄕し、「後岡部日記」がある。翌延享三年（五十歲）には八丁堀の寓居が火災に罹り、その秋には荷田在滿（別項）の推薦によつて田安宗武（別項）に仕へて國學の師となつた。在滿が致仕するに至つたのは、宗武との歌學上の意見の相違のためであつたから、宗武は殊に眞淵との見解の一致を欣び、これを優遇した。以後十五年間、國學の指南として宗武に古學を講じ、詠歌を指導した外、夫人及び家中にも敎授し、また命を受けて「祝詞解」「古器考」等を撰進してゐる。彼の盛名を聞いて入門するもの漸く多く、古書を講じ、これを刊行するものが相次いだ。かくて寶曆七年（六十一歲）には「冠辭考」、翌八年には「萬葉考」「大和物語直解」等、順次に不朽の大著を成し、確乎たる足跡を國學史上に印した。また寶曆四年（五十八歲）十一月には、宗武四十の賀筵に列り、衣を賜はりなどして信任が厚かつたが、寶曆十年（六十四歲）、病を以て致仕し、養女（同族岡部孫兵衞政舍の女）の婿養子定雄（武藏國中根修理の三男）を以て代らしめ、自らは隱居料五人扶持を與へられた。なほこの年、春滿二十五年祭を營んでゐる。同十三年（六十七歲）、宗武の內命を受けて村田春鄕・春海を伴つて大和巡遊の旅に上り、歸途、伊勢松坂中町なる新上屋に泊して、はからずも本居宣長（別項）の來訪にあひ、「古事記」の註釋を慫慂して、こゝに宣長の「古事記傳」大成の緒を成してゐる。明和元年（六十八歲）の秋、居を濱町山伏井戸に移し、庭に野や畑の趣を作つて縣居と稱へ、古典の講義をなす傍ら、屢々門人を集めて歌會を催し、又明和二年（六十九歲）には「國意考」、同五年には「祝詞考」、同六年には「語意考」を著はし、詠歌に學究に倦むことを知らなかつたが、同年十月、七十三歲を以て歿した。門人等の遺稿を編み、傳記を著はす者相次ぎ、文化三年九月、墓前に千蔭撰文の碑を建てられた。鄕里濱松では天保十年三月、縣居靈社を賀茂新宮境內に營み、明治十七年、縣居神社と改稱した。又明治十六年二月、朝廷には眞淵の功を追賞せられて正四位を賜はり、同三十八年十一月、更に從三位に陞叙せられた。門人は江戸を中心として諸國に及び、國學の大成者本居宣長をはじめ、古典研究に於ける荒木田久老・內山眞龍、文人・歌人として盛名のあつた村田春海・加藤千蔭、語學者・故實研究者としての山岡俊明・塙保己一、その他神道家小說家として著名なものも少からず、眞淵によつて復古國學の普及進展



賀茂眞淵門人簿（佐佐木信綱氏藏）



賀茂眞淵（上田萬年



眞龍筆眞淵肖像（竹柏

したことは著しいものであつた。

【著作】 賀茂眞淵全集十二卷（內一卷目錄、國學院編輯部編）がある。〔註釋〕古事記私記一卷○古事記頭書三卷（寶曆七年八月成。內閣文庫）○古事記訓考一卷 ○日本紀訓考二卷（明和六年一月成。全集舊版第四）○古事記和歌略註一卷（全集舊版第二、新版第五）○日本紀和歌略註三卷（明和二年十二月跋。全集舊版第二、新版第五）○延喜式祝詞解五卷（延享三年成。全集舊版第二、新版第五）○祝詞考三卷（別項）○萬葉集遠江歌考（寛保二年成。全集舊新版第四）○萬葉解通釋并釋例一卷（全集舊新版第四）○萬葉考二十卷別記三卷（別項）○柿本朝臣人麿集之歌一卷（天保六年刊。全集舊版第三）○萬葉集竹取翁歌解一卷（明和三年二月成。全集舊新版第四）○萬葉新採百首三卷（嘉永四年刊。全集同上）○萬葉問目・萬葉再問・萬葉集疑條（全集舊新版第四）○神樂歌考一卷（別項）○催馬樂考一卷（別項）○神遊考一卷（別項）○風俗歌考一卷（別項）○續萬葉論二十卷（古今和歌集打聽參照）○續萬葉集祕說一卷（全集舊版第一・新版第六）○古今和歌集打聽二十卷（別項）○宇比麻奈備三卷（別項）○伊勢物語古意六卷（寛政五年刊。全集同上）○大和物語直解三卷（別項）○源氏物語新釋五十四卷（別項）○三部假名鈔言釋二卷（全集舊版第四・新版第十二）。〔論考〕古今集序表考一卷（明和二年成。全集舊版第一・新版第七）○古今集序表考別記一卷（同上。全集舊版第一・新版第七）○古今和歌集左註論一卷（寛保二年九月成）○三代集總說一卷（寶曆十二年成。全集舊版第一・新版第七）○國意考一卷（別項）○歌意考一卷（別項）○文意考一卷（延享三年成。寛政十二年刊。全集舊版第三・新版第五）○書意考一卷（全集舊版第三・新版第五）。〔語學〕語意考一卷（別項）○冠辭考十卷（別項）○久邇門致（クニツチ）考一卷（明和二年十月成。全集舊版第四・新版第十）。〔故實及び雜〕 古冠考 附 直冠考一卷（寶曆十年六月成。全集舊版第四・新版第十二）○古器考一卷（寛延二年一月成。全集同上）○かさねのいろあひ一卷（全集同上）○縣居雜錄一卷（全集同上）○縣居問答書一卷（寛延三年十月成。全集同上）○上古男女髻辨一卷（全集同上）○雜問答考一卷（寶曆九年八月成。全集同上）○龍のきみへ問ひ答へ（寶曆十年四月成。全集同上）○賀茂翁書簡集一卷（全集新版第十二）○かぶくろ一卷（全集同上）。〔歌論・歌集・紀行〕にひまなび（別項）○歌體約言跋（延享三年九月成。全集舊版第二）○國歌論臆說一卷（別項）○國歌八論餘言拾遺一卷（寛保二年成）○再奉答金吾君一卷（別項）○古風小言一卷（寛延年中成。全集新版第十二）○賀茂翁家集五卷（別項）○安賀當居歌集一卷（別項）○和歌小訓一卷（全集新版第十二）。

【業績】 歌人として成し得た創作的方面と、學者として成し遂げた學問的方面とに區分して考へることが出來る。が、何れかといへば彼の天分は前者にあつて、彼の學問的業績も著しくその詩人的性質に裏づけられたものであつた。この事は、彼の門下から村田春海・加藤千蔭を初め、田安宗武・加藤宇萬伎・伊能魚彥・小野古道・荒木田久老等の歌人の輩出してゐる事實が何よりも雄辯に物語つてゐる。春海の如き、眞淵の眞意は古道にはなくて歌道にあつたとさへ言つてゐる。歌人としての眞淵は萬葉復古を理想とし、晚年には更に記・紀歌謠にまで溯らうとした。萬葉復古を唱へたものは彼以前にもあつたけれども、彼の如く明確な意識を以てこれを主張したものは未だ存しなかつた。かくて彼は作歌上に萬葉語を復活させ、たけ高き歌を成し、復古的歌風を以て一代の歌壇を風靡し、後世に對しても深い影響を及ぼしてゐる。勿論今日からいへば、彼の歌は後に出た良寛の歌の如く、又平賀元義の歌の如く萬葉の生命を傳へ得たものとは言ひ難いにしても、歷史的には彼の萬葉復古が重大な意義を齎したものであつたことは否定出來ない。學問的方面に於ける彼の功績の主なるものは、「萬葉集」の研究であつて、「萬葉集考」（別項）はその代表的著作である。各卷各歌について制作年代を考へ、本文を校定し、精密なる語釋を施し、文學的價値を論じてゐるなど、萬葉研究上契沖に一歩を進めたものといふことが出來る。而して彼の萬葉研究の目的は、彼が諸所に言つてゐる如く、古の心・詞を知らんためであり、古の心・詞を知るのはそれによつて古代を明かにせんがためであつて、後に宣長によつて成された「古事記」研究の準備的階梯をなすものであつた。又記・紀二典の比較を試み、祝詞に於ける成語の價値に注意し、平安朝の和歌物語に關する研究に於ては、契沖・春滿を踏襲しつつも一層考究を進めて間々獨創的見解を示し、物語の價値に關する思想に於ては、宣長の物語論に先驅したものがある。併しこれ等は何れも副次的な研究で、「萬葉集」に關する研究の深さには及んでゐない。語學に關しては「語意考」（別項）を著はし、五十聯音橫韻延約通略說を述べてゐる。これは春滿の繼承で、彼の古典註釋の根柢をなすものであつた。又「冠辭考」（別項）の如きも、獨斷があるとはいへ創見に富み、枕詞研究に一時期を劃したものといふことが出來る。最後に彼の古道思想を見るに、「天地のまにまに」といひ、「高く直き」といひ、又「强ひず敎へず、見直し聞直し」といつてゐる上にも明かなやうに、彼の古代は老莊思想に影響された理想古代であり、言語・文獻によつて學問的に認識せられたものであるよりも、詩人的憧憬の對象として直觀せられたものであつて、これがやがて宣長によつて文獻學的に理解せられ、修正せられ、更に篤胤によつて神學化せられて、國學の神髓ともいふべき古道として確立せられるに至つた。かくて彼が國學發展上、學問として眞に成就し得たところは古語の研究復活にあり、その古代主義に至つては、一つの世界觀人生觀として理解さるべきではあつても、文獻學的闡明ではあり得なかつた。併し國學が古道を對象としながら單なる哲學的考察にもならず、又言語を重んじながら單なる言語研究にも終らないで、古語研究即ち古道闡明に立脚した學的體系として成立し、古語・古意に對する知的理解の根柢に、更に創作的體驗を要求し、この體驗を基礎として古代文化を認識し、古道を闡明しようとする特色ある方法論を確立するに至つた上には、彼の全業績が如何に有力な基礎をなしてゐるか。そしてこの方法論こそ近世國學をして、歐洲の文獻學に對し、又諸他の科學的研究に對して特異性を主張せしめる重要な特質である。〔以上西尾〕

【歌論・歌風】「大倭も唐も古こそ萬に宜しければ、古事を尊めれ」といふ風に、古道を以て文事百般の理想とし、作歌の目的もこの哲學的根據に依つて立てられた爲め、詠歌は單に古學追求の一つの方便に過ぎないといふやうな主客顚倒の結果を招くに至つた。作歌の主體に對して要求せられる第一の條件は、眞淵に依れば「高くすなほ」であること、即ち素樸遒勁であることである。この意味に於て、人

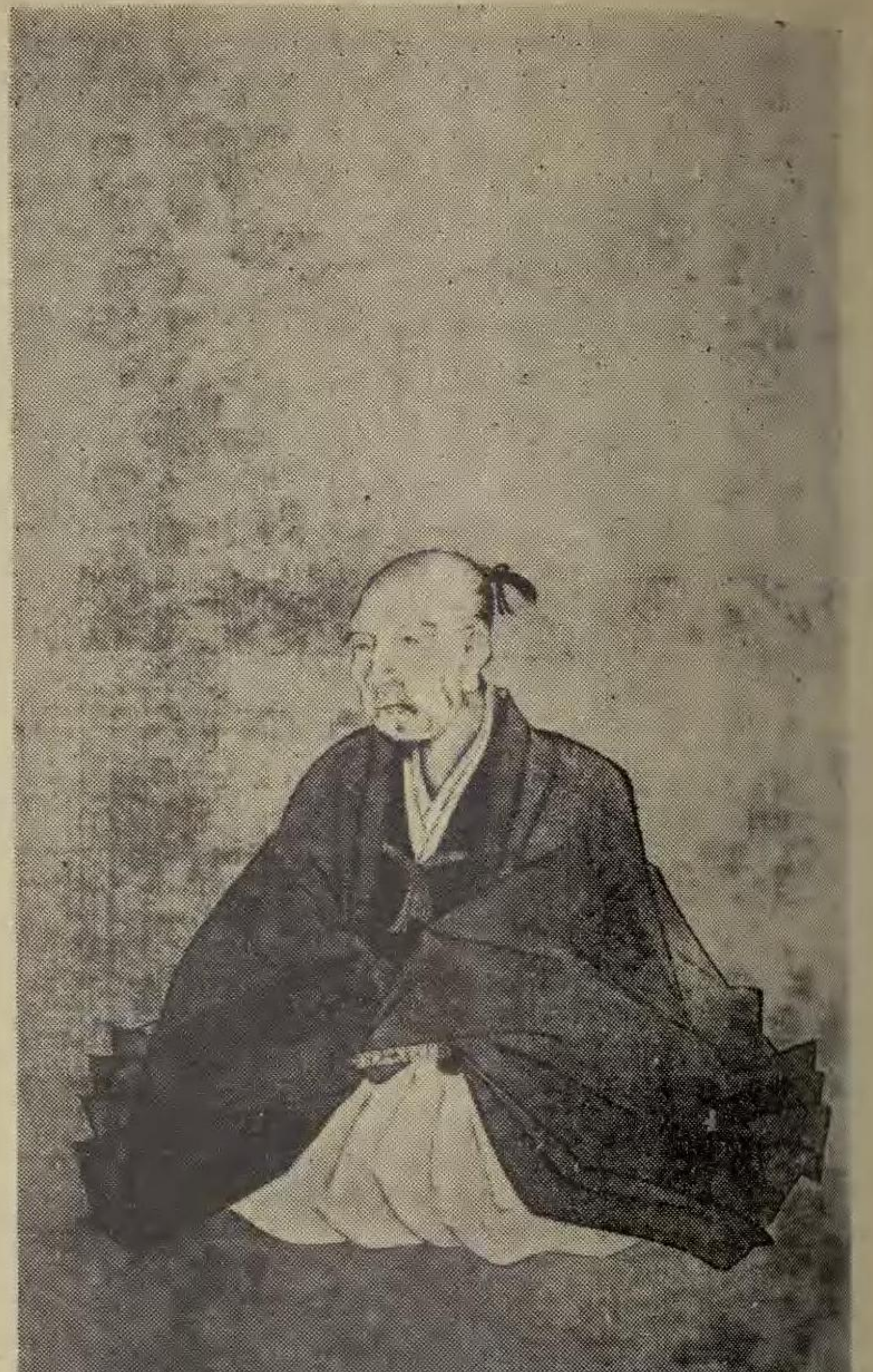
五年刊。全集同上）○大和物語直解三卷（別項）○源氏物語新釋五十四卷（別項）○三部假名鈔言釋二卷（全集舊版第四・新版第十二）。〔論考〕古今集序表考一卷（明和二年成。全集舊版第一・新版第七）○古今集序表考別記一卷（同上。全集舊版第一・新版第七）○古今和歌集左註論一卷（寛保二年九月成）○三代集總說一卷（寶曆十二年成。全集舊版第一・新版第七）○國意考一卷（別項）○歌意考一卷（別項）○文意考一卷（延享三年成。寛政十二年刊。全集舊版第三・新版第五）○書意考一卷（全集舊版第三・新版第五）。〔語學〕語意考一卷（別項）○冠辭考十卷（別項）○久邇門致考一卷（明和

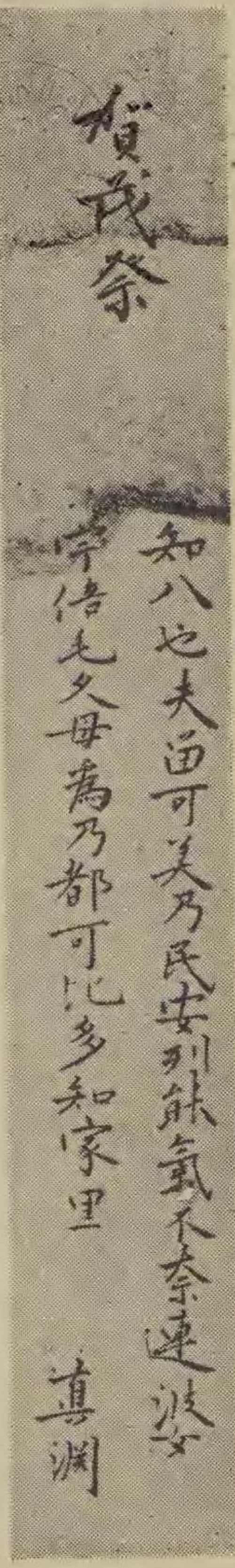
つた。この事は、彼の門下から村田春海・加藤千蔭を初め、田安宗武・加藤宇萬伎・伊能魚彥・小野古道・荒木田久老等の歌人の輩出してゐる事實が何よりも雄辯に物語つてゐる。春海の如き、眞淵の眞意は古道にはなくて歌道にあつたとさへ言つてゐる。歌人としての眞淵は萬葉復古を理想とし、晩年には更に記・紀歌謠にまで溯らうとした。萬葉復古を唱へたものは彼以前にもあつたけれども、彼の如く明確な意識を以てこれを主張したものは未だ存しなかつた。かくて彼は作歌上に萬葉語を復活させ、たけ高き歌を成し、復古的歌風を以

する思想に於ては、宣長の物語論に先驅したものがある。併しこれ等は何れも副次的な研究で、「萬葉集」に關する研究の深さには及んでゐない。語學に關しては「語意考」（別項）を著はし、五十聯音横韻延約通略說を述べてゐる。これは春滿の繼承で、彼の古典註釋の根柢をなすものであつた。又「冠辭考」（別項）の如きも、獨斷があるとはいへ創見に富み、枕詞研究に一時期を劃したものといふことが出來る。最後に彼の古道思想を見るに、「天地のまにまに」といひ、「高く直き」といひ、又「强ひず數へず、見直し聞直し」といつてゐる上

をして、歐洲の文獻學に對し、又諸他の科學的研究に對して特異性を主張せしめる重要な特質である。〔以上西尾〕

【歌論・歌風】「大倭も唐も古こそ萬に宜しければ、古事を尊めれ」といふ風に、古道を以て文事百般の理想とし、作歌の目的もこの哲學的根據に依つて立てられた爲め、詠歌は單に古學追求の一つの方便に過ぎないといふやうな主客顚倒の結果を招くに至つた。作歌の主體に對して要求せられる第一の條件は、眞淵に依れば「高くすなほ」であること、卽ち素樸遒勁であることである。この意味に於て、人

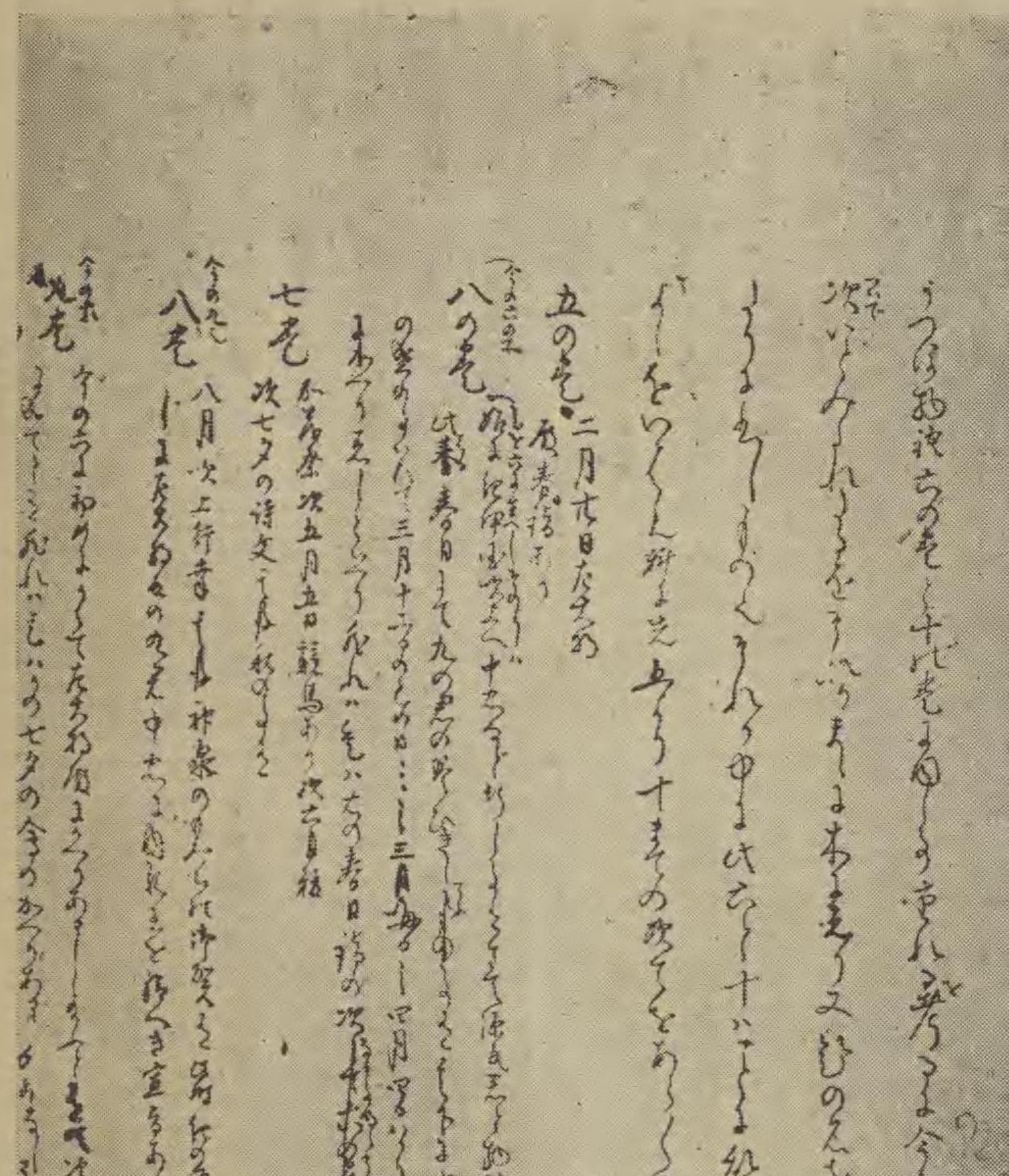

賀茂眞淵（上田萬年氏藏）

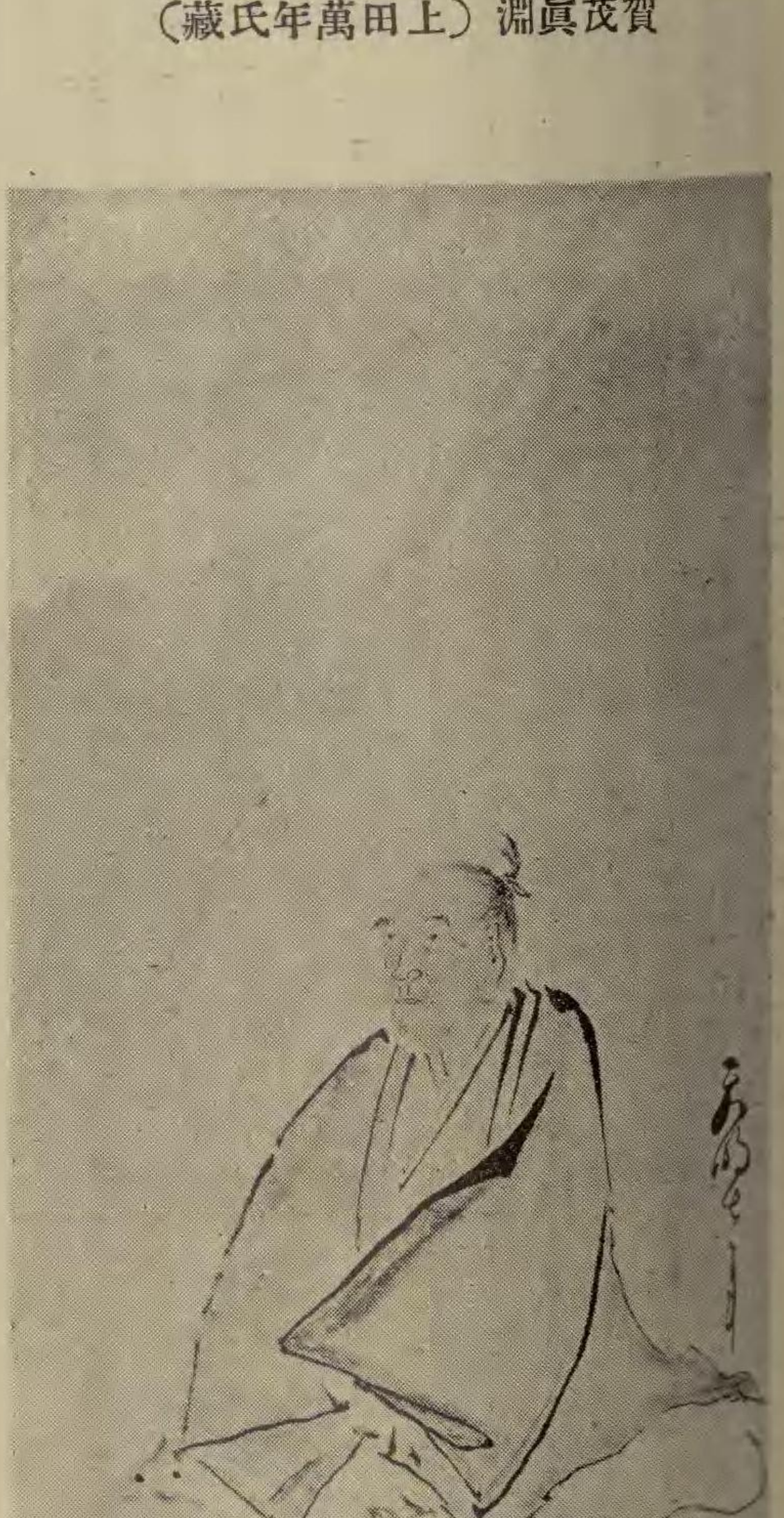

賀茂祭

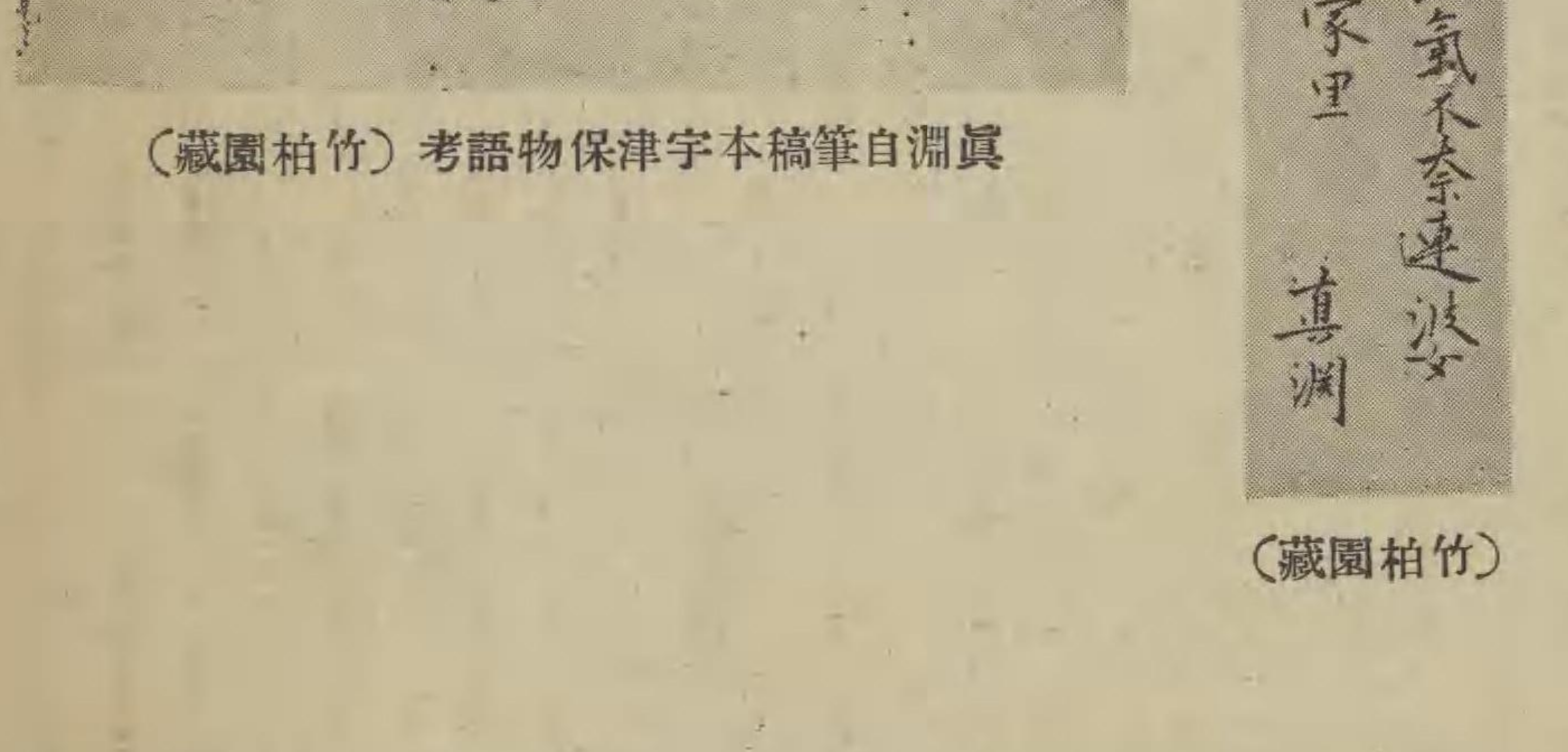
知八也夫由可美乃氏安列鉢氣不奈速婆

宇倍毛久母為乃都可比多知家里　眞淵

（竹柏園藏）


眞淵自筆稿本宇津保物語考（竹柏園藏）


眞龍筆眞淵肖像（竹柏園藏）


萬葉新採百首解自筆稿本（竹柏園藏）

僞の勝つた降れる世の姿を厭ひ、純眞自然に近い上古にあこがれを持つた。次に歌は調べを以て第一とすると說いた。「古歌は調べを專らとせり、諧ふものなればなり」といふのがその主張である。この調べとは、彼に依れば五七調を天地の調といひ、「萬葉」の歌はこれであり、「古今」は反對に七五調であると說いてゐる。この外、長歌を奬勵し、序歌をすゝめ、單調な當時の歌界に大きな刺戟を齎した。そ

百くまの荒き筥根路こえ來ればこよろぎの磯に波
のよる見ゆ

かういふ作品があるからして、眞淵の言は新しく生きて來る。而もこの古調の方面は、田安宗武の外繼ぐ者がなくて、眞淵としては恐らく不本意であつたらうと思はれる新體の作風を千蔭なり春海なり、すぐれた門人が一樣に後を追うたことは遺憾に感じたであらう。最後に注意すべきは、眞淵の長歌の秀れてゐ

淵號（心の花）○賀茂眞淵傳資料佐佐木信綱（藝文大正五ノ八）○春滿と眞淵羽倉信一郎（國語と國文學四ノ一）○賀茂眞淵略傳 文同人（文三ノ八）○賀茂縣主眞淵傳 難波津淺香（精華二十三號）○賀茂眞淵の肖像及其傳記平出鏗二郎（帝國文學二ノ一）○賀茂眞淵と萬葉集 久松潛一（斑鳩昭和四ノ一〇）○賀茂眞淵の萬葉主義に就て 大石新（國語と國文學二ノ五）○縣居翁と古文辭學羽生永明（わか竹一一ノ三・四）○贈正

で童の手に捕へられ、扼殺された友を見て無常を觀じ、邪執驕慢を飜して皆佛に歸し、魔佛一如の理を示すことを作る。各天狗によつて佛教各宗を代表させ、論難してあるが、天狗の會合といふ說話の形式は「太平記」卷二十五「宮方怨靈會二六本杉一事」、同卷二十七「雲景未來記事」等と同型で、なほ世相を寫しつつ諷刺した氣味がある。〔島津〕

【參考】蘿月菴國書漫抄○（訂正增補）考古書譜卷十

僞の勝つた降れる世の姿を厭ひ、純眞自然に近い上古にあこがれを持つた。次に歌は調べを以て第一とすると說いた。「古歌は調べを專らとせり、諧ふものなればなり」といふのがその主張である。この調べとは、彼に依れば五七調を天地の調といひ、「萬葉」の歌はこれであり、「古今」は反對に七五調であると說いてゐる。この外、長歌を奬勵し、序歌をすゝめ、單調な當時の歌界に大きな刺戟を齎した。その作風に就いては、「縣居歌集」の千蔭の序が大體を盡してゐる。卽ち「歌のさまは始と中頃と末と三つのきざみありき」といふのが、それである。荷田春滿に就いてゐた初期は、その歌風もそれに似通つて、主として姿は優艷であつた。中頃に至つて漸く萬葉風を帶びるに至つたが、一體にこの時代のものは、素樸剛健なる內容を盛るに、まだ言葉の雅びを蟬脫することが出來ず、どちらかと言へば、過渡的な作といふことが出來よう。千蔭はこれを「中つ頃よりみづからの一つの姿となりて、みやびにして調たかく、しかも雄々しきすぢを詠みいだされ」と說き明かしてゐる。この頃から次第に獨自の歌風に目ざめて來て、第三期に於て、眞淵は完全に蒼古な萬葉調となり、當時では全く追隨することの出來ぬ境へと入つたものらしい。千蔭が「いたく思ひあがりて、まうけずかざらず、誰も心及びがたきふしのみ」と言ふのがそれである。

秋の夜のほがら〳〵と天の原照る月影に雁なきわたる
こほろぎの鳴くやあがたの我が宿に月影きよし訪ふ人もがも
鳰鳥のかつしか早稻のにひしぼりくみつゝ居れば月傾きぬ
百くまの荒き筥根路こえ來れはとよろぎの磯に波のよる見ゆ

かういふ作品があるからして、眞淵の言は新しく生きて來る。而もこの古調の方面は、田安宗武の外繼ぐ者がなくて、眞淵としては恐らく不本意であつたらうと思はれる新體の作風を千蔭なり春海なり、すぐれた門人が一樣に後を追うたことは遺憾に感じたであらう。最後に注意すべきは、眞淵の長歌の秀れてゐることである。古學が復興して、眞淵の後塵を拜する者は、競つて長歌を詠んだ。千蔭・春海・宣長等、盡く同一である。然るに眞淵を除いて誰一人として價値あるものがない。江戶派の歌人等は、長歌の組織・構成をかなり分解的に研究してゐるにも拘はらず、かういふみじめな狀態におかれたことは、根本的なものが不足してゐたのではなからうか。さういふ點から見ても、眞淵は實作家として優に一個の大家であつたことが分る。〔以上窪田〕

【參考】老木の花○縣居すさみぐさ○賀茂翁遺草○かりの行きかひ○賀茂翁家集拾遺○賀茂の川水○荷田在滿家歌合○さき草○うめあはせ○縣居集言錄○縣居集補遺（全集同上）○縣居遺集○岡部家譜考證村田春海○賀茂眞淵翁家傳高田與淸○增補縣居翁年譜宮田惟助○縣居門人錄賀茂眞淵手記（以上全集所收）○近世三十六家集略傳河喜多眞彥○古學小傳淸宮秀堅○近世畸人傳伴蒿蹊○玉勝間本居宣長○玉襷平田篤胤○日本文學大綱卷二武島又次郞等○賀茂眞淵と本居宣長佐佐木信綱○日本歌學史同上○國學者傳記集成○國學發達史淸原貞雄○國學全史野村八良○日本思想の研究補永茂助○大日本歌書總覽福井久藏○賀茂眞淵翁記念號（國學院雜誌）○賀茂眞淵號（心の花）○賀茂眞淵傳資料佐佐木信綱（藝文大正五ノ八）○春滿と眞淵羽倉信一郎（國語と國文學四ノ一）○賀茂眞淵略傳文同人（文三ノ八）○賀茂縣主眞淵傳難波津浅香（精華二十三號）○賀茂眞淵の肖像及其傳記平出鏗二郎（帝國文學二ノ一）○賀茂眞淵と萬葉集久松潜一（斑鳩昭和四ノ一〇）○賀茂眞淵の萬葉主義に就て大石新（國語と國文學二ノ五）○縣居翁と古文辭學羽生永明（わか竹一一ノ三・四）○贈正四位賀茂眞淵翁逸事小田淸雄（文三ノ九）○縣居手簡佐佐木信綱（心の花二九ノ六）○賀茂翁書牘五則同上（こゝろの花一ノ二）○眞淵家集同上（同上二ノ五・七・八・九・一一）○賀茂眞淵の古道說に就て大石新（歷史と地理一三ノ六）○賀茂眞淵の短歌について田中一松（心の花二六ノ四）○賀茂眞淵の歌學について窪田空穗（短歌雜誌三ノ八）

魔佛一如繪詞（まぶついちによゑことば）　繪詞　一卷

【作者】一遍及び一向宗を罵る語があるから、淨土敎、特に眞宗の弘布し始めた後の人たること明白。且つ念佛・禪・法華・華嚴・法相・眞言の何れをも難じてゐるから、或は天台などの僧侶か。【名稱】文中「談魔界如佛界、如一如無二如、故得魔外無佛、佛外無魔」の經文より出づ。【成立】鎌倉末、南北朝頃か。【諸本】繪土佐經隆、書慶運法師といふ卷子本（非經隆說もある）が原本であるが、傳存不明。詞書の全文は、尾崎雅嘉の「蘿月菴國書漫抄」卷二（日本隨筆大成卷二）所收【解說】佛敎物。法談物。丹波國篠村に住む或る僧が道に踏み迷うて深山に入り、高僧達の集會に出逢ふとそれが天狗共で、佛法障碍の謀議を凝して散會し、人心を誑し、勝ち誇つて酒宴遊興を事としたが、四條河原で童の手に捕へられ、扼殺された友を見て無常を觀じ、邪執驕慢を飜して皆佛に歸し、魔佛一如の理を示すことを作る。各天狗によつて佛敎各宗を代表させ、論難してあるが、天狗の會合といふ說話の形式は「太平記」卷二十五「宮方怨靈會ニ六本杉ニ事」、同卷二十七「雲景未來記事」等と同型で、なほ世相を寫しつつ諷刺した氣味がある。〔島津〕

【參考】蘿月菴國書漫抄○訂正增補考古書譜卷十

幻影の盾（まぼろしのたて）　短篇物語

【作者】夏目漱石【發表・刊行】明治三十八年四月「ホトトギス」に發表。後、他の六篇と共に「漾虛集」（別項）に收められた。漱石全集第二卷所收。【梗概】一心不亂といふことを、目に見えぬ怪力を藉り、縹渺たる背景の前に寫し出さうとしたものだと作者は言つてゐる。幻影の盾の所有者なる若きヰリアムは白城の騎士であつた。彼は老友シワルドと共に夜鴉の城を攻めることになつた。その城の中には彼の愛人クララが棲んでゐた。城は火を吹いて燒け落ちた。焰の中に女の姿があつた。燒け出された馬が二匹宙を飛んで來た。ヰリアムはその一つに打ち乘つて南へ走つた。何里かを走つて馬を乘り斃し、來し方を思ひ耽つてゐると、身はいつしか明るい林の中に在つて、池のほとりに女が立つてゐる。忽ちにして四面空濛、玲瓏虛無の世界となり、また再轉して春とこしへの南國となる。ヰリアムとクララは林檎の花園に刹那の幸福を樂しんでDruerie（ドルエリ）！と叫んだ。終生の情を分と縮め、懸命の甘きを點と凝らす猛烈な經驗をヰリアムは嘗めた。【批評】戀に心を惱ましてゐたヰリアムと、廣い晴れやかな世界に飛躍したヰリアムとの間には、千里の溝壑が橫たはつてゐる。作者は

者」（一幕）及び「生れざりしならば」（一幕）の二作を出して、イプセン風の社會劇として相當世評を呼んだが、その後、或る事情によつて文壇を遠ざかり、松竹合名會社に入り、新派劇の隱れた作者として十數年を過した。亭々生の筆名の新派脚本は彼の作である。大正十三年、「中央公論」誌上に「玄朴と長英」（一幕）を發表して忽ち劇文壇に復活し、つゞいて長篇戲曲「平將門」（二部曲）（別項）「坂本龍馬」その

氏について漢學を學んでゐた。或る時、渡邊方壺といふ人が、漫遊のついでに塾に立ち寄り、毎日のやうに豪飮放談をしてゐたのを見てゐて、急に儒生を憎む心が生じ、志を變へて京都に上り、景樹の門に入つた。やがて業を終へ、共に桂園に學んでゐた同國の人萩原貞起と連れ立つて郷里に歸り、池田村に塾を開いたが、門人は集まらず、深く頼みとしてゐた關春江も世を去つてしまつたので、遂に塾

景樹大人筆話〇東塢遺言抄〇梅月堂門人與書〇家相辨惑〇聚芳園隨筆。　〔猿田〕

迷子札裁斷柱礎（まよひごふださばきのいしずゑ）　脚本九幕二十場　お家世話物　【作者】勝能進（序二・五・七幕）・勝諺藏（三・四・六・八幕）合作。【通稱】「木鼠吉五郎」「唐茄子屋」【興行】明治十三年四月初演、大阪戎座。

【役割】木鼠吉五郎・丁稚長四郎・力之丞妻お雪（嵐璃寛）、手代常吉・戸田山城守（中村福助）、安田幸八

る。浪人生活の不如意より伊勢屋へ入質して元利合計金百兩になつてゐるので當惑する。以前安田家の仲間であつた百姓常助が恩返しのため調達方を申し出る。常助は絹屋彥兵衞方に番頭をしてゐる伜常吉へ明晩までにと金策を依頼する。伊勢屋由兵衞は伜與兵衞の身持を直さうと絹屋彥兵衞の娘お菊を嫁にする積りである。このお菊に郷藏が狼藉するのを力之丞が助ける。お菊は惚れ〴〵と力之丞を

この飛躍を納得させるために詩的な浪漫的な表現を用ひて讀者の空想を天翔けらしめようと試みた。それには少くとも當時に於ては非常に新鮮なハイカラな語法が、少からず全體の調子を助けてゐる。文體としてもそれまで類例のないものであつた。　〔野上〕

繼子物の謠曲（ままこもののえうきよく）　【曲目】幼い時に實母に死別した子の悲慘な又は可憐な樣を描いてゐる謠曲に、「雲雀山（ひばりやま）」「弱法師（よろぼふし）」「竹雪（たけのゆき）」「松山鏡」がある。【諸本】現行諸流諸本。謠曲叢書・日本文學大系・國民文庫・謠曲三百五十番集（日本名著全集）等に所收。

【雲雀山】四番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔内容〕奈良の横佩右大臣豐成は、さる人の讒言を信じ、家臣（ワキヅレ）に命じて、我が娘中將姬（子方）を殺させようとしたが、家臣は乳母侍從（前ジテ）と共に大和紀伊の國境雲雀山に姬君を隱して、密かに育ててゐた。その後、父豐成（ワキ）は狩に出て、圖らずも乳母（後ジテ）に出會つた。乳母侍從は姬君を思ふ餘り狂亂してゐるのである。豐成は深く先非を悔い、乳母に導かれて姬君の庵を尋ね、我が家に連れ歸つたといふ曲。「當麻」の前篇をなすものであるが、出典は見當らない。二段劇能。五流現行。

【弱法師】四番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄・申樂談儀に曲名見ゆ）〔内容〕河内國高安の左衞門尉通俊（ワキ）は、さる人の讒言を信じて、我が一人子俊德丸を追放したが、さすが不便に思つて二世安樂のために天王寺で一七日の施行をした。俊德丸（シテ）は勞苦の餘り、盲目の乞丐人となり、弱法師といはれてゐた。そして今日も天王寺に出て寺の曲舞を謠ひ舞つてゐた。父通俊は我が子の姿を見て驚いたが、暫く人目を避けて、俊德丸の物狂ほしい舞を眺め、やがて夜の更けるのを待つて、故里に連れ歸つたといふ曲。出典は見當らないが、「太平記」北條高時が田樂を弄んだ條に出てゐる「天王寺のやられぼし」が即ちこれで、早く田樂（別項）に作られてゐたものらしい。一段劇能。五流現行。

【竹雪】四番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文）〔内容〕越後國直井何某（ワキ）は妻（前ジテ）を離別して長松に置き、二子のうち姉（前ヅレ）は母につけ、弟月若（子方）は、我が家に留め、後妻（狂言）に世話させて置いた。後妻は繼子月若を虐待して、夫の留守に竹の雪を拂はせ、遂に凍死せしめてしまつた。月若の實母（後ジテ）と姉（後ヅレ）とは、月若の死を聞いて雪の中に泣き悲しんだ。そこへ夫が歸つて來て一切の事情を知り、共に歎いてゐると、竹林七賢が天降つて月若の命を助けたといふ曲。出典はない。二段劇能。寶生・喜多現行。

【松山鏡】五番目〔作者〕不明（能本作者註文）〔内容〕越後國松の山家で、或る娘（子方）が誰にも隱して物に見入つてゐるので、父（ワキ）が繼母を呪詛してゐるものと疑つて叱ると、實は鏡に向つて亡き母の姿を見てゐるのであつた。父はこのいぢらしい樣に涙を流した。やがて母の亡靈（ツレ）が現はれると、倶生神（シテ）が地獄から迎へに來たが、鏡に映る母の影が菩薩のやうであつたので、倶生神も孝子の弔ふ功力に感じて、獨り地獄に歸つてしまつたといふ曲。かうした巷說があつたのであらう。文獻には見當らない。一段劇能。觀世・金剛・喜多現行。

【構想】母性愛を極度に讚美してゐる謠曲作者は、繼子いぢめを描くことを餘り好まないらしい。早く母を失つた孤兒について描いた上掲四曲のうち繼母の殘忍な虐待をまざ〳〵と描いてゐるのは「竹雪」だけで、「雲雀山」と「弱法師」とには、たゞさる人と記して繼母とは明示してゐない。繼母の讒言よりも寧ろ父の輕率を非難してゐる。殊に「松山鏡」では逆に繼子が繼母を恨んでゐるものの如く疑つただけで、繼母の虐待は少しも見えない。これを一曲の與へる興味から見ても、繼子いぢめが主題となつてゐるのは「竹雪」だけで、「雲雀山」は女物狂、「弱法師」は曲舞・男物狂、「松山鏡」は鏡の靈異が中心となつてゐるのである。

【參考】謠曲評釋大和田建樹　〇謠曲大觀佐成謙太郎　〔佐成〕

眞道（まみち）　漢學者　【姓】菅野朝臣。本姓は津史、後に津連。【生歿】天平十三年に生れ、弘仁五年（一四七四）六月二十九日歿す。享年七十四【家系】菅野朝臣は百濟の貴首王の孫、辰孫王の後で、大和の宇陀郡菅野村に居つたので、その地名から取つた名稱である。

辰孫王……午定君―麻呂―山守―眞道―永岑

【閱歷】寶龜九年三十八歲で少内記に任ぜられ、東宮學士を兼ね（延曆四年）、更に伊豫介・圖書頭等を經て、延曆九年（五十歲）、伊豫守となり、又上表して菅野朝臣の姓を賜はつた。同十一年治部大輔となり、民部大輔に轉じ、翌々十三年平安遷都あり、從四位下となる。十四年左兵衞督を兼ねた。十六年伊勢守となり、左大辨に任じ、伊豫守を兼ね、勘解由使長官を加へた。翌年左衞士督に遷り、ついで相模守・但馬守を兼ねた。同二十四年（六十五歲）正月參議に進み、翌大同元年太宰大貳を兼ね、同二年山陰道觀察使となり、參議を罷めて刑部卿・民部卿を兼ねた。三年左大辨・大藏卿を兼ね、四年從三位に昇り、東海道觀察使に遷り、宮内卿となる。翌弘仁元年（七十歲）近江守、參議に復し、又常陸守となる。翌年致仕した（但し常陸守はもとの如し）。

【業績】彼は當代の碩學として重きをなしてをり、延曆十三年八月、藤原繼繩等が勅を奉じて國史十四卷を撰修した際にも、これに關與してゐるが、殊に同十六年二月に功を竣へた「續日本紀」（別項）の撰修には、特に力を致した。蓋し同書の上編二十卷は主として眞道の手に成つたもので、その故に、同書を眞道編とする記載も少くない程である（本朝書籍目錄・二中歷・拾芥抄等）。詩人としては殆ど傳へるところがなく、「凌雲新集」にただ一首見えるのみである。

【參考】凌雲集〇類聚國史一四七〇新撰姓氏錄　〔山岸〕

豆鐵砲（まめでつぱう）　雜俳書　【刊行】明和乙亥中秋出版とある。明和二年が乙酉、四年が丁亥であるから乙亥はどちらかの間違ひであらう。本石町十軒店山崎金兵衞板。【解說】當時の宗匠たる鱗々・志夕・一志・夢佛、外二三人の選にかゝる五文字・段々・折句等の勝句を集錄した小册子で、特に段々の附合等を詳說せる好書である。　〔西原〕

眞山青果（まやませいくわ）　小說家・戲曲家　【本名】彬（あきら）【閱歷】明治十一年九月、仙臺市に生る。第二高等學校醫學部を中途退學し、上京後、小栗風葉の門に入り、短篇作家として正宗白鳥と並び稱せられた。作風は當時勃興の自然主義に屬するものであつたが、主觀的情熱的な點で、その埒を出たものが多かつた。郷土色の豐かなる小說集「南小泉村」（別項）が最も知られてゐる。なほその當時、既に「第一人

成は深く先非を悔い、乳母に導かれて姫君の庵を尋ね、我が家に連れ歸つたといふ曲。「當麻」の前篇をなすものであるが、出典は見當らない。二段劇能。五流現行。

【弱法師】 四番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄・申樂談儀に曲名見ゆ）〔内容〕河内國高安の左衞門尉通俊（ワキ）は、さる人の讒言を信じて、我が一人子俊德丸を追放したが、さすが不便に思つて二世安樂のために天王寺で一七日の施行をした。俊德丸（シテ）は勞苦の餘り、盲目の乞丐人となり、弱法師といはれてゐた。そして今日も天王寺に出て寺の曲舞を謠ひ舞つてゐた。父通俊は我が子の

にも隱して物に見入つてゐるので、父（ワキ）が繼母を呪詛してゐるものと疑つて叱ると、實は鏡に向つて亡き母の姿を見てゐるのであつた。父はこのいぢらしい様に涙を流した。やがて母の亡靈（ツレ）が現はれると、倶生神（シテ）が地獄から迎へに來たが、鏡に映る母の影が菩薩のやうであつたので、倶生神も孝子の弔ふ功力に感じて、獨り地獄に歸つてしまつたといふ曲。かうした巷說があつたのであらう。文獻には見當らない。一段劇能。觀世・金剛・喜多現行。

【構想】母性愛を極度に讃美してゐる謠曲作者は、繼子いぢめを描くことを餘り好まない

【閲歷】寶龜九年三十八歲で少内記に任ぜられ、東宮學士を兼ね（延曆四年）、更に伊豫介・圖書頭等を經て、延曆九年（五十歲）、伊豫守となり、又上表して菅野朝臣の姓を賜はつた。同十一年治部大輔となり、民部大輔に轉じ、翌々十三年平安遷都あり、從四位下となる。十四年左兵衞督を兼ねた。十六年伊勢守となり、左大辨に任じ、伊豫守を兼ね、勘解由使長官を加へた。翌年左衞士督に遷り、ついで相模守・但馬守を兼ねた。同二十四年（六十五歲）正月參議に進み、翌大同元年太宰大貳を兼ね、同二年山陰道觀察使となり、參議を罷めて刑部卿・民部卿を兼ねた。三年左大辨・大藏卿を兼ね、

時の宗匠たる鱗々・志夕・一志・夢佛、外二三人の選にかゝる五文字・段々・折句等の勝句を集錄した小册子で、特に段々の附合等を詳說せる好書である。〔西原〕

眞山青果（まやませいくわ） 小說家・戲曲家【本名】彬（あきら）【閲歷】明治十一年九月、仙臺市に生る。第二高等學校醫學部を中途退學し、上京後、小栗風葉の門に入り、短篇作家として正宗白鳥と並び稱せられた。作風は當時勃興の自然主義に屬するものであつたが、主觀的情熱的な點で、その埒を出たものが多かつた。鄕土色の豐かなる小說集「南小泉村」（別項）が最も知られてゐる。なほその當時、既に「第一人者」（一幕）及び「生れざりしならば」（一幕）の二作を出して、イプセン風の社會劇として相當世評を呼んだが、その後、或る事情によつて文壇を遠ざかり、松竹合名會社に入り、新派劇の隱れた作者として十數年を過した。亭々生の筆名の新派脚本は彼の作である。大正十三年、「中央公論」誌上に「玄朴と長英」（一幕）を發表して忽ち劇文壇に復活し、つゞいて長篇戲曲「平將門」（二部曲）（別項）「坂本龍馬」その他の戲曲を出して、次第に地歩を進めて來たが、綺堂以下の既成作家皆老い、新進の見るべきもの亦少き劇文壇は、彼の今後に大なる期待をかけてゐる。最近は「乃木將軍」「東鄕大將」「大石最後の一日」「楠公櫻井驛」等、英雄偉人の心境を掘り下げて、動中に靜を見んとする努力の著るしい作のみと云つてよい。目下松竹興行會社の社員である。彼は又夙に西鶴の研究に苦心してゐるが、未だその業績を發表するに至らない。【著作】南小泉村○平將門○反叛時代の將門○乃木將軍。

【作風】壯年の戲曲「第一人者」以來、史劇と現代劇との別なく、彼の描くところの性格は、常に一貫して强烈な我意識と深刻なる自己解剖に起因する苦悶が、その常に變ることなき主題である。作劇術も亦精到を極め、殊に新派劇座附作者としての體驗から、實際舞臺上の知識に富んでゐる現代有數の劇作家の一人である。〔長田〕

眞弓（まゆみ） 歌學者【姓名】内山氏【號】聚芳園・眉生【生歿】天明六年信濃國北安曇郡十日市場村に生れ、嘉永五年（二五一二）信濃國筑摩郡荒井村に歿す。享年六十七。【閲歷】眞弓は、十四五歲の時、既に書を能くするといふ譽が高かつたといふ。初め池田村の杉山氏について漢學を學んでゐた。或る時、渡邊方壺といふ人が、漫遊のついでに塾に立ち寄り、毎日のやうに豪飲放談をしてゐたのを見てゐて、急に儒生を憎む心が生じ、志を變へて京都に上り、景樹の門に入つた。やがて業を終へ、共に桂園に學んでゐた同國の人萩原貞起と連れ立つて鄕里に歸り、池田村に塾を開いたが、門人は集まらず、深く賴みとしてゐた闘春江も世を去つてしまつたので、遂に塾を廢して江戸に出た。併しながら江戸でも思ふやうに行かなかつた。その上偶々天保八年の饑饉に際會し、殆ど餓死せんばかりの狀態であつた。この時、貞起と窪田鶯谷とが相謀り、眞弓を鄕里に迎へて、再び塾を東筑摩郡和田荒井村に開かせたが、今度は門人も多く集まつた。彼は勉學の傍ら、園を設けて草花を植ゑ、それを聚芳園と名づけ、靜かな日を送るやうになつたのである。天保十四年、景樹死去の年、「歌學提要」（別項）の稿が成つた。自ら筆記したものや同門の友人中澤重樹が筆記したもの、その他の中から景樹の歌論を集め、分類し、統一をつけたものである。翌天保十五年には、「東塢亭塾中聞書」の稿が成つた。矢張り景樹の講義の筆記を纏めたものである。中には、「歌學提要」に述べられてゐることも加へられてゐる。いづれにしても、景樹から親しく聽いた講義を、散佚させないで、忠實に纏めたのが眞弓である。これは普通では出來ぬ仕事で、この仕事は桂園の中で、眞弓をして異色を放たしめてゐる。嘉永三年、六十五になつた年の秋頃から中風に冒され、五年に歿した。信濃に桂園の門流の多いのは、眞弓の力に與かるところ大である。【著書】歌學提要○東塢亭塾中聞書○東塢鶴聲○香川景樹大人筆話○東塢遺言抄○梅月堂門人奥書○家相辨惑○聚芳園隨筆。〔窪田〕

迷子札裁斷柱礎（まよひごふださばきのいしずゑ） 脚本九幕二十場 お家世話物【作者】勝能進（序二・五・七幕）・勝諺藏（三・四・六・八幕）合作。【通稱】「木鼠吉五郎」「唐茄子屋」【興行】明治十三年四月初演、大阪戎座。

〔役割〕木鼠吉五郎・丁稚長四郎・力之丞妻お雪（嵐璃寛）、手代常吉・戸田山城守（中村福助）、安田幸八後に村安力之丞・伊勢屋の倅與兵衞（嵐璃笑）、若黨惣助・水野和泉守（中村若松）、伊勢屋由兵衞・紙屑買文助（中村福平）、娘お菊（嵐みんし）、吉川鄕藏・絹屋彥兵衞・大工熊五郎（尾上多見太郎）、娘お豐（實川正朝）、百姓常助・大岡越前守（中村嘉七）。

【諸本】河竹繁俊氏藏書卸し臺本。その外、大阪府立圖書館の寫本。東京上野圖書館の勝諺藏作演劇脚本集等に所收。

【梗概】〔序幕〕（越後柴田領八幡宮境内）溝口伯耆守の指南番安田幸左衞門と町道場を開いてゐる吉川鄕藏とは、今日御前試合を擧行。安田の息子幸八は、妻お雪と共に心配してゐる。（御前試合）吉川は家老堀江勘解由の甥に當るので、幸左衞門は故意に勝を讓る。然るに幸八は願ひ出て試合をなし、見事に吉川に勝つてしまふ。伯耆守は幸左衞門の分別に感じ、吉川を所拂ひにする。幸左衞門も親の心底を悟らぬ幸八を勘當する。伯耆守は歸參の日の前祝ひに、溝口家重代の來國行の銘刀を賜はる。（五ヶ年經過、異本には七ヶ年とある）。〔二幕〕（東叡山花見）惡侍吉川鄕藏等本鄕の質屋伊勢屋由兵衞から金銀を强奪してゐる。村安力之丞と變名してゐる幸八は、越後より出府した若黨惣助より、殿の上意として來國行を手證とし、早速歸參せよとの手紙を受取る。浪人生活の不如意より伊勢屋へ入質して元利合計金百兩になつてゐるので當惑する。以前安田家の仲間であつた百姓常助が恩返しのため調達方を申し出る。常助は絹屋彥兵衞方に番頭をしてゐる倅常吉へ明晩までにと金策を依賴する。伊勢屋由兵衞は倅與兵衞の身持を直さうと絹屋彥兵衞の娘お菊を嫁にする積りである。このお菊に鄕藏が狼藉するのを力之丞が助ける。お菊は惚れ〴〵と力之丞を口說く。仕方がなく明日の晝までに返事をすると言ひ逃れる力之丞、丁稚長四郎に住居を見顯はされてしまふ。〔三幕〕（富士前町裏借家）力之丞の依賴で家主が貸家札を貼つた力之丞の宅へ、お菊は丁稚の案内で訪問するが、生國越後へ發足したとの家主の言葉に泣きながら歸る。（湯島天神切通し）常助父娘は、常吉の見えないのは必定金策の出來ぬためと推察し、首を松ケ枝に吊らうとするのを木鼠吉五郎が救ひ、事情に感じて金子調達を約束する。（力之丞假住居奥座敷）女房お雪は外出してゐる。お菊を避けるため、今日一夜だけの假住居である。奉公人十四五人も置いた醬油問屋、昨日迄の賣家が漸く買手付き、その留守番代りに寢るのである。一部始終を聞いて家主は感心する。（同假住居表通り）主人に金子借用方を拒絕された常吉は、遂に盜みを決心する。同じ心で來合せた吉五郎は互に助け合ひ、盜賊に入る約束をするが、目的の家は力之丞が留守番する空家である。其處へお菊が力之丞の後を追ふために、百五十兩を拐帶して出奔して來るのを駕舁勘六が絞殺して奪ひ取る。と吉五郎が窺ひ寄つて百兩を取上げ、勘六には五十兩を與へ、この罪科は引受ける故、正業につけと言ふ。九ツの鐘。（元の假住居奥

座敷）忍び入った常吉を捕縛した力之丞は、志は頼母しいが行爲は惡いと諭す。一子幸吉は、小判を與へるとて帶に付いた迷子札を差出す。その迷子札から父親の舊主人と分明する。力之丞は常吉を安心させるために、金子は調達出來たと、嘘を言つて歸す。（元の湯島天神切通し）吉五郎は常助に先刻の百兩を與へる。そして今日を命日に線香を上げて呉れるのが禮だと言ふので、吉五郎の素性を知るが、義心の厚いに感ずる。殊にお豐はその男前に惚れて了ふ。常吉が力之丞との會見の件を話に來るが、遲刻した不孝者と勘當する。吉五郎捕縛。お豐の悲歎。〔四幕〕（本郷春木町伊勢屋店先）お菊の檢視が北町奉行同心達に依つてなされてゐる。關係人由兵衞・彥兵衞等の取調べ。結局絞殺した死骸を吊したものと判定される。と長四郎の報告に駈付けた常吉を、金錢の借用申込などから彥兵衞は下手人と主張する。併し忠勤を勵む律義者といふので嫌疑は薄らぐが、常吉は自身の潔白を明かにしようと決心する。そして長四郎を說いて遂にお菊と力之丞との事情を白狀させてしまふ。由兵衞は力之丞から今朝受取つて來た金包を差出す。力之丞實は幸八と知らぬ常吉は主人の娘の敵としてその捕縛を歎願する。（村安力之丞召捕）力之丞召捕となる。〔五幕〕（北町奉行腰掛）訴訟人多勢。いろ〳〵と北町奉行に對する不平話。（拷問所）取調べの役人達も、最近北町奉行所の不成績を嘆息し合ふ。それ故に中山出雲守も大岡越前に對する競爭心から例格をも省みず、直接糺問所へ出席。力之丞は冤罪を極力主張するが金百兩の出處に就いては、常助の迷惑を思ひ返答しない。奉行の親戚吉川鄕藏も試合の返報に共々折檻し拷問するので、力之丞は氣絶して了ふ。結局妻子を召捕り糺問すると言ふ中山の威嚇に、涙と共に伏罪する。〔六幕〕（將軍家殿中投判）北町奉行中山出雲守、南町奉行大岡越前守、共に老中の裏判（刑罪人の判決をする押判）を受けに來る。老中達は大岡提出の木鼠吉五郎の判決書へ押判しようとする時、月番故にこの方を先へと言ふ中山の言葉にそのまゝ殘る。中山が力之丞の判決書に押判を請ふ時、大岡は口書に現はれた力之丞の爪印、無實の罪に悲憤の跡ありと主張するので、大岡が再吟味を命ずる。そして力之丞有罪ならば大岡切腹、無罪ならば中山切腹。戶田山城守は兩人立合裁判にて、十日を日限として裁斷せよと言ふ。（傳馬町牢屋敷）大岡は力之丞へ藥湯を與へる。そして裏判に洩れて死刑より助かつた吉五郎を追放する。今後は坊主となり、諸國の靈場を巡禮する心の吉五郎、彼は法華經信者である。〔七幕〕（小石川傳通院前紺屋）勘當の與兵衞を引取つた伯父の紺屋五郎兵衞は、唐茄子を買ひ求めて來て、與兵衞に修業のためとて、商賣に行かせる。（小日向片町棟割長屋）以前は駕舁、今は家主の勘六、家賃の代りに借家人お雪親子の蒲團や蚊帳を持去る。食事も出來ない親子は唐茄子を買ふが、困窮を見兼ねた與兵衞が辨當や金子を惠んで立ち去る。と、又勘六がその金を取つて了ふので、薄運を歎き乳のみ兒を殺し自害する。狼狽する幸吉。與兵衞が賣上金を持ち歸らないので事實を調べに來た五郎兵衞は、憤慨して勘六を打擲する。〔八幕〕（木下川村常助住居）柴又近くの常助の茶見世。毎月十八日觀音講を勸める譯は、吉五郎の菩提を弔ふためである。娘お豐も心密かに自分の夫と定めた吉五郎の佛事供養を怠らない。其處へ千ケ寺詣りの吉五郎は偶然にも來掛り、親娘の厚い心情を感謝する。大工が天道人を見殺しにすると言ふ例證に、村安力之丞夫妻の一件を物語る。而も若黨惣助より大岡對中山の再吟味事件は、大岡の旗色惡く、切腹も明日に迫つてゐると聞き、驚愕する常助・お豐・吉五郎。殊に吉五郎は大岡樣に御恩返しをなし、勘六との約束を想ひ、自訴する事となる。悲壯な眞實な祝言の杯が、お豐・吉五郎の間に行はれる。吉五郎の晴れの門出。〔大詰〕（南町奉行所門前）生命をかけた再吟味約定の日限の今日。中山出雲守は吉川鄕藏を召具して來る。力之丞と幸吉との面會などある。（同白洲吟味）中山が大岡に切腹せよと嘲笑する時、吉五郎は自訴してお菊殺しの下手人であると言ひ、金子の授受に付き委細を陳述する。常吉は迷子札を呉れた幸吉を見て、その父の力之丞と安田幸八が同一人物と悟り、當時の狀況を物語るので、結局與兵衞の勘當は許され、力之丞・吉五郎は無罪、常吉もお叱りなく、勘六有罪となる。鄕藏は銘刀橫領、不當拷問の罪狀で捕縛され、中山出雲守の無念の表情。

【解說】この脚本の根本的興味は、能進・諺藏兩人が相互にその作風を鮮明に表示してゐることである。父能進の默阿彌系統の落着いた老練な重厚な作劇術、殊に木下川常助住居の場に見られる滋味ある手堅い筆法は、眞に大阪の「默阿彌」に適しい風格である。子諺藏の作風は、三・四幕目等の寫實的傾向に顯著である。殊に伊勢屋店先殺人事件吟味の場は、纖細にして明敏なる神經が、一臺詞・一動作の間に緊張して、探偵劇として深甚なる興趣と成功とを贏ち得てゐる。兩者の脚色が交錯して全篇から感受する情調に、幾分の變化のあるのは已むを得ないが、兎に角父子合作脚本中の傑作である。【附記】勝諺藏演劇脚本集（上野圖書館藏）收錄のものは、梗概の如く九幕であるが、河竹氏藏の自筆臺本は八幕で、五幕目の二場が缺如してゐる。また勝諺藏編輯の「歌舞伎新報」（明治十三年）の筋書に依れば、これも八幕で拷問の場がない。恐らくは書卸し當時より餘りに慘酷なため上演しなかつたものと見える。〔尾澤〕

丸岡九華（まるをかきうくわ）小說家・詩人【本名】久之助【別號】春亭・九春亭・延春亭・山茶花・礫川魔王・桂堂・梅の舍薰。九華は九花とも書く。【生歿】慶應元年東京に生れ、昭和二年七月九日、小石川區上富坂の自邸にて病歿した。享年六十三。【閱歷】硯友社同人として活躍したが、早く身を實業界に投じたので、作品としての量は頗る尠い。處女作は明治二十一年八月の「我樂多文庫」に發表した「散浮花」であつた。二十三年二月發行の「新著百種」（別項）第八號は、依田百川との合册であるが、その中の「芳李」の作者ＸＹＺとあるのは九華で、これは彼が唯一の創作單行本である。彼は小說よりも寧ろ新體詩の創成時代に多く努めた人で、明治十九年發行の「新體詞選」（別項）の大半は、「士卒の夢」「佛國革命歌」「路易帝斷頭臺の場」「リップ・バン・ウヰンクル」の如き、彼の作詩を以て埋めてゐる。〔齋藤（昌）〕

丸腰連理松（まるごしれんりのまつ）「今宮の心中」を見よ。

丸本物（まるほんもの）歌舞伎【名稱】院本物（まるほんもの）とも書く。丸本（正本參照）から轉じて、竹本の操淨瑠璃芝居を輸入した狂言の意。【異稱】義太夫狂言・竹本劇、また義太夫の三味線の音から、これを俗にデン〳〵物ともいふ。【性質】脚本の素材及び演出樣式より分類したものの一類で、樂劇に屬し、普通には科白劇を主とする歌舞伎劇に對する。初め義太夫の操淨瑠璃芝居（操參照）に書き卸されたものを、歌舞伎にそのまゝ移植したもので、時代物と世話物との別はあるが、その本質上必ず床（ゆか）の義太夫節卽ち「チョボ」の附隨する狂言である。隨つて操芝居の直譯的摸倣である以上、扮裝も演出法もすべて一種特別のものである。故に

劇にも試みた新演出の活歷でさへも、在來の形式を全然離脫することが出來得なかつたのであるから、まして操全盛時代にあつては、遙かに操の演出法より劣る歌舞伎の手法を以て、愁ひに異なる演出法などは思ひもよらなかつたのであらう。而も竹本劇は長い年月の間に幾多の名優の工夫や考案を積み重ねて、洗練に洗練を加へられたものが、その型として傳存されてゐるのであるから、今日演出さ

作の人形の演出の粉本となつたのは、實に嵐三右衞門であつたと傳へる如き、その他脚色では、「曾根崎心中」「ひぢりめん卯月紅葉」「冥途の飛脚」「淀鯉出世瀧德」「笠屋三勝二十五年忌」「お染久松袂の白しぼり」（以上別項）等に材料を與へ、演出には「嫗山姥（こもち）」や「國姓爺合戰」（各別項）に暗示を與へた如き、その影響は極めて多大であつた。而もこれ等の操の諸作は、後に歌舞伎へ移植されたが、そのうち「待夜の

芝居が衰退期に向つた天明以後に於ても慣例となり、遂に今日竹本劇が歌舞伎の主眼とさへも見られる如き觀を呈するまで浸潤し、操淨瑠璃の歌舞伎化がなされたのである。操淨瑠璃芝居の發生期からその衰頹期まで、彼が歌舞伎芝居との交涉は常に絕えなかつたが、その受け入れるところは決してそのまゝの歌舞伎ではなく、消化し得た攝取に過ぎなかつた。これに反して歌舞伎芝居に取り入れた操

て遂にお菊と力之丞との事情を白狀させてしまふ。由兵衞は力之丞から今朝受取つて來た金包を差出す。力之丞實は幸八と知らぬ常吉は主人の娘の敵としてその捕縛を歎願する。（村安力之丞召捕）力之丞召捕となる。〔五幕〕（北町奉行腰掛）訴訟人多勢。いろ〳〵と北町奉行に對する不平話。（拷問所）取調べの役人達も、最近北町奉行所の不成績を嘆息し合ふ。それ故に中山出雲守も大岡越前に對する競爭心から例格をも省みず、直接糺問所へ出席。力之丞は冤罪を極力主張するが金百兩の出處に就いては、常助の迷惑を思ひ返答しない。奉行の親戚吉川鄕藏も試合の返報に共々

ためとて商賣に行かせる。（小日向片町棟割長屋）以前は駕舁、今は家主の勘六、家賃の代りに借家人お雪親子の蒲團や蚊帳を持去る。食事も出來ない親子は唐茄子を買ふが、困窮を見兼ねた與兵衞が辨當や金子を惠んで立ち去る。と、又勘六がその金を取つて了ふので、薄運を歎き乳のみ兒を殺し自害する。狼狽する幸吉。與兵衞が賣上金を持ち歸らないので事實を調べに來た五郎兵衞は、憤慨して勘六を打擲する。〔八幕〕（木下川村常助住居）柴又近くの常助の茶見世。每月十八日觀音講を勸める譯は、吉五郎の菩提を弔ふためである。娘お豐も心密かに自分の夫と定めた吉五郎の

鶴藏は銘刀橫領、不當拷問の罪狀で捕縛され、中山出雲守の無念の表情。

【解說】この脚本の根本的興味は、能進・諺藏兩人が相互にその作風を鮮明に表示してゐることである。父能進の默阿彌系統の落着いた老練な重厚な作劇術、殊に木下川常助住居の場に見られる滋味ある手堅い筆法は、眞に大阪の「默阿彌」に適しい風格である。子諺藏の作風は、三・四幕目等の寫實的傾向に顯著である。殊に伊勢屋店先殺人事件吟味の場は、纖細にして明敏なる神經が、一臺詞・一動作の間に緊張して、探偵劇として深甚なる興趣と成功とを贏ち得てゐる。兩者の脚色が交錯して

その中の「芳李」の作者ＸＹＺとあるのは九華で、これは彼が唯一の創作單行本である。彼は小說よりも寧ろ新體詩の創成時代に多く努めた人で、明治十九年發行の「新體詞選」（別項）の大半は、「士卒の夢」「佛國革命歌」「路易帝斷頭臺の場」「リップ・バン・ウヰンクル」の如き、彼の作詩を以て埋めてゐる。（齋藤〔昌〕）

丸腰連理松（まるごしれんりのまつ）「今宮の心中」を見よ。

丸本物（まるほんもの）歌舞伎【名稱】院本物とも書く。丸本（正本參照）から轉じて、竹本の操淨瑠璃芝居を輸入した狂言の意。【異稱】義太夫狂言・竹本劇、また義太夫の三味線の音から、これを俗にデン〳〵物ともいふ。【性質】

脚本の素材及び演出樣式より分類したものの一類で、樂劇に屬し、普通には科白劇を主とする歌舞伎劇に對する。初め義太夫の操淨瑠璃芝居（操參照）に書き卸されたものを、歌舞伎にそのまゝ移植したもので、時代物と世話物との別はあるが、その本質上必ず床（ゆか）の義太夫節即ち「チョボ」の附隨する狂言である。隨つて操芝居の直譯的摸倣である以上、扮裝も演出法もすべて一種特別のものである。故に新作の歌舞伎脚本に於て、竹本劇と同樣の義太夫節を應用して演出を修飾する如きは、その部分一種の樂劇ではあり得ても、勿論丸本物とは呼ばれない。元來竹本淨瑠璃は、人形のために作られたものではあるが、それが歌舞伎の俳優に移される場合、何故（なぜ）人形の形式に據らねばならなかつたか。各自の發生から考へても、人形は人形、俳優は俳優と全然別種の演出法をとるべきであつたが、相互の長い間の影響から、漸次兩者が交錯の徑路を辿つて接近するに至り、即ち操淨瑠璃正本の脚本化、歌舞伎脚本の操淨瑠璃化は、遂にかくあらしめたのである。尤もこの因は種々あるが、その主因ともいふべきは、淨瑠璃作者にして且つ歌舞伎作者を兼ねた近松門左衞門に端を發し、爾來、松田和吉（文耕堂）・戸川不鱗・安田蛙文・並木宗輔・同正三・同永輔・爲永千蝶・豐竹應律・春草堂等から、中村阿契・寺田兵藏・二代並木千柳・筒井半二・芝屋芝叟（雄崎勝助）・近松柳・同千葉軒等に至るまで、相互の作者を兼ねて俳優の人形化、人形の俳優化に努めた結果は、操の勝利となつて馴致したものと見るべく、遂に「人形ぶり」や「首振り芝居」（各別項）に至つて當に俳優を殆ど木偶化したといふべきである。かの九代市川團十郎が竹本劇にも試みた新演出の活歷でさへも、在來の形式を全然離脫することが出來得なかつたのであるから、まして操全盛時代にあつては、遙かに操の演出法より劣る歌舞伎の手法を以て、愁ひに異なる演出法などは思ひもよらなかつたのであらう。而も竹本劇は長い年月の間に幾多の名優の工夫や考案を積み重ねて、洗練に洗練を加へられたものが、その型として傳存されてゐるのであるから、今日演出される竹本劇の型は、必ずしも昔のまゝではなく、一種の操演出法であつても、その形式美は寧ろ歌舞伎化されてゐるのである。とはいへ人形の形式が歌舞伎の舞臺を支配する竹本劇なるものは、我が歌舞伎劇の中に樂劇といふ一種特別の世界を領有してゐるのである。

【沿革】古く歌舞伎脚色の發生期には、古淨瑠璃に資源を求めた。その中で金平淨瑠璃（別項）から脫化して江戸歌舞伎の根元をなした市川團十郎の荒事などはその適例である。次いで元祿歌舞伎の大成期には寧ろ反對に操淨瑠璃へ材料や脚色等を提供した。例へば延寶六年二月、大阪荒木座で坂田藤十郎が演じた「夕霧名殘の正月」は、貞享三年近松門左衞門が「三世相」と題して改作したものを、竹本義太夫座や宇治加賀掾の操芝居で上場し、更に同一作者の操淨瑠璃「夕霧阿波鳴渡」（別項）に於て、「名殘の正月」の藤十郎の演出法は伊左衞門の人形の演出の粉本となつてゐる如き、又は延寶五年十一月京都北側の芝居で、初代嵐三右衞門が演じた丹波與作や、元祿六年京都村山座で大和屋甚兵衞が演じた「丹波與作手綱帶」（宮永平兵衞參照）等を藍本として、寶永五年同じく近松門左衞門が竹本座の操淨瑠璃に、「丹波與作待夜の小室節」として作つたが、丹波與作の人形の演出の粉本となつたのは、實に嵐三右衞門であつたと傳へる如き、その他脚色では、「曾根崎心中」「ひぢりめん卯月紅葉」「冥途の飛脚」「淀鯉出世瀧德」「笠屋三勝二十五年忌」「お染久松袂の白しぼり」（以上別項）等に材料を與へ、演出には「嫗（こもち）山姥」や「國姓爺合戰」（各別項）に暗示を與へた如き、その影響は極めて多大であつた。而もこれ等の操の諸作は、後に歌舞伎へ移植されたが、そのうち「待夜の小室節」の如きは、操淨瑠璃芝居上場の數ケ月後、即ち同年九月に大阪岩井座で上演せられて、既に「チョボ」さへも出來てゐる。而して操淨瑠璃が歌舞伎に移植されたもので、古いのは元祿十四年正月二日初日で、大阪片岡座に上演された「百日曾我」（別項）で、「チョボ」の嚆矢は、この時ではないかと思はれる。やがて歌舞伎の凡てに亙つて攝取した操芝居は、名作者の近松門左衞門と、名人の太夫竹本筑後掾と、人形遣の名手辰松八郎兵衞との三者を得て愈々發達するに及び、遙かに歌舞伎を凌駕し、操淨瑠璃は漸次歌舞伎に輸入せられるや、かの音羽次郎三郎をして「操り淨瑠璃は元來歌舞伎を眞似て語り、人形も歌舞伎を眞似して行ふ事なり。然るを歌舞伎より操りを學ぶこと歌舞伎衰微の基なり」と叫ばしめたのであつた。爾來操芝居は、作者と太夫と人形遣との三者が相俟ち相繼いで、益々隆盛を極め、延享・寬延に至つては、全く歌舞伎を壓倒したのである。即ち「夏祭浪花鑑」「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」「假名手本忠臣藏」「双蝶々曲輪日記」（以上各別項）等を初め、殆ど歌舞伎に移植されない作がない程までになり、題目脚色はいふに及ばず、その演出法・舞臺裝置等の材料までも仰ぐに至り、この影響は操芝居が衰退期に向つた天明以後に於ても依然となり、遂に今日竹本劇が歌舞伎の主眼とさへも見られる如き觀を呈するまで浸潤し、操淨瑠璃の歌舞伎化がなされたのである。操淨瑠璃芝居の發生期からその衰頽期まで、彼が歌舞伎芝居との交涉は常に絕えなかつたが、その受け入れるところは決してそのまゝの歌舞伎ではなく、消化し得た攝取に過ぎなかつた。これに反して歌舞伎芝居に取り入れた操淨瑠璃は、殆どそのまゝであつた。

【主要種目】主なる丸本物を列擧しておく。

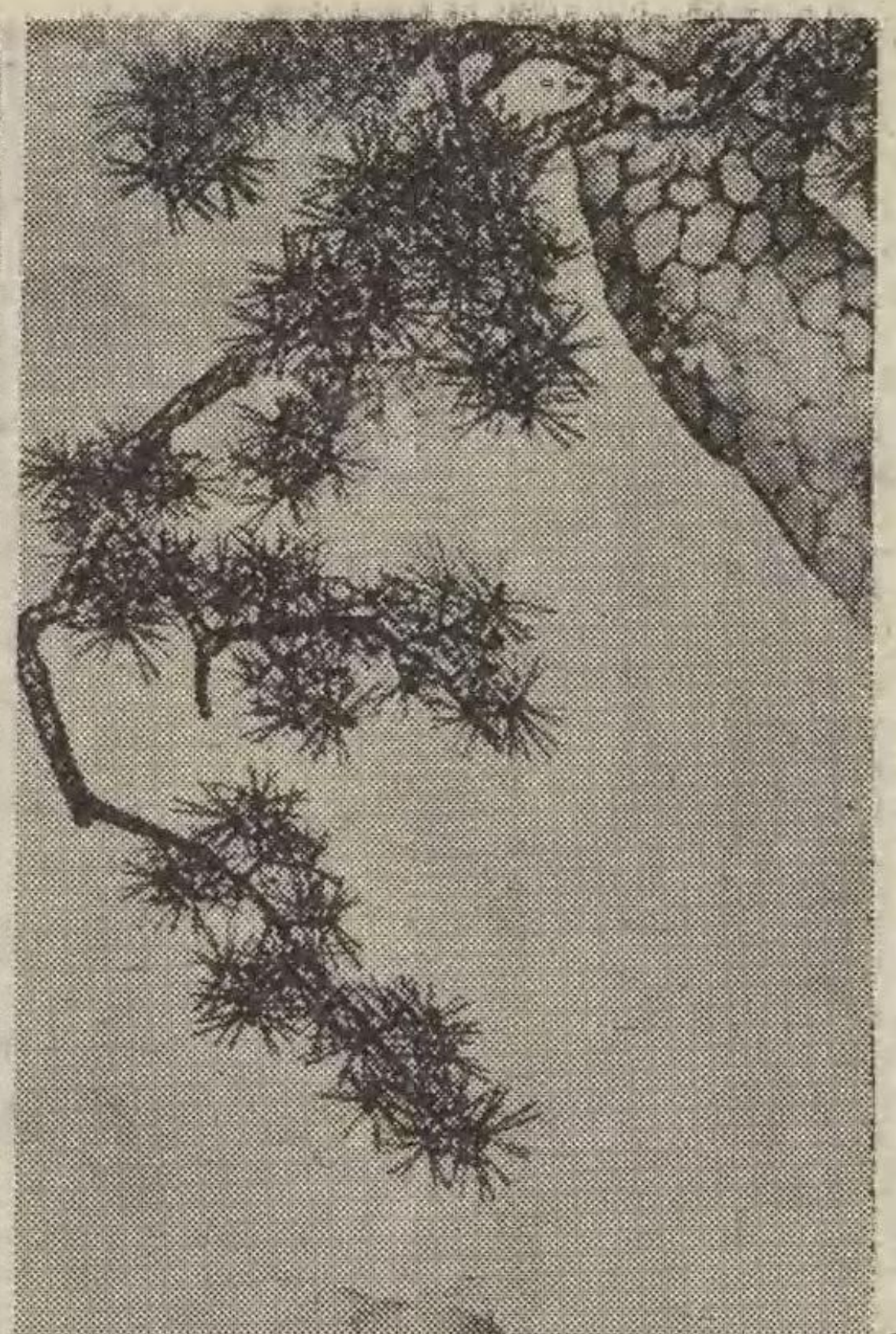
〔時代物〕嫗山姥○國姓爺合戰○日本振袖始○平家女護島○信州川中島合戰○大塔宮曦鎧○北條時賴記○敵討御未刻太鼓○三浦大助紅梅靮○須磨都源平躑躅○鬼一法眼三略卷○壇浦兜軍記○那須與市西海硯○蘆屋道滿大內鑑○苅萱桑門筑紫𨏍○和田合戰女舞鶴○敵討襤褸錦○御所櫻堀川夜討○行平磯馴松○小栗判官車街道○ひらがな盛衰記○鶊山姫捨松○新うすゆき物語○播州皿屋敷○久米仙人吉野櫻○軍法富士見西行○楠昔噺○菅原傳授手習鑑○花筏巖流島○義經千本櫻○假名手本忠臣藏○日蓮記兒硯○十帖源氏物ぐさ太郎○源平布引瀧○玉藻前曦袂○一谷嫩軍記　○名筆傾城鑑（傾城反魂香參照）○倭假名在原系圖○義經腰越狀（南蠻鐵後藤目貫參照）○小野道風青柳硯○姫小松子日の遊○祇園祭禮信仰記○敵討崇禪寺馬場○日高川入相花王○太平記菊水之卷○祇園女御九重錦○由良湊千軒長者○岸姫松轡鑑○奧州安達原○嬢景清八島日記○蘭奢待新田系圖○菊池大友姻袖鏡○本朝廿四孝○太平記忠臣講釋○三日太平記○近江源氏先陣館○神靈矢口渡○妹脊山婦女庭訓○攝州合邦辻○三國無雙奴請狀○伊賀越乘掛合羽○道中龜山噺○伊達競阿國戲場○鎌倉三代記○加々見山舊錦繪○伊賀越道中雙六○伽羅先代萩○彥山權現誓助劍○花上野譽の石碑○木下蔭狹間合戰○有職鎌倉山○蝶花形名歌島臺○日本賢女鑑○敵討優曇華鼬山○繪本

太功記○箱根靈驗躄仇討○八陣守護城○勢州阿漕浦○梅魁（はなのあに）苔八總等。（以上各別項）

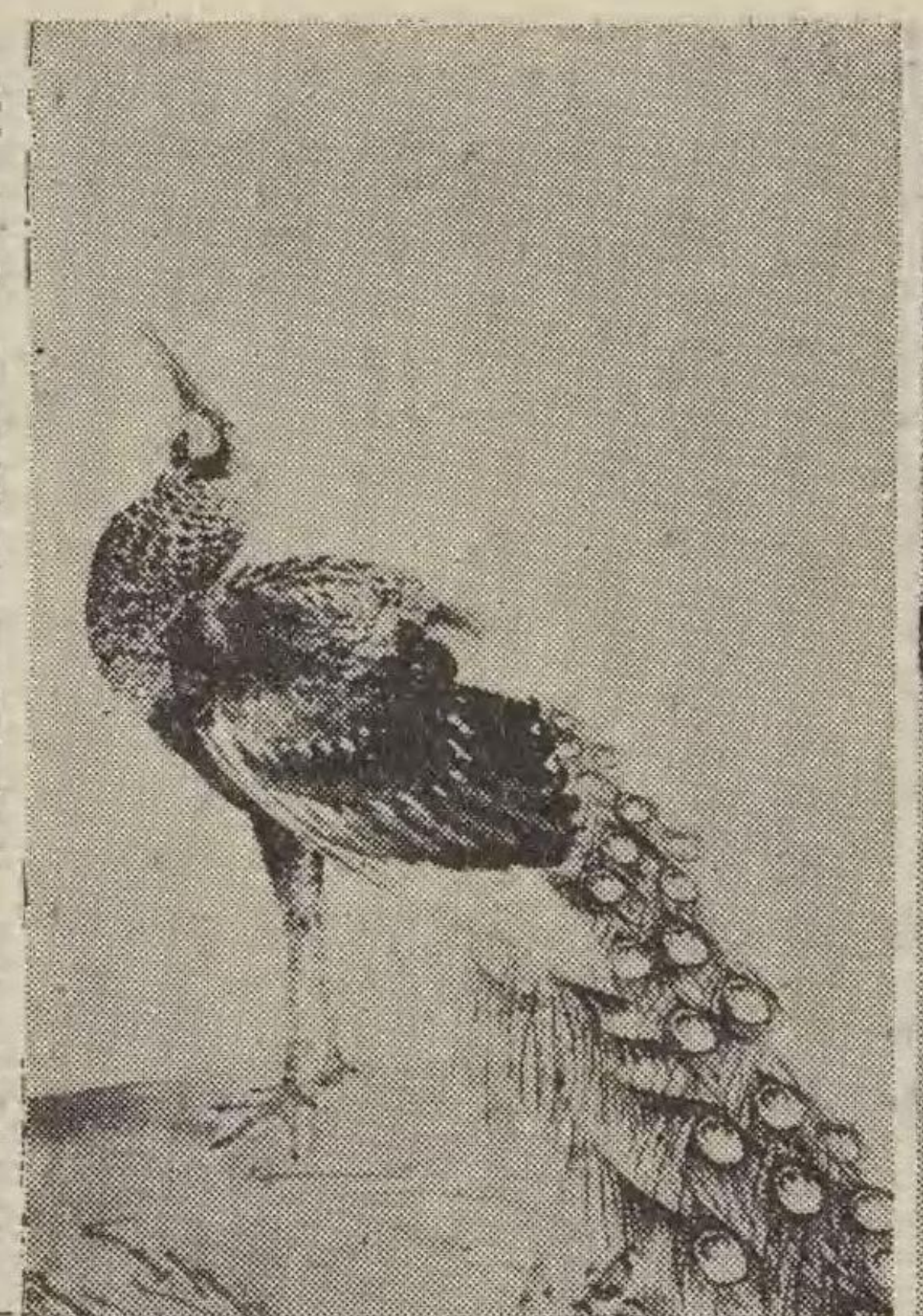
【世話物】　曾根崎心中○ひぢりめん卯月紅葉○堀川波鼓○心中重井筒○椀久末松山○心中萬年草○五十年忌歌念佛○冥途の飛脚○八百屋お七歌祭文○おそめ久松袂の白しぼり○夕霧阿波鳴渡○傾城三度笠○大經師昔暦○生玉心中○鑓の權三重帷子○山崎與次兵衞壽の門松○博多小女郎浪枕○心中天網島○女殺油地獄○心中二腰帶○心中宵庚申○京土產名所井筒○釜淵雙級巴○茜染野中の隱井○男作五雁金○潤色江戸紫○夏祭浪花鑑○容競出入湊○八重霞浪花濱荻○双蝶々曲輪日記○戀女房染分手綱○涵彩色娘扇○京羽二重娘氣質○關取千兩幟○染模樣妹脊門松○粧水絹川堤○傾城阿波の鳴門○關取二代勝負附○廓色上○紙子仕立兩面鑑○迎駕籠死期茜染○艷容女舞衣○伊達娘戀緋鹿子○櫻鍔恨鮫鞘○けいせい戀飛脚○戀娘昔八丈○桂川連理柵○絲櫻本町育○心中紙屋治兵衞○往古曾根崎村噂○驪山比翼塚○碁太平記白石噺○新版歌祭文○近頃河原の達引○薫樹累物語○生寫朝顔話○花雲佐倉曙○壺坂靈驗記等。（以上各別項）　〔秋葉〕

【參考】歌舞伎概論　飯塚友一郎○義太夫劇と歌舞伎劇との交涉　黑木勘藏（演藝畫報七ノ一）○丸本と演劇と　岡本綺堂（同上）○近世邦樂年表

圓山四條派（まるやましでうは）　畫派　【解說】圓山應擧を祖とする圓山派及び呉春を祖とする四條派の兩者を合した總稱である。圓山應擧（寛政七年歿）は、初め狩野派（別項）の石田幽汀に學んだが、後、元の寫生畫家錢舜擧の風を慕ひ更に自ら寫生に精進して專ら寫生主義に立脚する一新樣式を開拓した。呉春（また松村月溪と云ふ、文化八年歿、月溪參照）は初め蕪村に學んだが、後、應擧に就いて一格を達成した人で、その家が京都の四條に在つたのでその門流を四條派と呼んだ。而して應擧の子には應瑞（文政十二年歿）、應震（天保九年歿）等あり、門人には長澤蘆雪（寛政十一年歿）、源琦（寛政九年歿）、山口素絢（文政元年歿）、渡邊南岳（文化十年歿）等が殊に著名である。四條派としては呉春の弟に松村景文（弘化元年歿）あり、呉春の弟子に岡本豐彥（弘化二年歿）、柴田義董（文政二年歿）、長山孔寅（嘉永二年歿）等あり、この兩派は維新前後より明治時代に亙つて特に近畿を中心として頗る榮えた。中島來章・川端玉章・大西椿年・鈴木松年・今尾景年等は圓山派として、又鹽川文麟・幸野楳嶺・菊池芳文・竹內栖鳳等は、四條派として殊に著名の人々である。この兩派の描寫を比較するに、圓山派は形似正確にして理智的な趣多く、四條派は等しく形似に卽するも、その間情趣多きを特色とする。倂し兩派とも純日本、特に京畿の風物の寫生を基礎として支那風の寫生とは全く趣を異にするもので、更にその清新にして巧秀なる筆觸の味ひを見せてゐる點でも、兩派殆ど全く特質を同じうしてをり、これ等の點で正に純日本式の寫生畫の一派として兩者を總括して圓山四條派と呼ぶに至つたのである。　〔田中（一）〕



應擧筆　鯉魚圖



呉春筆　孔雀圖

マレーポリネシア語族　世界語族の一〔英〕The Malayo-Polynesian Family of languages.〔獨〕die malaio-polynesische Sprachfamilie.〔佛〕les langues malayo-polynesiens.【解說】この名は南洋地方に行はれる諸國語を總括したものでやゝ漠然たる名稱である。今日は次の諸國語を一括して「南方語族」（die austrische Sprachstamm）と名づけ、これを左記のやうに分類する。（甲）南方アジア系（Austroasiatisch）、（一）ムンダ・モンクメル（Munda-Mon-Khmer）派、（二）カシ・ニコバル（Khassi-Nikobar）派、（三）原始マラッカ（Proto-Malakkisch）派。（乙）アウストロネジア系（Austronesisch）、（一）インドネジア（Indonesisch）派、（二）メラネジア（Melanesisch）派、（三）ポリネジア（Polynesisch）派。マレーポリネシアといふ舊名は右のうち（乙）のアウストロネジア系に相當する。（甲）南方アジア系の諸國語は、インドの東岸地方、ビルマ、シャム等の地方に於て他の語族の間に散在する。（乙）アウストロネジア系のうち（一）インドネジア派の中には我が臺灣の蕃人語、フィリッピン諸島のタガラ語、マリアナ群島中のチャモロ語、スマトラ、ジャヷ、ボルネオ、セレベス等諸島の土人語、マレー半島その他に廣く行はれるマレー語等を含み、又遠く離れたアフリカ東岸のマダガスカル島土人の言語もこれに屬する。（二）メラネジア派には、我がカロリン群島、マーシャル群島より赤道以南のニューカレドニア群島、フィージー群島等に亙る諸島の土人語が含まれ、（三）ポリネジア派には、ハワイ群島を初め南方のニュージーランドのマオリ族の言語が含まれる。【特徵】この語族に屬する諸國語の特徵は、名詞は屈折することなく、文法上の性や數の別もない。また動詞の範疇（例へば、能動・受動・使役等）は、數多くの接頭辭・接中辭・接尾辭によつて表はされる。例へばメリナ語に於て語根 tundra より mitúndra（運ぶ）、nitúndra（運んだ）、mampitúndra（運ばせる）、nampitúndra（運ばせた）等が造られる。【參考】別項「語族」の〔參考〕を見よ。　〔神保〕

漫畫隨筆（まんぐわずゐひつ）　隨筆　二卷　【著者】鈴木煥卿【名稱】一名「撈海一得」。書名は著者の自序に「瀛莫ㇾ有ㇾ鳥、名㆓漫畫㆒、終日奔㆓走水上㆒、撈㆓捕小魚㆒而食ㇾ之、猶不ㇾ能ㇾ飽、（中略）余性弗ㇾ靈、琴棋書畫、凡百技藝、莫㆓一所㆒ㇾ能、又不ㇾ能ㇾ飲、因與ㇾ人不㆓欵曲㆒、遯㆓在僻邑㆒、無㆘可㆓與語㆒者㆖、唯有ㇾ讀ㇾ書而已、而亦不㆓必爲㆒章句㆒、終日汲々、唯多之貪、所謂如㆓漫畫㆒、然而油々藝海其所㆓撈得㆒、何足ㇾ飽乎、」とあつて、自己を漫畫と云ふ鳥に比したのである。【刊行】明和八年【解說】多年涉獵した和漢典籍中の世事人事何によらず、會心の事どもを記述考證

したもので、上卷に人名の吉凶以下五十九則、下卷に永樂錢の手跡以下六十五則を收めてゐる。和漢風俗史上參考するに足る事項が少くない。明和八年著者の序がある。【著者小傳】鈴木煥卿。字は子煥、通稱嘉藏、號を澶洲と云ひ、江戸の儒家で篠崎東海の門人である。安永五年六月歿す。享年六十二。「經史摘語」「治道要解」「論語彙考」「學庸彙考」「助語譯」「澶洲文集」等の著述がある。　〔和田〕

む。（二）漫吟集類題は二十卷四冊、最も歌數が多い。元來契沖は自己の歌を下河邊長流と共に撰定し、これに長流の序文を附して漫吟集と題したが、その後も筆削を加へ、歌數を增加したので種々なる異本が生じた。而して公美の校本や、小西某が編纂して契沖に校正を請うたと云ふ本などは、歌數の少きものに屬する。今存する契沖の自筆校本は四冊本で、縱橫に添削が加へてある。別に序並詞類と題

【歌風】近世古學の祖なる彼も、その作歌に至つては甚しく舊套を脫したものではなく、中世風の歌であるが、歌品温雅にして、その間やゝ新味もあり、歌才に至つては遙に時流を出でてゐる。殊に叙景にすぐれて居り、抒情的のものでは釋敎の歌に秀逸がある。本歌取の歌や技巧を弄した理智的な歌も散見し、又俳諧歌も多い。しかも「萬葉」の影響を受けることは甚だ少い。長歌の作は五七調と七五調

ふ時は、何れも小刀をはづし、慶後が羯鼓を手に持つて打ち、歳若が舞ふ（民間の萬歳では鼓打を才藏と云ひ、名稱が反對である）。最初に翁三番叟に似たものがあり、「トウ〳〵タラリ〳〵ラー」を歌ひ、ついで、「柱立」の文句があり、次に「言立」の最初の句の終る時、北面の武士（大紋・長袴・小刀）が御階（みはし）の左の床几にかゝつて「勇みませー」と大音に云ふ。以下順次六曲を演ずるが、その順序は年によつて替ることが

丸本と演劇と岡本綺堂（同上）〇近世邦樂年表

圓山四條派（まるやましでうは）

畫派 【解說】圓山應擧を祖とする圓山派及び吳春を祖とする四條派の兩者を合した總稱である。圓山應擧（寬政七年歿）は、初め狩野派（別項）の石田幽汀に學んだが、後、元の寫生畫家錢舜擧の風を慕ひ更に自ら寫生に精進して專ら寫生主義に立脚する一新樣式を開拓した。吳春（また松村月溪と云ふ、文化八年歿、月溪參照）は初め蕪村に學んだが、後、應擧に就いて一格を達成した人で、その家が京都の四條に在つたのでその門流を四條派と呼んだ。而して應擧の子には應瑞（文政十二年歿）、應震（天保九年歿）等あり、門人にはる榮えた。中島來章・川端玉章・大西椿年・鈴木松年・今尾景年等は圓山派として、又鹽川文麟・幸野楳嶺・菊池芳文・竹內栖鳳等は、四條派として殊に著名の人々である。この兩派の描寫を比較するに、圓山派は形似正確にして理智的な趣多く、四條派は等しく形似に卽するも、その間情趣多きを特色とする。併し兩派とも純日本、特に京畿の風物の寫生を基礎として支那風の寫生とは全く趣を異にするもので、更にその淸新にして巧秀なる筆觸の味ひ

圖

る。（甲）南方アジア系（Austroasiatisch）、（一）ムンダ・モンクメル（Munda-Mon-Khmer）派、（二）カシ・ニコバル（Khassi-Nikobar）派、（三）原始マラッカ（Proto-Malakkisch）派。（乙）アウストロネジア系（Austronesisch）、（一）インドネジア（Indonesisch）派、（二）メラネジア（Melanesisch）派、（三）ポリネジア（Polynesisch）派。マレーポリネシアといふ舊名は右のうち（乙）のアウストロネジア系に相當する。（甲）南方アジア系の諸國語は、インドの東岸地方、ビルマ、シヤム等の地方に於て他の語族の間

〔神保〕

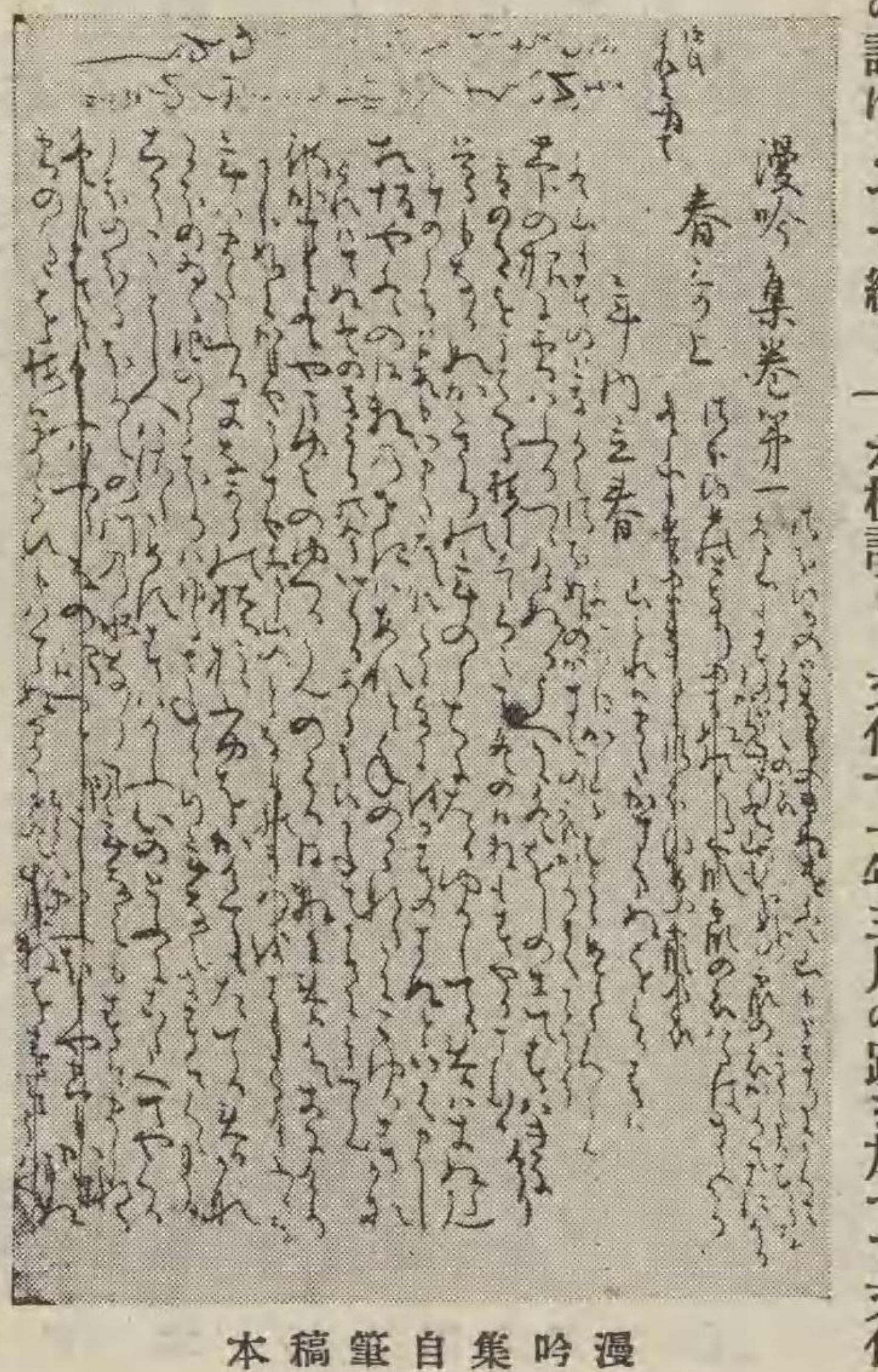
【參考】別項「語族」の【參考】を見よ。

漫畫隨筆（まんぐわずゐひつ）

隨筆 二卷 【著者】鈴木煥卿 【名稱】一名「撈海一得」。書名は著者の自序に「瀛莫有レ鳥、名ニ漫畫一、終日奔ニ走水上一、撈ニ捕小魚一而食レ之、猶不レ能レ飽、（中略）余性弗靈、琴棋書畫、凡百技藝、莫ニ一所レ能一、又不レ能レ飲、因與レ人不ニ欵曲一、遯ニ在僻邑一、無下可ニ與語一者上、唯有レ讀レ書而已、而亦不ニ必爲ニ章句一、終日汲々、唯多之貪、所謂如ニ漫畫一、然而油々藝海其所ニ撈得一、何足レ飽乎、」とあつて、自己を漫畫と云ふ鳥に比したのである。【刊行】明和八年 【解說】多年涉獵した和漢典籍中の世事人事何によらず、會心の事どもを記述考證したもので、上卷に人名の吉凶以下五十九則、下卷に永樂錢の手跡以下六十五則を收めてゐる。和漢風俗史上參考するに足る事項が少くない。明和八年著者の序がある。【著者小傳】鈴木煥卿。字は子煥、通稱嘉藏、號を澶洲と云ひ、江戶の儒家で篠崎東海の門人である。安永五年六月歿す。享年六十二。「經史摘語」「治道要解」「論語彙考」「學庸彙考」「助語譯」「澶洲文集」等の著述がある。〔和田〕

漫吟集（まんぎんしふ）

歌集 【作者】契沖 【成立・刊行】契沖最初の歌集は、「契沖和歌延寶集」で、延寶九年、湖海狂士の請によつて編したのであるが、契沖の歌集としては「漫吟集」がある。貞享の頃に大體成稿し、それ以後も增補を續けたと思はれる。天明元年、その一部分が刊行され、文化十二年に「漫吟集類題」として全部が刊行された。【諸本】（一）龍公美校訂本漫吟集は十卷二册で天明七年刊。四季の部だけである。本居宣長の序文、天明元年春の龍公美の漢文序、龍世善昌の序文、下河邊長流の序文があり、龍世華の題辭、安藤爲章の契沖行實及び契沖の肖像を掲げ、終に天明七年の渡邊直麿及び富小路良直の跋文がある。龍公美の父善昌が契沖の門弟なので、同門の宇治惠心院主良舜僧都と共にこれを書寫し、善昌の歿後、公美が校訂してこれを刊したものである。然るにこの刊本は天明八年の京都の大火で燒失し、その校正刷一部が今日僅に殘存するのみで、全く世に流布しなかつたが、契沖全集第七卷に收む。（二）漫吟集類題は二十卷四册、最も歌數が多い。元來契沖は自己の歌を下河邊長流と共に撰定し、これに長流の序文を附して漫吟集と題したが、その後も筆削を加へ、歌數を增加したので種々なる異本が生じた。而して公美の校本や、小西某が編纂して契沖に校正を請うたと云ふ本などは、歌數の少きものに屬する。今存する契沖の自筆校本は四册本で、縱橫に添削が加へてある。別に序並詞類と題する一册の加はつてゐる本もある。「漫吟集類題」はその歌數の最も多きもので、石津亮澄が校訂し、文化十一年三月の跋を加へて文化十二年に刊行した。四季・釋敎・哀傷・羇旅・戀・雜體・雜歌に分れ、雜體の中には物名・俳諧歌・長歌がある。契沖全集第七卷に入つた。（三）自撰漫吟集は一卷、正しくは「契沖和歌延寶集」と題したもので、三家和歌集の一である。延寶九年湖海狂士の請によつて編した。文化十年淸水濱臣が校訂して「自撰漫吟集」と題して刊行した。その本は續日本歌學全書の賀茂眞淵翁全集上卷及び校註國歌大系の近代諸家集第一卷に入り、契沖全集第七卷には稿本によつて收められた。



漫吟集自筆稿本

【歌風】近世古學の祖なる彼も、その作歌に至つては甚しく舊套を脫したものではなく、中世風の歌であるが、歌品溫雅にして、その間やゝ新味もあり、歌才に至つては遙に時流を出でてゐる。殊に敍景にすぐれて居り、抒情的のものでは釋敎の歌に秀逸がある。本歌取の歌や技巧を弄した理智的な歌も散見し、又俳諧歌も多い。しかも「萬葉」の影響を受けることは甚だ少い。長歌の作は五七調と七五調が入り交つて、「萬葉」の趣には至つて居らぬが、措辭・構想は甚だ整つてゐる。無常賦・六道賦の如きは秀逸の作で、長さも甚だ長く、「古今集」以後の長歌歌人としては第一流の域にあることを示してゐる。

初瀨のや里のうなゐに宿とへば霞める梅の立枝をぞさす
いかでわれ昔の人に似てしがな今の佛はたふさくもなし

〔佐佐木〕

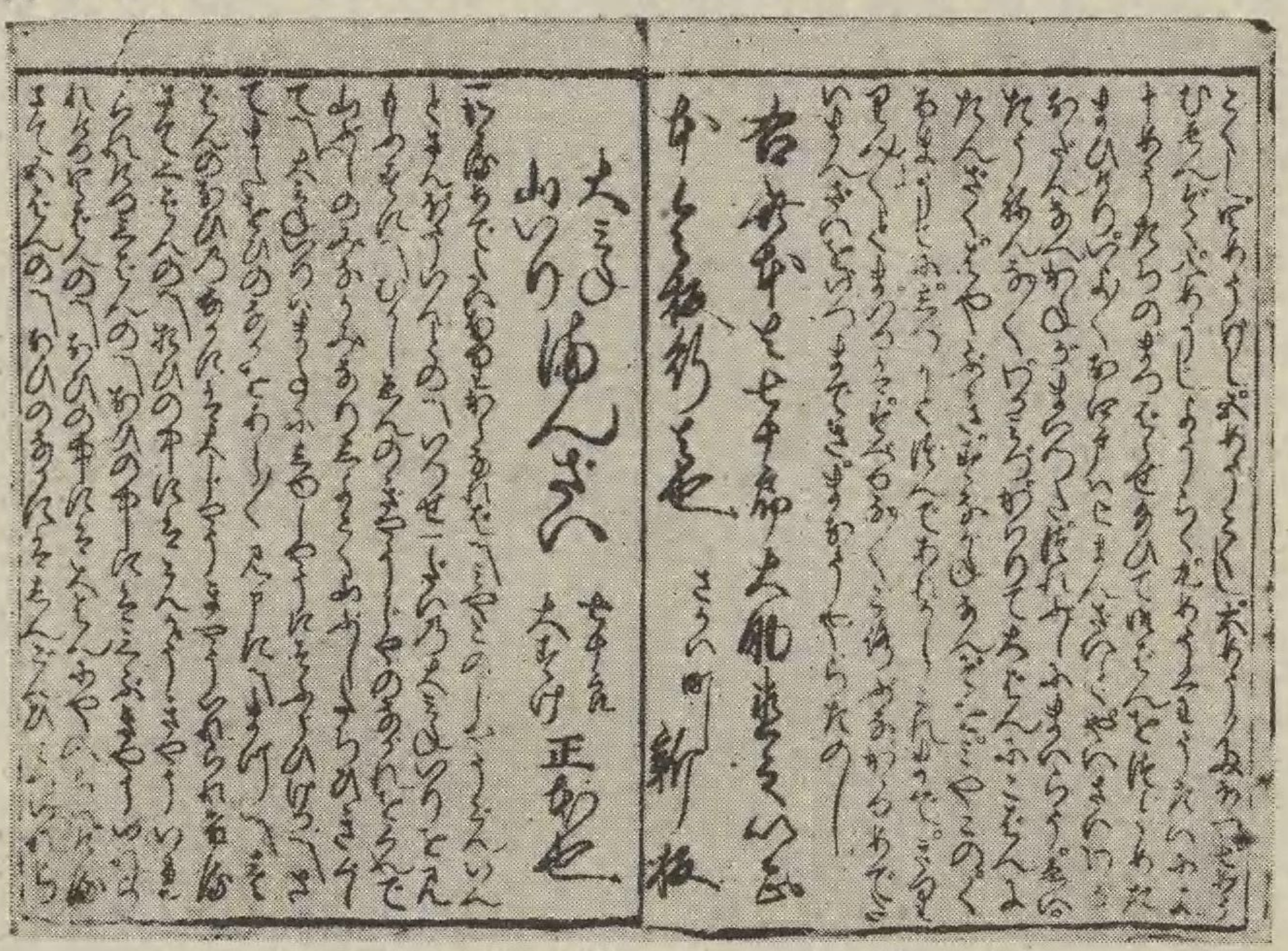
【參考】近世和歌史佐佐木信綱〇契沖全集第八卷解題〇契沖傳久松潛一（契沖全集第九卷）

萬歲（まんざい）

歌舞 【名義】千秋萬歲の略稱であつて、俗間の門付歌を稱する名稱である。「和訓栞」に神樂歌の千歲（せんざい）より出た如く記してゐるのは肯定し難い。【禁中萬歲】江戶時代の禁中に參入する萬歲の役者は、土御門家に隸屬の小泉豐後家であつた。その萬歲の式は、正月五日に長橋の御車寄の前庭で、ごまめ席を敷いて行はれる。太夫の裝束は三位烏帽子、大紋に半袴、色は薄萌黃色に笹龍膽の紋（小泉豐後の家紋）を付ける。下は、白無垢の上に無紋の紅の兩面小袖を着し、小刀を帶す。歲若（さいわか）は、萬歲烏帽子に花色無紋の素袍をつけ、下は縬（しじら）熨斗目に丸の内に笹龍膽の紋、脇差、羯鼓中啓を持つ。舞ふ時は、何れも小刀をはづし、豐後が羯鼓を手に持つて打ち、歲若が舞ふ（民間の萬歲では鼓打を才藏と云ひ、名稱が反對である）。最初に翁三番叟に似たものがあり、ついで、「柱立」の文句があり、「トウ〳〵タラリ〳〵ラー」を歌ひ、次に「言立」の最初の句の終る時、北面の武士（大紋・長袴・小刀）が御階（みはし）の左の床几にかゝつて「勇みませー」と大音に云ふ。以下順次六曲を演ずるが、その順序は年によつて替ることがある。舞終つて五位の殿上人が中啓を持ち、御階の六段目まで下つて北面に渡す。北面これを受取つて豐後に賜はる。後、弓場殿で休憩し、勘解由使より青銅二十貫文、米一石を賜はり、中啓を返上す。中宮御所では、女嬬が「勇みませー」を云ふ。舞が終ると簾中より祿の品を投げ出されるが、その中、金一分を五個五色の絲で結んだのが中宮よりの祿である。萬歲の曲節は、能狂言「うつぼ猿」の猿舞に似てゐると云ふが、「日次紀事」に「正月五日禁裡木造始、此日千秋萬歲幷猿舞東庭に來」と記せるのによれば、兩者關係があるのも當然である。萬歲は造宅の祝、鳥追は田事の祝、春駒は蠶業の祝で、これによつて年頭に衣食住を祝したもの、萬歲の歌詞に柱立の如き建築に關係ある言葉があるのも、その故であると云ふ。

【智多萬歲】尾張智多郡より出る萬歲。「鹽尻」には、「尾州春日井郡木賀崎長母寺の開山無住國師其詞を作り、同國愛智郡印內村の民に敎へしとかや、其詞屋舍造作の事也」とある。この無住が、龜山帝の御宇に、小僕有助（一說に德若）と云ふ者に敎へたのが萬歲の最初である。また寺領の村々にもこれを敎へ傳へたのであると云ふ。元文三年に智多郡西大高村・藪村・

横須賀村・味鏡村より差出した萬歳の由來に關する答申書にも同じ趣旨が記してある。一說に、寺本村・鍵屋村・藪村の者が、年貢につまつて萬歳に出で、その貰ひ米でこれを上納することにしたのが、智多萬歳の初めで、尾張・美濃・北伊勢までも廻り、特に名古屋の屋敷方へ多く廻つた。鍵屋村からは十八組（萬歳の家十八軒）、藪村からは八組、寺本村からは百組も出ると云ふ。元日から十五日頃まで名古屋にゐて、それより地方に廻るのである。萬歳は土地の百姓が出るが、萬歳名は、森福太夫・松福太夫・米福太夫（藪村）・百太夫（味鏡村）・鶴太夫（鍵屋村）などと呼ぶ。江戸時代には、智多萬歳は、三河萬歳と共に、土御門殿の支配に屬してゐたと云ふから、禁中萬歳から出たものであることは確實である。歌詞もそれを多く取り入れて脫化したものである。太夫（立烏帽子・白地の素袍・扇）一人に才藏（侍烏帽子・狩衣・鼓）が六人もついて、賑かにやるのが特色である。古來、五萬歳と云つて「御城」（御殿舞）「熱田」（神力）「地割」（シキノテウとも云ふ）「六條」「法華經」の五曲を稱したが、後の二曲は衰へた。これを今日では「御殿舞」（御殿萬歳）と云ふ。天保十年頃に至り、鼓に三味線と胡弓とを加へ、明治二十七年頃、これを素人芝居のチョボ代りに用ひてより、三曲萬歳と稱して、忠臣藏・曾我・矢口渡の如き義太夫物を歌ひ、また身振で演じて見せるやうになつた。これには萬歳の裝束を付けない。かやうに才藏の數を増したことと共に、種々俗化せられてゐる。萬歳は、最初に眞面目な祝儀の詞を歌ひ、その後に、滑稽野卑な歌を振面白く踊つて見せて、人々を笑はせるのである。

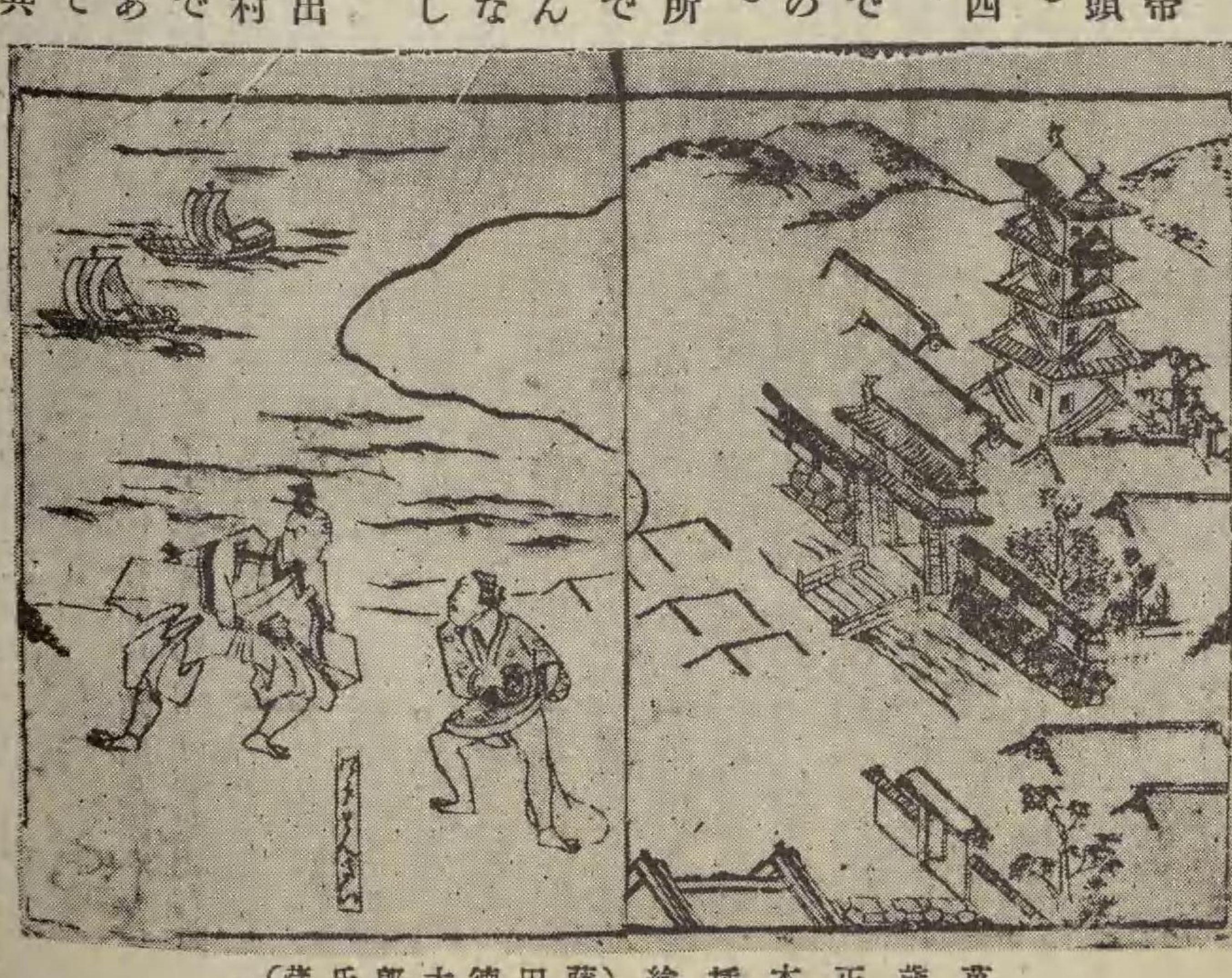


萬歳正本（藤田德太郎氏藏）

江戸時代には、「智多萬歳」（名古屋本町通十二丁目金鋼屋米藏刊）の書があり、五萬歳のうち四章を收めてゐる。「麓廼塵」には三章を收めた。また御城萬歳の歌詞を註釋したものに、「萬歳歌考」と題する書がある（著者不明、稿本東大國文研究室所藏）、小寺玉晁の「萬歳集」（靜嘉堂文庫所藏）にも收む。「萬歳記」（帝國圖書館所藏）には、上記の歌詞や資料を皆集めてゐる。

【三河萬歳】これは、智多萬歳と全く同種同源のもので、主に三河國一色村から出た。江戸にはこの三河萬歳が多く來た。また信濃の松本からも萬歳が江戸に來たと云ふ。いづれも院內の如き非人が多く出た。「萬歳」（明治三十四年、東京版）には、「地割萬歳」「伊勢萬歳」「東京萬歳」「六條」「新法華經」の五章を掲げてゐるが、これは當時東京に出た三河萬歳の詞章を集めたものであらう。江戸時代の三河萬歳の歌詞を瓦版として刊行したものも二三種存する。太夫は萬歳作太夫と名乘り、折烏帽子に麻の素襖袴で兩刀を帶し、扇を持ち、侍烏帽子或は大黑頭巾を冠り、無着袴の才藏を伴ふ。才藏は、前年の暮に、江戸日本橋四日市で才藏市と云ふのがたつて、こゝで太夫が適當な才藏を選んで相手役とするのである。後にこの風は絕えて國元から伴れて來た。且つ長い米袋を携へて、これに所得の米錢を入れるのも才藏の役である。太夫の眞面目な祝詞がすんだ後で、才藏が太夫の相手役となり、滑稽卑猥な應答や動作をなして人々を笑はせた。

【大和萬歳】京には、大和萬歳が出た。大和國北葛城郡窪田箸尾兩村の萬歳兩座の者が、所司代の庭で舞つたと云ふが、窪田は百濟であらう。今も百濟村より萬歳が出て町々を廻る。これも智多萬歳と共に、禁中の千秋萬歳の正系を引くものとして密接な關係があり、歌舞の樣式にも智多萬歳と甚だ似たところがあるが、この方が甚だ古雅で、古形を多く存してゐる。三河萬歳と異るところは、舞手・鼓打共に服裝が同一なることで、これは古くからさうである。侍烏帽子に、萌黃色の素襖、丸に橘の紋樣を白拔に附してゐる。一刀を帶す。古圖では舞手と鼓打と、その紋樣を異にするものがある。才藏は袋を肩にかけ、これに米錢を入れる。「十二ケ月舞」「夷子誕生」「田植舞」等歌詞の種類が多いが、就中、人口に膾炙してゐるのは「京の町」で、上方の萬歳と云へば、この歌のことを云ふのである。千秋萬歳のそれより出てゐる事は明かで、後には「京土産」「十二月萬歳」等の上方唄として傳へられ、或は同じく上方唄の御堂御供養の如き祝儀萬歳として替歌も作られ



萬歳正本挿繪（藤田德太郎氏藏）

てゐる。

【越前萬歳】福井縣今立郡味眞野村野大坪より出る萬歳で、越前・加賀等北陸地方の萬歳はこれである。繼體天皇が嘗て味眞野村に御坐し給うた時、村民の情の厚きに感じ、即位の後、君を壽ぎ御代を祝する言葉を綴り、土地の歌舞となして、永く後に傳へるやう敕諚を賜はつた。これが野大坪萬歳の起原であると云ふ。その他種々なる起原說話がある。この萬

を主とする萬歳の趣旨より、かやうに變化したものであらう。

【加賀萬歳】越前萬歳は加賀にも來た。初め前田利家越前府中にあつて、野大坪の百姓を召して年始に萬歳を奏せしめたので、加賀金澤に移つて後も、引續き來てゐた。後、金澤の屋敷の仲間小者が、自然にこれを覺え、遂に能の扇を用ひて謠の節などを入れて歌ひ、文化文政頃、大石藤五郎なる足輕がこれに踊の

のは、後世の俗化した歌ひ方である。

【中國萬歳】これは、美濃より出たと云ふ。山口の萬歳については、覺定、又鶴聲とも記すものがあり、服裝（奴袴・水干・桐の紋・烏頭）は、古への千秋萬歳のそれに酷似してゐる。これも萬歳の一種であらう。中國地方は大和萬歳の系統を引くもので、それが中國・西國にも廻つたものと思はれる。

【秋田萬歳】三河萬歳の徒が常陸國に住し、更

「俚謠集」に、福島縣北會津郡・福岡縣企救郡・同築上郡（「千代萬歳十二段」と題す）・大分縣下毛郡・廣島縣甲奴郡等のものが出てゐる。廣島縣の萬歳は、八屋と云ふ土地の賤業者が出たもので、少女二人を連れて同行七八人位が、三味線・四ツ竹・小太鼓等に合せ、少女を踊らせて合力を乞うたもの。曲目には「蓬萊萬歳」「立舞歌」「立踊歌」等があり、歌詞も形態も甚だ崩れてゐる。以上の外にも、諸國に萬歳が

てゐる。

【越前萬歳】 福井縣今立郡味眞野村野大坪より出る萬歳で、越前・加賀等北陸地方の萬歳はこれである。繼體天皇が嘗て味眞野村に御坐（おは）し給うた時、村民の情の厚きに感じ、即位の後、君を壽ぎ御代を祝する言葉を綴り、土地の歌舞となして、永く後に傳へるやう敕諚を賜はつた。これが野大坪萬歳の起原であると云ふ。その他種々なる起原説話がある。この萬歳は、古く馬の初乘式の時用ひられたらしく、土地の唱門師の役として、乘馬の祈禱と深い關係を保つてゐたやうである。太夫（侍烏帽子・舞鶴の紋の直垂欅の衣・袴・刀・扇）・才藏（赤の大黑頭巾・紋付・裁着（たつつけ））、兩者の服裝は三河萬歳に甚だ近い。曲目により冠物・持物が變り、また太夫一人に才藏數名、或は才藏のみで演ずる曲もある。他と最も異なる所は、才藏が鼓の代りに小太鼓を持つことで、これを先の曲つた棒で叩いて拍子を取る。扇も特殊の小型の古制のものである。小太鼓を手早く叩きながら、早口で歌ふ所は、他の萬歳に見ることの出來ない趣がある。鼓を小太鼓に替へたのは、萬歳と他の行事とを混じて生じたもので、「信濃奇勝錄」に掲げた下伊那郡伊賀良村の春田打と云ふ門付の樣を見ると、越前萬歳に甚だ類似してゐる。曲目は數が多く（柱づくし・櫻づくし・町づくし・東海道五十三次・七福神・具足づくし・さい鳥さし・もちつき・道具づくし・北國下道中・北國上道中・江戸名所・松づくし・草づくし・百人一首・扇づくし・宇治川先陣・御祝儀萬藏・壽萬歳・御家萬歳・木遣萬歳・舞踊萬歳・手踊萬歳等）、「三番叟」の如く歌詞なくして、普通の舞踊を取り入れたもの、更に「手踊萬歳」の如く、流行唄に合せて踊を踊る俗化したものもあるが、これは滑稽娛樂を主とする萬歳の趣旨より、かやうに變化したものであらう。

【加賀萬歳】 越前萬歳は加賀にも來た。初め前田利家越前府中にあつて、野大坪の百姓を召して年始に萬歳を奏せしめたので、加賀金澤に移つて後も、引續き來てゐた。後、金澤の屋敷の仲間小者が、自然にこれを覺え、遂に能の扇を用ひて謠の節などを入れて歌ひ、文化文政頃、大石藤五郎なる足輕がこれに踊の振を付け、一流の萬歳を完成した。これを地萬歳と云ひ、歌詞を踊歌と云ふ。その後、茶番狂言の如きものも加へられるに至つた。その曲目は、越前萬歳のものの外（寶船・二百十番謠づくし・名所歌留多・魚づくし・鳥づくし・盆正月・婚禮道具づくし・加賀八景・神曆・花相撲・都名所・歌留多百人一首・文づくし・時づくし・金澤町づくし等）、六十番に及ぶ。明治三十年頃に、今様萬歳とて芝居がかりのものが生じ、雛鶴萬歳・新道成寺・義經千本櫻・本朝二十四孝等を演じた。また正月に寄席等に出て演ずるやうにもなり、盆踊にも用ひられた。その流派には、老松梅太夫・乙松岩太夫の二派があり、いづれも名人をもつて稱せられ、就中、老松正太夫の作つた「御代の春」「草盡し」の如きは持てはやされた。加賀には古く、隱亡萬歳と云ふのがあり、賤業者が男女四五人一團となつて、男は蓑笠、女は菅の妻折笠を着て、太鼓を叩きながら、心中口說の類を歌つて合力を乞うた。今は地萬歳は滅亡に瀕し、隱亡萬歳は絶えた。越後地方に出たのも、越前萬歳・加賀萬歳の徒で、明治二十四年新潟縣古志郡新町刊本（「御萬歳」と題す）、同二十六年新潟縣南蒲原郡見付本町刊本（「豐年萬作七福神御萬歳」と題す）等があり、太夫が三味線を彈き、才藏が鼓を打つてゐるのは、後世の俗化した歌ひ方である。

【中國萬歳】 これは、美濃より出たと云ふ。山口の萬歳については、覺定、又鶴屋とも記すものがあり、服裝（奴袴・水干・桐の紋・烏頭）は、古への千秋萬歳のそれに酷似してゐる。これも萬歳の一種であらう。中國地方は大和萬歳の系統を引くもので、それが中國・西國にも廻つたものと思はれる。

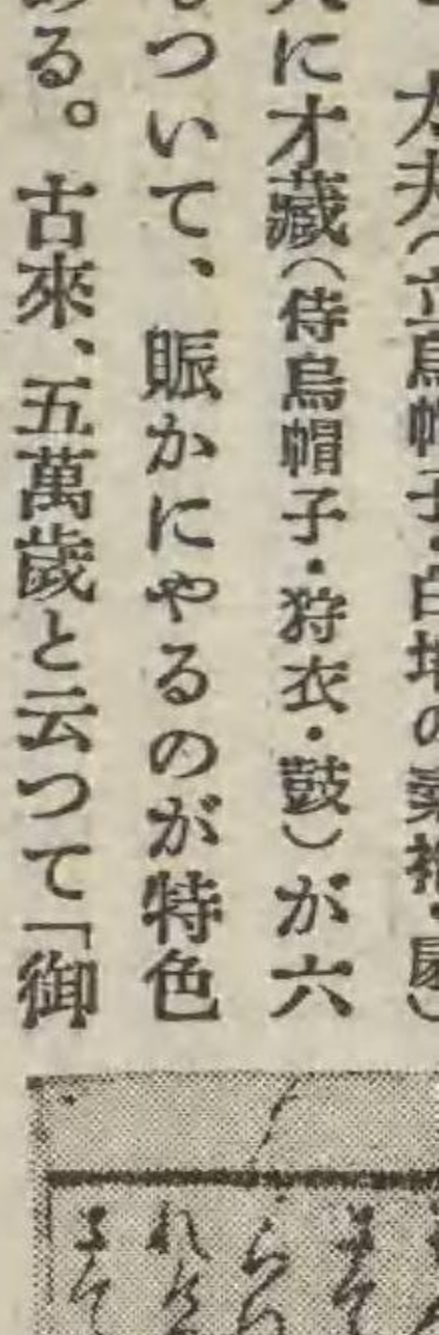
【秋田萬歳】 三河萬歳の徒が常陸國に住し、更にそれが慶長年間に秋田へ移住したものと云ふ。太夫（侍烏帽子に水干）は通稱針生清太夫と稱し、才藏（綿入着物に大黑頭巾）を伴つて、城に參つて祝詞を述べ、屋敷町を廻る。歌詞は十二番（家運萬歳・經文萬歳・神力萬歳・蜂入萬歳・お國萬歳・双六萬歳、以上表六番。扇萬歳・御江戸萬歳・門跡萬歳・吉原萬歳・櫻萬歳・名寄萬歳、以上裏六番）ある。その曲目には、後述の江戸萬歳と同じものがあるので、その間に關係のあることがわかる。東國・奧州方面の萬歳は、すべて三河萬歳の流を引くものである。

【伊豫萬歳】 愛媛縣松山市を中心として行はれる。樂器は太鼓・三味線・拍子木で、囃子方が歌を歌ひ、踊手が數人派手な形裝をして踊る。すべて男子のみで、女に扮裝して踊るものもある。神事・佛事の餘興その他に行はれ、九州地方に巡業することもあると云ふ。曲目は「柱揃」「伊豫名所づくし」「忠臣藏」その他が多い。歌詞は、「徳若に云々」「まことに目出たう候ひける」の如き、萬歳の歌詞を存してゐるが、內容は劇化したものが多く、萬歳の原形よりは最も遠ざかつた流俗の樣式を持つてゐる。併し四國の萬歳は、もと大和萬歳の系統を引くものであらう。

【諸國の萬歳】 諸國に來る門付の萬歳歌は、「俚謠集」に、福島縣北會津郡・福岡縣企救郡・同築上郡（「千代萬歳十二段」と題す）・大分縣下毛郡・廣島縣甲奴郡等のものが出てゐる。廣島縣の萬歳は、八屋と云ふ土地の賤業者が出たもので、少女二人を連れて同行七八人位が、三味線・四ツ竹・小太鼓等に合せ、少女を踊らせて合力を乞うたもの。曲目には「蓬萊萬歳」「立舞歌」「立踊歌」等があり、歌詞も形態も甚だ崩れてゐる。以上の外にも、諸國に萬歳が出たが、美濃・尾張を境として、畿內以西は大和萬歳、東海道以東は三河萬歳、北陸地方は越前萬歳をもつて代表せられ、土地の百姓がこれを兼ねるか、或は唱門師・院內・八屋等の非人が、これを業として出たものである。而して門付の萬歳が何れも遠く禁中の千秋萬歳より出てゐることは云ふまでもない。「徳若に御萬歳云々」の如き萬歳の通詞も、千秋萬歳の「言立」の句より出てゐる。かくて三河萬歳の起原傳說に、徳若と云ふ人物が存するかの如き、附會說も生ずるに至つたのである。

【江戸萬歳】 江戸では堺町の如き芝居町で、見世物として小屋掛けで萬歳を興行した。寛文延寶頃から既に存し、七十郎・大助の如き太夫が名高く、物眞似狂言も演じて見せた。その正本には、「江戸萬歳」「大峯山入萬歳」「吉原太夫名取萬歳」等の繪入赤本が刊行せられ、「淋敷座之慰」には、又「吉原太夫萬歳」「野郎萬歳」を掲げてゐる。享保頃まで存續して、地方にも興行に出た。「尾陽戲場事始」に、「往古は毎年正月の內は諸家へ江戸萬歳と稱し、五六人つれて廻りけるが、正德の頃より二人に限る事になれり、此十次郎（女形和泉屋十次郎）には立役玉川染右衞門といふ者組合にて、萬歳一ト流し、切狂言十番づゝ致し料百疋也、或は所

ある。太夫（立烏帽子・白地の素袍・扇）一人に才藏（侍烏帽子・狩衣・鼓）が六人もついて、賑かにやるのが特色である。古來、五萬歳と云つて「御城」（御殿舞）「熱田」（神力）「地割」（シキノテウとも云ふ）「六條」「法華經」の五曲を稱したが、後の二曲は衰へた。これを今日では「御殿舞」（御殿萬歳）と云ふ。天保十年頃に至り、鼓に三味線と胡弓とを加へ、明治二十七年頃、これを素人芝居のチョボ代りに用ひてより、三曲萬歳と稱して、忠臣藏・曾我・矢口渡の如き義太夫物を歌ひ、また身振で演じて見せるやうになつた。これには萬歳の裝束を付けない。かや



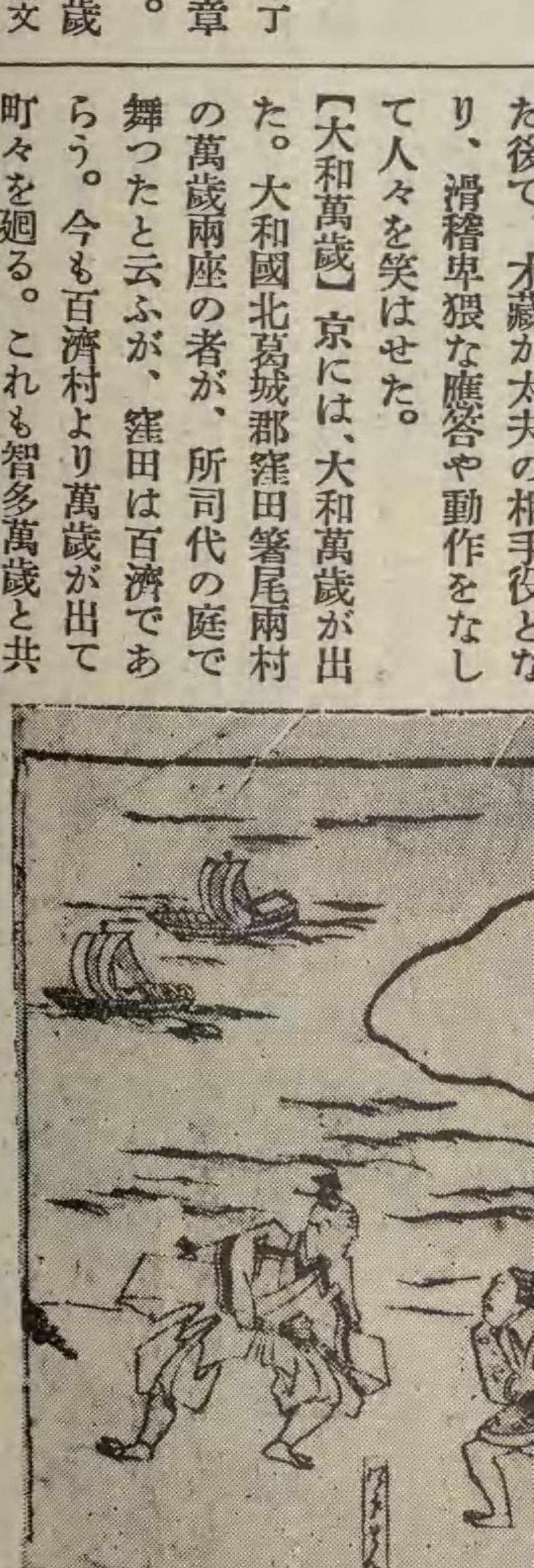
江戸時代には、「智多萬歳」（名古屋本町通十二丁目金網屋米藏刊）の書があり、五萬歳の詞から四章を收めてゐる。「麓廼塵」には三章を收めた。また御城萬歳の歌詞を註釋したものに、「萬歳歌考」と題する書がある（著者不明、稿本東大國文研究室所藏）、小寺玉晁の「萬歳集」（靜嘉堂文庫所藏）にも收む。「萬歳記」（帝國圖書館所藏）には、上記の歌詞や資料を蒐集めてゐる。

【三河萬歳】 これは、智多萬歳と全く同種同源

た役で、才藏が太夫の相手役となり、滑稽卑猥な應答や動作をなして人々を笑はせた。

【大和萬歳】 京には、大和萬歳が出た。大和國北葛城郡箸尾雨村の萬歳兩座の者が、所司代の庭で舞つたと云ふが、窪田は百濟であらう。今も百濟村より萬歳が出て町々を廻る。これも智多萬歳と共に、禁中の千秋萬歳の正系を引くものとして密接な關係があり、歌舞の樣式にも智多萬歳と甚だ似たところがあるが、この方が甚だ古雅で、古形を多く存してゐる。三河萬歳と異

のである。千秋萬歳のそれより出てゐる事は明かで、後には「京土産」「十二月萬歳」等の上方唄として傳へられ、或は同じく上方唄の御堂供養の如き祝儀萬歳として替歌も作られ



德太郎氏藏）

作事道行心中狂言世話事などいたし、裝束等持來り、樂屋を請取、一切〳〵に衣裝を仕かへ相勤め、代る〳〵はやし方を勸めけり」と見えて、この流は、萬歲より出て歌舞伎狂言を主とした。江戸萬歲の初めは、智多萬歲より出て江戸風に變化し、歌舞伎物眞似を演ずるやうになつたのである。

【御座敷萬歲】萬歲を座敷の酒宴の興に用ひたものである。上記の上方の萬歲もこれに屬す。前述の「淋敷座之慰」所載の萬歲も、芝居の江戸萬歲より出て、座敷萬歲に轉じたものであらう。かくて萬歲は流行唄化し、或は御船唄にも取られ、諸種の歌舞音曲に入つて、多くの影響を與へてゐる。今日の寄席で演ずる萬歲の如きも、これより脫化して來たものである。（千秋萬歲の歌參照）

【參考】古事類苑（歲時部）○廣文庫（萬歲の項）○萬歲記著者不詳○越前萬歲考山下與平○金澤市史（風俗篇）○金澤叢語 ○名古屋市史（風俗篇）○鄕土舞踊と民謠○秋田風俗問狀答○近代歌謠集 藤田德太郎 ○歷代風俗寫眞大觀 江馬務○續歷代風俗寫眞大觀 同上 〔藤田〕

萬歲躍（まんざいをどり） 歌謠書 一册【編者】不詳、或は友甫か。【刊行】萬治三年七月。今出川、助左衛門板。【諸本】稀書複製會複製本がある。日本歌謠集成巻六所收。【解說】「萬歲躍之序」の次に、「ゆふほ流踊くどき」と記して十八篇の歌詞を收む。丁數八枚、中に見開き二頁續きの挿繪が一つあり、三味線・胡弓・尺八・鼓に合せて、役者の踊つてゐる圖を描く。近世の踊口說の歌本の祖で、友甫流の口說歌を集めたもの。「落葉集」巻五の祇園町踊の唱歌の終りに、「右此踊の初りは、京の東祇園邊に去る法師あり。其身の以二思草一在二樂心一。初秋に友をかたらひて、踊をはじむ。凡元祿十六年迄及二四十七八年一云々」とあり、元祿十六年より四十七八年以前は、丁度友甫流の行はれた明曆萬治頃に當る。「色道大鏡」巻八に、「先上京に、或法師此（○踊口說）妙を得て天下に名あるといへども、予が一族なればはゞかりて姓名をしるさず」とあるのも友甫のことで、畠山箕山の一族であつたらしい。淡海の「百人一種」（寛文十三年刊）には、「音頭、井家友甫」と記してあると云ふが、これがその本姓であらう。歌詞には、「尤の雙紙」の「白き物」や「迷ふ物」を取り入れてゐる。又、近江踊・伊勢踊等、種々の歌謠をも取り入れた。

【備考】「萬歲躍」刊行後四年、寛文三年三月に「おどりくどき」と題する一册の書が出でた。收載歌謠九篇（目錄には十篇の題名を記す）、二條寺町かどや喜右衛門版、八丁。見開き二頁續きの挿繪一、すべて「萬歲躍」と同じ體裁で、これは喜内屋甚五兵衛の踊口說の歌詞を集めたもの。「色道大鏡」巻八に、「次に役者喜内といひし者あり、法師につぎて此名を得たり。其後顯西次郎兵衛自然とこの道にかなひて、これを口ばしると、其芳しき事先達をあざむくなるべし」とある人々の正本で、これ又「尤の雙紙」から材料の出てゐるものが多い。「寛文書籍目錄」にも、この書名が見えてゐる。これ等は多く七月に盆踊歌として用ひられたもので、友甫や喜内等の役者が美聲で音頭を取り、踊子にも役者が出て興を添へたのである。祇園町踊の如きも、この盆踊の一種であつた。爾後、これが京大阪の踊口說や盆踊の祖となつた。〔藤田〕

【參考】○（上方音頭）おどりくどき 藤田德太郎（上方第一號）○井家友甫（日本及日本人昭和八ノ一）

萬載狂歌集（まんざいきやうかしふ） 狂歌集 二册【編者】四方赤良・朱樂菅江【刊行】天明三年

【解說】天明年間、江戸で行はれた狂歌撰集の整うたものの一つで、四季・離別・羇旅・哀傷・賀・戀・雜・釋敎・神祇等の十二部に分ち、歌數凡そ七百首、當時勃興せる天明調狂歌の外に天明以前の貞德・正式・雄長老・卜養・未得・守武・曉月房・由緣齋・英一蝶・海音・志道軒・信海・風來山人・卯雲・由己等の作歌をも集め、巻末に橘八衢（千蔭）自筆の跋を載せてゐる。この跋文に就いて、赤良は「萬載集の跋は橘ノ八衢（千蔭の隱し名）にて自筆なり。此集あまりに行はれければ橘ノ八衢の跋をのぞきて市中に行ぶ。我家に其跋ある本を收め置けり」と「奴凧」に記してゐる。後、發行した赤良の「後萬載集」、同じく「才藏集」、菅江の「故混馬鹿集」（別項）とを併せて時人はこれを天明調狂歌の四大撰集と稱した。〔野崎〕

萬歲樂（まんざいらく） 雅樂舞曲【名義】皇帝の萬歲を賀するための樂曲であるからこの名がある。【異稱】「鳥歌萬歲樂」「煬帝萬歲樂」【性質】唐樂。新樂の中曲。平調曲に屬する。昔は五帖あつた由であるが、今は三帖だけ傳存してゐる（拍子二十）。舞がある。六人又は四人で舞ふ。昔は女舞としても行はれたが、今は凡て男舞である。舞者は常裝束で袍を着る。答舞には「延喜樂」（別項）を主として用ひるが、地久・綾切・長保樂等を用ひることもある。爾來御卽位大禮に「太平樂」（別項）と共に行はれてゐる。

【沿革】起原に就き諸說がある。これを我が國の製作と見るものは、用明天皇の御作なりといふ說もあり、「釋日本紀」には「私記曰、今俗曰二阿良禮走一、師說此歌曲之終、必重稱二萬年阿良禮一、今改曰二萬歲樂一、是古語之遺也」とあるが、これは玆に言ふ舞樂の「萬歲樂」ではなく、古昔踏歌として用ひられたものの中に、萬歲樂の掛聲して踊るものがあつたのを稱するもので別曲である。その名殘は謠曲の翁三番叟の中にも入り、又後世の千秋萬歲の中にも見られる。この舞樂は支那から傳來したものに相違ないことは、その樂曲及び舞容から見て知られる。支那製作の說には三種ある。一は漢武帝の作、二は隋煬帝の作、三は唐則天武后の作となすのである。「樂家錄」に「一說漢武帝登二嵩山一時、空中有下呼二萬歲一之聲上、問レ之無レ唱レ之者一云々」とあるはその一である。「敎訓抄」に「是はもろこしに隋煬帝と申御門の御作せ玉へる也。唐國には賢王の世を治めさせ玉ふ時に、鳳凰と云鳥かならず出來て、賢王萬歲々々と囀なるを、囀詞を樂に作り、振舞姿舞につくらせ給て侍也」とあり、又「大日本史」禮樂志に「隋書云、煬帝令二樂正白明達、翅二萬歲樂一卽是也」とあるは、その二である。又「體源抄」に、「又鳥歌萬歲樂といふ。則天皇后作り給ひし所也」とあり、「通典」に武后の時宮中鳥を養ひ給ひしに、人の言を能し、又常に萬歲を唱ふ。よりて樂を作りこれに象る」とあるはその三である。「大日本史」禮樂志には、これに就いて「今考二通典一無二此說一、而文獻通考所レ載與レ此全同、唯鳥歌萬歲樂在二盤涉調一、與レ此同名異曲」と述べてゐる。要するにこの樂の起原は、前記の隋煬帝說と則天武后說と何れとも決定し難い。白石の「樂考」には、「煬帝の萬歲樂といふもの、古本朝にも傳はりしかども、其後ほろびし也」とあるも信ぜられない。本朝の傳來は未詳であるが、文武天皇頃であるらしい。平安朝の中頃には童舞として

屢々行はれた記事がある。〔田邊〕

萬子（まんし） 俳人【姓名】生駒重信。通稱傳吉、後に萬兵衛【別號】此君庵・水國館・龜巢・白駒居士【生歿】承應三年生れ、享保四年（一三七九）四月二十七日歿す。享年六十六【墓所】金澤三ツ構高巖寺（禪宗）【俳系】芭蕉門【閲歷】加賀金澤藩士で、父八郎右衛門は寛文六年に歿し、十三歳で家督相續、奥小姓を勤め

閑叓○俳家奇人談竹内玄々一○蕉門諸生全傳遠藤日人○俳林小傳中村光久○俳諧人物便覽三浦若海○加賀藩史藁○生駒萬子直野碧玲瓏（「ほたてがひ」三ノ四）○桃化上人と萬子 志田義秀（「懸葵」二六ノ四）〔志田〕

滿仲（まんぢゆう） 「源氏物の謠曲」を見よ。

滿仲（まんぢゆう） 幸若舞曲（三十六番の一）二巻【作者】不詳【成立】室町期【諸本】古板本は寛永十二年版（十行本）。新群書類従第八舞

でたく再會した。

【影響】新歌舞伎十八番「仲光」がある。身替の構想の影響としては「忠臣身替物語」（公平法問諍」（別項）の改作）、「大塔宮曦鎧」等を經て特に「菅原傳授手習鑑」（別項）の寺子屋の段が有名である。〔島津〕

滿洲語（まんしうご） 「ウラルアルタイ語族」を見よ。

まんじゆのひめ 「まんじゆのまへ」を見よ

三河守ちかとしの子であるが、藤原朝臣權中納言ゆきいへの姫君を北方に迎へ、老臣にははらむしや（武者）兵衛尉かね村、さかた（坂田）刑部左衛門ともはるの二柱石あつて、何不足のない中に、かね村の數多持つ子供等を見るにつけても、己が世嗣なきを嘆じ、遂に中山の觀世音に申子の祈願を籠めて得たのは玉のやうな姫であつた。子孫の多いかね村を名附親

江馬務○續歷代風俗寫眞大觀同上　〔藤田〕

萬歳躍（まんさいをどり）　歌謠書　一册　【編者】不詳、或は友甫か。【刊行】萬治三年七月。今出川、助左衞門板。【諸本】稀書複製會複製本がある。日本歌謠集成卷六所收。【解說】「萬歳躍之序」の次に、「ゆふほ流踊くどき」と記して十八篇の歌詞を收む。丁數八枚、中に見開き二頁續きの挿繪が一つあり、三味線・胡弓・尺八・鼓に合せて、役者の踊つてゐる圖を描く。近世の踊口說の歌本の祖で、友甫流の口說歌を集めたもの。「落葉集」卷五の祇園町踊の唱歌の終りに、「右此踊の初りは、京の東祇園邊に去る法師あり。其身の以ニ思在ニ樂心一。初後願西次郎兵衞自然とこの道にかなひて、これを口ばしると、其芳しき事先達をあざむくなるべし」とある人々の正本で、これ又「尤の雙紙」から材料の出てゐるものが多い。「寛文書籍目錄」にも、この書名が見えてゐる。これ等は多く七月に盆踊歌として用ひられたもので、友甫や喜內等の役者が美聲で音頭を取り、踊子にも役者が出て興を添へたのである。祇園町踊の如きも、この盆踊の一種であつた。爾後、これが京大阪の踊口說や盆踊の祖となつた。　〔藤田〕

【參考】○上方音頭おどりくどき　藤田德太郎（上方第一號）○井家友甫（日本及日本人昭和八ノ一）

質】唐樂。新樂の中曲。平調曲に屬する。昔は五帖あつた由であるが、今は三帖だけ傳存してゐる（拍子二十）。舞がある。六人又は四人で舞ふ。昔は女舞としても行はれたが、今は凡て男舞である。舞者は常裝束で袍を着る。答舞には「延喜樂」（別項）を主として用ひるが、地久・綾切・長保樂等を用ひることもある。爾來御卽位大禮に「太平樂」（別項）と共に行はれてゐる。

【沿革】起原に就き諸說がある。これを我が國の製作と見るものは、用明天皇の御作なりといふ說もあり、「釋日本紀」には「私記曰、今俗曰ニ阿良禮走（あられはしり）一、師說此歌曲之終、必重稱ニ萬年阿作り給ひし所也」とあり、「通典」に武后の時宮中鳥を養ひ給ひしに、人の言を能し、又常に萬歳を唱ふ。よりて樂を作りこれに象る」とあるはその三である。「大日本史」禮樂志には、これに就いて「今考ニ通典一無ニ此說一、而文獻通考所レ載與レ此全同、唯鳥歌萬歳樂在ニ盤涉調一、與レ此同名異曲」と述べてゐる。要するにこの樂の起原は、前記の隋煬帝說と則天武后說と何れとも決定し難い。白石の「樂考」には、「煬帝の萬歳樂といふもの、古本朝にも傳はりしかども、其後ほろびし也」とあるも信ぜられない。本朝の傳來は未詳であるが、文武天皇頃であるらしい。平安朝の中頃には童舞として屢々行はれた記事がある。　〔田邊〕

萬子（まんし）　俳人【姓名】生駒重信。通稱傳吉、後に萬兵衞【別號】此君庵・水國館・龜巢・白鷗居士【生歿】承應三年生れ、享保四年（二三七九）四月二十七日歿す。享年六十六【墓所】金澤三ツ構高巖寺（禪宗）【俳系】芭蕉門【閱歷】加賀金澤藩士で、父八郎右衞門は寛文六年に歿し、十三歲で家督相續、奧小姓を勤めた。延寶六年世祿千石となり、翌年馬廻組、元祿六年普請奉行、寶永二年先筒頭となつた。俳諧は貞享二年淸風の「稻莚」に句の見えるのが古く、もと談林派であつたかと思はれるが、元祿二年芭蕉北國行脚の時、金澤で面會し得ず、早馬で追駈けて對面し得たが（歷代滑稽傳）、この頃芭蕉に歸したのであらう。金澤蕉門としては寧ろ保護者の地位に立ち、淸貧に窘しむ北枝・秋之坊（各別項）等を救護したりした。越中の浪化とは姻戚關係でもあつたので殊に親しく、芭蕉歿後支考が北國に勢力を張つた頃は、支考と親密の間柄となつた。されば支考は萬子の歿した時「悼二水國公一」の和詩を作り（和漢文操）、なほ「惜二萬子老人一詞」（獅子物狂）を書いてゐる。俳諧は優れた方ではなく、作も少く七部集にもその作を見ない。「蕉門頭陀物語」「誹諧世說」その他に種々の逸話が傳へられてゐるが、どこまで事實であるかは知られない。【著作】金蘭集（萬子遺稿、文化三年刊）○蕉門名家句集萬子の部（安井小洒編、昭和七年刊）。

【附說】「その花」を支考は浪化・萬子の共撰といふけれども、實は支考・浪化の共撰と認められる。

【參考】浪化公終焉記　各務支考（和漢文操）○歷代滑稽傳　森川許六○風俗文選（作者列傳）森川許六○蕉門頭陀物語　建部涼袋○誹諧世說　高桑闌更○俳家奇人談　竹內玄々一○蕉門諸生全傳　遠藤日人○俳林小傳　中村光久○俳諧人物便覽　三浦若海○加賀藩史藁○生駒萬子　直野碧玲瓏（「ほたてがひ」二ノ四）○桃化上人と萬子　志田義秀（「懸葵」二六ノ四）　〔志田〕

滿仲（まんぢゆう）　「源氏物の謠曲」を見よ。

滿仲（まんぢゆう）　幸若舞曲（三十六番の一）二卷【作者】不詳【成立】室町期【諸本】古板本は寛永十二年板（十行本）。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五近古篇に載せてある。【題材】身替說話。忠臣が主命を辭（いな）みかねて一子を以て身替りに立てる近世戲曲の構想は、大略これに源を發してゐる。忠義のために恩愛を犧牲にする武士の苦衷貞烈を語るもの。攝州中山寺緣起にも見え、謠曲「仲光」（一名、滿仲）と同材。美女丸の法號は正しくは源賢。その下山して父を說き佛道に入らしめた話は、「今昔物語」卷十九攝津守源滿仲出家語（古事談第四、寶物集卷七にも見える）に載せ、本書後半の素材がこれに相當する。

【梗概】多田滿仲の末子美女丸は、津國中山寺に送られたが、佛の勤を好まず武に專心するのを知らぬ父の面前で、或る時經を讀み得なかつた爲め激怒を買ひ、危く父の手討ちにならうとするのを辛うじて老臣藤原中務仲光方に遁れると、主の命令辭み難き仲光は、我が子幸壽丸を身替りに殺して美女丸を叡山に登せたので、美女丸は初めて惠心院の源信を師として學問を修め、十九歲で落飾、惠心院のゐんかくと名乘つた。二十五歲の時、師に從つて多田の父の家に行くと、母が己れを失つた悲しみに盲目となつてゐる事を聞き、佛に祈誓して靈驗を蒙り、盲眼は開き、父母とめでたく再會した。

【影響】新歌舞伎十八番「仲光」がある。身替の構想の影響としては「忠臣身替物語」（公平法問諍」（別項）の改作）、「大塔宮曦鎧」（別項）等を經て特に「菅原傳授手習鑑」（別項）の寺子屋の段が有名である。　〔島津〕

滿洲語（まんしうご）　「ウラルアルタイ語族」を見よ。

まんじゆのひめ　「まんじゆのまへ」を見よ

まんじゆのまへ　御伽草子　三卷

【名稱】一名「萬壽の姬」。女主人公の名に據る題號であるが、本文中には「まんじゆのひめ」とあつて「まんじゆのまへ」と明記した箇所は一もない。刊本の表題も「まんじゆのひめ」であるが、內題と古い「書籍目錄」とに「まんじゆのまへ」とある。兩樣に呼ばれてゐたのであらう。【成立】不明。恐らく德川初期であらうか。【諸本】古板本は寛文十三年板（江戶大傳馬町鱗形屋板）、延寶元年板。近古小說新纂（初輯）所收。【題材】中山の觀世音の申子の姬は一旦逆境に沈淪してゐたが、終に善報を受けて榮達する物語である。單なる童話的な申子立身說話ではなく、御家騷動が絡まり、幸若舞曲及び古淨瑠璃型の作、套型の勸懲小說をなしてゐる。靈驗譚の分子と武勇傳說の分子とが混合し、人買說話の分子も挿入せられ、かね村に責め殺されて捨てられた姬を靈狐等が守護するといふ姿形に、英雄生立說話の一形態として世界大擴布說話の一種をなす動物傳育傳說の分子も包含せられてゐる。構想からも文詞からも、金平本などの如き古淨瑠璃に近きを見る。

【梗概】人皇七十代後冷泉天皇の御代、安藝・周防・長門三國の主として、四隣に威を振つてゐた周防判官もりとしは、淸和天皇六代の孫三河守ちかとしの子であるが、藤原朝臣權中納言ゆきいへの姬君を北方に迎へ、老臣にははらむしや（武者）兵衞尉かね村、さかた（坂田）刑部左衞門ともはるの二柱石あつて、何不足のない中に、かね村の數多持つ子供等を見るにつけても、己が世嗣なきを嘆じ、遂に中山の觀世音に申子の祈願を籠めて得たのは玉のやうな姬であつた。子孫の多いかね村を名附親として萬壽の姬と呼び、才貌雙びなき生ひ先きを待つてゐたが、ふとした病から判官は、妻子をかね村に、國をともはるに託して鬼籍に入つた。御臺母子の悲歎を他所（よそ）に、かね村は一族を語らつて主家の橫領を企て、先づともはるを逐はうと謀り、一味の徒輩を集める中に、御馬副の鬼一丸こそ究竟の剛の者と、利を以て誘つたが、却つて面罵せられ、事破れたと見るより本城に攻め寄せた。多勢に無勢、終にともはる・鬼一丸は、奮鬪の末討死した。邪魔者を除いたかね村は上洛し、判官の讓り狀を謀判して太守になりすまし、御臺母子を若狹・鶴の前と呼ばせ、敬稱を禁じて小庵に押籠めた。泣いて詰（なじ）つた乳母をも御臺と呼んだ見せしめに打据ゑて逐ひ出し、己が屋形は嫡子に讓り、自らは主の屋形に移り住んだ上、若狹を越後から來たなほいへといふ鎧商人に、買つた鎧の代價として與へてしまつた。なほいへが伴ひ歸ると、女房はそれが氣高い上﨟なので、一度起した嫉妬の心を打忘れて始終を問ひ聞き、夫婦は驚いて新しく家を建てて据ゑ、あたらし殿と申し、主君として仰いだ。周防國に殘された姬は邪慳なかね村に召使はれながら、身も心も益々美しく成長して十三歲となつたが、かね村の乙娘が備前國司藏人に嫁ぐ時侍女として送られ、後に藏人から附

「草根集」と合綴して收む。【內容】本集二十卷。序跋などなく、次の如く部立してある。春（卷一・二）、夏（卷三）、秋（卷四・五）、冬（卷六）、神祇（卷七）、釋敎（卷八）、戀（卷九―十三）、雜（卷十四―十九）、賀（卷二十）。內容は平安朝から鎌倉時代に至る和歌を撰してあるが、主として鎌倉期の人々の作が多い。「玉葉」「風雅」「新千載」「續千載」「續後撰」「新拾遺」「續古今」「新續古今」などの勅撰集に載せられた歌も見える。

が、ただ澤村胡夷の詩名が本書に依りて一層著しくなつた。この人にはその後に集がないから本書に發表された作品が、その詩感を窺ふ規準にもなる。象徵的手法の確實な表現である。本書の刊行された數年前に「あやめ草」「豐旗雲」の二詞華集があつた。本書刊行の意圖も詩社成立の旨意も殆ど同じであつて、詞華集としては高踏的であり、有力な位置を占めてゐたのは無論である。マンダラ詩社は蒲

者としての位地を認められ、安政五年頃までに二十六七種の作を出した。併し、「御所奉公東日記」（安政元年）が十編以上に及んだ外、さう世評を博したものがなかつたらしい。ただ「倭文庫」だけは、近松の「釋迦如來誕生會」等によつたもので創案でないに拘はらず、大に歡迎され、明治以前五十餘編に及ぶ長篇となつた（別項參照）。明治に入つてからは、五年頃から諷刺戲作を出し始め、十一二年までに可

神編藻鹽草○怪談春雛鳥（續篇）○本朝金剛傳（以上同二年）○日蓮記旭衣○敎訓武藏鐙（以上同三年）○鶯墳梅赤本（續篇、同四年）○御所奉公東日記（安政元年、第十三編文久元年）○紀文大盡入船帳（安政五年）等。〔明治以後〕（賢愚混談）聖人肝潰志○（理解新文）五穀祭○大鈍詫新文鬼談（以上明治五年）○當世利口女○（新制）兎美だん語○ニヤアチウ談○蟲類大議論○和談三才圖會（以上同六年）○小兒三兵論（

けられて捨てた艶書が腹黒の侍女の拾ふ所となり、讒せられてかね村方へ還され、折檻された末落命した。骸はこがねがくぼへ捨てられたが、虎・狼・野干は却つて守護し、中山より毎夜金色の光が射し、靈狐も來り守つて三日の後蘇生した。乳母も尋ね會ひ、中山の上人も靈夢により探し當てて伴ひ歸り、姫は本復後、一には父の菩提を弔ひ、又一には母に邂逅せんため、乳母共々比丘尼姿に身を窶して立ち出でた。先づ都に上り清水に詣つて祈願を籠めると神詠があり、夢判じに占はせて越後なほへ（直江）の浦に赴き、親子の緣淺からずなほいへの門に佇んで、遂に素性判明して再會した。後、姫は源氏の大將八幡太郎義家に所望されて北方となると、親同士が從兄弟なる事明かとなり、なほいへには褒賞を與へられ、その後上洛して兵を差向け、かね村一族を搦め取つた。義家の請にも拘はらず、今年は院の御年忌に當る大赦のため、一旦命を宥されたかね村も、天譴は免れず、俄に起つた雷電に摑み去られてしまつた。義家は三ヶ國安堵の御判を戴き、御臺・姫君打連れて所知入りし、中山の上人にも恩賞あり、ともはるの遺族を厚く勞ひ、死者の供養も懇に營んだ。夫妻の御仲淺からず御子數多あり、保元の頃の六條判官爲義もこの御腹である。

【參考】近古小說新纂初輯（考說）　〔島津〕

萬秋樂 まんじゆらく　雅樂舞曲　【異稱】「萬壽樂」「慈尊樂」「慈尊萬秋樂」「まんずらく」ともいふ。【性質】林邑樂。新樂。中曲（或は準大曲）。盤涉調曲に屬す。序二帖（拍子各十八）、破六帖（拍子各十八）。舞があり、六人で舞ふ。舞人は常裝束を着し、甲は特殊な形をしてゐる。佛樂として最も重んぜられる。答舞には、「地久」（別項）を用ひる。【沿革】天平八年に林邑國の僧佛哲が我が國に傳へた樂曲で、即ち林邑八樂の一である。或はその時佛哲と同行した所の婆羅門僧正がこれを傳へたともいふ。これを以て慈尊即ち彌勒佛の功德を表はしたもので、或は彌勒菩薩の原作であるといふやうに說くことが從來行はれてゐたが、今この樂舞の性質を見るに、印度の古樂でないことは明かである。佛哲は我が國に渡來してその樂を大安寺に授けたが、その中にこの曲は入つてゐない。後十年を經て天平勝寶元年に至り、東大寺大佛開眼供養會の時、初めてこの曲を奏した。これに依つて見ると、佛哲が我が國へ渡來した後に、唐樂及び三韓の樂を參酌し、印度と支那とを相混じて、新しくこの曲を作曲したものと推測せられる。その後、佛樂として大に重んぜられ、大曲に準じて今日に至つてゐる。　〔田邊〕

滿誓沙彌 まんぜいさみ　歌人　【俗姓】氏は笠、姓は朝臣、名は麻呂。「萬葉」卷五に笠ノ沙彌と記すのは俗姓を冠らせたものである。【生歿】不明。但し、文武帝の慶雲元年（一三六四）を最初とし、聖武帝の天平二年（一三九〇）十二月を最後とする史料があるが、天平二年十二月の方は材料の性質から云つて、もつと下らねばならぬものであるから、天平三年までは少くとも生存してゐたと思はれる。故に文武帝から、元明・元正・聖武と四帝に亙り、藤原京の半ばから奈良京の初期に及ぶ二十八年間は確かに生存してゐたもので、恐らくこの期にその青壯年の時代を送つたものに違ひない。【閱歷】青壯年時代を、有數な地方官として送り、後に滿誓と名を改めて半僧半俗の生活に入つたのがその大體の經歷である。俗人としての履歷は、文武帝の慶雲元年正月の條に「正六位下笠朝臣麻呂授ニ從五位下一」（續日本紀）とあるのが最初で、この時まで微位であつた爲めその名が記錄されなかつたのである。同三年秋七月（別の傳へでは和銅元年三月）、美濃守となつたのが地方官としての最初であつて、甚だ治績が擧つたらしく、和銅二年九月には美濃の田地十町、穀二百斛、衣一襲を賜はつて「美ニ其政績一也」と說明が加へてある。同四年正五位上に昇り、和銅七年二月には、木曾街道を開いた功により、封七十戶・田六町を賜はつて褒賞せられてゐる。これ等により手腕を認められたと見えて、靈龜二年六月には尾張守を兼任し、翌養老元年の十一月には從四位に昇り、その翌々三年七月には新設の按察使の役に就いて尾張・參河・信濃三國を管する事となり、同四年の十月には右大辨となつた。かく殆ど一年毎に官位がのぼつたが、同五年五月に至り、太上天皇のため出家入道せんことを請うて許され、爾來佛門に入つた。而して養老七年二月、勅して筑紫の觀世音寺を作らしめられたのは、彼の官吏時代の手腕が記憶されてゐた爲めであらう。この時の事情を「伊呂波字類抄」觀世音寺の條に、「扶桑略記」を引いて、觀世音寺の建築が年代を累ねても成功せず、終に「元正天皇七一二一遣ニ僧滿誓ヲ於筑紫ニ、令レ造ニ觀世音寺一。俗名從四位上笠朝臣麻呂也」と記してゐるのは、以上の推測を證據づけるものである。彼はこの後少くとも七年間は筑紫にゐた。それは「萬葉集」卷五に、天平二年正月十五日、太宰府にゐた大伴旅人が、梅花の宴を催して知人と作歌したうちに彼の名が見えるし、その年十二月、旅人が歸鄕した後に筑紫の滿誓からおくつた歌が、卷四相聞部に「太宰帥大伴卿、上レ京之後、沙彌滿誓贈レ卿歌二首」とある。上京は十二月だが贈歌はその後とあるから、少くとも天平三年の頃まで筑紫にゐたことは疑ひない。恐らくは竣功した觀世音寺に長としてそれ以後の餘年を送つたのであらう。終るところを知らない。【作品】すべて「萬葉集」にある。卷三雜歌部に二首、譬喩部に二首、卷四に上記の筑紫から大伴旅人へおくつた二首、卷五に上記の梅の宴の折の歌一首、總計六首。皆短歌である。【批評】「萬葉集」卷三雜歌部の「世の中を何にたとへむ朝開き漕ぎにし舟の跡無きごとし」の一首が、彼の歌人としての名を極度に有名にしたのである。この歌は「拾遺集」に、「……何にたとへん朝ぼらけこぎゆく舟のあとのしら浪」と變つて取入れられてゐて、佛敎が文藝に沁み入つた、否、寧ろ文藝を支配した平安朝から中世へかけて、一般にこの歌がもてはやされたのである。この外の彼の作には、同じく卷三雜歌部の「しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖けく見ゆ」と、また卷三譬喩部の「鳥總立て足柄山に船木伐り樹に伐り行きつあたら船材を」の歌とが、萬葉鑑賞家の間に特殊な歌材を摑んだ歌として記憶されてゐる外には、特別にすぐれた秀作を見出し得ない。　〔森本〕

萬象亭 まんざうてい　「森羅萬象」を見よ。

萬代和歌集 まんだいわかしふ　私撰集　二十卷　【著者】不詳。但し奧書には、寶治二年淺香山斗藪（マヽ）釋の編纂の由が見える。【成立】同じく奧書に、「寶治二年夏頃撰定了、暮秋被添削者也」とある。【諸本】丹鶴叢書戊申帙には、十本に分載し、國書刊行會の同叢書覆刻本には

中山の上人にも恩賞あり、ともはるの遺族を厚く勞ひ、死者の供養も懇に營んだ。夫妻の御仲淺からず御子數多あり、保元の頃の六條判官爲義もこの御腹である。

【參考】近古小說新纂初輯（考說）〔島津〕

萬秋樂（まんじゆらく）　雅樂舞曲　【異稱】「萬壽樂」「慈尊樂」「慈尊萬秋樂」「まんずらく」ともいふ。【性質】林邑樂。新樂、中曲（或は準大曲）。盤涉調曲に屬す。序二帖（拍子各十八）、破六帖（拍子各十八）。舞があり、六人で舞ふ。舞人は常裝束を着し、甲は特殊な形をしてゐ、佛樂として最も重んぜられる。答舞には、「地

初とし、聖武帝の天平二年（一三九〇）十二月を最後とする史料があるが、天平二年十二月の方は材料の性質から云つて、もつと下らねばならぬものであるから、天平三年までは少くとも生存してゐたと思はれる。故に文武帝から、元明・元正・聖武と四帝に亙り、藤原京の半ばから奈良京の初期に及ぶ二十八年間は確かに生存してゐたもので、恐らくこの期にその青壯年の時代を送つたものに違ひない。【閱歷】青壯年時代を、有數な地方官として送り、後に滿誓と名を改めて半僧半俗の生活に入つたのがその大體の經歷である。俗人とし

憶されてゐた爲めであらう。この時の事情を「伊呂波字類抄」觀世音寺の條に、「扶桑略記」を引いて、觀世音寺の建築が年代を累ねても成功せず、終に「元正天皇七一二一遣ニ僧滿誓ヲ於筑紫ニ令レ造ニ觀世音寺一。俗名從四位上笠朝臣麻呂也」と記してゐるのは、以上の推測を證據づけるものである。彼はこの後少くとも七年間は筑紫にゐた。それは「萬葉集」卷五に、太宰帥として太宰府にゐた大伴旅人が、天平二年正月十五日、梅花の宴を催して知人と作歌したうちに彼の名が見えるし、その年十二月、旅人が歸鄉した後に筑紫の滿誓からおく

譬喩部の「鳥總立て足柄山に船木伐り樹に伐り行きつあたら船材を」の歌とが、萬葉鑑賞家の間に特殊な歌材を摑んだ歌として記憶されてゐる外には、特別にすぐれた秀作を見出し得ない。〔森本〕

萬象亭（まんざうてい）　「森羅萬象」を見よ。

萬代和歌集（まんだいわかしふ）　私撰集　二十卷　【著者】不詳。但し奧書には、寶治二年淺香山斗藪釋の編纂の由が見える。【成立】同じく奧書に、「寶治二年夏頃撰定了、暮秋被添削者也」とある。【諸本】丹鶴叢書戊申帙には、十本に分載し、國書刊行會の同叢書覆刻本には

「草根集」と合綴して收む。【內容】本集二十卷。序跋などなく、次の如く部立してある。春（卷一・二）、夏（卷三）、秋（卷四・五）、冬（卷六）、神祇（卷七）、釋敎（卷八）、戀（卷九―十三）、雜（卷十四―十九）、賀（卷二十）。內容は平安朝から鎌倉時代に至る和歌を撰してあるが、主として鎌倉期の人々の作が多い。「玉葉」「風雅」「新千載」「續千載」「續後撰」「新拾遺」「續古今」「新續古今」などの勅撰集に載せられた歌も見える。【價値】この時代、漸く多くなつた私撰類題和歌集の先驅をなしたものとして注意すべきであらう。

【研究書】萬代集緊要二卷（天保四年十二月成）○橘守部の萬代集の句格等の研究書（著者自筆原本、橘純一氏所藏）○萬代和歌集類題四册（藤堂保長）。〔松浦〕

マンダラ　詩集　【編者】マンダラ詩社　【刊行】大正四年三月、東雲堂。【解說】蒲原有明の「序文の代りに」の一篇は、象徵の本義を說いて、自家の立脚地を明示したものであるが、特に現前の實相を力說し、人間の意力と光明の涌出といふことを述べてゐる。「表現の生活が人生の曼陀羅を現證の法界に織り出すのである」ともいつてゐる。內容は七詩人の作品を收容してゐる。初めに三木露風の帆綱・夕暮・撓める枝・花と果實・雨心の諸篇、北原白秋の波・海雀・海景・馬・崖・雨中小景・城ケ島の雨、野口米次郎の廣重をうたつた英詩二篇、澤村胡夷の霜・暗き海・薄暮・船室・坦路、河井醉茗の丁子・溫泉三篇・女に對ひて、蒲原有明のわれは信ず・自畫像・現實の渦・不死・光明を塗れ・涌き出でよ・光明讚、上田敏の兩替橋・別離・雪・髮の毛・窓にもたれて等で、殆ど詩人として一家を成してゐる人の作ばかりであるが、ただ澤村胡夷の詩名が本書に依りて一層著しくなつた。この人にはその後に集がないから本書に發表された作品が、その詩感を窺ふ規準にもなる。象徵的手法の確實な表現である。本書の刊行された數年前に「あやめ草」「豐旗雲」の二詞華集があつた。本書刊行の意圖も詩社成立の旨意も殆ど同じであつて、詞華集としては高踏的であり、有力な位置を占めてゐたのは無論である。マンダラ詩社は蒲原有明方に置き、二回同人の集りもあつた。この結社が續いて詞華集の續刊が出來たら相當の影響を殘したらうが、惜しいことに一册限りで後は出なかつた。從つて「マンダラ」の影響といふほどのものは、後の詩壇にはなかつた。而して又その後には絕えてこの種の計畫もなく、類似の詞華集も刊行されることがなかつた。〔河井〕

萬亭應賀（まんていおうが）　戲作者　【本名】服部孝三郎【號】春頌齋。後に萬亭應賀、別に長恩堂【生歿】明治二十三年八月三十日、東京下谷金杉にて歿す。享年七十三（一二ともいふ）【墓所】入谷良感寺【法名】白蓮院往雲上生居士【閱歷】父服部長狹勾當は上總長狹郡の人、失明して江戶に來り、富を積んで勾當の位を買つたといふ。應賀は少時故あつて常陸下妻の藩主井上侯に仕へたといふが、幾ばくもなく辭したものと見え、弘化元年の頃から合卷に指を染め、戲作者の仲間入りをした。素より富家であつたので、戲作の傍ら照葉狂言とか茶番等の遊戲を好み、三味線も好く彈いた。このために大に財を散じ、戲作も最初は且那藝であつたものが本職になつたのであらう。幸ひ、弘化二年から出し始めた「釋迦八相倭文庫」（別項）が當つたので、やうやく戲作者としての位地を認められ、安政五年頃までに二十六七種の作を出した。併し、「御所奉公東日記」（安政元年）が十編以上に及んだ外、さう世評を博したものがなかつたらしい。ただ「倭文庫」だけは、近松の「釋迦如來誕生會」等によつたもので創案でないに拘はらず、大に歡迎され、明治以前五十餘編に及ぶ長篇となつた（別項參照）。明治に入つてからは、五年頃から諷刺戲作を出し始め、十一二年までに可なり多數に及んだ。勿論その意は童蒙婦女の敎訓といふつもりではあつたが、年齡が年齡だけに新時代の狀勢には一向通ぜず、回顧的な氣持が多かつたので、折角の敎訓的諷刺も往々反時代的な皮肉に終ることが少くない。十年以後、篠田仙果の「月とスッポンチ」に手傳つたりして幾分ジャーナリズムに近づかうとしかゝつたが、それは旨く行かなかつた。十六年頃から再び合卷の「明良二葉草」を執筆し、二十年（八編）に及んだ。かくて物的窮乏が漸く甚だしくなつて來た上、その子が又甚しい不孝者であつたので、晚年の應賀の生活は極めて暗澹たるものであつた。彼が金杉の陋巷で零落の生涯を終へた時には、彼の一女は下谷萬年町（貧民窟）の車夫の妻となつてゐたといふ。

【著作】釋迦八相倭文庫（別項）（弘化二年より明治四年まで）○孝惡兩面鏡○忠臣國姓爺將棊合戰○福德天長大國柱○敎訓浮世眼鏡（以上弘化元年）○大國初夢話○磁石山浮世精靈（以上同二年）○都鳥花の魁○武藝立身館双六○福神妹春扇○昔語戀仇浪○女夫矮狗戀小田卷○緣組大福帳（以上同三年）○葛葉九重錦（同四年）○英雄五大力○聖德太子大和鏡○賣初叶惠富久路○兩筋戀山道○忠臣藏之助立（以上嘉永元年）○神編藻鹽草○怪談春雛鳥（續筆）○本朝金剛傳（以上同二年）○日蓮記旭衣○敎訓武藏鐙（以上同三年）○鶯墳梅赤本（續筆、同四年）○御所奉公東日記（安政元年、第十三編文久元年）○紀文大盡入船帳（安政五年）等。

〔明治以後〕賢愚混談聖人肝潰志○理解新文五穀祭○大鈍詫新文鬼談（以上明治五年）○當世利口女○新制兎美だん語○ニヤアチウ談○蟲類大議論○和談三才圖笑（以上同六年）○小說三兵論（權兵衞種蒔論・太郞兵衞水掛論・孫兵衞活計論―同八年）○正札附智惠の秤○小說三箱（驕人必慄篋・吝驚懲面箱・於祓函―同八年）○金庫三代記○青樓半化通○東京花毛拔○日本女敎師○近世あきれ蓑○味噌すり男○諸藝畑水練○市の虎狩○馬鹿大妙藥（以上同七年）○童女早學文○賞罰天ラカフル○異形異物各覽會○修身千代見草（以上同八年）○活論學問雀○方今身代ばなし（同九年）○明良二葉草（同十六年）○修身圖繪仁義禮智信（同十七年）○萬福天カラフル（同十九年）等。

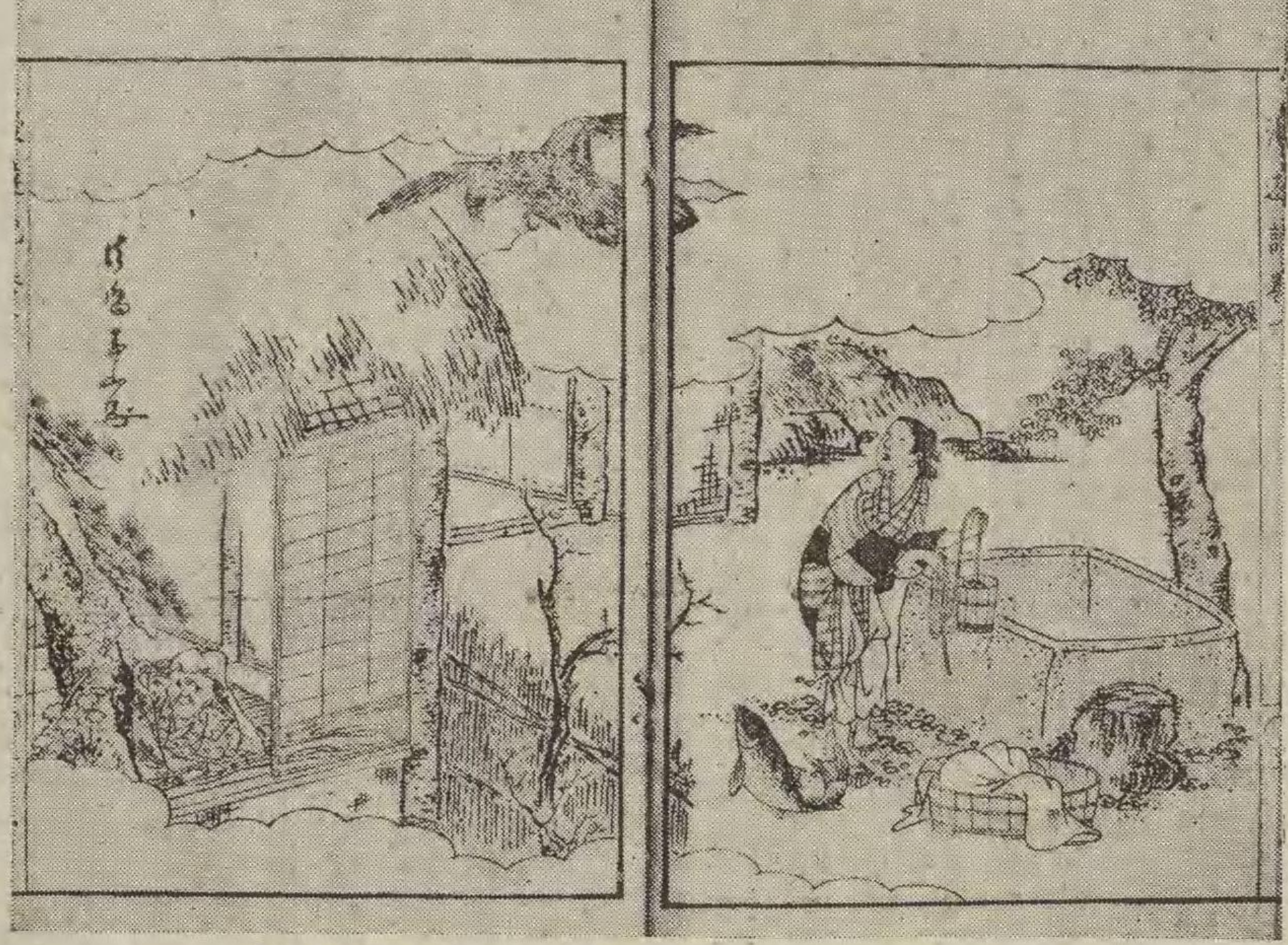
【業績】應賀は二世春水・魯文・有人と並んで幕末生殘りの戲作者中での長老である。だが明治に入つてからの生活は全然惰勢的なもので、その作物も多い割に世人の顧みるところとならず、又顧みるに値ひするものもなかつた。丁度魯文が幕末戲作者の開化主義を代表するに對し、應賀は衷心は開化社會に好意をもたず、往々時代に逆行するやうな矯激な語を吐き、その敎訓諷刺も新時代に適應する如く見せかけつつも、案外反動保守的な分子が多かつた。應賀の小說のことを朝野新聞の一投書家が、「其著スル所動モスレバ世理ニ反シ或ハ涅齒剃眉ノ容姿ニ左祖シ或ハ散髮ヲ賤ミ或ハ佩刀ヲ主張シ或ハ洋裝ヲ輕侮シ、古ヲ慕ヒ今ヲ嘲リ無法無的云々」といつてゐるが

大に當つてゐる。だが、それだけにこれ等の戲作が、文學史家にとつて一應の精査に値ひすることはいふまでもない。〔柳田（泉）〕

まんな 「漢字」を見よ。

萬年艸（まんねんさう） 雜誌 【刊行】明治三十五年十月創刊。翌年よりは隔月發行となり、滿一ケ年目第八卷を以て終刊となつた。【解說】「めざまし草」（別項）「藝苑」「藝文」（別項）の延長である。森鷗外・上田敏・井上通泰・佐佐木信綱・田山花袋、その他二三の女流も加はつた森派の硏究誌であつた。强ち新文學の紹介に止まらず、古典文學の輪講もやれば、劇の合評も發表してゐたが、創作方面の際立つた收穫はなかつた。〔齋藤（昌）〕

漫遊記（まんいうき） 讀本 五卷五册 【作者】建部綾足 【名稱】原名「をり〳〵草」、後、拔萃して刊行の時「漫遊記」と改む。【刊行】多く明和頃にをり〳〵書き蒐めたもの。寫本で傳はつたものを、後人が先づ十七話を選んで前編五册とし、寛政十年拙古老人の序を附して出版し、次いで後編五册を出版する積りで奥附に廣告してゐるが、遂に出版されなかつた。京都松屋兵衞・扇屋利助版。【諸本】流布の刊本は、寛政十年印行の繪入五册本で、日本名著全集（怪談名作集）所收本の底本。なほ寫本「をり〳〵草」は、春・夏・秋・冬の四卷に別ち、三十六話を載せてゐる。このうち、多く小說的奇構をもつたものが「漫遊記」に選ばれてゐる。幸田露伴校訂の名著文庫本・日本隨筆大成所收の「折々草」は、この寫本に據つてゐる。【解說】內容は一之卷、若狹の國の孝女、屁ひりの翁、龍石、野もりといふ蟲、連歌詠むを聞きて狸の笑ひし。二之卷、歌盜人、抱守主の兒に代りて死す、梅が代といふ香の名、鶯の巢に時鳥。三之卷、文月末の夜の光物、蜜の蜂になる、江戶の根岸にて女の住居を求む、蝶に命とられし人。四之卷、浪華の富人狐の子を得る、人を賴みて飛び入りし鴈。五之卷、男をこひて死にける女、寢言を云ふ癖など、作者の放浪生活中の見聞から題材を得て諸國の奇談を集め、そこに怪異の情調を織り出すといふのが作意である。諸國物語の形式を追つたもので、ただ奇事異聞を述べてゐるに過ぎない憾みがある。これは隨筆の態度を離れなかつた爲めであらう。「越路を旅行せし條」「武藏上毛の二國に水溢れしをいふ條」などは、編中の名什として推すべきものである。【參考】折々くさ幸田露伴校訂（名著文庫）〇怪談名作集解說山口剛（日本名著全集）〇日本隨筆大成解說 〔笹野〕



「漫遊記」挿繪（笹野堅氏藏）

萬葉緯（まんえふゐ） 硏究書 二十卷 【編者】今井似閑 【名義】支那の戰國秦漢の時に、聖人の經書を經として種々の說を說いた書を緯書と名づけ、經書を解說するの助けとした。兩漢の諸儒は皆これを信用して古註の中に引いた。それに倣ひ、「萬葉集」を經として、その緯となるべき諸書を集め、或は抄出して「萬葉」を說く助けとした意味である。【成立】元祿十三年か。【諸本】全部二十卷完備せる本は少い。京都府立圖書館所藏本は完備してゐる。一本には「新撰萬葉集」二卷、「和漢朗詠集」二卷、「眞名伊勢物語」二卷等は、世に刊本があるから略すと奥書に記して居り、これによれば、この三書の部分が簡略で、「新撰萬葉」と「眞名伊勢物語」が、全部を揭げずに語句の註解に止まり、「和漢朗詠集」が和歌を揭げたのみであるのも、かくの如き理由によつたものである。故にこの寫本には全部で合計二十三卷となる旨を記してゐる。右の三書が二卷に分れる筈であるのを一卷としたから、二十卷となつたのである。又元祿十三年の年號が見える（群書一覽）。今日の傳本の多くは、終りの五卷を缺く十五卷本である。國文註釋全書にも十五卷本によつて收めた。完備せる全本は未だ飜刻せられてゐない。【內容】題名によつても明かなる如く「萬葉集」を註解する助けとなる古歌・古文を諸典籍より抽出して、或るものには註解を附した書である。その古典籍の解題もあり、註解は多く漢文で簡明に記されて要を得てゐる。假字交り文で考說を加へた所もある。揭載した歌文の中には、萬葉假字に書き改めて記し、傍訓をも附けないものがあるので、甚だ紛はしい。古歌謠を蒐集することが最も多く、また註解・考證をも附してゐるので、一方から見れば、古謠集考證の書ともなつてゐる。（卷一）日本書紀の歌謠（本書の解題あり、厚顏抄によつて頭註を加ふ。傍訓を附す）。（卷二）古事記の歌謠（本書の解題あり、初めに歌謠の目錄あり、傍訓を附す）。（卷三）續日本紀の歌謠七首、日本後紀の歌謠十二首、漢詩二首、續日本後紀の歌謠四首、三代實錄の歌謠一首（いづれも本書の解題あり、頭註に註解を加へ、同歌の他書に見えるものをあげて異同を示した）。（卷四）台記別記中臣壽詞、貞觀儀式祭文、年中行事祕抄高橋氏文、拾芥抄宮咩祭文、釋日本紀龜兆傳、朝野群載中臣祓、春日若宮社神樂舞歌、釋奠祝文、八神殿の事（延喜式神名帳・古語拾遺・日本書紀・延喜式祈年祭祝詞・貞觀儀式大嘗祭式・舊事本紀・姓氏錄より拔萃す）、壺碑圖、太秦牛祭々文（以上の如く本卷は、雜然と古書より神祇祝祭の古文詞を集叙したものであるが、各本書の解說あり、今按として似閑の解說考證あり、甚だ詳しく、頭註もあつて、硏究上參考となる事がある）。（卷五）古今集所載神遊の歌（疊目の歌、大和舞の歌、近江ぶり、水莖ぶり、四極山ぶり）、大嘗會悠紀主基歌（廿一代集・催馬樂・夫木抄・歌仙家集等より拔く。出典・地名・作者等に關し、分註・頭註あり。また大嘗會の行事等に就いても考證す）。（卷六）踏歌章曲（日本後紀・朝野群載より拔く。踏歌の考證あり）、東舞歌章（東舞の歌の註解あり。また、八雲御抄・勅撰集・明月記等より求子歌の異歌を拔き、年中行事祕

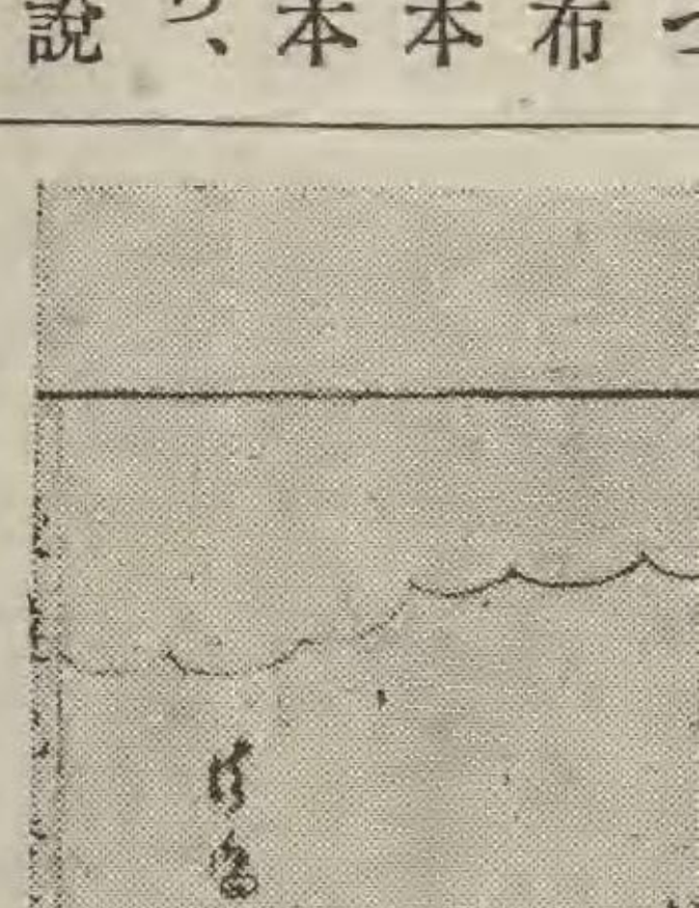
抄・扶桑略記・續世繼・貫之家集・夫木抄等によつて考證を加ふ）、今宮夜須禮章曲、內宮年中行事歌（何れも出典の解題、歌曲の考證あり。頭註に歌詞の註解あり）、年中行事祕抄鎭魂歌（終に、兼盛家集所載富士臨時祭の歌、日吉神道祕密記所載樂歌を揭ぐ）。（卷七）神樂歌（初めに目錄あり。拾芥抄の神樂目錄も揭ぐ。神樂の由來に就きて考證し、歌詞の註解あり。この卷のみ一冊として獨立せしめ、神樂歌註釋などと題せる寫本もあり）。（卷八）催馬樂（催馬

尾張國）。（卷十七）風土記殘篇（山城國・伊賀國・伊勢國・尾張國・河內國・遠江國・駿河國・蜂相記）。（卷十八）諸書風土記（諸書所引風土記の全文を集む）。（卷十九）樂詠幷詠曲（樂詠類は、續教訓抄によつて、神樂人長詞・振鉾鎭詞・輪臺詠より庶人三臺に至る二十一章を載せ、その他、陪臚破陣樂唱歌・想夫戀詠あり。郢曲は五節間郢曲の全部を揭ぐ）。史籍不レ記往古ノ年號（往古異年號、繼體より文武に至る二

と同じであるから、假名の一種とせられてゐるが、文字としては漢字であつて、平假名や片假名とは違つたものである（假名參照）。萬葉假名は、漢字專用時代には多く用ひられたが、平安朝に入つて、これから新に片假名・平假名が發生して普通に用ひらるゝに及んで、次第に用ひられなくなつた。しかし特別の場合には後世にも用ひられた。

語の意味を考へて、これと同義の漢字に譯する外には、その語と同音の漢字を以てこれを寫し、その漢字を讀めば、その語の音を得るやうにするのが常であつて（これを音譯といふ）外國の地名人名その他重要なる語には、この方法を用ひる事が多い。漢字が我國に入つて、邦人が漢文を書く事を學んでからは、日本の地名人名等を誌すのにかやうな音假名を

た。京都松屋兵衞・扇屋利助版。【諸本】流布の刊本は、寛政十年印行の繪入五冊本で、日本名著全集（怪談名作集）所收本の底本。なほ寫本「をり〳〵草」は、春・夏・秋・冬の四卷に別ち、三十六話を載せてゐる。このうち、多く小說的奇構をもつたものが「漫遊記」に選ばれてゐる。幸田露伴校訂の名著文庫本・日本隨筆大成所收の「折々草」は、この寫本に據つてゐる。【解說】內容は一之卷、若狹の國の孝女、屁ひりの翁、龍石、野もりといふ蟲、連歌詠むを聞きて狸の笑ひし。二之卷、歌盜人、抱守主の兒に代りて死す、梅が代といふ香の名、鶯の



（藏氏

いふのが作意である。諸國物語の形式を追つたもので、ただ奇事異聞を述べてゐるに過ぎない憾みがある。これは隨筆の態度を離れなかつた爲めであらう。「越路を旅行せし條」「武藏上毛の二國に水溢れしをいふ條」などは、編中の名什として推すべきものである。

【參考】折々くさ幸田露伴校訂（名著文庫）〇怪談

集」が和歌を掲げたのみであるのも、かくの如き理由によつたものである。故にこの寫本には全部で合計二十三卷となる旨を記してゐる。右の三書が二卷に分れる筈であるのを一卷としたから、二十卷となつたのである。又元祿十三年の年號が見える（群書一覽）。今日の傳本の多くは、終りの五卷を缺く十五卷本である。國文註釋全書にも十五卷本によつて收めた。完備せる全本は未だ飜刻せられてゐない。【內容】題名によつても明かなる如く「萬葉集」を註解する助け

太秦牛祭々文（以上の如く本卷は、雜然と古書より神祇祝祭の古文詞を集叙したものであるが、各本書の解說あり、今按として似閑の解說考證あり、甚だ詳しく、頭註もあつて、研究上參考となる事がある）。（卷五）古今集所載神遊の歌、韓神の歌、大和舞の歌、近江ぶり、水莖ぶり、四極山ぶり）、大嘗會悠紀主基歌（廿一代集・催馬樂・夫木抄・歌仙家集等より拔く。出典・地名・作者等に關し、分註・頭註あり。また大嘗會の行事等に就いても考證す）。（卷六）踏歌章曲（日本後紀・朝野群載より拔く。踏歌の考證あり）、東舞歌章（東舞の歌の註解あり。また、八雲御抄・勅撰集・明月記等より求子歌の異歌を拔き、年中行事祕

抄・扶桑略記・續世繼・貫之家集・夫木抄等によつて考證を加ふ）、今宮夜須禮章曲、內宮年中行事歌（何れも出典の解題、歌曲の考證あり。頭註に歌詞の註解あり）、年中行事祕抄鎭魂歌（終に、兼盛家集所載富士臨時祭の歌、日吉神道祕密記所載樂歌を掲ぐ）。（卷七）神樂歌（初めに目錄あり。拾芥抄の神樂目錄も掲ぐ。神樂の由來に就きて考證し、歌詞の註解あり。この卷のみ一册として獨立せしめ、神樂歌註釋などゝ題せる寫本もあり）。（卷八）催馬樂（催馬樂の意義等につきて考證あり。體源抄によつて目錄を出す。譜中抄の異名をも掲ぐ。註解もそなはる。本卷のみ一册として獨立せしめ、催馬樂註釋などゝ題せる寫本もあり）。（卷九）風俗・雜藝（風俗歌を出し、體源抄所載の雜藝の歌、奧入所載の風俗の上野歌、河海抄所載の今樣、袖中抄所載の風俗の小車、政事要略所載の衞門府風俗、夫木抄所載の梁塵祕抄の歌、拾玉集所載の今樣、續敎訓抄所載の今樣、梁塵祕抄口傳集所載の郢曲等あり。何れも考證註解そなはる。）（卷十）神代卷二神唱和、佛足跡石碑歌、古語拾遺の歌一首、日本靈異記の歌四首、聖德太子傳曆の歌四首、江次第の歌二首、江談抄の歌十首、扶桑略記の歌一首、和歌三式全部、明月記の歌七首、後撰抄の歌一首、曼荼羅緣起の歌一首、伊呂波字類抄の歌一首、延慶兩卿訴陳狀の歌二首、作者部類の歌五首、南方記傳の歌一首（和歌三式の如きは諸書に見える殘缺の文をも收め、頭註あり、原本の解說等もそなはる）。（卷十一）新撰萬葉集（全歌または一二句を掲げて、註解考證せるもの）。（卷十二）日本紀竟宴歌（本妙寺本によつて、歌詞を掲げ、註釋を加ふ。初めに日本紀竟宴の次第に就き證文を掲げ說明す）。（卷十三）眞名伊勢物語（語句の註釋）。（卷十四）和漢朗詠集（和歌のみを萬葉假字に改め記す。頭註傍註に校異考證あり）。（卷十五）出雲風土記（全部、校異あり。頭註に註釋あり）。（卷十六）風土記殘篇（近江國・和泉國・牟差國・豐後國・尾張國）。（卷十七）風土記殘篇（山城國・伊賀國・伊勢國・尾張國・河內國・遠江國・駿河國・峰相記）。（卷十八）諸書風土記（諸書所引風土記の全文を集む）。（卷十九）樂詠幷詠曲（樂詠類は、續敎訓抄によつて、神樂人長詞・振鉾鎭詞・輪臺詠より庶人三臺に至る二十一章を載せ、その他、陪臚破陣樂唱歌・想夫戀詠あり。郢曲は五節間郢曲の全部を掲ぐ）。史籍不レ記往古ノ年號（往古異年號、繼體より文武に至る二十八を載す）。（卷二十）近世（近世の和歌で古風を詠む人の作になる長歌・短歌を收む。坂士佛の歌十二首、下河邊長流の和歌三首、木瀨三之の和歌三首、契沖の和歌三首、宮川松堅の和歌二首、木下長嘯の和歌三首、松永貞德の和歌三首、契沖の歌及び序二章及び莫囂圓隣の歌の契沖の祕說（代匠記の說に異なる）及び琉球聘使記の文を載せてゐる）。

【價値】單に「萬葉集」讀解の助けとなるのみならず、廣く古歌謠集、又はその註解書として殆ど最初の書であり、古代文學研究者に多大の資料と暗示とを與へる點で、不朽の價値ある書である。後の古謠集、例へば「樂章類語鈔」の如き、「中古雜唱集」（各別項）の如き、何れも本書によらざるものはない。又風土記逸文の蒐集も本書に始まつて、後の學者に材料を與へ、樂詠の蒐集等は本書の達見とするところである。〔佐佐木〕

萬葉假名 まんえふがな　國語學　【名稱】萬葉集に多く用ひられてゐる故、かくいふ。眞假名・男假名とも。【解說】我が國に於ける漢字の音字的用法の一種であつて、國語の音聲を、これと同音なるよみ（音、又は訓）を有する漢字を以て寫したもの。萬葉假名で寫された日本語は、その音聲は漢字のよみと同じであるが、その意義はこれと全く關係がないのが普通である。萬葉假名は、その用法から觀れば假名と同じであるから、假名の一種とせられてゐるが、文字としては漢字であつて、平假名や片假名とは違つたものである（假名參照）。萬葉假名は、漢字專用時代には多く用ひられたが、平安朝に入つて、これから新に片假名・平假名が發生して普通に用ひらるゝに及んで、次第に用ひられなくなつた。しかし特別の場合には後世にも用ひられた。

【種類】萬葉假名の種類は、「萬葉集」の用字法の研究の一部として研究せられたので、その分類法は人によつて多少の相違があるが、大體次のやうにすれば、あらゆる場合を竭すことが出來よう。卽ち國語の音を寫すに、

（甲）漢字の音を用ひたもの（音假名）。

（一）一字で一音節を表はすもの。

（a）漢字音の全部を用ひたもの。阿・美・久・呂・乎の類。

（b）漢字音の一部分を用ひたもの。良・萬・吉・年・欲の類。

（二）一字で二音節を表はすもの。鬱・瞻・颯・金・南・越・乞の類。

（乙）漢字の訓を用ひたもの（訓假名）。

（一）一字で一音節を表はすもの。千・羽・日・八・間・三の類。

（二）一字で二音節又は三音節を表すもの。酒・鈴・大・欲・夏・慍の類。

（三）二字で一音節を表すもの。嗚呼・五十・蜂音・石花の類。

（四）二字又は三字で二音節を表すもの。水葱・少熱・二五・鴛鴦・小篠・八十一・神樂聲の類。

【沿革】漢字の音字的用法は、既に支那にもあつて、六書（漢字參照）の中の「假借」が卽ちこれである。殊に、外國語を漢文に譯する時、その語の意味を考へて、これと同義の漢字に譯する外には、その語と同音の漢字を以てこれを寫し、その漢字を讀めば、その語の音を得るやうにするのが常であつて（これを音譯といふ）外國の地名人名その他重要なる語には、この方法を用ひる事が多い。漢字が我が國に入つて、邦人が漢文を書く事を學んでからは、日本の地名人名等を誌すのにかやうな音假名を用ひたであらう事はいふまでもない。しかし又一方に於て、地名人名等の意義を考へて、これと同義の漢字を宛て、これを訓讀すればその語の音を得るやうにしたものもあり、更に進んでは、漢字を訓讀して、その語の音を得るだけで、意義に於ては關係なき漢字を以て寫す方法（卽ち訓假名）も亦用ひたであらう。推古時代の遺文に存する地名人名等は、兩樣の書法を用ひてゐる。その中、音假名は、漢字一字を一音節に宛て、數字を連ねて日本語を寫すのが常であつた。音假名に用ひた漢字の音は、勿論日本化したものであつて、中には一部分を略したものもある（吉・等・凡・明など）。字音（別項）としては、大體吳音の系統に屬するが、中には吳音とも一致しないものがあつて（奇・宜・明・移・侈・支・至・居・擧・意・己・止・已・里など）、これ等は、漢魏時代の古音の遺存したものであらうとの說があり（大矢透博士「假名源流考」參照）、古代の朝鮮の地名や、朝鮮人の記した文に見える漢字の音と一致するものがある所から、朝鮮人から學んだものであらうと考へられてゐる。この時代の音假名は、清音と濁音とは多くは別の字を用ひて區別したが、同音に對して種々の違つた文字を用ひる事少く、殊に一つ一つの文に於ては、同音は大概同じ字で書かれてゐる。推古朝より

奈良朝に近づくに從つて、同音に對して種々の文字を用ひる事が漸く增加する傾向が見えるが、奈良朝に出來た「日本書紀」や「萬葉集」などになると、同音異字が極めて多くなると共に、また平生多く用ひないやうなむづかしい文字をも用ひるに至つた。これは漢文が盛んに講ぜられて、漢字の使用が自由になり、技巧をこらすやうになつた爲めである。同じ理由からして、訓假名に於ても、「水葱少熱（なぎぬる）」「五十蜂音石花蜘蟵（いぶせくも）」のやうに文字を弄したやうなものさへも出來た。この時代に於ては「古事記」「日本紀」「風土記」などは、地名・神名・人名以外には音假名をのみ用ひたが、文書や「萬葉集」等には、訓假名を用ひ、又は音假名に混用したものもある。又音假名には、從來の吳音系統のものと共に漢音系統の音を用ひたものもあつて、同じ字が場合によつて違つた音を表はす事がある。然るに、奈良朝の後半に至れば、萬葉假名は次第に單純化して、一字一音節のものを用ひ、同じ書又は同じ文には、同音に對して種々の異字を用ひる事が少くなり、濁音も、專用の假名はあるが、淸音の假名を以て代用する事が多くなつた。この傾向は平安朝に入ると益々進んで、實用的の文に用ひる最も普通の字體は大體一定しようとする傾向を示し、濁音にも多くは淸音の假名を用ひるやうになつた。但し、「新撰萬葉集」（別項）や「日本紀竟宴和歌」には、同音異字も多く、普通用ひられぬやうな文字も見えるが、これは、前者は「萬葉集」の書法を摸し、後者は「日本書紀」の歌謠の書法の影響を受けた爲めであつて、特例と見るべきである。以上のやうに、實用的の文に於ける萬葉假名が、單純化統一化に向つて進んでゐた平安朝初期に於て、和歌や消息文に用ひられた萬葉假名から平假名（別項）が發生し、漢文の訓點に用ひられた萬葉假名から片假名（別項）が發生して、それ等が國語を寫すに便利であるために、以後盛んに用ひられるに及んで、萬葉假名は漸くその地位をこれに讓つて、平安朝中期以後は特殊の場合にしか用ひられないやうになつた。尤も、地名や姓氏などに用ひられた萬葉假名は、後世までもそのまゝ用ひられ、今日に及んでゐるものもあるが（「土佐」「紀伊」「讃岐」「土肥」「諏訪」など）、ただ傳統的の書法として襲用せられてゐるのであつて、假名として自由に用ひられてゐるのではない。

【萬葉假名と假名遣】萬葉假名が、日本語の音を寫す文字として普通に用ひられたのは平安朝の半以前までであつた。その時代の萬葉假名を調査すると、後世同音に發音する「い」と「ゐ」、「え」と「ゑ」、「お」と「を」、「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」と「わ」「ゐ」「う」「ゑ」「を」、「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」にあたる假名の間に區別がある。又、平安朝初期までのものにはア行のエとヤ行のエに當る假名の間に區別があり、又、大體奈良朝までのものには、「き」「ひ」「み」「け」「へ」「め」「こ」「そ」「と」「の」「よ」「ろ」の十二の假名にあたる萬葉假名はそれ〴〵兩類にわかれて、互に混ずる事は殆ど無かつた。かやうに、後世の假名に見られぬ區別が萬葉假名に存するのは、當時の國語に於ては、後世になかつた音聲があつたのであつて、それが後の時代に起つた音聲變化の結果、他の音と同音となつて、これと混同したものと認められる（別項「國語」の中「國語の沿革」の條參照）。かやうな後世に於て滅びた音の存在が當時の萬葉假名によつて知られるのは、萬葉假名が當時の音を忠實に寫してゐるためとおもはれる。又、平安朝初期以來起つた音便（別項）といはるる音變化も、萬葉假名で書かれたものの上に明かに見られるのである。それ故、平安朝半以前の萬葉假名は、大體に於てその時代その時代の發音を寫したものであつて、時代と共に音の變化するに應じて、その假名をかへて行つたものと考へられる。即ち、當時の萬葉假名の用法は、大體に於て表音主義であつたのである。しかしながら、異る音は大抵異る文字で寫してゐるといふだけで、同じ音は必ずしも同じ文字でなく、いろ〳〵違つた文字を用ひてゐるのであるから、この點に於て嚴格な表音主義でなく、寧ろ同じ音ならばどんな文字で寫してもよいといふ主義であつたと見るべきである。（この項、「假名」「假名遣」「片假名」「平假名」「文語」參照）

【參考】假名發達史序說　春日政治（岩波講座日本文學）○假名源流考　大矢透○古事記傳總論　本居宣長○日本書紀訓考　關四郎太○萬葉用字格　春登○萬葉集古義總論　鹿持雅澄○萬葉集の研究（文字の用法を中心として）森本治吉　○萬葉集の用字法　松山愼一（短歌講座、修辭文法篇）○假名遣奧山路　石塚龍麿　○古言淸濁考　同上　○古言衣延辨　奧村榮實○韻鏡考　大矢透○假名遣及假名字體沿革史料　同上　〔橋本〕

萬葉考槻落葉（まんえふかうつきのおちば）　註釋書

三册　**【著者】**荒木田久老　**【成立】**天明八年　**【刊行】**寬政十年　**【諸本】**天明八年自序のある木版本と萬葉叢書所收の活版本とがある。**【內容】**初めに藤原持豐の序文、天明八年六月二十二日の自序及び附言がある。卷三のみの註解である。卷一・二の解は賀茂眞淵の「萬葉考」にあるからそれに讓つて、卷三を註釋したのである。歌詞を大きく一二句づつ記し、その下に割註として註釋を加へ、又頭註があつて補說した。上卷は大伴旅人の讃酒歌まで、下卷は沙彌滿誓の歌より始まる。別記が一册ある。卷四以下も稿本があるといふが、未見。**【價値】**牽强附會の說も見え、證例を擧げず臆斷を以て文字を改めたところもあるが、創說多く、その新たに附した訓が後に定訓となつたものもあり、多くの暗示を研究者に與へる點で、「萬葉集」卷三の研究に缺くべからざる著である。頭註には本居宣長の說を擧げて反駁した所がある。　〔佐佐木〕

萬葉集（まんえふしふ）　歌集　二十卷　【名義】

古來、萬の言葉を集めた集と云ふ意味と、萬世の集と云ふ意味と二つに解されてゐる。第一の說は、仙覺が「萬葉集抄」に唱へて以來、東麿・眞淵これに從ひ、雅澄等は第二說を唱へ、契沖は兩說を擧げて未定のまゝにとゞめてゐるが、山田孝雄氏は第二說に確實な論證を與へた（萬葉集名義考・國語と國文學第二卷第二號）。**【別名】**平安朝の初め、「新撰萬葉集」（菅家萬葉集參照）が出來てから、それに對して平安朝から中世へかけて「古萬葉」と云つたことがある（源順集・權記・枕草子・袋草紙・新猿樂記・古今和歌集目錄・三十六人歌仙傳・範兼和歌童蒙抄等）。別に嵯峨天皇の作と傳へる古萬葉集、序と云ふものがあるのは、眞僞不明である（「古萬葉集」に關しては、木村正辭博士の「萬葉集書目提要」上卷附錄十九頁—二十三頁參照）。なほ橫田美水の著はした「古萬葉集」（享和三年）は、流布の「萬葉集」を往昔の「古萬葉集」の姿に歸すと云ふ抱負で、美水が私かに名づけたものである。また「古萬葉集」とは卷一・二だけを言つたとする說があるが、從ひがたい（萬葉集第九卷考・國語と國文學、昭

萬葉假名表

ア　阿婀鞅安愛英。吾余我足嗚＝呼
イ　伊以異易怡壹移已意夷肄。射膽五＝十
ウ　宇汙紆于禹羽烏有雲。得菟兎卯
エ　愛哀埃衣依。榎可＝愛荏得（以上ア行の
エ）延曳睿叡盈要緣裔。兄柄技吉江（以

藝
〔濁音〕牙雅下夏霓（以上甲類）宜義皚㝵
碍礙偈。削（以上乙類）
コ　〔淸音〕古故胡姑祜枯固高庫顧孤。子
兒小粉籠（以上甲類）許己巨渠去居虛擧
據莒興。木（以上乙類）沽箇
〔濁音〕胡吳誤虞五吾語後（以上甲類）碁

馬（以上甲類）曾層贈增僧憎則賊所諸。
其衣襲膂彼苑（以上乙類）噌贈疏楚
〔濁音〕俗（以上甲類）叙存鐏鋤序茹（以上
乙類）增
タ　〔淸音〕多哆侈他椛拖陁挖陀太馳當黨
託丹淡談澹。田手
〔濁音〕陀佗太汰那囊嚢彈曇壇

萬葉假名表

ア	阿婀鞅安愛英。吾余我足嗚＝呼
イ	伊以異易怡壹移已意夷肄。射膽五＝十
ウ	宇汙紆于禹羽烏有雲。得菟兎卯
エ	愛哀埃衣依。榎可＝愛荏得（以上ア行のエ）延曳睿叡盈要緣裔。兄柄枝吉江（以上ヤ行のエ）頴娃翳英鹽
オ	於淤唹意億憶隱飫乙矣應愛
カ	〔淸音〕甲加迦伽賀架嘉賀可訶軻柯舸河哥歌何呵珂奇箇介家閑汗甘。香鹿蚊日歟 〔濁音〕賀駕我餓俄峨鵝鵞蛾何河荷宜
キ	〔淸音〕支岐伎妓吉棄弃枳企耆祇祁。寸杵服來（以上甲類）歸己紀記忌幾機基奇綺騎寄氣既貴癸。木城樹（以上乙類）磯起喜 〔濁音〕藝岐伎儀蟻祇嶬（以上甲類）疑擬義宜（以上乙類）義
ク	〔淸音〕久玖句絇口區矩屨寠苦君衢九鳩孔丘求救球恭勾拘具倶群。來 〔濁音〕具愚遇娛虞隅求
ケ	〔淸音〕祁計稽家奚鷄雞谿溪啓價賈結。異（以上甲類）氣開既槪概慨該階戒凱愷居擧希。毛食飼消笥（以上乙類）介態遺藝 〔濁音〕牙雅下夏霓（以上甲類）宜義皚导碍礙偈。削（以上乙類）
コ	〔淸音〕古故胡姑祜枯固高庫顧孤。子兒小粉籠（以上甲類）許己巨渠去居虛擧據莒興。木（以上乙類）沽箇 〔濁音〕胡吳誤虞五吾悟後（以上甲類）碁其期語馭御（以上乙類）
サ	〔淸音〕左佐沙娑紗砂差瑳嵯磋作舍散草柴積匝薩讃贊。迮狹猨猿 〔濁音〕邪奢社裝奘藏躲射謝坐座
シ	〔淸音〕斯志師色之芝士始辭時詩侍旨指思偲此紫信璽伺嗣司詞式試次資絁施玆滋子尸矢笑新四死趾事水進悉自糸祀肆私枳。石礒羊＝蹄二＝二重＝二並＝二 〔濁音〕士自珥茸餌兒爾貳盡慈緇仕寺時事字
ス	〔淸音〕須湏州洲周素殊珠輸秀主酒蒭數諏寸儒壽。酢巢樔栖酸簀爲渚 〔濁音〕受授儒孺聚
セ	〔淸音〕勢世西栖齊劑制細施是。湍瀨背迮迫石＝花 〔濁音〕是筮噬
ソ	〔淸音〕蘇蘓宗素泝祖巷嗽。十麻磯追＝馬（以上甲類）曾層贈增僧憎則賊所諸。其衣襲蔣彼苑（以上乙類）噌贈疏楚 〔濁音〕俗（以上甲類）敍存鐏鋤序茹（以上乙類）增
タ	〔淸音〕多哆侈他柂拖陁拕陀太馳當黨託丹淡談澹。田手 〔濁音〕陀柁太駄娜囊儴彈曇墮
チ	〔淸音〕知智致擲池馳笞至治遲鎭恥峙値珍陳。道千乳茅父血市 〔濁音〕遲治尼泥旎地膩
ツ	〔淸音〕都兎菟莵屠徒通追途突鬪豆川。津 〔濁音〕豆頭逗圖砮
テ	〔淸音〕弖氐底庭帝諦題堤提傳天亭。手代直 〔濁音〕傳殿提泥涅耐涅弟低侄羝。出
ト	〔淸音〕刀斗土杜度渡妬覩徒塗都圖屠。外砥礪戸聰利速門（以上甲類）止等登鄧騰藤臺苫澄得。迹跡鳥十與常飛（以上乙類）兎東 〔濁音〕度奴怒渡（以上甲類）杼滕藤騰迺耐特（以上乙類）
ナ	那娜儺難奈柰乃南男寧。名浪中菜魚七莫
ニ	爾尔邇迩儞耳珥尼二仁貳而人兒柔。

名を以て代用する事が多くなつた。この傾向は平安朝に入ると益々進んで、實用的の文に用ひる最も普通の字體は大體一定しようとする傾向を示し、濁音にも多くは淸音の假名を用ひるやうになつた。但し、「新撰萬葉集」（別項）や「日本紀竟宴和歌」には、同音異字も多く、普通用ひられぬやうな文字も見えるが、これは、前者は「萬葉集」の書法を摸し、後者は「日本書紀」の歌謠の書法の影響を受けた爲めであつて、特例と見るべきである。以上のやうに、實用的の文に於ける萬葉假名が、單純化統一化に向つて進んでゐた平安朝初期に於

又、大體奈良朝までのものには、「き」「ひ」「み」「け」「へ」「め」「こ」「そ」「と」「の」「よ」「ろ」の十二の假名にあたる萬葉假名はそれ〴〵兩類にわかれて、互に混ずる事は殆ど無かつた。かやうに、後世の假名に見られぬ區別が萬葉假名に存するのは、當時の國語に於ては、後世になかつた音聲があつたのであつて、それが後の時代に起つた音聲變化の結果、他の音と同音となつて、これと混同したものと認められる（別項「國語」の中「國語の沿革」の條參照）。かやうな後世に於て滅びた音の存在が當時の萬葉假名によつて知られるのは、萬葉假名が當時

の用字法 松山愼一（短歌講座、修辭文法篇）○假名遣奧山路 石塚龍麿 ○古言淸濁考 同上 ○古言衣延辨 奧村榮實○韻鏡考 大矢透○假名遣及假名字體沿革史料 同上 〔橋本〕

萬葉考槻落葉（まんえふかうつきのおちば） 註釋書 三册 **【著者】** 荒木田久老 **【成立】** 天明八年 **【刊行】** 寛政十年 **【諸本】** 天明八年自序のある木版本と萬葉叢書所收の活版本とがある。**【內容】** 初めに藤原持豐の序文、天明八年六月二十二日の自序及び附言がある。卷三のみの註解である。卷一・二の解は賀茂眞淵の「萬葉考」にあるからそれに讓つて、卷三を註釋した

ら中世へかけて「古萬葉」と云つたことがある（源順集・權記・枕草子・袋草紙・新猿樂記・古今和歌集目錄・三十六人歌仙傳・範兼和歌童蒙抄等）。別に嵯峨天皇の作と傳へる古萬葉集ノ序と云ふものがあるのは、眞僞不明である（「古萬葉集」に關しては、木村正辭博士の「萬葉集書目提要」上卷附錄十九頁—二十三頁參照）。なほ橫田美水の著はした「古萬葉集」（享和三年）は、流布の「萬葉集」を往昔の「古萬葉集」の姿に歸すと云ふ抱負で、美水が私かに名づけたものである。また「古萬葉集」とは卷一・二だけを言つたとする說があるが、從ひがたい（萬葉集第九卷考・國語と國文學、昭

丹袁煎荷似于

ヌ 怒努弩（以上甲類）奴農濃莚（蕤）。沼渟渚
寐犬去（以上乙類）

ネ 泥尼涅禰祢佞年然褹。根

ノ 能乃廼努。笑篦野

ハ 〔清音〕波皮破婆簸播幡皤潘半絆伴判
胖巴把盤方芳房薄博泊發撥番。葉羽
齒磐石八者早速
〔濁音〕婆麻磨麼魔摩伐馬

ヒ 〔清音〕比毘卑辟避譬臂必賓嬪。日氷
檜負飯（以上甲類）非斐悲肥彼被飛秘。
火乾簸樋（以上乙類）皮稗碑
〔濁音〕毘毗妣弭寐鼻彌弥婢（以上甲類）
備眉媚縻。傍（以上乙類）味

フ 〔清音〕布賦浮赴甫輔府符不否敷富副
普父夫扶。經生歷乾
〔濁音〕夫扶服步矛霧鶩部文父福。蜂＝
音

ヘ 〔清音〕幣弊斃蔽敝平鞞霸陛反返遍。
部隔方重邊畔家（以上甲類）閇閉倍陪杯
珮俳沛。綜瓮缶甕甋瓺經戸（以上乙類）
俾音
〔濁音〕辨蘗謎便別（以上甲類）倍每（以上
乙類）

ホ 〔清音〕富本菩番蕃品保褒裒朋袍報倍
陪布凡煩乏寶抱。穗粒火頰太大帆
〔濁音〕煩

マ 麻摩磨魔麼莽馬萬万滿明末。目眞信
間喚＝犬

ミ 美彌弥瀰弭寐湄民。三參御見視眷水
（以上甲類）微未味尾。箕實身（以上乙類）

ム 牟无無武鵡務霧夢謀茂模侔。身六將
牛＝鳴

メ 賣咩謎綿面馬。女（以上甲類）米每梅瑇
妹昧晩。目眼海＝藻（以上乙類）迷兎

モ 毛（以上甲類）母（以上乙類）茂謀慕暮謨摸
漠莫望莽梅文門問聞悶蒙勿物忘木
儛。裳喪藻面

ヤ 夜也椰耶邪野楊移陽養掖益冶。屋八
矢箭文綾䠶

ユ 由喩踰瑜愈臾庾遊悠融。湯結忌柚弓

ヨ 用庸遙容欲。夜（以上甲類）余與豫餘譽
預已。四世代吉（以上乙類）輿

ラ 羅邏囉攞良浪郎朗樂。等

リ 里理釐裡利唎梨犁離隣驪。入

ル 琉流㐬留瑠屢婁樓盧蘆縷漏類

レ 禮例列烈黎戻連麗。村

ロ 漏路露婁樓魯盧（以上甲類）呂侶閭慮廬
稜勒里（以上乙類）

ワ 和倭涴過丸王。輪我

ヰ 韋謂渭胃威委萎偉位爲尉。井猪居藍
座

ヱ 惠衞穢會隈回廻畫越。殖咲

ヲ 袁遠烏鳴塢隖乎呼弘泓廻惋越惡怨溫
曰。尾小男士峽雄麻緒少叫

注意

一　この表は、國語の一音節を表はす萬葉假名のみを舉げたもので、數音節を表はすものは之を省いた。

二　淸音の假名は時として、濁音にも用ひられる。同じ字が〔淸音〕と〔濁音〕との兩部にあるのは、一の書には濁音專用であるが、他の書には淸音にも用ひられるものである。

三　同音の假名で古く二類に分れてゐたものは、甲乙の二類に分つた。何れの類に屬するか決定し難いものは集めて最後に置いた。

四　同じ假名又は同類の假名では、音假名を前に訓假名を後に置いた。。印以下が訓假名である。

五　ヌの假名を二類に分つたが、實は、ヌは乙類だけで、ヌの甲類をノの甲類とし、ノの假名をノの乙類とする方が正しいやうである（その場合に、ノの中の「努」と「野」は所屬未定となる）。併し、さうすれば、現今一般に行はれてゐる上古文の讀み方（「野」「偲」「篠」「角」などをヌ・シヌブ・シヌ・ツヌとよむ類）と相違することとなる故、姑く假名遣奧山路の說によつた。

和四年十二月）。【卷數】二十卷。但し現行のものは鎌倉時代に仙覺の校定した本であるから（それ以前の寫本もあるが、二十卷揃つた寫本は現在は無い）、平安朝・奈良時代に遡つて何卷であつたかは正確に知り難い。ただ「古今和歌集」は「萬葉集」に倣つて作られたもので、最初は「續萬葉集」と名づけられてゐた。その「古今和歌集」が二十卷であるから、醍醐天皇當時の「萬

第三種（撰者不明）のものは、卷一・二・七・十・十一・十二・十三・十四・十五の九卷である。この内卷一と二が同一編者の手で編まれた事だけは疑ひがない（但し後に言ふ橘諸兄の編した卷が、若し「萬葉集」二十卷中にあるとすれば、この九卷の中の何れかである事だけは確かである）。而してこの個々の卷々を今の順序と分量とに整頓して今見る形に編成し上げた人、所謂「萬葉集」の撰者に關する古來の說は、約十四・五に上る。

（4）家持・憶良等の編んだ種々の集の混合したものとする說（眞淵の「萬葉考別記」一の中の「卷のついで」の條）。（5）撰者を誰と指定しないが、兎に角家持以後に現在の「萬葉集」は撰ばれたとする說（武田祐吉氏の「上代國文學の研究」）。この外に品田太吉氏の「萬葉集」卷一・二勅撰說がある。なほ外に濱成等が撰んだとする說（基俊口傳）、山上憶良說（今鏡）、諸兄・家持・濱成說（神明鏡）等があるが、これ等は顧みるに足りな

藤原行成の書寫の事が行成の日記なる「權記」に、道長が上東門院に獻するため、藤原家經に筆寫せしめた事が仙覺の「萬葉集」の奧書に見える。又藤原淸輔の「袋草紙」に、「萬葉集」はもと所在稀であつたが、橘俊綱が法成寺寶藏本を書寫し、後、藤原顯綱も亦書寫してから世間に流布したと記す（武田祐吉氏著「萬葉集書參考」）。この外にも平安朝から鎌倉初頭にかけて多くの筆寫が行はれた事と思はれるが、何れ

〔濁音〕夫扶服歩矛霧鶩部文父福。蜂〃
音

ヘ 〔清音〕幣弊獘蔽獙平鞞覇陛反返遍。
部隔方重邊畔家（以上甲類）閇閉倍陪杯
珮俳沛。綜瓫缶甕瓱瓶經戸（以上乙類）
俾音
〔濁音〕辨薜謎便別（以上甲類）倍毎（以上乙類）

ホ 〔清音〕富本菩番蕃品保褒哀朋袍報倍

ヨ 用庸遙容欲。夜（以上甲類）余與豫餘譽
預已。四世代吉（以上乙類）興

ラ 羅邏囉攞良浪郎朗樂。等

リ 里理蟄裡利唎梨犁離隣驪。入

ル 琉流茺留瑠屢婁樓盧廬縷漏類

レ 禮例列烈黎戻連麗。村

ロ 漏路露婁樓魯盧（以上甲類）呂侶閭慮廬
稜勒里（以上乙類）

ワ 和倭涴過丸王。輪我

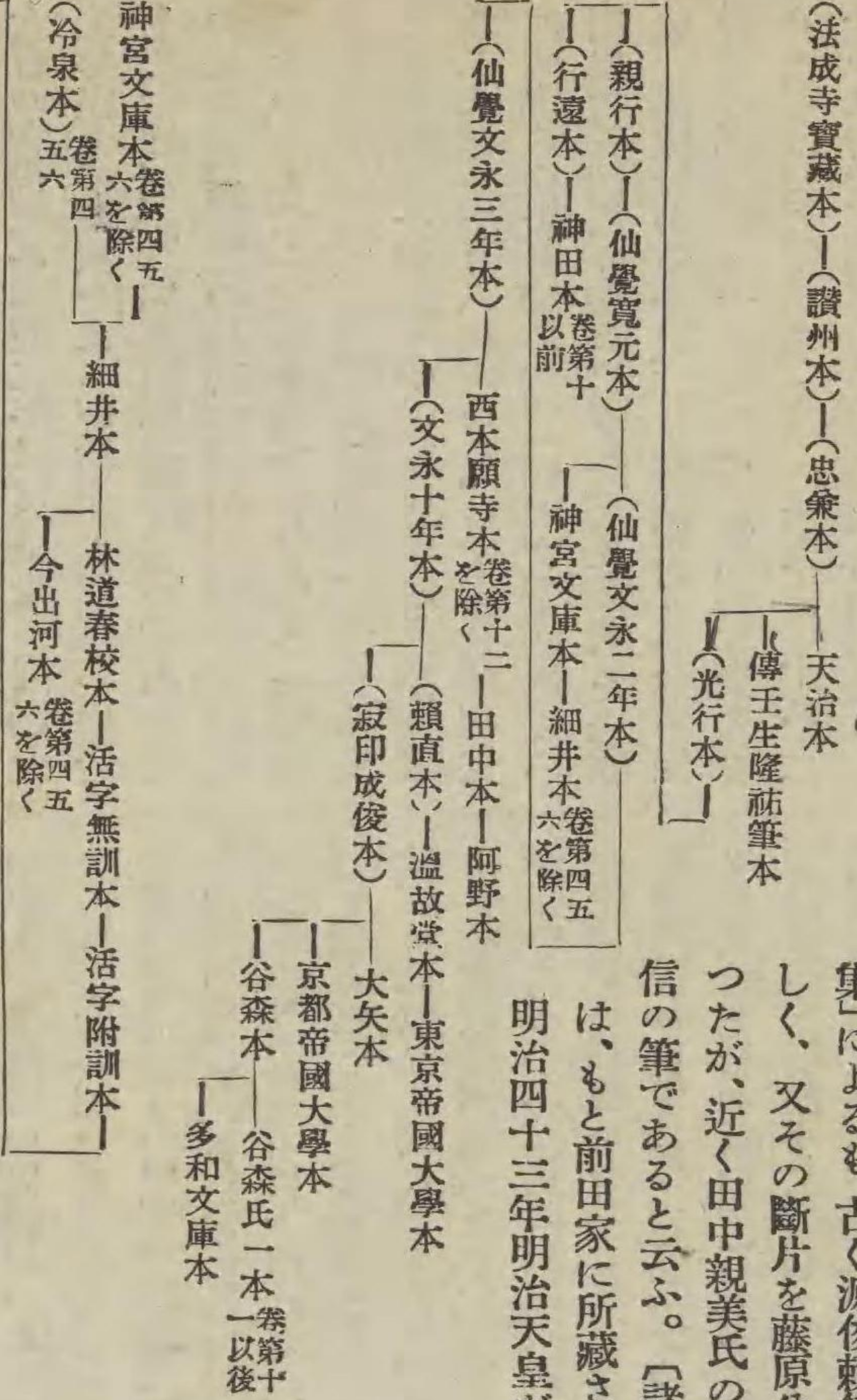
假名を後に置いた。。印以下が訓假名である。

五 ヌの假名を二類に分つたが、實は、ヌは乙類だけで、ヌの甲類をノの甲類とし、ノの假名をノの乙類とする方が正しいやうである（その場合に、ノの中の「努」と「野」は所屬未定となる）。併し、さうすれば、現今一般に行はれてゐる上古文の讀み方（「野」「偲」「篠」「角」などをヌ・シヌブ・シヌ・ツヌとよむ類）と相違することとなる故、姑く假名遣奥山路の説によつた。

和四年十二月）。【卷數】二十卷。但し現行のものは鎌倉時代に仙覺の校定した本であるから（それ以前の寫本もあるが、二十卷揃つた寫本は現在は無い）、平安朝・奈良時代に遡つて何卷であつたかは正確に知り難い。ただ「古今和歌集」は「續萬葉集」と名づけられてゐた。その「古今和歌集」が二十卷であるから、醍醐天皇當時の「萬葉集」は既に二十卷であつたらしい。【成立】「古今集」卷十八雜下の文屋のありすゑの歌や新撰萬葉集序や古今集序には、ただ奈良時代の古歌を編纂したものと漠然と語つてゐるに過ぎぬが、「古今集」の眞名序に至つて、「昔平城天皇、詔㆓侍臣㆒令㆑撰㆓萬葉集㆒。自㆑爾以來、時歷㆓十代㆒、數過㆓百年㆒」と、やゝ年代を明かにし、「榮華物語」月の宴の中に、「むかし高野の女帝の御代天平勝寶五年には、左大臣橘卿大夫等集りて萬葉をえらび給ふ」と、年號や撰者名を擧げ、仙覺は「萬葉集註釋」（仙覺抄）中に彼の見た「萬葉集」の奥書に諸兄が撰んだと記してあつたと云ふ意味を述べてゐる。又「元曆校本萬葉集」の第一卷の目錄の所に、「裏書云、高野姫天皇天平勝寶五年、左大臣橘諸兄撰㆓萬葉集㆒」と云ふ書き入れがある。以上が萬葉撰定に關する全資料である。【編者】「萬葉集」は、相異なる性質の卷々を雜然と寄せ集めた未整頓の集成であるから、各卷の編者と全部の編者とは必ずしも一致しない。第一種（撰者分明のもの）は、卷三・四・六・八・十七・十八・十九・二十の八卷で、全部大伴家持（別項）の編纂にかゝる。第二種（撰者の推測され得るもの）は卷五・九・十六の三卷で、卷五は山上憶良（別項）か家持かである。卷九は高橋蟲麻呂（別項）でないかと思はれ、卷十六は家持でないかと思はれる。第三種（撰者不明）のものは、卷一・二・七・十・十一・十二・十三・十四・十五の九卷である。この内卷一と二が同一編者の手で編まれた事だけは疑ひがない（但し後に言ふ橘諸兄の編した卷が、若し「萬葉集」二十卷中にあるとすれば、この九卷の中の何れかである事だけは確かである）。而してこの個々の卷々を今の順序と分量とに整頓して今見る形に編成し上げた人、所謂「萬葉集」の撰者に關する古來の説は、約十四・五に上る。（1）の（イ）平城天皇が侍臣をして撰ばしめられたとする説（古今集眞名序。顯昭著「古今集序註」及び同人著「萬葉集時代」難事）。（1）の（ロ）家持が死んだ直後、大伴家が罰せられた時、官に沒收した大伴家所藏の家集類に、官所藏の歌集等を加へて平城天皇が「萬葉集」を勅撰せしめられたが、卷二を終つた時、或る故障が起つて中止し、未整理の儘傳はつたのが現「萬葉集」であると云ふ説（「皇國」大正十一年二月號所載、折口信夫氏説）。（2）の（イ）橘諸兄が撰んだとする説（「仙覺抄」「元曆校本萬葉集」及び「萬葉集書目提要」中の木村正辭博士説）。（2）の（ロ）諸兄が諸卿と撰んだとする説（榮華物語）。（2）の（ハ）聖武帝の時諸兄が撰んだものに、孝謙帝の勅により藤原眞楯が加へたとする説（道因・勝命・顯仲）。（2）の（ニ）諸兄の撰に家持が附加したとの説（藤原實熙著「拾芥抄」に在る定家卿の説。「詞林采葉抄」中の由阿の説。「萬葉集註釋」中の仙覺の説。眞淵著「萬葉解通釋並釋例」に見ゆる荷田春滿の説。「萬葉集美夫君志」中の木村博士説）。（3）家持私撰説（藤原淸輔の「袋草紙」。藤原定家の「萬時」。契沖の「精撰本代匠記惣釋」。本居宣長の萬葉集重載歌及び全篇卷之次第之事。久松潜一氏の「萬葉集の新研究」。但し最後の三氏は、家持が一時にでなく二度程に撰んだとする説である）。撰者を未定とする説には（4）家持・憶良等の編んだ種々の集の混合したものとする説（眞淵の「萬葉考別記」一の中の「卷のついで」の條）。（5）撰者を誰と指定しないが、兎に角家持以後に現在の「萬葉集」は撰ばれたとする説（武田祐吉氏の「上代國文學の研究」）。この外に品田太吉氏の「萬葉集」卷一・二勅撰説がある。なほ外に濱成等が撰んだとする説（基俊口傳）、山上憶良説（今鏡）、諸兄・家持・濱成説（神明鏡）等があるが、これ等は顧みるに足りない。以上（1）—（5）の説を要約して見ると、（1）は平城天皇を中心とした説、（2）は橘諸兄を中心にした説、（3）は大伴家持を編者と見る説、（4）は以上の（2）（3）に憶良その他を加へた説、（5）は今日最も勢力ある説（3）を破らうとするものである。【傳來】詳かでない。ただ醍醐天皇の當時既に二十卷の形であつたらうと推察される事、又その當時「萬葉集」の編纂事情が忘れられかけてゐたことは、「古今集」の文屋のありすゑの記事で明かである。「源氏物語」の梅が枝の卷に、「嵯峨のみかど」（現實の嵯峨天皇のことか否か不明）が「古萬葉集」四卷をえらばれたと云ふ記事がある。又、嵯峨天皇の御製だと云ふ「古萬葉集」の序と云ふがあり、紀貫之の「萬葉四卷抄」と云ふがあると「和歌現在書目錄」に記してある。以上の三つは果して信ずべき事柄か否か決し難い。故に「萬葉集」の傳來に關する最初の正確なる資料は、醍醐天皇の皇后藤原穩子の日記なる「大后御記」の記事である。即ちそのうちに、「せんだいの御てのまんえうしふ」とあるのが即ち醍醐天皇の筆寫の「萬葉集」の意で、かゝる「萬葉集」の寫本が當時存在したものである（「國語國文の研究」和田英松）。これに次いで、小野道風が「萬葉」を筆寫した事が「榮華物語」に、藤原行成の書寫の事が行成の日記なる「權記」に、道長が上東門院に獻ずるため、藤原家經に筆寫せしめた事が仙覺の「萬葉集」の奥書に見える。又藤原淸輔の「袋草紙」に、「萬葉集」はもと所在稀であつたが、橘俊綱が法成寺寶藏本を書寫し、後、藤原顯綱も亦書寫してから世間に流布したと記す（武田祐吉氏著「萬葉集書參考」）。この外にも平安朝から鎌倉初頭にかけて多くの筆寫が行はれた事と思はれるが、何れも知ることを得ない。今日見得る平安朝期の「萬葉集」は、「桂本萬葉集」「金澤本萬葉集」「藍紙本萬葉集」や、下つて「天治本萬葉集」「元曆校本萬葉集」の五つである。その他、鎌倉以降の古寫本・古版本は極めて多い。〔以上森本〕

【古寫本】〔桂本萬葉集〕一軸〔名義〕桂宮舊御藏本萬葉集の義。〔形狀〕紫・白・藍・黃・朽葉・茶・草・薄赤の八色の繼色紙に、金銀泥で花鳥草木を描いて、これに「萬葉集」を書寫した縱八寸八分の卷子本である。〔筆者〕四説ある。紀貫之説は桂本の題簽、内箱及び外箱の表に記すところ、源順説はこの本の斷簡を古筆家に於て栂尾切と名づけ、源順の筆と稱へるによる。又「權記」長保三年五月二十八日の條に、繼色紙一卷に「古萬葉」を書寫した記事があるので、藤原行成筆といふ説もあり、宇治鳳凰堂の色紙形の文字と似てゐるので源俊房筆と云ふ説もあるが、何れも確證はない。平安朝中期の能書の筆と云ふに止まる。〔諸本〕原本は、もと前田利家の室芳春院の藏したのを、八條宮、即ち後の桂宮に奉り、明治に至つて帝室の御物となつた。又本書より切り離された斷簡は、「桂萬葉」或は栂尾切と稱して手鑑類に押されて諸家に珍藏せられ、目錄の斷片も亦殘存してゐる。帝室御物の桂本は明治

三十二年に田中伯爵が允許を蒙つて百部を印行し、大正十五年に萬葉祕寶の一として複製刊行した。〔解說〕「萬葉集」卷四の古寫本で、もと全卷あつたものが、卷首・中間・卷尾にわたつて取去られた部分があつて、今十六張四百九十三行を殘すのみで、卷四の相聞の歌三百九首の中、百九首だけの零卷となつた。又卷首には、もと目錄が附いてゐた。本文は題詞を高く書き、歌を低く書いた。訓は平假字で漢字の次に別提に記したが、短歌には訓なく、餘白を殘してゐるものもあり、長歌には全く訓を附けない。〔價値〕現存の古寫本中最古のもので、料紙・書體の麗はしいことも、「萬葉集」の古寫本中第一に位する。校勘の資料としても價値が多い。



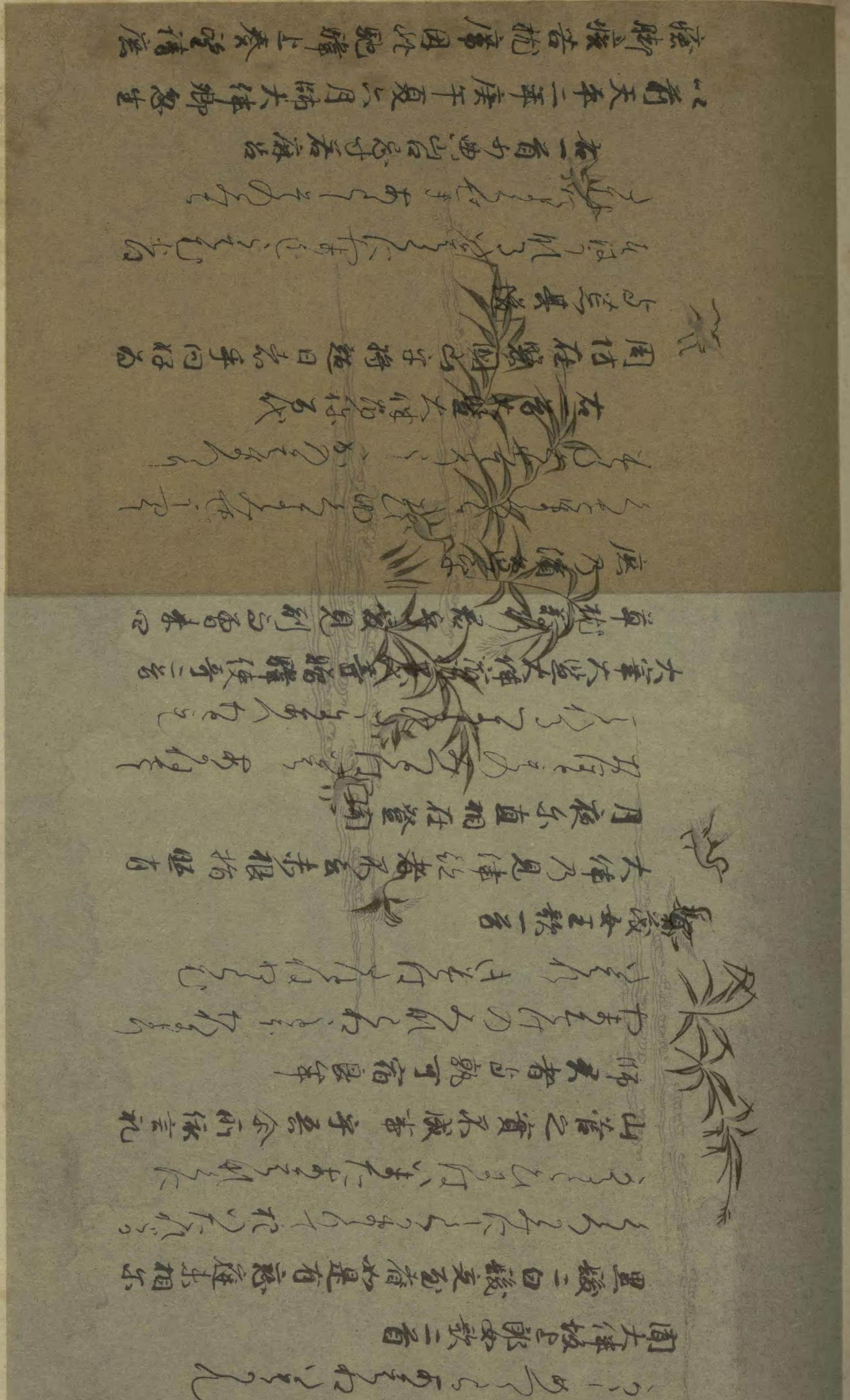
（ ）は現存せざるもの。右の諸本のうち主要のものは別項に解說す。

【金澤本萬葉集】〔名義〕本書の斷簡を古筆家は金澤切と云つたので、かく名づける。それは金澤前田家にあつた故か、或はその以前金澤文庫にあつた故か、明かでない。〔形狀〕から紙、又から紙に切箔を散らし、これに「萬葉集」を書寫した縱七寸一分、橫四寸四分の粘葉裝。〔筆者〕箱の表に記した所、又「古筆名葉集」によるも、古く源俊賴等と傳へたらしく、又その斷片を藤原公任筆とも云つたが、近く田中親美氏の說に、藤原定信の筆であると云ふ。〔諸本〕御物本は、もと前田家に所藏されてゐたが、明治四十三年明治天皇が同邸に行幸された際獻上したものである。他に前田家には卷三と卷六との斷簡八枚が殘り、合せて一帖としてある。他に斷簡が手鑑に押されて存してゐる。大正十三年に萬葉祕寶の一として複製刊行せられた。〔解說〕御物本「金澤萬葉集」は、卷二の大部分（五十八枚）と卷四の小部分（二十枚）との零卷を合綴して一帖とした。一頁七行又は八行、題詞を低く歌を高く書き、訓は漢字の次に平假名で別提に記し、訓を附けない歌もある。目錄は卷二の外、卷三・六にも存してゐる。〔價値〕、平安時代の古寫本の現存する五本の一であり、藍紙本についで第三位の古さを占める。料紙も文字もうるはしいが、又「萬葉集」校勘上に有力の資料である。

【藍紙本萬葉集】〔名稱〕料紙に基づく。〔形狀〕銀砂子をまばらに散らした薄藍漉紙を用ひ、天地に墨界あり、これに「萬葉集」を書寫せしもの。縱八寸五分の卷子本。〔筆者〕「古筆名葉集」その他古筆家の說によると、古く藤原公任筆と云ひ傳へたが信じられぬ。近く田中親美氏の說に、藤原伊房の筆であらうといふ。〔諸本〕第九卷の大部分は、古く會津松平家に傳へられたのを、後、田中光顯伯の手より原富太郎氏の藏となつた。但しその斷簡は諸家の藏する所となつてゐる。又卷十八の斷簡も諸家に藏せられてゐる。卷十の斷簡は竹柏園にある。明治四十三年に田中親美氏が卷九・十八を集め、二卷として印行した。又大日本歌道奬勵會からこの本の一部を「二體萬葉集」と題して印行した。〔解說〕卷九の殆ど全部と、卷十・十八の斷片が殘存してゐる。題詞を低く歌を高く書き、訓は平假字で漢字の次に別提し、訓のない歌もある。卷九には目錄も存する。「元曆校本萬葉集」（後出）の本文と同系統の本と思はれる。〔價値〕桂本についで最も古い「萬葉集」の古寫本であり、その書風は遒勁で、平安朝の五種の「萬葉集」の中の、他の四本は優雅で、寧ろ「古今集」以後の溫雅なる歌を書くのにふさはしいが、本書は「萬葉集」の雄健なる歌を記すに適した書風である。校勘上にも益する所がある。

【天治本萬葉集】〔名義〕天治元年の書寫なるに由る。〔形狀〕卷十三は縱九寸二分、橫一尺八寸四分の仙花紙に墨界を引いて書寫した卷子本。罫は一紙二十八行で、天地の界線の外中央より上にも一つ橫線がある。〔筆者〕本書の斷簡を仁和寺切と稱し、古筆家は御子左忠家筆としてゐるが、年代合はず誤りである。又卷十三には筆者を藤原基俊といふ古筆家の極めがついてゐるが確かでない。卷により筆者を異にするが、卷十四と十五とは一筆のやうである。〔諸本〕卷十三は京都福井貞明氏所藏、明治初年京都下村氏の賣立より求めたものと云ふ。本書の斷簡を仁和寺切と稱するのは、もと御室にあつた故であらう。卷十三の全卷は大正十五年に萬葉祕寶の一として複製刊行せられた。〔解說〕卷十三は全部完全に傳存してゐる。題詞を低く歌を高く書き、訓は漢字の次に平假字で別提し、罫一行に訓一行づつ記してある。但し訓を附けない歌が多く、長歌にはすべて訓を附けないが、稀に片假字で右傍に訓を附した歌がある。卷十三の完本の外、卷二・十・十四・十五の斷簡も殘存してゐる。就中卷十の斷簡が最も多い。これ等は、罫一行に訓を小さく二行に記したものが多い。又片假字で別提した所もある。目錄はない。卷二は大治四年（天治元年）二月二十六日、卷十三は天治元年六月二十五日、卷十四は同年八月一日、卷十五は同年八月八日に白川房（善勝寺）で書寫し終つた。肥後前司忠兼の本によつて書寫し、江家本・孝言本・梁園御本・中務大輔本等で校合したものである。また讚州本（藤原顯綱本）と校合した所もある。〔價値〕書寫年代の明かなる「萬葉集」の古寫本中最古のものであり、平安朝の古鈔本五種の一である。殊に仙覺本の祖なる忠兼本に最も近き本として、仙覺本の祖本の面目を見ることの出來る唯一の本である。校勘上にも有益の資料で、取るべき所が少くない。

【元曆校本萬葉集】十五卷〔名稱〕元曆元年に校合した本の謂ひで、「元曆萬葉集」とも云ふ。〔形狀〕紫藍の飛雲形のある鳥の子紙を用ひて、四邊に欄界を施した縱八寸二分五厘、橫五寸七分の粘葉裝の本（但し今は紙捻で綴ぢて



桂本萬葉集（御物）

百九十三行を殘すのみで、卷四の相聞の歌三百九首の中、百九首だけの零卷となつた。又卷首には、もと目錄が附いてゐた。本文は題詞を高く書き、歌を低く書いた。訓は平假字で漢字の次に別提に記したが、短歌には訓なく、餘白を殘してゐるものもあり、長歌には全く訓を附けない。〔價値〕現存の古寫本中最古のもので、料紙・書體の麗はしいことも、「萬葉集」の古寫本中第一に位する。校勘の資料としても價値が多い。

【金澤本萬葉集】〔名義〕本書の斷簡を古筆家は金澤切と云つたので、かく名づける。それは金澤前田家にあつた故か、或はその以前金

してゐる。大正十三年に萬葉祕寶の一として複製刊行せられた。〔解說〕御物本「金澤萬葉集」は、卷二の大部分（五十八枚）と卷四の小部分（二十枚）との零卷を合綴して一帖とした。一頁七行又は八行、題詞を低く歌を高く書き、訓は漢字の次に平假名で別提に記し、訓を附けない歌もある。目錄は卷二の外、卷三・六にも存してゐる。〔價値〕、平安時代の古寫本の現存する五本の一であり、藍紙本についで第三位の古さを占める。料紙も文字もうるはしいが、又「萬葉集」校勘上に有力の資料である。

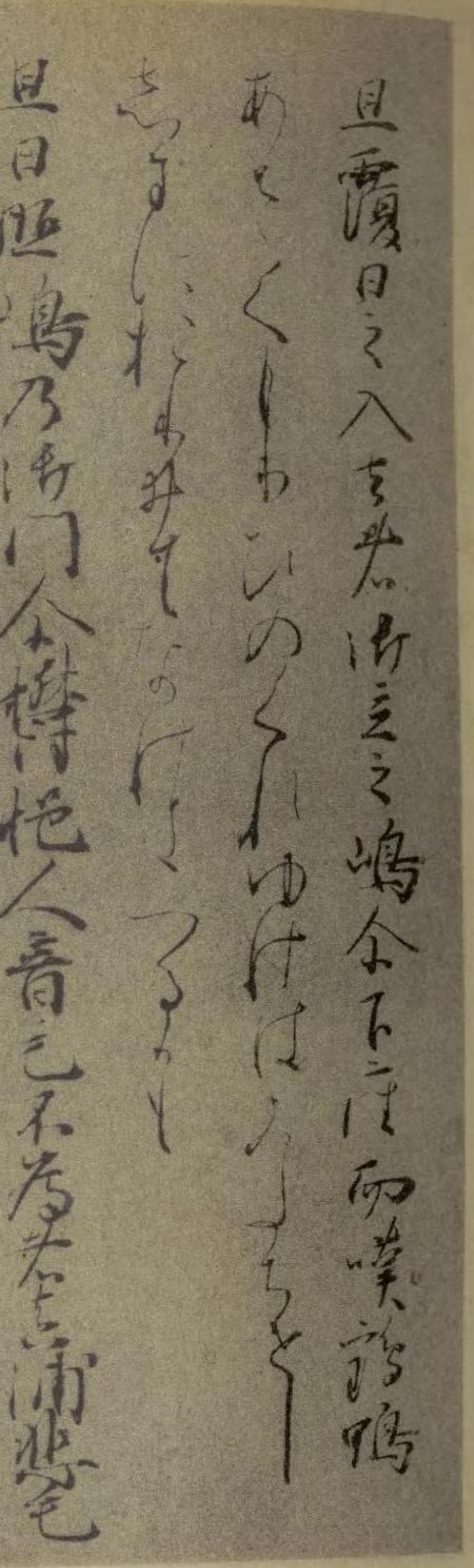
【藍紙本萬葉集】〔名稱〕料紙に基づく。〔形狀〕銀砂子をまばらに散らした薄藍漉紙を用

優雅で、寧ろ「古今集」以後の溫雅なる歌を書くのにふさはしいが、本書は「萬葉集」の雄健なる歌を記すに適した書風である。校勘上にも益する所がある。

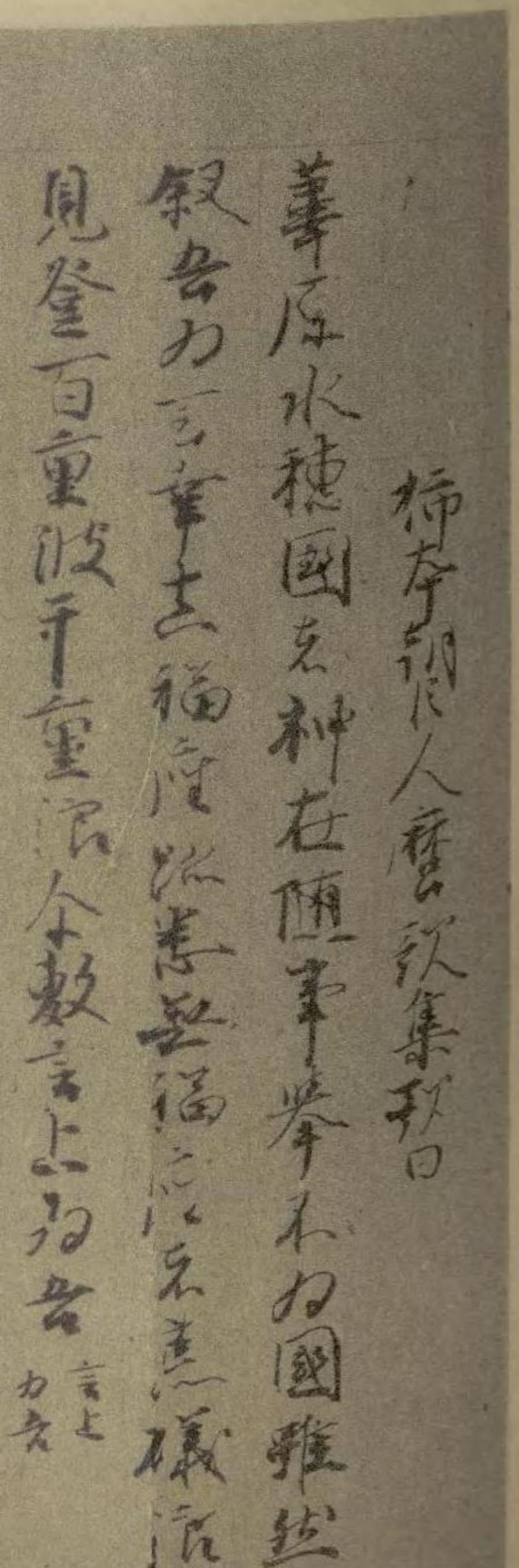
【天治本萬葉集】〔名義〕天治元年の書寫なるに由る。〔形狀〕卷十三は縱九寸二分、横一尺八寸四分の仙花紙に罫界を引いて書寫した卷子本。罫は一紙二十八行で、天地の界線の外中央より上にも一つ横線がある。〔筆者〕本書の斷簡を仁和寺切と稱し、古筆家は御子左忠家筆としてゐるが、年代合はず誤りである。又卷十三には筆者を藤原基俊といふ古筆家の極めがついてゐるが確かでない。卷により筆

中務大輔本等で校合したものである。また讃州本（藤原顯綱本）と校合した所もある。〔價値〕書寫年代の明かなる「萬葉集」の古寫本中最古のものであり、平安朝の古鈔本五種の一である。殊に仙覺本の祖なる忠兼本に最も近き本として、仙覺本の祖本の面目を見ることの出來る唯一の本である。校勘上にも有益の資料で、取るべき所が少くない。

【元曆校本萬葉集】十五卷〔名稱〕元曆元年に校合した本の謂ひで、「元曆萬葉集」とも云ふ。〔形狀〕紫藍の飛雲形のある鳥の子紙を用ひて、四邊に欄界を施した縱八寸二分五厘、横五寸七分の粘葉裝の本（但し今は無綫で綴ぢて

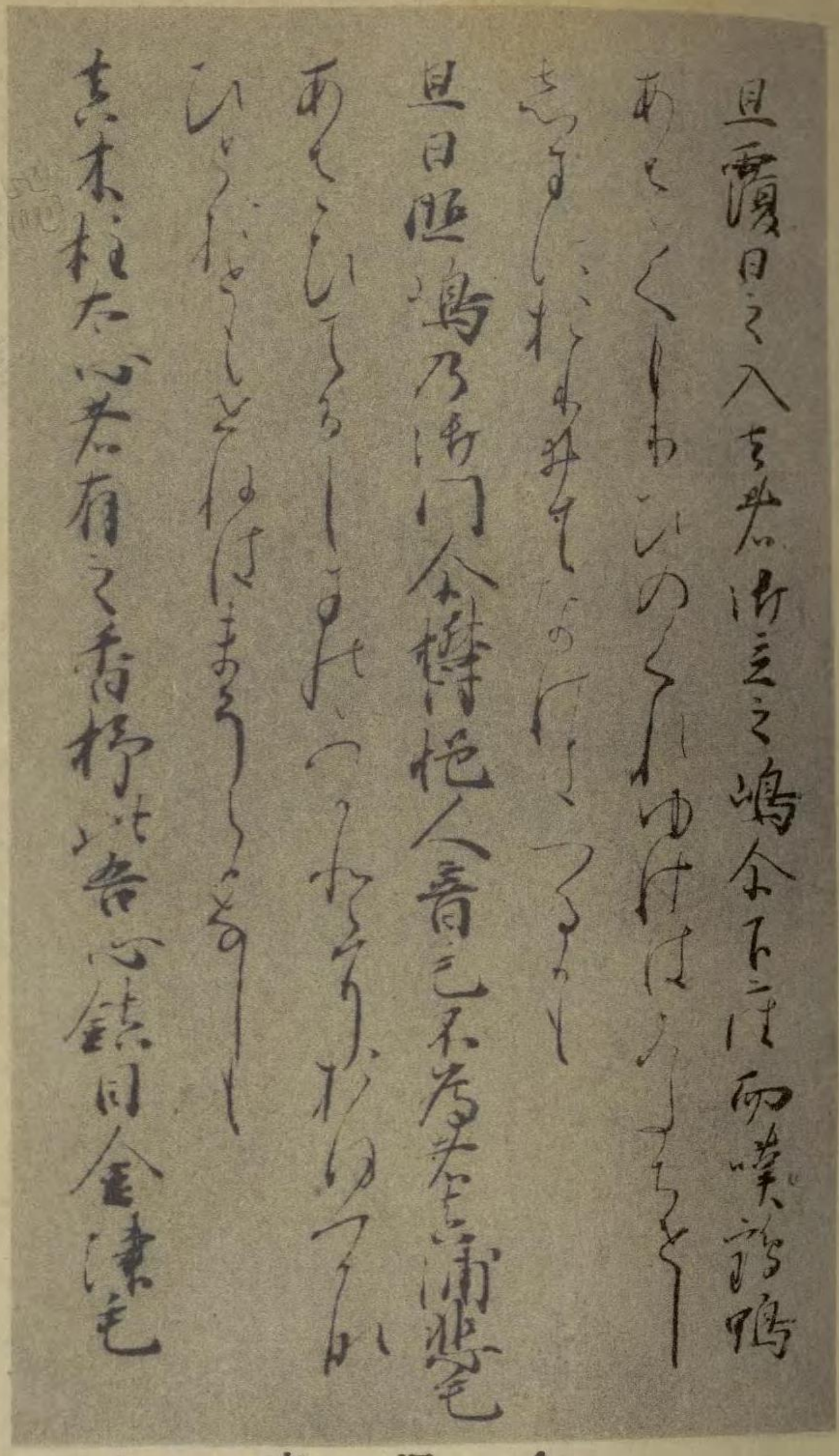

旦覆日之入去者御立之嶋尓下座而嘆鶴鴨
あさくもりひのいりゆけはみたちせし
しまにおりゐてなけきつるかも
旦日照嶋乃御門尓欝悒人音毛不為者真浦悲毛

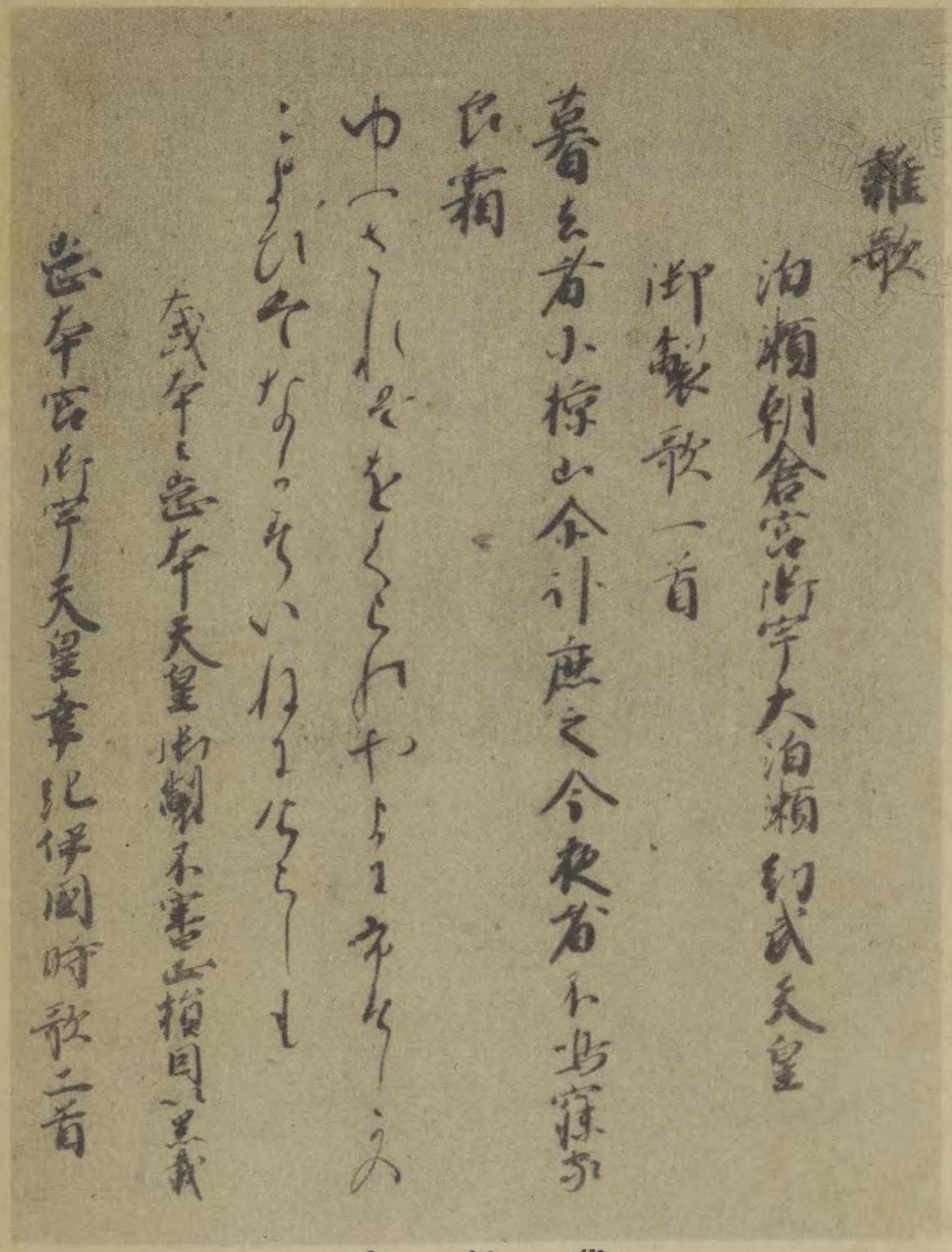
金

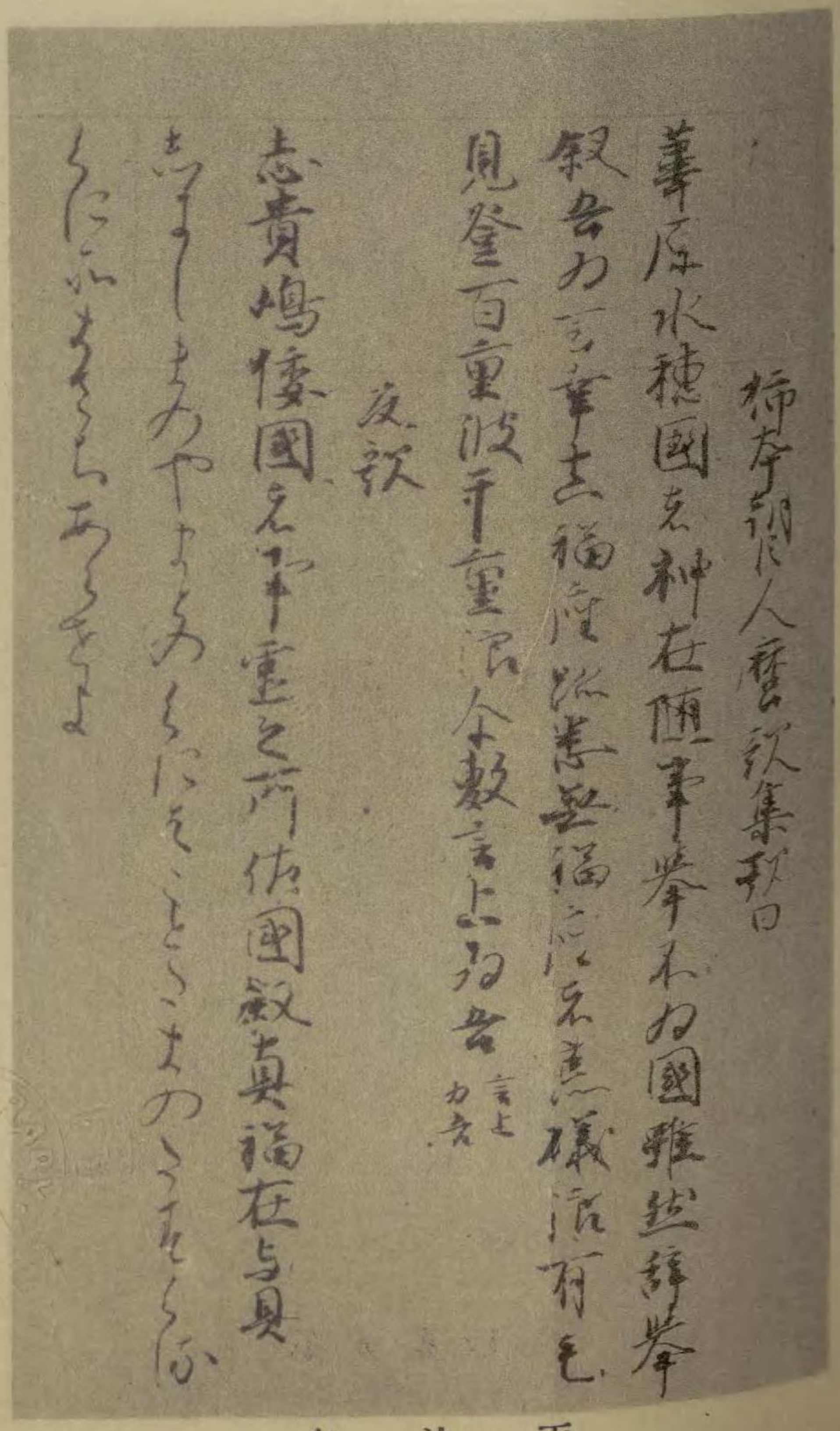

柿本朝臣人麿歌集歌曰
葦原水穂國者神在随事擧不為國雖然辭擧
叙吾為言幸座跡恙無福座者荒礒浪有毛
見登百重波千重浪尓敷言上為吾（言上為吾）

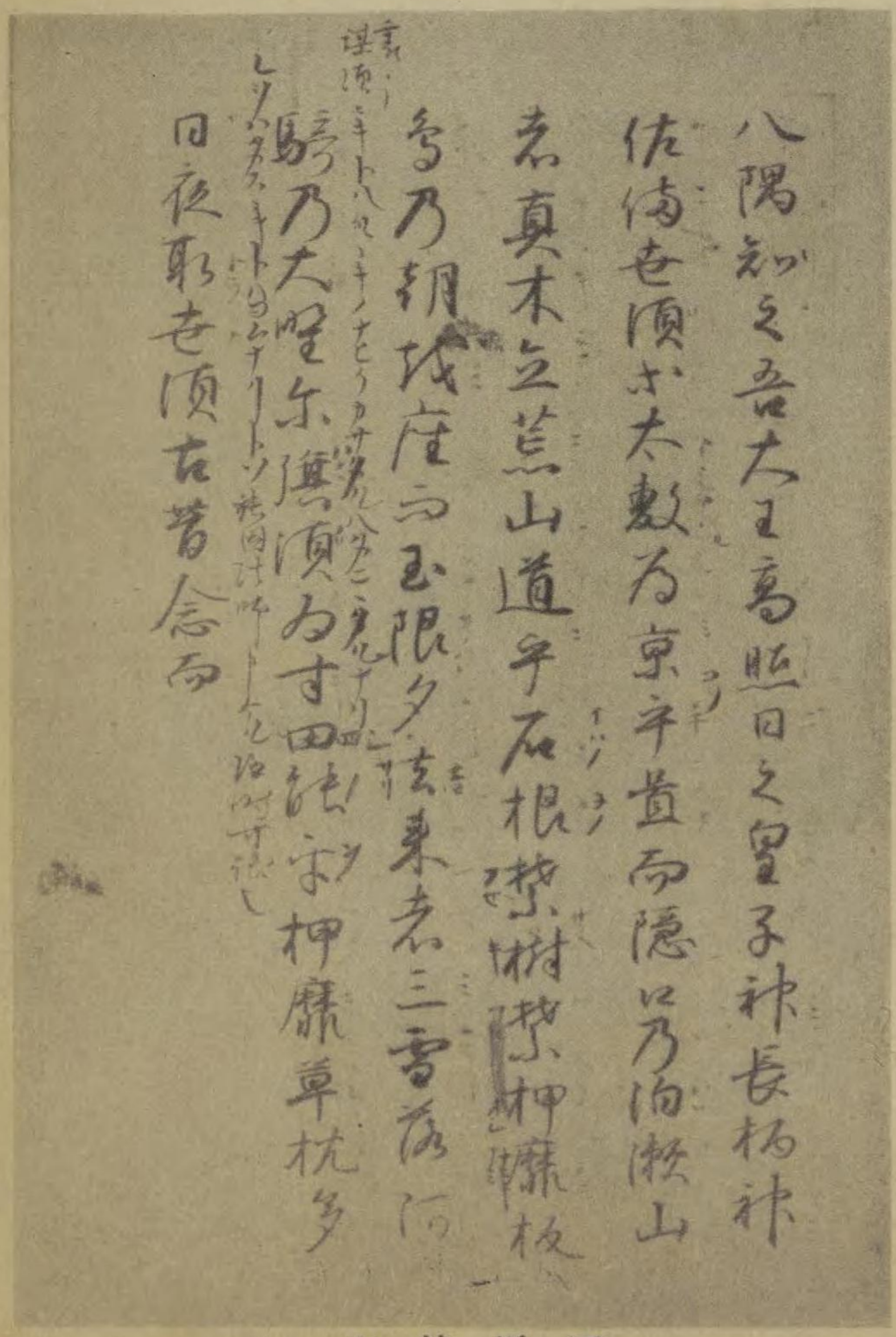
天

萬葉集 一


金澤本


藍紙本


天治本


天暦校本

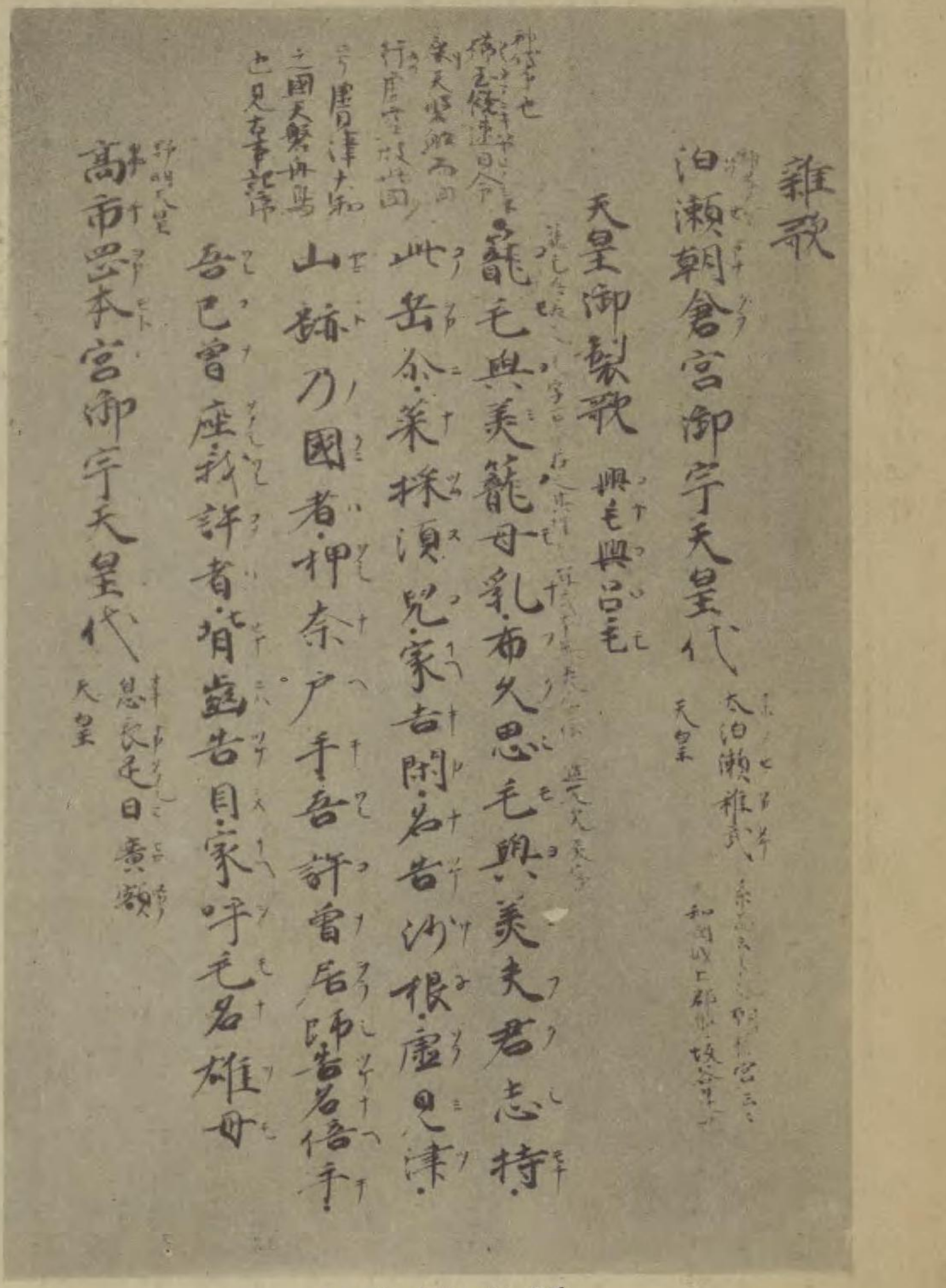
ある。又巻六だけは後の補足本で形狀異なる）。（筆者」巻二十の奥に、「元暦元年六月九日以或人校合了　右近衞權少將（花押）」とあるから、書寫年代は元暦以前に溯られるが、筆者は未詳で、ただ元暦以前の同時代の能書の寄合書と云ふに止まる。右奥書の右近衞權少將は藤原親能のことであらうか（刊本顯政家集の奥書に、「元暦元年七月十二日（中略）右近衞權少將藤原在判」と見える人も同人であらう）。古河家所藏本に添う

明和二年の頃荒木田久老が校合して學界に知られるに至つた。翌三年賀茂眞淵は本居宣長に、久老に手傳つて早く江戸へ校本が下るやうにと云ふ書狀を送つてゐる。かくてこの校合した本が江戸へ下つたので、寛政三年に橘千蔭がその所藏本に校合して「萬葉集略解」に引用した。明和三年にはこの本を京都に送り、遂に富山氏の親戚なる神戸の俵屋久左衞門の藏となつた。寛政十一年の春に再び荒木田久

川宮家）御藏の六冊については、その傳來が明かでない。もと巻一・四・十の三册だけであつたのを、後、巻六・十二・十九の三册が追加せられたものらしい。大正十四年に、この本を影印して頒布した。更に昭和三年より四年にかけて、「王府本」「古河本」を初め、諸家に藏せる斷簡をも集めて、全十五巻が複製刊行せられた。〔解説〕もと全部二十巻あつたのであらうが、今は巻一・二・四・六・七・九・十・十二・十

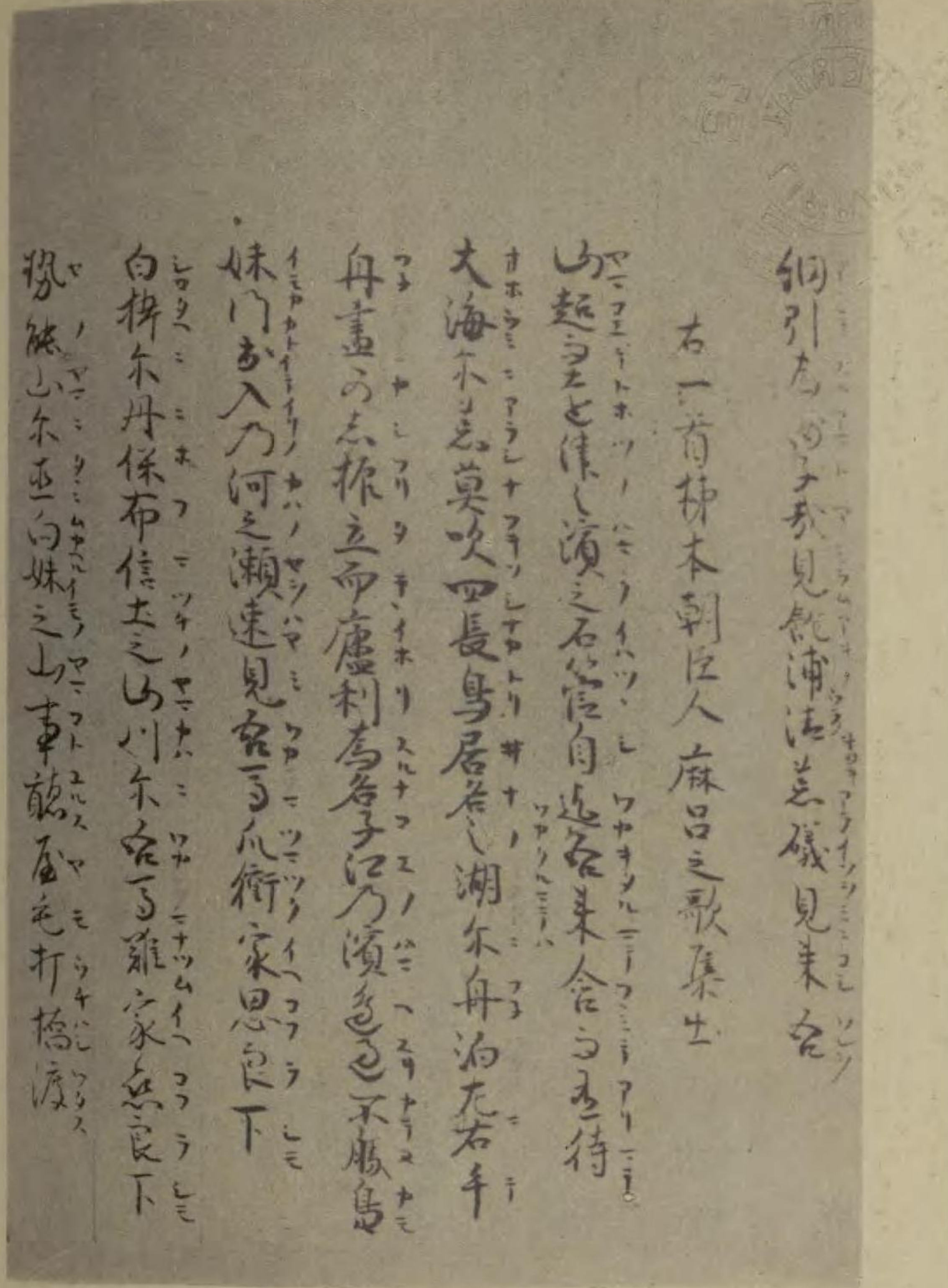
次に巻四以下に存する濃い墨の書入も古い。代赭の書入は巻六の巻初の部分は綠色であるが、後、代赭にかへてゐる。この書入は最も詳細で、全巻に亙り、他本と校合して本文を訂し、補ひ、訓を加へ、殊に長歌の訓は原寫本にないのを、代赭で加へたものが大部分である。この代赭の部分の原本は片假字本と思はれ、「神田本萬葉集」（後出）と同一系統の本である。而して巻六の補足本は、この代赭の書

萬葉集　二



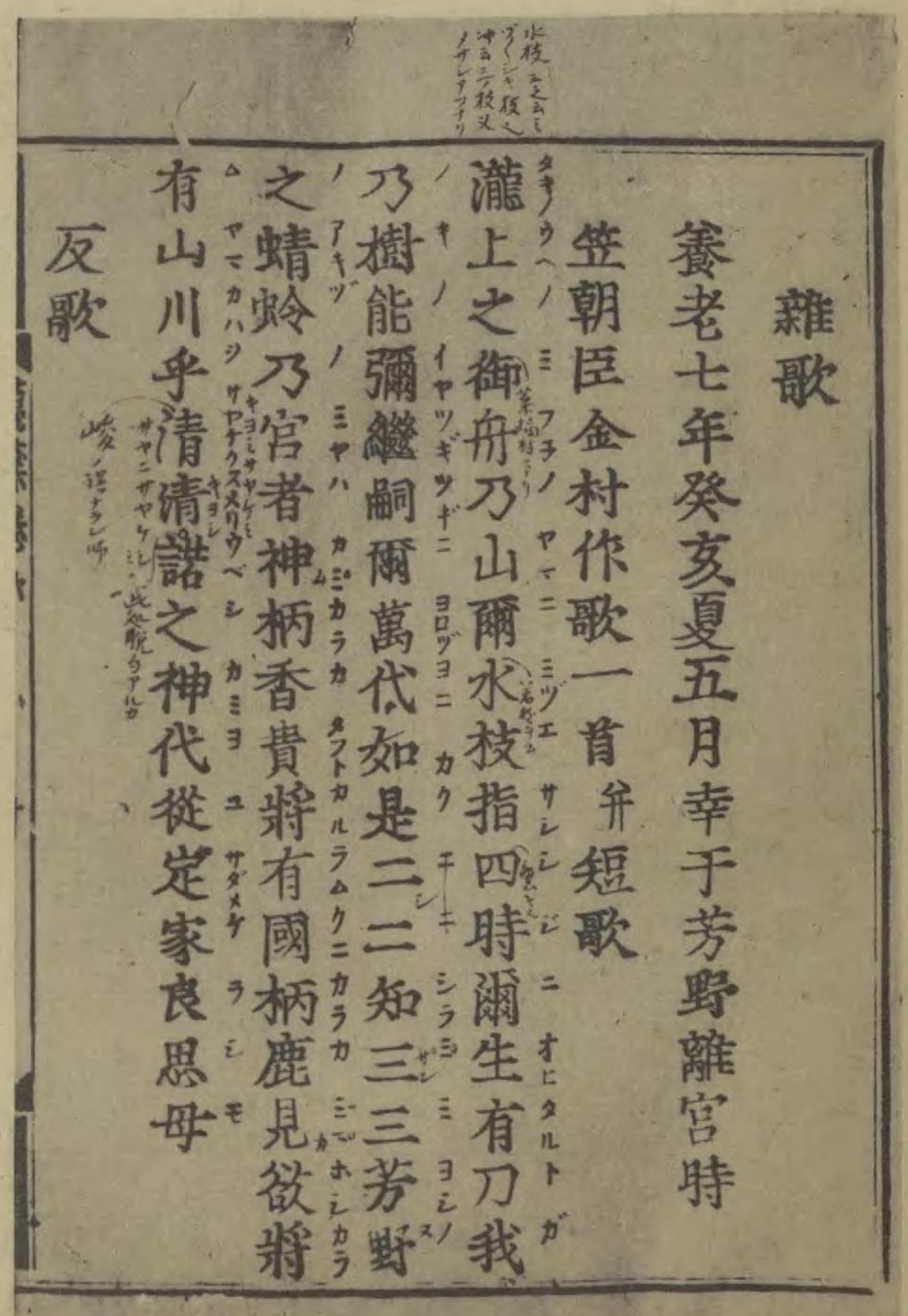
雜歌
泊瀬朝倉宮御宇天皇代
天皇御製歌
籠毛與美籠母乳布久思毛與美夫君志持此岳尓菜採須兒家吉閑名告沙根虚見津山跡乃國者押奈戸手吾許曾居師告名倍手吾己曾座我許者背齒告目家呼毛名雄母
高市岡本宮御宇天皇代

西本願寺本



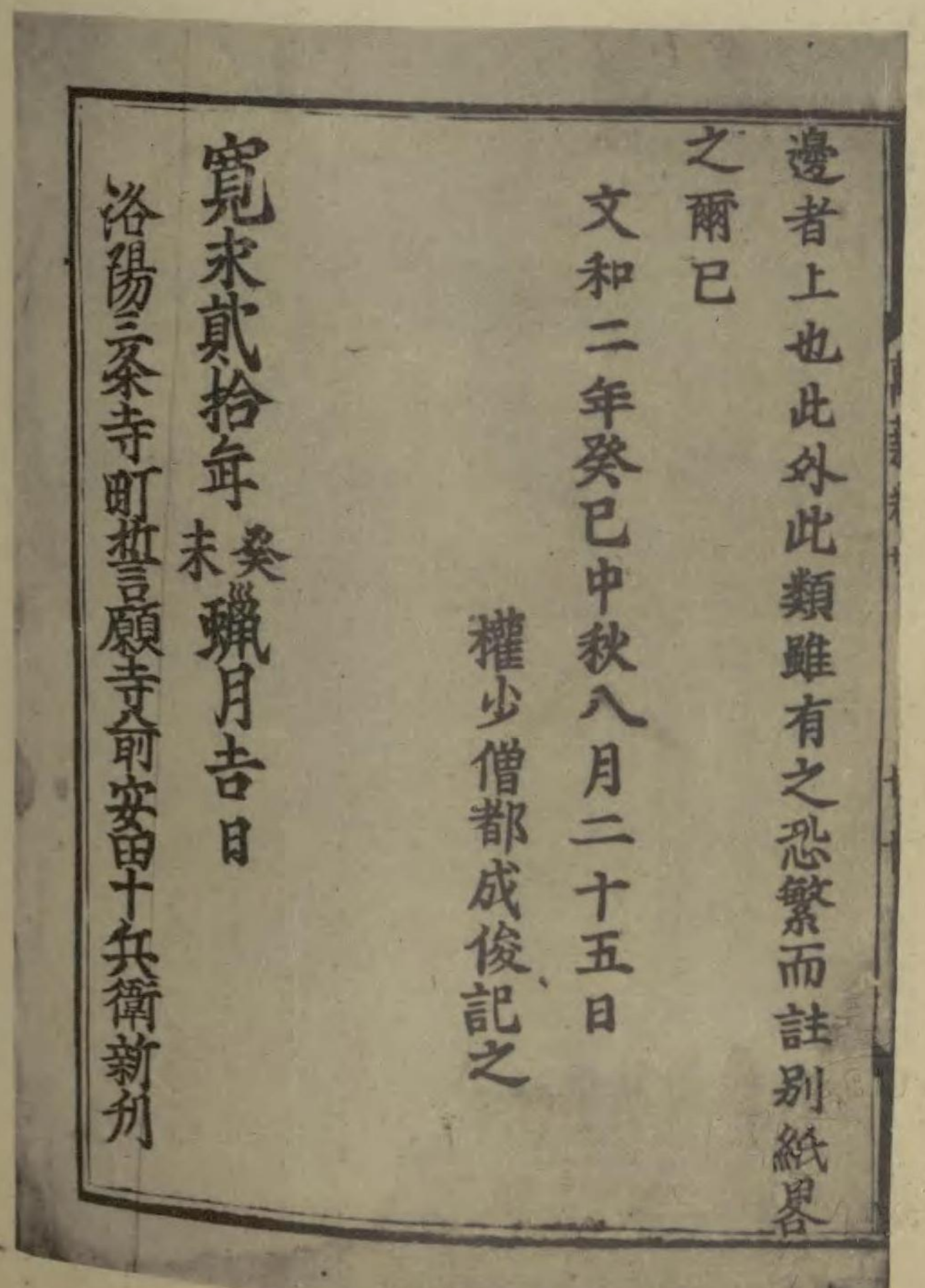
網引為海子哭見飽浦清荒礒見來吾
右一首柿本朝臣人麻呂之歌集出
山越而遠津之濱之石管自迄吾來含而有待
大海尓荒莫吹四長鳥居名之湖尓舟泊左右手
舟盡可志振立而廬利為名子江乃濱過不勝鳥
妹門出入乃河之瀬速見吾馬爪衝家思良下
白栲尓丹保布信土之山川尓吾馬難家恋良下
勢能山尓直向妹之山事聴屋毛打橋渡

大矢本



雜歌
養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時
笠朝臣金村作歌一首并短歌
瀧上之御舟乃山爾水枝指四時爾生有刀我乃樹能彌繼嗣爾萬代如是二二知三三芳野之蜻蛉乃宮者神柄香貴將有國柄鹿見欲將有山川乎清清諾之神代從定家良思母
反歌

活字附訓本

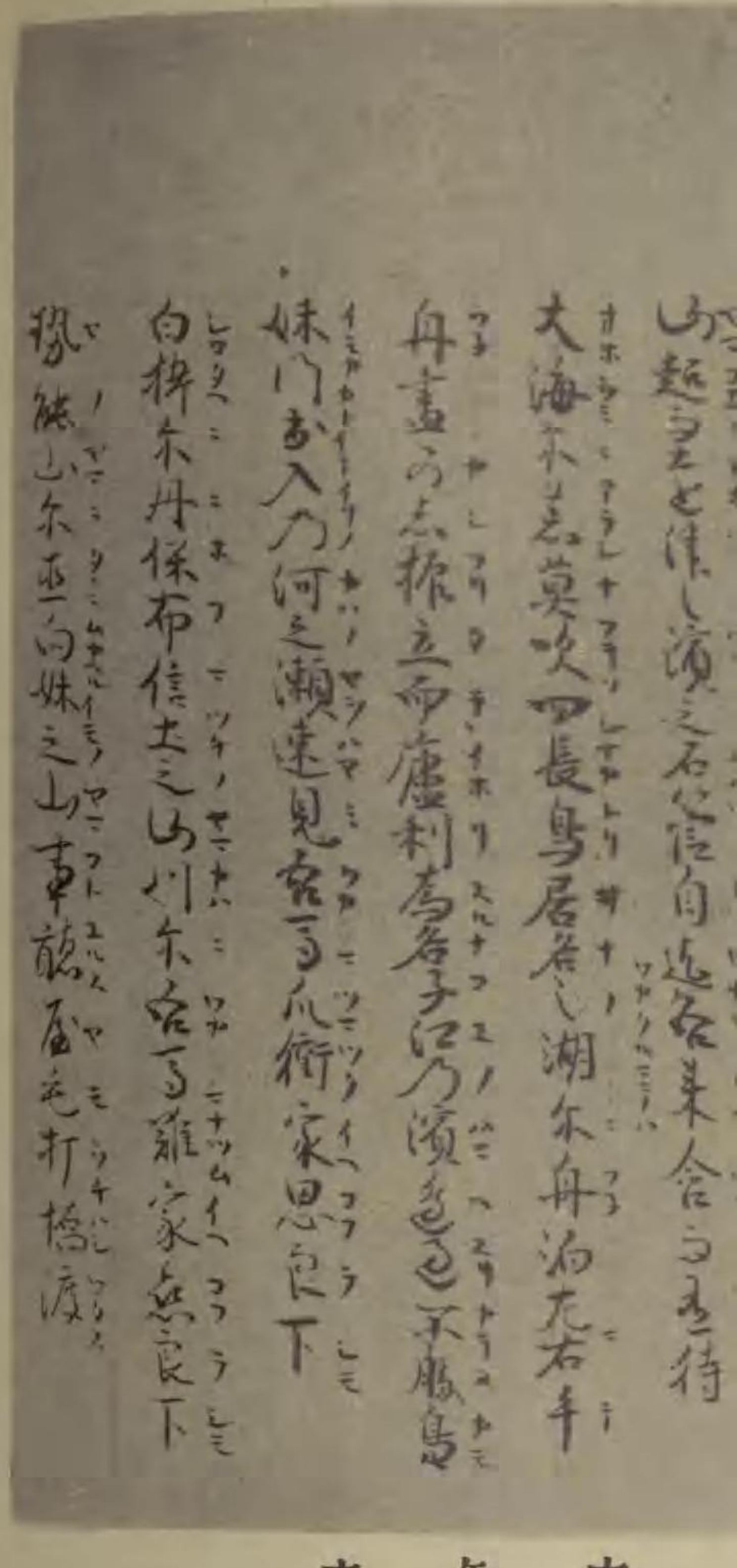


邊者上也此外此類雖有之恐繁而註別紙畧之爾已
文和二年癸巳中秋八月二十五日
權少僧都成俊記之
寛永貳拾年（癸未）蕤月吉日
洛陽三条寺町誓願寺前安田十兵衛新刊

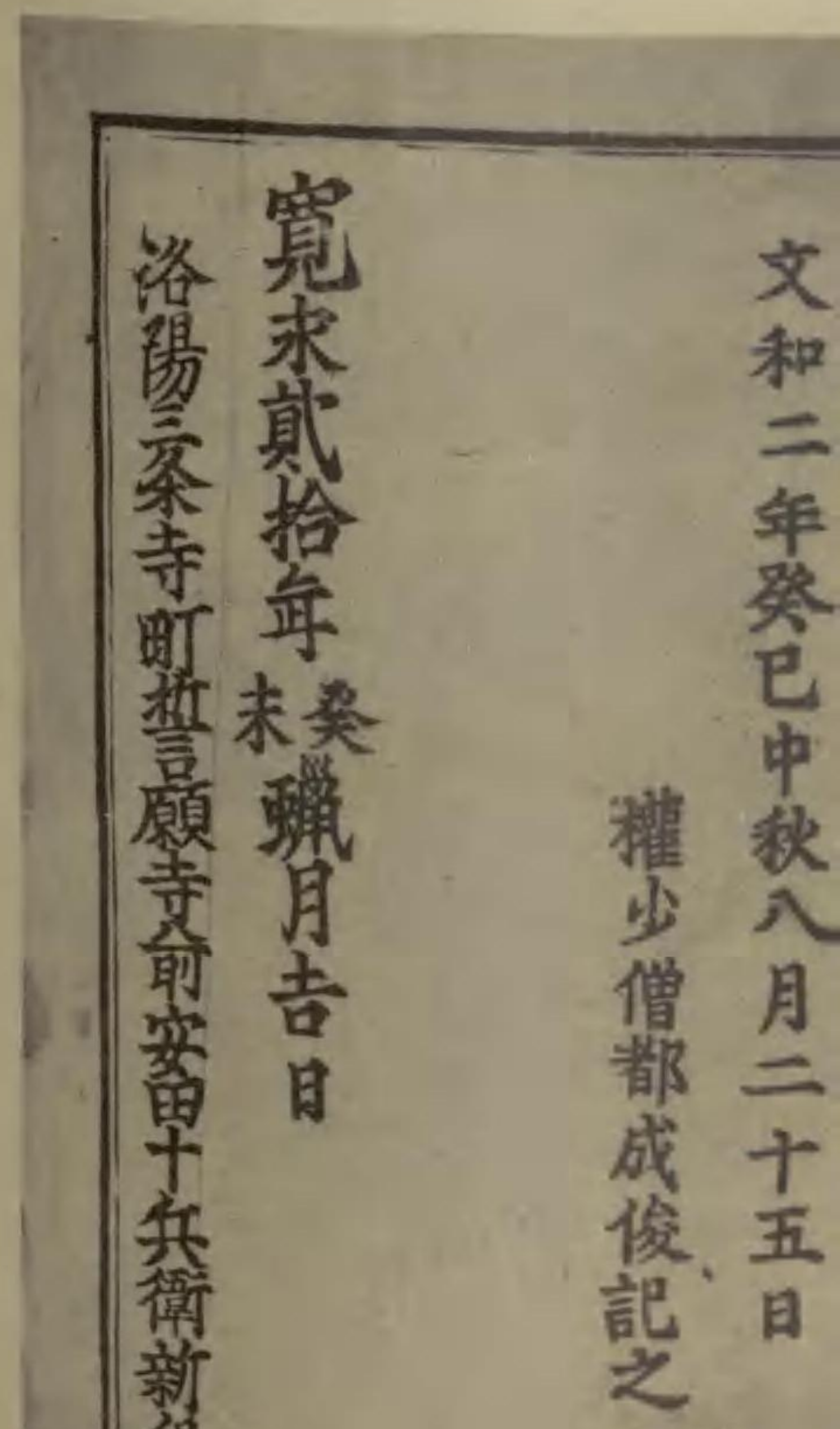
寛永整版本

ある。又卷六だけは後の補足本で形狀異なる）。〔筆者〕卷二十の奥に、「元暦元年六月九日以或人校合了　右近衞權少將（花押）」とあるから、書寫年代は元暦以前に溯られるが、筆者は未詳で、ただ元暦以前の同時代の能書の寄合書と云ふに止まる。右奥書の右近衞權少將は藤原親能のことであらうか（刊本賴政家集の奥書に、「元暦元年七月十二日（中略）右近衞權少將藤原在判」と見える人も同人であらう）。古河家所藏本に添うた神田道伴の極書によれば、卷一・二は行成、四・十・十八は俊賴、六は寂蓮、七・九・十七・十九は公任、十二・十三・二十は宗尊親王、十四は光俊とし、高松宮家御藏本に添うた極書には卷一は行成、四は定賴、六は寂蓮、十は公任、十二・十九は筆不知とし、別に貼紙して十二を俊賴としたが、何れも信ずる事が出來ない。ただ十七・十八は同筆と思はれ、その卷十八の終に二位とあるのによれば、當時二位の人の筆であらうか。卷六だけは鎌倉時代の書寫本と思はれる。〔傳來〕高松宮家に卷一・四・六・十・十二・十九の六卷の中二百二十頁あり、古河男爵家には、卷一・二・四・六・七・九・十・十二・十三・十四・十七・十八・十九・二十の十四卷のうち千五百七十六頁存し、以上の卷及び卷十一の斷簡は、その他の諸家の手鑑に押され、又掛物となつて存してゐる。但しこれ等のものを全部集めても、やはり各卷共に完備しない。右の中、古河家所藏本の十四冊は、もと十五冊あつたのが、後卷十一だけ散逸して享保三年九月下旬神田道伴が筆者を鑑定した際には十四冊となつた。もと伊勢松坂中川常宇の所藏で、元祿十一年より寶永六年の間に、常宇の師清水谷實業を經て靈元上皇の叡覽に供した。後同國射和の富山與惣兵衞の家に藏せられ、明和二年の頃荒木田久老が校合して學界に知られるに至つた。翌三年賀茂眞淵は本居宣長に、久老に手傳つて早く江戸へ校本が下るやうにと云ふ書狀を送つてゐる。かくてこの校合した本が江戸へ下つたので、寛政三年に橘千蔭がその所藏本に校合して「萬葉集略解」に引用した。明和三年にはこの本を京都に送り、遂に富山氏の親戚なる神戸の俵屋久左衞門の藏となつた。寛政十一年の春に再び荒木田久老は橋本經亮と共に俵屋で校合した。元暦校本の斷簡を世に難波切と云ふのは、神戸にあつたが故の名稱であらう。文化元年に和學講談所で、人を遣はして全十四冊を摹寫せしめた。かくて弘化年中に、卷一・二の兩冊を同所で開板して世に頒ち、卷七をも刻したが、これは見本刷を作つたのみである。今日この三冊は舊版木を用ひた再刷本が世に出てゐる。なほそれ以前、早く「尙古法帖」に所々抄摹したものが入り、文政三年の「集古浪華帖」には假名の一部を載せ、同六年には慶德石室の摹せる卷二の一部が刊行されたが、全卷の刊行は未だ見ない。文化六年には松平定信が和學講談所の摸本を手寫し、文政の末年に屋代弘賢がこの原本を購はうとしたが力及ばず、卷一・二の筆者の異なる事を記した「元暦萬葉集考」を草して止んだ。その薦めで定信の後嗣なる桑名松平家に入り、天保十四年六月、松平家より老中水野忠邦に贈られ、安政二年には、水野家よりその親戚なる小濱酒井家に預けられたが、明治三年に水野家に還つた。明治四十四年に至り、水野家より古河男爵家の有に歸して、翌四十五年七月には明治天皇の天覽に供し、大正七年七月に玻璃版に附し、五十部を印行して諸家に頒つた。高松宮家（舊有栖川宮家）御藏の六冊については、その傳來が明かでない。もと卷一・四・十の三冊だけであつたのを、後、卷六・十二・十九の三冊が追加せられたものらしい。大正十四年に、この本を影印して頒布した。更に昭和三年より四年にかけて、「王府本」「古河本」を初め、諸家に藏せる斷簡をも集めて、全十五卷が複製刊行せられた。〔解說〕もと全部二十卷あつたのであらうが、今は卷一・二・四・六・七・九・十・十二・十三・十四・十七・十八・十九・二十の十四冊及び十一の斷簡が存するのみで、而も何れも脱丁があつて全き卷は存しない。題詞を低く歌を高く書き、訓は本文の次に平假字で別提してある。長歌には訓なく、短歌にも訓なきものがある（訓の假字遣の異るものがあり、短歌の訓なきものには、餘白を殘してゐる）。各卷に目錄を存するが、ただ卷十七・十八・十九・二十の四卷には目錄のないのが、この本の特色である（但し卷二十だけは、目錄が補足してある）。この本文は「藍紙本萬葉集」と同系統の本と思はれる」。墨・朱・代赭・綠などの書入があつて誤字を訂し、脱漏を補ひ他本との異を註し、又裏書などを書き加へた。卷二十の奥に、「巳年十一月廿日校合記」とあるが、その巳年は何年か明かでない。これ等の書入は、書寫當時、筆者自身の施したものもあるが、書寫後も數回、時を異にして行はれたと見え、同じ墨でも新古の差異がある。鮮かな朱の書入が最も古く、主として卷一に存し、或本・御本（宇治殿御本即ち藤原賴通本の事か）・禮部本（藤原通俊本の事か）などを以て校し、長歌に訓を附し、地名・人名等に頭註を加へた。これに次いでは漆黑な墨の書入が古く、主に卷一に裏書の文を書き入れた。これ等は書寫と同時代の書入と認められる。次に卷四以下に存する濃い墨の書入も古い。代赭の書入は卷六の卷初の部分は綠色であるが、後、代赭にかへてゐる。この書入は最も詳細で、全卷に亙り、他本と校合して本文を訂し、補ひ、訓を加へ、殊に長歌の訓は原寫本にないのを、代赭で加へたものが大部分である。この代赭の部分の原本は片假字本と思はれ、「神田本萬葉集」（後出）と同一系統の本である。而して卷六の補足本は、この代赭の書入と同時に同人が書寫したものと思はれる。次に別の墨の書入があり、全部に委しい校合を施してゐる。これは南北朝以後のものであらう。その他朱書にも數種があり、中には仙覺の新點を朱書せるが如き、新しいものもある。稀に附箋があり、皆墨書で記し、中には代赭で傍訓を附せるが如き甚だ古いものもある。〔價値〕平安時代の「萬葉集」の古鈔本五種の一であり、且つその古鈔本五種のうち、本書はその古さに於ては第五に列するが、他の寫本が零本より殘らざるに對し、この寫本は十五卷に亙つて殘存し、完備に近いことは校勘上最も價値を有してゐる。のみならず數多の校合書入があるから、それによつて他の平安時代の古寫本の面影も察することが出來、古訓をも知る事が出來るから、「萬葉集」の研究上寄與するところ甚大である。この寫本によつて、「萬葉集」の本文を是正し得るところが少くない。

【西本願寺舊藏本萬葉集】　二十冊〔形狀〕縱一尺六分、横八寸二分の大形鳥の子本で、一紙兩面に記してゐる。藍色表紙を用ひ胡蝶裝大和綴。〔筆者〕卷一より卷十まで一筆、十一より十六まで一筆、十七より二十まで一筆、十二の一卷一筆で、四人の筆に成る。卷十二の



大矢本



文和二年癸巳中秋八月二十五日
權少僧都成俊記之
寛永貳拾年癸未臘月吉日
洛陽三條寺町誓願寺前安田十兵衛新刊

寛永整版本

みやゝ古く、他の三筆これに少し遲れ、鎌倉時代後期の筆である。〔傳來〕もと西本願寺の所藏で、後、出でて高田相川氏の有に歸し、今は竹柏園所藏となる。又本書の轉寫本に田中勘兵衞氏所藏本、水戸彰考館所藏の「阿野本萬葉集」等がある。阿野本は延寶五年の書寫で、四點「萬葉集」の材料となり、また契沖の「萬葉代匠記」に、阿野本はもと細川幽齋の藏本であるからとて、幽齋本として校訂に用ひてゐる本である。〔解說〕卷十二を除く十九卷は、題詞を高く歌を低く書き、訓は墨・朱・紺青の三色に分つて本文の右に片假字で傍書した。卷一の奧には本文と別筆で、又卷二十の奧には本文と同筆の、仙覺の文永三年八月の奧書がある。これによつて仙覺の文永三年本の系統を引くものと思はれる。卷一の仙覺の奧書の筆者は全部にわたつて校合書き入れを加へてゐる。これは本文當時のものではないらしいが、かなり古いものであらう。その他、全部にわたつて貼紙があり、墨又は朱で校合を加へた。その中には「仙覺抄」や「目安」を引いてゐる。これは室町時代のものと思はれる。又本文の歌には朱で合點を附したものがあり、長歌の上に朱の星符を附け、旋頭歌の上に紺青の星符を附けてゐる。これ等は何れも素より存してゐたものである。なほ題詞・左註には、往々ヲコト點を附してある。卷十二のみは仙覺本でなく、形式も異つてゐる。題詞を低く歌を高く書いた。卷末に奧書があり、仙覺本の奧書に見える文章と似てゐる。朱・墨・青等數種の筆で多くの書入があるが、これは大概仙覺本によつて爲されたものである。〔價値〕仙覺の文永本の原本の趣が最も明かに見られる點に、この本の價値がある。文永本では、（一）題詞を高く歌を低く書いた。（二）卷二十の目錄に、諸國防人の名を擧げない。（三）訓は漢字の傍に附し、從來の訓に從つたものは墨書し、從來の訓を訂正したものは紺青で記し、從來無かつた訓を補つたものは朱書した。（四）古點の歌には符なく、源順以後の次點の歌には朱で合點を附し、長歌の上には朱の星符を附し、旋頭歌の上には青の星符を附した。これ等の特徵があり、本書によつてその原本の樣式が窺はれると共に、古點・次點・新點の別を明かにすることが出來るのは、「萬葉集」研究史上多大の價値を有する點である。

【神田本萬葉集】二十册〔名稱〕神田男爵家の所藏本であるからかくいふ。〔形狀〕縱七寸一分餘、橫四寸八分餘の小本で、鳥の子紙を用ひ、一紙兩面に書いてある。〔筆者〕各册の包紙に記す所によれば、表題は何れも智仁親王筆で、本文は卷一後鳥羽院、卷二關白兼實、卷三・五・六・七・九・十は藤原清範、卷四內大臣通親、卷八鴨長明、卷十一・十八・十九大納言永繼、卷十二大納言尙顯、卷十三大納言實仲、卷十四・十五良鎭大僧正、卷十六良賀、卷十七左大臣敎季、卷二十參議時顯筆となつてゐるが信じられぬ。但し清範筆と云ふ六卷は同筆と認められるが、この筆者の如く鎌倉初期の寫本ではなく、卷一より卷十までは鎌倉時代末の寫本、卷十一以下は足利時代末期の寫本と認められる。〔傳本〕もと紀州德川家に傳へられた本で、後、松田道生を經て神田氏に入つた。故にこの本の事を一に紀本とも云つたと思はれる。而してこの紀州本は、既に四點萬葉集・代匠記・校異本に引いてゐるところで、殆ど全部神田本と一致するが、ただ「釋萬葉集」に引ける紀州本のみは、神田本と大半一致しない。〔解說〕前後各十册づつの二部に分たれるが、各卷とも目錄があり、題詞を低く歌を高く書き、訓は漢字の傍に片假字で書き、まゝ朱訓のあることが共通の特色である。卷一の奧には、嵯峨天皇の御製と傳へる「古萬葉集」の序文を附してゐる。卷十の奧には、この本は肥後大進忠兼本を以て書寫し云々の記事があり（天治本萬葉集參照）、次に建保七年閏二月二十五日に鎌倉で光行の本を借りて書寫したと云ふ行遠の奧書がある。これによれば、この本の前十卷は忠兼本を寫し傳へた光行本の末流であらうか。但し多少の疑ひが存する。而して「元曆校本萬葉集」の代赭の書入とこの本とは、同一系統の本と思はれる。仙覺以前の本の傳本で、それに仙覺本を以て校合を加へたものである。仙覺本の訓は左傍に附してある。また所々に朱の書入がある。後十卷は仙覺本を以て補足したのであるが、形式に紊れたところがある。又卷二十の仙覺の奧書は、他本が文永三年八月二十三日となつてゐるのに、この本のみ九月二十三日となつてゐる。〔價値〕前十卷が、仙覺以前本の一傳本として、かく多數の卷を存してゐることは、「元曆校本萬葉集」を除いて稀有であり、隨つて本文校訂の上に多大の價値を有してゐる。

【大矢本萬葉集】二十册〔形狀〕縱九寸五分、橫七寸二分、淡青色表紙袋綴の册子。〔筆者〕卷一・二・三・十七の四卷、四・五の二卷、十一・十二・十五の三卷、十六・二十の二卷は各一筆で、その他の諸卷は何れも別筆と思はれる。〔傳本〕大矢透博士の舊藏本であつたが、大正七年竹柏園の所藏となつた。また寂印成俊本には、近衞公爵家の所藏にして、現に京都帝國大學附屬圖書館で保管する本があり、その他の寫本もあるが、他本の校合の入つてゐる本、新寫本、不完全な本が多い。〔解說〕各卷に目錄があり、題詞を高く歌を低く書き、訓は漢字の右傍に片假字で附け、訓の中には朱書及びまゝ青書したところがある。朱を以て次點を示す合點、かへり點、長歌の句讀等を施し、まゝヲコト點を附した。また長歌の上には朱の星符を附し、旋頭歌の上には青の星符を附した。これ等は何れも仙覺の文永本の趣を傳へてゐる（西本願寺舊藏本萬葉集參照）。卷一の奧には、文永十年八月八日鎌倉で書寫し畢つたと云ふ奧書があり、その次に文永三年八月十八日の仙覺の長文の奧書があり、卷二十の奧には、文永三年八月二十三日の仙覺の奧書があり、その次に應長元年十月二十五日の桑門寂印の奧書、文和二年八月二十五日の成俊の奧書がある。即ちこの本は仙覺の文永三年本の系統を引くもので、文永十年の轉寫本であり、寂印及び成俊が更に書き傳へた本であるから、この系統の本を寂印成俊本と名づける。〔價値〕世に流布せる版本は、寂印成俊本を校合に用ひた本で、訓もこれによつて附したものである。而して本書はその寂印成俊本の古寫本として原形を窺ふに最もよく、萬葉研究史上に貴重なる材料を提供せるものといふべきである。例へば「通行本萬葉集」卷七羇旅歌中の「木國之狭日鹿之浦爾」以下の十四首と、「妹爾戀余越去者」以下十五首との順序の錯亂は、この本も亦通行本に等しいが、初めの十四首と次の十五首とは、各々その一丁に相當してをるので、かの錯簡はこの二丁の順序を誤つたことより起つたものである事が知られ

る。その他この本の訓が通行本の訓と一致するものの多く、その誤までも一致してゐる類は、かの活字無訓本を改めて通行本の原本なる活字附訓本を作る時、この大矢本と同系の本を以て改訂を加へたことを證する。從つてこの大矢本は通行本の源流を究める上に缺くべからざるものである。〔附記〕（中院本）寂印成俊本中の一系で、寂印成俊本に禁裏御本等

中院本、又は由阿本として揭げてある。

【春日本萬葉集】（一名、春日懷紙裏切萬葉集）〔解說〕春日神社若宮の神主中臣祐定（後、改めて祐茂）が、歌會の懷紙の裏をかへして袋綴の册子とし、「萬葉集」を書寫したものである。但し後にその册子を解いて、歌の書いてあるもとの面を表とし、裏面の「萬葉集」の文字を極力削り去つて裏打を施した爲め（中には掛物

關戸守彥氏及び竹柏園所藏等の他の殘簡を調査して、この本が卷五・六・七・八・九・十・十三・十四・十七・二十の諸卷に亙つて書寫せられ、恐らくは、もとは全本であつた事、祐定が寬元二年三月迄に寫し終へたものである事等を明かにされた。この本は、本文を一行に、半面九行に書き、訓は片假字で右傍に附し、まゝ訓のない歌もある。題詞を低く、歌を高く書き、

年及び文永三年の仙覺の奧書があり、卷二十には文永三年の仙覺の奧書、應長元年の寂印の奧書、文和二年の成俊の奧書がある。漢字も片假字の傍訓も、共に木版活字で印行したものである。この本は今日殘存せる本が稀少である。〔系統〕「活字無訓本萬葉集」（後出）を底本として、寂印成俊本の一傳本によつて校合を加へ、更に傍訓を附して刊行したもので

る。これは室町時代のものと思はれる。又本文の歌には朱で合點を附したものがあり、長歌の上に朱の星符を附け、旋頭歌の上に紺青の星符を附けてゐる。これ等は何れも素より存してゐたものである。なほ題詞・左註には、往々ヲコト點を附してある。巻十二のみは仙覺本でなく、形式も異つてゐる。題詞を低く歌を高く書いた。巻末に奥書があり、仙覺本の奥書に見える文章と似てゐる。朱・墨・青等數種の筆で多くの書入があるが、これは大概仙覺本によつて爲されたものである。〔價値〕仙覺の文永本の原本の趣が最も明かに見られる點に、この本の價値がある。文永本では、

巻十四・十五良鎭大僧正、巻十六良賀、巻十七左大臣教季、巻二十參議時顯筆となつてゐるが信じられぬ。但し清範筆と云ふ六巻は同筆と認められるが、この筆者の如く鎌倉初期の寫本ではなく、巻一より巻十までは鎌倉時代末の寫本、巻十一以下は足利時代末期の寫本と認められる。〔傳本〕もと紀州德川家に傳へられた本で、後、松田道生を經て神田氏に入つた。故にこの本の事を一に紀本とも云つたと思はれる。而してこの紀州本は、既に四點萬葉集・代匠記・校異本に引いてゐるところで、殆ど全部神田本と一致するが、ただ「釋萬葉集」に引ける紀州本のみは、神田本と大

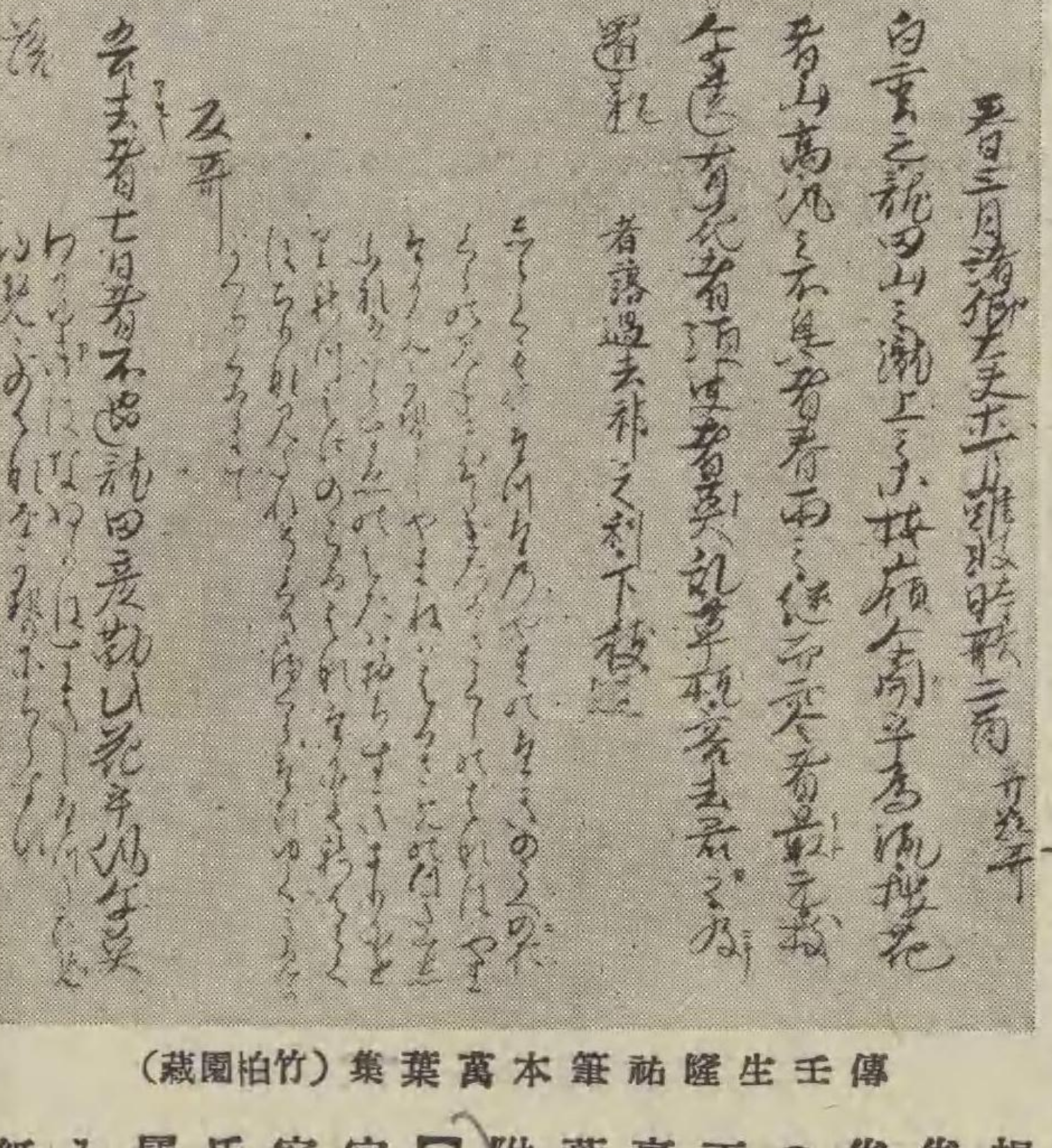
となつてゐる。〔價値〕前十巻が、仙覺以前本の一傳本として、かく多數の巻を存してゐることは、「元暦校本萬葉集」を除いて稀有であり、隨つて本文校訂の上に多大の價値を有してゐる。

【大矢本萬葉集】二十册〔形狀〕縱九寸五分、横七寸二分、淡青色表紙袋綴の册子。〔筆者〕巻一・二・三・十七の四巻、四・五の二巻、十一・十二・十五の三巻、十六・二十の二巻は各一筆で、その他の諸巻は何れも別筆と思はれる。室町時代末期頃の寫本であらう。〔傳本〕大矢透博士の舊藏本であつたが、大正七年竹柏園の所藏となつた。また寂印成俊本には、近

から、この系統の本を寂印成俊本と名づける。〔價値〕世に流布せる版本は、寂印成俊本を校合に用ひた本で、訓もこれによつて附したものである。而して本書はその寂印成俊本の古寫本として原形を窺ふに最もよく、萬葉研究史上に貴重なる材料を提供せるものといふべきである。例へば「通行本萬葉集」巻七羇旅歌中の「木國之狹日鹿之浦爾」以下の十四首と、「妹爾戀余越去者」以下十五首との順序の錯亂は、この本も亦通行本に等しいが、初めの十四首と次の十五首とは、各々その一丁に相當してをるので、かの錯簡はこの二丁の順序を誤つたことより起つたものである事が知られ

る。その他この本の訓が通行本の訓と一致するもの多く、その誤までも一致してゐる類は、かの活字無訓本を改めて通行本の原本なる活字附訓本を作る時、この大矢本と同系の本を以て改訂を加へたことを證する。從つてこの大矢本は通行本の源流を究める上に缺くべからざるものである。〔附記〕（中院本）寂印成俊本中の一系で、寂印成俊本に禁裏御本等を以て校合を加へた本をいふ。その中の一本なる京都帝國大學藏本には、慶長十二年の中院通勝の奥書、巻十三には慶長十一年の船橋秀賢の奥書があり、又巻一には冷泉爲滿筆と云ふ良恕法親王の奥書、巻二十には中院通村筆と云ふ良恕法親王の奥書のある本で、これに代赭を以て禁裏御本で校合を加へてある。禁裏御本は、永和元年十一月の由阿の奥書、應永二十三年及び同二十五年の前上總介源範政の奥書があり、同じく仙覺の文永本の系統に屬する本である。次にこの寂印成俊本の初めの方には藍色の記事があり、巻一の奥には「古萬葉集」の序もある。これ等は、「神田本萬葉集」によつて書き加へたものと思はれる。以上の如く、寂印成俊本に、禁裏御本及び「神田本萬葉集」の系統の本で校合を加へた本は、京都帝國大學、谷森眞男氏、多和文庫、前田侯爵家所藏の傳空性法親王筆本、岩崎文庫所藏木村正辭博士舊藏本、竹柏園所藏野宮定基筆本、宮內省圖書寮藏本等がある。また水戸彰考館文庫には、寛永版本にこの「中院本萬葉集」で校合を加へた校本がある。中院本は、もと八條智仁親王の御藏本で、中院通茂の相傳した本と云ふ。契沖の「萬葉代匠記」には、この水戸家の校本によつて、官本と稱して引用してゐる。「萬葉集書目提要」にも、官本又は中院本、又は由阿本として掲げてある。

【春日本萬葉集】（一名、春日懷紙裏切萬葉集）〔解説〕春日神社若宮の神主中臣祐定（後、改めて祐茂）が、歌會の懷紙の裏をかへして袋綴の册子とし、「萬葉集」を書寫したものである。但し後にその册子を解いて、歌の書いてあるもとの面を表とし、裏面の「萬葉集」の文字を極力削り去つて裏打を施した爲め（中には掛物とし、又手鑑に貼つてあるものもある）、「萬葉集」の文字は極めて僅に存し、微かに見ゆるもののみで、初めは「萬葉集」の筆者も、書寫の年月も分らず、ただ懷紙に中臣祐基の名のあるによつて、大凡の年代の知らるゝのみであつたが、昭和四年五月、金澤市松岡三次氏所藏の分に、「萬葉集」の面を削らざる數葉と、巻六と巻二十の巻尾を白紙に書いた二葉が發見された。即ち巻六の巻尾には、「寛元元年八月八日書寫之　祐定」、巻二十巻尾には、「寛元二年三月九日書寫之　祐定」とある。而して松岡氏・關戸守彦氏及び竹柏園所藏等の他の殘簡を調査して、この本が巻五・六・七・八・九・十・十三・十四・十七・二十の諸巻に亙つて書寫せられ、恐らくは、もとは全本であつた事、祐定が寛元二年三月迄に寫し終へたものである事等を明かにされた。この本は、本文を一行に、半面九行に書き、訓は片假字で右傍に附し、まゝ訓のない歌もある。題詞を低く、歌を高く書き、巻五・六の如きは、目録の部分も存してゐる。昭和五年四月、「春日本萬葉集」殘簡と題し、搨本として印行した。それには巻六の目録、その裏面の懷紙、巻六の巻尾、巻七の錯簡の部分の正しき證となるもの、その裏面の懷紙、巻二十の巻首、その裏面の懷紙、巻二十の巻尾の八葉を收め、佐佐木信綱の解説を附した。



傳壬生隆祐筆本萬葉集（竹柏園藏）

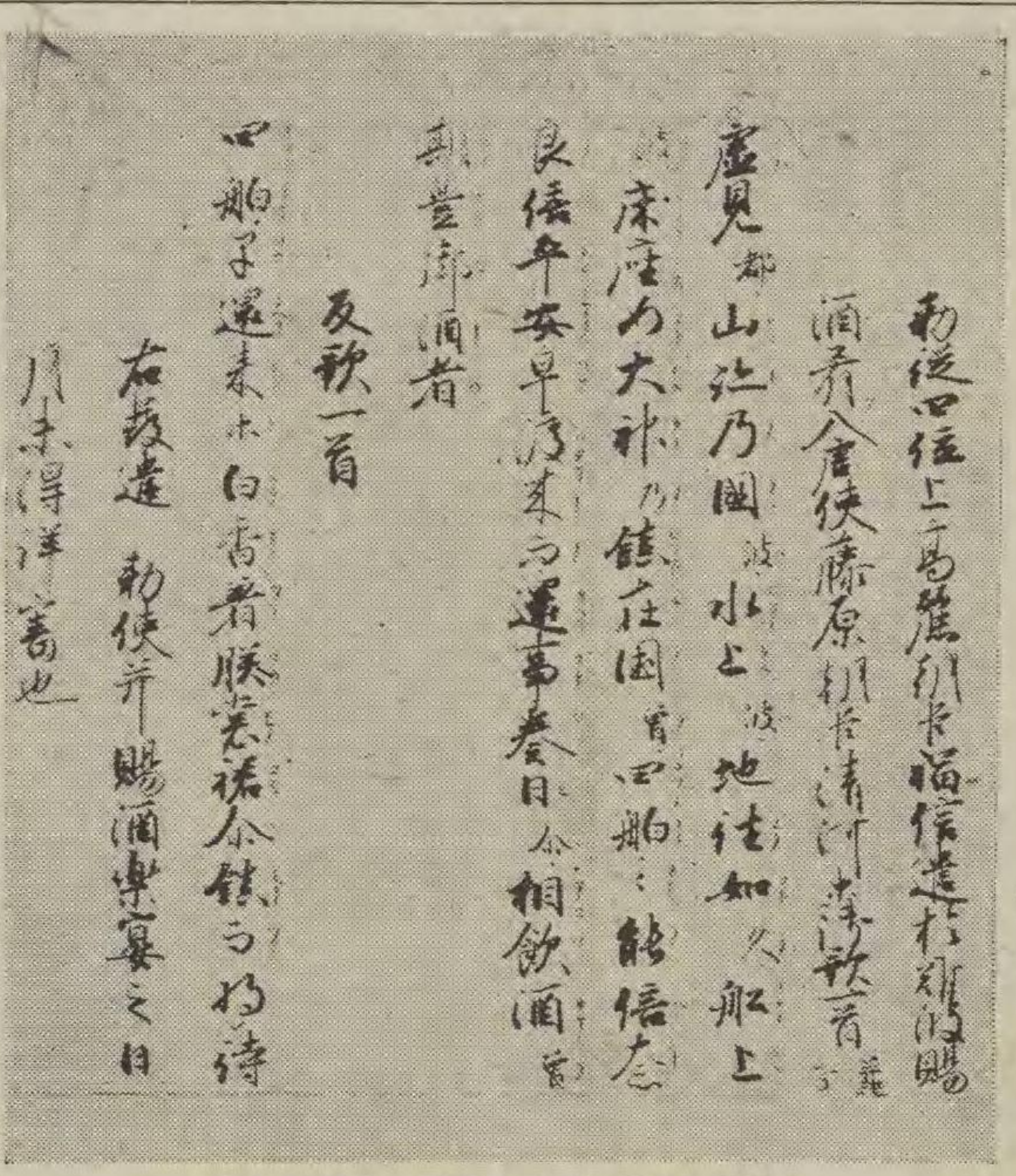
【萬葉集古筆】橋本經亮がその寓目した「萬葉集」の古筆類を影寫したもので、稻葉市郎右衞門氏の所藏、現に京都帝國大學附屬圖書館の保管する所となつてゐる。その古筆中には、桂本・藍紙本・元暦校本等十數葉あり、中には摸寫より轉寫したものもある。この中に、春日社司祐春筆としたものがあり、巻十九・二十にわたつて數葉が存し、その様式寸法等、全く「春日本萬葉集」の一部と思はれる。而も祐春筆とあるは傳への誤りで、上述の如く、祐春の祖父祐定の筆蹟である。

【活字附訓本萬葉集】二十册〔解説〕一頁八行十八字詰、欄界がある。各巻目録があり、題詞を低く歌を高くしてある。巻一に文永十年及び文永三年の仙覺の奥書があり、巻二十には文永三年の仙覺の奥書、應長元年の寂印の奥書、文和二年の成俊の奥書がある。漢字も片假字の傍訓も、共に木版活字で印行したものである。〔系統〕「活字無訓本萬葉集」（後出）を底本として、寂印成俊本の一傳本によつて校合を加へ、更に傍訓を附して刊行したものである。故にその訓は仙覺の訓によつたものである。

【活字無訓本萬葉集】二十巻十册〔刊行〕未詳。江戸時代初期か。〔解説〕木版活字本。一頁八行十八字詰で、欄界があり、訓を附せず、各巻目録があり、題詞を低くし歌を高くしてゐる。奥書はない。この本は今日多く殘存しない。〔系統〕細井貞雄の手澤本であつて木村正辭博士所藏となり、今岩崎文庫に入つてゐる二十巻の古寫本がある。「萬葉集書目提要」に家藏古本と云へるもので、また「細井本萬葉集」とも稱する。その中、巻四・五・六の三册は足利時代末の寫本と思はれて、他の十七册と性質を異にしてゐる。巻四・五・六は主として漢字の次行に片假字で訓を別提し、又訓を片假字で左右に傍書せるものもあり、訓を附けない歌もある。又巻四の後半はなく、代りに再び巻三の後半を附して一册とした。巻四・五・六は藤原定家・爲家流の本であらうと思はれ、爲家の著と云ふ「萬葉集佳詞」の訓と頗る一致するものがある。かくて定家が相傳の本を源實朝に贈り、仙覺が「萬葉集」の校合に用ひた鎌倉右大臣家本は、これと關係がある本と思はれる。次に爾餘の十七册は、訓は片假字で漢字の傍に附し、江戸時代に入つての書寫なるべく、各巻別筆である。この部分は

神宮文庫所藏の仙覺の寛元本から出たものと認められる。寛元本の特徴は、（一）歌を高く詞書を低く書いた。（二）訓は漢字の右傍にあり、他本の訓の難ある歌に和する時には墨で漢字の左に點じ、仙覺の新點は漢字の左に朱で點じた。（三）次點の歌には合點を附し、長歌の上には朱で星符を附し、旋頭歌の上には墨で星符を附した（仙覺文永本の特徴に關しては、西本願寺本萬葉集參照）。神宮文庫本は大方これ等の特徴を備へたものであり、細井本の十七册も亦これを襲うた本である。多分、神宮文庫本の系統の本で、それに三册を補足したものであらう。この細井本をそのまゝ書寫したものが「林道春校本萬葉集」で、「萬葉集書目提要」に昌平本といへる本である。二卷づつ合綴して十册とした。「校異本萬葉集」（別項）に林として校異を出せるは、この本のことであらう。而して「活字無訓本萬葉集」は、この林道春校本によつて印行したものであるが、ただ訓を削り去つて全く存しない。又卷四の後半がなく、卷三の重出であるとも、細井本と全く同一である。なほ細井本の卷四・五・六を除く十七册に就いては、圖書寮所藏の今出河本も同系統の仙覺寛元本に屬し、神宮文庫本とも一致してゐる。但し今出河本の卷四・五・六は、仙覺文永本によつて補足したものである。〔價値〕「萬葉集」を印行せる最初の本として價値があると共に、その本文が仙覺の寛元本系統、又は定家・爲家流の本によつてゐる所に價値が存する。ただ訓を削り去つたのは甚だ遺憾である。この後の版本は凡てこの本より出てゐると思はれ、而もこの本と比するに、異なれる點があり、まゝ是正し得る所もあるので、多くの價値を持つてゐる。〔書入本〕水戸彰考館に、この本に細川幽齋本・飛鳥井雅章本・飛鳥井雅章校合本の三本で校合を加へた書入本があり（但し五・六・七・八の四卷を缺く）、延寶六年の奧書が存する。この幽齋本や飛鳥井本は、何れも寂印成俊本に屬する（大矢氏舊藏本「萬葉集」の項參照）。

【寛永本萬葉集】 二十册 〔刊行〕 寛永二十年 〔解説〕 紙表紙袋綴、表題は「萬葉和歌集」とあり、整版で、京都三條寺町誓願寺前安田十兵衞の刊行である。一頁八行十八字詰で四方に欄界があり、漢字の右傍に片假字で訓を附した。題詞を低く歌を高くし、各卷に目錄がある。これ等の樣式及び奧書など、全く「活字附訓本萬葉集」（前出）と同一で、これをそのまゝ整版に附したものである。故に丁數に至るまで同一であるが、卷十五の目錄に一葉減じた所がある。また諸所に誤が生じてゐるから、必ず「活字附訓本萬葉集」と照し合せて訂正を加ふべきである。この本は江戸時代に最も世に行はれ、流布本と云ひ通行本と云ふのもこの本のことであり、江戸時代の諸學者より現今に至るまで、「萬葉集」研究の底本としては、常にこの本が用ひられる。かく盛行したので、增刷を重ねて版木の磨滅を生じ、ために一小部分の改刻埋木を行つて誤字の生じてゐる所もある。又卷一の奧書を卷首に綴ぢた本もある。故に後刷の本でなく、なるべく元刷に近いものを取らなければならぬ。明治以後の版本もこの寛永本を飜刻したものが多く、「校本萬葉集」や「萬葉集總索引」の如きも、この寛永本を底本として影印してゐる。「寶永本萬葉集」は、寛永本の版本を購入し、奥附を變へて印行した本である。故に寛永本に比して不鮮明な所が多い。奥附には寶永六年の刊年があり、出雲寺和泉掾とある。この本は重刷の際に改刻を施したので、本によつて小部分の差異を生じ、また一丁全部を補刻したところもある。〔書入本〕寛永本、又は寶永本に名家の書入を施した書入本はその數が多い。その主なものを擧ぐれば、正保四年の三宅正堅書入本（竹柏園所藏）、「中院本萬葉集」で校合を加へた水戸彰考館藏本（大矢本萬葉集參照）、元祿九年乃至十三年に契沖の説を多く書き入れた今井似閑書入本（賀茂別雷神社所藏）、享保七年の新井白石書入本（保科孝一氏所藏）、寶曆十二年の村田春道書入本（竹柏園所藏）、山岡明阿書入本（宮内省圖書寮所藏）、天明五年乃至寛政八年の荒木田久老書入本及び河津宇萬伎書入本によつて書き入れた寛政十二年の關谷潜書入本（黒川眞前氏所藏）等は寛永本の書入であり、寛保二年の谷川士淸書入本（松井簡治博士所藏）、木村正辭博士書入本（岩崎文庫所藏）等は寶永本の書入である。なほ谷川士淸書入本は、契沖説を今井似閑が「代匠記」に書き入れた書入本を、樋口宗武が本集に移した本によつたものである。而して本居宣長校正本として、諸家の「萬葉集」に寶曆七年の本居宣長の奧書を載せてゐる本は、同じくこの樋口宗武の本より出たものである。



金澤文庫本萬葉集（竹柏園藏）

【古萬葉集】 二十册 〔刊行者〕 今村樂・横田美水 〔刊行〕 享和三年 〔解説〕 土佐國人谷眞潮の弟子なる今村樂の享和三年八月の序文があり、今の版本の訓には誤が多いので、その誤を正して新たに訓を施さんとしてものした由を記してゐる。また美水の跋文がある。「寶永本萬葉集」によつて印行したものであるから、行數・字數・丁數等全く寶永本と同一である。但し仙覺・寂印・成俊の奧書等は全く削り去つてゐる。この本は木活字で、「萬葉集」の本文だけを印行した本であるが、文字の增減・改易等も臆斷で施し、文字を埋め殘して刷り上げたところもあり、「古萬葉集」と題したが、必ずしも「萬葉集」の古體を存するものでなく、ただ土佐學派の學説研究を窺ふに便りよき本である。 〔以上佐佐木〕

【内容・組織】 〔歌體〕 普通、短歌・長歌・旋頭歌（各別項）の三體であるが、外に佛足石歌（別項）體の歌でないかと疑はれてゐるものと、連歌（別項）の形をとつたのとがあるから、正確に言へば五體である。短歌とは、五・七・五・七・七の形の歌で、即ち後世の和歌に當る。萬葉作品總數大約四千五百餘首の九割二分は、實にこの短歌の形である。但し實際には、長歌はその量から見て、長歌の一首は短歌の十首・二十首に相當する場合が多いから、上記の短歌の數は遙に割引して考ふべきである。因に長歌は全歌數の六分五厘、旋頭歌が一分五厘程である。長歌（別項）は不定形の長詩を呼ぶ名であるが、飛鳥京頃の歌から、次第に一定の型に統一された。「萬葉集」中でも卷一・二・十三の古い長歌は不定型が多く、それ以外の卷、即ち「萬葉集」中期以後の卷の長歌は殆ど定型である。而してこの定型になると同時に、長歌

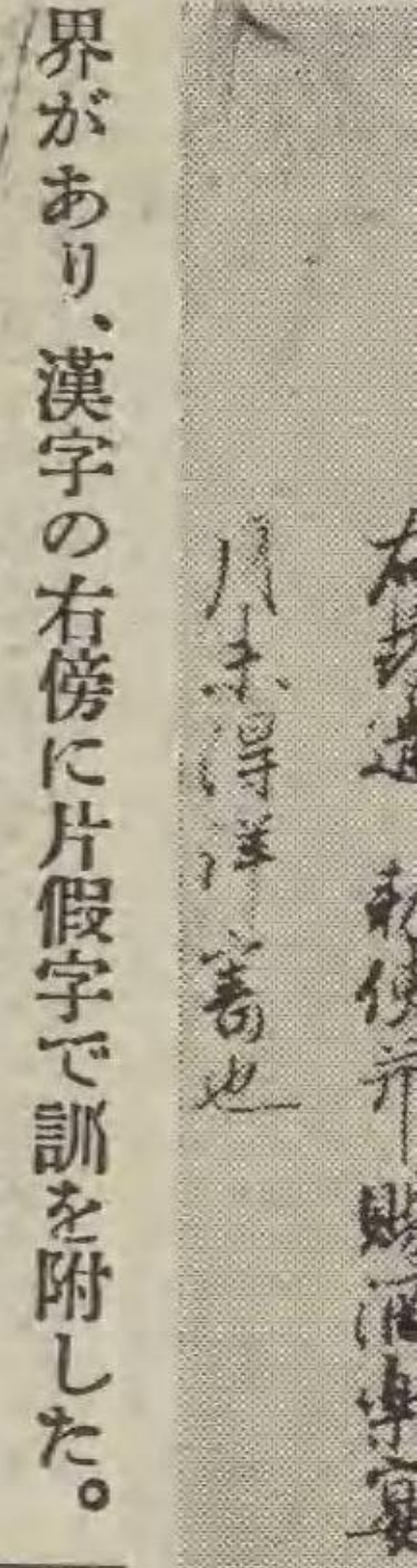
と見るべきか、二首と見るべきか、決定しにくいものによつて結果が違ふ。今その代表的なものを擧げて見ると、

書名	總數	長歌	短歌	旋頭歌
萬葉集目錄	四五六〇	二六三	四二四七	五〇
八雲御抄	四三一五	二五〇	—	—
袋草紙	四三一三	二五九	—	—
代匠記惣釋	四五一五	二六六	四一八六	六三
萬葉集古義	四四九六	二六二	四一七三	六一

と、卷一・二・十三の三卷が最も古く、卷十七以下卷二十までの四卷が最も新しく、他の十三卷はこの最古最新の中間時代の作品を含むものである。眞淵の六卷説（卷一・二・十一・十二・十三・十四の六卷の作品が特に古いからこの六卷が元來の「萬葉集」であつて、現在の卷の順序は後に誤つたもので、これはこの六卷を最初におく順序に改めねばならぬとする）は甚だ著名な説だが、今日から見ると訂正せねばならぬ。

品は、前者は卷十一・十二・十三・十四・十六の終の部（筑紫の白水郎の歌以後）、卷二十の防人歌であり、後者は右以外の部分である。後世の勅撰集の類では、前者が無いために作品の全部が貴族的な作風のみとなつて野性や純情やを缺くこととなつた。第二種の作家の主なるものは、皇族では、雄略・天智・天武・持統・聖武の諸天皇、志貴・大津・弓削・有馬の諸皇子、大伯・但馬の諸皇女、長田・湯原・市原の諸王及び

除く十七册に就いては、圖書寮所藏の今出河本も同系統の仙覺寬元本に屬し、神宮文庫本とも一致してゐる。但し今出河本の卷四・五・六は、仙覺文永本によつて補足したものである。〔價値〕「萬葉集」を印行せる最初の本として價値があると共に、その本文が仙覺の寬元本系統、又は定家・爲家流の本によつてゐる所に價値が存する。ただ訓を削り去つたのは甚だ遺憾である。この後の版本は凡てこの本より出てゐると思はれ、而もこの本と比するに、異なれる點があり、まゝ是正し得る所もあるので、多くの價値を持つてゐる。〔書入本〕水



界があり、漢字の右傍に片假字で訓を附した。題詞を低く歌を高くし、各卷に目錄がある。これ等の樣式及び奧書など、全く「活字附訓本萬葉集」（前出）と同一で、これをそのまゝ整版に附したものである。故に丁數に至るまで同一であるが、卷十五の目錄に一葉減じた所がある。また諸所に誤が生じてゐるから、必ず「活字附訓本萬葉集」と照し合せて訂正を加ふべきである。この本は江戸時代に最も世に行はれ、流布本と云ひ通行本と云ふのもこの本

の數が多い。その主なものを擧ぐれば、正保四年の三宅正堅書入本（竹柏園所藏）、「中院本萬葉集」で校合を加へた水戸彰考館藏本（大矢本萬葉集參照）、元祿九年乃至十三年に契沖の說を多く書き入れた今井似閑書入本（賀茂別雷神社所藏）、享保七年の新井白石書入本（保科孝一氏所藏）、寶曆十二年の村田春道書入本（竹柏園所藏）、山岡明阿書入本（宮內省圖書寮所藏）、天明五年乃至寬政八年の荒木田久老書入本及び河津宇萬伎書入本によつて書き入れた寬政十二年の關谷潛書入本（黑川眞前氏所藏）等は寬永本の書入であり、

ずしも「萬葉集」の古體を存するものでなく、ただ土佐學派の學說研究を窺ふに便りよき本である。〔以上佐佐木〕

【內容・組織】〔歌體〕普通、短歌・長歌・旋頭歌（各別項）の三體であるが、外に佛足石歌（別項）體の歌でないかと疑はれてゐるものと、連歌（別項）の形をとつたのとがあるから、正確に言へば五體である。短歌とは、五・七・五・七・七の形の歌で、即ち後世の和歌に當る。萬葉作品總數大約四千五百餘首の九割二分は、實にこの短歌の形である。但し實際には、長歌はその量から見て、長歌の一首は短歌の十首・二十首に相當する場合が多いから、上記の短歌の數は遙に割引して考ふべきである。因に長歌は全歌數の六分五厘、旋頭歌が一分五厘程である。長歌（別項）は不定形の長詩を呼ぶ名であるが、飛鳥京頃の歌から、次第に一定の型に統一された。「萬葉集」中でも卷一・二・十三の古い長歌は不定型が多く、それ以外の卷、即ち「萬葉集」中期以後の卷の長歌は殆ど定型である。而してこの定型になると同時に、長歌の後へ「反歌」（別項）をつける事が始まつた（舒明帝時代のものより）。「旋頭歌」と云ふ名は、「萬葉集」卷七に見えるのが最も古い。「萬葉集」の中には六十餘首もある。量質共に微弱であるが、この體は「萬葉集」以外には「古事記」の雄略・仁德二帝の條に各一首（但し旋頭歌と云ふ名を附けてない）、「書紀」の雄略・繼體二帝の卷に各一首、總計四首。下つて「古今集」卷十九雜體の部中に旋頭歌の目を立て四首收めてあるのみで、これ等に比べると「萬葉集」の旋頭歌は甚だ多數で、今日我等の見得る旋頭歌の殆ど全部は「萬葉集」に含まれてゐると言へる。これから見て、藤原・奈良京時代前後に榮えた一詩形で、又その內容から見て主に民間に好まれて上流の間では作られなかつた詩形かと思はれる。〔歌數〕大約四千五百餘首と云ふ概數は動かないが、正確な數は計へ出せない。それは、「萬葉集」が不整頓な（或は未整頓な）歌集であるため、（一）計算に使つた本によつて歌の數が違ふ。（二）その歌の異傳を出すために「一本歌」「或本歌」「一本云」「或本云」等を出してあるのを計算に入れるか入れぬかで結果が違ふ。（三）計算する人の考へによつて、類歌のある歌を別な二首として數へるか、一首と見てしまふかによつて結果が違ふ。（四）一首と見るべきか、二首と見るべきか、決定しにくいものによつて結果が違ふ。今その代表的なものを擧げて見ると、

書名	總數	長歌	短歌	旋頭歌
萬葉集目錄	四五六〇	二六三	四二四七	五〇
八雲御抄	四三一五	二五〇	—	—
袋草紙	四三一三	二五九	—	—
代匠記惣釋	四五一五	二六六	四一八六	六三
萬葉集古義	四四九六	二六二	四一七三	六一
國歌大觀	四五一六	—	—	—
萬葉集書志	四四六二（他に、或本歌六十。一書ノ歌五。一本ノ歌四。或ル書二。或ル歌一。古事記ノ歌一）			

「萬葉集目錄」が最も多く、「八雲御抄」「袋草紙」が最も少い。後者の少いのは、上記の計算に用ひた原本が今本と違つたと云ふ根本的理由による。以上のうち最も一般に知られてゐるのは、雅澄の「古義」のもので、明治中期以後の人は殆ど無反省にこの計數に據つてゐる。が、何某歌・何某歌を除く又は加へたと明記して計算の根據を示してゐる點では、武田氏の「萬葉集書志」の計算を唯一のものとして推賞すべきである。〔作品の時代〕最も古い作は、卷二卷頭の第十六代仁德帝の皇后磐姫皇后の「君が行きけ長くなりぬ」の歌であつて、最も新らしきは、卷二十の最後にある第四十七代淳仁帝の天平寶字三年正月一日大伴家持の作れる「新らしき年の初の」の歌で、この間、約四百四十年である。このうち、年代判明の歌は、孝德帝以前の作はごく少數で、齊明—淳仁に亙る十一代ほぼ百年間（このうちでも、特に舒明以後の七十年間）の作が大部分である。これを卷に就いて言ふと、卷一・二・十三の三卷が最も古く、卷十七以下卷二十までの四卷が最も新しく、他の十三卷はこの最古最新の中間時代の作品を含むものである。眞淵の六卷說（卷一・二・十一・十二・十三・十四の六卷の作品が特に古いからこの六卷が元來の「萬葉集」であつて、現在の卷の順序は後に誤つたもので、これはこの六卷を最初におく順序に改めねばならぬとする）は甚だ著名な說だが、今日から見ると訂正せねばならぬ。〔作者〕特色は、作者が廣範圍に亙つてゐる事である。作者の數からすれば、名の判明してゐる者と無名の作者と計數百人に及ぶ。作者の身分・階級からすれば、上は天皇より下は東國地方の農夫・軍人、少數ながら乞食や遊女に亙る迄の間の殆どすべての階級を含む。作者の土地も、大和の諸地方を中心として陸奧・東國・北陸・九州に亙つてその土地々々の人の歌がその地へ旅した人の作と共に收められてゐる。この作者の階級・鄕土の廣範圍な事が、「萬葉」の作品をして後の勅撰集（別項）のやうに作品を狹く固定せしめないで、多種多樣の美を現はさしめ、萬葉の價値をして藝術的に極めて高いものとした。而してこの種々の階級の作者は、二つの對立した種類に分割することが出來る。第一種の作家は、當時の庶民階級や地方の土民などで、その作品の特色は、民謠風の內容（主に戀歌）、民謠風の表現を持ち、作者の個性は隱れて一色の共通な色彩で覆はれてゐる。その作品は、口から口へ言ひ傳へられてゆく「民衆的作家」とでも言ふべきものである。第二種の作家は、當時の上流階級及び人麿・赤人等の專門歌人から成る一團である。その作品の特色は、純藝術的な作風で、作者の個性や特色が明かに現はれてゐる。その作品は、前者は卷十一・十二・十三・十四・十六の終の部（筑紫の白水郎の歌以後）、卷二十の防人歌であり、後者は右以外の部分である。後世の勅撰集の類では、前者が無いために作品の全部が貴族的な作風のみとなつて野性や純情やを缺くこととなつた。第二種の作家の主なるものは、皇族では、雄略・天智・天武・持統・聖武の諸天皇、志貴・大津・弓削・有馬の諸皇子、大伯・但馬の諸皇女、長田・湯原・市原の諸王及び額田王。臣下では柿本人麿・山部赤人・大伴旅人・同家持・山上憶良・高橋蟲麿・高市黑人・笠金村・中臣宅守等の男子、坂上郎女・茅上女郎・石川郎女等の女子である。〔用字法〕上代の他の古典と同じく、漢字で書かれてあるために、漢字を以て如何に表現するかに就いて用字法の問題が起る。この漢字の使用法は、音あり訓あり、實に多種多樣を極めてゐる。多種多樣であるから古來の萬葉學者の中、この多樣の中に何等かの法則を發見して萬葉の用字法を根本的な幾つかの規則に纏めようと努力した人が少くない。既に鎌倉の仙覺（仙覺奏覽狀）は、眞名假名・正字・假字・義讀の四つに分類し、南北朝の頃の由阿（詞林采葉抄）は七つに分ち、江戸時代の春登（萬葉用字格）は八つの分類を立て、武田祐吉氏（「上代國文學の研究」及び「アララギ」大正十五年一月號）及び澤瀉久孝氏（國語國文の研究第四號）は四分類を主張された。この中最も普通に知られてゐるのは春登の說で、これを基礎にして平明に且つ合理的に說いたかは最後の二氏の說である。春登の說は八に分類し、初めの二が音、次の五が訓を用ひるもので、最後が音訓何れもを用ひる別個の用法と見るのである。即ち（1）正音、（2）略音、（3）正訓、（4）略訓、

磐姫皇后（仁德天皇后）の作で、これは「萬葉集」全部中で最も古い歌である。最も新らしい作は靈龜元年（元明天皇の最末年、奈良遷都第五年）である。だから磐姫皇后の歌が餘りに古くて信じ難いとしても、卷中の歌の殆ど全部は飛鳥・奈良京の作で、甚だ古い卷であることが分る。(5)不明。前述の如く卷一と同一人によつて編まれて他の卷と別に獨立してゐた事は確かである。品田太吉氏は、組織の整頓して

なり初めてゐる事、短歌が著しく增加した事等注意すべき特色である。卷中の人麿・赤人・黑人・旅人（各別項）など臣下の著名歌人の作品の價値は、「萬葉集」を代表するものである。

〔第四卷〕(1)全部相聞で、卷中には小さな部類分は全然ない。ただ歌をほぼ年代順に並べ、作者・歌數を記すのみである。(2)長歌一首、短歌三百一首、旋頭歌一首。(3)皇族に聖武帝・志貴皇子・安貴王・市原王・湯原王及び鏡女

首、散文若干がある。散文は長文が多くて量から云つても內容から見ても集中に類のない大きな位置を占めてゐる。(3)大伴旅人と山上憶良二人の作が卷中の大半を占めてゐる。外にこの二人の周圍の人の作が若干ある。年代判明の歌は神龜五年から天平六年までの七年間で、他の作も多くこの間を離れない作である。即ち、大凡奈良京の初期・中期の作の集成である。(5)旅人の周圍の何人かが集めた

卷三・四と共通の作家が多いことなどから、大伴家持が編んだ卷だと考へられる。(6)旅の歌と遷都の歌とが目立つて多いが、形だけ整つて人に迫る力の足りない歌が多い。

〔第七卷〕(1)雜歌・譬喩・挽歌の三部類に分れてゐる。その各部內を更に「詠レ天」「詠レ月」等（以上雜歌部）及び「寄レ衣」「寄レ絲」等（以上譬喩部）のやうな小目によつて分つてゐる。即ち歌の意味・內容による分類である。而して雜歌

---

(5)約訓、(6)義訓、(7)借訓、(8)戲訓に分れてゐる。武田・澤瀉の兩氏の分類は、分類の方法も四つに分類すると云ふ點も、甚だ相似てゐて、ただ說明の言葉が相違してゐるに過ぎないと思はれる故、今、一緒にしてその分類を述べると、次の如くである。（）の中は春登の分類である。

漢字ノ意味ヲトツテ用ヒタ場合

(1)音讀＝漢字ノ音ヲ用フル場合
○餓鬼・法師・布施・檀越（春登ニコノ分類無シ）

(2)訓讀＝漢字ノ訓ヲ用フル場合
○潮・春・星・山川・天地（以上正訓）○暖・寒・金・丸雪・未通女（以上義訓）

(以上(1)(2)ノホカニ、春登ハ略訓と約訓トヲ立テテヰルガ、コレハ、上記ノ如ク、音韻ノ都合上或ル音ガ省カレタモノデ、用字法ノ一分類ト云フヲ得ナイ)

漢字ノ意味ト無關係ニ(卽チ、漢字ノ意味ヲ無視シテ)用ヒタ場合

(3)音讀＝漢字ノ音ヲ用ヒタ場合
○阿・伊・宇・加・紀・久・南・念（以上正音）○安・香・吉・君（以上略音）

(4)訓讀＝漢字ノ訓ヲ用ヒタ場合
○射・蚊・荷・浦（心の意味ノウラ）・鶴・鴨（助動詞）（以上借訓）○市・跡・常（以上略訓）

(以上ノ外ニ「戲書」ト春登ガ言フノハ、以上ノ(1)(2)(3)(4)ノ何レカニ屬スルモノヲ更ニ捻ツテ戲レタモノ)

さて、用字法の實際を見ると、(1)の類は卷十六に僅か有るだけでごく少い。これのみを用ひた歌は全く無い。最も多いのは(2)を主にして(3)(4)をこれにまじへ用ひたもので、萬葉の大部分はこれである。その中間に在るのが(3)のみに據つたもの（卽ち、一音一字の法式で卷五・十四・十五・十七・十八・十九・二十の大部分）と、(2)のみによつたもの（卷十一所載の人麿歌集の歌群の大部分）との二つである。

〔作品の部類分〕「萬葉集」は、種々の標準によりその作品を分類してゐるが、その根本的の分類は、雜歌・相聞・挽歌（各別項）の三分類に歸する。この三分類から後に言ふ如き諸分類が派出してゐる。これ等のうち挽歌の數は二百三十首ほどで全歌數の二十分の一である。雜歌・相聞の二部類に比べると遙かに少い。この三の基本分類を土臺にして、先づ雜歌・相聞の二部類を四季と組合せて、春雜・春相聞・夏雜・夏相聞・秋雜・秋相聞・冬雜・冬相聞と八分することが行はれた。卷八・十がこれである。この分類は支那から得た季節意識に基いてゐる。當時に在つては最新の分類法で「古今集」以下の歌集の摸倣する所となつた。次に、雜・相聞の部類內に、もつと小さな細分類が立てられた。卽ち卷七の如きは、雜歌の部內に、羇旅作や問答の如きが設けられ、卷三の如きは、雜歌・挽歌と相對して、譬喩歌（別項）部が設けられた。これは相聞歌のうち、心を直叙せず、何か他の物を借りて言ひ現はした歌のみを集めた部である。また卷十一・十二の如きは、全體が相聞歌であるのに、正述二心緒一・寄レ物陳レ思歌（以上別項）・問答歌等の細部に分割されてゐる。第一のものは、心を直接に述べたもので、普通の相聞歌と同一のものである。第二のものは、第一のものと譬喩歌との中間に在るもので、他物を借りて（他物に寄託して）言ひ現はしてはゐるが、譬喩歌の如く全然他物が主體となつてしまつてゐる所謂たとへ歌と云ふまでには至つてゐない中間物である。第三の問答歌は、上記の如く卷七でも雜歌部に見ゆるものであるが、問の意の歌と答の意の歌とを並記したもので、多くは男女の問答になつてゐる。かくさま〴〵の分類法があるが、その最も根本的な且つ大きな分類法は、雜・相聞・挽歌の三部で、このうち前の二つが集の大部分を占めてゐる。以上の分類法によつて、「萬葉集」がよく整理統一されてゐるかと云ふに、事實はさうでない。この「歌の性質による分類」のほかに、歌の製作年月順によつて整理する傾向が強く働きかけてゐて、實際に於ては、性質による統一と作年月による排列とが殆ど同勢力を以て作用し、この二法則が相俟つて集中の歌を分類整理してゐる。故に分類法としては、上記の性質による分類を擧ぐれば足りるが、集の分類の實際は、別に年代順の排列のことを頭に置いて見ねば理解出來ない（なほ各卷に於ける分類の實際は次に說く）。

【各卷の性質】「萬葉集」は前述の如く、集中に統一がなくて、十數個の獨立した小さな集がただ雜然と寄せ集められてゐるに過ぎない。從つて「萬葉集」の實際の姿を知るには各卷々の姿を知らねば不可能である。部類分も編者も、殆ど各卷によつて異なつてゐるものを、二十卷一律に考へる見方では、實際を離れた空言に陷るおそれがある。今各卷を、(1)組織・(2)歌數・(3)作者・(4)時代・(5)編纂及び編者・(6)作品の特色價値の六項に分けて略述して見よう。

〔第一卷〕(1)全部雜歌である。これは卷二の相聞・挽歌の部類と並立するので、卷一・二が一部の書であつた有力な證據である。而して卷のうちを、天皇の代によつて年代順に區分してゐる。すなはち泊瀨朝倉宮御宇天皇代（雄略天皇時代の意）、高市岡本宮御宇天皇代（舒明天皇時代）のやうな標目をかゝげ、その標目の下にその御代の歌を集めてゐる。この點も卷二と同樣である。大體に於て甚だ整頓した卷である。(2)長歌十五首、短歌六十八首。他に異傳の長歌が一首。(3)皇族及び貴族等社會の上流にゐた人々で、主なる作家は、皇族に、雄略・天智・天武・持統・元明の諸天皇及び志貴皇子・長皇子・麻續王・額田王等。臣下に柿本人麿・高市黑人・春日老・長奧麿・山上憶良・藤原宇合。(4)卷頭の雄略帝の御製（年代未詳）を最古とし、和銅五年（元明帝の御代）の歌まで約二百四十年間である（この中、最後の六十年間の作が最も多い）。奈良朝始まつて僅か四年目の歌が最も新らしい歌で、大部分は飛鳥京・藤原京時代の作である。(5)不明である。但し卷二と連絡及び相似點が著しいから、卷二と同一の人によつて編まれた事だけは確かである。(6)時代の古い歌が多く、從つて作品の內容も表現も古樸で力強い。

〔第二卷〕(1)全體を相聞部・挽歌部の二部に分ち、各部內を天皇の御代によつて順に區分し、各歌の前に作者と歌數を記すこと卷一と同樣で、大體に於て甚だ整頓してゐる。(2)相聞部が長歌二首と短歌五十首。挽歌部が長歌十五首と短歌七十五首（他に異傳の長歌一首・短歌三首）。(3)主なる作者は、皇族に天智・天武・持統の三天皇。磐姫・倭姫の二皇后。有馬・弓削・穗積の諸皇子。大伯皇女・額田王等の女流がある。臣下には藤原鎌足・柿本人麿・大伴安麿・久米禪師・三方沙彌・石川郎女等がある。皆、飛鳥・藤原京時代の人々で、この卷の古い卷である事が分る。(4)最古の歌は、卷頭の

○阿・伊・宇・加・紀・久・南・念（以上正音）○安・香・吉・君（以上略音）

(4)訓讀＝漢字ノ訓ヲ用ヒタ場合

○射・蚊・荷・浦（心の意味ノウラ）・鶴・鴨（助動詞）（以上借訓）○市・跡・常（以上略訓）

（以上ノ外ニ「戲書」ト春登ガ言フノハ、以上ノ(1)(2)(3)(4)ノ何レカニ屬スルモノヲ更ニ捻ツテ戲レタモノ）

さて、用字法の實際を見ると、(1)の類は卷十六に僅か有るだけでごく少い。これのみを用ひた歌は全く無い。最も多いのは(2)を主にして(3)(4)をこれにまじへ用ひたもので、萬葉の大部分はこれである。その中間に在る

は、雜歌・挽歌と相對して、譬喩歌（別項）部が設けられた。これは相聞歌のうち、心を直叙せず、何か他の物を借りて言ひ現はした歌のみを集めた部である。また卷十一・十二の如きは、全體が相聞歌であるのに、正述心緒・寄物陳思歌（以上別項）・問答歌等の細部に分割されてゐる。第一のものは、心を直接に述べたもので、普通の相聞歌と同一のものである。第二のものは、第一のものと譬喩歌との中間に在るもので、他物を借りて（他物に寄託して）言ひ現はしてはゐるが、譬喩歌の如く全然他物が主體となつてしまつてゐる所謂たとへ歌と云ふまでには至つてゐない中間物

ただ雜然と寄せ集められてゐるに過ぎない。從つて「萬葉集」の實際の姿を知るには各卷々の姿を知らねば不可能である。部類分も編者も、殆ど各卷によつて異なつてゐるものを、二十卷一律に考へる見方では、實際を離れた空言に陷るおそれがある。今各卷を、(1)組織・(2)歌數・(3)作者・(4)時代・(5)編纂及び編者・(6)作品の特色價値の六項に分けて略述して見よう。

〔第一卷〕(1)全部雜歌である。これは卷二の相聞・挽歌の部類と並立するので、卷一・二が一部の書であつた有力な證據である。而して卷のうちを、天皇の代によつて年代順に區分

〔第二卷〕(1)全體を相聞部・挽歌部の二部に分ち、各部內を天皇の御代によつて順に區分し、各歌の前に作者と歌數を記すこと卷一と同樣で、大體に於て甚だ整頓してゐる。(2)相聞部が長歌二首と短歌五十首。挽歌部が長歌十五首と短歌七十五首（他に異傳の長歌一首・短歌三首）。(3)主なる作者は、皇族に天智・天武・持統の三天皇。磐姫・倭姫の二皇后。有馬・弓削・穗積の諸皇子。大伯皇女・額田王等の女流がある。臣下には藤原鎌足・柿本人麿・大伴安麿・久米禪師・三方沙彌・石川郞女等がある。皆、飛鳥・藤原京時代の人々で、この卷の古い卷である事が分る。(4)最古の歌は、卷頭の磐姫皇后（仁德天皇后）の作で、これは「萬葉集」全部中で最も古い歌である。最も新らしい作は靈龜元年（元明天皇の最末年、奈良遷都第五年）である。だから磐姫皇后の歌が餘りに古くて信じ難いとしても、卷中の歌の殆ど全部は飛鳥・奈良京の作で、甚だ古い卷であることが分る。(5)不明。前述の如く卷一と同一人によつて編まれて他の卷と別に獨立してゐた事は確かである。品田太吉氏は、組織の整頓してゐる點等と比考して、卷一・二だけは他の卷と違つて勅撰歌集だと主張してゐる。(6)卷一と同樣である。

〔第三卷〕(1)全體を雜・譬喩・挽歌の三部にわかち、各部內に於ては大體作年月の順に歌を並べてゐる。各歌の前には作者と歌數とを記す。(2)長歌一首、短歌三百一首、旋頭歌一首。卷一・二に比して殆ど全部が短歌であるのは、作者の大多數が奈良朝代の新しい作家だからである。(3)主なる作者は、皇族に聖武帝・志貴皇子・春日王・湯原王及び鏡女王・額田王等。臣下に柿本人麿・笠金村・大伴旅人・大伴家持等の男子及び紀女郎・笠女郎・坂上郎女・坂上大孃・田村大孃等の女子である。藤原京の末から奈良京の中期にかけての作家で新しい時代の人の多い事が目立つ。同時に大伴家の人々の多い事も目立つ。(4)雜部は持統朝から聖武朝の天平の初期まで（年代の知れてゐるのは天平五年が最後）。譬喩部は持統朝頃から天平半迄。挽歌部は推古朝から天平十六年七月迄。このうち推古朝は聖德太子の一首だけだからこれを暫く除くと、持統朝から聖武朝迄に亙る作品である。(5)大體大伴家持が編したものと信ぜられてゐる。(6)古樸な卷一・二に比して歌の調子・色彩が柔らかくなり初めてゐる事、短歌が著しく增加した事等注意すべき特色である。卷中の人麿・赤人・黑人・旅人（各別項）など臣下の著名歌人の作品の價値は、「萬葉集」を代表するものである。

〔第四卷〕(1)全部相聞で、卷中には小さな部類分は全然ない。ただ歌をほぼ年代順に並べ、作者・歌數を記すのみである。(2)長歌一首、短歌三百一首、旋頭歌一首。(3)皇族に聖武帝・志貴皇子・安貴王・市原王・湯原王及び鏡女王・額田王等。臣下に柿本人麿・笠金村・大伴旅人・大伴家持等の男子及び紀女郎・笠女郎・坂上郎女・坂上大孃・田村大孃等で、大伴一族の多い事が目立つ。(4)卷頭の「難波天皇ノ妹云云」を仁德天皇の妹と云ふ事にとると、甚だ古くからの歌を集めた事になるが、それでは餘りに古きに過ぐるから、この歌は古來作者を疑はれてゐる。これを除くと、次の舒明帝の作から奈良の中期迄の作を集めた卷だと言へる。大體は奈良の初期から中期にかけての歌を集めてある。(5)大伴家持が古人及び自己の入手した作のうち、相聞歌と見るべきもののみを採集してこの一卷を編したと見るべきである。さうしてこの卷は、同じく家持編なる第三卷の雜・譬喩・挽歌にこの相聞の卷を併せて二卷で一部の歌集として味ふべきものであらう。(6)詞がやさしく、內容が優美となり、その點ですぐれた歌が少くない。その反面に、表現に力がなく纖弱に流れてゐる。

〔第五卷〕(1)全部雜歌。實際には相聞歌も含んでゐるが、部類分としては雜歌部だけしか立ててゐない。その雜歌部中を大體年代順によつて歌を並べてゐる。併し歌・漢詩・散文など入れまじつて、不統一未整理の卷である。(2)長歌十首、短歌百四首。この外に漢詩二首、散文若干がある。散文は長文が多くて量から云つても內容から見ても集中に類のない大きな位置を占めてゐる。(3)大伴旅人と山上憶良二人の作が卷中の大半を占めてゐる。外にこの二人の周圍の人の作が若干ある。年代判明の歌は神龜五年から天平六年までの七年間で、他の作も多くこの間を離れない作である。卽ち、大凡奈良京の初期・中期の作の集成である。(5)旅人の周圍の何人かが集めたとする說、憶良が編者だとする說、家持を編者とする說等種々あるが、併し旅人の歌及び憶良から旅人に奉つた憶良の歌（「憶良上ル」と記してあるもの）並に憶良が自作を集めておいたもの、この三種の作を家持が一卷にまとめ、大體年代の順に排列した卷だと思はれる。(6)卷五の歌の特色とは、卽ち憶良の歌の特色とも云へるほど憶良の色彩が強い。自然よりも人事の作が多く、自然の歌も純粹に自然を詠むよりも人事に關係さして詠む風が著しい。純敍景歌の如きは、一首も見る事を得ない。

〔第六卷〕(1)全部雜歌。その部の內に、養老七年、天平何年と云ふ風に、年號を標目に擧げ、その下にその年に屬する歌を集めてある。著しく年代の考へを採り入れた編纂法で、集中に類を見ない。(2)長歌二十七首、短歌百三十二首、旋頭歌一首。(3)皇族に湯原王・市原王等。臣下に山部赤人・笠金村・田邊福麿・大伴旅人・大伴家持・坂上郎女等。殆ど全部奈良京の作者であり、且つこの卷の編者家持と近しい位置の人である事が注意される。(4)養老七年から天平十六年迄の二十一年間の作で、卷頭の數首を除いて皆聖武帝時代の作である。(5)大伴家の作者及び家持周圍の人が多い事、旅人を尊んだ記し方で註してある事、卷三・四と共通の作家が多いことなどから、大伴家持が編んだ卷だと考へられる。(6)旅の歌と遷都の歌とが目立つて多いが、形だけ整つて人に迫る力の足りない歌が多い。

〔第七卷〕(1)雜歌・譬喩・挽歌の三部類に分れてゐる。その各部內を更に「詠天」「詠月」等（以上雜歌部）及び「寄衣」「寄絲」等（以上譬喩部）のやうな小目によつて分つてゐる。卽ち歌の意味・內容による分類である。而して雜歌部中の「羇旅作」の半頃に、「右七首者、藤原卿作。未審年月」と註のある外、作者の名を全く記さない。卷一―卷六が、作者を明記して作年月を考慮に入れた編纂であるのに對して、全然別個の組織をとつてゐる。(2)雜歌部は短歌二百四首、旋頭歌二十五首。譬喩部は短歌百七首、旋頭歌一首。挽歌部は短歌十三首。この卷の最末尾に羇旅歌が一首あるのは、雜歌部に入るべきものを誤つたものである。(3)作者名を記してないので、全部不明である（ただ前述の「藤原卿作」と記したのが唯一の作者名のあるもの）。但し雜歌部中の「山背作」「攝津作」とあるのは、大和の官人たちが、それ等の地に旅した作と思はれる故、雜歌部中の他の歌も、これと同じく宮人・官吏たちの旅の作と思はれる。(4)不明だが、歌調や歌中の地名から考へて、藤原京から奈良京の中期へかけての作と思はれる。(5)不明。(6)雜歌部の旅の歌中には、歌風莊重端正、眞に集中の代表作とすべき佳作に乏しくない。譬喩歌は譬にひく物が殆ど全部一定の型にはまつた物に限られてゐるために、價値に乏しい駄作が多い。

〔第八卷〕(1)全體を春雜歌・春相聞・夏雜歌・夏相聞・秋雜歌・秋相聞・冬雜歌・冬相聞の八部

にわかつ。即ち、雜・相聞と云ふ二つの基本的分類法に四季の考へを加へた分類法である。さうして各部の内を、作者・歌數を記した題詞や左註で細分してゐる。(2)長歌六首、短歌二百三十六首、旋頭歌四首。(3)皇族に聖武帝・志貴・大津・穗積・弓削の諸皇子。市原・湯原等の諸王。臣下に、山上憶良・山部赤人・笠金村・大伴家持等の男子、笠女郎・坂上郎女・坂上大孃等の女子。作者の時代の新しい事、家持に關係のある作家の多い事等を注意すべきである。(4)最も古い歌は舒明天皇朝の作、最も新しきは聖武帝の天平十二年である。併し天武帝以前のものは數首で、大部分は聖武朝の奈良盛期の作である。(5)大伴一族の作家の多い事、卷三・四・六の三卷（何れも家持編纂）と共通の作家の多い事等から家持が編纂したものと考へられる。(6)四季に分類してあるので明かなやうに、季節感が著しく出てゐるのが大きな特色である。但しその季節は、美しい好ましい季節及び季節物に限られてゐる。

〔第九卷〕(1)雜・相聞・挽歌の三部に分れ、各部内では大凡年代順に歌を排列してゐる。或る部分は作者名を記し、或る部分は全然記さず、不統一を極めてゐる。これは(5)にて述ぶる如く、この卷は大部分、他歌集の原本をそのまゝ切取つたものを寄せ集めたもの故、かゝる組織の上の不統一が生じたのである。(2)長歌二十二首、短歌百二十五首、旋頭歌一首。(3)姓と名との明記してあるものは、雄略天皇・坂上人長・間人宿禰・柿本人麿・阿部大夫等數人であるが、外に姓や名だけの記されてゐる槐本・山上・春日等（以上姓のみ）、及び絹・島足・麻呂等（以上名のみ）がある。又その歌を採つた原本の記してあるものから作者の推察されるものがある。(4)最も古い作は、卷頭の雄略帝（左註に記す異傳によれば舒明帝）の作。最も新しいものは「田邊福麿歌集」中の作である。即ち雄略帝（或は舒明帝）の御代から飛鳥・藤原京時代を經て、奈良の中期までの作品を含んでゐる。(5)「人麿歌集」等の私歌集からそのまゝ採つて來た部分の多い事（卷の大部分はこれである）、及びその私歌集には、「柿本朝臣人麿歌集」「高橋連蟲麿歌集」「笠朝臣金村歌集」「田邊福麿歌集」（各別項）等の四私歌集の外に、「古歌集」（別項）及び山上憶良の「類聚歌林」（別項）の名も見えてゐて「萬葉集」に名の見える當時の私歌集のすべてをこの一卷中に集めてゐる事。この二事は、他の卷に見えない編纂上の特色である。編者は不明である。ただこの卷には傳説及び旅に關した作が大部分を占めてゐる故、或は傳説と旅とを好んだ高橋蟲麿の編纂ではあるまいかと思はれる。(6)浦島・葦屋處女・眞間手兒名・菟原處女の傳説を詠じた叙事的傳説歌の多い事が、大きな特色である。傳説を伴つた歌は卷十六の前半にも集められてゐるが、卷十六のは口から口へ傳はつた口誦歌（廣い意味での民謠）であつたに對し、卷九のは著名な歌人が作つた藝術作品である。その形も前者は短歌で抒情詩と云ふべきであり、後者は長歌に反歌を伴つた複雜な形で叙事詩と見るべき内容を盛つてゐる。こゝに兩卷の傳説歌の相違及び卷九の傳説歌の特色・價値がある。

〔第十卷〕(1)全體の分ち方は卷八と同じく、春雜歌・春相聞・夏雜歌・夏相聞・秋雜歌・秋相聞・冬雜歌・冬相聞の八部に分つ。或は卷八を眞似たものか。(2)長歌三首、短歌五百三十二首、旋頭歌四首。(3)全部不明。但し所々に出でゐる「人麿歌集」から採つた歌の中には人麿の作も混じてゐるかも知れない。(4)詳かでないが、その歌柄の新しい點から見て大部分は奈良京時代の歌と思はれる。(5)不明。(6)卷一・二や卷十三・十四の素朴さと反對に優美・纖細な作が多い。又四季の特色の著しい作の多い事は、卷八の場合と同樣である。

〔第十一卷〕(1)卷頭に「古今相聞往來歌類之上」と記す（「上」は、卷十二の卷頭に「……歌類之下」とあるのに對する）。次に卷の中を細分して、旋頭歌・正述心緒・寄物陳思・問答（以上人麿歌集所出）・正述心緒・寄物陳思・問答・譬喩の八部（重複を併せて）に分けてゐる。(2)短歌四百七十四首、旋頭歌十七首。(3)不明。當時人々の間に傳誦されてゐた歌を集めたものである。(4)不明。但し歌の内容や表現から見て、飛鳥・藤原京から奈良京の初期へかけての作と思はれる。卷十ほど纖細でなく、卷十三ほどの古樸さもない。その中間ほどの歌柄と見える。(5)誰の作とも知れず言ひ傳へられて來た歌を、集めてみたものと思はれる。卷十四の東歌（別項）なども同性質の卷であるが、東歌が東國地方の民謠であるに對し、この卷及び卷十二は大和を中心とした近畿地方の口誦歌を集めたものであることが、卷中に出てゐる地名によつて推察される。(6)八つに細分されてはゐるが、全部が人々の間に取交された相聞歌であることが、卷頭に「古今相聞往來歌類」と記してゐるので明かである。その内容をよく見ると、純情に充ち滿ちた戀歌と類型にはまつた戀歌・譬喩歌との二種類のものが對立してゐる。

〔第十二卷〕(1)卷十一に對して「古今相聞往來歌類之下」と卷頭に記す。卷のうちは、更に細分して、正述心緒・寄物陳思（以上二部人麿歌集所出、以下六部は人麿歌集以外より所出）・正述心緒・寄物陳思・問答・羈旅發思（内、初め四首人麿歌集所出）・悲別歌・問答の八部に分つ。最初の二部は次の二部と重複してをり、問答部は二度も重出してゐる。組織上から見れば甚だ不統一を極めてゐる。(2)短歌三百八十首。(3)寄物陳思部の終りから三首目の「己れゆゑ」の歌の左註に、この歌は紀皇女の作だと云つてゐる外には作者に就いて記さないので、誰の作か不明である。(4)未詳。澤瀉久孝氏は、卷十一よりは少し新しい奈良朝の作品を集めたものだらうと云つてゐる。(5)詳かでない。澤瀉氏は卷十一とは別な人が編纂したと説いてゐる。從來は兩卷の卷頭に同じ標目（古今相聞云云の標目）が出てゐるため、同一の人が編んだと見られて來たものである。(6)卷十一と同樣。ただ同じく戀愛相聞の作を集めた卷ではあるが、卷十一よりも價値ある戀歌に乏しい。

〔第十三卷〕(1)全體を雜歌・相聞・問答・譬喩・挽歌の五部に分つ。(2)長歌五十九首、旋頭歌一首、短歌五十九首。長歌の多いことがこの卷の特色である。(3)雜歌部の第二十一首の左に、「但此短歌者、或書云、穗積朝臣老、配於佐渡之時作歌者也」とある。相聞部の第十六首の左に、「檢古事記曰、件歌者、木梨輕太子、自死之時所作者也」とある。挽歌部第十六首の題詞にて、「備後國神島濱調使首、見屍作歌」とある。三ケ所に作者を明記してある外は、作者を全然記さない（ただ「人麿歌集」からとつた由を記してある歌の中には、人麿自身の作もあるかも知れない）。併し歌風が皆古く、且つ素朴であるし、また長歌（短い長歌）が多く、

短歌が少いことは、短歌が奈良朝に入ってから盛行し始めたことを思ひ比べると、この卷の作者は古い時代の人々であつたと推察される。(4)詳かでないが、時代も甚だ古いと云ふことだけは疑へない。(5)不明。作者の知れない古歌謠を集めて、これを雜・相聞等に分類して一卷としての體裁を與へたものと思はれる。(6)短い長歌の多いことと、作品が素朴で古めかしいことが、大きな特色と言ふ

惹かれて、何人かが集録したものでもあらう。(6)素朴と野趣に滿ちた生き〳〵した作品の多いこと、「萬葉」二十卷中第一である。本卷の歌に用ひられてゐる東國方言は、國語學者に貴重な研究資料を提供してゐるものである。

〔第十五卷〕前半は、天平八年六月新羅國に遣はされた使人たちの旅中の歌及び旅中に誦した古歌を集め、後半は中臣宅守が狹野茅上娘

有樣や、旅人の寂寥たる心裡が、まことによく現はれてゐる。こゝにこの歌群の價値がある。贈答歌の中の數首は、集中の戀愛歌の代表作とまで稱讃されてゐる。

〔第十六卷〕(1)卷頭に「有由緣并雜歌」とある如く、二部に部類分けされてゐる。第一の有由緣歌とは、何かユヱヨシのある歌の意で、實際には傳説を伴つた歌を聚集してゐる。第二の「雜歌」の部は、實際には二分され

〔第十七卷〕(1)歌作の年代順に歌を並べてゆく部類分けはない。題詞か左註かで歌作の事情・作者・歌數を記してゐるだけである。以下卷二十まで同樣の組織である。これは卷十七以後は、大伴家持の歌日記のやうなものだからである。(2)長歌十四首、短歌百二十七首、旋頭歌一首。(3)編纂者大伴家持の作最も多く、これに家持周圍の人々を加へたもの。(4)天平二年から同二十年（契沖は二十一年の

る部分は作者名を記し、或る部分は全然記さず、不統一を極めてゐる。これは(5)にて述ぶる如く、この卷は大部分、他歌集の原本をそのまゝ切取つたものを寄せ集めたもの故、かゝる組織の上の不統一が生じたのである。(2)長歌二十二首、短歌百二十五首、旋頭歌一首。(3)姓と名との明記してあるものは、雄略天皇・坂上人長・間人宿禰・柿本人麿・阿部大夫等數人であるが、外に姓や名だけの記されてゐる槐本・山上・春日等（以上姓のみ）、及び絹・島足・麻呂等（以上名のみ）がある。又その歌を採つた原本の記してあるものから作者の推察

も集められてゐるか卷十六のは口から口へ傳はつた口誦歌（廣い意味での民謠）であつたに對し、卷九のは著名な歌人が作つた藝術作品である。その形も前者は短歌で抒情詩と云ふべきであり、後者は長歌に反歌を伴つた複雜な形で叙事詩と見るべき内容を盛つてゐる。こゝに兩卷の傳説歌の相違及び卷九の傳説歌の特色・價値がある。

〔第十卷〕(1)全體の分ち方は卷八と同じく、春雜歌・春相聞・夏雜歌・夏相聞・秋雜歌・秋相聞・冬雜歌・冬相聞の八部に分つ。或は卷八を眞似たものか。(2)長歌三首、短歌五百三十二首、旋頭歌四首。(3)全部不明。但し所々

卷十四の東歌（別項）なども同性質の卷であるが、東歌が東國地方の民謠であるに對し、この卷及び卷十二は大和を中心とした近畿地方の口誦歌を集めたものであることが、卷中に出てゐる地名によつて推察される。(6)八つに細分されてはゐるが、全部が人々の間に取交された相聞歌であること、卷頭に「古今相聞往來歌類」と記してゐるので明かである。その内容をよく見ると、純情に充ち滿ちた戀歌と類型にはまつた戀歌・譬喩歌との二種類のものが對立してゐる。

〔第十二卷〕(1)卷十一に對して「古今相聞往來歌類之下」と卷頭に記す。卷のうちは、更に

喩・挽歌の五部に分つ。(2)長歌五十九首、旋頭歌一首、短歌五十九首。長歌の多いことがこの卷の特色である。(3)雜歌部の第二十一首の左に、「但此短歌者、或書云、穗積朝臣老、配於佐渡之時作歌者也」とある。相聞部の第十六首の左に、「檢古事記曰、件歌者、木梨輕太子、自死之時所作者也」とある。挽歌部第十六首の題詞にて、「備後國神島濱調使首、見屍作歌」とある。三ケ所に作者を明記してある外は、作者を全然記さない（ただ「人麿歌集」からとつた由を記してある歌の中には人麿自身の作もあるかも知れない）。併し歌風が皆古く、且つ素朴であるし、また長歌（短い長歌）が多く

短歌が少いことは、短歌が奈良朝に入つてから盛行し始めたことを思ひ比べると、この卷の作者は古い時代の人々であつたと推察される。(4)詳かでないが、時代も甚だ古いと云ふことだけは疑へない。(5)不明。作者の知れない古歌謠を集めて、これを雜・相聞等に分類して一卷としての體裁を與へたものと思はれる。(6)短い長歌の多いことと、作品が素朴で古めかしいこととが、大きな特色と言ふべきである。

〔第十四卷〕(1)東國地方の民謠を集めた卷で、土地を基準にした分類法によつてゐる。卽ち全體の歌を國名の知られてゐるものと不明なものとに二分し、前者を雜歌（この標目脱落）・相聞・譬喩の三部に分ち、各部内を上總・下總等の國々によつて區分してゐる。後者は雜歌・相聞・防人歌・譬喩歌・挽歌の五部に分つてゐる。(2)全部短歌で二百三十首。(3)作者名を記さないから不明だが、東國（三河・遠江あたり以東）土着の民が大部分、その他に東國へ官吏等になつて赴いた都人が若干加はつてゐるかも知れない。なほ「人麿歌集」の歌が所々に見えるが、これは人麿の作が東國で愛誦されてゐたので、こゝに取入れられたと見るか、又は東國の民謠を人麿が「人麿歌集」に收錄しておいたものとでも見るべきであらう。(4)作品の時代は詳かでない。(5)卷頭に「東歌」（アヅマウタ）と標題があるから、アヅマ卽ち東國地方に行はれてゐた歌を集めた卷であることが分る。但し何の目的で誰が集めたのかは詳かでない。思ふに、卷十六に能登・越前の民謠と認むべきもののあるのと比考すると、言語習俗共に事變つた異色に滿ちてゐた東國の歌にいたく興味を惹かれて、何人かが集錄したものでもあらう。(6)素朴と野趣に滿ちた生き〳〵した作品の多いこと、「萬葉」二十卷中第一である。本卷の歌に用ひられてゐる東國方言は、國語學者に貴重な研究資料を提供してゐるものである。

〔第十五卷〕前半は、天平八年六月新羅國に遣はされた使人たちの旅中の歌及び旅中に誦した古歌を集め、後半は中臣宅守が狹野茅上娘子に通じた爲め越前に流された時、二人の取り交した贈答歌である。別に部類分けは施してないが、前半を雜歌部、後半を相聞部のつもりでこの二種の歌群を排列したものかも知れない。(2)遣新羅使歌は長歌五首、短歌百三十七首、旋頭歌三首。贈答歌の方は、宅守作四十首、茅上娘子作二十三首。(3)遣新羅使歌は使人及びその周圍の人で、秦間滿・大石蓑麿・土師稻足等實名を記したのが十人、大使・副使・大判官等の如く、位官によつて作者を記したのが十ケ所ほど。女は「對馬娘子名玉槻」と實名を記すのが一人、單に「娘子」とのみ記すのが一人。以上の外は不明である。贈答歌の方は、宅守・娘子の二人。(4)遣新羅使は聖武帝の天平八年出發、翌年歸朝してゐる。宅守の流罪の年月は不明であるが、天平十二年六月の大赦に洩れて罪を赦されなかつた人名が「續日本紀」に見える。その中に彼の名もある故、天平十二年には流罪地にあつたこと明かであるから、彼の流罪は天平十年か十一年の頃でないかと思はれる。(5)何故この異質の二歌群を結び附けて一卷を編んだのか不明。或は二大事件が相次いで起つたので、一卷にまとめたものではなからうか。編者も未詳。(6)遣新羅使歌には、當時の旅の酸苦な有樣や、旅人の哀愁たる心裡やが、まことによく現はれてゐる。こゝにこの歌群の價値がある。贈答歌の中の數首は、集中の戀愛歌の代表作とまで稱讚されてゐる。

〔第十六卷〕(1)卷頭に「有由縁幷雜歌」とある如く、二部に部類分けされてゐる。第一の有由縁歌とは、何かユヱヨシのある歌の意で、實際には傳説を伴つた歌を聚集してゐる。第二の「雜歌」の部は、實際には二分されてゐて、前半には或る題によつて作つた歌（内容から言ふと滑稽歌が多い）、後半には民間及び諸地方に於ける俚謠民謠を集めてゐる。(2)長歌八首、短歌九十二首、旋頭歌三首、佛足石歌體の歌と見ゆる作（越中國歌の第三首目）一首。(3)傳説歌の小部分、題詠歌の大部分は、作者の姓名が明記してある。作者名の明かなものと不明なものとが相半ばしてゐる。明かな中では家持の歌もある。前者には皇族に境部王、臣下に長奧麿・消奈行文・安倍子祖父・大神奧守・大伴家持等がある。作者名を記さぬものは、大方微賤の位置に在つた人だつたらうと思はれる。(4)作者から判斷すると、藤原京の末から奈良京の中期頃迄（聖武帝の天平年間頃迄）の作品を集めたと思はれる。(5)傳説歌と俚謠民謠の類は共に口誦歌であるから、これを一部にまとめたい欲求から、この卷が作られたのではなからうか。編者は大伴家持でないかと思はれる。(6)題材から言へば民間の傳説歌專門歌人の滑稽歌等他卷に見えぬ素材の歌が多い。表現から言へば自由でよそほひ飾つた所のない無邪氣で朗らかな口調の歌が多い。香・檳榔・法師・藐姑射・婆羅門等、漢語や梵語をその儘取入れた用字法の有る事も、この卷の忘れられぬ特色である。

〔第十七卷〕(1)歌作の年代順に並べてゆく部類分けはない。題詞か左註かで歌作の事情・作者・歌數を記してゐるだけである。以下卷二十まで同樣の組織である。これは卷十七以後は、大伴家持の歌日記のやうなものだからである。(2)長歌十四首、短歌百二十七首、旋頭歌一首。(3)編纂者大伴家持の作最も多く、これに家持周圍の人々を加へたもの。(4)天平二年から同二十年（契沖は二十一年の誤だとする）までの作が收められてゐるが、十七年から後の作が特に多くなつてゐるから、天平二年—十六年の作は、卷三・四・五・六・八（天平十六年迄の作を含む）に洩れたものを、こゝに收めたものででもあらうか。(5)家持が、右の年代中の自作及び己の周圍の人々の作を日記風に集錄したもの。(6)萬葉末期の歌が著しく優美纖麗となつて、題材も表現も優しい方向のみに限られてしまつて、生氣と野趣に滿ちた前代の風を失つたその時代の姿を、善惡ともによく現はしてゐる。

〔第十八卷〕(1)卷十七と同樣。(2)長歌十首、短歌九十七首。(3)卷十七と同樣。(4)天平二十年三月から天平勝寶二年二月迄の二ケ年間の作。(5)(6)卷十七と同樣。

〔第十九卷〕(1)卷十七及び十八と同樣。但し所々昔の作を混入してゐる。例へば、天平五年入唐の歌八首（國歌大觀四二四〇以下八首）、壬申亂平定卽時の歌二首（國歌大觀四二六〇・四二六一）の如きである。これは家持が、それ等の歌を人から聞いた月日の所へそのまゝ挿入したもので、日記風の卷らしい編纂法として注意に値する。(2)長歌二十三首、短歌百三十一首。(3)卷十七・十八同樣。(4)天平勝寶二年三月一日から同五年二月二十五日迄の

三ケ年間の作。（5）家持が右の三年間に於ける自作及び周圍の人又は古人の作を一卷にまとめたもの。（6）大部分は萬葉末期の歌風に影響されてゐる作である。

〔第二十卷〕（1）卷十七同樣。（2）長歌六首、短歌二百十六首。（3）卷十七同樣。（4）天平勝寶五年五月から天平寶字三年正月一日迄の約六年間の作。この作が「萬葉集」の最後（年月の判明せる）の作である。家持はその後も桓武天皇の延曆四年迄滿二十六年間生存してゐたのに、何故「萬葉集」がこゝで斷絕してゐるのか不明である。（5）家持が自作及び自己の見聞に入つた他人の作を集めたもの。（6）卷十七の項に述べたやうな萬葉末期の特色、殊にその惡い方面を著しくあらはしてゐて、花鳥風月趣味の限られた材料の歌のみとなつてゐる。殊に酒宴の席での作が多くなつた爲め、歌は己の眞情を現はすよりも一個の交際の具となつてしまつた。なほこの卷には、防人の歌（別項）が九十三首あるのは大きな特質であり、國語研究上にも大切な資料である。

【價値】「萬葉集」の價値は、學術的價値と文學的（卽ち藝術的）價値とに分けられる。學術的には、資料に乏しい古代の歷史・風俗・習慣・思想等を知るためには、「古事記」「日本書紀」と共に最も大切な資料の一である。殊に國語學及び國文學史の研究の中古代を探る場合の、最大の資料は「萬葉集」である。卽ち古代語の音韻・語法・語彙をしらべる場合や、我が國の長歌の衰亡、短歌の誕生、邦人の文學意識の發生、古代文學の特質等を探る場合、必ず顧みるべきは「萬葉集」である。次に、文學的（藝術的）價値に就いては、第一は本書が多種多樣の性質を持つてゐる點である。卽ち作者が社會の凡ゆる階級の作者に亙つてゐる事、内容が美的趣味的なものに限らず、素朴・滑稽・肉欲等樣々の性質を持つてゐる事、歌體が短歌の外に長歌・旋頭歌・佛足石歌等種々に亙つてゐる事等が集つて、「八代集」（別項）以下の歌集に見出せぬ多樣な姿を現はしてゐる。殊に「萬葉」の壯大な美（人麿の作品の如き）、素朴な美（東歌や防人歌等）の如きは、後の和歌史上に跡を絕つた獨特のものである。多種多樣の性質を持つと云ふ事は、多種多樣の美を現はして居り、樣々の人の心理、樣々の人生を現はしてゐると云ふことを意味するもので、本書の大きな藝術價値だと言へる。正岡子規が本集を讚美した大部の根據は此處に在る。第二の藝術價値として「眞實」といふことを擧げ得られる。奈良中期以後の宴飲・相聞・季節の歌を除いた「萬葉」の大部分は、作者の作態度が心にもない美飾や誇張を施さぬ質實の點から見ても、作品を味はつて受ける感じの點から見ても、「眞實」と云ふ點で後世の凡ての撰集にまさつてゐる。眞淵や赤彥が本集を讚美したのはこの點である。第三の藝術價値（これは特色と言ひ換ふべきかも知れぬ）として、「現實的寫實的」だつたと言へる。第一に素材のとり方が空想的のものより現實的實際的なもの、寧ろ現實的なもののみをとつた。次にその素材の扱ひ方—素材を表現する方法が、「新古今」（別項）の如く空想的夢幻的でなく、現實的に寫實的にはつきりと言ひ現はす。これ等の當然の結果として、本集は現實味の勝つた作品によつて占められ、そこに特色と價値のある歌集となつた。俳句の寫生を歌に應用せんとした子規が本集に共鳴を感じたのはこの故である。

【影響】後世の文學に與へた影響のうち、今日知らるゝ最初のものは、「新撰萬葉集」（別項）及び「古今和歌集」（眞名序によれば、最初は續萬葉集と言つた）の誕生である。「新撰萬葉集」の方は「寬平后宮歌合」の影響もあるが、その書名や編纂法や部類の分ち方などを「萬葉」に倣つてゐる。然るに「古今集」の影響が次第に歌壇を風靡し、一方不規則に漢字を借りて記した「萬葉」は甚だしく難解となり、一般には親しまれぬやうになつて鎌倉初期に至つた。もとよりその間には、曾根好忠（別項）の如き、源俊賴（別項）の如き、顯昭（別項）及び六條家（別項）の一派の如き、或は「萬葉」の語を用ひて詠歌し、或は歌の批判に「萬葉」を引用したりして、「古今集」を宗とする一派と對立し、「萬葉」に對する若干の傾到が平安朝の中期から源平時代を通じて行はれてゐた事を知り得る。が、なほ作歌の標識として「萬葉」を自覺する點には遠い。「萬葉」の眞の生命たる素材が廣汎で如何なる材料も取入れてゐる事、作者の歌に對する態度と考へ方が眞實で遊戲的でない事、表現が率直素朴で必要以上の虛飾をほどこさぬ事等を求めて「萬葉」に親しんだのではなかつた。「萬葉」のかゝる方面に觸れてそこから自己の歌に對する刺戟を得たものは源實朝（別項）であつた。實朝の「萬葉」傾到は、用語などの小さな摸倣でなく、萬葉人のものの觀方、歌作の態度を直ちに取つて我がものとして生かしたのである。仙覺・由阿・契沖等の萬葉註釋家を經て、江戶の賀茂眞淵に至つて「萬葉集」は大きな理解者を見出した。眞淵の「萬葉集」を以て古代人の直き大きな心の現はれと觀ずる態度は、藝術的よりも寧ろ宗教的感激の態度と云へる。門下から多くの萬葉學の駿足を出したのは當然である。但し彼の作歌そのものは、少數をのぞいては「萬葉」よりも寧ろ「古今」「新古今」の歌風に近く、說と作品とに矛盾がある。實際の萬葉作家としては、眞淵の主君田安宗武・僧良寬・橘曙覽（各別項）・平賀元義等を以て、德川期の萬葉歌人（萬葉の影響下に在つた作家）とすべきであらう。德川期に於ける「萬葉」の影響としては、この外に、歌論（別項）の主題となつた事、「由良物語」の如く直接的に、「蛇性の淫」の如く、ごく間接的（中の地名や歌が萬葉集に關係あり）に小說の材料となつてゐる事などが注意される。明治以後、學者註釋家以外で「萬葉集」に親しみ、その影響を蒙つた第一の人は正岡子規（別項）である。子規は「古今集」を、採るべき歌一首も無しと痛罵する一方、「萬葉」殊に滑稽歌等を含んだ卷十六の如きを極力推賞し、自身及び門下なる根岸短歌會（別項）一同、萬葉風の歌を作つた。伊藤左千夫・長塚節（各別項）等の門下は、子規の死後その歌風を持續し、その一派は雜誌「アララギ」（別項）により、明治四十年代の初期「明星派」（別項）の衰ふると共に「アララギ」の萬葉歌風は歌壇（所謂舊派の歌人を除く）を覆ひ、「萬葉集」への理解や傾到の著しいこと、空前とも言ふべき狀態を現はして現在に至つてゐる。

【訓點】平安朝の初め、既に「萬葉集」が解し難くなつてゐた事は、「新撰萬葉集」の序文によつて明かである。又「後拾遺集」の序に、「かの集の心は、易き事を隱して難き事をあらはせり。そのかみの事今の世に叶はずして、惑へる者多し」と言つてゐる事などによつて、平安朝中期もさうであつた事が分る。かくて漢字のみの「萬葉集」を先づ讀むために訓點を附する事、次に意味を知るために註釋のことが起つたのは當然である。訓點は、仙覺の所謂古點・次點・新點の三度に附せられた。古點とは村上天皇の天曆五年十月昭陽舍（梨壺）に於て、大中臣能宣・淸原元輔・坂上望城・源順・紀時文の五人に訓を附せしめられた事をいふ（源順集の題詞、拾遺和歌集・袋草紙・詞林采葉抄等に見ゆ）。次點とは、古點以後（正確に知り得る限では、藤原道長以後）仙覺が新點を附する迄の平安・鎌倉の初期に亙る可なり長い間に、各人により不

新三度の訓を補訂する努力が數百年に亙つて行はれ、今後も永く行はれて編纂當時の「萬葉集」の訓法へ近づかんと努められてゐる。

【註釋書】平安朝に於て、既に註釋書が若干現はれてゐたかと疑はれるが、今日知り得る最古のものでは、平安末期源平時代の頃に成つたと思はれる佚名氏の「萬葉集抄」上・下だけである。外に藤原仲實の「綺語抄」、藤原範兼の

釋ではあるが、權威ある註釋書の最初のものである。次に仙覺の學說を繼いだ由阿が、南北朝の頃同じく關東に出で、「詞林采葉抄」（別項）「拾遺采葉抄」「青葉丹花抄」の良書を著はした。第一の著は就中有用である。これ等についで猪苗代兼載の講義を桑下叟が筆錄した「萬葉集之歌百首聞書」、種玉庵宗祇の「萬葉集抄」（別項）（亡佚。今はその抄本萬葉註抄書のみを存

葉集作者履歷」「萬葉集師說」等があり、今井似閑に「萬葉緯」（別項）、野田忠肅に「萬葉類雋」があつて萬葉研究の小部門を探求した。次に京都の荷田春滿は、著名な「萬葉僻案抄」（別項）の外「萬葉集訓釋」「萬葉集問答」「萬葉和假名訓」「萬葉童子問」「萬葉改訓抄」等を著はした。彼の著は皆餘りに私見を出し過ぎて創見と僻說とを共具してゐる。又著名な「萬葉童蒙抄」（別

【價値】「萬葉集」の價値は學術的價値と文學的(即ち藝術的)價値とに分けられる。學術的には、資料に乏しい古代の歷史・風俗・習慣・思想等を知るためには、「古事記」「日本書紀」と共に最も大切な資料の一である。殊に國語學及び國文學史の研究の中古代を探る場合の、最大の資料は「萬葉集」である。即ち古代語の音韻・語法・語彙をしらべる場合や、我が國の長歌の衰亡、短歌の誕生、邦人の文學意識の發生、古代文學の特質等を探る場合、必ず顧みるべきは「萬葉集」である。次に、文學的（藝術的）價値に就いては、第一は本書が多種多樣の性質を持つてゐる點である。即ち作者が社會の

の點である。第三の藝術價値（これは特色と言ひ換ふべきかも知れぬ）として、「現實的寫實的」だつたと言へる。第一に素材のとり方が空想的のものより現實的實際的なもの、寧ろ現實的なもののみをとつた。次にその素材の扱ひ方――素材を表現する方法が、「新古今」（別項）の如く空想的夢幻的でなく、現實的に寫實的にはつきりと言ひ現はす。これ等の當然の結果として、本集は現實味の勝つた作品によつて占められ、そこに特色と價値のある歌集となつた。俳句の寫生を歌に應用せんとした子規が本集に共鳴を感じたのはこの故である。

【影響】後世の文學に與へた影響のうち、今日

を求めて「萬葉」に親しんだのではなかつた。「萬葉」のかゝる方面に觸れてそこから自己の歌に對する刺戟を得たものは源實朝（別項）であつた。實朝の「萬葉」傾到は、用語などの小さな摸倣でなく、萬葉人のものの觀方、歌作の態度を直ちに取つて我がものとして生かしたのである。仙覺・由阿・契沖等の萬葉註釋家を經て、江戸の賀茂眞淵に至つて「萬葉集」は大きな理解者を見出した。眞淵の「萬葉集」を以て古代人の直き大きな心の現はれと觀ずる態度は、藝術的よりも寧ろ宗教的感激の態度と云へる。門下から多くの萬葉學の駿足を出したのは當然である。但し彼の作歌そのもの

歌風は歌壇（所謂舊派の歌人を除く）を覆ひ、「萬葉集」への理解や傾到の著しいこと、空前とも言ふべき狀態を現はして現在に至つてゐる。

【訓點】平安朝の初め、既に「萬葉集」が解し難くなつてゐた事は、「新撰萬葉集」の序文によつて明かである。又「後拾遺集」の序に、「かの集の心は、易き事を隱して難き事をあらはせり。そのかみの事今の世に叶はずして、惑へる者多し」と言つてゐる事などによつて、平安朝中期もさうであつた事が分る。かくて漢字のみの「萬葉集」を先づ讀むために訓點を附する事、次に意味を知るために註釋のことが起つたのは當然である。訓點は、[illegible]の古

點・次點・新點の三度に附せられた。古點とは村上天皇の天暦五年十月昭陽舍（梨壺）に於て、大中臣能宣・淸原元輔・坂上望城・源順・紀時文の五人に訓を附せしめられた事をいふ（源順集の題詞、拾遺和歌集・袋草紙・詞林采葉抄等に見ゆ）。次點とは、古點以後（正確に知り得る限では、藤原道長以後）仙覺が新點を附する迄の平安・鎌倉の初期に亙る可なり長い間に、各人により不規則に附けられた訓點の總稱である。次點を附した人は詳かでないが、顯昭の「顯昭陳狀」によつて大江匡房・藤原敦隆・道因の三名が分り、由阿の「詞林采葉抄」によつて藤原道長・大江佐國・惟宗孝言（藤原孝言とあるを武田祐吉氏說により改む）・大江匡房・源信・源師頼・藤原基俊の七名がわかる。武田氏はこの外に、藤原定家・藤原淸輔二人の名をも擧げてゐる（萬葉集書志）。これ以外にもゐたらう事は「采葉抄」に「藤原基俊等」と記せるによつても明かであるが、以上の外に記錄なく不明である。次點歌の數が幾首だつたかも、素より不明であるが、武田祐吉氏は最少限九十二首だけは次點歌となし得と斷じてゐる。新點は仙覺が彼の時迄に訓の附けられてゐなかつた歌百五十二首に對して寬元四年に附けた訓である。この事は彼の著「萬葉集註釋」中に詳かであるが、どの歌々が新點の歌であるかは、彼の文永三年本（「傳來」の條參照）の流である「大矢本萬葉集」によつて分る。即ち大矢本の訓には三種あつて彼以前の訓のまゝのは墨、彼以前のを彼が訂正したのは青色、彼の發明した訓は朱色で附し、その朱色が即ち新點で百五十二首ある。兎に角仙覺迄の幾多の人の努力によつて、その訓の良否は別として「萬葉集」の全部の歌に訓を附け得たのである。仙覺以後その古・次・新三度の訓を補訂する努力が數百年に亙つて行はれ、今後も永く行はれて編纂當時の「萬葉集」の訓法へ近づかんと努められてゐる。

【註釋書】平安朝に於て、既に註釋書が若干現はれてゐたかと疑はれるが、今日知り得る最古のものでは、平安末期源平時代の頃に成つたと思はれる佚名氏の「萬葉集抄」上・下だけである。外に藤原仲實の「綺語抄」、藤原範兼の「和歌童蒙抄」、顯昭の「袖中抄」等當時の書には萬葉語の解釋が見え、「俊頼口傳」「奥義抄」中には歌全體の解釋も見える。註釋書以外の當時の「萬葉」研究書には、「萬葉」全體の性質や編纂に關するものに、顯昭の「撰萬葉集時代之勘文」（亡佚）、道因・勝命の「難撰萬葉集時代之勘文事」（亡佚）、顯昭の「陳道因勝命等難撰萬葉集時代條々事」、藤原俊成の「萬葉集時代考」、藤原定家の「萬葉集長歌短歌之說」があり、歌の性質によつて「萬葉」の歌を類聚したものに、「類聚古集」「古葉略類聚鈔」があり、歌數の統計をとつたものに、藤原敦隆の「萬葉集目錄」（亡佚）、著者不明の「萬葉集目錄」（近衞公爵藏）の一書があり、作者の傳記を考證した書に、藤原淸輔の「人丸勘文」（亡佚）、顯昭の「柿本朝臣人麻呂勘文」がある。以上を通觀すれば、平安朝末迄の萬葉研究は、註釋の書に乏しい事、近世の萬葉研究書の大部分が註釋書であるのと著しい對比をなしてゐる。これは當時の人の「萬葉」に對する態度が、ただ歌・論爭の參考になりさへすれば事は足り、「萬葉」の學問的に正確な理解（近世以後はこれを求めた）の如きは、必ずしも必要としなかつた故であらう。降つて鎌倉時代で最も注目すべきは、本文校訓及び訓點の部分に不滅の足跡を殘した仙覺の「萬葉集註釋」（一名仙覺抄）（別項）で、撰釋ではあるが、權威ある註釋書の最初のものである。次に仙覺の學說を繼いだ由阿が、南北朝の頃同じく關東に出で、「詞林采葉抄」（別項）「拾遺采葉抄」「靑葉丹花抄」の良書を著はした。第一の著は就中有用である。これ等についで猪苗代兼載の講義を桑下叟が筆錄した「萬葉集之歌百首聞書」、種玉庵宗祇の「萬葉集抄」（別項）（亡佚。今はその抄本萬葉註抄書のみを存す）、中御門宣胤の「萬葉集拔書」（同人に萬葉類葉抄なる類聚の書もある）、著者未詳で、堯以の作かと言はれる「萬葉集目安」がある。以上が鎌倉から室町戰國に至る著書及び著者で、これを概觀すると、この期の初めに出でた仙覺及び中期の由阿、この二峯のみが秀で、餘は唯その足跡を追ひ、その範圍を徘徊摸索してゐるに過ぎない。徳川期以後の註釋書は極めて多く、この期最初の大著は北村季吟の「萬葉拾穗抄」（別項）で、從來の註釋書の說をほぼ大成したもので、且つ二十卷全部に譯をつけたものの最初である。季吟に「萬葉」の難語を解說した「萬葉集祕訣」もある。ついで大阪の下河邊長流に「萬葉集管見」（別項）「萬葉集鈔」「萬葉集名寄」等があつて創見に富んでをり、「管見」は就中良著である。長流に私淑した僧契沖には水戸光圀の囑によつて執筆した「萬葉代匠記」（別項）がある。貞享年間（貞享四年の頃か）に成つて光圀に奉つた（これを初稿本と云ふ）が、その意に滿たなかつた爲め、元祿三年頃再度奉つた（精撰本代匠記）。これは二十卷全部を譯した第二の註釋書と云ふ歷史的意義の外に、廣く古寫本を對照して本文の誤を訂正し、科學的で該博な考證を施し、後に「古義」の出づる迄は、これに比肩する註釋書を見出せない。彼の弟子の海北若冲に「萬葉集類林」（別項）「萬葉集作者履歷」「萬葉集師說」等があり、今井似閑に「萬葉緯」（別項）、野田忠粛に「萬葉類證」があつて萬葉研究の小部門を探求した。次に京都の荷田春滿は、著名な「萬葉僻案抄」（別項）の外「萬葉集訓釋」「萬葉集問答」「萬葉和假名訓」「萬葉童子問」「萬葉改訓抄」等を著はした。彼の著は皆餘りに私見を出し過ぎて創見と僻說とを共具してゐる。又著名な「萬葉童蒙抄」（別項）は、彼の講義を弟の信名が筆記したものである。春滿の流を汲んだ賀茂眞淵には、「萬葉考」「同別記」「冠辭考」（各別項）「萬葉集遠江歌解」がある。前二著は就中有名である。眞淵の學風は、卓拔な創見を立てて前人未踏の境地を開いた所に在る。又藝術的な鑑賞を所々に加へてゐる特色もある。併し語釋等に如何にしても看過し得ない偏りすぎた說を多く含んでゐると云ふ缺點がある。が、彼の功績は著書より以上に古學を天下に鼓吹し、その門下を養成した點にある。彼の直接の門下によつて加藤千蔭の「萬葉集略解」（別項）、荒木田久老の「萬葉考槻落葉」（別項）、本居宣長の「萬葉集玉の小琴」（別項）の注目すべき三著が生れた。なほ宣長門下の宮地春樹に「萬葉集私考」、田中道麿に「萬葉問聞抄」の著がある。やゝ降つて、眞淵門なる村田春海門の岸本由豆流に「萬葉集攷證」（別項）の良書がある。更に降つて橘守部が創見に富んだ「萬葉集墨縄」「萬葉集檜嬬手」（各別項）を著はし、その門下橋本直香は、卷十四東歌中の上野國の歌を解釋した「萬葉集中上野歌解」を著はした。これ等の江戸を中心とした研究に對して、京都に（岸本由豆流等に少しく先んじて）香川景樹の「萬葉集捃解」（別項）、富士谷御杖の「萬葉集燈」（別項）が出た。

これ等からずつと降つて、江戸末期に土佐の僻地に鹿持雅澄が出でて、從來の諸說をほぼ集大成して「萬葉集古義」（別項）の大著を完成し、且つその附屬的研究として集中の動植物を研究した「萬葉集品物解」（別項）、作者の研究たる「萬葉集人物傳」、地理の研究書「萬葉集名處考」「同名處國分」「同坐知佳境附錄」を、言語の研究書として、「萬葉集枕詞解」「同古言譯通及目次」「玉蜻考」「言靈德用」「用言變格例」（別項）「舒言三轉例」（別項）「雅言成法」「結詞例」「鍼嚢」（一名歌詞三格例）（別項）、歌格の研究書として「永言格」（別項）を著はし、萬葉研究の諸部門を大方網羅した。上記の註釋書の外に、類聚や語釋の專門書が多數簇出したが、中に僧春登の「萬葉用字格」（別項）、石塚龍麿の「假字遣奥山路」（別項）は、用字法を專門に研究した書として、共に逸すべからざるものである。また古代歌謠の歌格を研究するに當つて、記・紀の歌謠と共に「萬葉」（主として長歌）が、常に必ずその材料・對象となつてゐたことに留意すべきである。卽ち小國重年（長歌詞珠衣）・橘守部（長歌撰格・短歌撰格）・鹿持雅澄（永言格）・近藤芳樹（古風三體考）・六人部是香（長歌玉琴）等の歌格研究は、取りもなほさず萬葉歌格の研究なのである。以上が德川期に於ける萬葉研究の大體である。これを通觀すると、「拾穗抄」「代匠記」「略解」「古義」の四全釋書の外、獨創に富む「考」「玉の小琴」「燈」など、精密なる攷證を出して、註釋の方面で大きな成果を收めてゐる。また部分的研究に於ても「品物」「地理」「用字」等の諸著を生んで、前代の研究に比して飛躍的な進歩を遂げた。ただ攷證の如き二三の例外を除いては、註解に當つてみだりに文字を變改して憚からないのは、德川期全體を通じての學者の大缺點である。この弊を改めんと欲したのが、幕末から明治にかけての學者木村正辭で、「萬葉集美夫君志」「萬葉集略解補正」は、この點に留意してゐる。正辭は、又岡本保孝（「萬葉集略解札記」の著あり）に音韻の學を受け、漢字に關する造詣が深く、「字音辨證」「訓義辨證」「文字辨證」「萬葉集譌字書索」「萬葉集讀例」等の文字の研究があり、萬葉の古寫本及びその系統を研究したものに「萬葉集書目提要」がある。次に明治以後の萬葉家として第一に佐佐木信綱博士を數へねばならぬ。佐佐木博士の事業は甚だ多方面である。現存の最古の目錄書たる「萬葉集目錄」（假名）、最古の註釋書「萬葉集抄」等の最も貴重な古書發見をもたらした古書探索の方面、桂本・元暦校本・天治本・金澤本・西本願寺本・類聚古集・古葉略類聚鈔等の覆刻事業の方面、「校本萬葉集」による古寫本校訂の方面、「萬葉集選釋」（その附錄、萬葉集書目解題は貴重な文獻である）「萬葉漫筆」等に見ゆる語釋、その他の研究の如く廣汎に亙つてゐる。次に井上通泰氏によつて第五番の全釋書、「萬葉集新考」（別項）が成り、山田孝雄博士の「萬葉集講義」（別項）、鴻巢盛廣氏の「萬葉葉集全釋」（四册）等が相次いで刊行された。註釋以外の書では、前記の「校本萬葉集」が佐佐木博士・橋本進吉・武田祐吉・千田憲・久松潛一の五氏によつて完成され、その首卷附卷には、古寫本及び註釋書に關する權威ある諸論文が收められてゐる。更に岡山の正宗敦夫氏によつて、「萬葉」の單語全部の索引たる「萬葉集總索引」の著が完成した。なほ「萬葉集」の性質及びその書史的研究に關する書に、武田祐吉氏の「萬葉集書志」「上代國文學の研究」、久松潛一氏の「萬葉集の新研究」及び「上代日本文學の研究」その他に發表されてある諸論文、島木赤彥氏の「萬葉集の鑑賞及其批評」、生田耕一氏の「萬葉集釋文索引」（萬葉集の解釋の古來の文書中に存在するものすべてを集成する有益な計畫で、目下古事記傳の部のみが發行された）等がある。また明治以後特有の現象として雜誌の刊行が盛んになつた爲め、雜誌に收められた貴重な論文が少くない。山田孝雄・橋本進吉・澤瀉久孝・品田太吉・鴻巢盛廣諸氏のものは就中注目に値する。又雜誌中には、特に萬葉號として「萬葉集」に關する論文を載せて特輯號を發行したもの亦少くない。明治以後の研究を概觀して最も感ずることは、印刷術の影響によつて研究が急速に傳播してゆくことである。一つの研究の發表は、僅少の時間で他の遠地の學者へまで傳はり、それが相互に影響し合ひ、相誘つて急速な研究の進歩を遂げてゐる事實である。次に木村博士の本文を重んじ、みだりに誤字說を立てて文字を變更するのを斥ける態度は、博士以後の學者によつて受けつがれ、「校本萬葉集」發行と相俟つて、文字の改變を極度に嫌ふ態度が一般にとられてゐる。これは德川期の學者と著しい對比をなすものである。最後に今一つの特色は、「校本萬葉集」「萬葉集總索引」及び「萬葉釋文索引」の事業等、德川期の註釋を主とした研究の外に出でて、その註釋（及び研究）の根柢となるべき基礎事業が、近年特に興隆しつつあることである。〔以上森本〕

萬葉集燈（まんえふしふあかし） 註釋書 五册 【著者】富士谷御杖 【成立】文政五年 【刊行】同年頃 【諸本】萬葉集叢書第一輯所收。【内容】卷一の全註である。文政五年正月の自序があり、初めに「萬葉集燈おほむね」と題せる總論があり、これにも文政五年正月の年月が見えてゐる。その形式は、先づ全歌をあげ次に「言」の字を標して歌句を一句づつ摘出し、その下に註釋を施した。その次に「靈」の字を標して一篇の意を釋してゐる。凡例には、「かねて此事註しおけること百卷あまり」とあるから、卷一以下にも稿本が出來てゐたやうであるが、これは豫定であつて稿本が出來てゐたわけではあるまい。ただ「萬葉集略解」に書入を加へた腹稿と思しきものが傳はつてゐた（その書入本は震災で燒失した）。【價値】本書の特色は、言語の註釋のみに止まらず、「靈」と標して歌の精神に說き及んでゐる點にある。卽ち著者は一家の見識よりして言靈說を抱き、その立場から歌を言と靈とにわけて解釋したのであるが、言語解釋のみでは慊らずとなし、その言は神の力によつて成るとして、その裏に宿る精神までを說かうとした。併し、その言靈說なるものは、歌を藝術的に主情的に解しようとするのではなく、寧ろ道德的に或は神道的古道的に觀て說かうとするのであるから、一篇の總意を說くに當つても、歌を深く意義づけて解釋しようとし、寧ろ入りほかに、牽強附會に陷つてゐて、その「靈」の解釋には議すべきものが少くない。殊に歌は倒語であると云ふ立場から、これを諷喩的に觀ようとした爲め、曲解に陷つてゐる點がある。併し、歌に深く沈潛しようとする態度は、他の學者の單なる言葉の末に走つた態度と較べて、著しい特色があるが、ただ歌の眞義に徹底せざるものあるを遺憾とする。かくの如き著者の態度は、異本との校合や歌の訓や語義の解釋には多くの注意を拂はなかつたやうである。併し、その間に觀るべき創見も挿まれてゐて、

語句の註釋としてもすぐれたものがある。また文法學者として傑出せる著者は、手爾乎波に深い注意を拂ひ、文法的に語句を解釋してこの方面にすぐれた說がある。いづれにしても本書は、他に比類なき種々の特色ある註釋書として、卷一の研究には缺くべからざる書である。

【附記】富士谷派の「萬葉集」註釋書としては、御杖の父成章の門人日下部景福の著に、「萬葉

で、井上通泰氏の「萬葉集新考」附錄の「萬葉集」卷第十四輯訛例一斑は、これに類したものである。また物集高世氏の「萬葉集東語例」は集中の東歌の語を、天象時候・神祇幷神事・釋敎・居所・器材・草本等に分つて索引をあげ、終りに通ふ言、省く言、發語等の例をあげたもので、これまた道麻呂の著と似たものがある。その他東歌に關しては、「萬葉集遠江歌考」一冊（賀茂眞淵）、「上野歌解」二冊（橋本直香）、「東歌

採り用ひられたる說が多い。萬葉集叢書所收）○撰集萬葉徵 三卷（勅撰集中に出でたる「萬葉集」の歌を網羅し、「萬葉集」の歌と併せ出して比較研究に便し、頭註に「古今六帖」、「歌仙歌集」等に出でたる同歌をあぐ。附錄一卷には、作者別に、勅撰集に入りたる歌數の表を揭ぐ。勅撰集に出でたる「萬葉集」の歌は必ずしも遺漏がないわけではないが、甚だ便利な書で、著者の勞苦のほどが察せられる。天明元年成稿。萬葉集叢書所收。伴直方の撰集「楢の栞」（文政十三

本は長流の自筆本であつたが、大震災の時燒失した。この書は各冊の表紙には「萬葉集抄」とあるが、第一冊の卷頭には「萬葉集管見」とある。二卷を一冊とし、十冊から成つてゐる。半紙型袋綴の本であつて淡青色の表紙が附してある。本文の中には所々朱で書入を加へたり、補訂を加へたりしてある。中には墨で補訂を加へた所もある。が、矢張り長流の筆に成るものである。而してこの書は序も跋もなく

近藤芳樹（古風三體考）・六人部是香（長歌玉琴）等の歌格研究は、取りもなほさず萬葉歌格の研究なのである。以上が徳川期に於ける萬葉研究の大體である。これを通觀すると、「拾穗抄」「代匠記」「略解」「古義」の四全釋書の外、獨創に富む「考」「玉の小琴」「燈」など、精密なる攷證を出して、註釋の方面で大きな成果を收めてゐる。また部分的研究に於ても「品物」「地理」「用字」等の諸著を生んで、前代の研究に比して飛躍的な進歩を遂げた。ただ攷證の如き二三の例外を除いては、註解に當つてみだりに文字を變改して憚からないのは、徳川

成り、山田孝雄博士の「萬葉集講義」（別項）、鴻巣盛廣氏の「萬葉集全釋」（四册）等が相次いで刊行された。註釋以外の書では、前記の「校本萬葉集」が佐佐木博士・橋本進吉・武田祐吉・千田憲・久松潛一の五氏によつて完成され、その首卷附卷には、古寫本及び註釋書に關する權威ある諸論文が收められてゐる。更に岡山の正宗敦夫氏によつて、「萬葉」の單語全部の索引たる「萬葉集總索引」の著が完成した。なほ「萬葉集」の性質及びその書史的研究に關する書に、武田祐吉氏の「萬葉集書志」「上代國文學の研究」、久松潛一氏の「萬葉集の新研究」

般にとられてゐる。これは徳川期の學者と著しい對比をなすものである。最後に今一つの特色は、「校本萬葉集」「萬葉集總索引」及び「萬葉釋文索引」の事業等、徳川期の註釋を主とした研究の外に出でて、その註釋（及び研究）の根柢となるべき基礎事業が、近年特に興隆しつつあることである。（以上森本）

萬葉集燈（まんえふしふあかし） 註釋書 五册 【著者】富士谷御杖【成立】文政五年【刊行】同年頃【諸本】萬葉集叢書第一輯所收。【内容】卷一の全註である。文政五年正月の自序があり、初めに「萬葉集燈おほむね」と題せる總論

けて解釋しようとし、寧ろ入りほかに、牽強附會に陷つてゐて、その「靈」の解釋には議べきものが少くない。殊に歌は倒語であると云ふ立場から、これを諷喩的に觀ようとした爲め、曲解に陷つてゐる點がある。併し、歌に深く沈潛しようとする態度は、他の學者の單なる言葉の末に走つた態度と較べて、著しい特色があるが、ただ歌の眞義に徹底せざるものあるを遺憾とする。かくの如き著者の態度は、異本との校合や歌の訓や語義の解釋には多くの注意を拂はなかつたやうである。併し、その間に觀るべき創見も挿まれてゐて、

語句の註釋としてもすぐれたものがある。また文法學者として傑出せる著者は、手爾乎波に深い注意を拂ひ、文法的に語句を解釋してこの方面にすぐれた說がある。いづれにしても本書は、他に比類なき種々の特色ある註釋書として、卷一の研究には缺くべからざる書である。

【附記】富士谷派の「萬葉集」註釋書としては、御杖の父成章の門人日下部景福の著に、「萬葉考」三册があり、卷一の初めから「潮左爲二」の歌までの註釋、天明二年成。

【參考】萬葉集書目提要木村正辭 ○校本萬葉集首卷（諸本輯影） （佐佐木）

萬葉集東語栞（まんえふしふあづまことばのしをり） 研究書 一卷【著者】田中道麻呂【別名】萬葉集十四二十類詞略【成立】寬政二年【諸本】寬政二年稿成つて石塚龍麻呂に送りたるを栗田麻須賀の寫せる本あり、神宮文庫に伴信友の文化三年の寫本、岩崎文庫に木村正辭博士の寫本等あり。稿本叢書第一卷に收めて刊行した。

【內容】卷十四及び卷二十の東歌の語の中より通音のものを集め、阿以宇要於以下の五十音の各行別にわかち、その中を「加ヲ古ト云」「加ト久ト通」の如く標して語を出し、丁數を記し、所々註を加へた。終りに「世奈ト云詞」「略語之例」を附す。「略語之例」は「宇ヲ略」「阿ヲ略」「於ヲ略」「伊ヲ略」「雜略」に分ち、語を出し丁數を記す。和爲宇袁の部の「宇ト乎」の項の例を示すと次の如くである。

宇家良我波奈乃（八オ 廿六オ） 和名抄乎介良
乎佐藝爾良波里（廿九ウ） 和名抄宇佐木

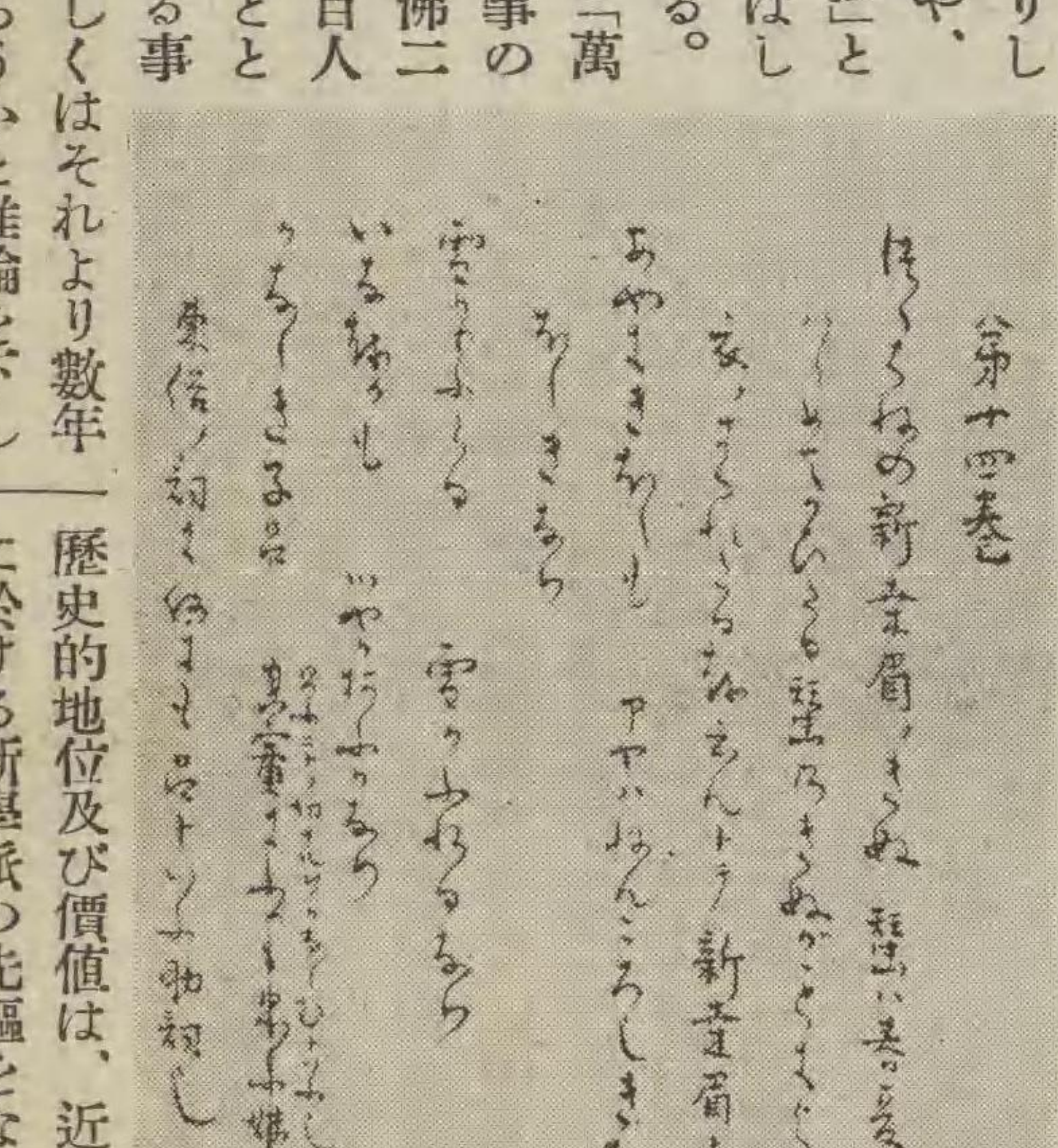
【價値】東語の如き特殊研究の先鞭をつけたものである點に價値を有する。東語の通音を分類表的に指示した書は、本書が唯一のもので、井上通泰氏の「萬葉集新考」附錄の「萬葉集」卷第十四輯訛例一斑は、これに類したものである。また物集高世氏の「萬葉集東語例」は集中の東歌の語を、天象時候・神祇幷神事・釋敎・居所・器材・草本等に分つて索引をあげ、終りに通ふ言、省く言、發語等の例をあげたもので、これまた道麻呂の著と似たものがある。その他東歌に關しては、「萬葉集遠江歌考」一册（賀茂眞淵）、「上野歌解」二册（橋本直香）、「東歌地名考」一册（原久胤）、「萬葉集東歌集」一册（高須葛根）等の如く、地理的に東歌に注意した書は可なり多いが、東語に關する編著は甚だ少い。木村正辭博士の「萬葉集皃乙」は、東語の研究であるが、原字のまゝで今の訓の如く讀まず、普通語と同樣に讀み得る事を考證した書であるから、本書とは全く目的及び立場が異つてゐる。併しこの木村博士の說は首肯し難いところで、矢張り本書の如きが東語の研究としては穩健で且つ要を得てゐる。道麻呂の著は他人の着手せざる先驅的研究である點に何れも價値があり、同時に奇矯に流れず、あくまでも着實な研究を進め、正確なる說を出し、綿密なる調査を經てゐる點に於て、その著書は後人に裨益を與へる。

【附記】道麻呂の著述は殆ど類纂抄出の書で、次に掲げる最後の一部だけが註釋である。

〔萬葉集に關する著書〕萬葉問聞抄三卷（卷三より卷二十に至つて、道麻呂がその師本居宣長に自說を述べ、疑問の條々を問うたのに對し、宣長が應答したもの。卷一・二がないのは「萬葉考」が出てゐるから、これに讓つたのであらう。道麻呂の說を窺ひ得るのみならず、宣長の說を知り得る點に於て、「玉の小琴」の缺けたる所を補ひ、且つ「玉の小琴」と幷せ見るに裨益する所が多い。その說概ね着實穩健、今日採り用ひられたる說が多い。萬葉集叢書所收）○撰集萬葉徵 三卷（勅撰集中に出でたる「萬葉集」の歌を網羅し、「萬葉集」の歌と併せ出して比較研究に便し、頭註に「古今六帖」、「歌仙歌集」等に出でたる同歌をあぐ。附錄一卷には、作者別に、勅撰集に入りたる歌數の表を揭ぐ。勅撰集に出でたる「萬葉集」の歌は必ずしも遺漏がないわけではないが、甚だ便利な書で、著者の勞苦のほどが察せられる。天明元年成稿。萬葉集叢書所收。伴直方の撰集「楢の栞」（文政十三年成）も同樣の書）○萬葉集地名草一卷（集中の地名を五十音順に排列して卷數丁數を示したもの。鈴屋文集に、田中道麻呂萬葉名所歌抄序（天明五年）のあるのは、別本であらう）○萬葉集類句歌抄一卷（集中の歌の相似たる句を抄出して並べ書きたるもの。天明四年成）○萬葉集抄十卷（十五卷までに略解を附した小形本で細字に記してある。自筆稿本を豐橋圖書館に藏する）。

【參考】萬葉集書目提要木村正辭 （佐佐木）

萬葉集管見（まんえふしふくわんけん） 十册【著者】下河邊長流【名稱】「萬葉集抄」「管見抄」ともいふ。【成立】未詳であるが、契沖が「まだいとわかゝりし時かたばかりしるしおけるに」とあるのや、「長流がわかき時かける抄」とあるによつて若年の時著はしたものである事は知られる。更に橋本進吉氏は、長流の「萬葉集」に關する說を窺ふ事の出來る「萬葉集名寄」「神佛二聖和歌註」「枕詞燭明抄」「百人一首三奧抄」「歌仙抄」などと本書との說の異同を檢する事によつて、寬文初年頃もしくはそれより數年前に成稿したのではなからうかと推論を下してゐる。【諸本】東京帝國大學國語研究室藏本は長流の自筆本であつたが、大震災の時燒失した。この書は各册の表紙には「萬葉集抄」とあるが、第一册の卷頭には「萬葉集管見」とある。二卷を一册とし、十册から成つてゐる。半紙型袋綴の本であつて淡青色の表紙が附してある。本文の中には所々朱で書入を加へたり、補訂を加へたりしてある。中には墨で補訂を加へた所もある。が、矢張り長流の筆に成るものである。而してこの書は序も跋もなく長流の著であるといふ事も何處にも見えてゐない。「萬葉集管見」の寫本は水戶彰考館にあるが、五卷づつ一册にあつめて四册から成つてゐる。同じく序跋も署名もない。刊本としては武田祐吉氏校訂の萬葉叢書本と長流全集本とがある。【解說】本書は「萬葉集」二十卷にわたつて難語句を擧げて簡明に解釋したものであつて、「萬葉集」二卷づつを一册にしてゐる。總論はない。註釋は從來の說より出でて新說を立てた所もあり、本文の改訂及び訓の上にもとるべき所がある。さうして本書の歷史的地位及び價値は、近世の「萬葉集」研究に於ける新學派の先驅をなした所にあるが、同時にその學說が契沖の「萬葉代匠記」（別項）



萬葉集管見自筆稿本（東大舊藏）